

琉歌の表現研究：和歌やオモロとの比較

ウルバノヴァー, ヤナ / URBANOVA, Jana

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

486

(発行年 / Year)

2014-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第326号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2014-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(文学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010261>

琉歌の表現研究
—和歌やオモロとの比較—

URBANOVA Jana

目次

序章	1
第1章 琉歌、和歌やオモロの表現比較研究—「面影」をめぐって—	16
1. はじめに	16
2. 琉歌と和歌における「面影」と呼応する動詞	17
2-1. 琉歌の「面影」と呼応する動詞	17
2-2. 和歌の「面影」と呼応する動詞	18
2-3. 琉歌と和歌における「面影」と呼応する動詞の比較	25
3. 「面影→立つ」を詠んだ琉歌、和歌やオモロの類似の句	27
3-1. 和歌の「面影ぞ立つ」と琉歌の「面影ど立ちゆる」	27
3-2. 「面影ぞ立つ」と「面影ど立ちゆる」を含んだ和歌と琉歌の特徴	29
3-3. 和歌の「見し面影の 立たぬ日ぞなき」と琉歌の「馴れし面影の 立たぬ 日やないさめ」	35
3-4. 和歌の「見し」と琉歌の「馴れし」	40
4. 「面影」を詠んだ和歌の改作琉歌	45
5. 「面影」を詠んだ琉歌と和歌の特徴	65
5-1. 和歌の「添ふ」と琉歌の「まさる」、「すぎる」	66
5-2. 和歌の「見る／見ゆ」と琉歌の「目の緒さがて」	69
6. おわりに	70
第2章 琉歌と和歌の表現比較研究—「影」をめぐって—	73
1. はじめに	73
2. 琉歌と和歌における「影」と呼応する動詞	73
3. 「影」を詠み込んだ和歌の改作琉歌	75
4. 「影」を詠んだ琉歌と和歌において用いられる共通の表現（句）	92

4-1. 琉歌と和歌における「さやかに照る月の影」	93
4-2. 琉歌と和歌における「四方に照る月の影」	97
4-3. 琉歌と和歌における「名に立つ月の影」	98
5. おわりに	99
第3章 琉歌の季節語（春夏秋冬）をめぐって—オモロや和歌との表現比較—	101
1. はじめに	101
2. 琉歌、オモロや和歌における季節語の使用率.....	102
3. 琉歌、オモロや和歌における季節語と動詞との組合せについて.....	104
4. 「春」の歌について.....	107
5. 「夏」の歌について.....	126
6. 「秋」の歌について.....	133
7. 「冬」の歌について.....	146
8. おわりに	155
第4章 『標音評釈琉歌全集』の改作琉歌について	158
1. はじめに	158
2. 『琉歌全集』の「節組の部」の改作琉歌.....	158
3. 『琉歌全集』の「吟詠の部」の改作琉歌.....	179
4. 改作琉歌やその元となった和歌のまとめ.....	209
5. 和歌から琉歌への流れ込みに関する一考察	222
6. おわりに	224
第5章 オモロと琉歌における「大和」のイメージ	226
1. はじめに	226
2. オモロにおける「大和」のイメージ.....	227
3. 琉歌における「大和」のイメージ	230
4. 「大和」のイメージをオモロと琉歌で比較する	231

5. おわりに	237
終章	239
参考文献	248
旧稿との関係一覧	251
資料編（第1章）	252
資料編（第3章）	448
資料編（第5章）	473

序章

現代の沖縄は日本の47都道府県の一つとなっているが、1429～1879年の450年間は琉球王国として、大和とは違う歴史を歩む独立した国家であった。その時代の代表的な文学作品として、『おもろさうし』と琉歌が挙げられる。

『おもろさうし』は、1531年から1623年にわたり（第1巻が1531年、第2巻が1613年、第3～22巻が1623年）、琉球王国の首里王府によって編纂された沖縄最古の歌謡集で、神祭りの場で歌われていた神歌オモロを1554首収集している。叙事歌であるオモロの形式は不定型とされているが、中には8・6音律を組み合わせた句も見られる。

琉歌は、定型化された抒情歌で、沖縄本島で生まれ、琉球諸島や奄美諸島へ普及していった。琉歌という名称は、中国の唐詩に対して大和の歌を和歌と称するようになった事情に似ており、薩摩藩の琉球入りに伴い入ってきた和歌に対して、それと区別するために名付けられたものだと考えられている。元来、琉歌は沖縄では単に「ウタ」と呼ばれるものであった。「琉歌」という単語を記録した最も古い文献は、おもろ語辞書『混効験集』（1711年）である。また、座間味景典の家譜には、1683年冊封正使の汪楫が、琉球人によって作られた琉歌の形式を持つ歌4首が菊花・松・竹の絵とともに記された屏風一双を、土産として持ち帰ったことが揮毫されている（池宮1992、嘉手苺2003）。さらに、この

4首のうちの1首は『古今和歌集』の^{みなもとのむねゆき}源宗于の歌を改作したと思われる琉歌である。「常磐なる 松のみどりも 春来れば 今一しほの いろ増さりけり」

という和歌に対し、琉歌のほうは「^{トウチワナルマツイヌ}常磐なる松の ^{カワルクトウネサミイツイン}かはる事ないさめ いつも

^{ハルクリバイルドゥマサル}春来れば 色どまさる」となっている。このような記録が残されているにも関わ

らず、琉歌が基本的には^{さんしん}三線などの楽器で伴奏されて歌われる伝承のものであるためか、その創作年次は確定しづらく、未詳である。琉歌は、古くから沖縄の人々の生活の中に息づいており、中国の冊封使を歓待するために、琉球王朝の宮中に古典音楽や組踊りの歌として演奏された歴史もある。なお、琉歌の基本的な形式は、和歌の5・7・5・7・7と異なり、8・8・8・6の4句で、合わせて30音から成る偶数の音数律である。

琉歌の読み方（発音）は、主に沖縄の首里方言を用いるため、大和の言葉と違い、理解するのが難しい。基本的には、沖縄語では短母音がa（ア）、i（イ）、

u (ウ) の三母音しかない。そのために、大和の発音が沖縄では変化する場合がある。大和の e (エ) は、沖縄で i (イ) と発音され、大和の o (オ) は、沖縄で u (ウ) の発音に変わる。この決まりは以下の通り簡潔に表示できる。

大和言葉	沖縄の首里方言
a (ア)	-----> a (ア)
i (イ)	-----> i (イ)
e (エ)	-----> i (イ)
u (ウ)	-----> u (ウ)
o (オ)	-----> u (ウ)

ただし、上記の決まりがあっても、e (エ) と o (オ) の発音が沖縄語に存在しない訳ではない。ae (アエ)、或いは ai (アイ) という平仮名の組み合わせを書けば、発音は e (エ) というものになる。また、ao (アオ)、もしくは au (アウ) という平仮名の組み合わせの場合、その発音は o (オ) になる。上記の発音を伸ばしたまま発音するか、或いは短く発音すべきかということについての見解は研究者によって異なるが、外間守善は伸ばしたまま、つまり (アー) および (オー) として発音するのが正しいと主張している (外間 1995)。

また、沖縄語の発音にはそれ以外にも多様なルールがあるので、ここでいくつか例示してみる。

大和の ki (キ)	→	沖縄で chi (チ)
大和の gi (ギ)	→	沖縄で ji (ジ)
大和の tsu (ツ)	→	沖縄で tsi (ツイ)
大和の ka, ke (カ、ケ)	→	沖縄で kwa, kwe (クワ、クエ)

上記のルールを踏まえ、具体的な単語の例を挙げると、発音の変化は次のようになる。左側は大和言葉の発音で、右側は沖縄語による発音である。

無い (ナイ) nai	→	(ネー) ne
お願い (オネガイ) onegai	→	(ウニゲー) unigai
馴れし (ナレシ) na-re-shi	→	(ナリシ) na-ri-shi
面影 (オモカゲ) omokage	→	(ウムカジ) umokaji

沖縄語には、大和言葉と違う発音の単語だけではなく、不規則な読み方の単語（例：大和の「ばかり」→沖縄で「ビケイ」）や独特の表現（大和の「蝶」→沖縄で「ハベル」）も多い。それ故に、琉歌は理解するのが難しいとされるのであろう。

では次に、琉歌とはどのようなものであるか、具体的な例を挙げて見てみよう。

『標音評釈琉歌全集』・1799 番歌・読人知らず)

表記：

遊び面影や

まれまれど立ちゆる

里が面影や

朝も夕さも

読み方：

アスイビ ウムカジヤ

マリマリドゥ タチュル

サトゥガ ウムカジヤ

アサン ユサン

現代語訳：一緒に遊んだ人の面影は、たまに思い出されるが、恋人の懐かしい面影は、朝も晩もいつも思い出され、忘れる時はない。

琉歌はそもそも口承伝承されたものであるため、その起源については未解決の点が数多くあるが、成立に関する説は大きく分けて二つある。

まず一つ目の説は、薩摩藩が琉球入りした 1609 年以降、琉球王国が本土の文学的影響を受けていた中で、琉歌は基本的に本土の小唄に影響され成立したという説であり、田島利三郎、世礼国男、小野重朗などがこれを支持する。

もう一つは、琉歌は昔から琉球で伝わっていたオモロという叙事的な神歌を母体としながら、琉球文化の独特のものとして自立したのだという、伊波普猷、仲原善忠、比嘉春潮、金城朝永、外間守善などの説である（比嘉実 1975）。後者の説は、前者の後に出了された説であるが、通説となっている。

それでは、それぞれの説を以下に詳しく紹介する。まず、オモロを母体に琉歌は誕生したと考えるもので、有力視されている説から取り上げる。

沖縄学の父と言われてる伊波普猷は、その師であった田島利三郎の説を批判し、このように述べている。

田島氏は八八八六の四句三十音説を以って繰りなした所謂琉歌なるものが慶長前後世に行はれ、内地との交通が頻繁になってから、大に流行したやうだといはれたが、私はこの説の全部を信ずることは出来ない。なるほどこれが内地との交通が頻繁になってから、大に流行し出した事は、事実であらう。けれども、それが慶長前後に発生したといふことには、どうしても賛成する

ことが出来ない。

(伊波 1975、p.39)

伊波は、琉歌が慶長年間（1609年の島津氏の琉球入前後）よりもっと古くに誕生したものだとは主張し、その証拠の一つとして、第二尚氏の大祖尚円王（1415～1476）によって詠じられたと古くから伝わる琉歌を紹介し、「どう疑っても疑へない本人の歌である（前掲、p.40）」と論じた上で、伊波が紹介した琉歌の例のように、〈8・8・8・6調の短歌（琉歌）のような〉「詩形がずっと前から沖縄一般に流行してゐたことが明になって来る（前掲、p.40）」（〈 〉内は筆者加筆による）と述べている。さらに、「オモロの中には、まま八八八六調の琉歌に近いのがある（前掲、p.40）」と述べ、2首のオモロの例を挙げながら、1首目のオモロにおける最後の句を取り去ったら、立派な8・8・8・6調の琉歌（短歌）となり、2首目のオモロが8・8、8・8、8・6調の長歌に近くなっていると説明している。このように、「この二首は兎に角琉歌への推移を示す過渡時代のオモロと見て差支あるまい（前掲、p.41）」と、琉歌はオモロ（の形式）を母体にしながら誕生したと結論付けている。

比嘉春潮も伊波と同様の意見を持ち、形式の観点から琉歌はオモロを母体にして生まれたと考えている。また、比嘉は、

琉歌が現在のような上句八八、下句八六の型にきまったのは、三味線の伝来以後だろうといわれている。おもろやくわいにゃのような昔の歌にも八八の句が多く、この八八八六の詩型を形成する可能性を沖縄語が持っているように思われるが、これに対する学問的説明はまだなされていない。（略）この三味線の伝来が琉歌の詩型に革命的な影響を与えただろうといわれている。というのは歌を歌うのに手拍子から鼓で拍子をとるようになって、歌の形には別にかわりはなかったであろうが、三味線を伴奏することになると、どうしても、歌が短くなり型も固定するようになる。それで琉歌の定型が形成されただろうというのである。

(比嘉春潮 1971、p.410-411)

とも加えている。

このように、琉歌もオモロもその形式に関しては同様の起源でありながら、三味線の伝来によってオモロより琉歌のほうが、その形式が8・8・8・6音のように決まった形に固定したことが述べられている。

仲原善忠は「琉歌は周知のごとく三〇字で八八、八六と上下二句からなっ

いる。その発生についてはまだ定説がない（仲原 1969、p.73）」と多少曖昧に述べているが、「はっきりいえることは、〈琉歌は〉オモロの慣用手段である（前掲、p.73）」（〈 〉内は筆者加筆による）とも加えており、結局琉歌をオモロに関連付けている。

琉歌の誕生に関するこの問題について、仲原と比べてよりはっきりした意見を有するのは金城朝永である。金城は、琉歌に非常に似ているオモロ 3 首を取り上げ、琉歌はそれらのオモロの焼き直しであることが確かであると述べながら、「かように、オモロから琉歌への改作は、しばしば行われたようであります（金城 1974、p.454）」と推定している。また、それに加えて、

ここに挙げたわずかな例〈上述の 3 首のオモロ〉によってでも気づかれたように、オモロから琉歌への作りかえが、割合手軽にできたことや、これがしばしば行われたらしいということは、オモロから琉歌への移り変りが、容易であるという証拠の一つにはなると思えます。また、次に挙げているように、オモロには、八・八・八・六語調の、やや定型化しつつあった一群があり、その終句を六語に改めれば、ただちに、現在見受ける八・八・八・六語（30 音）の琉歌が得られることなどを、あわせ考えますと、正確な年代（絶対年代）は、いえませんが、大体、琉歌の起源もオモロの古さと、それ程違うものではないということだけは、考えてみることでできましよう。

（金城 1974、p.455）（〈 〉内は筆者加筆による）

との見解を示している。

要するに、金城は、琉歌に似通っていることが明確な 3 首のオモロを紹介しており、さらに、オモロの句をうまく区切ったり、囃子言葉などを取り去ったりすれば、8・6 調になるオモロも何首かあると示すことによって、琉歌の誕生をオモロに求めていることが分かる。それとは逆に、和歌からの影響については「和歌に接した琉球の文人たちは、それに刺戟され、オモロを母体にして、この和歌と形式のよく似通う琉歌も盛んに詠んでいます（前掲、p.459）」と述べている。さらに、

琉歌と和歌そのものにも、互いに（事実は一方的で、琉歌は受身の立場にありましたが）交流作用の行われる要素を、多分に持ち合わせているともいえましよう。しかしながら、かような現象を基にして、ただちに、琉歌は和歌に真似て作り出されたものだという結論を下すのは、いささか見当違いといわねばなりません。たしかに、和歌は琉歌などに比べてその起りも古く、ま

た琉歌の中には、和歌の影響を受けたものと認めるべき作品が、特に後代になるに従って、数多く見受けられますが、これは単に技術上の問題で、琉歌そのものの発生とは直接の関係はありません。これを譬えてみますと、和歌と琉歌の関係は、親子の間柄ではなく、兄弟同士の貸借の問題に過ぎません。琉歌の起源は、やはり、琉歌のオモロの中に求めるのが正しいことを、力説したいと思います。

(前掲、p.460)

のように、琉歌の誕生そのものに和歌が影響を及ぼしたことを、強く否定している。

外間守善も、昔から沖縄で独特の叙事歌謡として存在しているオモロ、ウムイやキューナには琉歌の音数律と共通しているものが見られることを中心に考慮しながら琉歌の発生をそれらの歌謡と関係付けている。その関係については、

キューナからウムイへの変容、キューナやウムイを母体にして『おもろさうし』に記録されたオモロという歌形が生まれてくる歌謡発展の姿を認めるとすれば、キューナやウムイやオモロの中に8音律が育っていくことは、心の律動が歌形をととのえだしてきたわけであり、抒情的なウタ（琉歌）を胚胎したもの、いかえれば、抒情のひこばえだということ認められると思う。

(外間 1995、p.334)

と述べている。

また、具体的な例として8・8・8・6・8・8・8・8・6・8音の形式を有するオモロを紹介し、オモロは、「しだいに五・三音という結合を好む傾向をみせ、ついには、文節的に八音に安定しだし、八・八・八・六から成る三十音数の叙情歌に移り変わる（外間 1965、p.24）」になり、また、上の具体的な例の「オモロの中に、移り変わりの一端が窺えるものと思う（前掲、p.24）」のように、オモロから琉歌への移り変わりを説明している。さらに、お互いに似ているオモロと琉歌2首ずつ（金城によって紹介されたオモロ3首の中の2首と同様のもの）を取り上げながら、「例のように、オモロから琉歌へ（逆のこともあり得る）改作された例もあることは、両者の関係になんらかの紐帯を想像させるものである（前掲、p.25）」と述べている。

以上をまとめると、上の説は、琉歌はオモロを母体にして成立したことを主張している。根拠として、まずオモロ3首とそれを改作した琉歌3首の用例も

取り上げられてはいるが、説の中心には、8・6調のオモロ数首の用例をもとにした歌の形式が据えられていることは明らかである。

それに対し、琉歌はオモロではなく、その形式が本土の歌に由来し、大和との交流によって盛んに詠まれるようになったという説はどのようなものであるだろうか。

まず、田島利三郎は次のように述べている。

普通唯うたといへば、即ち八八八六の四句三十音を以て繰りなしたるものをいふなり。此の體のうた、或は英祖の時代に既に行はれたりといふものあれども、余は之を信ずる能はず。尚寧前後世に行はれ、内地との交流頻繁になりてより、大に流行せしが如し。

(田島 1988、p.35)

既述したように、田島の説はその弟子であった伊波普猷によって批判された。伊波は、尚円王の作だと思われる琉歌を挙げ、「五百年前既にかういう形式のあったことが知られる(伊波 1975、p.40)」と主張しており、琉歌は1609年の薩摩藩の琉球入り以降入って来た和歌と関係なく、その前の段階でオモロを母体にしてすでに誕生した説を支持している。

しかし、伊波が紹介した当該の琉歌 1 首に関する説に対しては、世礼国男(1975)は表現の研究の観点から次の見解を公開している。『命がほ願は』(問題の琉歌)は、伊波先生はおもろ選釈中で、『尚円王が小官であった頃…… 歌った琉歌の如きは、どう疑っても疑へない同時代の然も御本人の三十字詩なのである』と云ってられるが、伝説に執着してられるからで、語彙を見ると、ちっとも信じられない語である。命かほといふ語は、おもろくわいにや、に用みられない語である(p.170) (〈 〉内は筆者加筆による)と伊波説を否定し、問題の琉歌は尚円王時代より新しい時代のものであるとの考察を示している。さらに、当該の 1 首の琉歌のみならず、伝説等で最も古いと思われる琉歌を挙げながら、それらの歌における用語がオモロやくわいにや(クェーナ)に比して非常に新しいと、語彙調査の観点から論じている。また、琉歌の誕生を尚寧王代から尚益王代までの時代(およそ16世紀後半から17世紀にかけて)、つまり大和の文化が沖縄に入ってきたと思われる薩摩藩の琉球入り前後の時代に設定しており、「此の時代は、本土に於ても元亀天正から元禄にかけて音曲舞踊の隆盛期である。従って本土芸能の移入が盛んに行はれ、其の結果、琉歌八八八六形が発生し(前掲、p.5-6)」たと述べており、琉歌の誕生を基本的に大和の

歌の影響と関連付けている。

小野重朗も琉歌の由来がオモロではないとの見解を示しており、重要視されている伊波普猷、比嘉春潮等の説を批判している。主に形式の問題を考慮しながら琉歌は大和の小唄に関係があることを以下のように述べている。

琉歌の発生については、比嘉春潮、金城朝永、外間守善の諸氏の説がほぼ一致していて、十五世紀頃に、オモロ歌形の第一節が定形化して作られるようになったと説いている。私はこの定説にまだ少々の疑問を残している。よく例として挙げられるオモロは確かに琉歌と同じ八八八六形をもっているが、あれだけ長短自由で音数も変化の多いオモロの中に二、三首同形のものがあるのは偶然と言えないこともない。四句形、しかも終句を六音に変化させるこの琉歌形に落ちつく必然性がないように思う。これだけ短期間に一世を風靡するには、もっと強力な理由がありそうである。私はそれを世礼国男氏の説を借りて、本土の小唄の七七七五形の影響と考えている。キューナ歌形で定形化していた五・三調が八調と意識されるようになっていて、小唄の七七七五形を八調化して八八八六の琉歌の形が作られたと思う。本土の小唄の七七七五形は更に『三四・四三・三四・三二形』に固化しているが、琉歌の八八八六形は『三五・五三・三五・三三形』への傾斜を示しながらもまだ固化していないのは八八八六形が七七七五形の影響をうけた後の形だという論拠になりうるだろう。もし琉歌の八八八六形が本土小唄形の影響としてはじまったのなら、その母胎を不定形、不定律のオモロに求めず、むしろ五・三調定律的なキューナ型に求めるのが適当ではあるまいか。沖縄文学研究の課題としてなお残る点であろうと思う。

(小野 1972、p.146-147)

以上の先行研究を踏まえ、琉歌はオモロを母体にして生まれたという通説と、琉歌は大和の小唄や大和文化の影響の下で薩摩藩の琉球侵入時代に成立したという説の両方とも、主に歌の形式に焦点を当てながら琉歌の成立について論じていることが判明する。

それでは、内容の観点からは成立の問題はどのように考察することができるだろうか。また、叙事歌から抒情歌への移り変わりが可能であるのか、という疑問も発生する。

西郷信綱(1963)は、「文学の発生史においては、普通、叙事詩が先行し叙情詩は一足おくれてあらわれる。けれどもこれを、叙事詩のなかから叙情詩ができた意に解してはならない(p.75)」と述べている。池宮正治(1976)も、西郷信綱の論考を引用しながら、抒情歌である琉歌はオモロという叙事歌から発

生することが可能かどうか、という疑問を抱き、その後、オモロの中にも抒情的な内容の歌もあるという新たな見解を示し、その代表的な用例としてオモロ1首を紹介しながら、琉歌はオモロを母体にして成立したという外間の通説を認める結論に至った。

しかし、琉歌はオモロを母体にして生まれたという仮説は現在定説化したと言えるにもにかかわらず、琉歌の発生に関する研究問題については未解決の点が多々残っている。池宮は、その問題について次のようにも述べている。

琉歌の発生について論理的に把握するのは容易ではない。なぜなら未開拓の分野が多く、いわば仮説の上に仮説を重ねるしかなく、決定論的なことは何も言えそうにないからである。しかも発生論的な研究がこれまであまり活発でないことは致命的である。発生論は少なくとも今の段階ではさまざまな隣接の科学、たとえば言語学、歴史学、社会学、社会諸科学といったものの深化とその摂取が必要だし、またそれらの諸科学の成果を視野に入れつつ、文学研究としての独自の立論も要請される。状況が困難なために議論が振るわないのであろうが、それだけにこの面での活発な研究が切望される。

(池宮 1976、p.140)

琉歌の成立に関する研究においては、未開拓の分野が多く残っている。先行研究を踏まえ、これまで琉歌の成立論は歌の形式の方面から展開されることが主流であり、また同問題を歌の内容の観点から解決する方法も少々紹介されたものの、極めて少数の用例にのみ基づいていることが分かる。しかし、この問題に関しては、形式の観点からのみならず、それ以外の方面からも徹底的な研究を進める必要があるように思われる。

そこで、本論では、琉歌とオモロ、そして琉歌と和歌の相互関係に関する問題を表現比較研究の方面から追究していく。形式については、先行研究における根拠となる用例数が極めて少数であることを指摘しつつ、琉歌はオモロから多少影響を受けているという通説が認められるものの、表現については、琉歌はオモロより和歌の影響を大きく受けていると考えられる。

尚寧王代前後（薩摩藩の琉球入り前後）の時代に入ってきた大和の文学・文化に強い影響を受けたことをきっかけに、抒情歌という意識が強まり、表現が洗練され、抒情的に志向づけられ、和歌に対して8・8・8・6音の琉歌というジャンルが固定化したのではないだろうか。もともとオモロの形式からも影響を受けていた可能性が考えられるウタは、和歌や本土の歌の表現の影響を強く受けつつ、現在知られている形の琉歌に形成されたと考えられる。形式の上では、オモロの影響を認めたとしても、表現や抒情内容の観点からは、筆者は田島、

世礼、小野の説を基本的に支持しており、大和の文学・文化が流れてきた尚寧王代前後（16世紀～17世紀）に琉歌の成立を想定する。その想定は、琉歌、オモロや和歌の表現比較に関する徹底的な調査結果に基づくものである。

本論で行った徹底的な表現調査について詳しく説明する前に、まず、和歌から琉歌への影響や両歌における表現比較に関する先行研究を以下に紹介したい。

琉歌の成立論に直接結びつくものではないが、薩摩藩の琉球入りに伴って入ってきた和歌や和文学から琉歌への影響は、一般的に先行研究で述べられている。外間（1995）によれば、1609年以降は、多くの琉球文人が大和へ行き、そこで積極的に和文学や大和芸能などの教育を受けていたことが知られており、その影響によって作られた新しい琉球文学ジャンルとして、琉球古典劇である「組踊り」や琉歌の種類の一つの「仲風」等が挙げられる。「仲風」とは、和歌調の上句、琉歌調の下句を融合した歌であり、7・5・8・6音の4句か、5・5・8・6音の4句のものが最も多く見られる。

歌の形式を強調しながら、和歌の影響によって創作されたものの例として「仲風」が挙げられるほか、内容の観点からも琉歌には和歌と似ているものが見られる。そのため、これまでも琉歌と和歌の中にある類似内容を持つ歌が紹介されながら、両歌の関係が様々な研究者によって指摘されてきた（外間・仲程 1974、長友 1990、池宮 1992、外間 1995、嘉手苺 1996、嘉手苺 2003）。

外間・仲程（1974）は、様々な琉歌を紹介する傍ら、似通った概念を詠んだ和歌の例もいくつか取り上げ、和歌と対比しながら琉歌の内容や歌われた背景・生活様式などを詳しく説明している。島袋（1995）も、紹介している琉歌と共に、内容が似通っている和歌も同時にいくつか取り上げているが、その中には内容の概念のみが一致するものもあれば、表現までも琉歌と似通う歌も見られる。また、嘉手苺（2003）は、「桜」「松」「露」「菊」などといった琉歌や和歌における基本的な表現の概念や使用状況を比較し、両歌の相違点と影響について述べている。さらに、琉歌に関する先行研究が和歌を意識している証として

示せるのは、琉歌の有名な女流歌人^{ウナナナビ}恩納なべや^{ユシヤウミツル}よしや思鶴が、その歌をもって万葉風の琉歌や『古今集』以後の歌風の琉歌を詠じた歌人と例えられる（外間 1995）ことである。

嘉手苺の『琉歌の展開』には、「琉歌の改作和歌」、「オモロの改作琉歌」や「和歌の改作琉歌」という3つの区分の歌が紹介され、一方の歌を改作した過程で他方の歌が作られたことが示され、琉歌と和歌、また琉歌とオモロの影響関係が具体的な例の表示を通して説明されている（嘉手苺 1996）。それらの具体的な例数は、「琉歌の改作和歌」が1首、「オモロの改作琉歌」が3首、そして「和歌の改作琉歌」が1首となっている。

嘉手苺の論文以外にも、和歌（或いはオモロ）の改作琉歌の例は、様々な先行研究で提示されているのだが（外間 1965、金城 1974、池宮 1976、島袋 1995）、「和歌（オモロ）を改作した琉歌」、「和歌から学んだ琉歌」、「和歌の翻案」や「和歌の焼きなおし」などという表現が用いられており、「和歌の改作琉歌」「オモロの改作琉歌」という特定の名称は嘉手苺の論文のみに見られる。このように「改作琉歌」を説明する名称が様々でありながらも、先行研究で紹介されている用例の全ては、嘉手苺の「改作琉歌」という区分に当てはまり、和歌（或いはオモロ）の影響を強く受けた琉歌を言っていることが明瞭となる。しかし、こういった用例が多様な先行研究で示されているにも関わらず、「改作琉歌」という用語の定義については言及されていない。筆者は、特定の有名な和歌を意図的に倣って、同様の表現を用い、同様或いは近い内容を表し、その和歌が詠まれた言葉を沖縄古語に変えつつ琉歌の形式に合わせたものを和歌の改作琉歌であると理解し、定義したい。

和歌やオモロの改作琉歌については、これまでに先行研究でいくつかの用例が紹介されているため、今まで指摘されてきた全ての用例を以下にまとめて、一覧しておく。

まず、オモロの改作琉歌については、計 3 首が先行研究で指摘されている。元になったオモロとその改作琉歌 3 首ずつは、以下の通りである。

- 先行研究の指摘: 外間 1965, p.25, 仲原 1969, p.7-8, 金城 1974, p.455, 嘉手苺 1996, p.63, 島袋 1995, p.363

オ 卷 9-35 (510)

一 まにしが まねしふけば (北風が、真北より吹けば)
 あんじおそいてだの (按司襲いテダ (王) の)
 おうねど まちよる (お船をぞ待つ)
 又 おゑちへが おゑちへど (追手風が、追手風が、)
 ふけば (吹けば)

琉 『琉歌全集』 1735 番歌 (尚寧王妃)

真北の真北 (マニシヌ マニシ)
 吹きつめてをれば (フチツイミティ フウリバ)
 按司添前てだの (アジスイメ ティダヌ)
 お船ど待ちゆる (ウニドゥマチュル)

- 先行研究の指摘: 外間 1965, p.25, 金城 1974, p.453, 世礼 1975, p.165-168, 嘉手苺 1996, p.64

オ 卷 15-18 (1069)

一 ゑぞのいくさもい (英祖の、いくさもい)

月のかず あすびたち (月ごとに、遊びをし)
 とももと わかてだ はやせ (千年も、若き王を讃えよ)
 又 いちへきいくさもい (賢明な、いくさもい)
 又 なつは しげち もる (夏は、シゲチ (酒) を盛る)
 又 ふよは 御さけ もる (冬は、御酒を盛る)

〔琉〕 『琉歌全集』 1623 番歌 (読人しらず)

英祖のいくさもり (イズヌ イクサムイ)
 夏すぎて冬や (ナツィ スィジティ フユヤ)
 お酒もてよらて (ウサキ ムティ ユラティ)
 遊び嬉しや (アスィビ ウリシャ)

※ (『琉歌全集』では、4句目が「遊びめしやうち」となっている)

● 先行研究の指摘 : 金城 1974、p.454、世礼 1975、p.165-169、嘉手苺 1996、p.64-65

〔オ〕 卷 14-1 (982) -最後の部分のみが取り上げられている

又 ぢやなもいが (謝名もいが)
 ぢやなうへばる のぼて (謝名上原へ登りて)
 けやげたる つよは (蹴上げたる露は)
 つよからど かばしやある (露さえも香ばしきかな)

〔琉〕 『琉歌全集』 1703 番歌 (読人しらず)

とよむ謝名もゑが (トユム ジャナムイガ)
 謝名上原のぼて (ジャナ ウキバル ヌブティ)
 蹴上げたる露の (キアギタル ツィユヌ)
 玉のきよらさ (タマヌ チュラサ)

次に、和歌の改作琉歌について、これまでに先行研究で指摘されてきた用例を全て以下の通りに示す。それらの用例数は、和歌 7 首とその改作琉歌 7 首挙げられる。

● 先行研究の指摘 : 外間 1965、p.26、池宮 1976、p.154、島袋 1995、p.19、嘉手苺 1996、p.71

〔和〕 『古今和歌集』 24 番歌 (源のむねゆき)

ときはなる 松のみどりも 春くれば 今ひとしほの 色まさりけり

〔琉〕 『琉歌全集』 76 番歌 (北谷王子)

ときはなる松の 変ることないさめ いつも春くれば 色どまさる

● 先行研究の指摘 : 池宮 1976、p.155、島袋 1995、p.52

〔和〕 『古今和歌集』 330 番歌 (清原のふかやぶ)

冬ながら 空より花の 散り来るは 雲のあなたは 春にやあるらむ

〔琉〕 『琉歌全集』 235 番歌（喜屋武按司朝教）

冬にのが空や 花の散り飛びゆる もしか雲の中 春やあらね

● 先行研究の指摘：池宮 1976、p.155、島袋 1995、p.316-317

〔和〕 『古今和歌集』 166 番歌（清原のふかやぶ）

夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに 月宿るらむ

〔琉〕 『琉歌全集』 1505 番歌（岡本岱嶺）

宵とめば明ける 夏の夜のお月 雲のいづ方に お宿めしやいが

● 先行研究の指摘：島袋 1995、p.277

〔和〕 『古今和歌集』 166 番歌（清原のふかやぶ）

夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに 月宿るらむ

〔琉〕 『琉歌全集』 1310 番歌（読人しらず）

宵とめば明ける 夏の夜の月や 白雲にやどる 暇やないらぬ

● 先行研究の指摘：池宮 1976、p.155、島袋 1995、p.145

〔和〕 『古今和歌集』 196 番歌（藤原ただふさ）

きりぎりす いたくな鳴きそ 秋の夜の 長き思ひは 我ぞまされる

〔琉〕 『琉歌全集』 670 番歌（豊見城王子朝尊）

あまりどく鳴くな 野辺のきりぎりす まさるわがづらさ 知らなしちゆて

● 先行研究の指摘：池宮 1976、p.155

〔和〕 『古今和歌集』 193 番歌（大江千里）

月見れば ちぢに物こそ 悲しけれ わがみ一つの 秋にはあらねど

〔琉〕 『琉歌全集』 1382 番歌（読人しらず）

月よ眺めれば さまざまに物の 思はれて一人 あかしかねて

● 先行研究の指摘：池宮 1976、p.155

〔和〕 『古今和歌集』 609 番歌（壬生のただみね）

命より まさりて惜しく あるものは 見はてぬ夢の さむるなりけり

〔琉〕 『琉歌全集』 1400 番歌（与儀朝昌）

命よりまして 惜さあるものや 見はてらぬ夢の さめていきゆし

以上が、先行研究で指摘されてきたオモロの改作琉歌 3 首と和歌の改作琉歌 7 首をまとめたものである。上記の和歌の改作琉歌については、池宮（1976）は「この種の移しかえがほとんど古今集からのものである点が注目される（p.156）」と述べており、琉球文人は和歌について主に古今集を学んだことを指摘している。

ただし、古今集以外にも琉球の士族は和歌や和文学の様々な作品を積極的に享受したことがあったのだが、主に影響を与えた大和の作品は、池宮（1976）が以下のように指摘していることから分かる。

一般の(琉球)士族が和文学について何を学んだかを知る上で重要なのは、那覇士族阿嘉直識が1776年若い息子にあてた、いわゆる『阿嘉直識遺言書』である。そこには那覇士族が学ぶべき和文学が詳しく提示されている。それによると阿嘉は、定家の『詠歌大概』『秀歌大略』『百人一首』『和歌の底訓(毎月抄)』、定家の子為家の『為家卿集』、頓阿の『草庵集』『井蛙抄』『愚問賢註』、勅撰集の『古今集』『後撰集』『拾遺集』『千載集』『新勅撰集』『続後勅撰集』、江戸時代の通俗的な和歌の啓蒙書として人気のあった有賀長伯の『初学和歌式』『和歌八重垣』『浜の真砂』『歌枕秋の寝覚』、栗山満光の『和歌道しるべ』、それにこれも和歌の参考書として使われた伊勢、源氏、徒然草などがあげられている。

(池宮正治『琉球文学論』1976、p.150)

このように、琉歌が、和歌や和文学に影響されたことやお互いの関係について、様々な先行研究で指摘されている。しかし、その指摘は、琉歌と和歌において共通表現が何例見られるかという点や、その表現を詠み込んだ歌の少数例の紹介と両歌の概念の相違点や共通点、また改作琉歌の僅かな例に関する指摘に過ぎず、徹底的な調査はいまだなされていない。さらに、オモロと琉歌の共通表現などに関する徹底的な調査も、いまだなされていない。

先行研究でオモロの改作琉歌3首と和歌の改作琉歌7首という僅かな例しか提示されておらず、それら少数の用例に基づき、琉歌はオモロに由来し、和歌の影響を受けたものの、和歌は琉歌の成立までには影響を及ぼしていないという通説には、どうしても疑問を持たざるを得ない。なぜならば、徹底的な調査を経て和歌の改作琉歌について、今まで指摘されていた例より多くの歌を指摘することができ、和歌の表現や発想が琉歌に与えた影響はオモロより大きいことが判明したからである。

そこで、本研究では、まず「面影」「影」「春夏秋冬」という様々な表現を詠み込んだ琉歌を各章ごとに取り上げ、その琉歌を中心に和歌とオモロとの共通点や相違点について考察する。その結果、琉歌における表現は、オモロと和歌のどちらと共通点が多く見られるのか、という問題を明瞭にしたい。第1～3章では、「面影」「影」「春夏秋冬」と呼応する動詞の調査を行い、また、「面影」「影」「春夏秋冬」を取り入れた改作琉歌を指摘し、その結果に基づいて琉歌、オモロ、和歌の相互関係を解明する。また、第4章では『標音評釈琉歌全集』3000首の中で360首の琉歌を調査した上で、指摘できる改作琉歌を全て紹介する。加えて、第1～3章で指摘している「面影」「影」「春夏秋冬」という表現を取り

入れた全ての改作琉歌と共に、より広い範囲で改作琉歌の数をまとめて紹介する。琉歌、オモロ、和歌のお互いの影響関係の程度をより一層明らかにするために、本論で対象にした全ての琉歌の中で和歌やオモロを改作した琉歌がどの割合で見られるのかについて詳しく述べる。それぞれの歌の異なる形式を考慮しながら、和歌やオモロの表現がどのように琉歌の中に取り入れられ、変形されたのかについても詳しい分析を行う。さらに、和歌の改作琉歌に関しては、主にどの和歌集の影響を受けているのか、という問題についても指摘したい。それと同時に第4章の最後に、琉歌の発生の問題にかかわる、和歌から琉歌への流れ込みに関する一考察を述べたいと思う。最後に、第5章では「大和」という表現を歌った琉歌とオモロを比較することで、それぞれの歌における「大和」の異なるイメージや琉歌とオモロの特徴が鮮明に見えてくると考えられる。

調査対象にした琉歌、和歌やオモロは僅かな用例に止まらず、今まで調査の及んでいなかった広範囲の用例をもとに徹底的な調査を行った。章末に記した文献に含まれている歌の中から「面影」「影」「春夏秋冬」や「大和」を詠み込んだ全ての歌を対象にし、また、上述のように、第4章では360首の琉歌を対象とする。

徹底的な表現比較の調査結果をもとに、琉歌は和歌やオモロからどこまで影響を受けているのか、という問題をより明確にすることが本論の目的である。

なお、本研究で用いたテキストは、琉歌については、島袋盛敏、翁長俊郎『標音評釈琉歌全集』（武蔵野書院・5版・1995年）（以下、『琉歌全集』と表記）、および清水彰『琉歌大成』（沖縄タイムス社・1994年）、オモロに関しては、外間守善校注『おもろさうし上・下』（岩波文庫・2000年）である。また、それに加えて、外間守善、比嘉実、仲程昌徳『南島歌謡大成Ⅱ 沖縄編』（角川書店・1980年）（以下は、『南島歌謡大成』と表記）も適宜参照した。また、和歌に関しては、『新編国歌大観』（角川書店、CD-ROM版 Ver.2、1996年）（以下、『国歌大観』と表記）、三村晃功編『明題和歌全集』（福武書店、1976年）や日下幸夫編『類題和歌集』（和泉書院、2010年）を活用した。

第1章

琉歌、和歌やオモロの表現比較研究——「面影」をめぐる——

1. はじめに

序章で既述したように、琉歌の形式には、オモロという沖縄の伝統的叙事歌謡か、或いは和文学、特に小唄に由来があるという二つの異なる学説がとなえられている。琉歌とオモロの形式はお互いに関係性があることは認められるが、ここでは表現の観点から琉歌は、オモロと和歌のどちらからより影響を受けたかという問題を、具体的な表現を取り上げながら明確にしたい。

既述のように、先行研究では、琉歌と和歌の似通った内容に焦点が当てられ、その類似性が紹介されてきた。しかし、両歌の異なる形式を考慮しながら、琉歌と和歌共に見られる表現はそれぞれの歌の中でどのように変形され、詠み込まれているのかについては、詳しい分析がなされていない。また、その特定の表現を含む和歌と琉歌全体を対象にした広範囲の徹底的な調査もいまだに行われていない。

そこで、本章では、和歌と琉歌の中に詠まれている「面影」という単語に注目し、両歌の具体的な句（音数律）を分析することによって、和歌の5・7音の句における表現が琉歌の8・6音の句に合わせるためにどのようにアレンジされたのかについての考察を進め、琉歌と和歌における関係性を探っていきたい。また、和歌と琉歌における「面影」と呼応する動詞、両歌の共通表現や類義語をはじめ、和歌そのものを改作した琉歌も見られた場合に、それがどの時代の和歌の影響であるかについての考察も進めたい。つまり、「面影」を含んだ琉歌は主にどの時代、どの歌集の和歌の影響を受けたのかについて指摘するものである。それと同様に、「面影」を歌った琉歌をオモロとも比較しながら、どの程度の共通点が見られるのか、という問題についても詳しく述べたい。そして、最終的には、異なる背景で展開してきた琉歌と和歌におけるそれぞれの独特の表現についても指摘したい。

なお、本研究で使用したテキストは、琉歌に関しては、『琉歌全集』、『琉歌大成』や『南島歌謡大成Ⅱ 沖縄編下』であり、また和歌に関しては、『国歌大観』、『明題和歌全集』や『類題和歌集』である。オモロについては『おもろさうし上・下』を活用した。

2. 琉歌と和歌における「面影」と呼応する動詞

「面影」は、『日本国語大辞典・第2版』（2000—2002）によると、「目の前にないものが、あるように目の前に浮かぶこと。また、その姿。記憶に残っている姿。まぼろし。幻影。事が過ぎ去ったあとに残されている気配、影響など。なごり。」などの意味がある。「面影」の語源には二つの語が見られるが、一つは「影」という、目に映ずるか、目に見えない物の姿や形の意味を持つ語、そしてもう一つは「面」という顔付きの意味を持つ語である。上記の『日本国語大辞典』によれば、「おも・う [おもふ] 【思・想・憶・懐】」という動詞は一説に、「面」に「ふ」を付けて活用させたものとして、原義を「顔に現われる」の意とするのである。よって、「面影」は、単なる「顔や姿」を表すだけでなく、「その（主に愛しい）人の姿を（思い出や夢の中で）想う」という大事な意味をも潜在させた表現であると言えよう。

「面影」という表現は琉歌の中にも和歌の中にも、共通して数多く見られるが、果たしてそれらの歌の中で、同じように使われているかどうか、両歌における「面影」と呼応している動詞を中心にその相違点や類似点などについて考察したい。

2-1. 琉歌の「面影」と呼応する動詞

『琉歌全集』、『琉歌大成』や『南島歌謡大成』の中で「面影」を含んだ歌は、計190首ある（重複歌を除く）。そのうち、同表現と結ばれる動詞は、以下の表の通りである。

なお、それぞれの動詞が見られる歌数は、全て延べ数であるが、1首の中でも「面影」と呼応する動詞が二つ以上あれば、それぞれの動詞に1首ずつを当てることになる。（例えば、同じ1首の中で「面影」が「立ちまさる」場合には、動詞「立つ」も1首、動詞「まさる」も1首と数えるため、動詞が見られる全ての歌数を足すと、合計は190首を越える。ただし、「面影」が詠み込まれた歌数は、相変わらず190首である）。

『琉歌全集』等の琉歌における「面影」と結ばれる動詞		
「面影」を含んだ歌数=190 首		
動詞	その動詞と「面影」を詠んだ琉歌数 (延べ数)	「面影」の琉歌全体の中の割合 (%)
立つ ¹	81	42.6%
まさる ²	46	24.2%
忘る	33	17.3%
残る／残す	22	11.6%
別る	19	10%
さがる	10	5.3%
すぎる	9	4.7%

以上のように、「面影」を含んだ琉歌の中に、最も数多く見られるのは「立つ」という動詞である。「別て面影の立たばきやしゆがワカティウムカジヌ タ タ バ チ ャ シ ユ ガ（訳：別れてから面影が立つたらどうしようか)」、「馴れし面影の立たぬ日やないさめナリ シウムカジヌ タ タ ヌ フィ ヤ ネ サ ミ（訳：慣れ親しんだ面影の立たない日はないだろう)」等のように、「面影の立つ」と詠まれるパターンが殆どだが、「面影や立つ」や「面影に立つ」等という他のパターンも僅かに見られる。「面影」を含んだ琉歌の中における「立つ」という動詞は他の動詞と比べても圧倒的に多いため、それらの組み合わせは琉歌の独創的な表現であると考えられるが、次では和歌について詳しく検討したい。

2-2. 和歌の「面影」と呼応する動詞

和歌における「面影」と呼応している動詞を奈良時代から江戸時代にわたって時代別に分類したものが以下のA～Eの表である。

(なお、琉歌における上記のデータと同様に、和歌においてそれぞれの動詞を含んだ歌の数は、全て延べ数である)。

¹ 上記の表に出る「立つ」は、複合動詞の「立ちまさる」も含んでいる。

² 上記の表に出る「まさる」は、複合動詞の「立ちまさる」の形でも現れる場合がある。

A) 奈良時代（710年－794年）：「面影」の歌数は、計14首

「面影」を含んだ和歌は、この時代のものが最も数少なく、『万葉集』には存在するが、記紀歌謡には見られない。琉歌に最も多く見られる「立つ」という動詞は、奈良時代の和歌の中には一切出て来ない。

『万葉集』の歌における「面影」と結ばれる動詞		
「面影」を含んだ奈良時代の歌数=14首		
動詞	歌数 (延べ数)	奈良時代の「面影」の和歌の中の割合(%)
見ゆ	8	57.1%
にして	4	28.6%
思ふ／思ほゆ	4	28.6%
去らず	1	7.1%
かかる	1	7.1%
立つ	0	0.0%

B) 平安時代（794年－1185年）：「面影」の歌数は、計294首

『国歌大観』の和歌における「面影」と結ばれる動詞		
「面影」を含んだ歌数=294首		
動詞	歌数 (延べ数)	平安時代の「面影」の和歌の中の割合(%)
立つ³	61	20.7%
見ゆ	59	20.1%
添ふ	27	9.2%
離る	19	6.5%
忘る	16	5.4%
見る	16	5.4%

³ 上記の表に出る「立つ」には、複合動詞も含まれている（例：「立ち添ふ」、「立ち別る」、「先立つ」、など）。

平安時代の和歌では、「面影」と最も数多く呼応している動詞として「立つ」が挙げられる。これは琉歌と同様である。また、2番目に多いのは「見ゆ」である。

C) 鎌倉時代 (1185年－1333年) : 「面影」の歌数は、計 1498 首

『国歌大観』の和歌における「面影」と結ばれる動詞		
「面影」を含んだ歌数＝1498 首		
動詞	歌数 (延べ数)	鎌倉時代の「面影」の和 歌の中の割合(%)
立つ ⁴	215	14.4%
見る	158	10.5%
忘る	145	9.7%
残る／残す	143	9.5%
添ふ	116	7.7%
見ゆ	94	6.3%
思ふ／思ほゆ	61	4.1%

平安時代に比べて、鎌倉時代の「面影」を含んだ和歌には「立つ」という動詞の数はより多く見られるが、その占めている割合は減少している。それでも、平安時代と同じように「立つ」が最も多く、「見る」は2番目に多い。

⁴ 3に同じ

D) 室町時代⁵（1336年－1573年）：「面影」の歌数は、計 1187 首

『国歌大観』の和歌における「面影」と結ばれる動詞		
「面影」を含んだ歌数＝1187 首		
動詞	歌数 (延べ数)	室町時代の「面影」の 和歌の中の割合(%)
見る	164	13.8%
残る／残す	136	11.5%
立つ⁶	126	10.6%
忘る	111	9.4%
添ふ	94	7.9%
思ふ	70	5.9%
見ゆ	60	5.1%
別る	48	4.0%

室町時代の「面影」を詠んだ和歌では「立つ」が 3 番目の位置に下がり、その用例数も「面影」の歌数全体の中に占める割合も減少する。「見る」や「残る」といった動詞の延べ数は「立つ」を上回っている。

⁵ 安土桃山時代（1573年－1598年）まで延びる。

⁶ 上記の表に出る「立つ」には、複合動詞も含まれている（例：「立ち添ふ」、「立ち別る」、「先立つ」、など）。

E) 江戸時代（1603年－1868年）：「面影」の歌数は、計 616 首

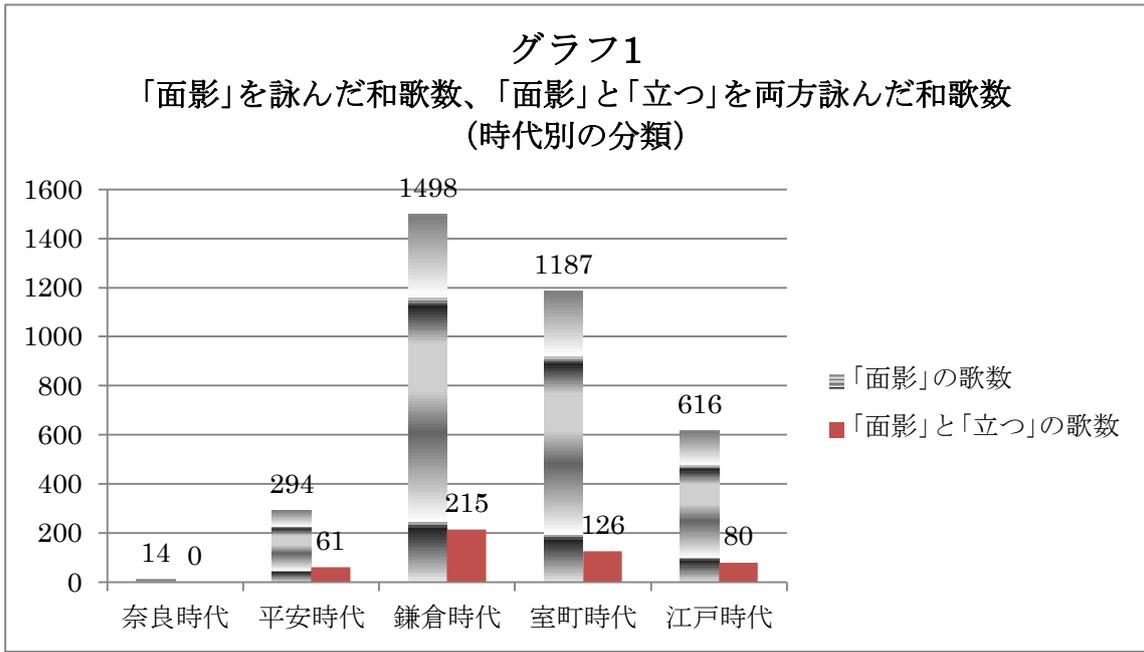
『国歌大観』の和歌における「面影」と結ばれる動詞		
「面影」を含んだ歌数＝616 首		
動詞	歌数 (延べ数)	江戸時代の「面影」の和歌 の中の割合(%)
見る	98	15.9%
立つ ⁷	80	12.9%
残る／残す	53	8.6%
添ふ	49	7.9%
忘る	29	4.7%
霞む	27	4.3%

「面影」を含んだ江戸時代の和歌の中で、「立つ」という動詞の割合は以前の室町時代より増加するが、平安時代や鎌倉時代ほどではない。また、視覚動詞「見る」の延べ数のほうが多い。

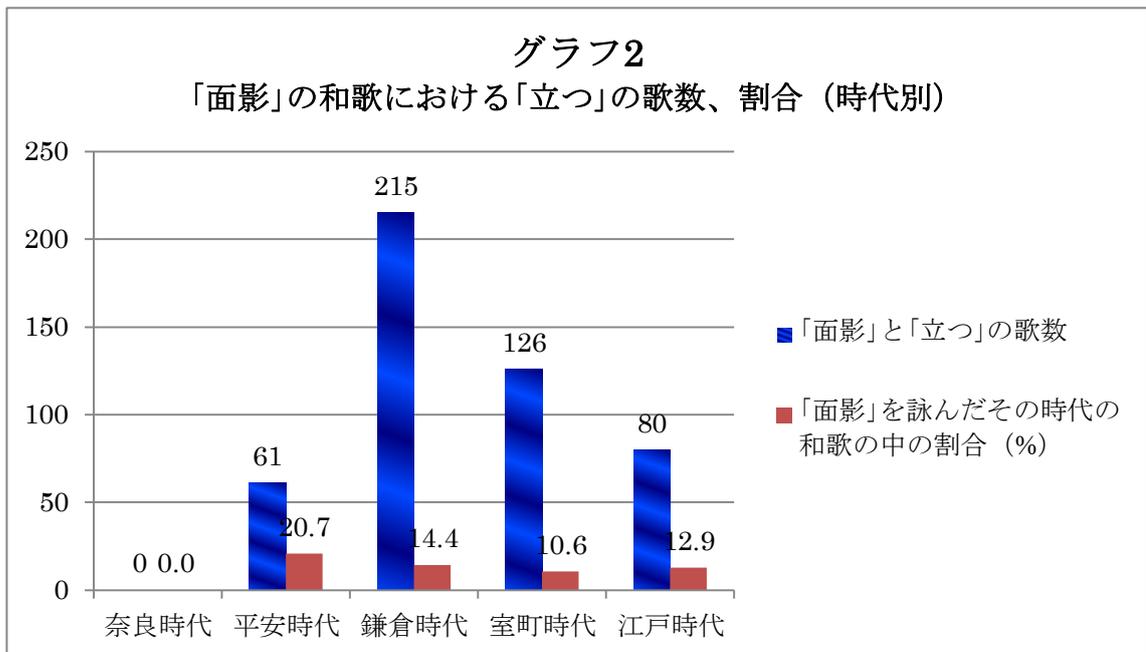
さて、「面影」と呼応している「立つ」が、和歌の中でそれぞれの時代においてどのように展開しているのかをまとめたものが以下の表とグラフである。

『国歌大観』の和歌における「面影」と結ばれる「立つ」の時代別展開			
時代	「面影」の歌数	「面影」と「立つ」 の歌数	「面影」と「立つ」の和歌が 「面影」の和歌の中に 占める割合(%) (時代別の分類)
奈良時代	14	0	0.0%
平安時代	294	61	20.7%
鎌倉時代	1498	215	14.4%
室町時代	1187	126	10.6%
江戸時代	616	80	12.9%

⁷ 上記の表に出る「立つ」には、複合動詞も含まれている（例：「立ち添ふ」、「立ち別る」、「先立つ」、など）。



上記の表やグラフ1によると、「面影」を詠んだ和歌も、その中で「立つ」を同時に詠んだ和歌も、同じ傾向を示していることが分かる。つまり、「面影」の和歌数も、「面影」と「立つ」の和歌数も、奈良時代から鎌倉時代にかけて段々増加しており、鎌倉時代の歌数は両者とも最も多い状態にある。その後、両者とも段々減少していく。



「面影」と「立つ」の両方を詠んだ和歌は、歌数的では鎌倉時代が最も多いが、グラフ 2 を見てみると、「面影」と「立つ」を詠み込んだ和歌がそれぞれの時代の「面影」の和歌の中に占める割合に関しては、平安時代の歌にその割合が最も高いことが確認できる。

以上のように、「面影」と呼応している「立つ」を詠んだ和歌が、「面影」の和歌に最も高い確率で見られるのは平安時代であり、また、最も多く詠まれるのは鎌倉時代であることがこの調査で判明した。

「面影」を詠んだ全時代の和歌数や、その中で「面影」と最も多く呼応している動詞の歌数や割合をまとめたデータは、以下の表の通りである。(それぞれの動詞を含んだ歌数は全て延べ数である)。

『国歌大観』の和歌における「面影」と結ばれる動詞		
「面影」を含んだ全ての時代の歌数＝3609 首		
動詞	その動詞と「面影」を含んだ全時代の歌数(延べ数)	「面影」の全時代の和歌の中の割合(%)
立つ ⁸	482	13.4%
見る	436	12.1%
残る／残す ⁹	341	9.4%
忘る	301	8.3%
添ふ	286	7.9%

上記の表から、「面影」と「立つ」の両方を詠み込んだ和歌の割合が、それぞれの時代において必ずしも最も高い位置を占めなくても、全時代の「面影」の和歌においては最も多く見られることが分かる。つまり、「面影」と最も数多く結ばれる動詞とは、「立つ」というものであり、「面影」と「立つ」の関係は、「面影」と他の動詞との関係より著しいことは注目すべき点であると言える。

⁸ 上記の表に出る「立つ」には、複合動詞も含まれている(例:「立ち添ふ」、「立ち別る」、「先立つ」、など)。

⁹ 上記の表に出る「残る／残す」は平安時代にも 9 首に見られるが、数少ないため、平安時代の表には示していない。

2-3. 琉歌と和歌における「面影」と呼応する動詞の比較

これまでに紹介した琉歌と奈良時代～江戸時代の和歌における「面影」と結ばれる動詞を、ここで再度対照させ、以下の表に示す。

『国歌大観』の和歌における「面影」と結ばれる動詞		
「面影」を含んだ歌数＝3609 首		
動詞	歌数 (延べ数)	全体の中の割合 (%)
立つ	482	13.4%
見る	436	12.1%
残る／残す ¹⁰	341	9.4%
忘る	301	8.3%
添ふ	286	7.9%
別る ¹¹	195	5.4%

『琉歌全集』等の琉歌における「面影」と結ばれる動詞		
「面影」を含んだ歌数＝190 首		
動詞	歌数 (延べ数)	全体の中の割合 (%)
立つ	81	42.6%
まさる	46	24.2%
忘る	33	17.3%
残る／残す	22	11.6%
別る	19	10%
さがる	10	5.3%
すがる	9	4.7%

主に「面影」の琉歌に見られる動詞の、和歌における出現率		
「面影」を含んだ和歌数＝3609 首		
動詞	歌数	全体の中の割合 (%)
まさる（「面影」と結ばれない例） ¹²	18	0.5%
まさる（「面影」と結ばれる例）	6	0.2%
すがる	1	0.03%
さがる	0	0%

¹⁰ 9に同じ

¹¹ 次ページの表にも触れているように、動詞「別る」は和歌の中にも琉歌の中にも「面影」と直接に結ばれる例は少なく、名詞「別れ」や「別れ路」等の形はよく見られる。動詞の形で見られる例は少ないが、「別れ」は「面影」を含む琉歌・和歌の両方に重要な範囲でノスタルジックな雰囲気を醸し出している。そのため、上記の表や次ページの表でこの語について触れることとした。

¹² 「面影」を詠んだ和歌における「まさる」は、「物思ひ」「色」「雨」等といった名詞と結ばれる。

今までの表を対比しながら、「面影」を詠んだ和歌と琉歌の共通点と相違点について以下の表のようにまとめて述べることができよう。

	「面影」を詠んだ 和歌	「面影」を詠んだ 琉歌
共通点	「面影」と最も多く呼応している動詞は「立つ」で、最も多い動詞である。	
共通点	「面影」と多く結ばれる「残る／残す」と「忘る」の組み合わせによってノスタルジックな雰囲気が醸し出される。	
共通点	上記の動詞との組み合わせほど用例は多くないが、「面影」と「別る」の組み合わせもよく見られ、ノスタルジックな雰囲気を醸し出す。ただし、琉歌の中にも、和歌の中にも「別る」は動詞として「面影」と直接に結ばれる例は少なく、「別る」を動詞として歌う場合は、「別れた袖」や「人」、或いは「(お互いに)別れる」場面が出現し、また名詞として歌う場合は、「別れ路」や単に「別れ」を使う場面が多い。この点はかなり特徴的であり、「別る」を他の動詞と比べると、両歌における「面影」と直接に結ばれる例は少ないが、「面影」を含んだ歌の切ない雰囲気を大きく醸し出すため、「面影」と(間接的にでも)結ばれる重要な動詞として触れる必要がある。	
相違点	(上記の表には全ての動詞が示されていないが、)「面影」とかなり数多く結ばれるのは、「見る」、「見ゆ」、「見す」や「眺む」という視覚動詞である。	上記の表には示されていないが、琉歌にも「見る」、「眺む」等の視覚動詞が見られる。しかし、これらの動詞は殆どの場合に「面影」と直接に呼応せず、別の物を眺める／見る際に「面影」が立つ形を取っている。
相違点	「面影」と「添ふ」の組み合わせは和歌のみにおける独特の組み合わせであり、静かな悲しさを感じさせる奥床しい和風の表現であろう。	「面影」と「まさる」の組み合わせは、和歌にはほとんど見られず、琉歌の典型的な組み合わせだと言える。より積極的な意味を持つこの表現が圧倒させる悲しさを素直に伝える琉歌の特徴こそだと言えよう。
相違点	琉歌における「さがる」という動詞は「面影」の和歌には一切見られない。「さがる」という動詞の例は1首中のみに見られる。しかし、「面影」との直接的な繋がりではなく、「胡蝶」と結ばれている。	「面影」を含んだ和歌には一切見られない動詞の「さがる」、「すがる」は琉歌に割と数多く見られ、「目の緒さがて」等という独特の表現を通して琉歌のユニークさを深く味わうことができる。

3. 「面影→立つ」を詠んだ琉歌、和歌やオモロの類似の句

上述したように、琉歌の中にも、和歌の中にも「面影」と最も多く呼応している動詞は「立つ」であり、「面影→立つ」の関係は両歌において著しいものとなっている。「面影」と様々な動詞との組み合わせの中では、両歌において一番割合位置を占めていることは注目すべき点である。

現代の日常生活で滅多に使われない「面影が立つ」のような表現は平安時代の和歌に遡り、古くから和歌にも琉歌にも数多く見られるため、この組み合わせに関しては、琉歌がある程度まで和歌の影響を受けているのではないかと考えられる。琉球語も日本語も「面影が立つ」という表現を日常の話し言葉の中で使うことがなく、両方の文化の中で文筆表現として唯一に生きており、また、両歌の音数律に合わせるために様々な文筆表現として巧みに工夫されている。

そこで、ここでは「面影→立つ」の組み合わせの観点から、両歌における具体的な類似の句を分析することを通して和歌と琉歌の関係、また琉歌とオモロの関係はどうなっているかについて、さらに考察したい。

3-1. 和歌の「面影ぞ立つ」と琉歌の「^{ウムカジドゥタ チュル}面影ど立ちゆる」

「面影ぞ立つ」と「面影ど立ちゆる」という類似表現は、和歌や琉歌の中に共通して見られる。

「面影ど立ちゆる」の表現を有する琉歌は、『琉歌全集』の中に2首見られ、以下の通りである。

(『標音評釈琉歌全集』・1799番歌・読人知らず)

表記：

遊び面影や
まれまれど立ちゆる
里が面影や
朝も夕さも

読み方：

アスイビ ウムカジャ
マリマリドゥ タチュル
サトゥガ ウムカジャ
アサン ユサン

現代語訳：一緒に遊んだ人の面影は、たまに思い出されるが、恋人の懐かしい面影は、朝も晩もいつも思い出され、忘れる時はない。

『標音評釈琉歌全集』・2495 番歌・読人知らず)

表記：

花の島をても
馴れし親兄弟の
面影ど立ちゆる
朝も夕さも

読み方：

ハナヌ シマ フウティン
ナリシ ウヤチョデヌ
ウムカジドゥ タチュル
アサン ユサン

現代語訳：遊郭の仲島は、華やかで面白い所であるが、故郷の親兄弟の面影が朝夕思い出され、恋しくて堪らない。

上記の琉歌の中で強調した「面影ど立ちゆる」および和歌で詠まれた「面影ぞ立つ」は、琉歌や和歌の中に共通して見られるが、それぞれの組み合わせについて以下に詳しく述べたいと思う。なお、「面影ぞ立つ」と「面影ど立ちゆる」は両方とも係り結びである。

まず、和歌の「面影ぞ立つ」の句では、強意を表す係助詞「ぞ」 + 四段活用動詞「立つ」の連体形の係り結びが見られ、意味は、「面影が立つ」というふうになる。

沖縄方言では、係助詞「ぞ」は、同じ働きを持つ「ど」に変化する。よって、琉歌の「面影ど立ちゆる」の句では、強意を表す係助詞「ど」 + 四段活用動詞「立つ（タチュン）」の連体形である「タチュル」の係り結びが見られる。

和歌においては 5・7・5・7・7 音形式に合わせるために、和歌の 7 音の「面影ぞ立つ」(o・mo・ka・ge・zo・ta・tsu) が誕生した。それに対し、琉歌の基本的な 8・8・8・6 音形式に合わせるために、琉歌の 8 音の「面影ど立ちゆる」(u・mu・ka・ji・du・ta・chyu・ru) という句が作り出され、琉歌の形式とぴったり合うと言える。

さて、和歌と琉歌における上記の句の意味は同様であると述べたが、同句に見られる「立つ」という動詞の特徴は注目に値する。和歌では、「立つ」が上記の「面影ぞ立つ」という句の中で四段活用動詞の連体形であり、その意味は「立つ」となる。『沖縄古語大辞典』によると、沖縄方言では「立つ」という四段活用動詞の終止形は「タチュン」となり、連体形に直すと「立ちゆる（タチュル）」となるが、和歌における「面影ぞ立つ」という表現と見た目では違う表記や発音であっても、琉歌の上記の句も「面影が立つ」という意味となる。琉歌における「^タ立ち^{チュル}ゆる」という動詞のこの独特の形をさらに詳しく分析すると、「立ち」という基本の連用形に「をり」（普通）の連体形「をる」が結び付いていることが分かる。「琉球方言では、基本形に『をり』『あり』『てをり』『てあり』『たり』

が結び付いて融合変化を起こし、一語となってテンスやアスペクトなどを表す。
 (また、連用形+をり) この形は古くは継続を表していたが、しだいにその意味を失い、現在ではテンス・アスペクトの側面はニュートラルで、特に未来とか過去、完了のように、時を明示することがない(『沖縄古語大辞典』、p.765)のである。間宮(2008)も、「沖縄方言が係り結びを存続し得たその背景には、結びに『居る』と『有る』を用いた複合形を編み出すという、独自の変化が起こったのである(p.137)」と述べており、それは琉歌における動詞「立つ」の場合は、四段活用動詞「立つ」の連用形である「立ち」に「をり」(または、「居り」^よとも書く)の連体形である「をる(居る)」がつき、「ど」との係り結びである「立ち居る→(拗音化して)タチュル」となる。意味は、和歌における「面影ぞ立つ」とほぼ同様であるが、7音ではなく、琉歌の音数律にぴったり合う8音である点は注目に値する。(上記の説明の概要は『沖縄古語大辞典』、p.770に記載されている表も参照)。

上記の説明を要約したパターンは以下の通りである。

和歌

琉歌

係り結び:「ぞ」 + 連体形	→	係り結び:「ど」 + 連用形 + 「居る」 ^よ
「面影ぞ立つ」(7音)	→	「 ^{ウムカジドゥッタ チュル} 面影ど立ちゆる」(8音)
(意味:面影が立つ)	→	(意味:面影が立つ)

3-2. 「面影ぞ立つ」や「^{ウムカジドゥッタ チュル}面影ど立ちゆる」を含んだ和歌と琉歌の特徴

和歌の「面影ぞ立つ」の初出は、1150年に成立された『久安百首』という平安末期の私家集であり、そこに記載された「面影ぞ立つ」の歌の作者は、藤原俊成である。「面影ぞ立つ」の表現を詠んだ和歌は、平安時代に4首ある。その中の3首は藤原俊成によって詠まれ、残りの1首は、12世紀末に編纂された『宝物集』に掲載されている歌であり、その作者は俊成の師であった藤原基俊である。「面影ぞ立つ」が、誰によって考え出されたものなのかは定めにくいだが、藤原俊成、もしくは藤原基俊によって初めて詠じられた表現だということは確かである。

「面影ぞ立つ」を詠んだ平安時代の和歌は、以下の歌集に掲載されている 4 首である。

- 1) 『久安百首』(1150 年)、歌人：藤原俊成
- 2) 『長秋詠藻』(1178 年)、歌人：藤原俊成
- 3) 『長秋草』(1182-84 年)、歌人：藤原俊成
- 4) 『宝物集』(12 世紀末)、歌人：藤原基俊(藤原俊成の師)

「面影ぞ立つ」が詠まれる和歌数は時代によって異なるが、以下の表の通りである。

時代	「面影ぞ立つ」の出現歌数
1)奈良時代	0 首
2)平安時代	4 首
3)鎌倉時代	35 首
4)室町時代	22 首
5)江戸時代	15 首
合計	76 首

上記の表より、「面影ぞ立つ」は、奈良時代の『万葉集』などの和歌には一切見られず、平安時代には 4 首あることが分かる。これは、既述したように、全てが藤原俊成とその師の藤原基俊によって詠まれたものである。また、この表現を詠んだ最も多くの用例が見られるのは鎌倉時代の和歌であり、35 首である。その後、室町時代や江戸時代にわたって、この表現が見られる和歌の数は段々減少する傾向が示されている。

鎌倉時代の「面影ぞ立つ」を詠んだ和歌は、この表現を含んだ全時代の和歌のほぼ半分を占めているが、その殆どが藤原俊成や藤原定家系列の歌人によって詠まれたものであることを指摘できる。

鎌倉時代に「面影ぞ立つ」の句を詠んだ歌人と、それらの歌人によって詠まれた幾つかの代表的な和歌を以下に示す。

- 藤原俊成：2 首(平安時代にも既に 3 首を詠んでいる)

- ⑧： 冬の夜の 雪と月とを みるほどに 花のときさへ おもかげぞ
たつ (『久安百首』・858 番歌)
- 藤原定家： 6 首 (藤原俊成の息子である)
- ⑧： ぬぎかへて かたみとまらぬ 夏衣 さてしも花の 面影ぞたつ
(『拾遺愚草』・921 番歌)
- 藤原為家： 8 首 (藤原定家の次男で、俊成の孫である)
- ⑧： 色かはる 雪のはたへの 秋風に 初かりがねの おもかげぞた
つ (『為家集』・547 番歌)
- ⑧： あかほしの 光さやけき あか月は あけしいはとの おもかげ
ぞたつ (『為家五社百首』・461 番歌)
- 順徳院： 1 首 (順徳院が歌合わせを開き、そこには藤原定家、俊成卿
女などの有名な歌人が参加したことから上記の歌人との繋がりが見えて
来る)
- ⑧： 賀茂やまや 見しは三月の 花のかげ こぞのみゆきの 面影ぞ
たつ (『紫禁和歌集』・358 番歌)
- 藤原忠定^{たださだ}： 1 首 (順徳院の歌合わせサロンに藤原定家、俊成卿女などの
有名な歌人と一緒に参加した歌人である)
- ⑧： をとめこが かづらき山の 山桜 霞にもれし 面影ぞたつ
(『健保名所百首』・69 番歌)
- 藤原知家^{ともいえ}： 2 首 (順徳院の歌合わせサロンに藤原定家、俊成卿女などの
有名な歌人と一緒に参加した歌人である)
- ⑧： ふる雪に 安達の原の しらま弓 春の梢の 面かげぞたつ
(『健保名所百首』・693 番歌)
- 阿仏尼： 1 首 (藤原定家の側室)
- ⑧： あづまぢの うら風なびく をばなにも ものの入江の 面かけ
ぞたつ (『安嘉門院四條五百首』・345 番歌)

- 鴨長明： 1首（この1首は『海道記』に見られる歌であり、その作者は鴨長明であると考えられるが、作者不明とされている）
- 後鳥羽院： 1首（『日本古典文学大辞典 第2巻』（1984）によると、後鳥羽院は「藤原定家の新風和歌に接し、その影響を受けて、歌人として活躍的に成長した（p.645）」。）
- ^{きぬがさいえよし}衣笠家良： 2首（藤原定家の門弟である）

⊙： 足びきの 山なしのはな さきしより たなびく雲の おもかけ
ぞたつ （『新撰和歌六帖』・2406番歌）

- ^{あだちながかげ}安達長景： 1首（『新編国歌大観 第7巻』（1989）によると、安達長景は、「藤原大納言（^{ためうじ}為氏）家での詠が多く、為氏に師事したかと思われる（p.828）」のであるが、藤原為氏の祖父は定家で、父は為家であったことから、それらの歌人との繋がりが見えて来る。）

⊙： 山のはに 入るかたちかき 月見れば またれし空の おもかけ
ぞたつ （『長景集』・66番歌）

- 融覚： 1首（藤原為家が出家してからの法名である）
- ^{れいぜいためすけ}冷泉為相： 3首（父は藤原為家であり、母は阿仏尼である）

⊙： 岡野辺や 薄かたよる 秋風に 春の柳の 面影ぞたつ （『夫木和歌抄』・4344番歌）

- 伏見院： 1首（『日本古典文学大辞典 第5巻』（1984）によると、伏見院は「学問ことに古典を愛したが、京極^{きょうごく}為兼^{ためかね}を師範として和歌を学び、しかも独自の和風を樹立して、歴史の中でも有数の歌人であり、多数の和歌を残した（p.259）」のであるが、この京極為兼なる人物は、藤原定家に遡る和歌の家として知られる藤原^み御子^こ左家^{ひだりけ}の出自である。）

- 藤原政範： 1首
- ^{ためよ}藤原為世： 1首（藤原為世は藤原為氏の子である。上述のように、藤原

為氏の祖父は定家で、父は為家である。)

㊦： 雪つもる あまのしほやの 煙にも ふじのたかねの おも影ぞ

たつ (『嘉元百首』・954 番歌)

➤ 藤原公頭：1首

㊦： 花おそき 木ずゑの空の ゆふ霞 かねてにほひの 面影ぞたつ

(『嘉元百首』・1008 番歌)

➤ ^{ふじわらためぎね}藤原為実：1首 (五条為実とも呼ばれ、二条為氏(藤原為氏)の4男である)

㊦： 男山 よどのわたりの 春のなみ 南の海に 面影ぞたつ (『夫

木和歌抄』・10276 番歌)

これらを通覧すると、「面影ぞ立つ」という表現が鎌倉時代には多く詠まれ、人気のある表現であったことが推察される。藤原俊成や定家は「面影」をその歌論の中にまで扱ったことがあることから、「面影」は文学的な価値のある表現でもあったと解されよう。

ただし、「面影ぞ立つ」が平安時代に詠まれるようになってから、鎌倉時代にわたってずっと発展していたことであっても、上のリストを見てみると、限られた空間の、藤原俊成や定家系列の歌人によって広まったものであることが分かる。とは言っても、それらの歌人は歴史上有名で有力な歌人であったため、同表現も和歌の世界で広まり、おそらく琉歌までにも普及した可能性も考えられる。

和歌における「面影ぞ立つ」および、琉歌における「面影ど立ちゆる」という句がお互いに似通っているという、両歌の特徴についても述べる必要がある。まず、和歌の「面影ぞ立つ」はいつも歌の7音の結句として詠まれているものであることが、上の歌のリストからも明瞭である。それに対し、琉歌の「面影ど立ちゆる」は、歌の第3句に置かれている8音句である。さらに、上のリストを通覧すると、当該の句が詠まれている両歌の内容も異なっていることが分かる。「面影ぞ立つ」を含んだ和歌には、基本的に自然の描写が多く、去る季節などを惜しむ名残(面影)が詠まれているが、「面影ど立ちゆる」を歌った琉歌は2首とも恋人或いは家族同士といった人間関係から生まれる強い感情をそのままストレートに伝えている。つまり、この2首の琉歌における「面影」は愛しい人の面影に限られているのである。

また、「面影」という表現は、1531年～1623年の間に琉球王国の首里王府によって編纂された、沖縄最古の歌謡集である『おもろさうし』の中にも4首見られる。琉歌の句と同様である「^{おもかげ}面影^たど^よ立ち居る」（巻8-4 [396] 番オモロ）、そして「^{みおもかげ}御面影立ちちへ」（巻7-14 [358] 番オモロ）という「面影→立つ」の組み合わせを含んだオモロがそれぞれ1首ずつ見られる。当該オモロ2首の中の前者（巻8-4 [396] 番オモロ）は、島尻西南部の按司の面影を取り上げ、按司を誉め称えるものであり、後者は、王様或いは按司の面影が立っていることを歌っているオモロである。オモロはそもそも叙情の琉歌と違い、叙事詩であるため、恋人や家族ではなく、王様や優れた歴史実在人物を賛美する特徴を持つ。そのため、上の2首も王様や按司を誉め称えるものとなっていると考えられるのが自然なことであろう。しかし、「面影ぞ立つ」を詠んだ上の和歌では、面影を、自然現象が去る、或いは変化している名残などのイメージと連結させているのに対し、当該の琉歌やオモロが両方とも恋人、君主を問わず面影を人物と関連付けている点が、オモロと琉歌の共通点として挙げることができる。

「面影ど立ち居る¹³」は、結局琉歌の中にも、オモロの中にも見られるので、同表現はオモロから琉歌に受け継がれたものであるか、或いは琉歌もオモロもその表現を和歌から学んだかの判断は難しい。現在の段階では、琉歌についてもオモロについても未解明のところや謎の点が多く、お互いの影響については上述したように様々な研究者が論じており、多様な仮説もあるが定かではない。また、和歌や和文学の影響もいつまで遡れるかは難しい問題だが、薩摩藩の琉球侵入（1609年）以降、沖縄の知識人達や歌人達は和文学に憧れただけではなく、琉球の官使候補者はその職業に採用されるため、積極的に和文学も摂取しなければいけなかった事実は明らかである。その際学んだ和歌の影響をもとに、上述の「面影ぞ立つ」が琉歌の中に取り込まれたことも考えられる。その証拠の一つとしては、序章で挙げた池宮（1976、p.150）による那覇士族が学ぶべきだった和文学のリストに関する記録である。このリストからは琉球の士族や歌人達は具体的にどの和歌集を手本に学んだかということが分かるが、ここではその中でとりわけ定家、そしてその子である為家の『為家卿集』に注目したい。当該の歌集には「面影ぞ立つ」を含んだ和歌も含まれており、しかも全歌集の中に4首までも見られる。

「面影ど立ちゆる」を歌った琉歌2首とも「読人知らず」の歌となっているため、その歌人はどのような人物であり、どのようなルートで上記の句を詠み込んだかについては、残念ながら詳しいことが分からないが、上述の事実を考慮

¹³ 琉歌における「立ち居る」の発音は「たちゆる」になるのである。

に入れると、和歌のこの句は非常に有名な歌人達によって多く詠まれ、さらに、琉球の士族が和歌の教養の手本にしていた『為家卿集』の中にも4首も見られるため、琉歌への影響も十分考えられると言えよう。

また、ここで取り上げた「面影ど立ちゆる」という句は、「読人知らず」の歌に詠まれており、3-3.で説明している「馴れし面影の 立たぬ日やないさめ」という琉歌2句については、実在の歌人によって詠まれ、オモロには見られないものでありながら、和歌には類似の句が見られるため、そのルートについてはより定かに述べることができる。さらに、それと似通った和歌も同じ『為家卿集』という那覇士族によってよく学ばれた重要な歌集に見られるので、和歌の影響を否定し難いものとなっていると言える。いずれにしても、和歌における非常に有名な歌人によって創作された「面影ぞ立つ」と琉歌における「面影ど立ちゆる」が類似している性質は留意すべき点である。

以上をまとめると、琉歌における「面影ど立ちゆる」という句については、オモロの句「面影ど立ち居る」に由来するのか、それとも和歌における「面影ぞ立つ」の変形であるのか、断言することはできないため、ここではオモロからも和歌からも影響を受けたという、二つ可能性の指摘にとどめておく。なお、この問題については、将来にさらなる調査を行う必要がある。

3-3. 和歌の「見し面影の 立たぬ日ぞなき」と

琉歌の「^{ナリ シウムカジヌ}馴れし面影の ^{タタヌフィヤネサミ}立たぬ日やないさめ」

3-1.で紹介した句と同じように、上記の表題の表現も琉歌と和歌における類似表現である。

「^{ナリ シウムカジヌ}馴れし面影の ^{タタヌフィヤネサミ}立たぬ日やないさめ」という2句が琉歌に見られるが、それと似通った意味を持つ2句の用例が和歌の中にもいくつか見られる。まず、和歌の用例を以下に示そう。

● 平安時代

- 1) かがみ山 うつろふはなを みてしより おもかげにのみ たたぬ日ぞなき¹⁴
- 2) かがみやま うつろふ花を みてしより おもかげにのみ たたぬひはなし¹⁵

¹⁴ 初出は、『金葉和歌集 初度本』（1127年成立・同歌が71番歌）である

¹⁵ 初出は、『内蔵頭長実白河家歌合 保安二年閏五月十三日』（1121年成立・同歌が3番歌）である

● 鎌倉時代

3) 浮舟の たよりもしらぬ 浪路にも みし面影の たたぬ日ぞなき¹⁶

4) ふじの山 たかねの煙 行きかへり みし面影の たたぬ日ぞなき¹⁷

平安時代に詠まれた上記の最初の 2 首には、「面影にのみ 立たぬ日ぞなき」や「面影にのみ 立たぬ日はなし」というパターンがあり、琉歌に見られる「馴れし面影の 立たぬ日やないさめ」のパターンとは最初の句に関して異なるものである。しかし、上記の 3)、4) の鎌倉時代の和歌を見てみると、両方とも「みし面影の 立たぬ日ぞなき」というパターンになっており、これは琉歌の上記のパターンと非常によく似ている。

和歌における

「みし面影の 立たぬ日ぞなき」

および琉歌における

「馴れし面影の 立たぬ日やないさめ」

のそれぞれの 2 句は、現代語に直すとその大まかな意味が「前から愛していた、慣れ親しんでいた（人の）親しい面影が目の前に立たない日はない」となり、両歌の上記の句は同様の意味を表していることが分かる。

以下、4) の鎌倉時代の和歌およびそれと似通った琉歌を対照させ、紹介する。

¹⁶ 初出は、『後京極殿御自歌合 建久九年』（1198年・同歌が146番歌）であるが、他にも『秋籐月清集』や『新勅撰和歌集』の中に見られる

¹⁷ 『為家集』所有（13世紀成立・同歌が1304番歌である）

和歌

(鎌倉時代・『為家集』 - 13世紀成立

・1304番歌)

ふじの山

たかねの煙

(内容一致)

行きかへり

(内容一致)

みし面影の

(7音)

たたぬ日ぞなき

(7音)

琉歌

(『琉歌全集』・388番歌・

ユナバルウェエカタリヨオク
与那原親方良矩¹⁸⁾)

ユイン アカツィチン
宵も 暁も

(内容一致)

ナリ シウムカジヌ
馴れし面影の

(8音)

タタヌフィヤネサミ
立たぬ日やないさめ

(8音)

シュヤヌチムリ
塩屋の煙

(内容一致)

現代語訳：朝も晩も馴れ親しんだ
人の面影は、目の前に立たない日
と**い**って**は**ない。それはちょうど
塩屋の煙が立たない日**は**ないよ
うなものである。

ここで注目したいのは、和歌と琉歌における似通った内容の上の句の中で、それぞれの音数律に合わせるために選んだ表現の特性である。和歌の下句の7・7の音数律に合わせた表現に対し、同様の意味を持つ琉歌の第2・3句の8・8音が見られる。つまり、和歌の「見し面影の」という7音の句を、琉歌では「馴れし面影の」という8音の句として変形している。和歌における2音の「見し」という表現は、琉歌において同じ意味を持っている「馴れし」という3音の句に置き換えられている。また、和歌の「立たぬ日ぞなき」(訳：立たぬ日**は**ない)という7音の句は、

琉歌においては、「立たぬ日やないさめ」(訳：立たぬ日**は**ないだろう)という少し違ったニュアンスの意味を持つ8音の句に変形されている。

「立たぬ日」という句の前半の部分は、両歌において同じ音数律(4音)であるが、特徴のポイントは両歌における同句の後半の部分にあり、和歌の3音の「ぞなき」という部分が琉歌の中で「やないさめ」という4音の表現として見られる。

このように、和歌の7音の句に対し、琉歌に相応しい8音の句が保たれている。琉

¹⁸ 与那原親方良矩(1718年-1797年)は、尚穆・尚温王時代の琉球王国の政治家で、著名な歌人

歌では、ai という組み合わせは e というふうに発音されるルールがあるので、上述の「ない」は「ネー」と発音され、元々5音のはずだった上述の句における「や^ヤない^ネさ^サめ^ミ」が「ya・ne・sa・mi」のように4音に収まる。

琉歌の「立たぬ日やないさめ」を詳しく見てみると、沖縄語の「や」という係助詞は日本古語の反語・疑問の意味を持つ「や」とは異なり、題目や対象などの強意提示の係助詞で、大和の「は」に該当する。また、「ない」 + 終助詞「さめ」の形は推量を表す。以上のことを踏まえ、「立たぬ日やないさめ」は「立たない日はないだろう」というふうに訳せる。

この和歌と琉歌の内容も非常に近いと言えるだろう。両方の歌とも、「面影の立つ」を「煙の立つ」に喩え、行きが行われる朝と、帰りが行われる夜というふうに考え、和歌の「行き帰り」を、琉歌の中に「宵も暁も」という形で入れていることが見えて来る。「行き帰り」も「宵も暁も」という句の最終的な意味は「一日中、(何時でも見ても) ずっと」と捉えられることができる。つまり、両歌共に、「ずっと立つ」という意味を最初に紹介してから、「立たない日はない」という表現を用いることで歌を開幕させる。

この和歌を詠じた歌人は、藤原為家であり、和歌は『為家集』に収められている歌である。先述したように、「面影ぞ立つ」の創作者の藤原俊成の孫であり、本人も「面影ぞ立つ」を含んだ和歌を多く(8首)詠じた。当時の琉球士族や知識人は様々な和歌集の中、『為家集』も教養の歌集にしており、それらの和歌の影響を受けた

と言える。詠む歌として多くの琉歌を詠じた与那原親方良矩ユナバルウエエカタリョウキョクは、沖縄 36 歌仙の一人で、多くの琉歌の他に 1 首の和歌を残している。良矩は政治家としても有名で、『中山世譜』巻 10 によれば、進貢正使として 1762 年に北京に行っており、また帰国後は薩摩で報告を行っている。数年後、およそ 28 年にわたって三司官を務めていた間、薩摩へ行くことが多く、薩摩藩との関わりが深かった(池宮 1982)。政治の側面だけではなく、文化や文学の側面からも大和との繋がりがあり、和歌を詠んだ事実からも和文学の影響を受けていることが明らかである。したがって、良矩のこの 388 番の琉歌についても、琉球士族に非常によく知られて学ばれていた『為家集』の中に収められている非常に有名な歌人であった藤原為家の、この和歌の影響を受けたものなのではないか、と推察できよう。この推察について、『為家集』を教養歌集として遺言書の中で薦めた阿嘉直識は「師の二階堂のよすがで、(中略) 与那原良矩らと歌会に同席する機会を得ている」(池宮 1976、p.427) とし、つまり、阿嘉直識と与那原良矩は特に歌会の場面で知り合いだったという事実からも、裏付けられるのではないだろうか。

しかし、この琉歌と和歌が似通った内容や表現を含んでも、お互いに異なる点があり、そこにそれぞれの個性が見られるとも言える。それは、それぞれの歌の「煙」と結び付いたイメージである。

和歌の場合、平安時代になってからの「塩焼く煙」は、古今和歌集等に見られる恋の比喩的表現として発達し、『源氏物語』の和歌にも「恋の煙」という表現を使って詠まれた歌があり、これは「光源氏の妄執とさえいえる玉鬢への執心を表している」(秋山 2000、p.166) のである。また、亡き人の魂の行き先に、残された人の思いを馳せさせる煙の発想や、天上と人間の住む地上とをつなぐものとして立ちのぼる煙の発想も和歌で認められ、「煙」は『竹取物語』により富士山とも結び付く(秋山 2000、p.166)。以上のことを踏まえ、平安時代以降の和歌における「煙」のイメージは恋の比喩や哀傷の比喩の 2 つに大きく分けられると言える。

なお、上に紹介した 1304 番歌を所有する『為家集』には、「塩焼く煙」を詠んだ歌も見られる(644 番歌)。上に挙げた 1304 番歌は、残念ながら詞書がなく、追悼の際に詠まれたか否かは明確ではないが、亡き人に対するものであるか、ただ会えない人に対するものであるか、いずれの場合も切ない恋の歌と解釈できる。

一方、この『琉歌全集』の 388 番歌の歌われた場面は少し違う。同歌は「花売りハナウキの縁ヌキ」という高宮城親雲上タカナアグスイクベエチン作の組踊りに出ているものであり、当該の組踊りの主人公は都落ちした首里下級士族で、一人で貧しい生活を送りながら妻子との 10 数年の離別を悲しむ場面でこの琉歌を歌っている。当該の琉歌は、家族への深い愛情を表しているものである。

以上のように、ここで紹介した両歌には、類似の句だけではなく、その内容の観点からも非常に似通っているものであることが判明した。1609 年以降に起こった琉歌人の「和文学に対する教養」という大きな文化的な運動を考慮し、また類似表現が琉歌と和歌のそれぞれの音数律にアレンジされていることを分析すると、この琉歌は為家の和歌から影響を受け、その和歌を改作した可能性が考えられる。また、この和歌の影響は鎌倉時代まで遡ると言える。ただし、両歌がそれぞれ違う場面を詠み、異なる感情を表すことから、両歌の関係を示しながらも、それぞれの 2 首の特徴についても指摘すべきであろう。恋の和歌に対し、同様の表現を含みながら家族への愛情を歌った琉歌があることは、和歌と琉歌のそれぞれの世界における特徴となっている。

3-4. 和歌の「見し」と琉歌の「^{ナリシ}馴れし」

3-3.で対照させて紹介した和歌と琉歌の中には、「見し面影の」という7音句および「馴れし面影の」という8音句がそれぞれの歌の中に類似表現として見られることが分かった。この類似の句における異なる音数律を定めているのは、和歌の2音の「見し」および琉歌の3音の「^{ナリシ}馴れし」という単語であり、それらの単語が関係を持つと考えられる。そのため、ここでは和歌や琉歌における「見し」と「^{ナリシ}馴れし」に焦点を当てることによって、両歌の関係性をさらに追究したい。

● 和歌における「見し」

和歌における「見し」という表現は、上一段動詞「見る」の連用形「見」に過去の助動詞「き」の連体形である「し」がついた形である。

「見し」は、過去の連体形の表現であり、意味は、「(昔)見た」(名詞が続く)、或いは「(昔)愛していた」(場合によって名詞が続く)となる。

和歌における「見し」と最も多く結ばれる名詞が、「人」を表す名詞であることは、意外な結果ではない。「見し」と「人」の組み合わせは450首以上の和歌に詠まれており、また『万葉集』や『新古今和歌集』の「見し」を詠んだ歌にも同傾向が見られ、前者はおよそ10首の用例、後者はおよそ7首の用例を有する。

調査結果より、和歌における「見し面影」という直接的なつながりを含んだ用例も数多く見られ、『新古今和歌集』の歌も含めて147首以上の用例をみることができる。

これに対し、和歌にみえる「見し」という表現は、『琉歌全集』等の琉歌には一切見られない。

● 琉歌における「^{ナリシ}馴れし」

琉歌における「^{ナリシ}馴れし」という表現は、和歌の「見し」と同様に、下二段動詞「なれる」の連用形の「なれ」に過去の助動詞「き」の連体形である「し」をついた形となっている。『沖縄古語大辞典』(1995)によると、「なれる」には三つの意味が当てられるが、その中で「慣れ親しむ」という意味は、和歌における「見し」とほぼ同様の意味となる。ただし、「^{ナリシ}馴れし」という形式は沖縄語では使用されない、あくまでも「歌語」である。沖縄語では、動詞の結びに基本的に「居り」、「有り」、「たり」等つき、助動詞「き」の連体形である「し」は一般の口語では一切使用しない。言い換えれば、「^{ナリシ}馴れたる面影」は口語の世界に、「^{ナリシ}馴れし面影」は歌の世界に属する表現である。

今回の研究の使用文献に見られる「^{ナリシ}馴れし」と「面影」という表現の組み合わせは24首(中には直接つながっていない歌も3首ある)に詠まれているが、「^{ナリシ}馴れし」がその外にどの名詞と結ばれるかは、以下の通りである。

<u>「馴れし」</u>	<u>「馴れし」と結ばれる名詞</u>	<u>歌数(延べ数)</u>
馴れし	親兄弟の面影	2
馴れし	面影	21
馴れし	故郷の面影	1
馴れし	故郷	6
<u>手に馴れし</u>	扇	7
馴れし	匂	3
<u>つれなさに馴れし</u>	身	1
<u>住み馴れし</u>	母のふところ	1
馴れし	い言葉	2
馴れし	言の葉／言葉	2
馴れし	思無蔵 (意味：恋人)	2
<u>染め馴れし</u>	かな (意味：かせ糸)	1
<u>住み馴れし</u>	おそば	2
馴れし	おそば	1
<u>手に馴れし</u>	花の下紐	1
<u>住み馴れし</u>	人	1
<u>住み馴れし</u>	宿	3
<u>住み馴れし</u>	城	1
<u>昔なれなれし</u>	肝	1
馴れし	手枕	1
<u>染め馴れし</u>	御縁	1
<u>染め馴れし</u>	花の姿	1

上記のデータより、琉歌における「馴れし」と最も数多く結ばれる名詞は、「面影」であることが分かる。

既述したように、3-3.で紹介した琉歌の「馴れし」および和歌の「見し」は関係を持つ表現のように思える。そのため、ここでは琉歌における「馴れし」と結ばれる名詞、および和歌における「見し」と結ばれる名詞の用例数を対照させ、紹介したい。データは以下の表にまとめてある。

なお、1番～3番の名詞は、琉歌の「馴れし」と最も多く結ばれる名詞であり、一方4番～6番の名詞は、「馴れし」を詠んだ琉歌の中で最も少なく見られるものである。また、括弧の数字に関しては、前者の数字は「馴れし」／「見し」と名詞と直接つながるものの用例数を示すものであり、後者の数字は、「馴れし」／「見

し」と結ばれる名詞の間に他の名詞も入っているため、直接つながるものではない用例数を示すものである。括弧の数字がない場合には、全てが直接つながるものの用例数である。

「馴れし」/「見し」と結ばれる名詞	琉歌における「馴れし」と下記の名詞の組み合わせ(延べ数)	和歌における「見し」と下記の名詞の組み合わせ(延べ数)
1) 面影	24 首 (21+3)	212 首 (147+65)
2) 故郷	7 首	13 首 (8+5)
3) 扇	7 首	0 首
4) 思無蔵/妹	2 首	21 首 ¹⁹
5) 身	1 首	2 首 (0+2)
6) 人	1 首	450 首以上

上記の表のデータを比較のために簡素化したものは以下の表の通りである。

「馴れし」/「見し」と結ばれる名詞	琉歌における「馴れし」と結ばれる名詞の中、相対的に	和歌における「見し」と結ばれる名詞の中、相対的に
1) 面影	多い	多い
2) 故郷	多い	少ない
3) 扇	多い	少ない
4) 思無蔵/妹	少ない	少なくはないが、多くもない
5) 身	少ない	少ない
6) 人	少ない	多い

上記の表から、「見し」を詠んだ和歌と「馴れし」を歌った琉歌における名詞に関しては、一致している用例数の割合は「面影」と「身」だけであることが分かる。さらに、両歌の中で割と数多く見られる例は、「面影」のみであることが明らかである。

ちなみに、琉歌における「馴れし」と二番目に多く結ばれる名詞として2)「故郷」や3)「扇」が見られ、琉歌の特徴的な表現であると言える。特に、3)「扇」

¹⁹ 和歌における「見し妹」は、ほとんど「逢ひ見し妹」という形で見られる

という表現は、琉歌にしか見られない「手に馴れし扇」という組み合わせを成している。琉歌は単なる「馴れし」だけではなく、「手に馴れし」等といった独特の組み合わせも用いている点も、琉歌の特異性の一つとして注目すべきである。

なお、和歌における「見し」や琉歌における「馴れし」という二つの表現は、オモロには一切見られないことが判明した。

上述のように、琉歌には「馴れし」、和歌には「見し」という単語が多く見られるが、琉歌には「見し」は見られない。以上のことを踏まえ、琉歌における「馴れし」という 3 音の表現は、和歌における「見し」という 2 音の表現の変形であり、琉歌の独特の表現であるとも考えられるが、最後に、「馴れし」が和歌においては見られるかどうかを確認しながら、この疑問を解明していきたい。

● 和歌における「馴れし」

和歌における「馴れし」と「面影」を調査した結果、この表現がつながっている組み合わせを詠んだ歌は 42 首ある。

これらの和歌における「馴れし」と「面影」がつながっている組み合わせに関しては、様々なパターンが見られるが、それらは大きく 2 つのグループに分けることができる。その 1 つは、「馴れし」+「名詞の」+「面影」という直接のつながりではないパターンである。もう 1 つには、「馴れし」+「面影」という直接つながるパターンがあり、それも「馴れし面影」という表現が同じ句内に見られるか否かによって更に 2 つのグループに分けられる。

当該の和歌では、「馴れし面影」と詠まれた歌が、18 首見られ、その歴代的な分布は、鎌倉時代に 15 首、室町時代に 3 首見られる。

● 「見し」と「馴れし」に関する結論

和歌の中で、「面影」に関係する「馴れし」の用例が数多く存することによって、琉歌における「馴れし面影」という表現については、おそらく和歌に学んだ表現であると推定できる。さらに、「馴れし」という表現は沖縄口語に存在せず、歌語としてのみ使用されることは、この語が和歌の影響の下にあることを推測させる。「馴れし面影」は、琉歌の創作的表現ではなく、和歌の表現をそのまま模倣したものであろうと考えられる。また、当該の表現は鎌倉時代と室町時代の和歌にのみ見られ、その用例が鎌倉時代に最も多いことから、琉歌はこの表現に関しておそらくその時代の和歌から影響を受けたと推察できるだろう。

これまでの結果をまとめて整理したものが、次の表である。

見し面影	
(直接的なつながりのみ)	
和歌 『新編国歌大観』	琉歌 『標音評釈琉歌全集』
147 首	0 首
和歌の「見し面影の」 (7 音句)	琉歌の「馴れし面影の」 (8 音句)
(類似している歌の例) ふじの山 たかねの煙 行きかへり <u>みし面影の</u> たたぬ日ぞなき	(類似している歌の例) 宵も暁も <u>馴れし面影の</u> 立たぬ日やないさめ 塩屋の煙

馴れし面影	
(直接的なつながりのみ)	
和歌 『新編国歌大観』	琉歌 『標音評釈琉歌全集』
鎌倉時代: 15 首	
室町時代: 3 首	
合計: 18 首	11 首
和歌の「馴れし面影の」 (7 音の表現 ²⁰)	琉歌の「馴れし面影の」 (8 音句)
(類似している歌の例) よそにても <u>朝夕なれし</u> <u>おもかげの</u> こよひはさらに めづらしきかな	(類似している歌の例) 忘らてやり言ちも 忘られめ朝夕 <u>馴れし面影の</u> 目の緒下がて

²⁰ 和歌の「馴れし面影」という 7 音の表現は、二つの句に分けて見られることもあれば、7 音の 1 句内に収まって見られることもある。

4. 「面影」を詠んだ和歌の改作琉歌

3.では、琉歌は「面影ぞ立つ」や「見し面影の 立たぬ日ぞなき」という表現を和歌から詠み込んだ可能性について指摘し、また、藤原為家によって詠まれた和歌の改作琉歌も1首紹介した。

『琉歌全集』に含まれた「面影」を詠んだ琉歌99首の中に、上述の改作琉歌1首以外にも和歌の改作琉歌が見られることが今回の調査で判明したため、その歌を以下に紹介したい。既述の為家の和歌の改作琉歌も含め、「面影」を詠み込んだ和歌の改作琉歌は計11首あり、99首中11%である。なお、それらの改作琉歌を『琉歌全集』の歌番号順に並べ、上述の為家の和歌の改作琉歌は④の歌としてここも列挙する。

① 和歌	琉歌
『沙弥蓮愉集』(256) (歌人：不明)	『琉歌全集』(38)、『古今琉歌集』(970) (歌人：玉城朝薫)
<u>おもかげを</u> ----->>> <u>面影よ残す</u> (ウムカジュ ヌクス)	
<u>のこして</u> みばや ----->>> 許田の玉川に (チュダヌ タマガワニ)	
女郎花 ----->>> なさけ手にくだる (ナサキ ティニ クダル)	
野沢の <u>水の</u> ----->>> <u>水の鏡</u> (ミズィヌ カガミ)	
<u>花のかがみに</u> ----->>> ----->>>	
	<u>現代語訳</u> ：許田の美しい井戸に立ち寄ってみると、昔情けのこもった手水をくんだという人の面影が、今でも水鏡に写って見えるようで、懐かしい。

この琉歌は他の改作琉歌と比較して、和歌との共通表現も4語のみが見られ、さらに、和歌と異なる内容も表している。この琉歌は、許田の手水と結ばれている沖縄の美しい恋の物語を歌っている。許田の手水は、昔から集落のはずれにあった樋川の有名な水で、その地域を訪れた旅人はその水の傍で休憩し、水を飲んでいて。ある侍も旅の途中で休み、その水を飲もうとしたときに集落の年頃の娘がその清水を手で汲んで侍に飲ませたことによって、二人の恋愛が始まる。その後侍は娘と結婚し、集落から連れて行ったという話しである。沖縄の独特の伝説であるため、この和歌の内容と異なることは当然であろう。

この琉歌を詠んだ玉城朝薫(1684-1734)は尚真王の三男の末裔で、琉球の歌や舞踊の分野が得意であったと知られている。中国からの冊封使を歓待する

ために設立された、踊奉行という役職に 1718 年に任命され、公式の場で披露される琉球舞踊の監督を行っていた。また、翌年に大和の芸能を参考にしつつ沖縄独特の芸能である「組踊」を創造した。「組踊」は、主に日本本土の狂言や能がアレンジされながら、沖縄独特の歌、セリフや舞踊という三つの点を組み合わせた芸能として知られている。中国から琉球王国を訪れた冊封使をもてなすための沖縄の独特の芸能であるが、そのベースは大和の芸能となっており、大和文化の影響を受けているものとなっている。玉城朝薫による「朝薫の五番」が最も有名とされているが、それ以外の作者による組踊（例えば、本章で言及している「花売りの縁」という組踊等）も今日まで愛され続けている。

このように大和の文化を積極的に受け入れ、影響を受けたと知られている玉城朝薫によって詠まれた上の琉歌も、和歌に何らかの影響を受けたことが推測できるだろう。歌の内容は和歌と異なりつつも、琉歌における上 1 句と結句の中には、和歌の上 2 句、下第 4 句や結句に含まれている表現がそのまま取り入れられていることが明らかである。玉城朝薫はこの和歌の冒頭と結句の表現を借り、沖縄の伝説を琉歌の中に取り入れ、琉歌を作ったと推定できる。一般の改作琉歌に見られる、和歌と一致する概念はこの琉歌の中にはないものの、和歌の表現の影響を強く受けた琉歌の 1 例としてここで取り上げたい。

なお、琉歌の元となったと考えられるこの和歌は、鎌倉時代成立の宇都宮影綱の家集である『沙弥蓮愉集』に掲載されている。宇都宮影綱は、為氏・為教らの従兄弟にあたり、特に、二条為世、京極為兼や冷泉為相らの御子左家歌人と活発に交流し、この家集の中にも、為氏・為世・為相・為兼の和歌も見られる。影綱自身も有名な歌人であり、続古今和歌集以下に 30 首の和歌を入集した。

玉城朝薫も上の家集の歌を琉歌の手本として参考にした可能性があり得ると考えられる。

②

次の琉歌は 8・8・8・8・8・6 音の長歌であり、それぞれ違う和歌 2 首から影響を受けたと推定できる。この長歌の琉歌における上の 4 句の表現に関しては、和歌 A の表現から影響され、また、同琉歌の下の 2 句については、和歌 B に影響されたことを推定できる。以下の図の通り、和歌 A と和歌 B それぞれの 2 首からの、琉歌への影響が矢印で表示されている。

和歌 A

『新明題和歌集』(3491)

(歌人：真教)

名残あれや

あかで別れし

倂は

など有明の

月にとどめて

琉歌

『琉歌全集』(148)

(歌人：読人しらず)

あかぬ別れ路の (アカヌ ワカリジヌ)

面影やのかぬ (ウムカジヤ ヌカヌ)

名残り有明の (ナグリ アリアキヌ)

月に打ち向ひ (ツイチニ ウチンカイ)

思事やあまた (ウムクトウヤ アマタ)

浜のまさご (ハマヌ マサゴ)

和歌 B

『大和物語』(185)

(歌人：閑院の大君)

むかしより

おもふ心は

ありそうみの

はまのまさごは

かずもしられず

現代語訳：飽きずに別れた時の面影が立ち退かず、その名残りの姿が有明の月にも写っている。色んな思いが湧き出て浜の真砂のように尽きない。

まず、琉歌の上の4句を観察すると、江戸時代の『新明題和歌集』の和歌を改作した歌だと考えられる。両歌とも「名残」「あかで別れし／あかぬ別れ路の」「面影」「有明」「月」という6つの共通表現を含んでおり、同様の内容を表しているからである。

詳しく分析すれば、第一に、和歌における「あかで別れし」という7音句は、琉歌の中で「あかで別れ路の」という8音句として変形されていることが分かる。つまり、この和歌に詠まれている「面影」と接続する動詞「あかで別る」+「し」(過去の助動詞「き」の連体形)との呼応を通じて表現された「飽かずに別れてしまった面影」という意味は、琉歌の中で同様の意味として保たれているものの、琉歌は8音句を形成するために、やや異なる表現を用いて同様の意味を表していることが分かる。それは、琉歌に詠まれている「面影」と名詞「あかぬ別れ路の」との接続である。和歌の動詞「別る」は、琉歌において「路」と接続し、名詞「別れ路」となり、また和歌の「あかで別れし」という動詞「飽く」は、動詞「別る」と接続しているため、和歌の中で打消の接続助詞「で」との呼応によって「飽かないで別れた」という意味を有する表現として見られるが、琉歌における動詞「飽く」は、名詞「別れ路」とついているため、打消助動詞「ず」の連体形である「ぬ」と接続し、「あかぬ」という和歌と同様の打消の意味を表す連体形で読み込まれている。また、琉歌における「あかぬ別れ路」という名詞は、「面影」とついているため、句の最

後に接続助詞「の」が用いられつつ、「あかぬ別れ路の (a・ka・nu・wa・ka・re・ji・nu)」という完璧な8音句が形成されていることが分かる。意味も和歌と同様のものとなっていると言える。

また、第二には、両歌共に「名残」という表現も共通して見られる。その表現の、歌の中の位置は、琉歌と和歌とそれぞれ違う。しかし、表している意味はここも同じである。和歌における「名残」は第1句「名残あれや」のように詠まれており、「名残」が動詞「あり」と接続していることが分かる。「名残あれや」は「名残あればや」の意で、名詞「名残」は動詞「あり」の已然形+接続助詞「ば」+疑問係助詞「や」と呼応することで、「名残があるからだろうか」という意味を成している。また、琉歌も「名残」を動詞「あり」が持っている意味とついていることが分かる。琉歌における「名残」は、動詞そのものではないが、「ある」と「有明」という二つの意味を含んだ掛詞「有明の月」という表現と直接に接続していることが明らかである。このように、琉歌も和歌と同様に「名残がある」という根本的な意味を表していることが判明する。

さらに、三つ目の共通点として挙げられるのは、「面影が残る」という両歌の概念である。和歌においては、その概念は「俤は など有明の 月にとどめて」のように表され、「面影」は動詞「とどめる」と接続することで、月に止まっている、言い換えれば月に残っていると理解しても良いだろう。琉歌も和歌と同様に「有明の月に」という表現を用いている。しかし、今回の琉歌は4句から成る短歌ではなく、長歌であるため、和歌と異なり「有明の月に (面影は) とどめて」のように閉幕するのではなく、「有明の月に」という句から歌をさらに展開していることが分かる。したがって、琉歌は「有明の月に」面影をとどめることはせず、「有明の月に」「向かって、さらに色々の思い事をする」という内容を詠み、それにふさわしい第5句と第6句(結句)という、さらなる2句を足す。しかし、琉歌も和歌と同じく「面影が残る」概念は保っている。琉歌は、「有明の月に」が「とどめる」或いは「残る」という意味を持つ動詞とついているもの、「面影やのかぬ」という別の句を設けているからである。『沖縄古語大辞典』(1995)によると、「のく(除く・退く)」の意味は、「面影が消える」となっており、動詞「のく」と打消助動詞「ず」の連体形である「ぬ」と呼応するため、「面影が消えない」要するに「面影が残る」と、和歌と同様の意味を詠んでいることが明らかである。

このように、上記の琉歌の前半(上4句)は『新明題和歌集』の和歌(和歌Aと記す)を改作した可能性について指摘できるだろう。また、同琉歌の後半(下2句)についても別の和歌からの影響があった可能性についてこれから述べたい。その和歌を和歌Bとして記した。

和歌Bは、平安時代の『大和物語』という歌物語に最初に見られる。この和歌からは「あかぬ別れ路の～」の琉歌は2句のみ詠み込んだのだが、「思うことは浜

の真砂のようである」という和歌の概念もそのまま琉歌の中で伝わっている。この2句についても琉歌の形式に合わせるために和歌が改作されたことが分かる。和歌における「おもふ心は」という7音句は、琉歌においてそのまま詠み込まれると、7音句になるため、和歌の3音「心」を琉歌の中で2音「事」に置き換え、「思事（u・mu・ku・tu）」という4音の表現を作り、また、その表現に主語を表す（日本語の「は」に当たる）係助詞「や」＋「あまた」という4音の表現を接続し、8音句を形成することが分かる。なお、「あまた（余多）」という語は『沖縄古語大辞典』（1995）によれば、「たくさん。数多く」という意を有し、上の琉歌の中で「浜の真砂」にふさわしい表現として、その結句と接続していることが注目できる。

上述のように、この和歌は『大和物語』に見られる歌であるが、当時大変有名な歌であったため、様々な歌集にも含まれていることが今回の調査で分かった。

- 『秋風和歌集』（鎌倉時代）
- 『続古今和歌集』（鎌倉時代の勅撰和歌集）
- 『歌枕名寄』（鎌倉時代）

また、この和歌に非常に似通った和歌も他に1首見られ、その和歌も上の和歌と同様に多様な歌集や作品にも含まれている。この2首目の和歌を和歌B'と名付け、和歌Bと共に以下の通り示す。

- **和歌B** 『大和物語』（185）[歌人：閑院の大君]
歌 むかしより おもふ心は ありそうみの はまのまさごは かずもし
られず
- **和歌B'** 『宇津保物語』（373）[歌人：たねまつが北方]
歌 君がため おもふ心は ありそうみの はまのまさごに おとらざり
けり

両歌を照らし合わせてみれば、網掛けを付けた上1句と結句を除き、真ん中の3句は両歌共に一致していることが分かる。したがって、琉歌が取り入れたと思われる「おもふ心は」と「浜のまさご」という重要な2句（上の和歌において下線で強調した2句）は、助詞「は」と「に」という若干の相違点を除けば、和歌Bと和歌B'共に同じように詠まれている。この和歌B'も平安時代成立の『宇津保物語』以外にも多様な作品に見られている。

- 『落窪物語』（平安時代成立）
- 『風葉和歌集』（鎌倉時代成立）

この琉歌は、下 2 句に関して、和歌 B 若しくは和歌 B' のどちらかに影響を受けて改作されたと推定できるだろう。この琉歌は長歌であるため、上記に示したように、和歌 A と和歌 B (或いは和歌 B') のそれぞれ違う 2 首の和歌の表現を取り入れ作られた可能性はあり得るだろう。

③

和歌

『新明題和歌集』(1178)

[余花]

(歌人：資廉)

夏山の

青葉をわけて

面影の

あかぬ心を

花に咲くらん

琉歌

『琉歌全集』(245)、

『琉歌百控・覧節琉』(506)

(歌人：読人しらず)

日に夏山の (フィビニ ナツイヤマヌ)

青葉なるまでも (アヲウバ ナルマディン)

花の面影や (ハナヌ ウムカジャ)

忘れぐれしや (ワスイリ グリシャ)

現代語訳：日に日に夏山の木が青葉になっても、春の花の面影は忘れ難い。

この琉歌と和歌は、「夏山の」「青葉」「面影」「花」という共通表現 4 語の外に、「面影」と呼応して似通った意味を表す表現「飽かぬ」や「忘れぐれしや」も含み、両歌の内容が近いものであると言える。

上記の現代語訳のように、琉歌は「夏山が青葉になっても花の面影は忘れ難い」の意となる。琉歌の第 2 句「青葉なるまでも」における「までも」という副助詞は、強調する機能を持ち、「～さえ」という意味を持つ語である。したがって、上記の第 2 句は「青葉になってさえ→青葉になっても」のように訳することができる。このように、琉歌における「夏山が青葉になっても、(春の) 花の面影は忘れられない」という内容は、和歌における「夏山の青葉をわけて、(春の) 面影に飽かない心が花に咲いているだろう」という内容と似通っていることが判明する。両歌共に、夏山がすでに青葉になっている同様の場面が現れ、その夏山が青葉になっても春の面影が忘れられなかったり、面影に飽きない気持ちが残っているのである。

一方、両歌に「面影」が見られるが、和歌においては「花に咲いている」ものであるのに対し、琉歌では「花の面影」として詠み込まれている。一方、琉歌の内容から判断すれば、春の花はすでに全て消えてしまったことが推定でき、その「花の面影」のみが残り、忘れられないものとなっているものの、和歌における面影は花に咲いているため、花はまだ残っているだろう、と推定できる

と考えられる。この点が両歌の相違点となっている。しかし、和歌の詞書を見れば、「余花」、即ち春に遅れて咲く花であり、その数も春の花盛りと比べれば少ないと推定できるため、和歌における「面影」も過ぎ去った本番の春の花盛りを思い出させる面影となる点は、琉歌の「面影」の本質と類似していると言えるだろう。さらに、その面影の「飽かぬ心」は、琉歌の面影の「忘れぐれしや」という表現の意味とも一致している。

上記を踏まえれば、上の琉歌は、江戸時代成立の『新明題和歌集』の和歌を改作したものだと推定できるだろう。

④

次の為家の和歌の改作琉歌について、本章の 3-3. で詳しく説明しているため、ここではその簡素化された図のみを載せておく。

『為家集』(1304) [歌人：藤原為家]

ふじの山 たかねの煙 行きかへり みし面影の たたぬ日ぞなき

宵も暁も 馴れし面影の 立たぬ日やないさめ 塩塵の煙

『琉歌全集』(388) [歌人：与那原親方良矩]

⑤

和歌

『続門葉和歌集』(535)

(歌人：前大僧正聖兼)

おもかげの

身にそひこずは

おのづから

人を忘るる

ひまやあらまし

琉歌

『琉歌全集』(857)、

『古今琉歌集』(359)

(歌人：本部按司朝救)

面影の だいにす (ウムカジヌ デンスイ)

立たなおき呉れば (タタナ ウチクェリバ)

忘れゆる暇も (ワスイリユル フィマン)

あゆらやすが (アユラ ヤスイガ)

現代語訳：面影は目の前に立たなければ忘れる暇もあるはずだが、ずっと立っているので、忘れられない。

この琉歌と和歌は「面影」と呼応する動詞として琉歌の「立つ」と和歌の「身に添ふ」のように、お互いに異なる動詞を用いるにも関わらず、両歌の影響関係が推定できるだろう。両歌には共通表現が 4 語見られるだけでなく、歌の流

れや内容も両歌共に同様のものとなっている。さらに、両歌の下 2 句については、琉歌の「忘れゆる暇も あゆらやすが」を現代語に訳せば、和歌における「人を忘るる 暇やあらまし」と一致していることが分かる。これらの下 2 句を詳しく見れば、「忘る」＋「暇」＋「有り」という表現が両歌共に共通していることが明らかになる。のみならず、同様の内容を表す文法も非常に類似していると言える。和歌における「ずは～まし」に対して琉歌は「ば～すが」を用いている。『日本国語大辞典』（2000－2002）によると、「そひこずは」に見られる「ずは」は、打消の助動詞「ず」の連用形に係助詞「は」の付いたものであり、順接の仮定条件を表す。その意味は、「...なくては。...ないならば」となっている。また、同辞典によれば、「まし」という推量の助動詞は、現実でない事態を想像し、それが現実でないことを惜しむ意を表す語である。「もし～ならば、～だろうに」というふうに現代語に訳すことができる。したがって、「面影の 身にそひこずは～」の和歌は、「もし面影は身に添って来ないならば、(愛しい) 人を忘れる暇もあるだろうに」のように、面影を忘れたいのに、中々忘れられないという辛い現実が想像と反することを嘆いている。琉歌も同様に、『沖縄古語大辞典』に定義される仮定条件を表す接続助詞「ば」と、前件の内容を受けてそれと違うことを述べる接続助詞「すが」の使用によって、「面影が立たないでくれれば、(その愛しい人を) 忘れる暇もあつたけれども」という内容を歌っている。和歌も琉歌も面影がずっと立っており、忘れる暇はないという辛い現実を嘆く。

このように両歌を分析してみれば、琉歌はこの和歌を改作して作られた可能性が高いと結論付けられる。醍醐寺報恩院の二人の兄、吠若麿・嘉宝麿の撰による 1305 年成立の私撰集『続門葉和歌集』はこの 535 番歌のみならず、藤原為家系列の歌人である京極為兼と冷泉為相への贈答歌も含んでいる。この鎌倉時代成立の私撰和歌集の和歌は、琉歌の元となった可能性は十分あり得るだろう。

最後に、この和歌に似通っている和歌をもう 1 首参考までに紹介したい。1303 年成立の勅撰和歌集『新後撰和歌集』の 1133 番歌である。この和歌は、『続門葉和歌集』の 535 番歌より 2 年も早く発表された歌であり、両首には共通表現がいくつか含まれているため、『続門葉和歌集』の 535 番歌は、『新後撰和歌集』の 1133 番歌よりも後にできたと思われる。しかし、1133 番歌は、535 番歌と比べて、琉歌との共通表現が少ないため、琉歌はおそらくこの『新後撰和歌集』の 1133 番歌ではなく、『続門葉和歌集』の 535 番歌を学び改作したと推定できよう。『新後撰和歌集』の 1133 番歌は以下の通りである。下線を引いた部分は、「ば」以外に) 琉歌との共通表現ではなく、『続門葉和歌集』の 535 番歌との共通表現である。535 番歌にも見られる「身に添ふ」と「人を忘る」という表現を含み、似通っているのだが、琉歌と 535 番歌に見られる「忘るる暇」という

表現は含まれておらず、琉歌とは少し距離があることが分かる。

●『新後撰和歌集』（1133）〔歌人：藤原宗秀〕

歌 おもかげの うき身にそはぬ 中ならば われもや人を わすれはてまし

⑥

和歌

『草根集』（7398）

（歌人：正徹）

旅の空

行くをはるけき

恋ぢにて

夜夜の枕に

うすきおもかげ

琉歌

『琉歌全集』（1137）、

『古今琉歌集』（309）

（歌人：義村王子朝宣）

夜夜に手枕の

（ユユニ テイマクラヌ）

なれし面影や

（ナリシ ウムカジャ）

誰がつれてくいたが

（タガ ツイリティクキタガ）

旅の空に

（タビヌ スラニ）

現代語訳：毎夜毎夜に、手枕を交わしなれた妻の面影を夢に見るが、一体この面影を旅の空まで誰が連れてきてくれたのであろうか。

この琉歌は、「旅の空」「夜夜」「枕」「面影」という共通表現のみならず、歌の趣旨も和歌と非常に似ており、この和歌の改作琉歌だと思われる。和歌における第2句と第3句「行くをはるけき 恋ぢにて」および琉歌における第3句「誰がつれてくいたが」はお互いに異なる内容を歌っているものの、「夜夜に交わした枕の面影がずっと旅の空まで見える」という趣旨は両歌共に同じであることが分かる。

この琉歌は、和歌における「旅の空」という5音句に1音の助詞「に」をつけ、琉歌に相応しい6音の結句「旅の空に」を完成させた。そのため、和歌の順番を逆にしなければならなかったため、和歌の第1句を琉歌の結句に、また、和歌の下2句を琉歌の上2句に移動させたことが注目される。その際、和歌の7・7音句を8・8音句に変形しなければならなかったため、7音句「夜夜の枕に」に1音の表現「手」を入れ、「夜夜に手枕の」という8音句を作り、また、7音句「うすきおもかげ」に同様に1音の係助詞「や」を入れつつ「馴れし面影や」という8音句を完成させる。琉歌におけるこの第2句の中には、形容詞「うすき」の代わりに琉歌に好まれる「馴れし」という動詞「馴れる」の連用形「馴れ」＋過去助動詞「き」の連体形「し」から成る歌語が用いられており、「うす

き」という若干弱めの印象を与える和歌の表現の代わりに、温かい想いが込められたこの表現は琉歌らしい強い気持ちを伝えていると言える。さらに、第 3 句「誰がつれてくいたが」という和歌には見られない表現によってこの歌のオリジナリティーを増している。

この和歌は『草根集』という室町時代の歌僧である正徹によって編纂された私家集に含まれている歌である。歌の世界で評価を受けたかった若い歌人が、中世文学の最も重要な歌人と考えられていた藤原定家の教えを受け継いだ歌人から詠歌を習う習慣は 13 世紀から始まり、正徹も定家系列の歌人である冷泉家の冷泉為尹（為相の孫）と、歌人としても名高い將軍の今川了俊から稽古を受けた（Carter 1997, p.16-17）。この琉歌は、正徹の和歌が琉歌にも影響を及ぼしたと言える一例であろう。

⑦

和歌

『鳥の迹』(782)
 (歌人：田村主殿宗辰)

琉歌

『琉歌全集』(1289)、
 『琉歌百控・覧節琉』(520)
 (歌人：惣慶親雲上忠義)

うつし絵の	-----▶	絵に写ち	おけば	(キニウツチ ウキバ)
その俤よ	-----▶	面影や	あすが	(ウムカジャ アスイガ)
物いはで	-----▶	物言ひ	楽しみの	(ムヌイ タヌシミヌ)
つらきながらも	-----▶	ないらぬ	つらさ	(ネラヌ ツィラサ)

うちもおかれず

現代語訳：人の姿を絵に写しておけば、なるほど面影はさながらその人を見るようであるが、物を言ったり話をしたりする楽しみのないのが侘びしい。

この和歌とその改作琉歌における共通表現が 5 語あるが、それらの共通表現は両歌の中で同じ意味を表しつつも、アレンジは異なっていることが分かる。まず、和歌の 5 音句「うつし絵の」における「うつし」は「絵」と呼応しながら「うつし絵」という名詞として見られる。それに対し、琉歌の表現は和歌の表現と同様の意味を持つ「写ち」という、「絵」と呼応する語を用い、名詞ではなく、動詞の連用形として見られる。さらに、琉歌の 8 音調を保つために、5 音の「絵に写ち」に「おけば」という 3 音の動詞をつけ、「絵に写ちおけば」という 8 音句が完成されている。琉歌の第 1 句は和歌の第 1 句における表現の文法および音数律の有様が異なっても、和歌と同様の意味が保たれていることが

分かる。同じように、次の句内にも似たような現象が見られる。琉歌は、和歌における7音の第2句「その面影よ」の中から4音の「面影」を切り取り、主語を表す係助詞「や」＋動詞「有り」の準連体形「あ」＋反語を表す接続助詞「すが」、即ち「やあすが」という4音の表現を後ろにつけ、「面影やあすが（意：面影はあるけれども）」という8音句を作る。また、和歌の次の句（第3句）「物いはで」は、琉歌の中にも「名詞」＋「動詞」という、和歌と同様のパターンで「物言ひ」として取り入れられていることが分かる。和歌における動詞「いはで」は打消の形で見られ、琉歌には「言ひ」という肯定形で見られるものの、琉歌はその代わりに「楽しみのないらぬ（意：楽しみのない）」という打消の表現を「言ひ」に接続することによって、和歌の「物いはで（意：物を言わないで）」という句を似通った意味を持つ「物言ひ楽しみのないらぬ（意：物を言ったりする楽しみがない）」という2句に渡る表現に変更していることが注目できる。また、そのような面影が「物を言わない」のはつらい、と詠んでいる和歌を真似て、琉歌は、そのような面影が「物を言ったりする楽しみのない」つらさだよ、と歌っている。このように分析してみれば、上の琉歌は、「おけば」「やあすが」「楽しみの」「ないらぬ」といった表現を用いることによって句ごとに和歌と異なるニュアンスを加えつつ、上の和歌を見事に改作していると言える。

この和歌は、江戸時代1702年に成立した戸田茂睡撰の和歌集に含まれている。

⑧

和歌

『続古今和歌集』(1414)

[返し]

(歌人：光明峰寺入道前摂政左大臣)

かすみにし

けふのつきひを

へだてても

猶おもかげの

たちぞはなれぬ

琉歌

『琉歌全集』(1828)、

『古今琉歌集』(652)

(歌人：池城親雲上)

幾里へぢやめても (イクリ フィジャミティン)

なれし面影や (ナリシ ウムカジャ)

おへも離れらぬ (ウフィン ハナリラヌ)

袖にすがて (スディニ スイガティ)

現代語訳：幾里隔てても、恋しい面影は少しも離れない。いつも袖にすがっている。

この琉歌も和歌も「何か(名詞)を隔てても面影が離れられない」という同様のパターンを取り上げているが、それぞれの歌の詳しい内容は若干異なる特徴も見られる。

まず、この和歌は、その詞書に「返し」と記されており、以下の和歌の返歌であることが分かる。(歌の表記は、中塚 (1928)、p.590 による)。

●『続古今和歌集』(1413) [後京極摂政のことを思ひいでて、かの遠忌の日、光明峰寺入道摂政于時左大将のもとに遣はしける] (歌人：前中納言定家)
歌 後れじと 慕ひし月日 うきながら 今日もつれなく 廻りあひつつ

この 1413 番歌は藤原定家によって詠まれた歌であり、詞書を見れば、後京極摂政の遠忌、即ち 3 年以上の正忌の際に詠まれた歌であることがわかる。また、その返歌として上に紹介した 1414 番歌も後京極摂政の遠忌を追悼し、中塚 (1928) の校注によれば、この和歌における第 1 句「霞みにし」は、「火葬の煙となったことを云ふ (p.590)」のである。これらの 1413 番歌と 1414 番歌は『続古今和歌集』のその部立の名称のとおり、哀傷歌となっている。

一方、1414 番歌の改作であると考えられる琉歌は、同様に悲しい内容を歌いつつも、哀傷歌ではなく、恋の歌と解釈できる。なぜならば、悲しい出来事(他界)から経過した時間的な空間を表す和歌における「月日」の代わりに、琉歌は隔てる対象としてあくまでも物理的な距離を表す「幾里」という表現を用いているからである。言い換えれば、この和歌は、他界から長い時間が経過しても、その「月日」を隔てても、(亡くなった人の)面影が離れられない内容を追悼しているのに対し、琉歌は、遠い距離である「幾里」を隔てても(恋人の)面影が離れられないことを歌っている。

内容に関する若干の相違点が見られても、表現の上ではこの琉歌は 1414 番歌から影響を受け、この和歌を改作した歌であると言えよう。その際、和歌の「けふのつきひを へだてても」という 7・5 音句を 1 句内に収めて、「幾里へぢやめても」という 8 音句を作り、また、和歌の「猶おもかげの」という 7 音句に 1 音を足すために、「猶」という 2 音表現の代わりに「なれし」という 3 音の表現を用い、「なれし面影や」という 8 音句を完成させた。さらに、和歌の 7 音句「たちぞはなれぬ」に見られる「はなれぬ」という表現は和歌では 4 音であるが、沖縄語の文法のルールでは「はなれらぬ」のように 5 音となっているため、和歌における「たちぞ」という 3 音と同様に琉歌も 3 音の「おへも」を用い、「おへもはなれらぬ」という 8 音句が出来上がることが分かる。

なお、この 1414 番歌は、藤原為家らによって編纂された鎌倉時代の勅撰和歌集『続古今和歌集』に含まれているほか、同時代の次の歌集にも見られる。

- 『拾遺愚草』(鎌倉時代、定家の自撰家集)
- 『秋風和歌集』(鎌倉時代)

また、この和歌に非常に似通った和歌は他 1 首見られ、この 1414 番歌に影響を受けて作られたことを推定できよう。以下のとおりである。

●『鈴屋集』(1104) [逢不遇恋] (作者：本居宣長詠)

歌 たちかへり つらき月日を へだてても 見し面影ぞ 身をも離れぬ

この和歌は、江戸末期の 1803 年に刊行された本居宣長の家集に含まれている歌である。この和歌は恋歌と解釈される特徴が、琉歌と一致している。さらに、『続古今和歌集』の 1414 番歌と違って、第 4 句は「猶おもかげの」ではなく、「見し面影ぞ」となっており、上述したように、「見し」が「馴れし」に置き換えられた琉歌も見られる。

この和歌も琉歌の元になった可能性が考えられるものの、それを断定する前に池城親雲上の生没について調べる必要がある。池城親雲上は、首里王府の階級の名称である「親雲上 (ペーチン)」以外に詳細な情報がなく、その他の琉歌を何首か詠んだ池城安倚 (1669-1710) と同一人物であるかどうか確実ではないものの、『沖縄大百科事典・上巻』(1983) などを確認すれば、池城という名字を名乗った歴史人物の中から池城安倚以外に歌人が見られないので、池城親雲上と池城安倚は同一人物であると推定できよう。したがって、1803 年のおよそ百年前に生きていた池城安倚は、上の本居宣長の和歌を学んだことはできなかったと結論付けられる。上記を踏まえれば、上の琉歌へ改作された可能性のある和歌は『続古今和歌集』の 1414 番の和歌のみである。

⑨

次の琉歌は、それぞれ違う 2 首の和歌に影響を受けた可能性について指摘したい。そのため、それぞれの和歌から受けた影響を示す図は、1 首目の和歌の影響の場合に図 1、また 2 首目の和歌の影響の場合に図 2 として以下の通り表示する。

(図 1)

和歌

『新明題和歌集』(956)

[夕落花]

(歌人：道晃法親王)

散ると見て

あるべき花の

俤を

あやな夕ある

雲に残して

琉歌

『琉歌全集』(1865)、

『古今琉歌集』(676)

(歌人：読人知らず)

惜しむ別れ路の (ヲウシム ワカリジヌ)

花の面影や (ハナヌ ウムカジャ)

いつも明け雲の (イツイン アキグムヌ)

空に残て (スラニ ヌクティ)

現代語訳：別れ路で惜しい別れした花の美しい面影は、いつも明け雲の空を見る時、思い出し、恋しくなる。

上記の図 1 で示されている和歌は、江戸時代成立の『新明題和歌集』の歌である。その右側に記されている琉歌と共通表現を 4 語も含み、歌の流れも同様であることが分かる。しかし、この和歌の詞書を見れば、「夕落花」とあり、散ってしまう「花の面影」を「雲に残して」という具体的な内容が詠まれていることが明らかである。それに対し、琉歌は、その第 1 句「惜しむ別れ路の」のように、花と別れる場面を描いている。琉歌に描かれている「花」は散ってしまった可能性もあり得るが、「別れ路」という表現は、「花」のように美しい女性との別れを示唆することも可能であろう。これは、琉歌が加えた、和歌と異なるニュアンスとなっている。

両歌の表現を比較すれば、和歌の 2 句に渡って見られる「花の俤」という表現は琉歌の中で 1 句「花の面影や」として見られる。琉歌の句は 8 音調を保つ必要があるため、7 音の「花の面影」の最後に接続助詞「や」がつき、8 音句が完成される。また、和歌における結句「雲に残して」は、琉歌の中で分解され、「いつも明け雲の 空に残て」という 8・6 音の 2 句として見られる。

この琉歌は「散ると見て～」の和歌を改作して作られた可能性があるだろう。

さらに、この琉歌に似通っている和歌は、もう 1 首見られる。以下の図 2 の通りである。

(図2)

和歌

『藤川五百首鈔』(70)

(歌人：三条西実隆)

横雲の

峰にぞ残る

梢より

わかる庭の

花のおもかげ

琉歌

『琉歌全集』(1865)、

『古今琉歌集』(676)

(歌人：読人知らず)

惜しむ別れ路の (ヲウシム ワカリジヌ)

花の面影や (ハナヌ ウムカジャ)

いつも明け雲の (イツイン アキグムヌ)

空に残て (スラニ ヌクティ)

図2の和歌と琉歌は、図1の和歌より共通表現が1語(「わかる／別れ路」)多く、両歌の内容は「お別れする花」を詠んでいることが明らかとなる。しかし、図1の歌と違って、図2の両歌における順番は逆となっている。和歌の中ではまず「雲に残る」場面が詠まれており、その次に「別れる花の面影」が現れる。一方、琉歌は「別れた花の面影」は「雲に残っている」という順番で歌を展開していく。

順番が逆であっても、図2の和歌が琉歌へ改作された可能性が高いと推定できるだろう。両歌の共通表現が5語まで見られ、「別れる」という表現も両歌共に一致している。さらに、和歌の「横雲の 峰にぞ残る」という第1と第2句は、琉歌において「いつも明け雲の 空に残て」という第3句と結句に改作されていることが分かる。

和歌の中では琉歌の独自表現「明け雲」は存在しないのと同様に、琉歌においては和歌によく詠まれる「横雲」は見られない。しかし、これらの2つの表現の意味を確認すれば、同様の意味を持つ語であることが明らかとなる。『日本国語大辞典』(2000-2002)によると、「横雲(よこぐも)」は、「横にたなびく雲。多く明け方、東の空にたなびく雲についていう。たな雲」のように定義されている。また、『沖縄古語大辞典』(1995)では、「明け雲(あけぐも/発音：アキグム)」の意味は「夜明けの雲。暁に照り輝く美しい雲」のようになっている。要するに、両歌のそれぞれに詠み込まれている「横雲」も「明け雲」も明け方に見られる雲のことをいう。したがって、和歌の「横雲」は琉歌の中で「明け雲」に置き換えられている可能性があると言える。また、それらの表現が含まれている上述の2句を詳しく分析すれば、和歌の5音句「横雲の」は、琉歌において同じ5音の「明け雲の」に置き換えられ、さらに、8音句を完成するために、琉歌によく見られる3音の「いつも」が接続され、「いつも明け雲の」という8音句が作られる。また、和歌の7音句「峰にぞ残る」は琉歌において6

音句「空に残て」として見られるのだが、名詞＋「に」＋動詞「残る」という同様のパターンが両歌共に一致していることが判明する。

上記を踏まえれば、この図2の和歌も1865番の琉歌へ改作された可能性があるだろうと考えられる。上記の『藤川五百首鈔』という歌集は、室町末期（1500年頃）に成立されたと推定されている。『国歌大観・第4巻』（1986）によると、「藤川五百首鈔は、藤原定家の藤川百首に加注したものに、同題で詠んだ藤原為家・藤原為定・阿仏尼・三条西実隆の百首を添えて編纂された定数歌である（p.721）」歌集となっている。即ち、藤原定家や為家、定家と深い関係を持った阿仏尼の歌も100首ずつ見られる歌集である。琉歌の歌人もその歌集を習った可能性があるだろう。また、上記の歌は、『藤川五百首鈔』以外に、同じ室町時代成立の三条西実隆の私家集『雪玉集』や江戸時代成立の『類題和歌集』にも含まれている。

⑩

次の琉歌もそれぞれ二つの異なる歌集に含まれている和歌に倣って作られた可能性があるだろう。そのため、ここで琉歌と対比したそれぞれの和歌1首ずつを図1と図2で紹介しよう。

(図1)

和歌

『新後撰和歌集』(572)
(歌人：普光園入道前関白左大臣)

宮こにて
見じ面影ぞ
残りける
草のまくらの
ありあけの月

琉歌

『琉歌全集』(2055)、
『古今琉歌集』(366)
(歌人：本部按司朝救)

共に眺めたる (トウムニ ナガミタル)
夜半の面影や (ユワヌ ウムカジャ)
いつも有明の (イツィン アリアキヌ)
月に残て (ツイチニ ヌクティ)

現代語訳：恋人の面影は、共に眺めた夜半の有明の月に残っており、いつも有明の月を見る度に思い出すのである。

この琉歌へ改作された可能性のある和歌として、第一に、上の『新後撰和歌集』の和歌が考えられる。鎌倉時代成立の勅撰和歌集『新後撰和歌集』は、二条為世によって編纂され、俊成・定家・為家の歌も多く含む。琉歌人もその歌集を学んだ可能性があるだろう。

この琉歌は、和歌における「宮こにて 見し面影ぞ」という 5・7 音の 2 句を「共に眺めたる 夜半の面影や」という 8・8 音の 2 句に変形しつつ、和歌の「都で見た面影」という内容を若干変更し、「一緒に眺めた夜の面影」という内容に書き換えていると言える。琉歌は、視覚動詞を保ちながらも、和歌の「見る」という動詞を「眺める」という動詞に変え、また、和歌でよく見られる「見し」における過去助動詞「き」の連体形「し」の代わりに、特に沖縄語でよく使われる過去助動詞「たり」の連体形「たる」を用いることによって和歌と同様に過去を表わしていることが分かる。また、琉歌の下句は和歌の第 3 句と結句と同じように「面影が有明の月に残る」場面を歌っている。

この琉歌を詠んだ歌人本部按司朝救（1741－1814）は、この和歌を改作した可能性が高いと考えられるが、次の和歌を改作したことも、内容の方面からのみならず、時代の観点からでも可能であろう。その和歌は以下の図 2 の通りである。

(図 2)

和歌

『新明題和歌集』(3724)

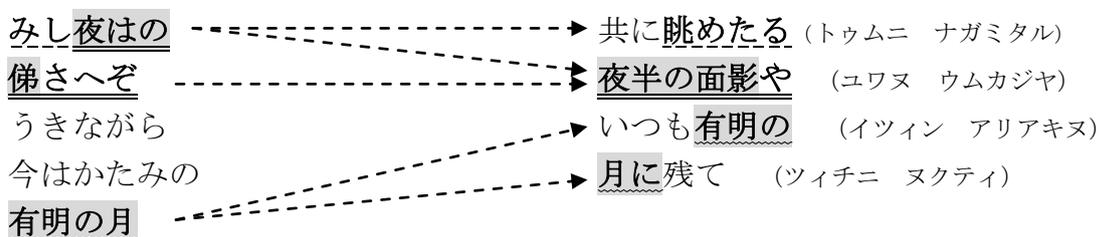
(歌人：通茂)

琉歌

『琉歌全集』(2055)、

『古今琉歌集』(366)

(歌人：本部按司朝救)



この図 2 の和歌は、図 1 の和歌と比べて、「夜はの」という表現を含んでいることで、琉歌と一致している。一方、図 1 の和歌と琉歌に共通して見られる動詞「残る」はこの図 2 の和歌には見られない。したがって、この図 2 の和歌と琉歌の共通表現も図 1 の和歌の場合と同様に、「夜半の」「面影」「有明の」「月」の 4 語となっている。さらに、図 1 の和歌と同じように、この和歌も「見し」という表現を詠み、琉歌の「眺めたる」に類似している。

この和歌の上 2 句は琉歌の上 2 句と一致しているが、その区切りはそれぞれの歌において違う箇所になっていることが判明する。まず、和歌における第 1 句の最初の 2 音の「見し」という、過去を表わす動詞は、琉歌においては動詞「眺める」の過去形「眺め」+「たる」に変形され、さらに「共に」という表現を加えることによって修飾され、「共に眺めたる」という 8 音の 1 句まで伸び

る。また、和歌の第 1 句の残りの部分「夜はの」は琉歌においては、第 2 句の最初の部分に持ち越され、和歌の第 2 句の続きの部分「俤」も接続される。このようにできた「夜半の面影」という 7 音の表現には、琉歌の形式に合わせるために、接続助詞「や」をつけ、「夜半の面影や」という 8 音句が完成させたとと言える。

琉歌は上述のように、この江戸時代（1710 年）成立の『新明題和歌集』の和歌の句を分解して、改作した可能性も推定できるだろう。

⑪

次の琉歌に関しても、その元になったと考えられる和歌としてそれぞれ違う 3 首を挙げるができる。それらの 3 首を図 1、図 2 や図 3 として 1 首ずつ提示する。

(図 1)

和歌

『玉葉和歌集』(1597)
 (歌人：後二条院御製)

恋しさの
ねてやわする
と思へども
またなごりそふ
夢の面かけ

琉歌

『琉歌全集』(2143)
 (歌人：小橋川朝昇)

まどろめばおへも (マドウルミバ ウフィン)
忘れゆらとめば (ワスイリユラ トウミバ)
またも面影の (マタン ウムカジヌ)
夢に見ゆさ (イミニ ミユサ)

現代語訳：ちよつとでも眠ったら、忘れることがあろうかと思えば、面影がまた夢に見えるありさまである。

ここで紹介する 3 首の和歌のうち、図 1 の和歌は、この琉歌と最も似ていると言える。なぜなら、「忘る」「思ふ」「また」「夢」「面影」という共通表現を 5 語や、「寝る」と「まどろむ」という類義語を含んでいるほか、両歌の流れやその内容も同様のものとなっているからである。和歌における「恋しさ」や「名残」、そして琉歌における動詞「見ゆ」のように、それぞれのニュアンスも見られるものの、両歌共に、基本的に「寝れば忘れると思ったが、また面影が夢に現れた」という内容を詠んでいる。和歌は、「寝れば恋しさを忘れる」のように、何を忘れるのかをはっきりと表現しているのに対し、琉歌は、忘れるものが面影であるか、恋しさであるか、明らかにせず、忘れる対象について曖昧である。しかし、寝て忘れたい希望や、寝たら面影がまた夢に見える事実、という二つ

のものは両歌共に一致している。

両歌の句を具体的に分析してみれば、まず、和歌の第2句は琉歌の上2句に改作され、また、和歌の第3句は琉歌の第2句の後半として見られる。琉歌は、和歌の第2句における動詞「ねてや」を類義語「まどろむ」に置き換え、「まどろめば」という5音の形式にしなが、3音の「おへも」も後ろに接続することで8音の第1句を完成する。また、和歌の第2句の後半と第3句、即ち「わするる と思へども」という10音の表現を取り、沖縄語の文法に変更しつつ、「忘れゆらとめば」という琉歌に相応しい8音の第2句を作る。琉歌では、「と思へば（とおもへば）」という単語の中の字を脱字する特徴が見られる。つまり、5音の「to omoheba」は、「to omoheba」のように脱字し、最終的に3音の「tomeba」になる。このように、「忘れゆらと思へば」という元々10音の表現は、「忘れゆらとめば」という8音の表現になり、琉歌に適切な8音句が完成できる。また、和歌の下2句が琉歌の下2句に変形されているが、その際、和歌の結句「夢の面影」が分解され、「また面影の」「夢に見ゆさ」という琉歌の下2句が出来上がる過程で、和歌の第4句における「またも」という表現も借用され、琉歌の第3句の前半に2音の「また」として入れられていることが分かる。

この1597番歌が含まれている『玉葉和歌集』は、鎌倉時代の勅撰和歌集であり、琉歌人もその和歌集を参考にし、この和歌を琉歌へ改作したことが推定できるだろう。また、この和歌は、『玉葉和歌集』以外に以下の歌集にも載っている。

- 『後二条院御集』(鎌倉時代成立)
- 『歌合 正安四年六月十一日』(1302年・鎌倉時代成立)
- 『類題和歌集』(江戸時代成立)

次の図2と図3の和歌は、『琉歌全集』の2143番歌との共通表現が4語となっており、図1の和歌と比較すれば、1語縮減している。したがって、琉歌の元になった可能性は図1の和歌より低い、注目点は、同様の動詞「まどろむ」の使用である。これらの和歌も琉歌へ改作された可能性について指摘しておきたい。

(図 2)

和歌

『新後拾遺和歌集』(1012)

(歌人：法印善算)

待ちわびて

しばしまどろむ

うたたねの

夢にもみせよ

人の面かけ

琉歌

『琉歌全集』(2143)

(歌人：小橋川朝昇)

まどろめばおへも (マドウルミバ ウフィン)

忘れゆらとめば (ワスイリユラ トウミバ)

またも面影の (マタン ウムカジヌ)

夢に見ゆさ (イミニ ミユサ)

この図 2 の和歌は、歌を大きく 2 つの順番に分ければ、琉歌と一致していると言える。しかし、琉歌と同様の動詞「まどろむ」を使用しても、琉歌における「まどろめば忘れると思ったが、夢に面影を見た」という意味を表さず、「長い間待っており、待ちわびてしまい、少しまどろめば、面影を夢に見せてください」のように、若干異なる内容を詠んでいる。この点は、図 1 の和歌と琉歌と大きく相違すると言わねばならない。

注目のポイントは、両歌における「まどろむ」という表現であるため、この和歌も琉歌へ改作された可能性について指摘しておくが、その可能性は図 1 の和歌より低くなっていると考えられる。

また、『新後拾遺和歌集』は、室町時代成立の勅撰和歌集である。

(図 3)

和歌

『新葉和歌集』(868)

(歌人：文貞公)

別れつる

おもかけながら

まどろめば

さぞな又ねの

夢も見えける

琉歌

『琉歌全集』(2143)、

(歌人：小橋川朝昇)

まどろめばおへも (マドウルミバ ウフィン)

忘れゆらとめば (ワスイリユラ トウミバ)

またも面影の (マタン ウムカジヌ)

夢に見ゆさ (イミニ ミユサ)

図 3 の和歌も図 1 の和歌と琉歌と比較すれば、その内容を表す方法には多少のズレが見られる。図 3 の和歌は、「別れた面影がずっとそのままにありながら、まどろめば、そのようにまた夢に見える」という内容を詠んでおり、琉歌も示唆している「起きている時もまどろむ時も面影が見える」という内容と一致していると言える。しかし、「起きている時の面影を忘れようと思う」という希望

は、図 3 の和歌には存在せず、図 1 の和歌と上の琉歌とは大幅に異なる点である。したがって、この図 3 の和歌が改作された可能性も図 1 の和歌より低いであろう。

『新葉和歌集』は、室町時代成立の私撰集であるが、その形は勅撰集にふさわしい形に整えてあるため、準勅撰和歌集とも呼ばれる。

なお、「面影」を歌ったオモロと琉歌を対比する調査も行ったが、「面影」を含んだオモロを改作した琉歌は、一例も見られないことが判明した。

以上の改作琉歌をまとめると、「面影」を詠み込んだ『琉歌全集』の琉歌 99 首の中から 11 首 (11%) が和歌の改作琉歌であることが判明した。その 11 首の中で、特定の作者によって詠まれた歌が 8 首 (73%) あり、読人知らずの歌が残りの 3 首 (27%) ある。したがって、「面影」を含んだ改作琉歌は、ほとんどの場合に特定の歌人によって詠じられたことが分かった。また、その琉歌の元になった和歌は、合わせて計 16 首ある可能性が考えられるだろう。それらの 16 首の内訳を見れば、最も多いのは鎌倉時代の歌集に初出した和歌であり、6 首 (38%) となる。続いては、江戸時代、特に『新明題和歌集』の歌 (4 首) が目立っており、合わせて 5 首 (31%) を数える。また、室町時代初出の歌もかなり多く見られる (4 首、25%)。最も数少ないのは、平安時代初出の 1 首 (6%) のみであり、この 1 首は平安時代成立の様々な物語に見られる。また、改作琉歌の元になった可能性のある歌として考えられる以上の和歌 16 首の三分の一は、勅撰和歌集²¹や物語²²に含まれている歌であることが明らかになった。さらに、3-3. でも紹介しているように、藤原為家によって詠まれた和歌 1 首も琉歌へ改作された可能性があり得る。

なお、上述の歌が含まれたすべての歌集を時代区別にした総括的なデータは、本論の第 4 章にある表でまとめて提示する。

5. 「面影」を詠んだ琉歌と和歌の特徴

3. では、琉歌と和歌における「面影→立つ」の類似句について述べ、主に両歌の共通点や類似性に焦点を当てたが、ここでは両歌における「面影」と「立つ」以外の動詞との組み合わせによって生じる、それぞれの歌の特徴について指摘したい。

²¹ 『続古今集』『新後撰集』『玉葉集』『新後拾遺集』、計 4 首

²² 『大和物語』や『落窪物語』に見られる同様の和歌 1 首

5-1. 和歌の「添ふ」と琉歌の「まさる」、「すぎる」

上述したように、「添ふ」という動詞は「面影」を詠んだ和歌にのみ見られ、「面影」の琉歌には一切存しない。さらに、和歌の場合には、この動詞は数多く詠まれ、「面影」の和歌全体のおよそ8%を占めている。そのため、「面影」と「添ふ」の組み合わせは和歌の独特の表現として見なすことができる。同組み合わせの中では、主に「面影に添ふ」、「面影を身に添ふ」や「立ち添ふ」といった表現が見られ、すべて11世紀の初め頃初出し、「面影ぞ立つ」より古いものであることが分かる。以下に「面影」と「添ふ」の組み合わせを詠み込んだ和歌を紹介する。

(平安末期・『とりかへばや物語』・22番歌・女中納言)

この世には
人の形見の
面影を
わが身に添へて
あはれとや見む

この和歌から、体に染み込み、付き添っている面影で哀れさを体験する作者の悲しい気持ちが読み取れる。「面影を身に添ふ」という表現は和歌の中に数多く詠まれ、静かに我慢し続ける変えられない哀れさ、切なさを感じさせられる。

実は琉歌の中にも「人間の体／心」というものに「面影」が染みついた概念が見られる。それは、「身にすがて」と「肝にすがて」という表現で表される。これらの二つの表現をそれぞれ歌った琉歌2首は、以下のとおりである。

(『琉歌全集』・2183番歌・^{カニムトウサトウヌシ}兼本里之子)

表記：

目にも見られらぬ

手にも取られらぬ

かなし**面影**や

肝にすがて

現代語訳：恋人の愛しい面影は、目にも見られず、手にも取られず、ただ心にばかりすがりついて離れない。

読み方：

ミニン ミラリラヌ

ティニン トウラリラヌ

カナシ ウムカジャ

チムニ スイガティ

(『琉歌大成』・457 番歌)

表記：

いきやしがな今宵

なれし面影の

つらさ身にすがて

明かしかねて

現代語訳：彼女の面影が今宵どうしてだか、つらい身にとりすがって離れず、眠れないので、夜が長い。

読み方：

イチャシガナ クユイ

ナリシ ウムカジヌ

ツイラサ ミニ スイガティ

アカシ カニティ

上記の 1 首目の琉歌は、まったく目に見えず手に取れない面影が、沖縄語で

「^{チム}肝」と表現される心にしっかりとしがみつき、離れられないことを歌っている。また、2 首目の琉歌では、さらにその面影によって湧き起こる辛さが身を強くつかむことで眠れなくなるという、肉体的な辛さが起こるまでの激しい状態が描かれている。「面影」に「すぎる」という組み合わせは、琉歌の中で「肝」、「身」や「袖」と関連し、かなり強い執着心を表現する。

それだけではなく、上記の表現よりさらにもっと強いインパクトを与える表現も「面影」と一緒に見られるのだが、それは「^{ワンニクガチ}我胸焦がち」（意味：私の胸を焦がして）、「^{ワチムアマガシユル}我肝あまがしゆる」（意味：私の心を動揺させている）や「^{ワチムフィ}我肝引き^{チユサ}きゆさ」（意味：私の心を引きつけるよ）等といった表現である。これらの表現は猛烈な愛着を表すだけでなく、その辛さが肉体的な痛みや感覚までも感じさせるものであると言える。

それに対し、「面影を身に添ふ」という、和歌において数多く見られる表現は、同歌の中で「秋」、「月」、「恋しさ」、「つれなさ」や「哀れさ」等といった語と呼応することがあり、その結び付きによって静かな悲しさが感じられる。歌の読み手はいくら強い感情を持ったとしても、琉歌のようにそれが猛烈な様子で表に出ることはなく、心の裏にしっかりとしまっておりと考えられる。

琉歌における、圧倒されるような猛烈な感情や、和歌における奥ゆかしいほのかな切なさは、両歌のお互いに異なる表現の選び方によって生まれる。動詞の「添ふ」と「すぎる」に潜むニュアンスもそれぞれのユニークな雰囲気醸し出す重要な役割を果たしていると言える。『古語大辞典』（1983）によって定義される「添ふ」の意味は、「一つの主なもののそばに他のものが近づいて加わり付く」となり、悲しさなどの気持ちの「近付く」というゆっくりとした柔らかい

動きを暗示しているのに対し、「すぎる」が持つ意味は『沖縄古語大辞典』(1995)で「つかまって寄りかかる。まとわりついて離れない」と定義されているように、面影の辛さは人の身や心をしっかりと強く捕まえ、その激しい感情は身を離さないことになっている。「面影」が呼応している琉歌の「すぎる」と和歌の「添ふ」という動詞もそれぞれの歌における「面影」の独特のイメージを生み出している。

同様の傾向は、「面影」と結ばれる和歌の「添ふ」と琉歌の「まさる」という動詞にも見られる。両方の動詞は「立ち添ふ」、「立ちまさる」という複合動詞の形式を取ることが多くある。和歌と琉歌のそれぞれの1例を以下の通りに提示する。

(鎌倉時代 (1232年)・『洞院撰政治家百首』・1512番歌・藤原定家)

古郷に
とまる面影
たちそひて
旅には恋の
道ぞはなれぬ

(『琉歌全集』・1201番歌・読人知らず)

表記：

寝れば夢しげさ
おぞで面影の
立ちまさりまさり
忘れぐれしや

読み方：

ニリバ イミ シジサ
ウズディ ウムカジヌ
タチマサイ マサイ
ワスイリ グリシャ

現代語訳：寝れば夢をしげく見るし、覚めれば恋しい面影が眼前にちらつき、とても忘れられない。

この和歌と琉歌は、両方とも恋の忘れられない、離れられない性質を歌い、琉歌と和歌共によく見られる「忘る」、「離る」という動詞を使うため、両方とも同様の執着心を表すと言える。しかし、ここの重要なポイントは、動詞の「立ち添ふ」と「立ちまさる」にある。和歌における「面影」が動詞の「立ち添ふ」と呼応することによって、そっと近付いてくるその様子が頭の中に浮かぶ。それに対し、琉歌における「面影」は、増さり、つまり増えるばかりで、その量が段々多く、激しくなっていくことが明らかとなる。さらに、単なる「増える」だけではなく、「まさりまさり」という動詞のくり返しによって、意味が強調される。そのため、両歌の中でも、和歌の奥ゆかしさと琉歌の情熱的なさまを感

じ取ることができる。両歌の特徴は、動詞の「立ち添ふ」と「立ちまさる」によってこそ決められると言える。

5-2. 和歌の「見る／見ゆ」と琉歌の「目の緒さがて」^{ミスラッサガティ}

「面影」を詠んだ和歌の中に動詞「見る」は「立つ」の次に二番目に多く見られ、大変重要な位置を占めている。また、和歌では「見る」だけでなく、他には「見ゆ」や「眺む」等も多く詠まれ、「面影」と視覚動詞の結びつきが和歌において相当特徴的であると言える。

「面影」と視覚動詞の和歌における代表的な組み合わせとしては、「面影を見る」や「面影に見ゆ」が挙げられる。後者はすでに『万葉集』の歌に見られるので、古くから伝わる表現であることが分かる。

上の組み合わせを詠んだ和歌のそれぞれ1首ずつを示す。

(鎌倉時代 (1313年)・『続現葉和歌集』・763番歌)

たかの山
この暁の
おもかげを
こころの月に
うつしてぞみる

(平安時代 (980年代)『古今和歌六帖』・2065番歌)

見しときと
こひつつをれば
ゆふぐれの
いもがしみかを
おもかげにみゆ

一方、琉歌では、「面影」と「見る」、「見ゆ」、「見す」や「見知る」という4つの動詞との組み合わせを数えても、その合計の数は12首にすぎない。さらに、その中の4首は「面影」が結局「見られぬ」様子を歌っている。これらの12首以外に「見る」を含んだ歌には、月見や花見などをしながら面影が浮かぶことを描いている歌もあるが、その数も極めて少ない。結局琉歌の場合は、「見る」等の視覚動詞の出現率が低いと言える。

しかし、琉歌においては「面影」が目で見ない現象であるかということ、必ずしもそうではない。なぜなら、琉歌の中では、「見る」という語を使わなくても、

「面影」と結ばれた視覚感覚が、琉歌にしか見られない独特の表現を通して表現されているからである。それは、「目の緒さがて^{ミヌヲウサガティ}」という琉歌の独自表現である。その表現を歌った歌は、以下の通りである。

(『琉歌大成』・4848 番歌)

表記：

忘らてやり言ちも

忘られめ朝夕

なれし面影の

目の緒さがて

現代語訳：忘れようといっても、忘れられない。朝夕に面影が目の前に浮かんで。

読み方：

ワスイラテイ イチン

ワスイラリミ アサユ

ナリシ ウムカジヌ

ミヌヲウ サガティ

この琉歌の独自の表現に関する参考文献(『琉歌大成』)は、「目の前に浮かぶ」という単純な訳がなされることが多い。しかし、同表現を詳しく分析すると、そのユニークさがより深く理解できる。「目の緒」という表現は、実は『日本国語大辞典』や『古語大辞典』等には記載されておらず、『沖縄古語大辞典』にのみ記載されている。このことからこの語が琉歌の独特の表現であることが分かる。同辞典では、「眼前」というふうに定義されているが、実際に「まなじり」のことを意味する。また、「下がる(サガユン)」という動詞は同辞典によると、「降りて来る。面影がまとわりつく」等の意味が挙げられる。これから、「面影の目の緒さがて」という琉歌における表現は、「面影が皆に降りて、強くくっつき、離れることはない」というふうに解釈することができる。この表現も、和歌の中で簡単に述べられる「面影を見る」等といった表現と比べれば、琉歌の面影の強烈さをより強調させるものであり、和歌に見られる奥ゆかしい切なさの世界と異なる、琉歌世界の情熱性や強い感情の表し方を呼び起こす代表的な表現の一つであると言える。

6. おわりに

琉歌の中でも和歌の中でも、「面影」と最も多く結ばれる動詞は「立つ」であり、当該の組み合わせが両歌共に最も高い出現率であることは、両歌に係り性があることを示している。「面影→立つ」の組み合わせでは、両歌において幾つかの類似表現が見られる。それは具体的に、和歌における7音の「面影ぞ立つ」(意

味：面影が立つ）および琉歌における 8 音の「^{ウムカジドゥタ チュル}面影ど立ちゆる」（意味：面影が立つ）であり、また和歌における 7・7 音の「見し面影の 立たぬ日ぞなき」（意味：昔愛していた（人の）面影が立たない日はない）および琉歌における 8・8 音の「^{ナリ シウムカジヌ タタヌフィヤ ネ サミ}馴れし面影の 立たぬ日やないさめ」（慣れ親しんだ（人の）面影が立たない日はないだろう）である。「面影ぞ立つ」は、平安末期に初めて見られてから、鎌倉時代には多く見られ、藤原俊成や定家系列の有名な歌人によって詠まれた表現であり、また、「見し面影の 立たぬ日ぞなき」という表現を含んだ和歌は藤原為家という鎌倉時代の歌人によって詠まれたものであることが、本調査で分かった。為家は藤原俊成や定家系列の歌人で、上述の「面影ぞ立つ」という表現も多く詠んだ歌人であり、また上述の表現の二つとも『為家集』という、那覇士族によって積極的に教養された歌集にも見られているため、平安末期や鎌倉時代に由来するこれらの和歌表現は琉歌にも影響を与え、和歌におけるこの句の 7 音調が琉歌に相応しい 8 音調に変形され、琉歌の中に 8 音句として取り入れられている可能性はあり得る。

しかし、琉歌における「面影ど立ちゆる」という 8 音句は、オモロ 1 首の中にも「面影ど立ち居る」のように見られるため、琉歌におけるこの句は和歌の「面影ぞ立つ」の変形であるか、或いはオモロの句をそのまま取り入れたのか、という疑問はいまだに残っている。本論文では、琉歌は、この句に関してオモロや和歌からの影響を受けているという両方の可能性について指摘しておく。なお、この問題についてはさらなる調査が必要であり、将来の研究課題にしたい。

次に、和歌の「見し」および琉歌の「馴れし」という表現は、同様の意味を表すものであるが、両歌の中でそれらと一致して数多く結ばれる表現として、「面影」のみが挙げられる。琉歌には、「見し」という表現は一切見られないことから、琉歌における「馴れし面影」という表現は和歌の「見し面影」という表現の変形でもあろうと言えるが、実は「馴れし」は和歌にも数多く見られるため、琉歌における創作の独自表現ではなく、和歌の表現をそのまま模倣したものであろうことが判明した。また、オモロには「見し」も「馴れし」も一切見られない。

琉歌には「面影ど立ちゆる」や「馴れし面影の 立たぬ日やないさめ」という句のみならず、和歌と非常に似通った歌そのものも何首か見られる。それらの琉歌は和歌を改作した歌である可能性が高いことが本調査で判明した。本調査の結果、「面影」を詠み込んだ『琉歌全集』の 99 首の中から、和歌を改作したと考えられる琉歌は 11 首（11%）ある。その 11 首の中で、特定の作者によって詠まれた歌が 8 首（73%）あり、読人知らずの歌が残りの 3 首（27%）である。また、その琉歌の元になった和歌は、合わせて 16 首ある可能性について指

摘した。その内訳を見れば、最も多いのは鎌倉時代（6首、38%）の和歌、続いて、江戸時代（5首、31%）や室町時代（4首、25%）の和歌である。最後に平安時代の和歌であるが、1首（6%）のみ見られる。また、琉歌の元となった和歌16首の中からおよそ3分の1である5首は、勅撰和歌集や物語に見られる歌であり、琉歌人はそれらを積極的に学んでいた記録を裏付ける証拠であると言えよう。以上のことから、琉歌は、「面影→立つ」という組合せに関する特定の句について、主に平安時代や鎌倉時代が初出した和歌における句から影響を受けたのに対し、和歌の改作琉歌が影響を受けた和歌は、鎌倉時代（特に勅撰和歌集）や江戸時代（『新明題和歌集』など）の歌が多いことが判明した。

また、「面影」を詠み込んだオモロの改作琉歌は一切見られない。

本章で取り上げた琉歌、和歌やオモロの類似点を比較した結果、「面影」を歌った琉歌は、和歌とオモロの両方に見られる「面影ど立ちゆる」の表現を除けば、オモロより和歌の表現の影響を多く受けていることが明確になった。「面影」を詠み込んだ琉歌とオモロの類似点が、「面影と立ちゆる」という句のように、一つのみ存するのに対し、琉歌と和歌の間では少なくとも二つの類似の句が見られるだけでなく、和歌の改作琉歌も少なくとも11首（11%）あることが判明した。

一方、上述の類似点のみならず、「面影」を含んだ琉歌と和歌には、それぞれの特徴も多く見られる。琉歌における「面影」が呼応する動詞の「すぎる」や「立ちまさる」等によってより積極的な感情が語られるのに対し、和歌における「面影→添ふ」という組み合わせを通じて奥ゆかしい趣や静かな、哀れさで溢れる和歌世界が生まれる。また、和歌における「面影に見ゆ」などといった視覚感覚は、

琉歌の中では独特の表現である「目の緒ミヌワッサガテさがて」（意味：（面影は）まなじりにまわりついて）によって表される。これらを読み解くことによって、琉歌や和歌は独自の背景やそれを歌った人々の思いを描写するものとなっていることが分かる。似通った表現や類似の句をお互いに含んでも、異なる背景から生まれる内容や様々な独創的な表現を保つことができたため、今日まで、琉歌と和歌はそれぞれ独特の歌として享受することが可能となっている。

【付記】

本章は、「琉歌と和歌の表現比較研究—「面影」をめぐって—」（『沖縄文化』第112号、2012年）を母体とし、加筆修正したものである。

第2章

琉歌と和歌の表現比較研究——「影」をめぐる——

1. はじめに

前章では琉歌、和歌やオモロに見られる「面影」という表現について調査を行い、「面影」と「立つ」の組み合わせに関して、琉歌が和歌の7・5音句を8・6音句に音数律を変形させる工夫を行いつつ、藤原俊成、定家、為家やその系列の歌人らによって詠まれた語句を取り入れている可能性を指摘した。また、その組み合わせの中に見られる特定の句「面影ど立ちゆる」に関しては、和歌や琉歌だけではなく、オモロと琉歌との影響関係もあり得ることについて述べた。さらに、『琉歌全集』の琉歌や、『国歌大観』『明題和歌全集』『類題和歌集』の和歌を対象にした徹底的な調査を経て、「面影」を詠み込んだ琉歌の中に見られる和歌の改作琉歌も紹介した。

場合によって「面影」の意も含んでいる「影」という表現も、「面影」と同じように、和歌と琉歌共に見られる。これから詳しく述べるが、「影」には「面影」が有する意味も表している場合があり、「影」と「面影」が互いに関係していると言えるが、「影」は「面影」以外にも様々な意味で歌の中に詠み込まれている。

本章では、「面影」ではなく、「影」という語を用いた表現に注目し、この表現は琉歌と和歌においてどのように詠み込まれているのか、という問題を追究しつつ、まず、「影」と動詞との組み合わせの観点から共通点を考察したい。また、従来の研究では調査の及んでいなかった、「影」を詠み込んだ全ての琉歌が、どの様な程度の割合で和歌を改作しているのか、さらに、どの和歌集の影響を受けているのかという問題についても指摘したい。最後に、「影」を含んだ特定の表現も幾つか紹介しながら、その表現に関してはどの和歌からの影響が考えられるのかについても考察を進めたい。

なお、本研究で使用したテキストは、主に『琉歌全集』と『国歌大観』である。また、『明題和歌全集』や『類題和歌集』も適宜参照した。

2. 琉歌と和歌における「影」と呼応する動詞

「影」という表現には、『日本国語大辞典・第2版』（2001）より種々の意味が挙げられるが、本章では、琉歌と和歌における次の3つの意味の「影」を対象とする。

- ① 日、月などの光。
- ② 鏡や水の面などに物の形や色が映って見えるもの。
- ③ 心に思い浮かべた、目の前にいない人の姿。おもかげ。

ここでは、琉歌と和歌において上の①～③の意味で詠まれる「影」やそれと呼応する動詞はどのような類似点や相違点があるのか、という問題に焦点を当て、両歌の関係性について探っていきたい。

『琉歌全集』には、上の3つの意味を持つ「影」を歌った琉歌は計60首あるが、その中で半分以上(37首、62%)が「月影」を歌ったものであることは注目すべき点であろう。

琉歌における「月影」と呼応する動詞は、「照る／照らす」と「照り渡る」が最も多く(20首)、「月影」を歌った琉歌37首の中で半分以上(54%)を占めている。続いて、2番目に多い動詞が「うつる／うつす」で10首に見られ、「月影」を含んだ歌の27%となっている。また、「月影」以外の「影」を詠んだ琉歌は23首あるが、その中の動詞で目立つのは「うつる／うつす」であり、17首(74%)に見られる。

これらの3つの意味で歌われる「影」を含んだ琉歌には、他に視覚動詞の「見る」、「拝む」、「眺む」、また「名に立つ」、「浮かぶ」、「宿る／宿かゆる²³」、「隠す」、「まさる」等も僅かに見られる。しかし、第1章で既述した「面影」と最も多く結ばれる「立つ」という動詞は、「名に立つ」²⁴以外には「影」を歌った琉歌に一切見られない。琉歌の場合、「面影→立つ」のように「影→立つ」という関係が成り立たないということを見逃してはならない。

一方、『国歌大観』では「影」が1万首以上の和歌に見られ、歌数は極めて多いが、その殆どが「月影」を詠んだものである。上述のように、琉歌もこれと同じ傾向を示しており、両歌とも「月影」の用例が圧倒的に多いことが判明した。これは「影」を詠み込んだ琉歌と和歌との大きな共通点の一つだと言えるだろう。

また、和歌における「影」と呼応する動詞に関しては、最も多く見られるのは視覚動詞の「見る」や「見ゆ」でありながら、他には「照る／照らす」、「うつる／うつす／うつろふ」、「宿る／宿す／宿借る」、「かはる」や「残る」等も多く見られる。また、「面影」と呼応する動詞と同様の動詞も見られ、その例として「添ふ」、「離る」、「忘る」などが挙げられる。

しかし、「面影」と最も多く結ばれる「立つ」は、今回の「影」を詠んだ和歌には

²³ 沖縄語の単語であり、「宿を借りる」という現代語の意味となる

²⁴ 「名に立つ」という組み合わせは「影」と「立つ」の関係ではなく、「名」と「立つ」の関係となる

殆ど見られない。その用例数は、面影の意味で詠まれる「影」を含んだ和歌では 20 首を下回り、月影等の意味を持つ「影」を詠んだ和歌にも殆ど例がない。さらに、「面影ぞ立つ」や「面影に立つ」のような、単純動詞の「立つ」を含んだ表現は、面影の意味を持つ「影」を詠んだ和歌の場合、「かぜうとき ことしの夏の 椎がもと まき寝し妹が たつかげもなし」という江戸末期の『柿園詠草』の 1 例があるのみで、その他の動詞は全て「立ちよる」や「立ち添ふ」、「立ちとまる」等といった複合動詞となっている。琉歌と同様に、和歌の場合にも、「影」に関しては「面影」と異なり、「立つ」との関係が非常に薄いと言えるだろう。

なお、オモロに「影」という表現が一切取り入れられていないことは、注目すべき点である。したがって、「影」に関しては琉歌はオモロから影響を受けていないことが結論付けられる。

以上を考慮すれば、「影」を詠んだ和歌の中でも、同じく琉歌の中でも、「月影」が詠まれる歌数が半数以上を占めており、共通して最も多いものであると理解できる。また、両歌共に「面影→立つ」を含んだ表現は、多く詠み込まれているが、「影→立つ」という関係は、琉歌には見られず、和歌には例はあるが、非常に少ない。この二点は琉歌と和歌の大きな共通点であり、両歌の関係性を示すものであるだろう。

「影」を詠んだ琉歌と和歌が同じ傾向を示していることが判明したが、琉歌と和歌のお互いの関係の程度をより一層明らかにするために、琉歌の中で和歌を改作したものがどのぐらい見られるのかについて詳しく述べる必要がある。その問題は以下の 3. で展開したい。

3. 「影」を詠み込んだ和歌の改作琉歌

「影」を詠み込んだ和歌と琉歌には様々な共通表現が見られ、また、歌の概念などの観点からも類似しているものもあり、お互いの関係はすでに判明している。しかし、琉歌の中に和歌を改作した歌が具体的に何首見られるのかということによって、両歌の関係の程度をさらに精密に証明することができると考えられる。そこで、ここでは「影」を詠み込んだ琉歌の中で和歌を改作した歌がどの割合で含まれているのかについて指摘したい。また、「影」を詠み込んだ改作琉歌はどの和歌集や和歌の歌人の影響を受けたかについても考察したい。

今回の調査結果、和歌の改作琉歌は、「影」を歌った琉歌 (60 首) の中に 14 首見られ、およそ 23% であることが明確になった。以下に、14 首の琉歌およびその元の和歌を列挙する。また、ここで紹介するすべての 14 首については先行研究には見られず、筆者の調査によって発見された改作琉歌である。

①

和歌

『風情集』(487)
(歌人：藤原公重)

いつよりも

今夜の月の

くまなきを

おもひなしかと

人にとはばや

琉歌

『琉歌全集』(57)、『古今琉歌集』(163)
(歌人：屋比久朝義夫人)

思なしがやゆら (ウミナシガ ヤユラ)

今宵の月 白や (キユヌ ツィチシラヤ)

いつよりも まさて (イツィユリン マサティ)

影の きよらさ (カジヌ チュラサ)

現代語訳：今宵は名月だという思いなしのためか、月の光がいつもよりきれいだ。

両歌共に月のきれいな様子を誉め称えている。月はあまりにも美しく見え、「いつよりも」きれいであるので、「思いなし」のためなのではないか、のように、カギ括弧の 2 つの表現が両歌において取り入れられていることは注目し得る。このように、両歌共に同じ表現だけでなく、同様の概念も表していることは明らかである。

しかし、それぞれの歌には細かいニュアンスも含まれている。和歌の「くまなきを」という月のさやかに照る様子を、琉歌の場合は「いつよりもまさて」や「影のきよらさ」のように「まさる」や「きよらさ(意：美しさ)」という言葉に置き換えて表現している。また、和歌における「月の美しさは思いなしかと人に聞きたいものだなあ」という意味は、琉歌では若干異なり、人に聞くという要素までは書かれていない。それはおそらく、琉歌は 5 句ではなく 4 句から成るため、和歌の結句の「人にとはばや」をおそらくその理由で琉歌の中に詠み込めなかったためであろう。

この和歌は、平安後期成立の『風情集』という藤原公重の私家集に載るものである。

②

和歌

『狭衣物語』(188)
 (作者：六条齋院宣旨)

月だにも
 よその村雲
 へだてずは
 夜なよな袖に
 うつしても見ん

琉歌

『琉歌全集』(907)、
 『琉歌百控・覽節琉』(509)
 (歌人：不明)

村雲のやがて (ムラクムヌ ヤガティ)
 かくす月だいのもの (カクス ツイチ デムヌ)
 影や身が袖に (カジャ ミガ スディニ)
 宿てたばうれ (ヤドゥティ タボリ)

現代語訳：群がり集まった雲が、やがて月を隠そうとしているのは惜しい。せめてその美しい影は私の袖に宿って下さい。

この琉歌は平安時代の作り物語である『狭衣物語』の和歌を改作したものだと考えられる。共通表現は、「月」「だにも／だいのもの」「村雲」「袖に」という4語のみであるが、両歌における句の順番も歌の意味もほぼ同じであり、有名であったため、琉歌人が享受できたこの和歌が琉歌へ改作されたと推定できよう。

この和歌の現代語訳は、「せめて月をなりと、雲さえ邪魔をしなかつたら毎夜毎夜光を私の袖に包んで見ておきましょう」(鈴木 1986, p.316-317) となっており、「村雲が月を隠すので、その光が袖に宿って下さい」と歌う琉歌の内容と惜しむ気持ちが両歌で一致している。和歌の「月だにも」という表現は琉歌の中では「月だいのもの」のように見られ、『沖縄古語大辞典』(1995)によると「だいのもの」が「～でも。～できえ」という意味を有し、和歌と同じ意味を表すことが分かる。また、和歌における「(月影を袖に) うつして見ましょう」という意味を持つ「うつしても見ん」という7音の結句は、琉歌においては8音の結句「宿てたばうれ(意：(月影が袖に) 宿って下さい)」に改作される。この琉歌の結句は、和歌の結句と類似した内容を歌いつつも、琉歌によく見られる命令形を用いた願望を込め、琉歌の独特の趣きを生み出す。さらに、和歌の「隔てる」という動詞を、琉歌においては「隠す」という動詞として享受することができるため、この改作琉歌と元の和歌のそれぞれ異なるニュアンスも味わうことができる。

③

和歌

『狭衣物語』(188)
(作者：六条齋院宣旨)

月だにも
よその村雲
へだてずは
夜なよな袖に
うつしても見ん

琉歌

『琉歌全集』(1135)、
『古今琉歌集』(1294)
(歌人：不明)

やがてむらくもの
隠す月やらば
影や身が袖に
うつちたばうれ

現代語訳：やがて群雲の隠す月である
ならば、影は私の袖に写して下さい。

この③の改作琉歌も②の改作琉歌と非常に似通っており、両歌とも『狭衣物語』の同じ 188 番歌に倣って詠じられたものだと考えられる。③の琉歌は②の琉歌と違い、「だいもの」の代わりに「やらば」という表現を、また、「宿て」の代わりに「うつち」という表現を用いていることが分かる。「やらば」という表現は元の和歌における「だにも」と異なる意味を有し、②の琉歌における「だいもの」は元の和歌における「だにも」に近いものの、②の琉歌には見られず、③の琉歌の中にのみ見られる「うつち」は元の和歌の「うつして」と同じ表現となる。このように解釈すれば、②および③の琉歌は、お互いに少し違う表現を用いても、両方ともこの『狭衣物語』の和歌を改作したものだとは推定できるだろう。

④

和歌

『後拾遺和歌集』(1162)
(歌人：和泉式部)

ものおもへば
さはのほたるを
わがみより
あくがれにける
たまかとぞみる

琉歌

『琉歌全集』(2356)、
『古今琉歌集』(575)
(歌人：読人しらず)

胸に物思めば
螢火の影も
わが身より出ぢる
光ともて

現代語訳：胸に物を思い焦がれていると、蛍の火の影を見ても、我が身から出る光ではないかと思うほどである。それほど胸は燃えている心持ちだ。

和泉式部によって詠まれたこの和歌は当時から有名で、平安時代成立の勅撰和歌集『後拾遺和歌集』以外にも、平安時代から鎌倉時代にわたって成立した多様な歌集や作品の中に見られ、琉歌もこの和歌を改作したと言えるであろう。

和歌では「蛍（の火）は我が身から出る玉と見ている」と詠まれているのに対し、琉歌はその「蛍の火の影を我が身から出る光だと思っている」と歌い、若干異なる表現で同じ場面や思考を表している。この和歌が含まれた歌集によって、「玉」、「たま」或いは「魄」という様々な表記が見られるが、「魄」という表記が『俊頼髓脳』の和歌 1 首にのみ見られる。この和歌はそもそも我が身から出るのが「魄」、要するに「たましい」であるという意味を表していたと考えられるが、多くの作品によってその意味は「玉」に変わり、定着したのである。そして、上の改作琉歌もおそらく「玉」という意味を考慮しつつ詠まれたと考えられる。「玉」も「輝く」、つまり「光る」性質を持っているため、琉歌においては「玉」という表現が「光」という表現に移ったのではないかと推定できる。

また、琉歌の音数律に合わせるために、和歌における「ものおもへば」という、ここでは不規則的で、字余りの 6 音句は、琉歌において 5 音の「物思めば（ムヌウミバ）」と、その前に置かれている 3 音の「胸に（ンニニ）」から成る「胸に物思めば」という 8 音句に巧みにアレンジされていることが分かる。さらに、琉歌は和歌における第 3 句と第 4 句から「わがみより」と「いづる」という重要な表現を取り、和歌のそれらの 2 句を分解しつつ、「わが身より出ぢる」のように、琉歌にふさわしい 8 音の第 3 句を詠じる。

上述のように、上の和歌は大変有名な歌であり、勅撰和歌集『後拾遺和歌集』も含め、合わせて 14 の作品に見られる。『後拾遺和歌集』以外の作品は以下の通りである。

● 平安時代成立の作品：

- 1) 『関白内大臣歌合』
- 2) 『俊頼髓脳』
- 3) 『袋草紙』
- 4) 『童蒙和歌抄』
- 5) 『後六々撰』
- 6) 『古本説話集』

● 鎌倉時代成立の作品：

- 1) 『無名草子』
- 2) 『時代不同歌合』
- 3) 『十訓抄』
- 4) 『古今著聞集』
- 5) 『沙石集』
- 6) 『歌枕名寄』
- 7) 『世継物語』

⑤

和歌

『栄花物語』(369)

[作者：女房(不明)]

月影に

照りわたりたる

白菊は

磨きて植ゑし

しるしなりけり

琉歌

『琉歌全集』(62)、『古今琉歌集』(155)

(歌人：神村親雲上)

照る月のかげに (ティル ツィチヌ カジニ)

色やます鏡 (イルヤ マス カガミ)

みがかれて咲きゆる (ミガカリティ サチュル)

菊のきよらさ (チクヌ チュラサ)

現代語訳：照る月の光に、菊の花も一段と美しい色が増し、そうしてみがかれているように見え、大層美しい。

この琉歌と和歌には、両歌の共通表現が「月影」「照る」「菊」「磨く」の4語あり、また類義語が「咲く／植える」という1語あることが認められる。さらに、内容の観点からも両歌は非常に似通っているものであることが判明する。この琉歌はおそらくこの平安時代の有名な歴史物語である『栄花物語』の和歌を改作して詠じられたと推定できるだろう。

しかし、この琉歌の中には、この和歌には見られない「色やます鏡」という句も詠み込まれている。この琉歌における「鏡」という表現は、「色が増す」および「磨かれる菊」という二つの表現に同時に掛かっており、特定の意味を表すというより、「みがかれて咲きゆる」という句を導く枕詞の役割のみを果たす琉歌の技巧として捉えられる。もしこの表現がなくても、歌の意味は変わらないが、「色やます鏡」が詠み込まれることによってより洗練された歌の風味を生み出すため、この琉歌の中で用いられたのだと考えられる。

「増す鏡が磨かれる」という概念は例の『栄花物語』の和歌には見られないが、琉歌独自の表現ではなく、和歌にも広く使われているものである。以下の定家や為

家の歌にも見られる。

●『拾遺愚草』(1949) [歌人：藤原定家]

歌 ますかがみ ふたみのうらに みがかれて 神風清き 夏の夜の月

●『玉葉和歌集』(348) [歌人：藤原為家]

歌 みがきなす 玉えのなみの ますかがみ けふより影や うつしそめけん

以上のことを踏まえ、この琉歌は主に平安時代成立の『栄花物語』の和歌に影響を受け、その和歌を改作して詠まれたと推定できる。しかし、「増す鏡」および「磨かれる」という二つの表現を詠み込んでいることから、この特定の和歌のみならず、おそらくそれ以外の和歌からも影響を受けたと考えられる。

ただし、この琉歌の元となった和歌は、主に『栄花物語』の和歌だと考えられるため、この琉歌は藤原定家や為家の歌からも多少影響を受けたにもかかわらず、元となった和歌の時代を平安時代として定めておく。

⑥

和歌

『続千載和歌集』(51)
(歌人：前中納言定家)

梅がかや

まづうつるらん

影きよき

玉しま河の

はなの鏡に

琉歌

『琉歌全集』(217)、『古今琉歌集』(12)
(歌人：神村親方)

春の山川や (ハルヌ ヤマカワヤ)

花の水かがみ (ハナヌ ミズイカガミ)

色深くうつる (イル フカク ウツイル)

影のきよらさ (カジヌ チュラサ)

現代語訳：春の山川は、花の水鏡で、花の色が鮮やかに映っているのが、とてもきれいである。

この和歌とその改作琉歌の中には、次の二つの類似表現セットが見られる。

① 和歌の「玉しま河の はなの鏡に」と琉歌の「春の山川や 花の水かがみ」
7・7音句 ⇒ 8・8音句

② 和歌の「まづうつるらん 影きよき」と琉歌の「色深くうつる 影のきよらさ」
7・5音句 ⇒ 8・6音句

㊦の類似表現セットの中の最初の句は、多少異なる単語を用い、個別の風景が歌われていても、主要な意味として和歌も琉歌も川を指すことが明らかである。要するに、和歌においては「玉しま河の」という 7 音句、そして、琉歌においては「春の山川や」という 8 音句が見られる。さらに、同類似表現セットの 2 番目の句では、和歌の「はなの鏡に」という 7 音句に「水」という単語を上手く取り入れ、調整し、琉歌の形式に合わせるため、「花の水かがみ」という 8 音句が生み出されている。つまり、和歌の 7 音の「はなの鏡に」は、琉歌では 8 音の「花の水かがみ」に変形されたことが見えてくる。

同じように、㊧の類似表現セットの場合でも、両歌の中で「うつる」という主な意味を伝えている最初の句に続き、和歌の 5 音「影きよき」と琉歌の 6 音「影のきよらさ」が詠まれる。大和語の「影」+ 形容詞の「清し」の連体形である「きよき」という和歌の 5 音の句に対し、琉歌は「影」に「きよらさ」という沖縄方言で「きれい、美しいこと」を表す単語をつけているが、「きよらさ」(4 音)は沖縄語で「ちゅらさ」(3 音)に拗音化するので、琉歌の形式に相応しい 6 音句に合わせるため、「影」と「きよらさ」の間に「の」の接続助詞があることは上記の分析より明確である。なお、沖縄語では、「形容詞語幹+サ」が、体言の役割や文を終止する役割などの種々の機能を持ち、よく発達しているものであり、「きよらさ」は、琉歌などで多く見られるその一例である(『沖縄古語大辞典』1995)。

さらに注目すべき点は、㊦の類似表現セットと㊧の類似表現セットの位置は、和歌と琉歌の間で逆になっていることである。つまり、琉歌の中には、類似表現セットは㊦続いて㊧という順で現れているものが、和歌では㊧続いて㊦という順で現れるのである。和歌の下句の 7・7 音(㊦セット)をもし琉歌の中に同じく下句として取り入れるならば、琉歌の形式のルールに従わなければならないため、これを 8・6 音に変形する必要がある。同じように、和歌の上句の 7・5 音(㊧セット)をもし琉歌の中に上句として取り入れるならば、これを 8・8 音に変形しなければならない。7・7 音→8・6 音および 7・5 音→8・8 音に変形するより、7・7 音→8・8 音、そして 7・5 音→8・6 音に変形したほうが、相違は 1 音ですみ、より自然に聞こえ、過度の音数を足したり削ったりせずに同様の意味を保つことができると考えられる。以上の理由から、和歌の上句は琉歌の中で下句に変形され、和歌の下句は琉歌の中で上句となったのではないかと指摘することができる。

この和歌は鎌倉末期に編纂された勅撰和歌集『続千載和歌集』の歌である。同和歌集を撰進したのは、二条為世である。さらに、同和歌集の主な歌人は藤原定家や藤原為家であり、この歌の作者も「前中納言定家」という記述があるため、藤原定家だと分かる。定家が詠んだ歌は有名で、この和歌も『続千載和

歌集』以外にも様々な和歌集に含まれているため、琉歌人もこの和歌を改作した可能性があり得る。上の和歌が含まれている全ての歌集は以下の通りである。

- 『建保名所百首』（1215年・鎌倉時代成立）
- 『拾遺愚草』（1233年・鎌倉時代成立）
- 『歌枕名寄』（鎌倉時代成立）
- 『夫木和歌抄』（鎌倉末期成立）
- 『続千載和歌集』（1320年・鎌倉時代成立）

⑦

和歌

『拾遺愚草』（822）

（歌人：藤原定家）

かぜかよふ

扇に秋の

さそはれて

まづ手になれぬ

床の月かけ

琉歌

『琉歌全集』（1475）

（歌人：読人しらず）

うち招く扇の

風に誘はれて

ねやに入る月の

影のすださ

現代語訳：うち招く扇の風に誘われたように、開け放した寝屋の中までも月の光が差し込んで、いかにも涼しそうな感を与える。

この和歌も改作琉歌も「扇」の表現を技巧に用いつつ、秋が待ち遠しい夏の夜の様子を詠んでいるが、和歌のみが「秋」という表現をはっきりと詠み込んでおり、琉歌は、「月の影のすださ（意：月の影の涼しさ）」という表現が取り入れられているおかげで、和歌も同様に秋が待ち遠しい夏の場面を描いていることが読み取れる。両歌とも夏の夜の月がさやかに照っている中、扇を使いながら涼しさを求めるといった場面を描写しているが、それぞれの歌には異なる要素も見られる。和歌の場合は、風を通わせる扇に誘われるのは秋であるのに対し、琉歌の場合は扇の風に月の影の涼しさが誘われ、寝屋に入ってくる。また、「寝屋」という表現に関しては、和歌では「床」を用いているものの、この和歌が見られる他の歌集（『題林愚抄』や『六百番歌合』）には「ねや」というひらがな表記が使われているので、琉歌と一致していることが分かる。なお、この和歌も⑥の和歌と同じように、藤原定家によって詠まれたものである。

なお、この歌は上の歌集も含め、合わせて以下の5つの歌集に載っている。

- 『六百番歌合』（1192年・鎌倉時代成立）

- 『拾遺愚草』 (1233年・鎌倉時代成立)
- 『明題和歌全集』 (鎌倉中期～室町時代成立)
- 『題林愚抄』 (1447年～1470年・室町中期時代成立)
- 『類題和歌集』 (江戸初期成立)

⑧

和歌

『新撰和歌六帖』 (1691)

(歌人：衣笠家良)

いくたびも

こころをみがけ

ますかがみ

うらにはかげの

うつるものかは

琉歌

『琉歌全集』(265)、『古今琉歌集』(973)

(歌人：義村王子)

心あてみがけ (ククルアティ ミガキ)

胸中の鏡 (ムニウチヌ カガミ)

物のかげうつす (ムヌヌ カジ ウツス)

宝だいもの (タカラ デムヌ)

現代語訳：心して胸中の鏡をみがけ、
物の善し悪しを写して見せてくれる大
事な宝だから。

この和歌も琉歌も、磨いた心は鏡のように物の影の良し悪しを写してくれるという、仏教の教えを表している。この琉歌は和歌を改作したと考えられるが、和歌には見られない新しい視点も加えていると言える。琉歌における結句の「宝だいもの」、要するに「そういう磨いた心は宝だから」という、和歌にはない意味が新しく取り入れられていることで、歌の中にそもそも感じられる仏教の思考に、教訓の要素も強く入れていることが分かる。この歌だけでなく、琉歌自体には教訓歌が多く含まれている点は儒教の影響のためであろう。沖縄には儒教の影響が幅広く及んでおり、改作の元となった和歌と違い、この歌の中にも儒教の影響が感じられる。

この琉歌の元となった和歌は鎌倉時代成立の『新撰和歌六帖』の中に含まれており、衣笠家良という歌人によって詠まれたものである。衣笠家良は藤原定家の門弟であり、定家系列の歌人である。さらに、『新撰和歌六帖』という歌集を編纂した5歌人の中に衣笠家良のほか藤原為家も含まれており、『国歌大観・第2巻』(1984)の解題によれば、「この作品は、家良・為家・知家・信実・光俊の五歌人が、それぞれ詠じた六帖題和歌を歌題ごとに部類配列した素稿本がまずでき、ついでこれを各人に回覧し、合点を加えながら改作・さしかえが若干行われていちおう完成した (p.877)」のである。以上のことを踏まえ、衣笠家良は定家の教示を受け、『新撰和歌六帖』に歌が選ばれたときに、さらに為家

などの修正も受けたらろうと考えられ、定家、為家系列の歌人として認めてよいだろう。

なお、この和歌は『新撰和歌六帖』以外に、同じ鎌倉時代成立の『夫木和歌抄』にも収められている。

⑨

和歌

『新撰和歌六帖』(1691)

(歌人：衣笠家良)

いくたびも

こころをみがけ

ますかがみ

うらにはかげの

うつるものかは

琉歌

『琉歌全集』(2536)、

『古今琉歌集』(1671)

(歌人：喜瀬知恵)

心あてみがち (ククルアティ ミガチ)

くもらすな鏡 (クムラスナ カガミ)

影うつす間の (カジ ウツス ウェダヌ)

宝だいもの (タカラ デムヌ)

現代語訳：鏡というものは念を入れて磨いて、暗きないようにするがよい。影を写すこのできる間が宝で、影が映らないようになったら、何の役にも立たないし、何の価値もない。

この琉歌も⑧の琉歌と同じ和歌を改作したと考えられるが、まず、⑧の琉歌も⑨の琉歌も、それぞれ違う歌人によって作られたものであると指摘しておきたい。両歌とも元の和歌に倣って作られたのか、それともお互いに影響され、一方の琉歌に倣って他方の琉歌が作られたのか判定し難いが、両方の琉歌は儒教の要素が取り入れられていることが特徴であると言える。

⑩

和歌

『為家集』(1595)

(歌人：藤原為家)

むかし今

二つのひかり

ひとつにて

おなじそらにぞ

月日をもみし

琉歌

『琉歌全集』(128)

(歌人：不明)

おしつれて潮花 (ウシツイリテイ シュバナ)

汲み取ゆる桶に (クミトウユル ヲウキニ)

照る月や一つ (テイル ツイチヤ フィトウツイ)

影や二つ (カジャ フタツイ)

現代語訳：友達と一緒に潮を汲み取っている、空に照る月は一つであるのに左右の桶にはどれにも影が映り、二つの月があるのが面白い。

この琉歌は、他の改作琉歌と比べて和歌との共通表現が少なく、この和歌の改作琉歌と呼んでも良いかどうか判断に迷う。しかし、改作琉歌と呼べずとも、『為家集』に含まれる上の和歌の影響を受けていると判断できるだろう。なぜならば、和歌も琉歌も、月の光(影)を詠んだ場面の中で共に「一つ」や「二つ」を用いており、これは偶然ではないだろう。勿論、和歌の中には「一つ」や「二つ」が同時に詠まれている歌が多く見られるが、しかし、そのような場面に「月」の表現も取り入れられている歌はこの為家の和歌のみである。この和歌は同じ空に月かつ日の二つの光が同時に見える様子を描いているのに対し、この琉歌は遊び心があって、(友達と楽しく)潮を汲んでいる時に一つであるはずの月の、その影が二つに見える面白い様子を歌っている。この琉歌は和歌を改作したというより、和歌から「月」「光(影)」「一つ」「二つ」という表現のみを借り、歌の中に面白く独自に詠み込んだものと考えられる。

この和歌は鎌倉時代成立の藤原為家の私家集に見られる歌である。琉歌人も『為家集』を積極的に学んだ記録が残っているため、上の和歌もおそらく参考にしたのだろう。

⑪

和歌

『為家千首』(448)

(歌人：藤原為家)

みよしのの

山したかぜに

くもきえて

たかねの月の

かげぞさやけき

琉歌

『琉歌全集』(2902)

(歌人：不明)

秋風に雲も (アチカジニ クムン)

消えて長月の (チイティ ナガツイチヌ)

名に立ちゆる月の (ナニタチュル ツイチヌ)

かげのきよらさ (カジヌ チュラサ)

現代語訳：秋風に雲も吹き払われて、
長月(陰暦9月)の名月の影が美しい。

この琉歌の中に「秋風」という表現が用いられているのに対し、その琉歌の元となったと考えられる和歌においては「山した風」という表現が見られる。しかし、同和歌は『為家千首』の中で「秋二百首」という部に含まれているため、この和歌も秋の様子を詠んでいることは明らかである。この和歌は琉歌のように「名に立つ月」という表現を用いていないものの、この和歌以外に為家の歌の中では、『為家集』などに「名に立つ月」という表現が幾つか見られるので、琉歌との共通点となっている。その点については本章の4.3で詳しく述べる。

また、両歌共に結句で「影」の美しい様子を誉め称えているが、琉歌は「きよらさ」という典型的な表現を用いており、和歌では「さやけき」という形容詞を用いる。『日本国語大辞典』によると、「さやけ・し(明一・清一・爽一)(形ク)」「けし」は接尾語)の意味は、「①けじめがはっきりしている。はっきりしていて明らかである。あざやかである。見た目に分明である。②清らかである。さっぱりしている。気分的にさわやかである。すがすがしい。《季・秋》」などとされ、琉歌に見られる「きよらさ」(意：美しさ)とはこの場面で自由に置き換えられても意味には無理が生じないと考えられる。したがって、和歌における「さやけき」という、係助詞「ぞ」との係り結びに見られる形容詞の連体形は琉歌において「きよらさ」という終止法の形容詞に置き換えられたのであろうと考えられる。

この和歌も⑨の和歌と同様に藤原為家によって詠まれたもので、鎌倉時代成立の『為家千首』に含まれている。

⑫

和歌

『為家千首』(448)

(歌人：藤原為家)

みよしのの

山したかぜに

くもきえて

たかねの月の

かげぞさやけき

琉歌

『琉歌全集』(2958)

(歌人：不明)

押す風に雲も

(ウスカジニ クムン)

消えて長月の

(チイティ ナガツイチヌ)

名に立ちゆる月の

(ナニタチュル ツイチヌ)

かげのきよらさ

(カジヌ チュラサ)

現代語訳：そよ吹く風に雲も消えて、
長月(陰暦9月)の名月の影が美しい。

この琉歌は⑪の琉歌に非常に似通っており、上句の「秋風」を「押す風」に置き換える細かい相違のみが見られる。この⑫の琉歌においても和歌と同じように「秋」という単語が詠み込まれていなくても「秋」の様子が歌われることは、「長月」が用いられる表現から明らかとなる。

この琉歌も、⑪の琉歌とともに同じ為家の和歌に倣って作られたのか、それとも⑪の琉歌に影響を受け詠まれたのか、断言することができない。逆に、この⑫の琉歌を元にしつつ、⑪の琉歌が生まれた3つめの可能性も推定できよう。この問題について結論付けるのは難しいが、いずれの場合でも、⑪の琉歌も⑫の琉歌も、為家の和歌を改作し、直接的な影響を受けたのか、或いは為家の和歌が改作された琉歌を元にし作られたことによって、為家の和歌から間接的な影響を受けたことが推定できるだろう。したがって、この為家の和歌を⑪と⑫の琉歌の元になった可能性のある和歌として指摘できる。

⑬

和歌

『白河殿七百首』(532)

(歌人：藤原(二条)資季)

朝日さす

光にみゆる

ちりよりも

しげきはこひの

数にやあるらん

琉歌

『琉歌全集』(1793)、

『古今琉歌集』(320)

(歌人：美里王子)

朝日さす影の

(アサフィ サス カジヌ)

ちりのとぶごとに

(チリヌ トゥブ グトゥニ)

我肝あまがしゆる

(ワチム アマガシユル)

縁のつらさ

(ケンヌ ツィラサ)

現代語訳：朝日の射す光の中に、ちり

が揺れ動いて定まらぬように、我が恋も
どうなるか、我が心を動揺させて、
少しも落ち着かせてくれない。

両歌の中に「朝日差す光の中に飛んでいるのが見える塵のように、私の心も恋で動揺している」という場面が詠まれている。珍しく、独特の比喩であるため、琉歌が和歌と無関係に同様の場面を歌ったとは考えにくい。琉歌が和歌を元にして詠じられた、と推定できると考えられる。

両歌の上句には、「朝日さす」と「ちり」という共通表現が用いられているだけでなく、⑩の歌と同様に、ここでも和歌における「光」が琉歌の中で類義語の「影」として詠み込まれていることが分かる。また、和歌における「ちり」が呼応する動詞「見ゆ」が、琉歌において「飛ぶ」という動詞に置き換えられていることは、この改作琉歌の技巧の一つとして指摘できる。

一方、両歌の下句における表現は多少異なっていることが分かる。しかし、相違しつつも、両歌共に、恋や縁のつらさが心に刺激を与えることを詠じていることが共通している。琉歌の下句における「我肝あまがしゆる（意：私の心が動揺する）」や「縁のつらさ」という表現は、琉歌に独自に見られるものである。沖縄語では「心」を「肝（チム）」と呼び、日本語と幅広く異なっているため、和歌にも存在せず、琉歌の独特の表現である。一方、「縁」という単語は現代日本語にも存在する。しかし、「縁」という表現は、琉歌においては数多く詠まれているものの、和歌の場合には見られない。したがって、「肝」も「縁」も琉歌独特の表現と言ってもよいだろう。これらの表現がこの⑬の琉歌の中に詠み込まれていることによってこの琉歌は和歌の改作琉歌でありながらも、表現の上では元の和歌と異なる趣きがあると言える。

なお、この和歌は鎌倉時代成立の『白河殿七百首』の中に初めて見られ、二条資季という鎌倉時代の歌人によって詠じられたものである。『白河殿七百首』に載録された歌人の一部は、為家・為氏・為教一族でもあり、藤原（二条）資季は、為氏（二条家）の子孫である。したがって、広義では藤原（二条）資季も藤原為家系列の歌人と言える。

この和歌は『白河殿七百首』以外に以下の歌集にも収められている。

- 『明題和歌全集』（鎌倉中期～室町時代成立）
- 『題林愚抄』（1447年～1470年・室町中期成立）
- 『類題和歌集』（江戸初期成立）

⑭

和歌

『頓阿句題百首』(480)

(歌人：頓阿)

いつのまに
霜もおくらん
朝な朝な
みれば鏡の
影ぞかはれる

琉歌

『琉歌全集』(229)、

『琉歌百控・覽節琉』(554)

(歌人：読人しらず)

つれなさや日日に (ツイリナサヤ フィビニ)
思ひ増す鏡 (ウムイ マスカガミ)
見る見るに影の (ミルミルニ カジヌ)
変りはてて (カワイ ハティティ)

現代語訳：哀れ悲しいことよ、毎日毎日物思いが増すばかりで、鏡を見ると、見る見るうちに面影が変わり果てていく。

この和歌における「みれば鏡の 影ぞかはれる」という7・7音の下句は、琉歌の中で「見る見るに影の 変りはてて」という8・6音の下句に変形されていることが分かる。「影」の意味に関しては、琉歌も和歌と同じように、鏡の影を歌っているが、琉歌における「鏡」は音数律の関係で第2句に取り入れられていることも注目すべき点であろう。また、「鏡」は、上の琉歌の中では琉歌で多く見られる「思ひ増す鏡」という慣用句として歌われているが、その表現は和歌にも用いられることがある。上の両歌の内容も同様の意味を表しているが、毎日鏡に映っている影が、時が流れるにつれて変わっていくという惜しい事実が描かれる内容である。両歌の下句に見られる「見る」「鏡」「影」「変わる」という共通表現のみならず、和歌における「朝な朝な」と琉歌における「日日に」という類義語からも両歌の類似点がうかがえる。

この和歌を詠んだのは、頓阿という鎌倉末・南北朝時代の歌人であるため、本研究では、室町時代の歌人として考えられる。頓阿は、24歳のときに比叡山で出家し、のち二条為世から古今伝授を受け、二条為世に師事し、歌体は二条派風を継いだ。古今集などの伝統的な風体を理想とし、和歌を詠じた歌人である。

また、二条為世は藤原為氏の子である。藤原為氏の祖父は定家で、父は為家であるため、この和歌を詠じた頓阿もそれらの歌人と深い関係を持つ人物であったことが分かる。この和歌と琉歌の影響関係も、藤原定家の系列の歌人と関連付けて、定家まで遡るであろうことが指摘できる。

また、「鏡を見る際、影が変わっていく」という概念は、この和歌のみならず、

多くの和歌に詠まれている表現である。そのため、この琉歌はおそらくこの和歌に限らず、他の和歌からの影響も受けたと推定できる。参考までに関係があると考えられる和歌を下に列挙する。

●『金葉和歌集』(599) [歌人：源師賢朝臣] (平安時代成立)

歌 かはりゆく かがみのかげを 見るたびに おいそのもりの なげきをぞ
する

●『続拾遺和歌集』(1217) [歌人：源仲業] (鎌倉時代成立)

歌 憂き事は もとの身にして 老いらくの 影のみかはる ます鏡かな

●『続千載和歌集』(1559) [歌人：従二位成実] (鎌倉時代成立)

歌 よしさらば なみだにくもれ みるたびに かはるかがみの かげもはづ
かし

●『為家集』(1499) [歌人：藤原為家] (鎌倉時代成立)

歌 いにしへの かげさへかはる ますかがみ うつり行くよを みるぞかな
しき

上記の和歌を観察すると、各歌の中に琉歌における「つれなさ」と同様に、悲しさを表している「なげき」「憂き事」「涙」「はづかし」「かなしき」という表現が詠み込まれていることがわかる。その点は、頓阿が詠じた「いつのまに～」の和歌には見られず、これらの4首の和歌が「つれなさや日日に～」の琉歌と共通していると言える。

また、これら4首の和歌が含まれている歌集は、平安時代から鎌倉時代にわたって編集された歌集である。

このように、⑭の琉歌は、頓阿の和歌から主な影響を受けたと推定されながらも、上の『金葉和歌集』『続拾遺和歌集』『続千載和歌集』『為家集』の4歌集の和歌も参考にしたのではないかと考えられる。上の関連和歌4首はすべて『為家集』や勅撰和歌集所収の歌であり、有名なものであるため、琉歌人がこれらを学んだ可能性もあり得るだろう。しかし、現在の調査結果としては、改作琉歌の元となった主な和歌として、頓阿の和歌のみを指摘し、他の4首の和歌は参考までに紹介しておく。

以上をまとめると、「影」が詠み込まれている琉歌60首の中には、和歌を改作した琉歌が14首見られ、23%に及ぶ。前章で取り上げた「面影」を詠み込んだ和歌の改作琉歌の割合(11%)と比較すれば、二倍もの高い割合となっており、

「影」を含んだ和歌の改作琉歌の方が数多く見られる。改作琉歌 14 首の内、平安時代の歌集にある和歌を学んだ琉歌が 5 首 (①～⑤) あり、鎌倉時代の歌集の和歌を元にした琉歌が 8 首 (⑥～⑬) あり、残りの 1 首 (⑭) は室町時代初出の和歌を改作した琉歌である。また、その中には、特定の歌人によって詠じられた琉歌が 6 首 (43%) あり、読人知らずの歌は 8 首 (57%) を占め、読人知らずの琉歌のほうが多いことが判明した。

改作琉歌の内容を分析すると、それらの歌に詠み込まれている「影」は次の意味を有することが分かる。以下のデータを見れば、改作琉歌の中にも「月影」を歌った琉歌が半数 (7 首) を占めていることが明らかである。

- 影＝光：月影 (7 首)、朝日の影 (1 首) 蛍の光 (1 首)
- 影＝映るもの：鏡の影 (2 首)、水面の影 (1 首)
- 影＝面影：2 首

また、改作琉歌 14 首の元となったと考えられる和歌は、11 首見られ、その中の 4 首 (36%) は平安時代成立の歌集、6 首 (55%) は鎌倉時代成立の歌集や、残りの 1 首 (9%) は室町時代の歌集に初出している。また、それらの 11 首の和歌から、ほとんどの歌数 (8 首²⁵、73%) は、藤原定家 (2 首)、為家 (2 首)、頼阿 (1 首) や勅撰和歌集 (『後拾遺集』・『続千載集』、計 2 首) および物語 (『狭衣物語』・『栄花物語』、計 2 首) の和歌となっていることが判明した。このような結果は、「面影」を詠み込んだ歌の場合と同様に、「影」を歌った琉歌の場合にも、定家、為家、そして勅撰和歌集や物語の和歌の影響が大きいことを証明している。

最後に、改作琉歌ではないが、琉歌と和歌共によく使われる 3 つの表現について、次の 4. で考察を進めたい。

4. 「影」を詠んだ琉歌と和歌において用いられる共通の表現 (句)

「影」を詠んだ琉歌と和歌共に見られる以下 3 つの共通表現 (句) について考察したい。

- さやかに照る月の影
- 四方に照る月の影
- 名に立つ月の影

²⁵ 『続千載集』の和歌は定家の和歌となっているため、9 首ではなく、8 首となる

4-1. 琉歌と和歌における「さやかに照る月の影」

前述したように、「影」を歌った『琉歌全集』の琉歌の中で、半分以上の歌は「月の影」を歌っている。さらに、「月の影」と「さやか」という単語との関係がよく見られ、両表現が歌われる琉歌は6首あるが、その用例を以下に提示する。なお、括弧の番号は全て『琉歌全集』に拠る歌番号であり、右側の片仮名表記は琉歌の発音の表記である。

(1111) [歌人：読人しらず]

さやかに照る月の

影の恨みたる

人のいことばや

なまど知ゆる

サヤカ テイル ツィチヌ

カジヌ ウラミタル

フィトウヌ イクトウバヤ

ナマドゥ シユル

現代語訳：さやかに照り輝く月を恨み、歌など詠んだ人がいたが、その人の言葉が、今初めて知ることができた。

(1474) [歌人：豊見城王子朝尊^{トウミグスィクラオジチョオソン}]

おす風もすださ

でかやうおしつれて

さやかに照る月の

かげに遊ば

ウスカジン スィダサ

ディカヨ ウシツィリティ

サヤカ テイル ツィチヌ

カジニ アスィバ

現代語訳：そよ風が吹いて、誘い出されるような心持ちだ。さあ一緒に出て、冴えて照り輝く月影を仰いで遊ぼうよ。

(1544) [歌人：伊江朝真^{イイチョオシン}]

名に立ちゆる今宵

池の玉水に

さやかに照り渡る

月のみかげ

ナニタチュル クユイ

イチヌ タマミズィニ

サヤカ ティリワタル

ツィチヌ ミカジ

現代語訳：評判の高い今宵は、池の美しい水に映る月影が冴えて照り輝いている。

(1569) [歌人：^{ハナグスイクコオク}花城康故]

雨はれて見れば

さやか照る月の

霜の上うつる

影のきよらさ

アミ ハリテイ ミリバ

サヤカ テイル ツィチヌ

シムヌ ウヰニ ウツイル

カジヌ チュラサ

現代語訳：雨が晴れて見ると、さやかに照る月が、霜の上に映って光っている影が美しい。

(2330) [歌人：読人しらず]

なまど思知ゆる

さやか照る月の

影よ恨みたる

人の言葉

ナマドゥ ウミシユル

サヤカ テイル ツィチヌ

カジュ ウラミタル

フィトゥヌ クトゥバ

現代語訳：明月を見て恨めしいといった人の言葉は、そのわけがわからなかったが、悲しい日に会って初めて思い知ることができた。

(2860) [歌人：^{カヒラウエエカタチヨオハン}川平親方朝範]

いなか山国も

さやか照り渡る

月によしあしの

影やないさめ

イナカ ヤマグニン

サヤカ ティリワタル

ツィチニ ユシアシヌ

カジヤ ネサミ

現代語訳：田舎の山国でも、照り渡る月の光に、良い悪いの差別はあるまい。どこでも平等に月は照らしているであろう。

上の 6 首の琉歌の中には、「さやか」という単語は、「照る」か「照り渡る」という動詞のみと結びついている。「月の影」を歌った『琉歌全集』の琉歌の中には、もっぱらそれらの組合せが見られる。つまり、「月の影」を含んだ琉歌の中では「さやか」は「照る／照り渡る」以外の動詞とは結ばれていないのである。

一方、「月影」を詠んだ和歌を調査した結果、「さやか」は、「さやかなり」という形容動詞の形や、「さやかに出づ」、「さやかに見ゆ」、「さやかにすむ」などの様々な動詞と結ばれる形で見えてくる。また、琉歌と同様に、「さやか」は「照らす」という動詞とも結ばれるが、当該の 5 首の和歌は以下の通りである。

- ① 『拾遺愚草 (定家)』 (1216 年～1233 年の成立) →「面影」と「立つ」の組み合わせを詠んだ和歌が 17 首あり、「面影ぞ立つ」も 2 回見られる)
(2971 番歌)

しのぶらん 涙にくもる 影ながら さやかにてらせ 有明の月

- ② 『六条左大臣家歌合』 →「面影」と「立つ」の関係は見られない
(1 番歌) (作者：ただむね)

月かげの さやかにてらす 夏の夜は 風ふかねども すずしかりけり

- ③ 『左近権中将藤原宗通朝臣歌合』 →「面影」と「立つ」の関係は見られない
(9 番歌) (作者：住吉神主国元)

ここにても さやかにてらす つきかげを あかず心の そらにゆくかな

- ④ 『^{さねきのはは}実材母集』 (実材母の生没：1267 年～1293 年) →「面影」と「立つ」の組み

合わせを詠んだ和歌が 7 首見られる。) (^{さねきのはは}実材母は、^{さいおんじきんつね}西園寺公経の側室であ

るが、^{さいおんじきんつね}西園寺公経の姉は藤原定家の後妻で、公経は定家の義弟でもある。)

(856 番歌)

おほぞらは むなしときけど 月も日も さやかにてらす かげとやは見ぬ

- ⑤ 『^{きのしたちようしゅうし}拳白集』 (木下長嘯子の歌文集である。本人の生没：1569 年～1649 年)

→「面影」と「立つ」の組み合わせを詠んだ和歌が 8 首あり、「面影ぞ立つ」も 3 回見られる)

(847 番歌) (詞書：故郷月)

里はあれて つばめならびし うつばりの ふるすさやかに てらす月かげ

これらの和歌では、「さやか」は「照らす」と呼応していることが分かる。さらに、「面影ぞ立つ」との関係も、特に①、④や⑤の例で見られ、また、①と④の歌に関しては藤原定家やその系列の歌人によって詠まれたものだということが分かる。

『日本国語大辞典・第 2 版』(2001)によると、「さやか【清か・明か】」は「はっきりとしているさま。明るく清らかであるさま。明白に、よく見えるさま。

あきらか。はっきり。明瞭（めいりょう）。まさやか」という意味である。

また、『古語大辞典』（1983）によると、「さやか」は、ナリ活用の形容動詞である。そのため、上記の和歌の中で動詞の「照らす」と結ばれる場合には、「さやかに」という形容動詞の連用形で見られる。

一方、琉歌の中では、「さやか」は「に」がない形で見られるが、その理由は「さやか」が沖縄語では副詞となっているためである。また、その意味は、「くっきりと澄んではっきりしているさま」であり、大和言葉の「さやか」と同様の意味となることが分かる（『沖縄古語大辞典』1995）。

和歌における「さやかに照らす」という7音句、および琉歌に見られる「さやか照る月の」という8音句は、同様の意味を表しながら、それぞれの歌において相応しい音数律であり、4音の「さやかに」と3音の「さやか」もそれぞれの両歌の中で音数律のルールを守るために、重要な役割を果たしていることが分かる。具体的な例を見れば、琉歌は和歌と違って4音の「さやかに」の代わりに3音の「さやか」を用いているため、8音句を完成するために、3音の「さやか」に続く語は5音である必要があるため、和歌に見られる3音の「照らす」は当然そのままでは使えない。その代わりに、「照らす」と同様の意味を有する5音の「照り渡る」を用いるか、若しくは同様の意味を表す2音の語「照る」の後ろに3音の「月の」という、和歌にも見られる表現を同句内に取り入れ、両方の場合にその技巧によって8音句を完成させる。

ところが、「月影」が詠まれる和歌を調査した結果、「さやか」が「照らす」以外の動詞と結ばれることも多く、その場合にも、藤原定家系列の歌人との関係を辿ることができるのである。

以上を踏まえ、「月影」を詠んだ和歌は、「さやか」を様々な動詞との組み合わせの中で生かしていると考えられる。しかし、なぜ琉歌が「さやか」＋「照る」の組合せのみ享受していたかについては明解を得ない。今回はそのことを問題点として指摘するに留め、今後の研究課題としたい。

4-2. 琉歌と和歌における「四方に照る月の影」

以下の琉歌は改作琉歌ではなくても、和歌にも見られる表現を用いている。

『琉歌全集』(1075) [歌人：勝連按司朝慎 (カツィリン アジ チョオシン)]
十五夜照るお月 ジュグヤ ティル ウツィチ
名に立ちゆるごとに ナニ タチュル グトゥニ
四方に照り渡る ユムニ ティリワタル
影のきよらさ カジヌ チュラサ
現代語訳：十五夜のお月様は、評判の高いように、四方に照り輝く光が誠に美しい。

「月の影」は「四方に照る」という表現を用いた和歌も僅かに見られ、以下に列挙する。

●『宝治百首』(3964) [歌人：藤原為家]

歌 世を照す よもの光も 君がため 我が日の本と いではじめけり

●『為家集』(1554) [歌人：藤原為家]

歌 おしなべて 四方にてらせる 月も日も 西ぞ光の きはめなりける

●『松下集』(784) [歌人：歌僧正広]

歌 なぞへなき 君が恵を 日の光 四方に照して 春やきぬらむ

●『正和四年詠法華経和歌』(36) [歌人：藤原朝臣頼清]

歌 とけがたき みゆきもきえぬ 春日の きよきみかげの よもにてらせば

上記の『宝治百首』と『為家集』の和歌は藤原為家によって詠まれたものであり、残りの2首はそれぞれ違う歌人による歌である。『松下集』と『正和四年詠法華経和歌』の2首も「四方に照らす」という表現を用いているが、月影と呼応しているのではなく、両歌共に「日の光」や「春日のきよきみかげ」のように、「太陽の光」と連結していることが分かる。したがって、藤原為家の歌のみが、「四方に照らす」という表現を「月」と関連付けている。

結論としては、琉歌もこの為家の歌における表現から、影響を受けた可能性があり得ることについて指摘しておきたい。

4-3. 琉歌と和歌における「名に立つ月の影」

本章の3.で紹介した⑪および⑫の改作琉歌の中には、「名に立ちゆる月の影のきよらさ」という2句が両歌共に見られる。似通った表現は和歌の中にも見られるが、調査結果では、この表現より「名に高き月」という表現のほうが多く見られることが分かった。一方、琉歌は「名に高き月」のような表現は一切取り入れていない。

「名に立つ月／影」という表現は様々な和歌に見られるが、その数が最も目立つのは、藤原為家の歌である。それらの歌を以下に示す。

●『為家集』(119)

歌 春の夜は 霞のうらの 名にたてて くもりもはず すめる月かな

●『為家集』(630)

歌 あはれなど 名にたつ秋の月にしも なかばくもりて 夜半もふくらん

●『為家集』(752)

歌 秋の夜を なが月としも 名にたてて 十日あまりに すめるかげかな

●『歌枕名寄』(8634) [歌人：藤原為家]

歌 玉の浦の 名にたつ物は 秋の夜の月にみがける ひかりなりけり

4首全て、為家によって詠じられた歌であり、鎌倉時代成立の歌書に収められている。また、為家以外にも、『実材母集』に同様の表現が見られる。

『実材母集』(487)

歌 名にたてる かすみの浦の なみのうへに おぼろにやどる はるの月かげ

この歌人は4.1で既述したように、西園寺公経の側室である。また、西園寺公経は定家の義弟でもある。したがって、この表現についても、琉歌は藤原定家系列の歌人や為家によって作られた表現の影響を受けた可能性があると言えるだろう。

5. おわりに

本章では、「月影」、「水面や鏡に映る影」、「面影」という3つの意味を持つ「影」という表現が詠まれる『国歌大観』の和歌（1万首以上）と『琉歌全集』の琉歌（60首）を主に対象にし、調査を行った。また、それに加えて、『明題和歌全集』や『類題和歌集』に含まれる和歌も適宜参照した。この調査結果により、「影」を詠んだ和歌の中でも、同じく琉歌の中でも、「月影」が詠まれる歌が殆どであり、「影」が見られる両歌の中で過半数を占めていることが明らかとなった。また、第1章で指摘した「面影→立つ」のような、「影→立つ」という関係は、『琉歌全集』の琉歌には一切見られず、『国歌大観』の和歌ではその例はあるが、非常に少ないことが分かった。「面影」の意味で詠まれた「影」を含んだ和歌には、「立つ」という単純動詞が「影」と呼応する和歌は1首しか見られず、その他に「影」と結ばれる「立つ」動詞は全て複合動詞であり、その用例数が20首を下回ることから、和歌でも「影→立つ」の関係性は薄いと結論づけられよう。上述の「月影」という表現を詠み込んだ歌数が「影」を詠んだ両歌の中でも最も多い点や、「影→立つ」という関係があまり見られない点は、琉歌と和歌の大きな共通点であり、両歌の関係性を示すものとして理解できる。

「影」を詠み込んだ琉歌と和歌の関係程度をより正確に示すには、琉歌の中に、特定の和歌を積極的に学び改作したもの、いわゆる和歌の改作琉歌がどの程度見られるのかという指摘が重要であると考えられる。「影」を詠み込んだ琉歌60首の中に、和歌の改作琉歌が14首見られ、23%に及んでいることが判明した。これらの14首のうち、平安時代初出の和歌を改作した琉歌が5首あり、鎌倉時代の和歌を元にした琉歌が8首あり、そして室町時代の和歌を改作した琉歌は残りの1首である。その内、特定の歌人によって詠じられた琉歌は6首（43%）、読人知らずの歌は8首（57%）を占め、読人知らずの琉歌のほうが多いことが判明した。また、「影」を詠んだ全体の琉歌60首のみならず、和歌の改作琉歌14首の中でも、最も多く見られるのは「月影」を詠み込んだ琉歌であり、7首（50%）となる。

本調査で指摘できた改作琉歌14首の元となったと考えられる和歌は、計11首ある。その中の4首（36%）は平安時代、7首（55%）は鎌倉時代、そして残りの1首（9%）は室町時代成立の歌集に初めて見られることが分かった。また、これらの11首の和歌から、ほとんどの歌数（8首²⁶、73%）は、藤原定家（2首）、為家（2首）、頓阿（1首）や勅撰和歌集（『後拾遺集』・『続千載集』、計2首）および物語（『狭衣物語』・『栄花物語』、計2首）の和歌であることが指摘できる。このような結果は、「面影」を詠み込んだ改作琉歌の場合と同様に、「影」

²⁶ 『続千載集』の和歌は定家の和歌となっているため、9首ではなく、8首となる

を取り入れた和歌の改作琉歌にも、定家、為家、そして勅撰和歌集や物語の和歌からの影響が大きいことを証明している。さらに、「面影」を歌った改作琉歌の場合に、定家系列の歌人や勅撰和歌集・物語の和歌の影響が 3 分の 1 程度確認された結果と比較して、定家系列の歌人や勅撰和歌集・物語の和歌から「影」を詠み込んだ改作琉歌への影響はより高く、73%に達することが判明した。

この調査結果も、一般の那覇士族がどの和歌集や和文学作品を学んだかについての記録を、強く裏付けることになっていると言えよう。

最後に、改作琉歌のみならず、特定の句の中でも和歌の影響を辿ることができる。「影」を取り入れた歌の場合は、とりわけ「さやかに照る月の影」、「四方に照る月の影」や「名に立つ月の影」がその例として挙げられる。この 3 つの表現についても、藤原定家、為家やその系列の歌人の影響を受けたものである可能性があり得ると考えられる。

【付記】

本章は、「琉歌と和歌の表現比較研究―「影」をめぐる―」（『法政大学大学院紀要』第 70 号、2013 年）を母体とし、加筆修正したものである。

第3章

琉歌の季節語（春夏秋冬）をめぐって

——オモロや和歌との表現比較——

1. はじめに

琉球諸島は、日本本土と違い亜熱帯地方に位置しているため、季節も日本のはっきりと区切った四季とは少し異なる趣があると言える。沖縄の季節は、主に夏と冬に分けられ、それに加えて沖縄風土の独特の時期である「うりずん」や「若夏」が夏前に味わえる。それらの季節は全て、沖縄の最古歌謡集『おもろさうし』の中にも見られ、昔から人々の生活に浸透している。

このような気候を有する沖縄では、昔から歌い続けられてきた歌とはオモロのみならず、琉歌も挙げられる。季節を歌った内容は、琉歌の中にも、オモロと同様の特徴が反映されているだろうと考えられるが、琉歌においてはその状況がどうなっているのだろうか。季節語に関しては、同じ気候の中で生まれたオモロと似ている状況であるか。それとも、大和のはっきりとした四季を詠み込んだ和歌と共通点があるのでしょうか。

序章で既述したように、琉歌は、沖縄のオモロや大和の和歌と深い関係を持つことについて、これまでも様々な研究者によって指摘されている。また、四季を歌った琉歌に関しても、和歌から琉歌への影響の指摘がある（外間、仲程 1974、島袋 1995、嘉手苺 2003）。しかし、その指摘は、両歌における「桜」、「梅」や「菊」などのような共通表現が何例見られるかという点や、その表現を詠み込んだ歌例の紹介、また改作琉歌の僅かな例に関する指摘に過ぎず、徹底的な調査はいまだなされていない。

そこで、本章では、従来の研究では調査の及んでいなかった、琉歌、オモロや和歌における季節語（春・夏・秋・冬）と呼応する動詞やそれ以外の表現との関係に注目し、琉歌を中心に、オモロと和歌との共通点と相違点について考察する。加えて、琉歌の季節語に関する表現は、オモロと和歌のどちらと共通点が多く見られるのかという問題を明らかにしたい。また、季節語を詠み込んだ全ての琉歌に関する徹底的な調査をもとに、それらの琉歌の中で、和歌およびオモロを改作した琉歌がどのぐらいの割合で見られるか、どの和歌集の影響を受けているのかという問題についても指摘したい。

なお、本研究で用いたテキストは、琉歌については、『琉歌全集』および『琉歌大成』、オモロに関しては、『おもろさうし上・下』である。また、和歌に関

しては、『国歌大観』を活用し、それに加えて『明題和歌全集』や『類題和歌集』も適宜参照した。

なお、『国歌大観』にある季節語を詠み込んだ和歌が数万首を越え、その数が極めて多いため、本章の「2. 琉歌、オモロや和歌における季節語の使用率」と「3. 琉歌、オモロや和歌における季節語と動詞やそれ以外の表現との組み合わせについて」で調査対象とした和歌は、以下の歌書に収められている歌である。

- 上代和歌：『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』
- 勅撰和歌集：『古今和歌集』、『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』、『後拾遺和歌集』、『金葉和歌集』、『詞花和歌集』、『千載和歌集』、『新古今和歌集』、『新勅撰和歌集』、『続後撰和歌集』
- 定家の歌書：『詠歌大概』、『百人一首』、『定家卿百番自歌合』
- 為家の歌集：『為家集』、『為家千首』、『為家五社百首』、『中院集』、『為家一夜百首』
- 頓阿の歌集：『草庵集』、『井蛙抄』、『頓阿百首』、『頓阿五十首』
- 物語：『伊勢物語』、『源氏物語』、『狭衣物語』

以上の歌書を選択した理由は、序章で既述した、那覇士族が学んでいた和歌の歌書に関する池宮（1976、p.150）による記録に基づくものである。

池宮の引用に基づいて、本章の「2」と「3」に提示した和歌は、勅撰和歌集や上代和歌、また『国歌大観』に含まれる定家、為家や頓阿の全ての歌書や、それに加えて物語に含まれる歌となっている。

しかし、本章の「4」～「7」の改作琉歌に関しては、上の歌書に限らず、『国歌大観』の全ての和歌を調査対象とし、それに加えて『明題和歌全集』や『類題和歌集』も適宜参照した。

2. 琉歌、オモロや和歌における季節語の使用率

まず、琉歌と和歌における「春・夏・秋・冬」という季節語が見られる歌数と、その割合を示した以下のデータを対照にしながら、比較を行いたい。

表 1

季節語を歌った琉歌数と割合 (%)			季節語を詠んだ和歌数と割合 (%)		
春	178 首	43%	春	1998 首	36%
夏	60 首	14%	夏	429 首	8%
秋	129 首	31%	秋	2700 首	49%
冬	48 首	12%	冬	372 首	7%
計	415 首	100%	計	5499 首	100%

上記のデータに基づき次のことが明らかになる。

表 2

琉歌における季節語の使用率 (順位)			和歌における季節語の使用率 (順位)		
1.	春	43%	1.	秋	49%
2.	秋	31%	2.	春	36%
3.	夏	14%	3.	夏	8%
4.	冬	12%	4.	冬	7%

琉歌における季節語の割合の高さは、「春・秋・夏・冬」という順になっており、「春」という表現を詠み込んだ歌数が最も多く、「冬」は逆に最も少ないことが分かる。それに対し、和歌における季節語の割合の高さは、「秋・春・夏・冬」という順になっている。春と秋の順以外には、両歌における季節語の使用率の順位は同様の傾向を示すと言える。

また、その似通った傾向は次のデータからもさらに明らかになる。

表 3

同様の傾向					
琉歌における季節語の使用率			和歌における季節語の使用率		
「春」 + 「秋」	74%	(高い↑)	「春」 + 「秋」	85%	(高い↑)
「夏」 + 「冬」	26%	(低い↓)	「夏」 + 「冬」	15%	(低い↓)

和歌の中にも、琉歌の中にも、「春」と「秋」という表現を詠み込んだ歌の割合は、「夏」と「冬」の使用率より遙かに高いことが分かる。琉歌の場合は、その割合が 3 倍高く、和歌の場合は、5 倍以上高くなっていることが分かる。

嘉手苺 (2003) も、春夏秋冬に分類された和歌と琉歌の歌数を対比した研究を行い、その際、和歌の第一の勅撰和歌集である『古今和歌集』およびその影

響を受けた琉歌の『古今琉歌集』（小那覇朝親編、1895年）を対象にした。その結果、『古今琉歌集』の中では春の歌が最も多く、秋が2番目、夏が3番目であり、冬の歌が最も少なく見られるのに対し、『古今和歌集』の和歌は、「秋・春・夏・冬」という順になっている。また、『古今琉歌集』における春秋の歌（189首）が夏冬の歌（94首）より2倍ほどあり、『古今和歌集』における春秋の歌（279首）が夏冬の歌（63首）より4・5倍近くある、という結果とは、範囲を広げた本章の調査結果も同様であることが分かる。

嘉手苺（2003）は、「『古今〈和歌〉集』の歌人たちが春秋を好んだことがうかがえるものであり、とりわけ秋に心がひかれたようである（p.26）」（〈 〉内は筆者加筆による）と述べている。さらに、琉歌も春と秋の順を除いて、同様の傾向を示しており、本章の調査結果からも同じことが窺える。

それに対し、沖縄の最古歌謡集である『おもろさうし』のオモロにおける季節語の使用率の状況はどうなっているのだろうか。調べてみると、次の結果（表4）が判明する。

表4

季節語を歌ったオモロの歌数と割合（%）		
春	0首	0%
夏	9首	69%
秋	0首	0%
冬	4首	31%
計	13首	100%

まず、オモロの中に、季節語が詠み込まれている歌が非常に少ない。さらに、オモロの中には、「夏」と「冬」のみが歌われており、琉歌と和歌の中に、特に多く見られる「春」と「秋」という表現は一切見られない。そのことは、「春」と「秋」が特に多く詠み込まれている琉歌と和歌の状況とは大幅に異なる結果となっている。

次の「3」でそれぞれの歌における季節語と動詞との組み合わせの使用率はどのようになっているのか、について詳しく述べたい。

3. 琉歌、オモロや和歌における季節語と動詞との組み合わせについて

まず、琉歌と和歌における季節語と動詞との組み合わせに関するデータを組み合わせの使用率の順で以下の表5に示す。

表5

琉歌における季節語と動詞との組み合わせ					和歌における季節語と動詞との組み合わせ				
順位	季節語	季節語を詠み込んだ歌数	季節語が動詞と呼応する歌数	季節語と動詞との組み合わせの使用率	順位	季節語	季節語を詠み込んだ歌数	季節語が動詞と呼応する歌数	季節語と動詞との組み合わせの使用率
1.	春	178 首	69 首	39%	1.	春	1998 首	642 首	32%
2.	秋	129 首	41 首	32%	2.	冬	372 首	114 首	31%
3.	冬	48 首	11 首	23%	3.	秋	2700 首	694 首	26%
4.	夏	60 首	12 首	20%	4.	夏	429 首	67 首	16%

琉歌の中にも、和歌の中にも「春」と動詞との組み合わせが最も多く見られる。また、逆に最も少ないのは、「夏」の歌である。両歌共に、「夏」と名詞との組み合わせが目立つ。「春」／「夏」と動詞との組み合わせを比較すれば、「春」のほうが、両歌の中で2倍もの高い割合を占める。

また、ここでも2番目と3番目の位置になっている「秋」と「冬」の順位を除けば、季節語と動詞との組み合わせに関しても琉歌と和歌は同様の傾向を示していると言える。

一方、オモロにおける季節語と動詞との組み合わせはどのようになっているのかといえば、オモロの中に「夏」と「冬」という季節語は見られるが、「春」と「秋」は一切見られない。さらに、「夏」が歌われているオモロ9首のうち、5首の中には動詞「立つ」(7回)、「知らず」(2回)や「判らず」(2回)との組み合わせが見られ、また「冬」が歌われているオモロ4首のうち、2首の中に動詞「知らず」(2回)と「判らず」(1回)の呼応があるものの、琉歌における「夏」と「冬」はそうした動詞と結ばれることが一切ないことが判明した。

ただし、ここでは「立つ」について言及する必要がある。「立つ」は季節語を歌ったオモロの中には最も多く見られ、「夏」を詠み込んだオモロのみならず、「若夏」や「うりずん」を歌ったオモロも同様の状況となっている。琉歌には一切ないものの、「夏」を歌った琉歌には、動詞「立つ」ではない「立ち返る」という動詞が「春過ぎて夏に 立ちかへて咲きゆる」のように2首中に見られる。

動詞【たちかえる(立変・立帰・立還)】は、『日本国語大辞典・第2版』(2000-2002)によると、「①繰り返す。②折り返す。折り返してすぐ返事をする。③もとの場所、行きすぎた場所などにもどる。帰る。④もとの状態にもどる。昔にかえる。問題の時点にもどる。⑤年が改まる。新しい年になる。」などの意味があり、また『沖縄古語大辞典』(1995)によると、【立ち返る(タチカイユン)】(琉歌のみに使用)の意味は、「元に戻る。用例のように、年にかけて用いられ

ると、新しい年になる、年が改まる」などのようになる。それに加えて、『日本国語大辞典・第2版』は、【たちかえり（立返・立帰）】という副詞の意味を「繰り返し。ひっきりなしに」などのように定義する。

以上から、琉歌の「春過ぎて夏に 立ちかへて咲きゆる」という2句を次の2パターンのおりに現代語訳に訳することができるだろう。

- 1) 春が過ぎて、再び夏になり、咲く（花）
- 2) 春が過ぎて、夏（の時）に繰り返し咲く（花）

1) は、「夏に立ちかへて」という表現の中で動詞「立ち返る」が直接に「夏」と呼応し、「再び夏になった」という意味を成す。また、2) は、「夏に立ちかへて咲きゆる」という表現の中で「立ちかへて」が副詞の役割を果たしつつ「夏」ではなく、動詞「咲く」と呼応し、「夏の間」に再び咲く」という意味を成す。

いずれの場合でも、「夏が立つ」という意味と異なる意味となり、「夏が立つ」とは訳せないと考えられる。なぜかといえば、文法的にも「立ちかへて」の前に来る助詞は、「が」ではなく、「に」である。琉歌の場合は、季節語と「立つ」の組み合わせの例は見られないので、確認することが不可能であるが、和歌の場合も、オモロの場合も、季節語と「立つ」の組み合わせの中では、助詞「が」（例：若夏が立てば、おれづもが立てば（オモロ巻 14-994）、或いは助詞なしの組み合わせ（例：夏立てば（オモロ巻 6-327）、春立つ（古今和歌集 2 番歌））が見られ、助詞「に」は見られない。したがって、琉歌に見られる「春過ぎて夏に立ちかへて咲きゆる」という2句は、オモロにおける季節語と「立つ」の組み合わせとの関係が証明し難いと考えられる。一方、「立ち返る」が和歌では「春・夏・秋」と結ばれることがあり、特に「立ち返る」は「春」との組み合わせが顕著である。また、和歌の中にも「春をば夏に たちかへて」という句が1例見られ、琉歌の「春過ぎて夏に 立ちかへて咲きゆる」に似ているものだと言える。

以上のことを踏まえて、オモロに「春」や「秋」が一切含まれていない事実から、琉歌はその語について、オモロから直接影響を受けていない可能性があり、また「夏」と「冬」と動詞との組み合わせに関しても、オモロからの影響は証明されないと考えよう。

季節語の使用率や動詞との組み合わせの使用率などという大まかな傾向に関しては、季節語を詠み込んだ琉歌は、オモロよりも和歌のほうと共通点が多く見られることが明らかとなった。

次は、「春・夏・秋・冬」それぞれの季節語の歌を個別に分析した結果について述べたい。

4. 「春」の歌について

「春」を詠んだ琉歌の中にも、和歌の中にも、「春風」、「春雨」や「初春」という表現も数多く見られ、それぞれの歌の中で5%～10%程度の割合を数えることは両歌の共通点の一つとして挙げられる。また、「春」と動詞の組み合わせについても琉歌と和歌の間に共通点が見られるので、以下に説明したい。

表6

琉歌の「春」と動詞の組み合わせ			和歌の「春」と動詞の組み合わせ			
動詞	歌数	割合		動詞	歌数	割合
来る	24	13%	1	来る	147	7.4%
待つ	6	3.4%	2	立つ	90	4.5%
(心) 浮かされる	5	2.8%	3	知る	71	3.6%
過ぐ	4	2.2%	4	暮れる / 行く	60 ずつ	3%
なる	3	1.7%	5	去る	45	2.3%

琉歌と和歌で、「春」と一番多く呼応する動詞は「来る」であり、両歌の共通点として、指摘できる。そして、「春」と「来る」の組み合わせは、「春」と呼応する他の動詞と比べると、その割合が顕著であることが分かる。「来る」以外には、例えば「なる」、「行く」、「知る」、「待つ」、「過ぐ」、「別る」等が両歌の中に見られる。

しかし、両歌には次のように独自の表現も多く見られる。和歌には「春立つ」、「春めく」、「春かけて」や「春を経て」等という表現、琉歌には、「春に浮かされて」、「心が浮きやがゆる春」や「春に糸かけて」等が挙げられ、それぞれの歌の独特の雰囲気醸し出す。

また、和歌の場合は、動詞「来る」が「春」だけではなく、全ての季節語との組み合わせの中で最も多く使用されている動詞であるのに対して、琉歌の場合は、そのような状況が「春」の歌を詠み込んだ琉歌の場合のみ、和歌と使用率の高さが一番で一致している。

なお、オモロに関しては、既述のように、「春」を歌ったものが一切見られないことは、「春」が詠まれている琉歌と大きく異なる特徴である。

「春」を詠み込んだ琉歌を句ごとに分析し、精密な調査を行った結果、「春」を含んだ琉歌に見られる計 556 句の中に、和歌の句と一致している句が計 347 句となっていることが判明した。つまり、「春」を詠み込んだ琉歌に含まれる全ての句の中で、和歌と一致している句は 62.4%にまで上がることが分かった。勿論、琉歌は沖縄語で書かれ、和歌は日本古語で書かれており、さらに、琉歌と和歌

の音数律も異なるため、言葉や音数律の相違という関係から、琉歌の句と和歌の句が完全に似ているものとは限らない。しかし、沖縄語を日本古語に置き換えてみれば、両歌の句は同様のものであることが分かる。

琉歌と和歌が一致している例を以下の通りにいくつか提示する。

- ^{カワ}ル^クト^ツ ^ネ ^サミ (琉歌：8音句) → かはることなく (和歌：7音句)
- ^アス^イ ^フ ^ウリ ^シヤ (琉歌：6音句) → 遊ぶうれしき (和歌：7音句)
- ^サト^ウ ^ヤ ^マチ ^ユル (琉歌：6音句) → 君をこそまで (和歌：7音句)
- ^イル^ド ^マ ^サル / ^イル^ド ^マ ^サラ ^シユ^ル (琉歌：6音句／8音句) →
色どまされる／色まさりけり (和歌：7音句／7音句)
- ^タ ^ガス^イ ^ウリ ^ナ ^チヤ ^ガ (琉歌：8音句) → たがおりなせる (和歌：7音句)

「春」以外の季節語を詠み込んだ琉歌も句ごとに見てみれば、和歌の句と類似しているものが多く見られることが判明し、句ごとの調査結果からも、和歌から琉歌への影響が極めて大きいと言えるだろう。

では、和歌を改作した琉歌の場合は、その割合はどうなっているのだろうか。ここで、季節語を詠み込んだ琉歌は、句ごとではなく歌全体に和歌の影響をどこまで受けているのかという問題を明らかにしたい。そのため、『琉歌全集』や『琉歌大成』に含まれている歌を対象にした徹底的な調査を行い、その2歌集に見られる季節語を歌った全ての琉歌の中には、和歌を意図的に改作した琉歌がどのぐらいの割合を占めているのかという問題の解決に努めていく。また、その元となった和歌の歌集や歌人についても詳しく述べ、季節語を詠み込んだ琉歌はどの和歌集の影響を受けたかについて考察したい。さらに、オモロの改作琉歌も全て挙げながら、琉歌がオモロや和歌から受けた影響をそれぞれ推計したい。

「春」を含んだ琉歌を調査した結果、和歌の影響を明らかに受けた可能性が高いと考えられる改作琉歌は、「春」を詠んだ琉歌(178首)の中に計19首見られ、およそ11%であることが明確になった。また、「春」を詠み込んだオモロの改作琉歌は一切見られない。

以下に、19首の琉歌およびその元となった和歌を列挙する。なお、ここで紹介する改作琉歌19首の中の①および②の例は、先行研究ですでに指摘されているものであるが、それ以外の17首については筆者の調査によって発見された歌

である。

①

和歌

『古今和歌集』(24)

(歌人：源宗于朝臣)

ときはなる

松のみどりも

春くれば

今ひとしほの

色まさりけり

琉歌

『琉歌全集』(76)

(歌人：北谷王子)

ときはなる松の

変ることないさめ

いつも春くれば

色どまさる

(トウチワナル マツイヌ)

(カワルクトゥ ネサミ)

(イツィン ハル クリバ)

(イルドゥ マサル)

現代語訳：ときわなる松は、とこしえ
に変わることは無いだろう。いつも春が
来れば緑の色がいよいよまさるばかり
だ。

この『古今和歌集』の和歌を改作した琉歌について、すでに様々な研究者によって指摘があり(外間 1965、p.26、池宮 1976、p.154、島袋 1995、p.19、嘉手苺 1996、p.71)、改作琉歌の典型的な例の一つとして挙げられている。

なお、琉歌の元となったこの和歌は大変有名な歌であり、『古今和歌集』以外に平安時代から鎌倉時代にわたって以下の様々な歌集にも載っていることが今回の調査で判明した。

- 『新撰和歌集』(平安時代)
- 『宗于集』(平安時代)
- 『古今和歌六帖』(平安時代)
- 『深窓秘抄』(平安時代)
- 『和漢朗詠集』(平安時代)
- 『三六人撰』(平安時代)
- 『中宮亮重家朝臣家歌合』(平安時代)
- 『古来風体抄』(鎌倉時代)
- 『俊成三六人歌合』(鎌倉時代)
- 『定家八代抄』(鎌倉時代)
- 『新時代不同歌合』(鎌倉時代)
- 『桐火桶』(鎌倉時代)

②

和歌

『古今和歌集』(330)

(歌人：清原深養父)

冬ながら

空より**花**の

ちりくるは

雲のあなたに

春にやあるらむ

琉歌

『琉歌全集』(235)

(歌人：喜屋武按司朝教)

冬にのが空や (フユニ ヌガ スラヤ)

花の散り飛びゆる (ハナヌ チリ トビユル)

もしか雲の中 (ムシカ クムヌ ナカ)

春やあらね (ハルヤ アラニ)

現代語訳：冬にどうして空は花が散り飛ぶのか、もしや雲の中は春ではないか。

この『古今和歌集』の和歌の改作琉歌についても、すでに指摘がある（島袋1995, p.52）。琉歌と和歌の異なる音数律が、この改作琉歌の特徴として魅力的である。和歌の「冬ながら 空より」という2句に渡って見られる表現は琉歌の中で「冬にのが空や」のように1句として見られ、また、和歌の「花の ちりくるは」という第2句と第3句における表現も琉歌の場合に「花の散り飛びゆる」のように1句にまとめられる。このように、和歌の上3句は琉歌の中でみごとに上2句として収まり、また、琉歌は和歌の「ながら」を「のが」（意：なぜ）に巧みに変えているため、それぞれの歌の異なる音数律や若干違う表現の選択で独特の趣きが生まれてくる。また、両歌の下2句には、ほぼ同様の語順が見られ、一致しているが、琉歌は和歌に見られる「雲のあなたに」という7音の表現を「雲の中」という5音の表現に変え、それに3音の「もしか」という単語を接続することで、和歌の「雲のあなたに」という7音句を「もしか雲の中」という8音句に変形させる。さらに、結句についても沖縄語の文法に合わせながら、和歌の「春にやあるらむ」という1字余りの8音句を「春やあらね」という6音句に変形させることが明らかである。

なお、この琉歌へ改作された和歌も、当時大変有名な和歌であったとと考えられ、平安時代成立の勅撰和歌集『古今和歌集』のみならず、平安時代から江戸時代にかけての以下の様々な歌集や作品にも見られるため、琉歌人もその和歌を『古今和歌集』以外の歌集からも学んだ可能性が考えられるであろう。

➤ 平安時代成立：

- 『深養父集』
- 『古今和歌六帖』
- 『奥儀抄』
- 『和歌十体』

➤ 鎌倉時代成立：

- 『定家八代抄』
- 『家隆卿百番自歌合』
- 『壬二集』（藤原家隆の歌集）
- 『夫木和歌抄』

➤ 室町時代成立：

- 『明題和歌全集』
- 『題林愚抄』

➤ 江戸時代成立：

- 『類題和歌集』

③

和歌

『古今和歌集』(24)

(歌人：源宗于朝臣)

ときはなる

松のみどりも

春くれば

今ひとしほの

色まさりけり

琉歌

『琉歌全集』(83)

(歌人：具志川王子朝盈)

めぐて春くれば (ミグティ ハル クリバ)

ときはなる松も (トウチワナル マツイン)

みどりさしそへて(ミドゥリ サシスイティ)

色どまさる (イルドゥ マサル)

現代語訳：めぐりめぐって春が来れば、
ときわなる松も若若しい芽が一杯さし
添えて、みどりの色がまさるばかりだ。

この改作琉歌については特に指摘されていないのだが、上記の①琉歌にも似通っており、そのバージョンとして『古今和歌集』の24番歌を真似て改作されたものだと推測できるだろう。この83番歌の中には、①の琉歌にない「みどり」という表現が見られており、『琉歌全集』の解釈によると、「芽のことであって、緑ではない (p.21)」のである。『日本国語大辞典』の中にも、「みどり」が色の名以外に草木の芽、新芽として定義されているので、上記の和歌の「みどり」も芽と理解してもよかろう。また、和歌の場合は、「春来れば」という表現が非常に多く（計460首）見られ、いずれも5音句として見られる。それに対して琉歌も同じ「春来れば」を導入しているものの、音数律の関係で8音句に合わせるために当該の5音表現の前に「めぐて／いつも／^{スチユティ}のきゆて／花も」のような3音の表現を取り入れていることが特徴的である。また、和歌の場合はそれ以外に

は「春去り来れば」という 7 音句もおよそ 50 首中に見られるが、琉歌にはおそらく異なる音数律という理由でそのような表現は定着しなかった。

④

● 『琉歌大成』 (2954) [歌人：読谷山王子 (ユンタンザ フオジ)]

常磐なる松も めぐて春来れば みどりさしそへて 色どまさる

● 『古今和歌集』 (24) [歌人：源宗于朝臣]

ときはなる 松のみどりも 春くれば 今ひとしほの 色まさりけり

この琉歌が③の琉歌における上句の 2 句の順番を取り替えているだけなので、ここではさらなる説明を省く。①、③や④を見ると、例の『古今和歌集』の 24 番歌が相当な人気であったことが十分わかる。

⑤

和歌

『伊勢物語』 (102)

(歌人：男 (在原業平))

わが袖は

草の庵に

あらねども

暮るれば露の

やどりなりけり

琉歌

『琉歌大成』 (3670)

(歌人：不明)

春の草葉か (ハルヌ クサバカ)

身が袖や (ミガ スディヤ)

宵も暁も (ユイン アカツイチン)

露の宿る (ツイユヌ ヤドウル)

現代語訳：私の袖は、春の草葉なのか、
宵も暁も露が宿っている。

この改作琉歌を見ると、その内容や表現のみならず、形式も和歌の影響を受けていることが分かる。この琉歌の形式は 7・5・8・6 であり、「仲風」と呼ばれる和歌の影響を受けた琉歌の一種である。当時有名であった歌人の在原業平の和歌を改作したこの琉歌は、和歌に見られる「草の庵にあらねども（意：草の庵ではないけれども）」という否定文章を「春の草葉か」という疑問形式に置き換え、また「暮るれば（意：日が暮れると）」という限られた時間帯（夕方）を「宵も暁も」、即ちずっとという期間に変更しつつ作られたものである。上述した和歌の二つの表現は、似たような意味に変えられつつ、琉歌の 8 音調の形式に合わせるため、8 音句に変形されたことは、この琉歌の技巧として挙げられる。

この⑤の和歌は、平安時代成立の『伊勢物語』以外に鎌倉時代成立の勅撰和歌集『新勅撰和歌集』にも含まれている。

⑥

和歌

『後拾遺和歌集』(76)

(歌人：藤原元真)

あさみどり

みだれてなびく

あをやぎの

いろにぞはるの

かぜもみえける

琉歌

『琉歌全集』(314)

(歌人：不明)

み代の春風に (ミユヌ ハルカジニ)

みどりさしそへて (ミドゥリ サシスイテイ)

なびく青柳の (ナビク アヲウヤジヌ)

色のきよらさ (イルヌ チュラサ)

現代語訳：栄え行くみ代に春風が吹くと、芽も差し添えてなびく青柳の色もきれいだ。

両歌とも同様の単語を 5 語用いており、内容も一致しているが、和歌で中心に詠まれているのは「春の風」であるのに対し、改作琉歌の主語は「青柳の色のきよらさ(美しさ)」である。

ここでも注目したいのは、この改作琉歌の第 3 句の作り方である。琉歌の 8 音の第 3 句「なびく青柳の」は、和歌の第 2 句末における 3 音の「なびく」および 5 音の第 3 句となる「あをやぎの」を接続したことによって作られたことが明らかになる。改作琉歌は、音数律の関係で、元の和歌の句を分解したり、或いは結合したりすることが多く見られる。上の琉歌も和歌の 2 句を結合し、1 句として収まっていることが判明した。

上の和歌は平安時代成立の勅撰和歌集『後拾遺和歌集』に初出し、その後、室町時代(1400年)成立の私撰和歌集『菊葉和歌集』に含まれるようになったことが本調査で判明した。

⑦

●『琉歌全集』(890) [歌人：小祿按司朝恒(ウルク アジ チョオコオ)]

みどりさしそへて 春風に なびく 庭の青柳の 色のきよらさ

●『後拾遺和歌集』(76) [歌人：藤原元真]

あさみどり みだれて なびく あをやぎの いろにぞはるの かぜもみえける

この和歌は⑥の和歌と同様のものであり、改作琉歌も⑥の琉歌に似通っているので、さらなる説明を省く。⑥の琉歌の作者が不明であるが、この⑦の琉歌は特定の歌人によって詠まれたものだという事に注目したい。また、⑥の琉

歌も⑦の琉歌も共にこの『後拾遺和歌集』の 76 番歌を元にして作られたのか、或いは、特定の歌人によって詠まれたこの⑦の琉歌のみこの和歌を改作した後、⑥の琉歌が⑦の琉歌を元にし作られたのか、断定するのが難しい。そのため、ここでは両方の可能性について指摘しておく。

⑧

和歌

『新古今和歌集』(68)

(歌人：凡河内躬恒)

春雨の

ふりそめしより

青柳の

いとのみどりぞ

いろまさりける

琉歌

『琉歌全集』(1459)

(歌人：高良睦輝)

降ゆる春雨の

(フユル ハルサミヌ)

染めなしがしちやら

(スミナシガ シチャラ)

庭の**糸柳の**

(ニワヌ イトウヤジヌ)

色のまさて

(イルヌ マサティ)

現代語訳：春雨が染めなしたのである
うか、庭の糸柳の色が、一段と緑の色
が濃くなったようである。

『新古今和歌集』に選集されたこの和歌を改作した琉歌は、他の改作琉歌と比べて、その元となった和歌と語句の順も完全に似通っており、非常に類似性の高い歌である。この琉歌と和歌は、共通表現が「春雨」「降る」「染める」「柳」「糸」「色」「まさる」のように、7語まで見られ、和歌の改作琉歌の中で典型的な例の一つとして挙げられると考えられる。

この琉歌の主な技巧は、和歌の句という単位ではなく、和歌の表現という短い単位を分解することや結合することであると言える。具体的には、和歌における「降り染める」という複合動詞を分解しつつ、琉歌においては「降ゆる」と「染めなす」という二つの単独動詞として取り入れることが見られ、また、和歌の「青柳の糸」という表現は、琉歌において結合され、「糸柳」のように詠み込まれることが分かる。

なお、この和歌は、鎌倉時代成立の『新古今和歌集』以外にも以下の歌集に含まれている。ここは、この和歌が載っている歌集の中から最も有名である鎌倉時代の『新古今和歌集』を主に載せておいたが、この和歌の初出は、平安時代成立の歌集であることが判明する。

- 『躬恒集』(平安時代成立)
- 『古今和歌六帖』(平安時代成立)

⑨

和歌

『新勅撰和歌集』 (1120)
[としのくれの心をよみ侍りける]
(作者：行念法師)

ゆく年を -----
しらぬいのちに -----
まかせても
あすをありとや
はるをまつらむ -----

琉歌

『琉歌全集』 (1419)、
『古今琉歌集』 (251)
(歌人：伊是名朝睦)

くれて行く年も (クリティイク トウシン)
知らぬあてなしの (シラヌ アティナシヌ)
手まりうち遊ぶ (ティマリ ウチ アスイブ)
春よ待ちゆさ (ハルユ マチュサ)

現代語訳：くれて行く年も知らないで、
幼い女の子は、手まりを打って遊ぶ春
を待っているようである。

上に示した『新勅撰和歌集』の和歌は、神作、長谷川 (2006) によると、次のように解釈できる。「行く年を、いつどうなるかわからない命にまかせて、明日を (命が) あると春を待っているのであろうか (p.162)」。また、詞書を見れば、「行く年」というのは、「年の暮れ」を意味し、琉歌における「くれて行く年」という表現の意味と一致していることが分かる。

この⑨の琉歌と和歌を詳しく分析すれば、次のことが明らかになる。琉歌における上句 (第1句と第2句の前半) および結句が、和歌における第1句、第2句の前半や結句と、表現かつ概念の方面から一致している。一方、琉歌の第3句と和歌の第3・4句がそれぞれの歌で異なる意味を表している。つまり、琉歌と和歌共に、歌の冒頭と結末の部分がお互いに非常に似通っている。また、その間に挟んだ真ん中の部分のみがそれぞれの歌において異なるものとなっている。

この両歌の場合には、歌の冒頭と結末が、歌の軸であることが考えられる。即ち、歌が第一に伝えたい趣旨である。一方、冒頭と結末の間に挟んでいる歌の中心は補足の部分であり、その内容が両歌それぞれにおいて異なっても、歌の趣旨には影響が殆どないと理解しても良からう。したがって、上の両歌の補足部分 (和歌の第3・4句と琉歌の第3句) は、それぞれ違う内容を詠み込んでも、歌の趣旨には影響が生じておらず、つまり、両歌の普遍的なアイディアは同様のものとなり、両歌共に一致していると言える。両歌のその普遍的な趣旨というのは、「暮れて行く年を知らないで、春を待つ」というものであると考えられる。

勿論、この琉歌と和歌の主人公を比較すると、それぞれの歌の趣旨にも若干

の相違点が見られるのではないかと言える。和歌の主人公は、年を取った男性のように思え、暮れて行く年を知らないのではなく、むしろ、人生で積み重ねた経験からすれば、次の将来はいつどうなるか分からないという解釈のほうが適切であろう。年が暮れて行くのを知っているものの、それがいつどうなるかが分からないため、今そのことに悩まないようにし、暮れて行く年を知らないような心で気楽に春を待っていると、この和歌を理解してもよいのではないだろうか。それに対し、琉歌の趣旨は少し違うニュアンスを表していると考えられる。琉歌の主人公は幼い少女であり、まだ若いので、暮れて行く年を当然に知るわけがない。そのため、何の悩みもなく、悩みを乗り越えようとする努力も必要せず、幼い心のままひたすら気楽に春を待っていると言えるだろう。このように、和歌の主人公の心の気楽さと上の琉歌の主人公の心の気楽さは違うものであることが分かる。しかし、琉歌の主人公である女の子の気楽さを歌った歌人は、和歌の主人公のような年を取った経験者であるため、女の子の遊んでいる明るい様子を、人生の色々な経験をした人の目線から判断し、その女の子の心の気楽さも、上の和歌の主人公のような心の気楽さにいつか変わってくることを示唆している。このように、この琉歌を作った歌人はこの和歌の影響を受け、和歌の改作琉歌を詠じたのではないかと考えられる。

この⑨の和歌が載っている鎌倉時代成立の『新勅撰和歌集』は、十三代集の一つで、藤原定家によって編纂された重要な勅撰和歌集である。和歌の作者の行念法師は、定家とは和歌の師弟関係にあり、定家はその和歌を高く評価していたことが知られる。

なお、この和歌は『新勅撰和歌集』以外に江戸時代成立の『類題和歌集』にも見られる。

⑩

和歌

『玉葉和歌集』(40)

(歌人：関白前太政大臣(藤原忠通))

をさまれる

御代の春とや

鶯の

なくねもけさは

のどけかるらむ

琉歌

『琉歌全集』(1078)

(歌人：不明)

のどかなる御代の (ヌドゥカナル ミユヌ)

春に誘はれて (ハルニ サスワリティ)

ほける鶯の (フキル ウグイスイヌ)

声のしほらしや (クエイヌ シュラシヤ)

現代語訳：のどかな御代の春に誘われて、さえずる鶯の声が愛らしい。

この⑩の和歌も琉歌も中心として詠んでいるのは「鶯の鳴く声」であるが、和歌に見られる「鳴く音」という表現は琉歌には見られず、沖縄語の独特の動詞の「ほける」および「声」が用いられている。また、音数律の関係で形容詞の「のどけし」（琉歌の場合は形容動詞の「のどかなる」）が、和歌では7音の下句の最後に来るのだが、琉歌では8音の上句に置かれており、呼応する名詞はそれぞれ異なるが、歌全体の雰囲気は両歌共に同じものとなっている。

この和歌は、鎌倉時代の勅撰和歌集『玉葉和歌集』以外に、以下の歌集にも見られる。

- 『明題和歌全集』（鎌倉中期～室町前期成立）
- 『題林愚抄』（室町中期成立）
- 『類題和歌集』（江戸時代成立）

⑪

和歌

『新勅撰和歌集』(6)

(歌人：京極前関白家肥後)

いつしかと

けふふりそむる

はるさめに

いろづきわたる

野辺のわかくさ

琉歌

『琉歌全集』(244)

(歌人：不明)

日かず降る雨に (フィカズィ フル アミヌ)

つめて染めまさる (ツイミティ スミ マサル)

春の若草の (ハルヌ ワカクサヌ)

色のしほらしや (イルヌ シュラシヤ)

現代語訳：春になって毎日降る雨に、
若草の緑の色が、いよいよ濃くなって
行くように見えて、美しいものだ。

両歌は若草の美しい色が誉められる点で共通している。また、和歌における「いつしかとけふ（意：いつの間にか今日）」という時間に関する表現は琉歌の中で「日かず（意：日毎に）」に置き換えられていることで、雨の多い南島の春と若夏の季節感が巧みに表現されていると言える。

この和歌の改作琉歌も⑧の改作琉歌と同様に、和歌における動詞「降り染むる」を単独動詞に分解し、さらに、和歌の「春雨」も「春」と「雨」という二つの単語に分解する特徴が見える。

上の和歌は⑨の和歌と同じように、鎌倉時代成立の勅撰和歌集『新勅撰和歌集』に収められている。

⑫

次の琉歌はそれぞれ 2 首の異なる和歌に影響を受けた可能性について、以下のように指摘したいと思う。それぞれの和歌と、影響を受けたと推定される琉歌を下記の図 1 と図 2 で表示する。

(図 1)

和歌

『続草庵集 (頓阿)』 (121)

(歌人：頓阿)

花染の

袂を今朝は

ぬぎかへて

春のかたみを

たつ衣かな

琉歌

『琉歌全集』 (1448)

(歌人：比嘉賀慶)

花染の袖も (ハナズミヌ スディン)

ぬぎかへて今日や (ヌジカイティ キユヤ)

別れゆる春の (ワカリユル ハルヌ)

名残り立ちゆさ (ナグリ タチュサ)

現代語訳：今日は春の花染の着物をぬいで衣替えをしたが、しみりと春の名残りが惜しまれた。

当時有名な歌人であったと思われる頓阿によって詠まれたこの和歌とその和歌を元にした改作琉歌は、内容かつ順番の観点からも非常に似通っていることが分かる。ここで、改作琉歌は元の和歌における表現を同義語に変えている傑出な工夫に注目したい。この琉歌は、和歌における「袂」を「袖」に、「今朝」を「今日」に、そして「形見」を「名残」に置き換えながら、同様の場面を違う表現で言い換えている。この特徴はこの改作琉歌のオリジナリティとなっている。

しかし、この和歌と琉歌における気持ちは両歌とも惜しい気持ちであるかといえ、そうではない。琉歌からは、「名残り立ちゆさ」のように、春の名残が惜しまれることが窺えるものの、和歌における「春の形見」を「絶つ」夏の衣が詠まれているため、春の形見が惜しまれるというよりその形見が終わってしまい、夏になることが分かる。ただし、この和歌に続く (同じ『続草庵集』の) 122 番歌を見れば、衣替えの際春を惜しむ気持ちが強く表現されていることが分かる。

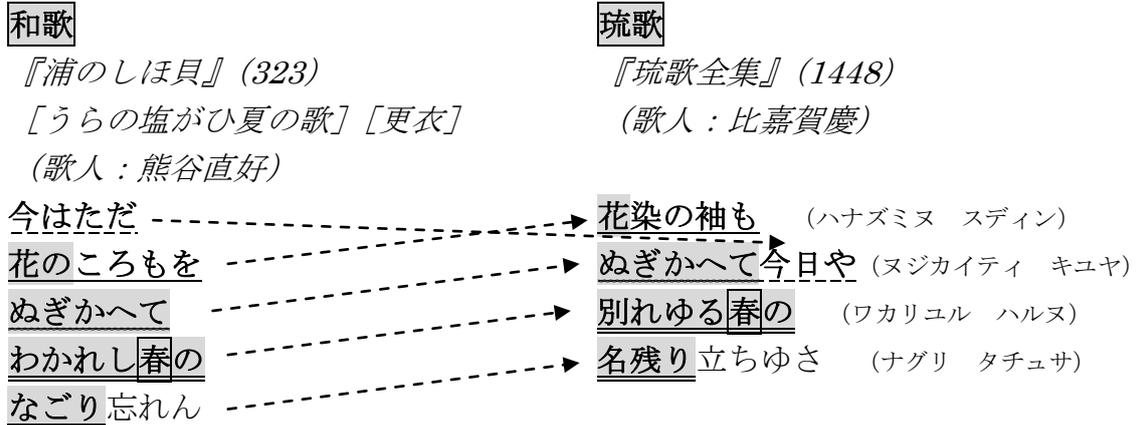
●『続草庵集 (頓阿)』 (122) [夏] [関白殿にて、おなじ心を]

くれはてし 春を二度 惜むかな けふ花ぞめの 袖の別に

この⑫の琉歌を詠んだ比嘉賀慶はおそらく『続草庵集』の上記の 2 首の和歌を参考にしながら、この改作琉歌を作った可能性が推定できるだろう。

しかし、「夏の際に行う春の更衣」という場面を詠んでいる和歌は幾つか見られ、その中に上の琉歌に非常に似ている和歌も他に 1 首ある。以下の図 2 のとおりである。

(図 2)



この和歌も、春を惜しむ琉歌と違って、「名残を忘れるだろう」と伝えている点が、頓阿の 121 番歌における「形見を経つ」という気持ちと共通していると言える。また、この図 2 の和歌にも「今日や」という表現に類似した表現「今はただ」が見られるため、この場合も琉歌はその表現を巧みに類義語に変え、歌の中に取り入れた可能性は考えられるだろう。

また、図 1 の和歌には見られない「わかれし」や「なごり」という図 2 の和歌における表現は、琉歌における「別れゆる」と「名残り」という表現と一致していることが判明した。一方、この図 2 の和歌には、図 1 の和歌と琉歌にしか見られない「花染の」の代わりにただ単に「花の」という表現が詠み込まれ、図 1 の和歌と琉歌と若干異なることが明らかである。

作者の直好は 1782 年～1862 年に生きており、『浦のしほ貝』を 1845 年に刊行した(『国歌大観・第 9 巻』1991)。また、琉歌を詠んだ歌人の比嘉賀慶は、「爛熟期と命名した時代、すなわち、琉球王朝最末期から明治時代にかけての作者」(清水 1994、p.17)である。したがって、熊谷直好と比嘉賀慶は同時代に生きていた歌人であることが分かり、比嘉賀慶は頓阿の和歌のみならず、熊谷直好の和歌の影響を受けた可能性も考えられるだろう。なお、この問題についてはさらなる調査が必要であるが、ここではこの⑫の琉歌は頓阿の歌か、熊谷直好の歌から影響を受けた、という二つの可能性に関する指摘に止めておきたい。

また、上述したように、和歌には「春の更衣」という場面を詠んだ歌が幾つか見られる。また、以下の 4 首の中、最後の 3 首の和歌の中で春を惜しむ気持

ちが詠まれており、「をしき」という形容詞まで読み込まれている。その点では、以下の和歌と⑬の琉歌が共通している。しかし、琉歌と語順が異なっているため、それらの和歌から琉歌への影響の可能性が低くなっていると言える。そのため、これらの4首の和歌は参考までに以下の通りに載せておく。

●『隣女集』(作者：飛鳥井雅有) (1063) [首夏]

夏ごろも けさたちかへて 花染の そでの別に はるぞなりぬる

●『靈元法皇御集』 (21) [夏十五首] [更衣]

ぬぎかへて をしくもあるかな 朝もよひ きのふの春の 花ぞめのそで

●『冷泉為村卿家集』 (514) [夏之部] [夏衣]

夏来ぬと けふ立ちかへて 春の色の 名残ぞをしき 花染の袖

●『宝篋百首』 (21)

けふも猶 春のなごりや 残るとて かへまくをしき 花染の袖

⑬

和歌

『風雅和歌集』 (34)

(歌人：前中納言定家)

霞みあへず

なほふる雪に

空とちて

はる物ふかき

うづみ火のもと

琉歌

『琉歌全集』 (1588)

(歌人：獲得久朝常)

降ゆる雪霜も (フユル ユチシムン)

よそになち語る (ユスニナチ カタル)

埋火のもとや (ウズミビヌ ムトウヤ)

春の心 (ハルヌ ククル)

現代語訳：降る雪霜をよそにして、親しい人と語る埋火のものは、まるで春のような心持ちだ。

他の改作琉歌より共通表現が少ないように見えるが、内容も歌の醸し出す雰囲気も極めて似ているので、琉歌は有名な藤原定家によって詠まれたこの和歌を倣って作られたと考えられる。和歌の「春物ふかき」という魅力的な表現は琉歌の中に「春の心」のように置き換えられ、両歌とも寒い冬の中で感じられる埋火の暖かさ、ありがたさを詠む。琉歌の「ころ」という表現は独特の表現で、「～のような」という意味を持つ語であり、和歌における「ころ」にはそのような意

味が一切見られない。また、この⑬の琉歌の中で和歌には見られない「恋人と語る」場面も歌われており、この歌だけでなく、他の琉歌の中にも多く見られる特徴として挙げられる。⑬の琉歌は、この特徴を取り入れつつ、和歌をみごとに改作したものであると言える。

なお、この琉歌の元となった和歌は、図の中では室町時代の勅撰和歌集『風雅和歌集』の歌として紹介しているが、この歌が初出した和歌集は、鎌倉時代のものであるため、この和歌も鎌倉時代の和歌として数えられる。

この和歌が含まれている全ての和歌集は以下の通りである。

- 『拾遺愚草（定家）』（鎌倉時代成立）
- 『夫木和歌抄』（鎌倉末期成立）
- 『明題和歌全集』（鎌倉中期～室町時代成立）
- 『風雅和歌集』（室町時代成立）
- 『題林愚抄』（室町時代中期成立）
- 『類題和歌集』（江戸時代成立）

⑭

和歌

『頓阿勝負付歌合』(11)

(六番 柳 左勝)

あをやぎの

みどりのいとに

ぬきそめて

玉をたれたる

はるのしら露

琉歌

『琉歌大成』(3682)

(歌人：故津波古親雲上)

春の柳の (ハルヌ ヤナジヌ)

みどりの糸に (ミドウリヌ イトウニ)

つらぬきやる露の (ツイラヌチャル ツィユヌ)

玉のきよらさ (タマヌ チュラサ)

現代語訳：春の柳の緑の糸に、貫いた露の玉が美しい。

この両歌のポイントは露の玉である。両歌共に、露は柳の緑の糸に貫いており、玉の美しいさまが賞美されているが、和歌のほうではその美しさが「玉をたれたる」を通して表現されているのに対し、琉歌は「玉のきよらさ（美しさ）」という琉歌の典型的な表現を用い、ストレートにその美しさを誉めている。

この⑭の改作琉歌は7・7・8・6という「仲風」の形式を持ち、上2句は完全に和歌から取り入れていることが分かる。特に第2句はそのまま和歌にも見られる「みどりの糸に」となっている。また、第1句は和歌において「青柳の」となっているのに対し、琉歌においては「春の柳の」となっている点は、この琉歌の改作技巧の一つだと言えるだろう。

和歌が含まれている『頓阿勝負付歌合』は、『国歌大観・第10巻』（1992）によれば、応安五年（1372年）に行われた。頓阿は鎌倉末・南北朝時代の歌人であったが、本研究では、頓阿の歌をすべて室町時代の和歌として見なしている。

⑮

和歌

『永享百首』（120）

（歌人：公名）

春風の

長閑きほども

白露の

玉ぬきかくる

青柳のいと

琉歌

『琉歌全集』（1077）

（歌人：不明）

のどかなる**春**や（ヌドゥカナル ハルヤ）

青柳の**糸**に（アヲウヤジヌ イトゥニ）

つれて**貫**く**露**の（ツイリティ ヌク ツィユニ）

玉の光（タマヌ フィカリ）

現代語訳：のどかな春は、青柳の糸のような枝に、沢山の露の玉がつらなり貫かれて、きらきら光り輝いている様はまことにみごとである。

この⑮の和歌と改作琉歌は、何を中心として描いているかという点で若干異なる。和歌の中では「青柳の糸」が注目されるのに対し、琉歌は「その糸に貫く露の玉の光」を賛美している。そのため、この句の順番は両歌において異なることが注目される。また、この句の形式に関しては、和歌の形式は7・5調であるため、「青柳の糸」も7音句として見られる。それに対し、8・6調を重んじた琉歌においては、同じ表現に助詞「に」を接続し、「青柳の糸に」のように見事に8音句が完成される。

この和歌が含まれた『永享百首』は、『国歌大観・第4巻』（1986）によれば、1434年に成立したとされる。この室町時代成立の百首は勅撰和歌集『新続古今和歌集』の応制百首であり、「新続古今集には、この百首から、八〇余首採歌されている（前掲、p.718）」のである。琉歌人もこの百首を学んだ可能性があり得るだろう。

⑩

和歌

『春霞集』(73)

(歌人：毛利元就)

松はなほ

くる春ごとの

若緑

さすや千とせも

かぎりなからん

琉歌

『琉歌全集』(1427)

(歌人：読人しらず)

千歳経る松も (チトウシ フィル マツイン)

めぐて春くれば (ミグティ ハル クリバ)

みどりさし添へて (ミドゥリ サシ スイティ)

若くなゆさ (ワカク ナユサ)

現代語訳：千年の年月を経て来た松も、めぐりめぐって春が来れば、芽をさし添えて若返ったようだ。

この改作琉歌も元となった和歌とは若干順番がずれているが、⑩の歌にも見られるように、和歌の下句の表現が琉歌の上句の冒頭に詠み込まれている。⑩の場合には、その表現は「長閑なる」であるが、ここでは「千歳」という表現が和歌の下句から琉歌の第1句の冒頭に移されていることが分かる。当該の表現は両歌とも「松」と関係しているため、両歌の順番が異なりながらも意味は同様のものであると言える。

この和歌を含んだ『春霞集』は、毛利元就の室町時代成立の私家集である。

⑪

和歌

『雪玉集』(7068)

[着到百首和歌 立春]

(三条西実隆の家集)

雪のうへも

春くるけふの

みちしありと

かすみにけりな

四方の山のは

琉歌

『琉歌大成』(3644)

(歌人：不明)

春来ちやら今日や (ハル チチャラ キユヤ)

空の雪はれて (スラヌ ユチ ハリティ)

四方の山の端に (ユムヌ ヤマヌ ファニ)

霞みわたて (カスイミ ワタティ)

現代語訳：今日は雪空も晴れて、四方の山の端は霞みわたっている。春が来たのだろう。

両歌共に、春が来て、四方の山の端は霞んでいる様子を詠んでいる。沖縄に

は雪が降らないが、この改作琉歌は和歌の雪を詠み込みつつ 8 音句に合わせる「空の雪はれて」という珍しい表現を用いている。また、琉歌は、和歌にもよく見られる「霞」+「渡る」という組み合わせを用いながら、この和歌における「かすみにけりな」という 7 音句を琉歌に相応しい「霞わたて」という 6 音句に変形している。また、この琉歌の場合も、和歌における「四方の山の端」という 7 音句がそのまま取り入れられているが、琉歌の 8 音調に合わせるために助詞「に」が後ろにつき、「四方の山の端に」という 8 音句が完成されることが見られる。そして、この改作琉歌は沖縄語の文法も巧みに用いつつ、和歌の「春くる今日や」という 7 音句を「春来ちやら今日や」のように 8 音句に変形していることが分かる。

この和歌は、室町時代成立の三条西実隆の家集『雪玉集』に初めて見られてから、同時代成立の『称名院集』という、三条西実隆の息子である公条の家集にも含まれているものである。三条西実隆は室町後期における代表的な歌人で、古今伝授を受けた歌人以外に、歌学者や古典学者としても有名である（『国歌大観・第 8 巻』1990）。琉歌人もその和歌人の影響を受けた可能性が考えられるであろう。

⑱

和歌

『漫吟集』(224)
(歌人：竜公美校)

香をとめて
梅が木の本
尋ぬれば
そへて聞きつる
鶯のこゑ

琉歌

『琉歌大成』(870)
(歌人：不明)

梅のもとしので (うミヌ ムトウ シヌディ)
匂ひにまぎれやり (ニエイニ マジリヤイ)
春の鶯の (ハルヌ ウグイスイヌ)
初声聞かな (ハツィグキ チカナ)

現代語訳：梅の花の下へこっそり行って、花の香りに紛れて、鶯の初声を聞きたい。

この両歌は上句の内容と下句の内容は一致しており、順番は同様であると言える。ただし、この改作琉歌の特徴は、和歌における表現を類義語に変えていることである。和歌の「香をとめて」を「匂ひにまぎれやり」、動詞「尋ねる」を動詞「忍ぶ」に変更している。また、琉歌の 8 音句に合わせるために、「鶯」の前に「春」を、「声」の前に「初」を取り入れていることが分かる。

この⑱の改作琉歌の元となったと考えられる和歌は、江戸時代の歌人・古典の研究家である円珠庵契沖の家集『漫吟集』に含まれている。

①9

和歌

『為村集』(514)
(冷泉為村卿家集 夏之部 更衣)

夏来ぬと

けふ**立ちかへて**

春の色の

名残ぞをしき

花染の袖

琉歌

『琉歌全集』(1084)
(歌人：不明)

花の色深く (ハナヌ イル フカク)

なれそめし袖も (ナリスミシ スディン)

ぬぎかへて春の (ヌジカイティ ハルヌ)

名残ないさめ (ナグリ ネサミ)

現代語訳：春の間着ていた花模様の色深く染めた着物も、初夏になったのでぬぎかえて、別に春の名残りを惜しむ気持ちもない。

最後に取り上げるこの改作琉歌の工夫は遊び心を持ち、大変興味深いものだと考えられる。この①9の和歌も琉歌も同様の表現を用いながら、夏に変わる際、春の色深い花染の袖を脱ぎ変えるという同じ場面を詠んでいる。しかし、和歌は、春が過ぎ夏になった証拠として取り上げている、着物の交換という場面を深く惜しみ、過ぎ去った春を「名残ぞをしき」という表現で悲しく嘆くのに対し、琉歌は春の着物を脱ぎ変えても名残はない、とする。この和歌と琉歌をセットで読めば、琉歌は和歌に対する返答となっているように感じさせられるので、非常に興味深い改作琉歌である。「春」を描いた和歌の名残惜しさと悲しみの特徴、また「春」を歌った琉歌の、喜ばしく若々しい気持ちの特徴は、この両歌を見ながら明瞭に感じることができるだろう。

この和歌は、江戸時代の歌人冷泉為村(1713-1774)の家集に含まれている歌である。

以上、「春」を詠み込んだ19首の改作琉歌についてまとめると、まず、特定の歌人によって詠じられた歌は10首あり、また読人知らずの歌は9首あることが判明した。要するに、歌人が特定できる歌数と歌人不明の歌数はほぼ同数であり、それぞれおよそ半数を占めている。

また、それらの19首の琉歌の元となったと考えられる和歌は、18首ある可能性を指摘できる。それらの18首の時代内訳をすれば、以下の通りになる。

- 平安時代初出の和歌：6首(33%)
- 室町時代初出の和歌：5首(28%)
- 鎌倉時代初出の和歌：4首(22%)

●江戸時代初出の和歌：3首（17%）

これらの18首の和歌の中には、勅撰和歌集²⁷に収められる歌が8首、勅撰和歌集の応制百首²⁸の歌が1首、そして物語²⁹の歌も1首見られる。それらに含まれている歌数は10首となり、過半数を占めていることが判明した。また、藤原定家（1首）、頓阿（2首）や躬恒（1首）という歌人によって詠まれた和歌の改作琉歌も僅かながら見られる。

5. 「夏」の歌について

既述の通り、「夏」を詠んだ和歌も琉歌も、「夏」と動詞との組み合わせが他の季節語と比較し最も少なく、「夏」+名詞というパターンが著しい。例えば「夏の夜」、「夏の日」、「夏の衣」、「夏の草」、「夏山」や「夏虫」がその典型的な例である。

『おもろさうし』の中にも、「夏」を歌った歌が9首見られるが、「夏」と動詞との組み合わせは琉歌とは全く一致していない。また、琉歌の中にも、オモロの中にも、沖縄の独特の季節「うりずん」や「若夏」が共通して見られる。しかし、オモロの場合は、「うりずん」³⁰が「立つ」や「待つ」と呼応し、「若夏」が全て動詞の「立つ」と呼応しているのに対し、琉歌の場合は、「うりずん」も動詞の「なる」のみと呼応しており、また「若夏」が動詞の「なる」や「巡る」と呼応している。琉歌とオモロ共に共通して見られる沖縄の独特の季節表現「うりずん」・「若夏」と動詞の組み合わせに関しても、琉歌とオモロとで一致していないことが判明した。

「夏」を詠み込んだ琉歌は、オモロや和歌の影響をどこまで受けているのかという問題を明らかにする際、その一つの手掛かりとしてオモロや和歌の改作琉歌の割合を算出する。「夏」を歌った計60首の琉歌の中に、和歌の改作琉歌は5首のみ見られ、8%にしか及ばない。その理由は沖縄の夏は独特の趣きがあり、その季節感も琉歌に深く染み込んでいるためであろう。

また、「夏」を詠み込んだオモロの改作琉歌も2首見られる。その琉歌は「夏」と共に「冬」という季節語も同時に詠み込んでいるため、「冬」を詠み込んだ改作琉歌のところで詳しく紹介する。

以下に和歌の改作琉歌5首を列挙する。なお、①および②の歌は先行研究で

²⁷ 具体的な勅撰和歌集は、『古今集』（2首）、『後拾遺集』（1首）、『玉葉集』（1首）、『新古今集』（1首）、『新勅撰集』（2首）、『風雅集』（1首）

²⁸ 『永享百首』

²⁹ 『伊勢物語』

³⁰ オモロでは「おれつむ／おれづむ／おれつも」表記

すでに指摘されている。

①

和歌

『古今和歌集』(166)

(歌人：清原深養父)

夏の夜は

まだよひながら

あけぬるを

雲のいづこに

月やどるらむ

琉歌

『琉歌全集』(1505)

(歌人：岡本岱嶺 (オカモト タイレイ))

宵とめば明ける

(ユイ トウミバ アキル)

夏の夜のお月

(ナツイヌ ユヌ ウツイチ)

雲のいづ方に

(クムヌ イズカタニ)

お宿めしやいが

(ウヤドゥ ミシエガ)

現代語訳：夕方だと思えば明ける夏の短夜のお月さまは、雲のどこにお宿をなさるであろうか。

この改作琉歌については、島袋 (1995, p.316-317) がすでに指摘しているが、ここで付き加えたいのは、和歌の「まだ宵ながら 明けぬるを」という 2 句は琉歌の「宵とめば明ける (意：宵と思えば、すぐ明ける)」のように 1 句に収まり、また琉歌における「月」は音数律の関係で「お月」となっており、同時に相応しい尊敬語「めしやいが (意：なさる)」も付いていることである。

なお、この和歌は非常に有名な歌であったと考えられ、『古今和歌集』以外にも、平安時代から室町時代にわたって多様な歌集に含まれている。歌集の一覧は以下の通りである。

- 『古今和歌六帖』 (平安時代)
- 『後六々撰』 (平安時代)
- 『深養父集』 (平安時代)
- 『百人秀歌』 (鎌倉時代)
- 『百人一首』 (鎌倉時代)
- 『定家八代抄』 (鎌倉時代)
- 『時代不同歌合』 (鎌倉時代)
- 『和歌用意条々』 (鎌倉時代)
- 『桐火桶』 (鎌倉時代)
- 『井蛙抄』 (室町時代)

②

以下の②の琉歌も①と同じ和歌を元に詠じられたものであるため、簡単な図式の表示にとどめる。この琉歌についても、すでに指摘がなされている（島袋 1995, p.277）。

● 『琉歌全集』 (1310) [歌人：読人しらず]

宵とめば明ける 夏の夜の月や 白雲にやどる 暇やないらぬ

● 『古今和歌集』 (166) [歌人：清原深養父]

夏の夜は まだよひながら あけぬるを 雲のいつこに 月やどるらむ

③

和歌

『後撰和歌集』 (209)

(読み人：わらは)

つつめども

かくれぬ物は

夏虫の

身よりあまれる

思ひなりけり

琉歌

『琉歌全集』 (2320)

(歌人：安仁屋政清 (アンナ セイセイ))

つつでつつまらぬ

(ツイツイディ ツイツイマラス)

哀れ夏虫の

(アワリ ナツィムシヌ)

身にあまるほどの

(ミニアマル フドゥヌ)

思やれば

(ウムイ ヤリバ)

現代語訳：自分の胸中の思いは、つつもうとしてもつつみきれものではない。それは螢が身を焦がすほど思いこがれてその光が他にもわかるようなものだ。隠そうとしても、隠しきれものではない。

この和歌の読み人と記されているのは、「わらは」であり、歌集によって「うなみをとこ」若しくは「よみびと知らず」とも記録されており、伝説的な男性のように思われるが、この和歌自体は非常に有名であり、『後撰和歌集』以外に『定家十体』などの様々な歌書に見られる。琉歌も意図的にこの和歌を改作したと考えられる。琉歌は、和歌における「つつめども かくれぬ (意：包んでも隠れない)」という表現を同じ意味を維持しながら「つつでつつまらぬ (意：包んでも包まれない、要するに隠れない)」のようにみごとに類義語に変え、和歌の5音の第1句と4音の表現を、琉歌の8音の第1句に変形していることが指摘できる。また、和歌における第3句「夏虫の」は5音であるため、「夏虫の」という5音の表現に3音の「哀れ」を接頭しつつ、ここも8音句を完成する。さらに、和歌の「身よりあまれる」という7音句における表現を用いつつ、沖縄語の文

法を適用することによって「身にあまるほどの」という 8 音句が出来る。

既述のように、この琉歌の元になった和歌は様々な歌書に含まれており、藤原定家に関わっていた歌書も多く見られる。したがって、琉歌人もこの和歌を改作した可能性が高いと言えるだろう。『後撰和歌集』を含めすべての歌書は以下の通りである。

➤ 平安時代成立：

- 『後撰和歌集』
- 『大和物語』
- 『和漢朗詠集』
- 『和歌童蒙抄』

➤ 鎌倉時代成立：

- 『古来風体抄』
- 『定家十体』
- 『定家八代抄』
- 『瑩玉集』
- 『近代秀歌』
- 『八代集秀逸』
- 『今物語』
- 『十訓抄』
- 『詠歌一体』
- 『撰集抄』
- 『世継物語』

④

次の琉歌は、元にして改作したと考えられる和歌がそれぞれ違う 2 首あると推定しているため、それらの和歌と改作琉歌を照らし合わせた図を個別に示しながら、影響関係の可能性を述べたい。

まず、第一の改作可能性の和歌として図 1 にある『風情集』に含まれる藤原公重の和歌を紹介する。

(図1)

和歌

『風情集』(183)
(歌人：藤原公重)

ぬぎかふる

蝉の羽衣

うすければ

夏はきたれど

すずしかりけり

琉歌

『琉歌全集』(1508)、
『古今琉歌集』(134)
(歌人：読人しらず)

若夏がなれば (ワカナツィガ ナリバ)

蝉の羽衣に (シミヌ ハグルムニ)

ぬぎかへて心 (ヌジカイツィ ククル)

すだくなゆさ (スイダク ナユサ)

現代語訳：初夏ともなれば、蝉の羽衣のような薄衣に着替えて、体はいうまでもなく、心まで涼しくなるようだ。

この図1の和歌も琉歌も、「夏」「蝉の羽衣」「脱ぎ変える」「涼しい」という表現を用いながら、「夏が来た時に薄い蝉の羽衣のような着物に脱ぎ変えたら涼しい気持ちになる」と同様の内容を詠んでいる。琉歌のほうは、「若夏」や「すだく」という沖縄語や琉歌の中に見られる独特の表現を用いる。「若夏」は和歌には見られない語であり、「うりずん」と共に沖縄の風土の独特の表現であり、梅雨に入っている夏直前の時期(旧暦4~5月)を言う。既述したように、「若夏」という表現は琉歌の他にオモロにも見られ、琉歌とオモロとの大きな共通点となっているが、琉歌とオモロとで「若夏」が呼応する動詞は異なっており、さらに、「若夏」を取り入れた琉歌とオモロの間にオモロの改作琉歌は存在しないため、オモロからの影響は単語レベルでしか確認することができない。また、「すだくなゆさ(意：涼しくなる)」という句における形容詞「すだしさ(涼だしさ) [スイダシャン/スイダサン]」は琉歌と組踊にのみ見られ、『沖縄古語大辞典』によると「涼しい」という意を持つ。このように、和歌における「すずし」は沖縄語に変えられ、琉歌に取り入れられていることが分かる。

なお、この琉歌の元になった和歌は藤原公重(1118-1178)晩年の私家集『風情集』の和歌である。同歌は、他に『実国家歌合』にも載っており、『国歌大観・5巻』によると、「嘉応二年(一一七〇)五月二九日に行われた歌合(p.1441)」であるため、この和歌はすでに1170年に存在したことが分かる。この平安末期成立の和歌における上3句は、後代の和歌の元ともなったことが次の3首から窺える。以下に列挙する3首目の和歌は上2句のみ取り入れているものの、藤原公重の和歌の影響が推定できるだろう。

● 『出観集』(697) [歌人：覚性法親王] →成立は、1175年と推定されている

歌 ぬぎかふる せみのは衣 うすけれど 思ふころを
えこそもらさね

● 『為家千首』(201) [歌人：藤原為家] →成立1223年

歌 ぬぎかふる せみのはごろも うすけれど ふかくも春を
しのぶころかな

● 『拾遺愚草』(521) [歌人：藤原定家] →成立は、1233年と考えられている

歌 ぬぎかふる せみのは衣 袖ぬれて 春の名残を 忍音ぞなく

これらの用例から明らかになっているように、1170年の歌合にすでに確実に詠まれた藤原公重の和歌は、後代の歌人や藤原定家と為家までにも影響を及ぼした。このような和歌は琉歌にも影響を与えたことが同様に推定できるだろう。

また、この和歌以外には、上の琉歌の元となったと推定できる和歌は他に1首挙げられる。以下の図2の通りである。(琉歌は同上である)。

(図2)

和歌

『浦のしほ貝』(398)
(歌人：熊谷直好)

からころも

ぬぎて出でたる

うつ蟬の

よはころから

すずしかりけり

琉歌

『琉歌全集』(1508)、
『古今琉歌集』(134)
(歌人：読人しらず)

若夏がなれば (ワカナツィガ ナリバ)

蟬の羽衣に (シミヌ ハグルムニ)

ぬぎかへて心 (ヌジカイティ ククル)

すだくなゆさ (スイダク ナユサ)

江戸時代成立の『浦のしほ貝』に含まれている和歌とその改作琉歌の共通表現は5語となり、図1で紹介した公重の和歌にない「心」という語まで含まれることは、この図2の和歌と琉歌のさらなる共通点となる。一方、この図2の和歌の中で、人間は薄い蟬の羽衣を脱いだ場面ではなく、蟬自体は衣を脱ぎ、心が涼しくなった場面が詠まれる。つまり、この図2の和歌には、図1の和歌と改作琉歌には見られない擬人化した現象が詠まれていることが分かる。この

点は図 1 の和歌と琉歌と異なるため、逆に図 1 の和歌が改作された可能性を高めていると言えるだろう。

上句における歌の流れについてはそれぞれの歌で若干の相違点があるものの、歌における表現や趣旨はほぼ同様のものであるため、この図 2 の和歌も図 1 の和歌と同様に上の琉歌に改作された可能性が十分考えられる。

⑤

和歌

『為村集』(801)
(冷泉為村卿家集)

よひよひに

ならず扇の

風なくは

ねやのあつさは

いかで忘れん

琉歌

『琉歌全集』(155)
(歌人：読人しらず)

→ 手になれし扇の (ティニ ナリシ オジヌ)

→ 風のないぬあれば (カジヌ ネン アリバ)

→ いきやす忘れゆが (イチヤスイ ワシリユガ)

→ 夏の暑さ (ナツイヌ アツイサ)

現代語訳：手に持ち馴れた扇の風がなかったら、どうして夏の暑さを忘れることができよう。

「夏」を歌った琉歌の元になったと考えられる上の和歌には、「夏」という表現がとりわけ詠み込まれておらず、その代わりに「寝屋」という表現が見られるが、「扇」や「暑さ」は詠まれているので、この和歌も夏を想像させる。この改作琉歌は、和歌における表現を沖縄語の文法に巧みに変え、琉歌の独特の表現を生み出している（和歌の「いかで忘れん」→「いきやす忘れゆが」、和歌の「風なくは」→「風のないぬあれば」）。

この和歌は、江戸時代に成立した冷泉為村の私家集『為村集』にのみ含まれている。

以上をまとめてみると、「夏」を歌った琉歌には和歌の改作琉歌が少なく、5首にとどまる。その作者については、読人知らずの琉歌が3首あり、また残りの2首は特定の歌人による歌となる。それらの琉歌の元になった可能性がある指摘した和歌も5首あり、その内訳は、平安時代成立の歌集に初出する和歌が3首、江戸時代成立の歌集に初めて見られる和歌が2首ある。また、その中で、『古今和歌集』および『後撰和歌集』のように、勅撰和歌集に見られる和歌は2首あることが明らかになった。

6. 「秋」の歌について

『おもろさうし』の中には「秋」を歌ったオモロが全く見られないが、和歌には「秋」を詠んだ歌が一番目に、琉歌には二番目に多く見られる。

「秋」と動詞との組み合わせに関しては、和歌と琉歌の間に著しい共通点が見られない。ただ、和歌の「秋」も琉歌の「秋」も両歌に見られる同じ動詞と呼応することが多い。

表 7

琉歌の「秋」と動詞の組み合わせ			和歌の「秋」と動詞の組み合わせ			
動詞	歌数	割合		動詞	歌数	割合
なる／過ぐ	6 ずつ	4.7%	1	来る	149	5.5%
暮れる	5	3.9%	2	知る	50	1.9%
知る／忘れる／ 行く／来る	4 ずつ	3.1%	3	行く	47	1.7%
言う	2	1.6%	4	暮れる	33	1.2%
込める／まさる 等	1 ずつ	0.8%	5	なる／待つ	32 ずつ	1.2%

両歌の中には、「秋風」や「秋の夜」が目立つ。「秋の夜の（お）月」が両歌共に非常に多く、和歌の場合は、「秋の夜」を詠んだ歌の 52% を占め、琉歌の場合も 41% まで及んでいる。また、「紅葉」も多く見られる。

「秋」を詠み込んだ計 129 首の琉歌の中に、和歌の改作琉歌と考えられるものが 12 首見られ、およそ 9% を数える。以下にその歌を列挙する。なお、12 首すべてについて先行研究の指摘が見られない。また、「秋」を歌ったオモロがないので、そのようなオモロの改作琉歌も一切見られない。

①

和歌

『古今和歌集』(215)

(歌人：猿丸大夫)

[註：歌人は、藤原定家の『百人一首』に依る]

おく山に -----> 深山住むならひや(ミヤマ スィム ナレヤ)

もみぢふみわけ -----> 紅葉ふみわけて (ムミジ フミワキテイ)

なく鹿の -----> 鹿の声聞きど (シカヌ クキ チチドウ)

こゑきく時ぞ -----> 秋や知ゆる (アチャ シユル)

秋は悲しき

琉歌

『琉歌大成』(4167)

(歌人：故津波古親雲上)

現代語訳：深山に住む者は、紅葉を踏み分けて鳴く鹿の声を聞いて、秋を知ることができる。

この和歌は当時大変有名な歌であると考えられ、『古今和歌集』以外にも様々な歌書に含まれており、定家の歌書にも見られる。琉歌はこの有名な和歌を倣って作られたと考えられるだろう。

詳しく分析すれば、まず、和歌の 5 音の第 1 句「奥山に」は、琉歌において類義語「深山」に変えられ、3 音の表現であるため、残りの 5 音が「住むならひや（発音：スィムナレヤ）」という表現で埋められていることが分かる。次に、和歌の第 2 句「もみぢふみわけ」は 7 音句であるので、8 音句に変形するために、完了助動詞「つ」の連用形「て」という 1 音の語を動詞「ふみわけ」に接尾しつつ、和歌と同様の意味を表す。そして、琉歌は和歌における第 3・4 句「鳴くしかのこゑきく時ぞ」を結合し、「鳴く」と「時ぞ」を省略しつつ、「鹿の声聞く」という主な意味を和歌から取り入れる。しかし、このように出来た「鹿の声聞く」という表現は、7 音であるため、琉歌は異なる文法を用い、上の和歌における 2 音の「聞く」という動詞の連体形を「聞き」という連用形に変え、さらに強意を表す係助詞「ど」をつけ、「聞きど」という 3 音の表現に変形することによって、ふさわしい 8 音の第 3 句を完成する。また、結句にも注目すると、和歌における「秋は悲しき」は琉歌において「秋は知ゆる」のように改作され、和歌に多く見られる「悲し」はおそらく音数律の関係で取り入れられなかったことも考えられるのだが、「春夏秋冬」の琉歌には「悲し」などの切ない気持ちを表す表現があまり見られない特徴のためでもあると言える。

なお、既述したように、この和歌は大変有名な歌であり、以下の歌書に含まれている。

➤ 平安時代成立：

- 『寛平御時后宮歌合』
- 『古今和歌集』
- 『三十六人撰』

➤ 鎌倉時代成立：

- 『古来風体抄』
- 『俊成三十六人歌合』
- 『定家八代抄』
- 『近代秀歌』
- 『詠歌大概』
- 『百人秀歌』

- 『百人一首』
- 『三十番歌合』
- 『桐火桶』

②

和歌

『古今和歌集』(170)
(歌人：紀貫之)

川風の

涼しくもあるか
打寄する

浪と共にや

秋は立つらむ

琉歌

『琉歌全集』(1491)、
『古今琉歌集』(141)
(歌人：読人しらず)

夏の走川に (ナツイヌ ハイカワニ)

涼し風立ちゆす (スズシ カジ タチュスイ)

もしか水上や (ムシカ ミナカミヤ)

秋やあらね (アチャ アラニ)

現代語訳：夏の川に涼しい風が吹いて
来る。もしや水上は秋ではないか。

この②の琉歌については、先行文献の中で改作琉歌までとは呼ばないが、紀貫之によって詠まれたこの『古今和歌集』の和歌に似ていることがすでに島袋盛敏によって指摘されている(島袋 1995、p.314)。両歌の共通表現は他の改作琉歌の場合より少ないものの、歌の流れ(順番)や趣旨は同様のものとなっていることが分かる。「川風が涼しくなっているので、波と共に秋が来ただろう」という和歌の内容に対し、琉歌は「夏の川に涼しい風が立っているので、水上は秋が来たのではないか」と同様の内容を歌っている。両歌とも、「川」「風」「涼し」「秋」という同じ表現を同じ順番で取り入れているのみならず、和歌における2句「打ち寄する 波と共にや」の代わりに琉歌の中で「もしか水上や」という類似表現を取り入れた1句も見られており、上の琉歌においては和歌と同様の内容が保たれている。したがって、ここでは改作琉歌として指摘できると考えられる。

元となった上の和歌は、『古今和歌集』以外に次の歌集にも見られる。

- 『貫之集』(平安時代)
- 『古今和歌六帖』(平安時代)
- 『新撰朗詠集』(平安時代)
- 『古来風体抄』(鎌倉初期)
- 『定家八代抄』(鎌倉時代)
- 『秀歌大体』(鎌倉時代)

●『桐火桶』（鎌倉後期）

しかし、先行研究で指摘されているこの古今和歌以外に、次の 2 首の和歌も新たに指摘できると考えられる。次の 2 首の和歌は、②の琉歌と類似しており、②の古今和歌と共にこの改作琉歌の元となった可能性が推定できるだろう。

●『嘉元百首』（726）（納涼）〔作者：不明〕（鎌倉時代）

歌 くれはつる 夏みの川の 河風に 山かげすずし 秋かよふらし

●『新千載和歌集』（304）〔前中納言匡房家の歌合に、納涼 よみ人しらず〕（室町時代）

歌 大井河 まだ夏ながら 涼しきは みせきに秋や もりてきつらん

➤ 同和歌は、鎌倉時代成立の『歌枕名寄』や江戸時代成立の『類題和歌集』の中にも見られる。

これらの和歌は 2 首とも、②の改作琉歌と共通表現が 4・5 語程度あり、歌の流れも琉歌と同じものとなっている。したがって、琉歌は上の 2 首の和歌を改作した可能性は十分考えられる。さらに、『嘉元百首』の歌における「くれはつる夏」や『新千載和歌集』の歌における「まだ夏ながら」のように、両歌は先行研究で紹介されている②の古今和歌には見られない「夏」という表現まで取り入れ、琉歌との共通表現を増やしていることが指摘できる。

一方、『嘉元百首』の和歌は、琉歌に見られる「風の涼しさ」ではなく、「川風に山かげの涼しい秋が通う」と詠んでいるため、「風の涼しさ」より「山かげの涼しさ」が正確に詠まれていることは、②の改作琉歌と最初に紹介した古今和歌との相違点となる。また、『新千載和歌集』の和歌は「風」の様子を取り入れずに「川の涼しさ」を詠んでいるため、この点も②の改作琉歌と古今和歌と違うことを言及する必要があると考えられる。

以上の相違点にもかかわらず、共通点を踏まえた上で、上の『嘉元百首』と『新千載和歌集』の 2 首の和歌も先行研究で紹介されている古今和歌と共に、②の琉歌が作られた時に改作の元となった可能性が指摘できると結論付けられる。

③

和歌

『新勅撰和歌集』(281)
(歌人：よみびとしらず)

秋の夜の
あまてる月の
ひかりには
おくしらつゆを
たまとこそ見れ

琉歌

『琉歌大成』(73)
(歌人：不明)

秋の夜の月に (アチヌ ユヌ ツィチニ)
草葉露むすで (クサバ ツィユ ムスディ)
すだき見てきよらさ (スイダサ ンチ チュラサ)
玉の光 (タマヌ フィカリ)

現代語訳：草の葉に結ぶ露が秋の夜の月の光に玉のように輝いて、涼しげなことよ、美しいことよ。

この改作琉歌の元となったと考えられる和歌は、鎌倉時代成立の『新勅撰和歌集』の歌として挙げたが、この和歌の初出は平安時代にあり、892年頃に行われた『寛平御時后宮歌合』にすでに詠まれていたことが今回の調査で明らかになった。その後、鎌倉時代の『新勅撰和歌集』にも含まれていた。琉歌人もこの勅撰和歌集をこそ参考にし、この和歌について知ったことが推定できるだろう。

この改作琉歌と和歌との順番は、「光」という表現に関して少しずれている。両歌は「秋の夜の月のおかげで露の玉が美しく見える」という同様の意味を表しているが、それぞれの歌で異なったニュアンスも享受できる。和歌では、露が秋の月の光に置かれており、玉のように見える場面が詠まれているのに対し、琉歌では、秋の月の時に眺めている露の玉の、その光が美しいことが歌われている。

④

和歌

『新勅撰和歌集』(253)
(歌人：大炊御門右大臣)

あまつそら
うきくもはらふ
秋風に
くまなくすめる
よはの月かな

琉歌

『琉歌大成』(4198)
(歌人：不明)

見れば秋風の (ミリバ アチカジヌ)
雲やおし払て (クムヤ ウシハラティ)
澄みて照る月の (スイミティ テイル ツィチヌ)
影のきよらさ (カジヌ チュラサ)

現代語訳：見れば秋風が雲を押し払つ

て、月の澄んで照る光の美しいことよ。

両歌の前半を分析すれば、「秋風」「雲」「払ふ」という 3 つの共通表現が詠み込まれていることが分かる。「秋風」が和歌では第 3 句に、琉歌では第 1 句に、歌それぞれの中において異なる位置に置かれているものの、「雲」と「払ふ」は両歌共に第 2 句として見られる。和歌における「あまつそら」という第 1 句は、琉歌において「見れば」という表現に置き換えられていると言えるのではないだろうか。なぜならば、常識で考えれば、「あまつそら」は見るものであるため、琉歌は「空」という表現の代わりに「空」とよく呼応する動詞「見れば」を用いながら、和歌と同じような感覚を詠んでいると言えるからである。このように、この改作琉歌は和歌の第 1 句「あまつそら」と第 3 句「秋風に」を巧みに結合しながら、「見れば秋風の」という第 1 句を完成していると言えるだろう。また、上述のように、琉歌はさらに和歌の第 2 句における「雲」と「払ふ」という共通表現を取り入れながら、和歌の「うきくもはらふ」という 7 音の第 2 句を「雲やおし払て」という 8 音の第 2 句に改作していることが分かる。

両歌は秋風に雲が消えた空の中で清かに照っている月を誉めているものの、琉歌は和歌の「くまなくすめる よはの月かな」という 7・7 音の下 2 句を「澄みて照る月の」のように、8 音の第 3 句として収まりつつ、結句の中に琉歌にしか見られない典型的な表現「きよらさ（チュラサ）」を取り入れることで、和歌らしい内気な誉め方を琉歌らしい率直な誉め方に変え、結句で和歌と異なる魅力を生み出している。

この④の和歌は、定家によって編纂された鎌倉時代成立の勅撰和歌集『新勅撰和歌集』に含まれており、琉歌人もその歌集を学んだ可能性が高いと思われる。したがって、この琉歌もこの歌集に見られる和歌を改作したのではないかと推定できるだろう。この和歌は、『新勅撰和歌集』以外に、室町時代成立の『題林愚抄』、鎌倉中期～室町前期成立の『明題和歌全集』や江戸時代成立の『類題和歌集』にも見られるため、琉歌人はそれらの歌集も参考にした可能性があり得ると考えられる。

⑤

和歌

『秋風和歌集』(650)
[歌人：後二条の関白]

ここのへの
うちにやへさく
しら菊の
はなは千とせの
はじめなりける

琉歌

『琉歌全集』(1689)
[歌人：読人しらず]

千代の秋ごとに (チュヌ アチグトウニ)
七重八重菊の (ナナキ ヤキ チクヌ)
九重の内に (ククヌキヌ ウチニ)
咲きやるきよらさ (サチャル チュラサ)

現代語訳：千代の秋毎に、七重八重の菊が、九重の玉城内に咲いたのが美しい。

この琉歌は、和歌の「九重の 内に八重咲く 白菊の」という上3句を「七重八重菊の 九重の内に 咲きやるきよらさ」という下3句に変形し、ここも「きよらさ」という表現を入れ、和歌を巧みに改作していることが分かる。また、和歌の「千歳」を「千代」に変えていることもこの改作琉歌の工夫の一つとして挙げられるだろう。この改作琉歌は、和歌との共通表現を「九重」「八重」「内に」「咲く」「菊」のように5語含み、また、「千歳」の代わりに「千代」という類義語も用いていることが明らかである。

この琉歌の元になった和歌が含まれる歌集は、鎌倉時代の歌人の葉室光俊によって編纂され、本人は藤原定家に師事したことが知られている。

⑥

和歌

『宝治百首』(1926)
(歌人：隆親)

紅葉ばの
下てる色や
うつるらん
錦ながるる
やまがはの水

琉歌

『琉歌全集』(1530)
(歌人：本村朝照)

澄みて流れゆる (スミティ ナガリユル)
山川の水に (ヤマカワヌ ミズイニ)
色深くうつる (イルフカク ウツイル)
秋の紅葉 (アチヌ ムミジ)

現代語訳：澄んで流れるきれいな山川の水に、色深くあざやかにうつる紅葉のかげがすごく美しい。

同様の場面を詠んでいる両歌の上句と下句の順番が逆になっていることで、それぞれの歌で強調されていることも異なってくる。和歌は、紅葉の錦が流れている「山川の水」に焦点を当てているのに対し、琉歌は、きれいに澄んでいる山川の水に色深く写っている「紅葉」を以て歌を展開する。『宝治百首』は勅撰和歌集ではないものの、『続後撰和歌集』の選歌資料に充当するため、後嵯峨院が宝治2年（1248年）に当時の主要歌人40人に詠進させた百首である。したがって、琉歌の歌人もそれを参考にしていた可能性が考えられるだろう。

なお、この和歌は鎌倉時代成立の『宝治百首』以外に、次の歌集にも見られるため、それらの歌集も琉歌人に参考された可能性が指摘できるだろう。

- 『明題和歌全集』（鎌倉中期～室町前期成立）
- 『題林愚抄』（室町時代成立）
- 『類題和歌集』（江戸時代成立）

⑦

和歌

『頓阿百首』(40)

(歌人：頓阿)

あさくまの

山のは出づる

月かげや

くもりなき代の

鏡なるらん

琉歌

『琉歌全集』(1537)

(歌人：美里王子)

虎頭山出ぢる (トゥラズイヤマ うジル)

秋の夜のお月 (アチヌ ユヌ ウツイチ)

曇りないぬ御代の (クムリネン ミユヌ)

鏡さらめ (カガミ サラミ)

現代語訳：虎頭山の上に出た秋の夜のお月さまは、くもりない御代の鏡であろう。

この改作琉歌は元の和歌との内容かつ順番も一致しており、両歌共に非常に似通っていることが明らかである。この改作琉歌は和歌との共通表現を7語も取り入れており、典型的な改作琉歌の1首として指摘できる。この琉歌の特徴としては、和歌に詠まれる「あさくまの山」を「虎頭山」に変え、即ち山の地名を沖縄の地理に合わせている点が指摘できる。また、琉歌と和歌の異なる音数律の関係で、和歌の句を結合したり、和歌の表現の音数を少し変えたりするなどのような、改作に必要な小さな変形が見られる。

詳しく見てみれば、まず、和歌の上2句、つまり5・7音は、琉歌において8音の上1句として圧縮される点に注目できる。両歌共に「出づる／出ぢる」という3音の共通動詞を用いているのだが、注目ポイントは、和歌の「あさくまの山

の端」という 9 音を琉歌に適切な 5 音に直し、3 音の「出ぢる」とつくことで琉歌の典型的な 8 音句を作ることである。そのため、上述したように、琉歌は大和地名における「あさくまの山」という 7 音の表現を沖縄の地名に知られる「虎頭山」という 5 音の表現に変形し、また、和歌における「の端」という 2 音を省略しつつ、琉歌に相応しい「虎頭山出ぢる」という 8 音句を完成させる。また、和歌に見られる「くもりなき代の」という 7 音句に 1 音を足すためには、和歌の 1 音の表現「代」を 2 音の表現「御代」に変形し、「曇りないの御代の（発音：クモリネンミュヌ）」という 8 音句が出来上がる。最後に、和歌の結句「鏡なるらん」における「鏡」をそのまま取り入れ、残りの 4 音の「なるらん」という現在推量を表す表現を、似たような意味を持つ沖縄語の文法に変え、感嘆を表す「さらめ（意：であろうなあ）」という 3 音の助詞に変形していることが分かる。このように、和歌の 7 音の結句を琉歌において 6 音の結句として享受することができる。

この⑦の和歌は、室町時代成立の『頓阿百首』という頓阿の歌集に見られる。以前にも表示したように、琉歌人は頓阿の歌をいくつか学んだことがあり、この琉歌の場合も、その元の和歌として頓阿の和歌が指摘できる。

⑧

和歌

『頓阿百首』(40)

[歌人：頓阿]

あさくまの

山のは出づる

月かげや

くもりなき代の

鏡なるらん

琉歌

『琉歌全集』(1287)

[歌人：読人しらず]

虎頭山の端の (トゥラズイ ヤマヌフウヌ)

秋の夜のお月 (アチヌ ユヌ ウツイチ)

曇りないぬ御代の (クムリネン ミユヌ)

鏡さらめ (カガミ サラミ)

現代語訳：虎頭山の端にかかる秋の夜のお月さまは、くもりのない御代を写す鏡であろう。

⑦および⑧の琉歌は頓阿に詠まれた同じ和歌を元としているが、和歌における「山の端出づる」が⑦の琉歌の中では「山出ぢる」に変形されており、⑧の中では「山の端の」に変形されていることのみが、⑦と⑧の相違点となっている。頓阿の和歌の中には、⑦の琉歌に見られる動詞「出づ」も⑧の琉歌に見られる「山の端」も含まれているため、⑦かつ⑧の両方の琉歌はこの和歌に倣って作られたに違いないと推定できるだろう。

⑨

次の琉歌は、和歌の改作作業に当たって影響を受けた可能性が指摘できる和歌が、2首考えられる。

まず、1首目の和歌からの影響を以下の図1で表示する。

(図1)

和歌

『新千載和歌集』(634)
(歌人：入道二品親王尊円)

初霜の
をかのかやはら
いつのまに
秋みし露の
むすびかふらん

琉歌

『琉歌全集』(1526)、
『古今琉歌集』(195)
(歌人：今帰仁王子朝敷)

草の葉の霜や (クサノ フウノ シムヤ)
玉と思なちやさ (タマトウ ウミナチャサ)
いつの間ににやまた (イツィヌマニ ニヤマタ)
秋やあなたが (アチャ ナタガ)

現代語訳：草の葉の霜は玉かと思った。
いつの間にもうまた秋になっていたか。

この図1の和歌と琉歌の共通表現は3語、或いは、「露」と「玉」も数えれば、4語のみで、少ないように思える。さらに、和歌の場合は「秋になった際、露が霜に結び、霜に置き換えられる」という状態が数多くの歌の中で詠まれており、上の和歌のみが唯一にそのような状態を描いている訳ではない。

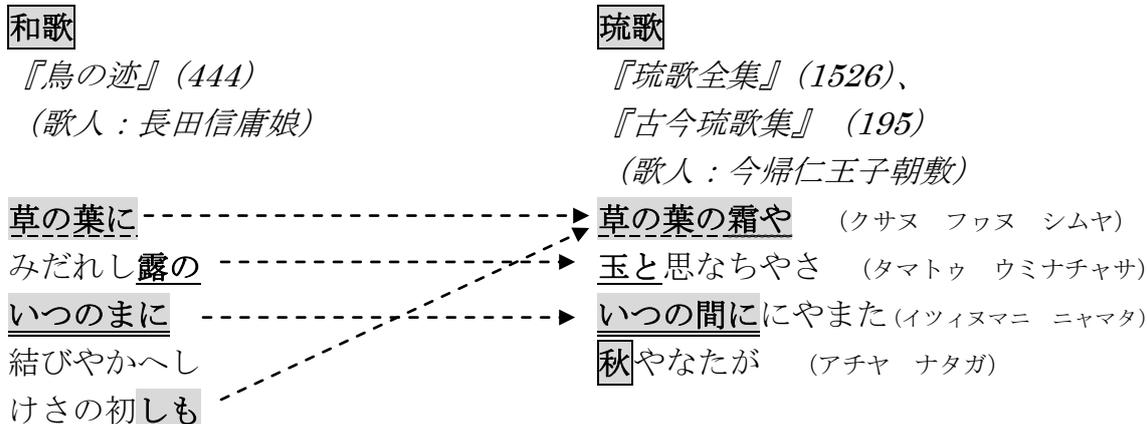
しかし、ここの歌のポイントは「いつのまに」という表現にある。「露が霜に置き換えられる」場面を詠んだ全ての和歌の中に「いつのまに」を取り入れた歌は2首のみあり、その1首は上の和歌である。琉歌もおそらくその表現を和歌から借用し、和歌における「露がいつのまに霜と結び付いた」という内容を「霜は露だと思ってしまったが、いつのまに秋になったか」に巧みに変えた。また、和歌における5音句を琉歌の形式に合わせるために3音の「にやまた(意：もうまた)」をくっつき、「いつの間ににやまた」という8音句を完成していることも分かる。

なお、この和歌は室町時代の勅撰和歌集である『新千載和歌集』以外に以下の和歌集にも見られる。

- 『尊円親王百首』(1346年成立・室町時代)
- 『明題和歌全集』(鎌倉中期～室町前期成立)
- 『題林愚抄』(1447年～1470年成立・室町時代)
- 『類題和歌集』(江戸初期成立)

既述のように、この『新千載和歌集』の和歌のみならず、この琉歌に影響を与えた可能性のある和歌は、他に1首考えられる。その和歌を以下の図2で紹介しておく。

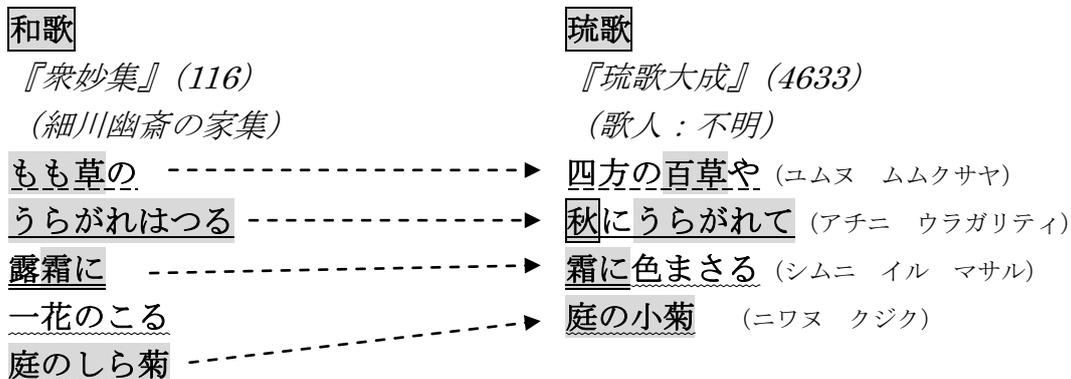
(図2)



この和歌は1702年成立の『鳥の迹』という江戸時代の歌集に収められ、この1526番琉歌を詠んだ今帰仁王子朝敷(1847-1915)がこの和歌を元にした可能性に関して、時代の観点からも無理はないと指摘できる。この歌の中にも「いつのまに」という表現が見られ、上述の『新千載和歌集』の歌にない「草の葉」という表現も琉歌と共通している。

『新千載和歌集』の和歌も『鳥の迹』の和歌も、「いつの間に秋になったか」ではなく、「いつの間に露が霜になった」という内容を詠み、琉歌と異なる部分を含んでいるとも言えるが、琉歌も「秋の露は霜となった」という和歌と同じような場面上2句において歌っており、さらに「いつのまに」という注目の表現も詠み込んでいるため、上の2首の和歌(のどちらか)に倣って誕生したのではないかと推定できるだろう。

⑩



現代語訳：すべての草が枯れている秋に、霜のなかで美しい色を庭の小菊が際立たせている。

この両歌も句の順番が同様であり、歌の流れは同じ傾向を示している。琉歌は、和歌における表現をほとんどそのまま取り入れているが、詳しい分析を試みれば、まず、琉歌は和歌の5音の第1句「もも草の」の冒頭に「四方の」という3音の表現を入れつつ、8音の第1句にきれいに収めている。また、和歌における「庭の白菊」という7音の結句を6音の結句に変形するために、「白菊」という4音の表現の代わりに「小菊」という3音の語を用いていることが明瞭となる。さらに、和歌における第3句と第4句を結合しつつ琉歌の第3句が完成されるのだが、琉歌は和歌の第3句から「霜に」という3音の表現を取り、また「一花残る」という第4句の代わりに、類義語「色まさる」という5音の表現を使いながら、8音の第3句を作る。「一本の花のみ残っている」という和歌において描かれた淋しい秋の風景は、「色まさる」の置換によって琉歌の中で楽観的な気持ちで彩られているものとなると言える。

この和歌は江戸初期の和歌界に影響を残した細川幽斎の歌集である『衆妙集』に見られる歌である。

⑪

和歌

『鳥の迹』(625)

(歌人：読人不知)

いつの世に

誰か見初めし

秋の夜と

月に昔の

ことを尋ねん

琉歌

『琉歌全集』(530)

(歌人：読人しらず)

昔見そめたる (シカシ ミスミタル)

人や誰がやゆら (フィットウヤ タガ ヤユラ)

月に尋ねぼしや (ツイチニ タズイニブシヤ)

秋の今宵 (アチヌ クエイ)

現代語訳：月をはじめて見て、美しいと見とれた人は誰であったろうか。月はよく知っておるであろうから、月に尋ねてみたい。

この⑪の琉歌は、内容や表現の観点から和歌と同様のものであるため、江戸時代のこの和歌を意図的に改作したと言えるだろう。「昔のこと」と「秋の今宵」の順番のみが元の和歌と異なっているものの、両歌の表している意味は、上句

において「昔初めて月を眺めたのは誰であるか」となり、また下句において「秋の夜にそれを月に尋ねよう」となっており、一致していることが明らかである。

⑫

和歌

『新明題和歌集』(1571)

(歌人：為教)

おく露の

光をそへて

夕顔の

垣ね涼しく

やどる月影

琉歌

『琉歌大成』(2698)

(歌人：不明)

月に面白さ (ツイチニ ウムシルサ)

夕顔の花の (ユウガヲウヌ ハナヌ)

秋の夜の露に (アチヌ ユヌ ツィユニ)

光そへて (フィカリ スイティ)

現代語訳：月光のもとに夕顔の花が、
秋の夜の露に光り輝いているのが面白い。

両歌の上句と下句の順番は逆でありながらも、内容や表現は同様であり、和歌の改作琉歌と考えてよかろう。琉歌においては、「面白さ」が「涼しさ」とセットで「すださ面白さ」のように用いられることが多いため、ここでは和歌における「涼しく」という表現を琉歌の中で「面白さ」に意図的に変えたのではないかと推定できる。さらに、この改作琉歌の工夫は、和歌における 5・7・5 音の上 3 句を 8・8・6 音の下 3 句に変形することである。具体的には、琉歌は、和歌における「おく露の」という 5 音句における 3 音の「露の」を同じ音数律を持つ「露に」に入れ替え、また、「おく」という 2 音の語を省き、その代わりに「秋の夜の」という 5 音の表現を取り入れていることで、「秋の夜の露に」という 8 音句を完成する。また、和歌の「光をそへて」という第 2 句は 7 音であるため、1 音を足すか省く必要があるので、琉歌は助詞「を」を省略することで、「光そへて」のように 6 音の結句として歌を閉幕する。最後に、和歌における「夕顔の」という 5 音句に 3 音の「花の」をつけ、琉歌に適切な 8 音句を完成させていることが分かる。

この⑫の和歌を詠んだ歌人の京極為教は藤原為家の三男であり、藤原定家系列の歌人に当たることにも注目できる。この和歌は江戸時代成立の歌集『新明題和歌集』にのみ見られることが本調査で明確になった。

以上をまとめると、「秋」を歌った改作琉歌 12 首の中、特定の歌人によって詠じられたものは 4 首 (33%) のみとなり、残りの 8 首 (67%) は読人知らずの歌となっていることが判明した。また、それら 12 首の琉歌の元となった可能性

の高い和歌を計 14 首指摘した。この 14 首の和歌を初出時代別に分類してみれば、その分布が時代ごとにかなり平等であることが分かる。具体的な内訳は以下の通りである。

- 平安時代に初出する和歌：3 首（21%）
- 鎌倉時代に初出する和歌：4 首（29%）
- 室町時代に初出する和歌：3 首（21%）
- 江戸時代に初出する和歌：4 首（29%）

また、これらの 14 首の和歌の中に、勅撰和歌集の歌が 6 首³¹、勅撰和歌集の選歌資料となる歌集に含まれている歌が 2 首³²見られる。つまり、合わせて 8 首（57%）の和歌は有名な歌集に含まれていることが明らかになった。さらに、上の和歌の中で、頓阿や為教という定家系列の歌人の和歌も 1 首ずつ見られることが判明した。

7. 「冬」の歌について

「冬」と動詞との組み合わせに関しても、「秋」の場合と同じように琉歌と和歌の間ではあまり顕著な共通点が見られない。和歌の場合には、動詞「来る」の詠まれる歌数が一番多くあるものの、琉歌の場合には動詞に偏りがなく、加えてオモロにおける「冬」と呼応する動詞にも、琉歌と一致する動詞はない。

「冬」を歌った琉歌の特徴は、悲しい趣きがあることである。他の季節語を詠み込んだ琉歌とは違い、「冬」を歌った琉歌は「つれなさ」「つらさ」「さびしさ」という語を多く用い、「冬」の琉歌全体の 29%に達する。つまり、冬の琉歌の 3 分の 1 は悲しい歌となっている。その理由としては、沖縄では冬の間、雨の多い、寂しさを誘う天気が続いているからだと考えられる。雪ではなく、霰と時雨しか降らない特徴的な沖縄の冬が、琉歌に反映されている。

「冬」を詠んだ琉歌には和歌の改作琉歌が 8 首（17%）見られ、以下にそれを列挙する。

①

『古今和歌集』の 24 番歌を改作した『琉歌全集』の 76 番歌については「春」の歌のところで既述しているので、ここは省略する。なお、この歌についてはすでに先行研究で指摘がある。

³¹ 具体的には、『古今集』に 2 首、『新勅撰集』に 2 首、『新千載集』に 2 首見られる

³² 『嘉元百首』と『宝治百首』に 1 首ずつある

②

和歌

『後撰和歌集』(445)

(歌人：読人しらず)

神な月

ふりみふらずみ

定なき

時雨ぞ冬の

始なりける

琉歌

『琉歌全集』(1584)

(歌人：読人しらず)

天のお定めや (ティンヌ ウサダミヤ)変わることはないさめ (カワル クトゥ ネサミ)しぐれ雲渡る (シグリグム ワタル)冬のはじめ (フユヌ ハジミ)

現代語訳：天の定めは変わることはあるまい。冬の初めになればしぐれ雲が渡って行くのが見られる。

この両歌は共通表現が 4 語であり、他の歌より少ないように思えるが、なぜ改作琉歌だと考えられるかといえ、この和歌のみならず、数首の和歌において「冬の時雨」が「定めなき」と関連し、この琉歌も「時雨」を「定め」に関連付けているので、決して偶然ではないだろうと言えるからである。したがって、この和歌も、以下に紹介する他 2 首の和歌と共に、この琉歌の元となった可能性が高いと推定できるだろう。

ただし、ここで琉歌における「定め」の意味のズレに注目したい。樋口、後藤(1996)によると、上の和歌の意味は「陰暦一〇月の降ったり降らなかつたり一定しない時雨が、冬の始めを示すものでありました (p.135)」となり、和歌における「定めなき時雨」は「一定しない時雨」のように訳されている。一方、この和歌における「定めなき時雨」が持つ「一定しない、移り変わりやすい時雨」という意味は琉歌になると、「天の定めは変わることはあるまい」という異なる意味となる。即ち、和歌の「定めなき (意：一定しない)」が琉歌において「お定め (意：掟)」になるのである。琉歌も「ない」を用いているが、それが「変わること」と結びつけていることで、「掟が変わることがない」という意味のズレとなり、この歌の面白みとも言える。

なお、上の琉歌の元となったとされる和歌が有名であり、上の平安時代成立の勅撰和歌集以外に多様の歌書に含まれている。以下の通りである。

- 『古今和歌六帖』(平安時代)
- 『和漢朗詠集』(平安時代)
- 『綺語抄』(平安時代)
- 『隆源口伝』(平安時代)
- 『古来風体抄』(鎌倉時代)

- 『定家八代抄』（鎌倉時代）
- 『六華和歌集』（室町時代）

また、上述したように、「冬の時雨」が「定めなき」と呼応している和歌は数首見られ、「神な月～」の和歌以外にも「天のお定めや～」の琉歌に類似している歌が他に2首ある。以下に示す。

- 『玉葉和歌集』（2029）〔歌人：真昭法師〕（鎌倉時代）

歌 さだめなき しぐれの雨の いかにして 冬のはじめを 空にしるらん

- 『新千載和歌集』（608）〔歌人：前大納言経顕〕（室町時代）

歌 さだめなく 時雨るる雲の 晴まより 日影さびしき 冬はきにけり

これらの勅撰和歌集の2首も「天のお定めや～」の琉歌と共通表現を4語ずつ含んでおり、『後撰和歌集』の「神な月～」の和歌と同様に「天のお定めや～」の琉歌に似ていると言える。2首目の『新千載和歌集』の歌は、結句として「冬のはじめ」のような表現の代わりに、「冬はきにけり」という表現を詠み込んでおり、他の2首の和歌と「天のお定めや～」の琉歌と違うものの、この琉歌に見られる「雲」という表現を含んでいるため、琉歌と新たな共通表現を入れていることが分かる。

以上を踏まえ、『玉葉和歌集』と『新千載和歌集』の歌も「天のお定めや～」の琉歌に影響を与え、琉歌へ改作された可能性もあり得るだろう。したがって、改作の可能性のある和歌として、3首全てを挙げたい。

③

和歌

『夫木和歌抄』（6662）

（歌人：民部卿為家卿）

冬の雨の

名残のきりは

あけ過ぎて

くもらぬ空に

のこる月かげ

琉歌

『琉歌全集』（1568）

（歌人：渡口政発）

雨に流されて（アミニ ナガサリティ）

空や雲霧も（スラヤ クムチリン）

はれてすみ渡る（ハリティ スミワタル）

冬のお月（フユヌ ウツィチ）

現代語訳：空は雲も霧も雨に洗い流されて、すっかりはれ渡り、冬のお月さまが澄んで輝いている。

④

和歌

『為家集』(866)
(藤原為家の家集)

ふる雨の

雲ふきはらふ

山かぜを

たよりにさゆる

冬フユの夜ヨの月ツキ

琉歌

『琉歌全集』(1581)
(歌人：高良睦輝)

空ソラや雨アメはれて (スラヤ アミ ハリテイ)

くもクモきりキリもモないナイらぬ (クムチリン ネラヌ)

すみスミて照テり渡ワタる (スミティ ティリワタル)

冬フユのお月ウツィチ

現代語訳：空は雨がはれて、雲や霧もなく、冬のお月さまが澄んで照り輝いている。

これらの③および④の琉歌の内容は、③と④の為家の和歌 2 首に非常に近い
ため、影響を受けたと考えられる。『国歌大観』で調べたところ、為家のこの 2
首のみに「雨が晴れてから雲霧も消え、澄んで冴える冬の月がきれいに見える」
という概念に「雨」の要素も含んでいるため、琉歌は為家のこの 2 首を参考にし、
作られたと推定できよう。③と④の和歌両方は鎌倉時代成立の和歌となる。

⑤

和歌

『嘉元百首』(1247)
(歌人：不明)

浅茅生の

つゆのやどりも

けさよりは

しもおきかへて

冬フユは来キにけり

琉歌

『琉歌全集』(1579)
(歌人：読人しらず)

白露シラツィユヌの玉タマと (シラツィユヌ タマトウ)

今日キョウや初霜ハツィシムヌの (キユヤ ハツィシムヌ)

草クサニにおきかへて (クサニ ウチカワティ)

冬フユや来キちやる (フユヤ チチャル)

現代語訳：今日は白露の玉と初霜が、
草におき代って、早くも冬が来てしま
った。

「露は霜に置き換える」という概念を表す和歌が『嘉元百首』1247 番の和歌
以外に数多く見られ、琉歌にも 2 首見られる(この 1579 番の琉歌と『琉歌全集』
の 1311 番歌)。なお、1311 番歌は、この 1579 番歌と上 3 句が一致しており、
結句のみは「冬や来ちやる」を「冬やつきやさ」に置き換えていることが分か

る。したがって、1311 番歌は、おそらく和歌の改作琉歌として生まれたと考えられるこの 1579 番歌の結句をアレンジして作られたものではないかと推定できるだろう。なぜならば、この 1579 番歌は、和歌の結句「冬は来にけり」を沖縄語に直しつつ、「冬や来ちやる」に変えているものの、1311 番歌における「冬やつきやさ」は和歌の表現から少し離れており、1579 番歌の結句の違うバージョンのように見えるからである。

この 1579 番歌の元になった和歌が含まれる『嘉元百首』は、『新後撰和歌集』（定家系列歌人の二条為世撰）の選歌資料となっているため、琉歌もおそらくその鎌倉時代の有名な百首から影響を受けたのだろう。ちなみに、この和歌は『嘉元百首』のみに見られることが本調査で明らかになった。

⑥

和歌

『新後撰和歌集』(482)

(歌人：権大納言公実)

志賀の浦の

松ふく風の

さびしさに

夕なみ千鳥

たちみなくなり

琉歌

『琉歌全集』(277)

(歌人：神村親方)

仲島の浦の (ナカシマヌ ウラヌ)

冬のさびしさや (フユヌ サビシサヤ)

千鳥鳴く声に (チドゥリ ナク クイニ)

松のあらし (マツィヌ アラン)

現代語訳：仲島の浦の冬のさびしさは、千鳥の鳴く声や松の嵐で、まことにわびしい。

この改作琉歌の元となったと考えられる和歌は、鎌倉時代成立の『新後撰和歌集』に含まれている歌として表示しているが、この和歌の初出は平安時代であるため、厳密にこの和歌を平安時代の歌として考えねばならない。『新後撰和歌集』以外に、平安時代の『堀河百首』や鎌倉時代の『歌枕名寄』にも含まれている和歌である。なお、二条為世撰の『新後撰和歌集』に載録された歌人は定家、為家などであり、琉歌の歌人はおそらくその勅撰和歌集こそ教養したと推定できよう。

この改作琉歌の特徴としては、和歌における浦の地名を沖縄の状況に合わせて沖縄の地名に変える点、また和歌の 7 音句「松ふく風の」の意味を維持しながら琉歌に相応しい 6 音句「松の嵐」に変形する点が挙げられる。

また、この改作琉歌も和歌の句をそのまま取り入れながら、特定の表現を変えることで句を琉歌に相応しい音数律に変形することが見られる。具体的には、

和歌の「志賀の浦の」という 6 音句における 3 音の「志賀の」を 5 音の「仲島の」に変えつつ、「仲島の浦の」という 8 音句が出来上がる。また、和歌の「さびしさに」という 5 音句には、3 音の「冬の」という表現を接頭しながら、「冬のさびしさに」という 8 音句を作る。

⑦

和歌

『延文百首』(2107)

(歌人：不明)

色にこそ

あまぎる雪も

まがひけれ

香やはかくるる

梅の下風

琉歌

『琉歌全集』(1587)

(歌人：護得久朝置)

冬の白雪の (フユヌ シラユチヌ)

色にまぎれても (イルニ マヂリティン)

かくれないぬものや (カクリネヌ ムヌヤ)

花の匂 (ハナヌ ニヲウイ)

現代語訳：万物が冬の白雪の色にまぎれても、かくれないものは花の匂である。

この両歌の内容も表現も同じである。句毎に若干の順番のズレが見られるものの、両歌の上句と下句、即ち「雪の（白い）色に紛れても」という内容を表す歌の前半および、「梅の花は匂いを隠れない」という内容を詠んでいる歌の後半の意味は、両歌共に一致していることが明らかである。

一方、それぞれの歌の中に特徴も見られる。琉歌は、「香」や「まがふ」の代わりに、同じ意味を有する「匂」や「紛れる」を用い、さらに、和歌における疑問・反語を表す「香やはかくるる」をみごとに否定形の表現「かくれない」に改作していることが指摘できる。

この⑦の琉歌の元となったと考えられる和歌は、室町時代成立の『延文百首』にのみ見られる。『延文百首』は『新千載和歌集』という同時代の勅撰和歌集の選歌資料となっているため、琉歌人もおそらくこの百首を参考にし、琉歌を詠じたこともあるのであろう。

⑧

和歌

『新明題和歌集』(2859)

(歌人：為教)

浦風に
声さびしくも
夜もすがら
友なし千鳥
月に鳴くなり

琉歌

『琉歌全集』(1574)

(歌人：上江州由恕)

聞くもさびしさや (チクン サビシサヤ)
冬の夜の空の (フユヌ ユヌ スラヌ)
月に鳴き渡る (ツイチニ ナチワタル)
浦の千鳥 (ウラヌ チドゥリ)

現代語訳：聞くもさびしいのは、冬の夜の空の月に鳴いて渡る浦の千鳥の声である。

この⑧の和歌を詠んだ為教は、既述のように、定家系列の歌人であり、鎌倉時代に活躍した人物である。しかし、調査を行ったところ、為教によって詠まれたこの和歌は、江戸時代成立の『新明題和歌集』以外にはどの歌集にも見られないことが判明した。したがって、琉歌人はこの鎌倉時代の歌人によって詠じられた和歌を、江戸時代成立の歌集から学んだ可能性が高いと言えるだろう。

この和歌の改作琉歌は、和歌との内容も表現も類似しているが、「声」という表現を関連表現である「聞く」に置き換えたりするなどの、細微なニュアンスも見られる。

以上をまとめると、「秋」を詠み込んだ改作琉歌と違い、「冬」を詠み込んだ和歌の改作琉歌 8 首のうち、殆どの琉歌が特定の歌人によって詠じられたものである。8 首の中、特定の歌人の歌は 6 首 (75%) あり、読人知らずの琉歌は 2 首、25%である。また、これらの 8 首の改作琉歌の元となった可能性が高いと考えられる和歌は、10 首指摘できる。当該の 10 首の和歌は、その初出時代別に以下のように別けることができる。

- 平安時代初出の和歌：3 首 (30%)
- 鎌倉時代初出の和歌：4 首 (40%)
- 室町時代初出の和歌：2 首 (20%)
- 江戸時代初出の和歌：1 首 (10%)

したがって、「冬」を詠み込んだ改作琉歌の元と考えられる和歌は、鎌倉時代や平安時代に最も多く見られることが分かった。また、これらの 10 首の和歌の

うち、5首が勅撰和歌集³³、2首がその選歌資料³⁴となった百首に依るものであり、残りの3首は、為家（2首）や為教（1首）によって詠まれた歌であることが判明した。したがって、全ての10首の和歌は当時の琉球の知識人にとってかなり有名なものであったと推定でき、琉歌人もおそらくこれらの和歌を改作したのであらうと考えられる。

最後に、「5. 夏の歌について」で既述したように、ここではオモロの改作琉歌についても述べたい。次ページに示す「夏」と「冬」という季節語を詠み込んだ歌は、季節と深い繋がりは見えないが、オモロとの関係を示す重要な証拠の一つであらう。なお、このオモロの改作琉歌の存在については、嘉手苺（1996）もすでに指摘している（p.64-65）。

³³ 具体的には、『古今集』（1首）、『後撰集』（1首）、『玉葉集』（1首）、『新後撰集』（1首）、『新千載集』（1首）となる

³⁴ 『嘉元百首』（1首）と『延文百首』（1首）が指摘される

きみがなしが節

一 伊祖の戦思ひ

月の数遊び立ち

十百年 若てだ 栄せ

又 意地気戦思ひ

又 夏はしけち盛る

又 冬は御酒盛る

〔大意〕

伊祖の戦思ひ様（英祖王）、立派な戦思ひ様が、月ごとに神遊びをして、千年も末長く、勝れた按司様を盛んに盛りあがらせよ。夏は神酒を盛り、冬は御酒を盛って栄えていることだ。

（巻12・671）

（重複オモロもあり→巻15・106）

●『琉歌全集』（1604）〔歌人：不明〕

伊祖のいくさもり

夏しげち冬や

お酒もてよらて

遊びめしやうち

イズヌ イクサムイ

ナツイ シギチ フユヤ

ウサキ ムテイ ユラテイ

アスイビ ミショチ

現代語訳：伊祖の英祖王は夏はしげちという甘い酒で、さかもりを催され、冬は強いお酒で、さかもりを開かれて、遊びになった。

●『琉歌全集』（1623）〔歌人：不明〕

英祖のいくさもり

夏すぎて冬や

お酒もてよらて

遊びめしやうち

イズヌ イクサムイ

ナツイ スイジテイ フユヤ

ウサキ ムテイ ユラテイ

アスイビ ミショチ

現代語訳：英祖王は、夏が過ぎて冬になると、さかもりをされて、大勢の部下と寄り合って遊びになった。

オモロ2首に対して、その改作琉歌も2首見られる。季節語を詠み込んでいるが、季節感を表すより、英祖王を誉め称える役割を果たすものである。ここで注目したいのは、「夏しげち冬や」および「夏すぎて冬や」、とりわけ「しげち」という語である。「しけち」は、「神酒。『しけ』は聖なる、『ち』は『き（酒）』」（外間2000、p.448）となっており、上のオモロから1604番の琉歌にも「しけち」→「しげち」のように伝わただろう。しかし、琉歌には「しける」という動詞

も「空しける雨も」などのように見られる。その解釈について、前城（2006）は「動詞『茂る』は植物が生い茂る意で、雨が甚だしく降る意で用いられた例は見られない。また、『しける』を程度が甚だしいさまを表す形容詞『茂さ』とするには語形があわず、動詞『過ぎる』と解釈するのが妥当であろう（p.98）」と述べている。「しげち」と表記し、「シギチ」と発音し、その「シギチ」は、「シジチ」→「スイジティ」という「過ぎて」の発音に変化したことが考えられる。したがって、1623 番の琉歌においては「夏すぎて冬や」という句が、「夏しげち冬や」の変化した表現として見なすことができる。

8. おわりに

昔から沖縄の気候になじんだ季節語「夏・冬・若夏・うりずん」のみが反映されているオモロに対し、琉歌はそれらの季節語だけではなく、和歌と同様に「春」と「秋」も詠み込んでいる。さらに、琉歌も和歌も「春」と「秋」は季節語として最も高い割合を占めている。また、季節語と動詞との組み合わせに関しても、「夏」と「冬」と動詞との組合せのみならず、オモロと琉歌の中に唯一見られる沖縄の独特の表現「うりずん」と「若夏」と呼応する動詞も、琉歌とオモロとで一致していないことが判明した。季節語と動詞／名詞との組み合わせに関しては琉歌と和歌との共通点が多く、特に「春」と「夏」の歌の中で、その傾向が強い。

季節語を詠み込んだ琉歌と和歌の句ごとに調査を行った結果、半数以上は類似していることが分かった。「春夏秋冬」を詠み込んだ琉歌の中に、和歌の改作琉歌もオモロの改作琉歌より遙かに多く見られ、重複歌を除けば、415 首中に 43 首あり、10%程度となっている。それらの琉歌の歌人について調査したところ、43 首のうち、特定の歌人によって詠じられた歌数が 21 首、読人知らずの歌数が 22 首と、ほぼ同数となっていることが分かった。読人知らずおよび作者不明の歌が過半数に上るため、琉歌は、最初に特定の人物によって詠まれた歌であったとしても、時代の流れで大衆化したことが調査の結果から推定できるだろう。

また、本調査で 43 首の改作琉歌の元となった可能性が高いと考えられる和歌は、46 首指摘できた。全ての 46 首の和歌を初出する時代によって区別してみれば、平安時代初出の和歌が 14 首で最も多く、30%を占めている。二番目に多いのは、鎌倉時代の歌であり、12 首（26%）となっている。続いては、室町時代や江戸時代初出の和歌で、10 首ずつ見られ、それぞれ 22%である。また、46 首の和歌の中から、重複歌や重複歌集を除けば、20 首が勅撰和歌集に、5 首が勅撰和歌集の選歌資料となっている百首に見られ、また、1 首が物語の中に見られる。このように、少なくとも 26 首の和歌は琉歌の作歌時代に有名な

歌集に含まれている歌であり、このような和歌は 46 首の中で過半数 (57%) を占めていることが分かった。この調査結果は、琉球士族が和歌について学んだ歌書とほぼ一致している結果となった。また、重複歌や重複歌集も含めれば、改作琉歌の元となった和歌は、次の勅撰和歌集、選歌資料や物語に見られることが明確になった。(以下の数字は延べ数である。要するに、1 首の特定の和歌は、同時に勅撰和歌集や物語に含まれている場合もある。ここでは、そのような和歌が含まれている勅撰和歌集も物語も両方とも列挙するため、歌集の合計数は 26 を越えることになる)。

- 『古今和歌集』 5 首
- 『新勅撰和歌集』 5 首
- 『新千載和歌集』 3 首
- 『玉葉和歌集』 2 首
- 『後撰和歌集』 2 首
- 『新古今和歌集』 1 首
- 『後拾遺和歌集』 1 首
- 『風雅和歌集』 1 首
- 『新撰和歌集』 1 首
- 『新後撰和歌集』 1 首
- 選歌資料：『宝治百首』(2 首)、『永享百首』(1 首)、『嘉元百首』(1 首)、
『延文百首』(1 首)
- 物語：『伊勢物語』(1 首)、『大和物語』(1 首)、『世継物語』(1 首)

以上から、季節語を詠み込んだ琉歌を詠じた際に、琉歌人は主に『古今和歌集』、『新勅撰和歌集』、『新千載和歌集』、『玉葉和歌集』や『後撰和歌集』を参考にした可能性が高いと考えられるだろう。さらに、改作琉歌の元となっている和歌 46 首の中、藤原定家 (1 首)、為家 (2 首)、為教 (2 首) や頓阿 (2 首) の和歌も指摘でき、このような和歌は合わせて 7 首 (15%) ある。

季節語を詠み込んだ琉歌は和歌のほうの共通点が多いものの、「夏」と「冬」の両語を歌ったオモロの改作琉歌も 2 首見られ、琉歌とオモロとの関係も判明した。しかし、「春夏秋冬」を詠み込んだ 415 首の琉歌に 10% を占めている和歌の改作琉歌 43 首と比較すれば、オモロの改作琉歌は 2 首のみあり、0.5% にしか及ばないため、改作琉歌に関しては、オモロからの影響は和歌からの影響より極めて低いと言えるだろう。

このように、表現の観点から季節語と動詞／名詞との組合せをはじめ、改作琉歌に関する徹底的な調査を元に、季節語を詠み込んだ琉歌にはオモロより和歌のほうが大きな影響を及ぼしたと結論付けられる。

【付記】

本章は、「琉歌の季節語（春夏秋冬）をめぐって—オモロや和歌との表現比較—」（『日本文学誌要』87号、2013年）を母体とし、加筆修正したものである。

第4章 『標音評釈琉歌全集』の改作琉歌について

1. はじめに

前章で「面影」「影」「春夏秋冬」という語を含んだ琉歌を取り上げ、オモロや和歌から琉歌への影響について述べた。前述のように、オモロより和歌のほうが琉歌への影響が強く、和歌の改作琉歌は「面影」や「春夏秋冬」の表現を取り入れた琉歌の中におよそ10%程度、「影」を詠み込んだ琉歌の中に20%以上存在することが判明した。

『標音評釈琉歌全集』の全例を対象とし、『琉歌大成』も適宜参照した、「面影」「影」「春夏秋冬」を詠んだ琉歌の全例の調査、上記の3つの表現に限られたものとなっているため、それ以外にもまだ調査されていない歌が数多く残っている。そこで、本章では、『標音評釈琉歌全集』（以下『琉歌全集』）の中にある「節組の部」の最初の160首および「吟詠の部」の最初の200首（合わせて360首）を対象にし、その中で和歌の改作琉歌がどの程度見られるのかについて詳しく述べたい。また、それらの改作琉歌はどの時代の和歌や、どの和歌集に倣って作られたのかという可能性についても指摘したい。

最後に、前章の「面影」「影」「春夏秋冬」を詠み込んだ歌の全例の改作琉歌と本章の『琉歌全集』の360首の中に指摘できる重複歌を除く和歌の改作琉歌をまとめ、和歌の初出時代、歌人や和歌集の影響についてどのような方向性が見られるのかについて説明したい。そして、琉歌の成立に関して、田島利三郎、世礼国男、小野重朗説を支持しながら、和歌から琉歌への流れ込みに関する一考察を進めたいと思う。

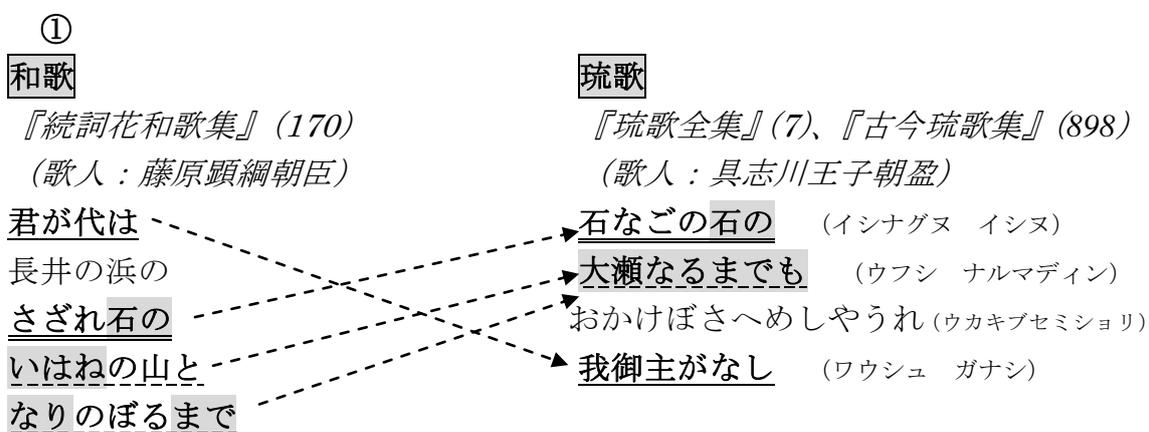
2. 『琉歌全集』の「節組の部」の改作琉歌

島袋盛敏、翁長俊郎『標音評釈琉歌全集』は、初版が1968年に発行された。同著作『琉歌大観』（沖縄タイムス社、1964年）に基づくものである、『琉歌大観』の元々の2898首に新たに102首を足し、琉歌の音韻表記（発音表記）を附し、歌数を総計3000首とした歌集となっている。清水彰『標音評釈琉歌全集総索引』（武蔵野書院、1984年）を参照すると、『琉歌全集』の歌には、現存する最古の歌集である『琉歌百控』（『乾柔節琉』1795年発行、『独節流』1798年発行、『覧節流』1802年発行）や、およそ100年の差がある1895年発行の『古今琉歌集』の歌も含まれていることが分かる。したがって、『琉歌全集』のある歌を18世紀末までに辿ることができ、歌数や琉歌の時代の観点から見て

総括的な歌集だと言える。

『琉歌全集』は「節組の部」と「吟詠の部」の二編から成っている。「節組の部」は、1～1403 番歌を含み、「曲に合わせて歌う歌詞ばかりを集め」(清水 1984、p.23)、「吟詠の部」は、1404～3000 番歌までの歌を含み、「時につけて折にふれ吟じた歌詞を集めたもので、曲はない」(前掲、p.23)と定義されている。

本調査では、「節組の部」と「吟詠の部」の歌を対象にし、それぞれの部に含まれる歌の中で和歌の改作琉歌がどの程度存するかに関する問題を追究した。まず、ここで「節組の部」の最初の 160 首(1～160 番歌)の中の改作琉歌を紹介する。改作琉歌は 17 首あり、160 首中およそ 11%である。この改作琉歌を『琉歌全集』の順番で列挙している。



現代語訳：小さな石なごの石が、大きな岩となるまでも、我が王様は長く王位につかれてお栄え遊ばされるようにお祈り致します。

この①の和歌は大変有名な歌であり、平安末期の私撰集である『続詞花和歌集』以外にも多々の歌集に含まれている。さらに、この歌の少し異なったバージョンも数首存在している。以下に 3 例を挙げるが、最初の 2 例は藤原顕綱によって詠まれた歌であり、3 番目の例は式子内親王によって詠まれた和歌である。①の和歌と異なった部分が網書きで表示されている。

- 『新千載和歌集』 (2344) [歌人：藤原顕綱朝臣]
歌 君が代は ながるの浦の さざれ石の 岩ねの山と なりはつるまで

●『高陽院七番歌合』(62) [歌人：藤原顕綱朝臣]

歌 きみがよは ながるのはまの さざれいしの いはねのやまと
なりかへるまで

●『新続古今和歌集』(778) [歌人：式子内親王]

歌 君が世は ちくまの川の さざれ石の 蒼むす岩と なりつくすまで

異なる3つのニュアンスも含めて、これらそれぞれ異なるバージョンの歌4首は平安時代から室町時代までの歌書に見られる。まとめたデータは以下の通りである。

- 『高陽院七番歌合』(平安時代)
- 『顕綱集』(私家集)(平安時代)
- 『袋草紙』(歌論書)(平安後期)
- 『続詞花和歌集』(私撰和歌集)(平安末期)
- 『正治百首』(勅撰集の選歌資料)(鎌倉初期)
- 『歌枕名寄』(鎌倉時代)
- 『万代和歌集』(私撰和歌集)(鎌倉時代)
- 『夫木和歌抄』(私撰和歌集)(鎌倉末期)
- 『新千載和歌集』(勅撰和歌集)(室町初期)
- 『新続古今和歌集』(勅撰和歌集)(室町時代)

当時有名であったと考えられるこれらの4首の和歌は、琉歌にも影響を及ぼした可能性は十分あり得るだろう。なぜならば、この①の琉歌は和歌と同様の内容を同様の比喻で歌っているからである。琉歌の表現は、和歌と同じ表現ではなくても、「石なごの石」(意：小さな石)、「大瀬」(意：大きな瀬、即ち大きな岩)や「我御主がなし」(意：我が王様、「がなし」は美称辞の接尾語)の解釈を見ると、「さざれ石」「いはねの山」「君が代」の類義語であることが分かる。和歌においては「小さな石が岩になるまで帝の時代が続くように」という祈願の後半が「君が代」と表現されているのに対し、琉歌は同じ祈願を「おかけばさへめしやうれ 我御主がなし(意：王様がお栄えになってくださいませ)」と表している。

なお、和歌には、次の『古今和歌集』の歌も見られ、その内容も琉歌と非常に近い概念を表していることが分かる。

●『古今和歌集』(343) [よみ人しらず]

歌 わが君は 千世にやちよに さざれいしの いはほとなりて
こけのむす まで

しかしこの古今和歌は、以前紹介した琉歌と和歌4首と比べて、そのニュアンスが少し異なることが分かる。この和歌も帝がいつまでも長く統治するよう祈っているものの、その支配期間を①の「石なごの石の～」の琉歌と和歌4首における「小石が大きな岩となるまで」のように祈願するのではなく、「小石が大きな岩となって苔の生いむすまで」のように苔の様子を加えて表現している。したがって、この古今和歌も①の琉歌に影響を与えた可能性が考えられるのだが、苔の生える様子を一切触れない琉歌と共通している以前の和歌4首より、その可能性が少し低いように思われる。結論としては、上の4首の和歌を①の改作琉歌の元となったものだと考え、古今和歌(343番歌)を参考までに紹介しておく。

②

和歌

『夫木和歌抄』(10245)

(歌人：小侍従)

よつの海の

波しづかなる

君が代に

海士の命も

うれしかるらん

琉歌

『琉歌全集』(25)、『古今琉歌集』(904)

(歌人：与那原親方良矩)

波風の音も (ナミカジヌ ウトゥン)

静かなるなまの (シズィカナル ナマヌ)

御代に生まれたる (ミユニ ウマリタル)

民のうれしや (タミヌ ウリシャ)

現代語訳：波風の音もなく静かな今の平和の御代に生まれた人民は、誠に幸せでこれ以上もなくうれしいことである。

この②の琉歌を作った与那原良矩は、第1章で既述したように和文学を積極的に学び、和歌の歌人としても有名であった。この②の改作琉歌と次の③の改作琉歌は共に与那原良矩の歌であり、この歌人が和歌の影響を強く受けた証拠の一つとなると言える。

与那原良矩の②の琉歌の中では、和歌の2句目となる「波しづかなる」という7音句が見事に2句にわたって分解されていることが分かる。まず、和歌における「波」(2音)は琉歌の1句目において「風の音も」(6音)と組み合わせられ、「波風の音も」という1句目の8音句となっている。さらに、和歌の

「しづかなる」という 5 音の表現は、琉歌の形式に合わせるために 3 音の「なまの（意：今の）」と呼応し、「静かなるなまの」という琉歌の 2 句目の 8 音句を成していることが明らかである。

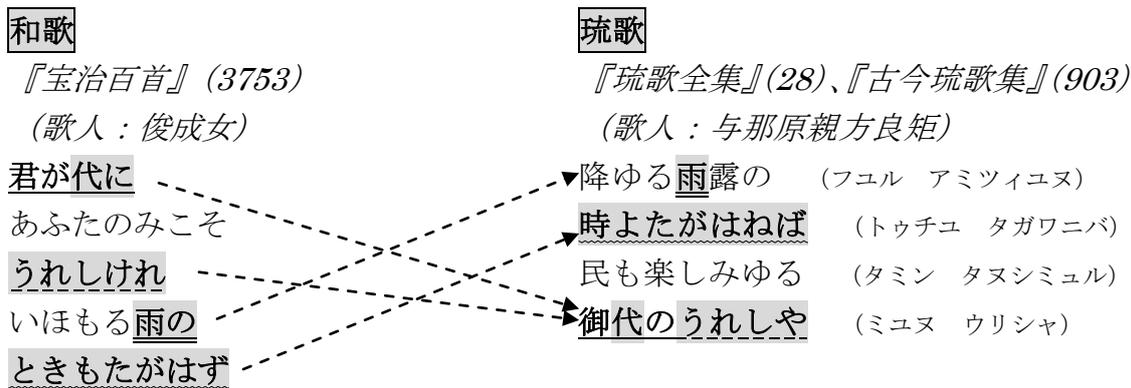
また、両歌の表現のみならず、歌の趣旨もほぼ同じ概念を表していると言える。和歌における「海の波さえも静かなるような御代には海士の命もうれしいものである」という概念に対して、与那原良矩は「波や風の音さえも静かなるような御代に生まれた民もうれしい」のように、上の琉歌を詠んでいる。両歌の概念は「このような平和的な御代に生まれた人々は皆幸せである」のように、同様の意味を表しているが、いささか違いも見られる。それは、和歌における「海」という表現と、それに関連する「海士」に対して、琉歌の「風の音」で思い浮かぶ「草」と関連する「民」である。さらに、与那原良矩は和歌における「命」という表現を琉歌にそのまま用いずに、同義語の動詞である「生まれる」を代わりとして使っていることも、この改作琉歌の技巧の一つであることが指摘できる。

元となった和歌は鎌倉時代の 1310 年成立『夫木和歌抄』以外に、同じ鎌倉時代の 1202 年成立の後鳥羽院主催の『千五百番歌合』という歌集にも見られる。

③

次の改作琉歌については、それぞれ異なる 2 首の和歌に倣って作られた可能性について指摘したい。まず、手本となった和歌として推定できるのは、以下の図 1 で示してある 1 首である。

(図 1)



現代語訳：降る雨露の恵みが、時をたがわないので、豊作物がよくでき、人民が喜んでいるこの大御代は実に嬉しいことである。

この図1の改作琉歌の重要な部分は「時をたがわない雨」という表現である。「このような雨は御代の嬉しさに繋がる」ということが、和歌と琉歌の趣旨となっていると言える。琉歌と和歌の両方に見られる動詞の「たがう」は、和歌において「ず」の終止形と呼応し、琉歌において「ず」の已然形と接続助詞の「ば」と呼応しているため、同じ動詞と助動詞ではあるが、それぞれ異なる活用形によって、和歌における「ときもたがはず」という7音句が「時よたがはねば」という琉歌に相応しい8音句に変形されていることが注目できる。また、和歌における7音句の「いはもる雨の」を「いはもる」と「雨の」という様に「4・3音」に分析できると考えれば、琉歌における「降ゆる雨露の」を同じように動詞と名詞に分解すれば、「降ゆる」と「雨露の」のように「3・5音」に分解することができる。和歌の4音動詞の「いはもる」が琉歌において3音動詞の「降ゆる」に代わるため、和歌の3音の「雨の」は琉歌の形式を守るために琉歌の中で5音の表現に置き換える必要がある。したがって、「雨の」という3音の表現に「露」という2音の表現を入れ、5音の表現を生み出し、また、その表現を3音の動詞の「降ゆる」と呼応することで見事に琉歌の8音句を成す。

この和歌は鎌倉時代の『宝治百首』に含まれており、藤原俊成女によって詠まれた歌である。したがって、この改作琉歌の場合も、藤原俊成、定家系列の歌人の和歌であると指摘することができる。

さらに、この琉歌が作られた際に手本となった可能性として次に挙げられる和歌も、藤原定家系列の歌人の歌である。以下の図2の通り表示しよう。

(図2)

和歌

『白河殿七百首』(695)

(歌人：為氏)

ふる雨も

時をたがへぬ

御代なれば

空にぞあふぐ

君のちとせを

琉歌

『琉歌全集』(28)、『古今琉歌集』(903)

(歌人：与那原親方良矩)

降ゆる雨露の (フユル アミツイユヌ)

時よたがはねば (トゥチュ タガワニバ)

民も楽しみゆる (タミン タヌシミュル)

御代のうれしや (ミユヌ ウリシャ)

現代語訳：降る雨露の恵みが、時をたがわないので、豊作物がよくでき、人民が喜んでいるこの大御代は実に嬉しいことである。

この和歌の上句は琉歌と非常に似通っていることが注目される。和歌の5音句の「降る雨も」は琉歌において8音句の「降ゆる雨露の」として見られるのだが、和歌における2音の動詞の「降る」は琉歌においては「降ゆる」という3音の動詞となっているため、和歌の残りの3音の「雨も」という表現は琉歌の中で5音の「雨露の」という表現に置き換えられる必要がある。琉歌がこの図2の和歌を改作していた場合、上記のように、5音句を8音句に変形している可能性を指摘しておきたい。

この図2の和歌の下句は、琉歌の表現や概念と若干違う点があるが、広い意味で和歌も琉歌も歌の上句で描写された「降る雨が時をたがわれないような御代」を、下句において褒め称えていることが分かる。さらに、和歌の上2句は琉歌の上2句との順番が同様であることが指摘できる。したがって、与那原良矩はこの図2の和歌も参考にした可能性があり得るだろう。

なお、藤原為家の長男である二条為氏によって詠まれたこの和歌も、上述のように、藤原定家や為家系列の歌人の歌である。鎌倉後期成立の『白河殿七百首』以外に、鎌倉中期～室町前期成立の『明題和歌全集』、室町中期成立の『題林愚抄』や江戸初期成立の『類題和歌集』にも見られる。

④

次の改作琉歌の場合も、少なくとも3首の和歌をその手本として指摘できると考えられる。この琉歌が導入した概念は和歌にはより広く詠まれ、以下の図1～3で示している改作の手本の和歌3首以外にも似たような和歌が何首か見られる。

まず、改作の際に琉歌に影響を与えた可能性の最も高い和歌を、以下の図1～3で示したい。

(図1)

和歌	琉歌
『千載和歌集』(607)	『琉歌全集』(29)、『古今琉歌集』(1120)
(歌人：後三条内大臣(藤原公教))	(歌人：読人しらず)
うゑてみる	みどりなる竹の (ミドウリナル ダキヌ)
籬の竹の	よよのふしぶしに (ユユヌ フシブシニ)
ふしごとに	こもる万代や (クムル ユルズィユヤ)
こもれる千代は	君と親と (キミトウ ウヤトウ)
君ぞかぞへん	

現代語訳：みどりの竹の節々の間によよが沢山あるように、君と親との代も沢山こもり、万代に続くようお祈りしたいも

のである。

この和歌は平安末期の勅撰和歌集である『千載和歌集』に含まれており、琉歌もこの和歌を学び改作した可能性が高いと考えられる。共通表現が「竹」「ふし」「こもる」「代」「君」の5語あるだけでなく、歌の流れも両歌共に同様であることが注目できる。さらに、両歌が表している概念も「竹の節ごとによがあるように、君（若しくは親）のよ（代）も沢山こもり、千代／万代まで未長く続くように」という願いを込めており、一致していると言える。

琉歌の中にも和歌の中にも「よ」という掛詞が有する「竹の節の間にあるよ」および「代」という2つの意味が潜んでおり、両歌の中心部となっている。和歌の中では、「竹のよ」という表現はそのまま取り入れられていないのだが、「ふしごとにこもれる千代は」という2句から、「竹の節ごとによがある」という意味を当然に察することができる。それに対し、琉歌は和歌に非常に似た「ふしぶしにこもる万代や」という表現のみならず、「竹のよよ」という表現までも取り入れつつ、歌の中で「竹の節の間によがある」という明確な説明をしていることが分かる。『沖縄古語大辞典』（1995）によると、「よよ」は2つの異なる意味を有する。①「世々」が有する「いつまでも。幾代も」という意味と、②「節々」が持つ「竹などの節と節との間」という意味となっている。琉歌は「よよ」という掛詞を詠み込むことによって、上記の2つの意味を明瞭に表している。この図1の和歌の方には、「よよ」という表現が詠み込まれていないが、この表現は琉歌独自の表現ではなく、和歌にも見られる。そのような和歌については後述する。

なお、この和歌は平安末期成立の『千載和歌集』のみならず、鎌倉中期～室町前期成立の『明題和歌全集』や室町中期成立の『題林愚抄』にも含まれている。

次に、琉歌に影響を与えた可能性の高い和歌をもう1首紹介したい。

(図2)

和歌	琉歌
『林葉和歌集』(960) (歌人：俊恵)	『琉歌全集』(29)、『古今琉歌集』(1120) (歌人：読人しらず)
かぜさやぐ	みどりなる竹の (ミドゥリナル ダキヌ)
まがきの竹の	よよのふしぶしに (ユユヌ フシブシニ)
ふしごとに	こもる万代や (クムル ユルズィユヤ)
そそや我が君	君と親と (キミトゥ ウヤトゥ)
万よまでも	

現代語訳：みどりの竹の節々の間によよが沢山あるように、君と親との代も沢山こもり、万代に続くようお祈りしたいものである。

この和歌は平安末期の僧俊恵の家集の『林葉和歌集』に含まれている。図 1 の和歌と比べて、「こもる」という動詞が見られないが、代わりに、図 1 の和歌における「千代」ではなく、琉歌と一致する「万代」を用いていることが分かる。この和歌の下句の順番は琉歌と若干ずれていることを述べなければならないが、この和歌もこの琉歌に影響を与えた可能性があることを、ここで指摘しておきたい。

最後に、図 3 で示している和歌も琉歌に影響を与えた可能性があると考えられる。

(図 3)

和歌

『洞院撰政治家百首』(1978)

(歌人：但馬)

色かへぬ

千尋の竹の

ふしごとに

君がよはひの

数ぞこもれる

琉歌

『琉歌全集』(29)、『古今琉歌集』(1120)

(歌人：詠人しらず)

みどりなる竹の (ミドウリナル ダキヌ)

よよのふしぶしに (ユユヌ フシブシニ)

こもる万代や (クムル ユルズィユヤ)

君と親と (キミトウ ウヤトウ)

現代語訳：みどりの竹の節々の間によよが沢山あるように、君と親との代も沢山こもり、万代に続くようお祈りしたいものである。

この図 3 の和歌も琉歌との共通表現が多く見られる。「竹」「ふし」「君」や「こもる」という 4 語以外にも、同様の意味を表す表現が取り入れられていることが分かる。和歌における「竹」の性質を描写する「色かへぬ」という単語は、「色を変えないことはいつも緑のままである」ということを意味しており、琉歌の「みどりなる」竹という表現はその意味を持った特徴的な表現として、歌の中に詠み込まれている。また、和歌には「よはひ(齢)」即ち天皇の命、この世に生きている期間という広い意味の世ではない、個人(天皇)の命を祈っている表現が見られるのに対し、琉歌にはそれが「万代」に置き換えられていることが

分かる。鎌倉時代の『洞院摂政家百首』に含まれているこの和歌も、影響を与えた可能性があり得るだろう。

上記の3首の和歌は、共通表現の数や歌の流れから見れば、琉歌の元となった可能性は高いと推定できるだろう。ただし、上述したように、それらの3首以外にも「竹の節の間にこもる代」というテーマを詠んだ和歌が見られる。さらに、以下に取り上げている和歌の中にある『嘉元百首』の1378番歌は、琉歌と同様の「竹のよよ」という表現を詠み込んでいることに注目したい。下記の6首の和歌は特に歌の流れの観点からすれば、琉歌と大幅に異なるため、結論としては図1~3で示してある和歌のほうが琉歌に改作された可能性が高いと考えられる。したがって、以下の6首の和歌を参考までに列挙しておくことにとどめる。

●『嘉元百首』(1378) [歌人：正二位臣藤原朝臣俊定上]

歌 くれ竹のよよのふるごと 跡とめて また一ふしを 君ぞのこさん

●『嘉元百首』(2382) [歌人：法印定為上]

歌 わが君の千代をこめたる 呉竹のふしみのさとは 末ぞさかへん

●『源大納言家歌合長暦二年』(4) [歌人：左近(小大君)]

歌 ふしごとに ちよをこめたる たけなれば かはらぬいろは 君ぞみるべき

●『千五百番歌合』(2181) [歌人：舟後]

歌 君がため うゑおくたけのふししげみ そのかずかずに ちよぞこまれる

●『新明題和歌集』(4697) [歌人：雅喬]

歌 ふしごとに こめてもあかぬ 此君の ちよを緑に なびく竹かも

●『為家千首』(993) [歌人：雅喬]

歌 ふしごとに やちよをこむる くれたけの かはらぬかげは 君にまかせむ

⑤

和歌

『鳥の迹』(795)

(歌人：不明)

海山を

越えてみつぎを

はこぶにも

道ある御代は

遠しともせず

琉歌

『琉歌全集』(37)

(歌人：読人しらず)

海山よ越えて

(ウミヤマユ クイティ)

みつぎ納めても

(ミツイジ ヲウサミティン)

道直くあれば

(ミチ スイグク アリバ)

近くなゆさ

(チカク ナユサ)

現代語訳：海山を越えて租税を納めると
いうことは苦しいことだが、人の道も政
の道も真直で正しければ、どんな遠い道
でも近いように思われる。

この琉歌と和歌を分析すると、和歌における「海山を 越えてみつぎを」という上2句(5・7音句)は、琉歌においては「海山よ越えて」という8音の1句および「みつぎ」という上2句目の最初の3音の表現として見られる。また、和歌の3句目である「はこぶにも」という5音の動詞は、琉歌の中で「納めても」という5音の動詞に置換され、上述の「みつぎ(3音)」との組合せで見事に琉歌の8音の2句目を形成している。また、下句に関しては、和歌は明確に「道ある御代」のことを述べているのに対して、琉歌は「御代」などの言葉を用いていないものの、歌の内容と現代語訳からも政の道、即ち御代の道を暗示していることが分かる。和歌はその道を形容詞で修飾せず、ただ単に「道ある」のように「御代」の正当性を説明しているのに対し、琉歌はその正当性を形容詞の連用形である「直く」を通して表している。また、結句については、和歌における「遠しともせず(意：遠くともせず)」と、琉歌における「近くなゆさ(意：近くなっている)」のように、琉歌は和歌の結句を改作した際「遠し」を反意語に変え、和歌の「遠くない」という否定形を「近い」という表現で表している。この改作琉歌の技巧となっていると言える。

この⑤の和歌は1702年成立の『鳥の迹』という歌集に見られ、同歌集は第1章で紹介した、「面影」を詠み込んだ『琉歌全集』1289番歌と第3章で紹介した、「秋」を詠み込んだ530番歌へ影響を与えたことを既述している。

また、この⑤の琉歌が作られた際に、その元となった和歌とまでは断言しかねるが、何らかの影響を与えただろうと推測できる歌は他に1首挙げられる。『新撰和歌六帖』に収められる為家の歌である。

● 『新撰和歌六帖』 (617) [歌人：藤原為家]

歌 ゆたかなれ ななつの道の みつぎもの うみ山かけて さだめおきてき

この和歌は「道」「みつぎ」「海」「山」という共通表現を4語含んでいるが、『鳥の迹』の和歌と比べれば、改作された可能性が低いため、ここではこの歌を参考までに取り上げておく。

⑥

次の琉歌は第1章ですでに取り上げているため、ここで簡単な図のみ改めて示す。

『沙弥蓮愉集』 (256) [歌人：不明]

おもかげを のこしてみばや 女郎花 野沢の水の 花のかがみに
↓ ↗ ↘ ↓
面影よ残す 許田の玉川に なさけ手にくだる 水の鏡

『琉歌全集』 (38)、『古今琉歌集』 (970) [歌人：玉城朝薫]

⑦

次の琉歌についても、第2章ですでに述べているため、ここで簡素化された図のみ表示する。

『風情集』 (487) [歌人：藤原公重]

いつよりも 今夜の月の くまなきを おもひなしかと 人にとはばや
↑ ↓ ↓ ↓
思なしがやゆら 今宵の月白や いつよりもまさて 影のきよらさ

『琉歌全集』 (57)、『古今琉歌集』 (163) [歌人：屋比久朝義夫人]

この琉歌は、「いつよりも」「今宵の月/今夜の月」「思ひなし」という共通表現や共通の句まで和歌と一致していることが明らかである。『琉歌全集』の中には、似たような琉歌は後1首見られる。以下の通りである。

● 『琉歌全集』 (1416)、『古今琉歌集』 (90) [歌人：読人しらず]

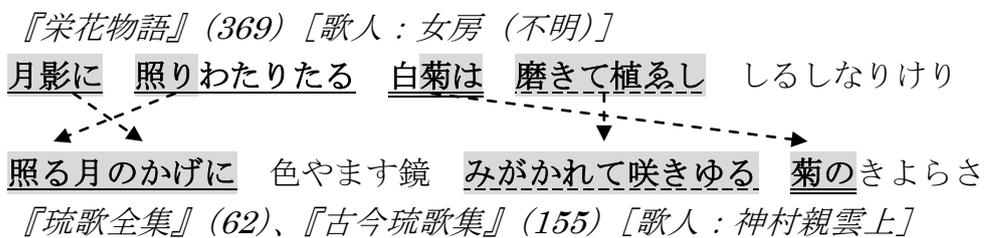
歌 思なしがやゆら いつよりもまさて 花のかげうつす 月のきよらさ

現代語訳：気のせいであろうか。花の影を照らしている今夜の月は、いつもよりも美しいように思われる。

この『琉歌全集』の1416番歌を57番歌と比較すると、1416番歌の図で下線で示されているように、両歌の共通の部分が多く見られる。1416番歌における「思なしがやゆら 　いつよりもまさて」という上2句は、57番歌の第1句と第3句をそのまま取り入れており、また、結句についても「名詞」+「のきよらさ」という同様のパターンが両歌に存する。ただし、57番歌における「今宵の月白や」に対して、1416番歌の中には「花の影うつす月」という表現が用いられているため、「今夜の月の」という句を詠んだ上記の和歌からは、1416番の琉歌ではなく、57番の琉歌のほうが影響を受けたと推定できるだろう。1416番歌は、和歌から影響を受けた57番歌に後ほど倣って作られた確率のほうが高いだろう。したがって、1416番歌は和歌には直接に影響されていないが、57番歌を通して和歌にも広く見られる表現を取り入れていることについて、ここで指摘しておきたい。1416番歌は、57番歌と違って和歌の改作琉歌ではないものの、上述のように、間接的に和歌の表現の影響を受けていることが明らかである。

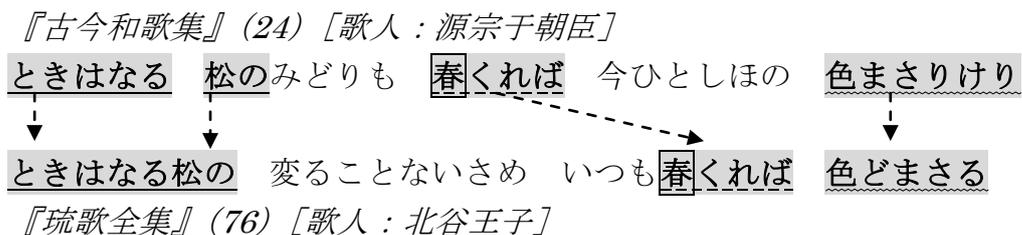
⑧

この改作琉歌についても、上の⑦と同じように、第2章で詳しく述べているため、ここはその簡素化された図のみ載せておく。



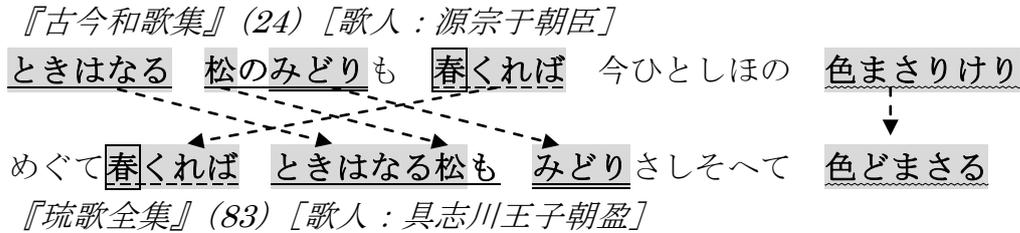
⑨

次の琉歌も、第3章で既述したように、大変有名な和歌の改作琉歌であり、すでに様々な先行研究で指摘されている(外間1965、p.26、池宮1976、p.154、島袋1995、p.19、嘉手苺1996、p.71)。ここでその琉歌と和歌の簡単な図のみ改めて記載する。

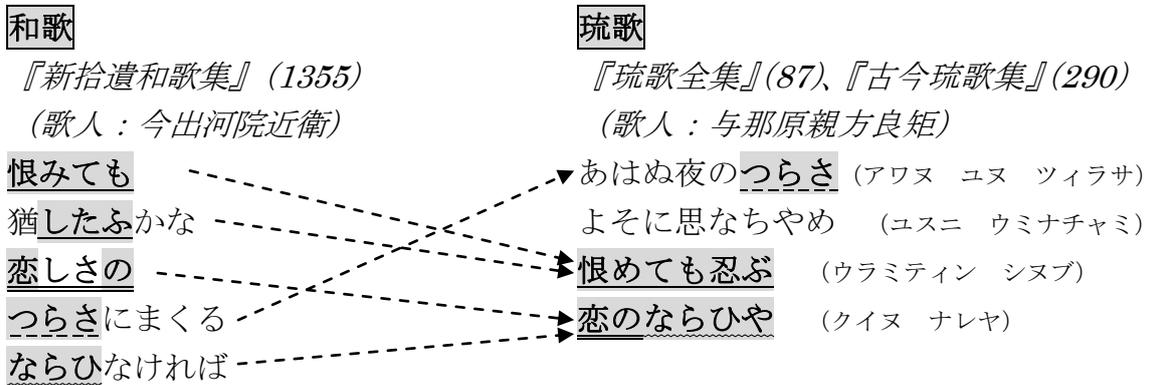


⑩

この改作琉歌も上の⑨の改作琉歌と共に同じ和歌に倣って作られたと推定できる。なお、この琉歌についても第3章で詳しく説明しているため、ここで簡単な図のみ載せておく。



⑪



現代語訳：恋人に会わず空しく戻る夜の辛さを他人事かのように思いなしたか。恨んだのも忘れ、また恋人の所へ忍んで行こうとする。恋の習わしだ。

この⑪の琉歌と和歌において、共通表現は4語（「恨みても」「恋」「つらさ」「ならひ」）や類義語1語（「したふ／しのぶ」）があることが判明した。また、「恋のつらい習わしは、（例えば、恋人に会わないで帰ること等を）どんなに恨んでも再び偲ぶことである」のように、両歌が伝えている趣旨も同様であることが分かる。ただし、和歌は、恋のつらい習わしの性質を普遍化して詠んでいるのに対し、琉歌のほうは、共通表現を用い同様の習わしの性質について歌っているのだが、「あはぬ夜のつらさ よそに思なちやめ」という恋のつらい経験に関する具体的な例も挙げつつ歌を展開している。精密に観察すれば、琉歌は、和歌の上2句の「恨みても 猶したふかな」を「恨めても忍ぶ」という1句中に、和歌の第3句と結句の「恋しさの」「ならひなければ」も「恋のならひや」という1句中に収め、即ち和歌の4句を琉歌の2句に収めつつ、

残りの上2句を「恋人に会わない夜のつらさをよそに思ってしまうのか」という恋の経験に係る具体的な例を述べるために用いる。また、和歌における「したふ」の代わりに、琉歌では「しのぶ」という表現を使っていることが注目される。『沖縄古語大辞典』（1995）によると、「しのぶ【忍ぶ・偲ぶ】」は「①慕う。偲ぶ」という意味を有し、和歌における「したふ」の類義語に当たることが分かる。沖縄語や琉歌には大和語の「したふ」が存在しないため、与那原良矩はこの和歌を改作した際、「しのぶ」という類義語に置き換えた。上述のような相違点やニュアンスの変更という工夫を行いつつ、琉歌はこの⑩の和歌を巧みに改作して、作られていると言える。

この和歌は室町時代に成立した勅撰和歌集『新拾遺和歌集』に含まれている歌である。『新拾遺和歌集』は後光厳院の命を受け、藤原為明が撰修したものであるが、同氏は1364年に他界したため、その門弟である頓阿によって完成された。歌集の中には、定家・為家・為世などの歌も見られ、和歌を学んでいた与那原良矩も、その歌集を参考にした可能性が高いであろう。

⑫

(図1)

和歌

『金葉和歌集（二度本）』（677）
（歌人：藤原忠隆）

ながむれば

更けゆくままに

雲晴れて

空ものどかに

すめる月かな

琉歌

『琉歌全集』（93）、『琉歌百控・覧節流』（420）、『古今琉歌集』（1485）

[歌人：読人しらず]

眺めれば空や

（ナガミリバ スラヤ）

くもきりもはれて

（クムチリン ハリティ）

さやか照り渡る

（サヤカ ティリワタル）

十五夜お月

（ジュグヤ ウツイチ）

現代語訳：空を見ると雲も霧もはれ、輝き渡る十五夜の月が美しい。

この琉歌は和歌の中でも人気のテーマの一つとして多くみられる「月のさやけさ」を、和歌との共通表現として詠んでいる。和歌の「ながむれば」という5音句は琉歌の中で「眺めれば」という5音表現として見られる。しかし、琉歌の句は8音であるため、この琉歌は、和歌にもみられる「空も」という3音表現を借りて、沖縄語にふさわしい助詞「や」を用いつつ「空や」に置き換え、「眺めれば空や」という8音句を完成させていることが分かる。また、和歌における5音句の「雲晴れて」も、琉歌の中にも5音の表現として見られるが、

8音調の形式を守るために、「雲」と「晴れて」の間に「霧も」という3音表現が入れてあり、8音句の「雲霧もはれて」となっていることが指摘できる。さらに、両歌の中心である「月」を修飾する表現として、和歌は「すめる」を使っているのに対し、琉歌は「さやか照り渡る」という和歌より長い、8音句を成しているものの、類似の意味を込めた表現であることが分かる。

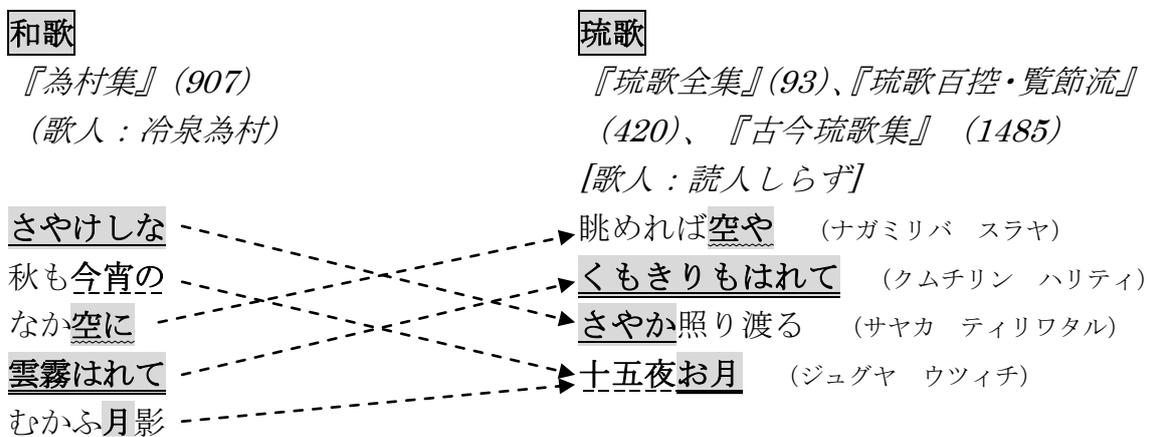
この和歌は平安末期成立の勅撰和歌集である『金葉和歌集（二度本）』に採集されているものであり、琉球の文人たちもこの琉歌を作った際に上の和歌に倣った可能性があり得ると考えられる。

また、この和歌は以下の歌集にも見られる。

- 『御裳濯和歌集』（鎌倉中期）
- 『明題和歌全集』（鎌倉中期～室町前期）
- 『題林愚抄』（室町中期）
- 『類題和歌集』（江戸時代）

ただし、図1の和歌のみならず、もう1首の違う和歌も上の琉歌に影響を与えたとも考えられる。その和歌を次の図2で提示する。

(図2)



現代語訳：空を見ると雲も霧もはれ、輝き渡る十五夜の月が美しい。

図1の和歌と同じように、図2のこの和歌も、琉歌とほぼ一致する場面を詠んでいる。しかし、図2の和歌は、上の改作琉歌と図1の和歌と比較すれば、「眺む」という動詞が見られない。つまり、図2の和歌は、空を眺めている人間の要素まで取り込んでいないことが、琉歌と図1の和歌と大きく異なる点である。そのため、琉歌は図2の和歌より図1の和歌のに倣って作られた可能性が高いと推

定できるだろう。

一方、図 2 の和歌のほうには、琉歌と一致している句が見られる。それは、和歌における「雲霧はれて」という 7 音句である。琉歌は 8 音調であるため、和歌の 7 音句を取り入れながら、「も」という助詞を駆使し、「雲霧もはれて」という 8 音句を成していることが指摘できる。図 2 の和歌におけるこの句は、全句がそのまま琉歌の中に詠まれており、この江戸時代成立の『為村集』の和歌が琉歌に完全に改作されていなかったとしても、何らかの影響を与えた証として捉えてもいいのではないか、と考えられる。

⑬

次の改作琉歌についても、本論の第 2 章ですでに指摘があるので、ここで詳しい説明を省き、簡略の図のみ載せておく。

『為家集』(1595) [歌人：藤原為家]

むかし今 二つのひかり ひとつにて おなじそらにぞ 月日をもみし

おしつれて潮花 汲み取ゆる桶に 照る月や一つ 影や二つ

『琉歌全集』(128) [歌人：読人しらず]

⑭

(図 1)

和歌

『千載和歌集』(609)

(歌人：大宮前太政大臣(伊通))

君が代は

あまのかご山

いづる目の

てらむかぎりは

つきじとぞ思ふ

琉歌

『琉歌全集』(136)、『琉歌百控・

覧節流』(441)、『古今琉歌集』(1193)

[歌人：読人しらず]

照るてだのごとに(ティル ティダヌ グトゥニ)

仰ぐわが君の (オオグ ワガチミヌ)

栄えゆくみ代の (サカイ イク ミユヌ)

限りないさめ (カジリ ネサミ)

現代語訳：空に照り輝く太陽のように仰ぐわが君の、栄え行くみ代は限りないのであろう。

この琉歌と和歌を対照すれば、「照る」「日／てだ(意：太陽)」「君が(の代)」と「限り」という四つの共通表現を含んでいることが明らかである。さらに、

両歌共に「君が代は、照る太陽のように（或いは、和歌における「太陽が照る限り」）尽きることがなく、限りないものである」と、ほぼ同様の概念を表している点でも共通していることが分かる。さらに、「限りない」或いは「尽きることがない」という意味を、両歌共に打消推量で表現していることに注目したい。琉歌においては、名詞「限り」に打消の意味を込めた形容詞「ない」が付き、推量の終助詞「さめ」と呼応することで、「限りないだろう」という打消推量の意を成している。また、和歌においては、上二段動詞「尽く」の未然形に打消推量の助動詞「じ」が接続するため、「尽きないだろう」と同じく打消推量の意味を表していることが判明した。

ただし、歌の流れは、琉歌と和歌で若干異なるものとなっている。和歌における 1. 「君が代は」 2. 「太陽の照る限り」 3. 「尽きることがない」という順番に対して、琉歌は、1. 「照る太陽のように」 2. 「君の代は」 3. 「限りない（言い換えれば、尽きることがない）」という順番で歌を展開している。つまり、1. と 2. の順番は琉歌と和歌で逆となっていることが分かる。

この和歌の共通表現や概念からすれば、改作して琉歌に作り直された可能性があり得るであろう。この和歌は平安末期成立の『千載和歌集』だけでなく、以下のような歌集・作品にも含まれている。

- 『続詞花和歌集』（平安末期成立）
- 『月詣和歌集』（平安末期成立）
- 『宝物集』（平安末期成立の仏教説話集）
- 『歌枕名寄』（鎌倉時代）
- 『類題和歌集』（江戸時代）

また、この琉歌に似通ったような和歌はもう 1 首ある。琉歌における「太陽」ではなく、「星」という自然現象を取り入れながら、君主の御代が栄える祈願を詠んでいる和歌であり、この琉歌と同様の概念を表していると言える。この和歌も琉歌に影響を与えた可能性が考えられるため、図 2 として参考までに挙げる。

(図 2)

和歌

『現存和歌六帖抜粋本』(44)
 (歌人：入道前撰政)

仰見る

ほしのくらみの

数ごとに

君をぞいのる

代代の末まで

琉歌

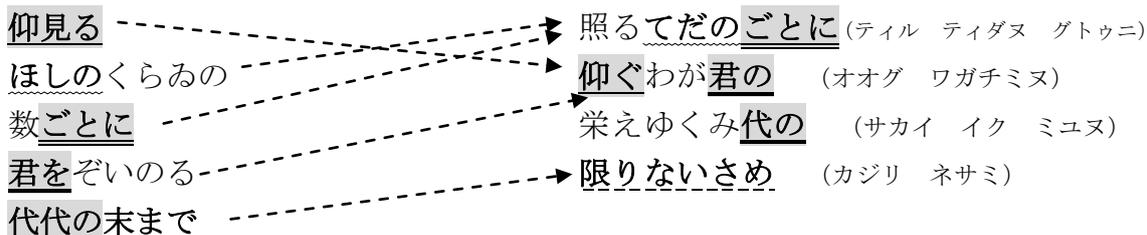
『琉歌全集』(136)、『琉歌百控・
 覧節流』(441)、『古今琉歌集』(1193)
 [歌人：読人しらず]

照るてだのごとに (ティル ティダヌ グトゥニ)

仰ぐわが君の (オオグ ワガチミヌ)

栄えゆくみ代の (サカイ イク ミユヌ)

限りないさめ (カジリ ネサミ)



現代語訳：空に照り輝く太陽のように仰ぐわが君の、栄え行くみ代は限りないのである。

鎌倉時代成立の『現存和歌六帖抜粹本』に含まれている上の和歌は、図 1 の和歌より琉歌との歌の流れが一致していると言える。上の琉歌の順番は、1. 「照る太陽のように」 2. 「仰ぐ君の代は」 3. 「限りない」 のようになっているのに対し、図 2 の和歌は、1. 「仰見る星の数のように」 2. 「君の代は」 3. 「代代の末まで（言い換えれば、いつまでも）続くように」という琉歌と同様の順番となっている。さらに、図 2 の和歌のほうは、図 1 の和歌には見られない「仰見る」と「ごとに」という表現を詠み込み、上の琉歌と一致していることが分かる。

しかし、下線を引いた「太陽」「仰ぐ君」「仰見る星」という表現を観察すれば、琉歌と図 2 の和歌の相違点も見えてくる。前述したように、琉歌は「照る太陽のように、君の代は限りないものである」という祈願を込めており、図 1 の和歌と共に「太陽」という表現を用いている。一方、図 2 の和歌は「太陽」ではなく、「星の数」のように君の代がいつまでも続くのを祈っていることが明らかである。また、図 2 の和歌は、「仰見る星」という表現を詠み込んでいるものの、琉歌の中で仰ぐ対象として、「星」の代わりに詠み込まれている「太陽」ではなく、「君」であることが分かる。上記の二つの相違点に加えて、図 2 の和歌は琉歌に見られる「限りないだろう」という打消推量の意味ではなく、「代代の末まで」という肯定的な形を取った名詞と助詞の組合せで「いつまでも」という意味を表している。

これらの相違点はあるものの、図 2 の和歌と琉歌の間に 4 つの共通表現が存し、歌の流れも同様であるため、影響関係を認めることができるだろう。『現存和歌六帖抜粹本』という和歌集には藤原為家、知家や衣笠家良などといった定家系列の歌人が多くの歌を残し、琉球の歌人もその歌集を参考にした可能性はあり得るだろう。

⑮

次の長歌（琉歌）については、「琉歌、和歌やオモロの表現比較研究—「面影」をめぐる—」という第 1 章ですでに述べているため、ここでは簡単な図の表示にとどめておく。

『新明題和歌集』(3491) [歌人：真教]

名残あれや あかで別れし 倂は など有明の 月にとどめて

あかぬ別れ路の 面影やのかぬ 名残り有明の 月に 打ち向ひ
思事やあまた 浜のまさご

『琉歌全集』(148) [歌人：読人しらず]

むかしより おもふ心は ありそうみの はまのまさごは かずもしられず
『大和物語』(185) [歌人：閑院の大君]

⑩

次の琉歌もすでに本論の「琉歌の季節語（春夏秋冬）をめぐって」という第3章で取り上げているので、ここでは簡単な図のみ表示する。

『為村集』(801) [冷泉為村卿家集]

よひよひに ならず扇の 風なくは ねやのあつさは いかで忘れん

手になれし扇の 風のないぬ あれば いきやす忘れゆが 夏の暑さ

『琉歌全集』(155) [歌人：読人しらず]

⑪

和歌

『草根集』(10274)

(歌人：正徹)

身はふりて ----->

あやふき淵を

忘るるや

わらは心の ----->

ままのつぎはし ----->

琉歌

『琉歌全集』(159)、『琉歌百控・

覧節流』(451)、『古今琉歌集』(918)

[歌人：与那原親方良矩]

六七十なても (ルクシチジュ ナティン)

年よでど知ゆる (トゥシ ユディドゥ シユル)

いきやしがな 肝や (イチャシガナ チムヤ)

いつもわらべ (イツィン ワラビ)

現代語訳：六七十歳になっても、年を数えてみて初めて自分が年寄りになったことを知るが、しかし心はいつまでもどうかして童でありたい。

この⑪の琉歌と和歌は見た目では確かに共通表現が少ないと言わねばならぬ

い。しかし、共通表現が少なくても、両歌で伝わる概念や歌の流れが一致している。和歌のほうは、「身が古くなり（つまり、年を取って）危うい淵を忘れるのか。童心のままの継橋を渡りたい」のように訳することができるだろう。それに対し、琉歌は、「六七十歳になっても（つまり、年を取っても）、年を数えて初めて知るのだが、どうにかしていつも童の心のもままでありたい」のような内容となり、和歌と類似していることが分かる。

両歌の中心部は、「年を取ること」と「童の心のもままでありたいこと」という2点である。琉歌の中では「心」という表現が使われず、その代りに琉歌独特の単語「肝（チム）」が用いられている。「心」という表現も琉歌には見られるのだが、「ククル」と「グクル」という2つの読み方があり、後者の「グクル」という接尾語はほとんど名詞と呼応し、「～のようなもの」という意味を有する。和歌の「～ごとし」に当たる。既述のように、和歌に見られる「心」という意味を持つ単語としては、琉歌では「心（ククル）」も見られるが、「肝（チム）」という沖縄独特の表現がよく使われている。したがって、和歌における「わらは心」という表現は、琉歌の中で「肝やいつもわらべ」のように表されていると理解できる。

また、「年を取ったこと」を和歌の中では「忘るるや（意：忘れるのか）」という表現に対し、琉歌は「年を取ったこと」を忘れており、数えてみたら初めて知ったという少し異なる内容を歌っている。

琉歌の作者である与那原良矩は、多くの和歌を学んだことで知られている。また、良矩が数首の和歌を改作した琉歌を詠んだこともあるという可能性について、本論で述べている。室町時代の有名な歌僧である正徹によって詠まれたこの和歌も完全に改作しなくても、参考にした可能性は十分あり得ると考えられる。なお、この和歌は正徹の私家集である『草根集』以外に『正徹千首』にも見られる。

以上をまとめると、『琉歌全集』の「節組の部」に含まれる最初の160首の琉歌において、約17首（11%）が和歌の改作琉歌であることが判明した。

それらの17首の内訳は、10首（59%）が特定の歌人によって詠まれたものであり、また残り7首（41%）が、読人知らずの歌となっている。また、それらの17首の琉歌は、23首の特定の和歌の表現から影響を受けたことが推定できるだろう。当該の23首の和歌は時代的な方面から次のように区分することができる（すべての和歌について、2集以上の歌集に見られる場合に、初出した時代のみを考える）。

1. 平安時代—計10首（43.5%）
2. 鎌倉時代—計7首（30.5%）

3. 江戸時代—計 4 首 (17%)
4. 室町時代—計 2 首 (9%)
(合計—23 首)

また、そのうち 7 首の和歌が勅撰和歌集、1 首が勅撰和歌集の選歌資料である歌集、そして 2 首が物語に見られる。具体的な歌集を含んだ総合的な区分は、本章の最後にある、本論のすべての改作琉歌を載せた表で詳しくまとめている。

3. 『琉歌全集』の「吟詠の部」の改作琉歌

次に『琉歌全集』の「吟詠の部」に含まれている最初の 200 首の中から、指摘できる和歌の改作琉歌をここで紹介する。既述したように、「吟詠の部」は 1404～3000 番歌の琉歌を収集し、「節組の部」と違い曲とは特に結ばれていない歌を集めた『琉歌全集』の後半である。

本章の調査では、「吟詠の部」の最初の 200 首 (1404～1604 番歌) を対象にし、改作琉歌を調べた。その結果、和歌の改作琉歌は計 34 首 (17%) となり、また、オモロの改作琉歌も 2 首見られる (1604 番歌と 1623 番歌であり、先行研究ですでに指摘されているオモロの改作琉歌である)。

全ての改作琉歌を『琉歌全集』の歌番号順に以下の通りに紹介する。

①

和歌

『玉葉和歌集』 (148)
(春御歌の中に、作者：永福門院)

琉歌

『琉歌全集』 (1407)
(歌人：末吉安持)

をちこちの	-----▶	あまこまに鳴きも	(アマクマニ ナチン)
山は桜の	-----▶	鶯や見らぬ	(ウグイスイヤ ミラス)
花ざかり	-----▶	山や花盛り	(ヤマヤ ハナザカイ)
野べは霞に	-----▶	野辺や霞	(ヌビヤ カスミ)
うぐひすの声	-----▶		

現代語訳：あちらこちらに鶯の鳴く声は聞こえるが、姿は見えない。山は花盛りで野辺は霞がたなびいて長閑な景色だ。

この改作琉歌は、和歌における「をちこち」を沖縄言葉に直し、同様の意味を持つ「あまこまに (アマクマニ)」という沖縄言葉の表現を用いているだけで

なく、和歌の「鶯の声」を「鶯が鳴いている」様子に置き換えていることが分かる。また、本来の和歌にはない「鶯の姿が見られない」という場面まで詠じ、琉歌にしか見られない新しい感覚をもたらす。

なお、元となった和歌は、鎌倉時代の勅撰和歌集である『玉葉和歌集』所収の歌である。『玉葉和歌集』は、伏見天皇の院宣を奉じて京極為兼によって撰進された歌集である。京極為兼は、藤原為家の三男にあたる京極家の祖・為教の子であり、幼少時の初学期から、いとこの為世とともに祖父為家から和歌を学んだ歌人である。また、和歌を詠んだ永福門院^{ようふくもんいん}は、伏見天皇の女御となり、次いで中宮となっており、京極為兼・伏見院と共に京極派和歌を代表する歌人である。したがって、この和歌の改作琉歌の場合でも、定家・為家系列の歌人の間接的な影響を辿ることができる。

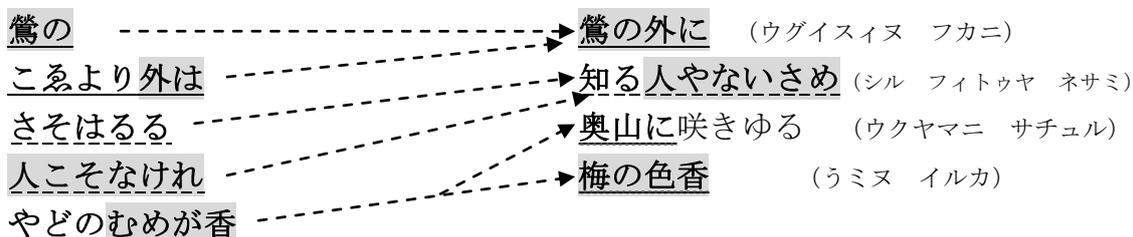
②

和歌

『草庵集』 (148)
(閑庭梅、作者：頓阿)

琉歌

『琉歌全集』 (1411)、
『古今琉歌集』 (43) [歌人：不明]



現代語訳：奥山に咲いている梅の色香は、鶯の外に知る人はないだろう。

酒井 (2004) の解説には、「●閑庭一人が訪れない閑居の庭。●声より外は一声以外には。●三・四句一誘い出されてやって来る人はいないことだ (p.12)」とあり、したがってこの和歌の意味は、「宿の梅の香には、鶯の声の外に誘われる人はいない」と理解しても良からう。この②の琉歌は、「誘われる」の代わりに「知る」という動詞を用い、また、「宿」の代わりに「奥山」という場所を描いているものの、内容や歌の流れは和歌と同様であることが言える。詳しく分析すると、和歌における「鶯の こゑより外は」という 5・7 音の 2 句は、琉歌の中で見事に「鶯の外に」のように 8 音句として収まり、また、和歌の次の 2 句 (5・7 音) である「さそはるる 人こそなけれ」も琉歌において「知る人やないさめ」という 8 音の 1 句として見られる。これらの句の意味も、和

歌における「鶯の外に誘われる人がいない」および琉歌における「鶯の外に知る人がいない」ものとなり、動詞「誘われる」と「知る」を除けば、同様の意味であることが分かる。また、和歌の7音の結句として見られる「やどのむめが香」は、琉歌において「奥山に咲きゆる 梅の色香」のように8・6音の下2句として詠まれている。和歌の梅は宿の梅であるのに対し、琉歌の梅は奥山に咲いているものの、両歌ともに、その梅の香が鶯をしか誘わず、鶯にしか知られていない、という同様の概念を表している。したがって、この琉歌はこの和歌を改作したものであることが認められるだろう。なお、この和歌は室町時代成立の頓阿の歌集である『草庵集』のみならず、江戸時代成立の『類題和歌集』にも見られる。

また、この琉歌は、頓阿が詠じたこの和歌を元にして作られたと推定できるが、他にもう1首、類似した表現が見られるので、ここでその和歌も紹介する。

●『夫木和歌抄』(430) [文永六年毎日一首中、作者：民部卿為家卿]
歌 うぐひすの 声よりほかに 春やしる 雪に花咲く ときは木のもり

為家によって詠まれたこの和歌の中には「鶯の声の他に春が知るだろうか」という疑問が歌われるが、注目したいのは、「知る」という動詞である。琉歌も同じ動詞を用いており、さらに、和歌の中で、「鶯の声の外に」と同時に「知る」動詞が歌われるのは、この為家の和歌1首のみであることが判明した。

結論としては、上の琉歌は、おそらく頓阿の和歌を改作し、また為家のこの1首の表現も学んだ可能性があるのではないかと、言えるだろう。

③

和歌

『宝治百首』(248)
(作者：前大納言為家)

琉歌

『琉歌全集』(1417)、
『古今琉歌集』(80)
(歌人：護得久朝良)

かすめども	----->	<u>垣やへちやめても</u> (カチャ フィジャミティン)
<u>かくれぬ物は</u>	----->	<u>かくれないぬものや</u> (カクリ ネヌ ムヌヤ)
<u>むめの花</u>	----->	隣咲く <u>梅の</u> (トゥナイ サク うミヌ)
風にあまれる	----->	<u>しほらし句</u> (シュラシ ニヲウイ)
<u>句ひなりけり</u>	----->	

現代語訳：垣はへだてていても、かくれのないものは、隣に咲いている梅のゆかしい句である。

この③の和歌が初出したのは、鎌倉時代成立の勅撰和歌集の選歌資料となっている『宝治百首』であるが、それ以外に、室町時代の勅撰集である『風雅和歌集』、鎌倉中期～室町前期に編纂された『明題和歌全集』、室町中期成立の『題林愚抄』や江戸時代成立の『類題和歌集』の中にも収められている。和歌の作者である藤原為家は鎌倉時代の歌人であり、さらに、この和歌の初出時代を考慮し、琉歌の元となった和歌の時代を鎌倉時代に定めておきたい。この琉歌の場合は、藤原定家・為家の直接影響が強いことが判明した。

和歌における「霞んでいるけれども」に対して、琉歌は「垣は隔てていても」という少し異なるニュアンスが込められた表現を用いているが、結局伝えたい趣旨は「垣であれ、いくら見通しが悪くても」という意味であり、「霞であれ、いくら見通しが悪くても」と詠んでいる和歌の趣旨と同じものであることが分かる。琉歌は、このように異なるニュアンスを入れながら和歌の改作をしていることが、改作琉歌に多く見られる特徴である。

和歌には、この③の和歌以外にも、梅が匂いを隠すことができないことを詠んでいる歌が数多く見られ、その概念は歌の世界で広く伝わっている。しかし、この③の和歌のみが唯一、梅の匂いと一緒に「隠れない物は」という表現を使っており、琉歌と一致している。さらに、この琉歌との語順も同様であるため、この琉歌はおそらくこの為家の和歌から影響を受け、この和歌を改作したことが推定できると考えられる。

なお、参考までに、「梅の匂いが隠せない」場面を詠んだ和歌を以下の通りに3首紹介する。これらの歌は全て琉歌人によって学ばれたと考えられるものの、改作した可能性までは指摘できないので、ここであくまでも参考までに列挙しておくことにとどめる。

●『林下集 (実定)』 (11) [月あかかりし夜むめの花のえだをりにつけて、大宮の小侍従がもとへ申しおくりし]

はるのよの 月にながむる むめのはな いろもにほひも かくれざりけり

●『後鳥羽院御集』 (1569) [野辺霞]

梅がかは 霞の袖に つつめども 香やはかくるる 野べの夕かぜ

●『久安百首』 (1205) [春廿首、作者：待賢門院安芸]

梅の花 色をば霞 こむれども 匂ひはえこそ かくさざりけれ

④

和歌

『夫木和歌抄』 (423)
(正治百首、作者：三条入道左大臣)

琉歌

『琉歌全集』 (1418)、
『古今琉歌集』 (50)
(歌人：護得久朝置)

余所にても

聞くぞ嬉しき

くらゐ山

たかきにうつる

うぐひすのこゑ

聞くも嬉しさや (チクン ウリシサヤ)

梅の匂しのぶ (うミヌ ニエイ シヌブ)

深山鶯の (ミヤマ ウグイスイヌ)

千代の初声 (チユヌ ハツィグキ)

現代語訳：聞くも嬉しいのは、梅の匂
をしのでさえずる深山鶯の千代の初
声である。

この④の和歌の作者は、三条入道左大臣であり、藤原実房のことである。藤原実房は、『正治二年初度百首』の作者としても知られており、この和歌は同百首にも見られる。つまり、この和歌は以下の二つの歌集に含まれている。

- 『夫木和歌抄』 (1310年・鎌倉時代成立)
- 『正治百首』 (1200年・鎌倉時代成立)

『正治百首』は、鎌倉時代の「新古今和歌集の選歌資料として重視され、(略)その企画・詠進の過程も、藤原定家の明月記、藤原俊成の正治仮名奏状(正治二年俊成卿和字奏状)、俊成・定家一紙両筆懐紙などによって、かなり詳細に辿ることが可能である」(『新編国歌大観・第4巻』(1986)、p.705)のである。したがって、この改作琉歌の場合も、定家・俊成との関わりを持っていた歌人からの影響を辿ることができる。

この琉歌と和歌における注目点は「聞く」と「嬉しい」という内容である。その内容は和歌の中で「聞くぞ嬉しき」という7音句のように表現されているのに対し、琉歌では「聞くも嬉しさや」という8音句として詠み込まれている。つまり琉歌は、和歌における係助詞「ぞ」とその係り結びである形容詞の連体形「嬉しき」の代わりに、まず、係助詞「も」を用いつつ、そして和歌の「嬉しき」を琉歌独特の終止表現である「嬉しさや」に変えていることが分かる。琉歌には、句末に形容詞の語幹＋「さ」(主にク活用形容詞の場合)或いは形容詞の語幹＋「しゃ」(主にシク活用形容詞の場合)という形容詞の独自の終止形、いわゆる「サ語幹」(例：きよらさ(発音：チュラサ)、しほらしや(発音：シュラシャ)等)が用いられていることが多く、琉歌の句末のユニークな

趣きが出されている。この④の琉歌もその一例である。沖縄語独自の文法を適用しながら、和歌の7音句「聞くぞ嬉しき」を「聞くも嬉しさや」という琉歌に相応しい8音句に変形させ改作していることが明瞭である。

和歌には、「聞く」+「嬉しい」との組み合わせは他にも見られるが、この琉歌との語順が逆になっているため、琉歌に最も似ているのはこの④の和歌のみであることが判明する。したがって、この琉歌は、この④の和歌を改作したと推察できるだろう。

参考までに、その他の和歌も以下に取り上げる。

●『基俊集』(191) [鶯、作者：基俊]

よをこめて なく鶯の 声きけば うれしく竹を うゑてけるかな

●『山家集(西行)』(993) [題しらず]

うぐひすの こゑにさとりを うべきかは きくうれしきも はかなかりけり

⑤

次の改作琉歌について、第3章で詳しく述べているため、ここで説明を省き、簡単な図のみ載せておく。

『新勅撰和歌集』(1120) [歌人：行念法師]

ゆく年を しらぬいのちに まかせても あすをありとや はるをまつらむ

くれて行く年も 知らぬあてなしの 手まりうち遊ぶ 春よ待ちゆさ

『琉歌全集』(1419)、『古今琉歌集』(251) [歌人：伊是名朝睦]

⑥

和歌

『金葉和歌集初度本』(124)

[家のふちのさかりなるを見て読める]

(作者：律師増)

くる人も

なきわがやどの

藤のはな

たれをまつとて

さきかかるらん

琉歌

『琉歌全集』(1421)、

『古今琉歌集』(1048)

(歌人：豊里里之子)

住む人やをらぬ (スム フィトゥヤ フウラス)

荒れはてる宿に (アリハティル ヤドゥニ)

誰がために咲きやが (タガタミニ サチャガ)

庭の梅や (ニワヌ うミヤ)

現代語訳：住む人はいないで荒れはて
ている家に、梅の花が咲いているが、
誰のために咲いたか。

平安時代の勅撰和歌集である『金葉和歌集』のこの和歌を学んだと考えられる琉歌は、この和歌といくつかの相違点が見られるが、趣旨には相違がないと言える。さらに、共通表現も5語見られるだけでなく、その他に歌の場面の観点から類似していると言える、類似表現および修飾語も少なくとも4語存する。

両歌の共通表現は「人」「なき／をらぬ（意：いない）」「宿」「誰」「咲く」のように、5語見られ、歌の概念を支える主な柱となっている。それらの共通表現は、大和語と沖縄の首里語のそれぞれの言葉に存する文法や表現の相違点を考慮すれば、同義語であることが判明する。

しかし、注目ポイントは類似表現および修飾語である。この和歌の改作琉歌は、和歌における「来る人もなき」という表現を「住む人やをらぬ」に変更し、和歌の「我が宿」を「荒れ果てる宿」という修飾語に変えていることが注目される。また、和歌に見られる「藤の花」ではなく、「庭の梅」という類似表現を用いつつ、花の種類は違うが、きれいに咲こうと頑張っている花の概念は同様に描かれていることが分かる。この花の咲こうとしている努力、言わば生業の、主な目的を「誰を待って咲いているのであろう」という表現で表している和歌に対し、琉歌は「誰のために咲いたか」のように、類似表現を用いつつ歌っている。この⑥の琉歌は、和歌との共通表現（同義語）のみならず、上述の修飾語および類似表現（下線を引いた単語）を詠み込みながら若干異なるニュアンスを加え、この⑥の和歌を巧みに改作していることが分かる。

⑦

和歌

『宝治百首』 (261)
(作者：顕氏)

吹きおくる
風のたよりに
しられけり
をちのかきねに
にほふ梅がえ

琉歌

『琉歌全集』 (1426)、
『古今琉歌集』 (63)
(歌人：奥里親雲上)

たよりおす風の (タユイ ウスカジヌ)
吹きまはしまはし (フチ マワシ マワシ)
隣咲く梅の (トゥナイ サク うミヌ)
匂のしほらしや (ニエイヌ シュラシャ)

現代語訳：隣りに梅が咲いたという便
りでもするように、時々吹いて来る微

風がもたらす梅の香は、誠に奥ゆかしいものである。

『宝治百首』は勅撰和歌集ではないものの、勅撰和歌集である『続後撰和歌集』の選歌資料に充当するため、後嵯峨院が宝治2年(1248年)に当時の主要歌人40人に詠進させた百首である。琉歌の歌人もそれを参考にしていた可能性が考えられるだろう。

なお、この和歌は鎌倉時代成立の『宝治百首』以外に次の歌集にも見られる。

- 『明題和歌全集』(鎌倉中期～室町前期成立)
- 『題林愚抄』(室町中期成立)
- 『類題和歌集』(江戸時代成立)

和歌には、風の便りによって梅の匂いが感じられる場面を歌ったものが数多く見られる。その中、この琉歌に似ている和歌がもう1首見られるので、以下に紹介する。

●『親清五女集』(209) (隣家梅)

歌 吹きおくる そなたの風を たよりにて 人の軒ばの 梅が香ぞする

この和歌も、琉歌と内容も順番も一致しており、さらに、和歌の詞書を見れば、琉歌に詠み込まれている「隣咲く梅の」の「隣」という語までも書かれているため、上の琉歌は上述の『宝治百首』の和歌のみならず、同じ鎌倉時代に成立した『親清五女集』のこの和歌も学んだ可能性は否定できないだろう。なお、この和歌の作者である親清五女の母は、実材母である。実材母は、西園寺公経の側室であり、西園寺公経の姉は藤原定家の後妻で、公経は定家の義弟でもある。したがって、親清五女も定家の何らかの影響を受けたと推定できる。

いずれにしても、この⑦の琉歌は、鎌倉時代の勅撰和歌集の選歌資料か、若しくは、定家と関わりを持っていた歌人の和歌の影響を受けた歌であると結論付けられよう。

なお、上述したように、和歌には、風の便りと梅の匂いという場面を歌ったものが数多く見られるが、上記の2首以外の和歌は、すべて上の琉歌との順番が違う点、若しくは上の和歌と琉歌共に見られる表現が全部揃っていない点で琉歌と異なるため、改作の手本となった歌とは言えないであろう。それらの和歌は、参考までに以下の通りに列挙する。

また、下記のリストの中、5番目に挙げられる『雅世集』の730番歌のみは、琉歌に見られる表現(吹く／風／便り／梅／匂)を全部揃っており、順番も同

じであることから、改作琉歌の元となった和歌ではないか、と判断に迷うが、この⑦の和歌と琉歌は両歌共に「吹く風の便りに梅の花の匂いが香ばしく感じられる」という基本的に同じ趣旨を伝えている点で共通しているものの、下記の5番目に挙げている『雅世集』の730番歌は、「春の灯が消える」という場面まで詠み込んでいるため、この⑦の琉歌とは異なる趣旨を伝えていることが明らかである。したがって、この琉歌の元となった和歌とは考えられないであろう。

●『後拾遺和歌集』(50) [屏風絵に梅花ある家にをとこきたるところをよめる、作者：平兼盛]

むめがかを たよりのかぜや ふきつらん はるめづらしく 君がきませる

●『新葉和歌集』(34) [題しらず、読人不知]

吹く風の たよりばかりの 梅がかを うはの空にや たづね行くべき

●『四条宮下野集』(44) [むめのかよるおほしといふだいを、ひとにかはりて]

いろみえぬ むめのかばかり にほふかな よるふくかぜの たよりうれしく

●『宝治百首』(263) [作者：為氏]

梅花 しるべなくとも 尋ねみん 吹くかたにほふ 風のたよりに

●『雅世集』(730) [窓前梅、禁裏内内御月次、文安四三十八]

吹く風の たよりなりけり 窓の梅の にほへばきゆる 春の灯

●『黄葉集(光広)』(385) [梅花遠薫]

吹く風の たよりばかりの 梅がかは たが里とほく 咲初めぬらん

●『等持院百首(尊氏)』(7) [秋日侍太上皇仙洞同詠百首応製和歌、春二十首、作者：征夷大將軍正二位臣源朝臣尊氏上]

このさとは 風のたよりに にほふかな むめさくかたや いづこなるらん

上記を踏まえれば、この⑦の琉歌は、『宝治百首』の和歌(重複歌は『題林遇抄』などにある)、或いは『親清五女集』の和歌を元にし、改作した可能性が最も確実であると言えるだろう。

また、『琉歌全集』の中でこの1426番の琉歌と非常に似たような琉歌も他1首見られる。以下の1457番歌である。

●『琉歌全集』(1457)、『古今琉歌集』(186) [作者：読み人しらず]

吹き回し回し おす風とつれて 軒に咲く蘭の 匂のしほらしや

現代語訳：時々吹くそよ風と共に、軒につるしてある蘭の花が、高雅な香をただよわせてすばらしい。

この 1457 番の琉歌は、1426 番の琉歌との類似点が多く見られ、1426 番歌のバージョンであると考えられる。

上述したように、1426 番歌は、和歌の改作琉歌であるものの、1457 番歌は和歌との類似点が少なくなっており（共通表現は「吹き」「風」「匂」という 3 語しかなく）、和歌と直接的な影響関係はなかったのではないだろうか。むしろ、1426 番歌との直接的な影響関係が推定できる。

⑧

次の琉歌を、すでに第 3 章で取り上げているので、ここでは詳細を省き、簡単な図のみ記載しておく。

『春霞集』(73) [歌人：毛利元就]

松はなほ くる春ごとの 若緑 さすや千とせも かぎりなからん

千歳経る松も めぐて春くれば みどりさし添へて 若くなゆさ

『琉歌全集』(1427) [歌人：読み人しらず]

⑨

和歌

『続古今和歌集』(67)

(作者：光孝天皇)

むめのはな

ちりぬるまでに

見えざりし

人くとけさは

うぐひすぞなく

琉歌

『琉歌全集』(1442)、

『古今琉歌集』(39)

(歌人：読み人しらず)

にほひ咲く梅の (ニヲウイ サク うミヌ)

散り落てるまでも (チリ ウティル マディン)

しのぶ鶯の (シヌブ ウグイスイヌ)

音もないらぬ (ウトウン ネラン)

現代語訳：香りよく咲く梅の花の散り落ちるまで、忍んで来る鶯のさえずる声も聞こえない。

この和歌における「人くとけきはうぐひすぞなく」という2句を、中塚(1928)は「ひとくは鶯の啼聲で、人が来る意を掛く」(p. 409)のように解釈している。

つまり、この和歌は「梅の花が散ってしまうまでに訪れなかった人が来るよ、と鶯が鳴き(始めている)」と理解できるだろう。それに対し、琉歌も「梅の花が散ってしまうまで」と同様の場面を詠んでいるのだが、「それまでに鶯の声が聞こえない」という下句における和歌と異なる場面を加えている。この⑨の和歌の中から「梅の花が散ってしまうまでに」鶯が鳴いていたかどうかは、はっきり分からないのであるが、和歌における鶯の鳴き声は「ひとくひとく」となっていることは、次の和歌からも確認できる。

●『古今和歌集』(1011) [誹諧歌、題しらず、よみ人しらず]

梅花 見にこそきつれ 鶯の 人く人くと いとひしもをる

(解釈:「私は梅の花こそ見に来たので、他のものに用があるのではないのだ。なのに、鶯が「ヒトク、ヒトク」と私を特に嫌うとはどうしたことだろう」(小沢、松田 1983, p.550)

『続古今和歌集』の和歌では、掛詞を用いながら鶯が「人が来る」と鳴いている意味が優先的に伝わっている。しかし、それだけではない。もし鶯の鳴き声を「ヒトク、ヒトク」と理解してもいいのであれば、「梅の花が散るまでに」鶯は「ヒトクヒトク」と鳴かなかったため、それまでに鶯の鳴き声は聞こえなかったと理解できるのではないか。そうすれば、⑨の和歌も琉歌も、鶯は梅の花が散るまでに鳴かなかったという、同様の場面を表していることになる。したがって、琉歌はこの『続古今和歌集』の 67 番歌を学んで改作したものであると言えるだろう。

この和歌は、『続古今和歌集』以外には同じ鎌倉時代成立の『万代和歌集』という私撰和歌集にも含まれている。『万代和歌集』は、勅撰和歌集の部立構成で勅撰和歌集と同一形式を採っており、勅撰和歌集の資料であったと考えられる。『続古今和歌集』は藤原為家、基家や家良らが撰進した勅撰和歌集であり、また『万代和歌集』にも為家と影響関係にあった家良も関わったと思われる(『新編国歌大観』1996)。

上の琉歌は、鎌倉時代の勅撰和歌集『続古今和歌集』か、或いは勅撰和歌集の選歌資料『万代和歌集』に含まれている上の和歌を改作したものとなる。

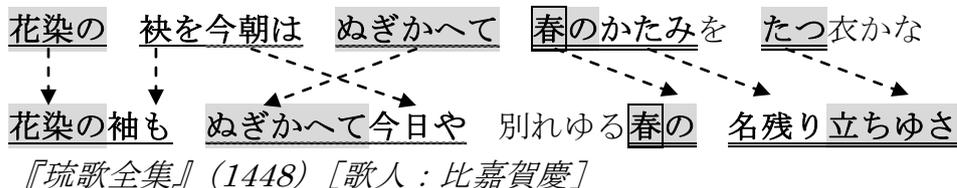
⑩

次の琉歌はそれぞれ2首の異なる和歌やその改作琉歌について詳しく第3章

で説明しているため、ここではその簡単な図 1 と図 2 のみ載せておく。

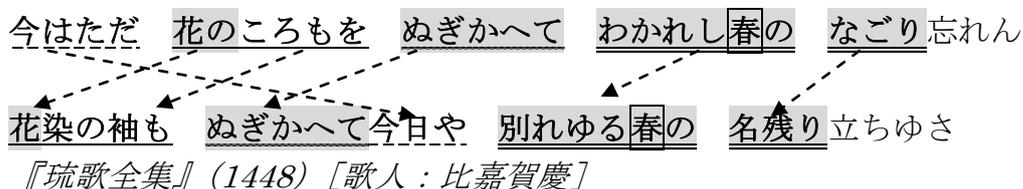
(図 1)

『続草庵集 (頓阿)』 (121) [歌人：頓阿]



(図 2)

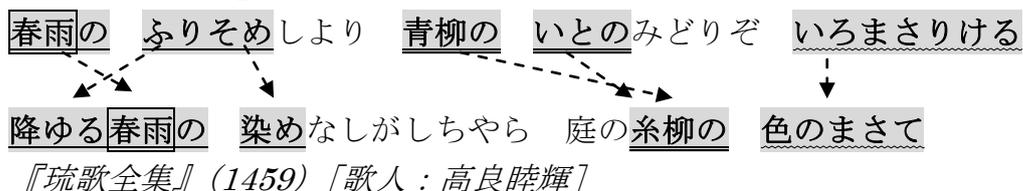
『浦のしほ貝』 (323) [歌人：熊谷直好]



⑪

次の改作琉歌については、第 3 章で述べているため、ここで詳しい説明を省く。

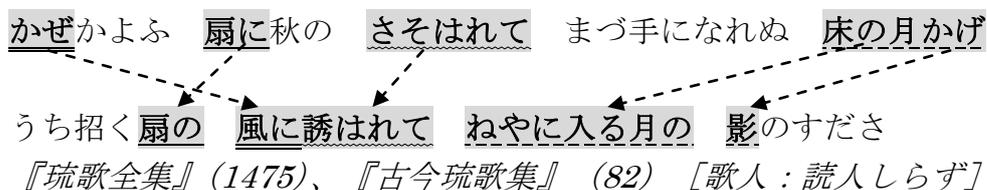
『新古今和歌集』 (68) [歌人：凡河内躬恒]



⑫

次の改作琉歌についても第 2 章で詳しく述べているので、ここでは簡単な図のみ表示する。

『拾遺愚草』 (822) [歌人：藤原定家]



⑬

和歌

『三井寺山家歌合』(26)

(歌人：良敏)

さらぬだに
玉とあざむく
蓮葉の
露をもみがく
よはの月かな

琉歌

『琉歌全集』(1482)、

『古今琉歌集』(213)

(歌人：比嘉賀慶)

さやか照り渡る (サヤカ ティリ ワタル)
月にみがかれて (ツイチニ ミガカリティ)
はちす葉にかかる (ハチスイバニ カカル)
露のきよらさ (ツイユヌ チュラサ)

現代語訳：明月にみがかれたように、
蓮の葉の上にたまっている露の玉が美
しい。

この歌集『三井寺山家歌合』の成立年次は未詳であるが、「三井寺新羅社歌合(1173年)と5人の作者共通して(中略)いるので、ほぼ時接して催されたと推測される」(『新編国歌大観・5巻』1987、p.1446)ものである。したがって、平安末期の和歌であると推定できるだろう。

また、「三井寺での歌合は、長吏覚忠(関白忠通男)の招きによって、俊成、清輔、頼政、重家ら一流歌人が判者や歌人として参加していることが知られる」(前掲、p.1446)。

この⑬の和歌と似た歌も他1首挙げられる。この和歌も平安後期の歌集(『師兼千首』)に初出してから、江戸時代成立の『類題和歌集』にも見られる。

●『師兼千首』(278) (蓮露似珠) [正二位行権大納言兼春宮太夫大学頭藤原朝臣師兼]

歌 さらぬだに 玉とあざむく はちす葉の 露の光を みがく月かけ

また、上の2首の和歌のみならず、琉歌に影響を与えたと推定できる和歌はもう1首ある。

●『新千載和歌集』(922) (花園院七年の御遠忌に、徽安門院より法花経の品品の文を人人によませられて経の料紙になされたりけるに、かの御経を見たてまつりて女房のもとに申しおくりける) [作者：入道前太政大臣(西園寺公経)]

歌 七とせの 月日にみがく 蓮葉の 露のしら玉 光そふらし

この室町時代の『新千載和歌集』の和歌は、花園院の7年の御遠忌の際に詠まれた歌であり、琉歌の場面とは違うが、琉歌との順番や表現も似通っているため、この『新千載和歌集』の和歌は琉歌に影響を与えたのではないかと推定できる。両歌の下句において露の玉の光／清らさ（美しさ）が賛美されており、さらに、その美しさは月（或いは月日）に磨かれるということが、共通して両歌の上句において詠まれている。順番や歌の展開から見て、『新千載和歌集』のこの和歌は、『三井寺山家歌合』の26番歌と『師兼千首』の278番歌より、琉歌に影響を与えた可能性が高いと推定できるだろう。

和歌には「蓮」「露」「磨く」という3つの表現を含んだ歌がそれ以外にもあるものの、「月に磨かれる」という様子を詠み込んでいる和歌はここで挙げた『三井寺山家歌合』、『師兼千首』や『新千載和歌集』の和歌3首のみであるため、これらの3首は主にこの琉歌に影響を与えたと言えるだろう。

⑭

和歌

『金葉和歌集・初度本』(281)

(歌人：源俊頼朝臣)

山のはに
くものころもを
ぬぎすてて
ひとりも月の
たちのぼるかな

琉歌

『琉歌全集』(1483)

(歌人：今帰仁王子朝敷)

すだすだと雲の (スイダスイダトウ クムヌ)
御衣ようちはづて (ンスユ ウチハズイティ)
澄みてぬきやがゆる (スミティ ヌチャガユル)
月のきよらさ (ツイチヌ チュラサ)

現代語訳：雲の御衣を脱いで、すがすがしく澄んで、東の空に出て来た月が美しい。

同様の場面を詠んでいるこの和歌と改作琉歌の特徴は、多くの同義語の使用状況である。和歌における「ころも」は琉歌の中で「御衣（ンスイ）」と置き換えられているだけでなく、和歌の「ぬぎすてて」は琉歌において「うちはづて」に、また和歌の「たちのぼるかな」は琉歌の「ぬきやがゆる」に置換されていることが分かる。『沖縄古語大辞典』（1995）によると、「うちはづる（うち外る）（発音：ウチハズイユン）」は「脱ぐ」の意で、「うち」は接頭語である。また、同辞典によると、「ぬきあがる（貫き上がる）（発音：ヌチャガユン）」は、「勢いよく突き出る。飛び出る。ぬき出る」の意味を有する。したがって、これらの二つの動詞は、和歌の「ぬぎすてて」と「たちのぼる」動詞と同様の意味であることが明確になる。同義語の使用に加えて、和歌には見

られない「すだすだと」と「きよらさ」という沖縄語の独特表現もさらに用いるこの琉歌は、和歌の改作琉歌であっても、非常に沖縄らしい趣を保つことができ、見事な改作琉歌であると言える。

なお、元の和歌は当時大変有名な歌だと考えられ、下記の歌書に含まれている。

- 『金葉和歌集』（1126～7年成立・平安時代）
- 『散木奇歌集（俊頼）』（1127年成立・平安時代）
- 『高陽院七番歌合』（1094年成立・平安時代）
- 『中古六歌仙』（鎌倉初期成立）
- 『色葉和難集』（鎌倉中期成立か）
- 『宝治百首』（1248年成立・鎌倉時代）
- 『類題和歌集』（江戸初期）
- 『明題和歌全集』（鎌倉中期～室町前期）

歌 山のはに 雲の衣を ぬぎすてて 光も月の さへのぼるかな

- 『題林愚抄』（1447年～1470年成立・室町中期時代）

歌 山のはに 雲の衣を ぬぎすてて 光も月の さへのぼるかな

また、最後に列挙している2歌書『明題和歌全集』および『題林愚抄』に載っている和歌も取り上げる。この和歌は上の図に示した和歌と非常に似たものであるが、第4句の「光」という表現と結句「さへのぼるかな」のみが上の和歌と異なることが見える。とりわけ、「さへのぼるかな」という結句は、上の和歌における「たちのぼる」と違うことに焦点を当てたい。『日本国語大辞典』（2000-2002）によると、「さゆ（冴・互）」は、「光、音、色などが、冷たく感じるほど澄む。また、まじりけがないものとしてはっきり感じられる。澄みきる。」という意味を有する。この定義を見れば、上の琉歌に見られる「澄みて」という表現と同様の意味のものとなるのが分かる。したがって、『明題和歌全集』と『題林愚抄』の和歌、つまり鎌倉中期～室町中期までの歌集に見られる和歌こそ、上の琉歌に改作されたのではないか、という考察もできるだろう。

⑮

次の琉歌について第3章で詳しい説明が載っているため、ここでは簡単な図1、2、3のみ載せておく。

(図 1)

『古今和歌集』(170) [歌人：紀貫之]

川風の涼しくもあるか 打寄する 浪と共にや 秋は立つらむ

夏の走川に 涼し風立ちゆす もしか水上や 秋やあらね

『琉歌全集』(1491)、『古今琉歌集』(141) [歌人：読人しらず]

(図 2)

『嘉元百首』(726) (納涼) [作者：不明]

くれはつる 夏みの川の河風に 山かげすずし 秋かよふらし

夏の走川に 涼し風立ちゆす もしか水上や 秋やあらね

『琉歌全集』(1491)、『古今琉歌集』(141) [歌人：読人しらず]

(図 3)

『新千載和歌集』(304) [前中納言匡房家の歌合に、納涼 よみ人しらず]

大井河 まだ夏ながら 涼しきは むせきに秋や もりてきつらん

夏の走川に 涼し風立ちゆす もしか水上や 秋やあらね

『琉歌全集』(1491)、『古今琉歌集』(141) [歌人：読人しらず]

⑯

この改作琉歌については、すでに第3章「琉歌の季節語（春夏秋冬）をめぐって」の中に述べているため、ここでは詳しい説明を省く。

『古今和歌集』(166) [歌人：清原深養父]

夏の夜は まだよひながら あけぬるを 雲のいつこに 月やどるらむ

宵とめば明ける 夏の夜のお月 雲のいつ方に お宿めしやいが

『琉歌全集』(1505) [歌人：岡本岱嶺]

⑰

次の琉歌はそれぞれ2首の異なる和歌を改作した可能性があると考えられるので、ここで図1と図2でその可能性の高い和歌を示す。なお、これらの和歌と改作琉歌については、第3章で詳しく述べているため、ここでは簡単な図のみ参考までに掲載する。

(図1)

『風情集』(183) [歌人：藤原公重]

ぬぎかふる 蝉の羽衣 うすければ 夏はきたれど すすしかりけり

若夏がなれば 蝉の羽衣に ぬぎかへて心 すだくなゆさ

『琉歌全集』(1508)、『古今琉歌集』(134) [歌人：読人しらず]

(図2)

『浦のしほ貝』(398) [歌人：熊谷直好]

からころも ぬぎて出でたる うつ蝉の よはころから すすしかりけり

若夏がなれば 蝉の羽衣に ぬぎかへて心 すだくなゆさ

『琉歌全集』(1508)、『古今琉歌集』(134) [歌人：読人しらず]

⑱

上の⑰で紹介した 1508 番歌と同じように、次の 1526 番琉歌もそれぞれ違う和歌 2 首に倣って作られた可能性が高い。なお、この改作琉歌についても、第 3 章ですでに述べているため、ここでは図 1 と図 2 のみ表示する。

(図1)

『新千載和歌集』(634) [歌人：入道二品親王尊円]

初霜のをかのかやはら いつのまに 秋みし露の むすびかふらん

草の葉の霜や 玉と思なちやさ いつの間ににやまた 秋やなたが

『琉歌全集』(1526)、『古今琉歌集』(195) [歌人：今帰仁王子朝敷]

(図2)

『鳥の迹』(444) [歌人：長田信庸娘]

草の葉に みだれし露の いつのまに 結びやかへし けさの初しも

草の葉の霜や 玉と思なちやさ いつの間ににやまた 秋やなたが

『琉歌全集』(1526)、『古今琉歌集』(195) [歌人：今帰仁王子朝敷]

⑲

次の⑲と⑳の改作琉歌も、両方とも「秋」という表現を含み、第 3 章で詳し

く取り上げられるため、ここでは簡単な図の表示にとどめたい。

『宝治百首』(1926) [歌人：隆親]

紅葉ばの 下てる色や うつるらん 錦ながるる やまがはの水

澄みて流れゆる 山川の水に 色深くうつる 秋の紅葉

『琉歌全集』(1530) [歌人：本村朝照]

⑳

『頓阿百首』(40) [歌人：頓阿]

あさくまの 山のは出づる 月かげや くもりなき代の 鏡なるらん

虎頭山出ぢる 秋の夜のお月 曇りないぬ御代の 鏡さらめ

『琉歌全集』(1537) [歌人：美里王子]

㉑

和歌

『草庵集』(1388)

(歌人：頓阿)

琉歌

『琉歌全集』(1551)、

『古今琉歌集』(1662)

(歌人：護得久朝惟)

いまぞきく

松吹く風の

おとならで

木末にことの

しらべ有りとは

庭の松の葉に (ニワノ マツイヌ フワニ)

騒ぐ夜嵐の (サワグ ユアラシヌ)

音もしづめゆる (ウトウン シズイミユル)

琴のしらべ (クトウヌ シラビ)

現代語訳：庭の松の葉に騒ぐ夜嵐の音も、鎮めるような美しい琴のしらべである。

この和歌は、次のような表記で記載されていることもある(酒井 2004、p.233)。

1385 番歌： ^{いま}今ぞ聞^きく 松^ふ吹く風の 音ならで ^{こずゑ}梢^{こと}に琴の しらべありとは

この文献から、同和歌の「おと」と「こと」という表現は「音」と「琴」の漢字表記で書かれていることが分かる。したがって、これらの表現は、琉歌に詠み込まれている表現と同様の意味を持つ語であることが確認できる。また、

歌の意味については、次のような校注がある（前掲書、p.233）。

○音ならで - 音ではなくして。

○下句 - 木末に琴の調べのような美しい調べがあるとは。

したがって、上記の和歌を「松の風の音はなくなり、梢に琴の調べのような美しい調べがあるとは（驚いた）。今（それを）聞いている。」のように現代語に直すことができるだろう。この和歌の現代語訳を琉歌の現代語訳と比較すれば、似通った意味を表していることが判明する。

また、両歌における句や表現を詳しく見れば、次のことが言える。和歌における「松吹く風の」という7音の1句は琉歌の中で「庭の松の葉に 騒ぐ夜嵐の」のように8・8音の2句として見られ、動詞「吹く」が動詞「騒ぐ」に、また「風」が「嵐」という同義語に置き換えられていることが分かる。さらに、和歌の「音ならで」という5音句は、琉歌において8音句として改作されており、「音もしづめゆる」のように、音は完全になくなるのではなく、鎮める、和らげるという若干異なったニュアンスを込めた表現として見られる。この句については、同様の意味を表した同義語ではなく、似たような意味を込めた類義語が用いられていることが言える。これは改作琉歌の技巧の一つとして指摘できる。また、最後に、琉歌の結句として詠まれる「琴の調べ」は、歌のおちとも言える最も重要なポイントであり、同様の表現が用いられることが両歌で共通している。この表現は、和歌では「木末にことの しらべ有りとは」という7・7音の2句に渡って見られるのに対し、琉歌においては6音の結句となり、シンプルに「琴のしらべ」のように歌を開幕させる。

以上を踏まえ、この②の琉歌は室町時代の頓阿の歌集に含まれるこの和歌を改作したものだと言えるだろう。

②

和歌

『玉葉和歌集』(803)

(歌人：前大僧正慈鎮)

年をへて
苔にむもるる
ふるてらの
軒に秋ある
つたの色かな

琉歌

『琉歌全集』(1554)

(歌人：読人しらず)

軒や苔むして (ヌチャ クキ ムシテイ)
年やふる寺の (トウシヤ フルディラヌ)
池にすみ渡る (イチニ スミワタル)
月のみ舟 (ツイチヌ ミフニ)

現代語訳：軒は苔がむして、年が大分経ている古寺の池に、月が清らかに澄み渡って、さながら舟が浮いているよ

うに見える。

この和歌は、次のようにも記載されている（岩佐 1996、p.509）。

803 番歌：年をへて 苔に^(う)むもるる ふるてらの 軒に秋ある つたの色かな

またその注釈は、「年月を経て、苔にうずもれ、季節もわからないような古寺の、軒に紅葉して秋を感じさせる、蔦の色であるよ」（前掲書、p.509）とし、この和歌の中で「季節が分からない年を取った古寺」と「秋を感じさせる蔦の紅葉色」が対立しつつ、歌の雰囲気が見事に醸し出されている魅力を楽しむことができる。

それに対し、琉歌は「苔に^む埋もるる」に似通った「苔生^むして」を用い、「軒」「苔」「年や経る」や「古寺」という和歌との共通表現を取り入れながら、古寺を描いた和歌とそっくりの場面を描写していることが明らかである。しかし、琉歌は、和歌における「秋を感じさせる紅葉色の蔦」ではなく、秋の代表的な象徴として紅葉と異なるものを選んだことが分かる。それは、「澄み渡る月」という象徴である。秋という同様の季節感を保ちながら、秋の違う象徴をわざと選択したであろうということは、この改作琉歌の魅力や工夫の一つだと言える。

また、この和歌の主な特徴は、「季節が変わっても、毎年変わらない古い寺」と「その寺の軒に秋を感じさせる蔦」の対立であることだと言える。そののみならず、この和歌には、「(年を) 降る」と「古(寺)」という二つの意味を掛けた掛詞も見られる。その掛詞は琉歌も導入したことが明らかである。しかし、和歌においては、その掛詞が「年をへて」と「ふるてらの」という個別の2句に別れて見られるのに対し、琉歌においては、その掛詞が「年やふる寺の」のように、1句として表現されていることが分かる。さらに、琉歌におけるこの掛詞は、1句内に見られるどころか、動詞「経る(フィユン)」の連体形「経る(フィル/フル)」と「古」という二つの意味を有する「ふる」という1語内に収められていることが指摘できる。それも、この改作琉歌の技巧の一つだと言えるだろう。また、琉歌には、もう一つの掛詞が見られる。それは、「澄み」と「住み」を掛けた「すみ」という語である（島袋 1995、p.326）。このように、この琉歌の中でも「古」と「住む(生きている)」という異なるイメージの対立を楽しむことができる。和歌も琉歌もそれぞれ洗練された魅力が読み取れる。

この和歌は、鎌倉時代の勅撰和歌集である『玉葉和歌集』の他に、次の歌集にも含まれている。

- 『六百番歌合』（1192年成立・鎌倉初期）
- 『拾玉集』（鎌倉時代）
- 『夫木和歌抄』（鎌倉後期成立）
- 『明題和歌全集』（鎌倉中期～室町前期成立）
- 『類題和歌集』（江戸初期成立）

②

和歌

『新和歌集』（141）
（歌人：浄意法師女）

琉歌

『琉歌全集』（1555）、
『古今琉歌集』（179）
（歌人：読人しらず）

はちすばに -----▶はちす葉におきゆる（ハチスバニ ウチュル）
 おくしらつゆの -----▶露の玉ごとに（ツイユヌ タマグトウニ）
 ひかりさへ -----▶ひかり照りうつる（フィカリ ティリウツイル）
 すすしくみゆる -----▶十五夜お月（ジュグヤ ウツイチ）
 夏のよの月 -----▶

現代語訳：蓮の葉におく露の玉毎に、
十五夜の月の影が照りうつって、きら
きら光り輝いているのは、まことにみ
ごとである。

この②の和歌1首のみならず、一般的にも和歌においては、「蓮の花の上にある露」と「輝いている月」が同時に詠まれている場面がよく見られ、そのような和歌が何首か存在する。以下に、そのような場面を詠んだ和歌を取り上げる。

- 『新千載和歌集』（922）〔歌人：入道前太政大臣（西園寺公経）〕

歌 七とせの 月日にみかく 蓮葉の 露のしら玉 光そふらし

- 『拾遺愚草』（432）〔歌人：藤原定家〕

歌 この世にも このよの物と みえぬかな はちすの露に やどる月影

- 『拾遺愚草員外』（633）〔歌人：藤原定家〕

歌 この世には あまるばかりの 光かな 蓮の露に 月やどるいけ

- 『後鳥羽院御集』（332）〔歌人：後鳥羽天皇〕

歌 蓮葉に にごらぬ露の玉こえて すすしくなりぬ みな月のかげ

●『宝治百首』 (1043) [歌人：西園寺実氏]

歌 玉こゆる はすのうき葉に やどかりて 影もにごらぬ 夏の夜の月

●『師兼千首』 (278) [歌人：花山院師兼]

歌 さらぬだに 玉とあざむく はちす葉の 露の光を みかく 月かげ

これらの6首の和歌は、ほとんどの場合に「蓮」「露／玉」「光」「月」という②の琉歌との共通表現が見られ、この琉歌に影響を与えた可能性があるのではないかと考えられるだろう。しかし、歌の流れやその流れの中に選択された表現の正確さから判断すれば、上に紹介した『新和歌集』の歌こそ、琉歌に最も似通っていることが判明する。両歌の上3句においては、「はちす葉に」「置く」「露」と「光」という共通表現が同じ順番で同じ内容を込めた場面で詠み込まれており、さらに、その「光」が「みゆる月」を詠んだ和歌に対して琉歌はその「光」が「うつる月」を歌っており、違うニュアンスを加えても、ほぼ同じ場面が想像できる。

『新和歌集』の和歌と琉歌の句毎に詳しい分析を行ってみれば、次のことも明瞭になる。和歌における「はちすばに」という5音の上句は、琉歌の上句としてそのまま取り入れられているが、琉歌の8音調の形式を守るために、和歌の第2句から最初の表現である2音の動詞「置く」をさらに取り、琉歌の上句の句末に置き換える。ただし、5音の「はちすばに」と2音の「置く」は、計7音のみの表現になっているため、琉歌の8音句を完成させるために、動詞「置く」を首里語に直す必要がある。したがって、和歌に見られる動詞「置く」を首里語で存する動詞「置く(ウチュン)」の連体形である「おきゆる(ウチュル)」という3音表現に直し、「はちす葉におきゆる」という8音句を見事に完成させる。また、和歌の第2句の「おく」に続く「しらつゆの」という表現も琉歌の第2句として詠み込まれていることが分かるが、和歌と異なるニュアンスも込めながら、「白露の」の「白」を削除し、その代わりに「玉ごとに」という表現を新たに取り入れつつ、「露の玉ごとに」という8音の第2句を完成させる。このように、琉歌は和歌における上2句を分解しつつ、改作したことが明らかである。また、月の光と呼応する語も両歌とも動詞を選択し、上述のように、和歌に詠み込まれている動詞「みゆる」は、琉歌において「うつる」という動詞に置き換えられていることが分かる。以上の分析を踏まえ、この②の琉歌は『新和歌集』の和歌を改作したことが言えるだろう。

この和歌が含まれている『新和歌集』は、鎌倉時代1259年または1261年に成立され、藤原為家の長男である藤原為氏の私歌集である。

②4

次の琉歌もすでに第3章で紹介されているため、ここでは簡単な図のみ掲載しておく。

『夫木和歌抄』(6662) [歌人：民部卿為家卿]

冬の雨の 名残のきりは あけ過ぎて くもらぬ空に のこる月かげ

雨に流されて 空や雲霧も はれてすみ渡る 冬のお月

『琉歌全集』(1568) [歌人：渡口政発]

②5

和歌

『玉葉和歌集』(1031)

[雪中歳暮]

(歌人：前右兵衛督為教)

道もなく

ふりつむ雪は

うづめども

くれ行く年は

とまりやはする

琉歌

『琉歌全集』(1570)、

『古今琉歌集』(257)

(歌人：小那覇朝親)

うれしさや今宵 (ウリシサヤ クユイ)

雪も降りまさて (ユチン フリマサティ)

歳よよすみたる (トウシユ ユスイミタル)

たよりなたさ (タユイ ナタサ)

現代語訳：うれしいことよ、今宵雪も降りまさて、歳を引きとめるたよりとなった。

この琉歌における「降り積もった雪が年を引き止めることになる」というテーマはオリジナリティーのあるテーマであると読むことができる。しかし、和歌にも同様のテーマの歌が何首か見られ、その中からこの『玉葉和歌集』の1031番歌はこの琉歌に最も似通っていることが判明した。したがって、琉歌における「降り積もった雪が年を引き止めることになる」というテーマは琉歌独自のものではなく、和歌を改作しつつ和歌から導入されたテーマであると言えるだろう。

この和歌については、岩佐(1996)によれば、「道もなくなってしまう程、降り積る雪は地面を埋めているけれども、暮れて行く年は止るだろうか。止りなんかしやしないよ。」(p.649)という意味が取れる。また、島袋(1995)は、上の琉歌に見られる「よすみたる」という動詞の意味を「とどめた。ひきとめたる」(p.329)と訳している。このように、両歌の主な歌題は、「降り積も

る雪が年を止める」ことに関するテーマである。勿論、上の和歌におけるその歌題は「止まるだろうか。止まりなんかしやしないよ」のように疑問であると考えられ、和歌は、係助詞「や」と「は」の接続によって「そうであるか …… いや、そうではない」という反語を表している。それに対し、琉歌は結句「たよりなたさ（意：たよりとなった）」を用いることによって、和歌と異なる発言をし、「雪は年を止めるたよりとなった」のように、「いや、そうではない」という意味を含んだ反語ではなく、「実はそうである」という肯定的な発言をしている。その点では、琉歌と和歌が相違していることが言える。沖縄では一年中雪が降らないものの、琉歌には「雪」が見られる歌があり、和歌の影響とも言える。この②⑤の琉歌もその例の一つである。毎年必ず降ってくるという当たり前のような象徴として捉えられる和歌の「雪」、言わば、「年を止めるまでの神秘的な力はないだろう」という和歌の「雪」のイメージと違って、上の琉歌の「雪」に対するイメージは非常に肯定的であり、「雪は年を止めるたよりとなる」力を持つもののように捉えている。「雪」は、琉球の人々にとっていかに珍しいかをこの琉歌からも読み取れる。

この琉歌は、和歌における「ふりつむ雪は」という7音句を8音句に変形するために、4音の動詞「降り積む」を同義語である5音の動詞「降りまさて」に置き換え、「雪も降りまさて」のように8音句を完成させていることが分かる。また、「くれ行く年はとまりやはする」という和歌の2句を「歳よよすみたる」という1句に収まり、結句として雪に対する肯定的なイメージを込めた。それに対し、和歌は「降り積もる雪で道が埋もれた」という意味を込めた「道もなく」と「うづめども」という2句を詠んでいるが、琉歌はその意味を和歌から取り入れずに、その代わりに雪に対する肯定的なイメージの結句を入れたことが分かる。両歌に若干の相違点も見られるが、この和歌が琉歌に改作された可能性が高いと思われる。

この和歌は、鎌倉時代成立の勅撰和歌集『玉葉和歌集』に含まれており、京極為教によって詠まれた歌である。京極為教は、藤原為家の三男であり、定家・為家系列の歌人に当たる。また、上の和歌は、『玉葉和歌集』以外に鎌倉中期～室町前期成立の『明題和歌全集』、室町中期成立の『題林愚抄』や江戸初期成立の『類題和歌集』にも見られる。

②⑥

次の改作琉歌も京極為教の和歌に倣った可能性について、第3章で詳しく指摘しているため、ここでは簡単な図のみ表示する。

『新明題和歌集』(866) [歌人：為教]

浦風に 声さびしくも 夜もすがら 友なし千鳥 月に鳴くなり

聞くもさびしさや 冬の夜の空の 月に鳴き渡る 浦の千鳥

『琉歌全集』(1574)、『古今琉歌集』(1635) [歌人：上江州由恕]

②⑦

和歌

『三十番歌合』(32)

(歌人：家親朝臣)

琉歌

『琉歌全集』(1577)、

『古今琉歌集』(274)

(歌人：徳田佐平)

冬枯の

くさ木のけしき

まてしかな

まだ長月に

野べの淋しき

草葉かれはてて

(クサバ カリハティティ)

かにもさびしさめ

(カニン サビシサミ)

暁の空の

(アカツィチヌ スラヌ)

野辺の景色

(ヌビヌ チシチ)

現代語訳：草葉がすっかり枯れつくして、こんなにもさびしいものか。暁の空の野辺の景色は見るかげもない索漠たるものだ。

琉歌と和歌を対照すれば、両歌は「枯」「草木／草葉」「淋し」「野辺」「景色」という共通表現を 5 語含み、また、「ながつき（長月）」と「あかつき（暁）」という発音の上で似通った表現も 1 語ずつ含んでいることが判明する。また、両歌の趣旨も、「枯れた草木／草葉の、長月／暁に写る野辺の景色が淋しいものである」のように、非常に似通っているものであることが言える。和歌の中に「冬」という表現が見られる。琉歌のほうは、そのような表現が取り入れられていないものの、この 1577 番の琉歌自体は『琉歌全集』の「吟詠の部」の中の「冬の部」に入っているため、歌の内容からのみならず、『琉歌全集』の部立からも和歌と同様に冬の景色を歌っていることが明らかとなる。

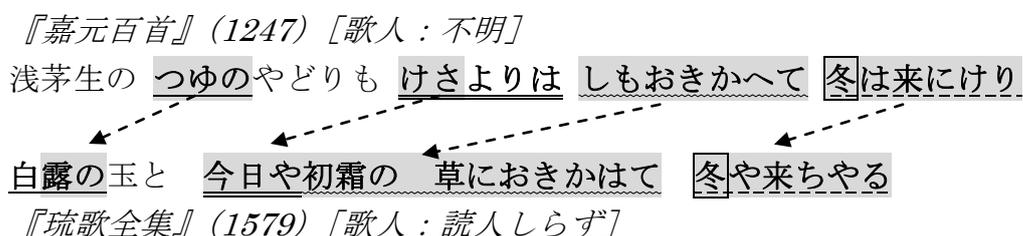
上記の図の中で琉歌が和歌から表現を取り入れている過程を示している矢印を辿れば、6 つの矢印の中から 2 つの矢印は琉歌と和歌の流れ（順番）が逆になっていることを示しているものの、残りの 4 つの矢印を見れば、両歌共に同じ流れであることが分かる。当該の 2 つの矢印については、1 つ目の矢印は、和歌の第 2 句にある「けしき」から琉歌の結句にある「景色」へ向かい、また、

2つ目の矢印は、和歌の結句に含まれる「淋しき」から琉歌の第2句にある「さびしさめ」に向かっているものであることが分かる。したがって、「景色」と「淋し」という2つの表現については、琉歌における位置が和歌の位置と逆となっている。簡潔に言えば、和歌における「(枯れ果てた野辺の) 景色が淋しい」という流れは、琉歌においては「こんなに淋しいか。(枯れ果てた野辺の) 景色は」となる。しかし、流れが逆になっていても、強調している部分は両歌共に「淋しい」ことである。和歌においては、形容詞「淋しき」は結句の最後の単語として詠まれるため、最後に残る印象は当然に「淋しい」ものとなり、和歌は「淋しい」という表現を強調していることが言うまでもない。それに対し、琉歌は「さびしさめ」を第2句の中に取り入れ、最後の印象として残るのは、「淋しさ」ではなく、結句の最後に詠まれている「景色」だと思われる。しかし、琉歌は第2句内に「さびしさめ」の前に「かにも(意: こんなのにも)」という強調の表現を入れることによって、「淋しい」雰囲気を一層高めているため、琉歌も和歌と同様に景色の「淋しさ」を第一に伝えていることが判明する。この和歌の改作琉歌の技巧であろう。

この和歌は、1300～1303年の間に成立したと考えられている『三十番歌合』に含まれている歌である。『国歌大観・第10巻』(1992)によれば、この歌合の「判者については未詳だが、京極為兼とする説が行われている」(p.1145)のである。この琉歌の歌人もこの鎌倉時代成立の歌集の歌を改作し琉歌を詠じた可能性があり得るだろう。

㊸

以下の㊸と㊹の改作琉歌についても第3章で詳しい説明があるため、ここでは簡単な図の表示にとどめる。



②⑨

『為家集』(866) [藤原為家の家集]

ふる雨の 雲ふきはらふ 山かぜを たよりにさゆる 冬の夜の月

空や雨はれて くもきりもないらぬ すみて照り渡る 冬のお月

『琉歌全集』(1581) [歌人：高良陸輝]

③⑩

和歌

『夫木和歌抄』(32)

[文永二年七月白河殿七百首]

(歌人：後嵯峨院)

とし月を

中にへだつる

しのがきの

ひと夜二夜に

あふよしもがな

琉歌

『琉歌全集』(1583)、

『古今琉歌集』(254)

(歌人：護得久朝常)

月日はり過ぎて (ツィチフィ ハイスイジティ)

一夜へちやめたる (イチヤ フィジャミタル)

年の中垣も (トウシヌ ナカガチン)

今宵なたさ (クユイ ナタサ)

現代語訳：月日が早く過ぎ去って今年と来年とが一夜でへだてられる年の中の垣ともいうべき大晦日はいよいよ今宵となった。

この琉歌は和歌との共通表現が「月」「年」「中」「垣」「隔つ」「一夜」のように6語となっている。これらの共通表現は、それぞれの歌において異なる語と結び付いているが、両歌の趣旨は同様のものであると言える。それぞれの表現を具体的に見れば、「年」は和歌において時を表す「年月」のように用いられるのに対し、琉歌の中では今年と来年を隔てる「年の中垣」という組合せとして使われており、それぞれの表現の意味は違うように思える。しかし、和歌の上句を見れば、3句内に詠まれている「年を中に隔てる垣」という内容は、琉歌の「年の中垣も」という第3句の意味と一致していることが分かる。両歌の主な意味は、「年月を中に隔てる垣は一夜である。このような一夜は大晦日のことであり、今年と来年を隔てている」である。今年と来年という2つの年を隔てるこの夜は、「一夜ではなく二夜であれば、二夜会う方法があればいいのになあ」と結句で詠んでいる和歌に対して、琉歌は、年を隔てるこのような一夜は、「今宵となった」と単純に結句の中で歌っている。この内容は両歌で相違しているものの、共通表現や歌の趣旨から判断すれば、この和歌は琉歌へ改作された可

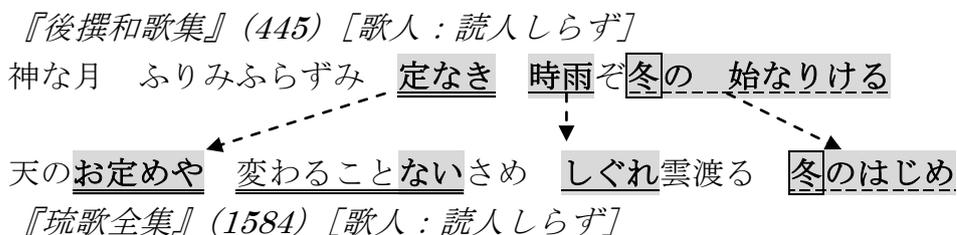
能性が高いと言えるだろう。

なお、詞書から知られるように文永二年（1265年）に作られたこの和歌は、鎌倉時代成立の『夫木和歌抄』以外に次の歌書にも含まれている。

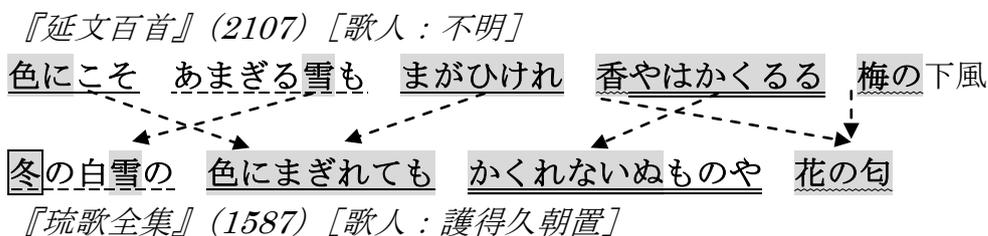
- 『白河殿七百首』（鎌倉時代）
- 『明題和歌全集』（鎌倉中期～室町前期）
- 『題林愚抄』（室町時代）
- 『類題和歌集』（江戸初期）

③①

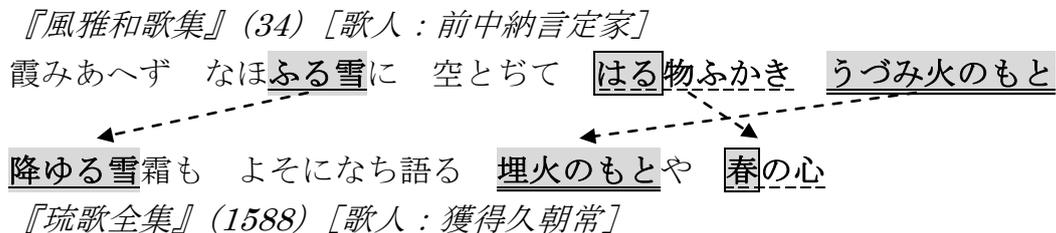
次の③①、③②や③③の琉歌について、第3章で説明されているため、ここでは簡単な図のみ表示する。



③②



③③



③4

和歌

『新拾遺和歌集』(555)

(歌人：後醍醐院)

行く秋の

末野の草は

うら枯れて

霜にのこれる

有明の月

琉歌

『琉歌全集』(1593)、

『古今琉歌集』(275)

(歌人：富永実文)

雪霜に野辺の (ユチシムニ ヌビス)

草や枯れはてて (クサヤ カリハティティ)

空にありあけの (スラニ アリアキヌ)

月ど残る (ツイチドゥ ヌクル)

現代語訳：野辺の草は、雪や霜にすっかり枯れはててしまって、空にありあけの月が残っているだけである。

室町時代成立の勅撰和歌集『新拾遺和歌集』に含まれるこの 555 番歌と、『琉歌全集』の 1593 番歌には、「末野の／野辺の」「草」「枯れる」「有明」「月」「霜」「残る」といった共通表現が 7 語見られ、表現の観点のみならず内容も非常に似通っていると言える。この和歌は『新拾遺和歌集』以外に、鎌倉中期～室町前期成立の『明題和歌全集』や江戸初期成立の『類題和歌集』にも見られる。

この③4の琉歌と和歌共に「野辺の草が枯れ果てて、有明の月が残っている」のように、同様の風景を描いているが、各歌にそれぞれの異なるニュアンスも見られる。和歌で描かれている有明の月は、「霜に」残る場面に対し、琉歌は同じ有明の月が「空に」残ることを歌っている。また、琉歌にも「霜」という和歌との共通表現が見られるが、琉歌における「霜」は第 1 句の中に「雪」と接続し、「雪霜に草が枯れ果てる」場面を歌っており、和歌と若干異なっていることが明らかである。また、改作琉歌では、和歌の 1 句が分解され、琉歌の 2 句として詠み込まれている傾向があるのだが、この琉歌にもそのような特徴が見られる。具体的な例としては、和歌における「末野の草は」という 7 音の第 2 句は、琉歌において「野辺の」という第 1 句末の 3 音の表現と「草や」という第 2 句の 3 音の表現として見られることである。また、琉歌の第 2 句は、和歌の 5 音の第 3 句「うら枯れて」を借用し、同様の音数律 (5 音) の「枯れはてて」という同義語に変形し、3 音の「草や」と呼応することによって見事に「草や枯れはてて」という 8 音句を完成させることが判明する。また、上の方法と同じように琉歌は、和歌の結句「有明の月」を下 2 句にわたって分解し、「空にありあけの」「月ど残る」という 8・6 音の下 2 句を完成させる。和歌の「霜

に」が琉歌の第 1 句に移動させられているため、「霜に」の代わりに「空に」という表現が用いられ、前述の下 2 句は見事に出来上がっていると言える。

最後に、今まで紹介した「吟詠の部」の 200 首に含まれている琉歌の中に、オモロの改作琉歌も 1 首見られ、1604 番歌がそれに該当することを述べる必要がある。この琉歌には非常に似ている琉歌が他に 1 首見られ、先行研究ですでに指摘されている 1623 番歌である。これらの 2 首の歌は、「吟詠の部」の最初の 220 首（1404～1623 番歌）の中に唯一のオモロの改作琉歌として挙げられる。なお、「夏」と「冬」という表現を含んだこれらの 2 首の琉歌については本論の第 3 章で詳しく述べているため、ここでは詳細の説明を省く。

以上をまとめると、「吟詠の部」の 1404～1604 番歌（200 首）に含まれている和歌の改作琉歌は 34 首あり、17%を占めている。この結果は、「節組の部」と本論の以前の章で紹介した和歌の改作琉歌の 10%程度と比べて、およそ 2 倍高いものとなっている。その理由は、「吟詠の部」の歌は三味線の伴奏で歌われるのを目的とする歌ではなく、基本的に曲と結びつけず詠じる（詠む）歌を含み、貴族などといった特定の歌人によって詠まれたものも多い。さらに、今回の調査対象とした「吟詠の部」の歌は「春の歌」「夏の歌」「秋の歌」「冬の歌」の部に属しており、季節の歌となっている。季節の歌は和歌からの影響を大きく受けていると考えられるため、和歌の改作琉歌が 17%あるというこの結果は、その影響の原因に基づいていると言えるだろう。しかし、本章の調査対象は『琉歌全集』3000 首中 360 首（12%）というごく一部しか含んでいないため、残りの歌については今後のさらなる調査が必要となる。全ての 3000 首の調査を終えた調査結果によって判明するであろう、『琉歌全集』の「節組の部」と「吟詠の部」の和歌の改作琉歌の歌数や読人知らずの歌数には、どのような相違点が見られるのかという問題は、今後の研究課題としたい。

「吟詠の部」200 首に含まれる和歌の改作琉歌 34 首の中に、特定の歌人によって作られた歌が 24 首（70%）、読人知らずの歌が 10 首（30%）見られる。また、それらの 34 首の琉歌の元になったと考えられる和歌は、43 首ある可能性について指摘した。それらの 43 首の和歌の時代的な区分は、以下の通りである。（同じ和歌が 2 歌集以上に含まれている場合には、時代区分のためには、その和歌が初出した歌集の時代を考慮した）。

- 鎌倉時代－21 首（49%）
- 室町時代－10 首（23%）
- 平安時代－8 首（19%）
- 江戸時代－4 首（9%）

また、それらの 43 首の中に、勅撰和歌集の和歌が 16 首と勅撰和歌集の選歌資料の和歌が 7 首あり、合わせて 23 首見られる。したがって、43 首の和歌の中から過半数 (53%) を占めていることが分かる。さらに、それらの 43 首の中に、藤原定家 (2 首) や為家 (3 首) によって詠まれた歌は 5 首見られ、頓阿の和歌も 4 首ある。また、藤原定家・為家系列の歌人の歌も見られるのであるが (為教 2 首、為氏 1 首、永福門院 1 首、行念法師 1 首)、その事実は定家や為家の和歌世界での影響力の範囲の広さを示す証となり、琉歌人への定家や為家の直接的な影響として考えられるのは、上の 5 首 (定家 2 首と為家 3 首) の和歌のみである。定家・為家系列の歌人の歌、また、定家・為家やその系列の歌人によって編纂された勅撰和歌集に含まれた全ての歌は、琉歌人に定家・為家の影響を間接的に伝えたと言えるだろう。

次に、第 1~4 章で紹介した全ての和歌の改作琉歌や、その元となったと考えられる和歌の時代・歌集をまとめたデータは表で示し、包括的な結果を述べる。

4. 改作琉歌やその元となった和歌のまとめ

本論の第 1~4 章では、和歌の改作琉歌を 93 首紹介した。その歌数は、各章ごとに重複している歌を除く数となっている。それらの改作琉歌の内訳は、52 首 (56%) が特定の歌人によって詠じられたものであるのに対し、残りの 41 首 (44%) が読み人知らずの歌であることが判明した。つまり、特定の歌人によって詠まれた歌数とそうでない歌数は、ほぼ半数に別けられていることが今回の調査で明らかとなった。この結果から、改作琉歌は初期には特定の歌人に詠まれたとしても、時代が流れるに従い、大衆化する傾向を見せていることが言える。

それら改作琉歌の元となった和歌数は、重複歌を除けば、105 首ある可能性を指摘した。この 105 首の和歌を初出している時代で区別すると、以下の通りとなる。

- 1) 鎌倉時代 : 41 首 (39%)
- 2) 平安時代 : 27 首 (26%)
- 3) 室町時代 : 20 首 (19%)
- 4) 江戸時代 : 17 首 (16%)

即ち、最も多くの和歌は鎌倉時代に初出している。そして二番目に多いのは、平安時代に生まれた和歌である。続いては、室町時代の和歌であり、最後に最も数少ないのは江戸時代初出の和歌である。第 1~4 章である各章ごとにそれぞれの時代区別のデータに若干の違いが見られても、総合的なデータをまとめ

た結果は、鎌倉時代や平安時代の初出の和歌が最も多いことが判明した。

また、それらの和歌 105 首の中から、38 首が勅撰和歌集に見られ、9 首が勅撰和歌集の選歌資料に含まれており、4 首が物語に見られる和歌である³⁵。つまり、105 首の中から、51 首（49%）が当時の有名な歌書に含まれている歌であることが明らかとなった。琉歌人は、改作琉歌の元にした和歌の少なくとも半数を、当時の有名な歌書から選んだことが分かる。この結果は、那覇の琉球士族が主に学んだ歌書についての記録を、強く裏付けるものとなると言えるだろう。また、改作琉歌の元となったと考えられるこの 105 首中に、藤原定家（3 首）、藤原為家（6 首）や頓阿（6 首）によって詠じられた和歌も見られ、これらの 15 首は 105 首中に 14% を占めている。

それでは、改作琉歌を詠じた歌人は、どの和歌集を主に参考にしたのであろうか。「面影」「影」「春」「夏」「秋」「冬」を詠み込んだ改作琉歌、また『琉歌全集』の「節組の部」や『琉歌全集』の「吟詠の部」に含まれた改作琉歌やその元となった和歌に関する詳しいデータを、各表ごとに次ページ 211～219 で提示する。なお、それらの表は、今まで紹介した改作琉球 93 首の元となった和歌 105 首が含まれている全ての和歌書を示している。表の説明は以下の通りである。

- 改作琉歌の「歌番号」の覧には、歌番号の前に Z 或いは T が表示されている。Z は、『琉歌全集』に含まれている琉歌のことを意味し、T は、『琉歌大成』に含まれている琉歌である。例えば、Z244 という歌番号は、『琉歌全集』に含まれている 244 番歌を示している。
- 基本的に、改作琉歌の元となった和歌は 1 首と考えられるが、場合によって改作琉歌の元となった和歌は 1 首のみならず、異なる 2 首、3 首の場合も考えられる。本論ではそのような和歌を図 1、図 2 や図 3 で提示した。改作琉歌の元となった可能性のある和歌が 1 首以上考えられる場合には、表の中では次のように示した。第 1 の可能性のある和歌（本論の図 1 の和歌）を●で示し、第 2 の可能性のある和歌（図 2 の和歌）を▲で示し、そして第 3 の可能性のある和歌（図 3 の和歌）を■で示した。このように、例えば Z1491（『琉歌全集』の 1491 番歌）の行に●、▲や■という記号があれば、この 1491 番歌がそれぞれ異なる 3 首の和歌を改作した可能性を示している。なお、行内に書いてある同じ記号（例えば●という記号）は、何回現れても、それぞれ異なる歌書に含まれた同じ和歌を意味する。

³⁵ この歌数は、重複歌集を除いている歌数であるので、例えば 1 首の和歌が勅撰和歌集と歌物語に同時に含まれている歌であった場合に、勅撰和歌集に見られる 1 首として数え、歌物語の歌数を 0 首とする。

面影を含んだ琉歌	改作 琉歌	「面影」を詠み込んだ改作琉歌の元となった和歌の歌書																						
		平安時代			鎌倉時代										室町時代				江戸時代					
	歌 番 号	大 和 物 語	宇 津 保 物 語	落 窪 物 語	沙 弥 蓮 愉 集	秋 風 集	続 古 今 集	歌 枕 名 寄	風 葉 集	為 家 集	続 門 葉 集	拾 遺 愚 草	新 後 撰 集	玉 葉 集	後 二 条 院 御 集	歌 合 正 安 四 年	草 根 集	藤 川 五 百 首 鈔	雪 玉 集	新 後 拾 遺 集	新 葉 集	新 明 題 集	鳥 の 迹	類 題 集
Z38				●																				
Z148	▲	▲	▲		▲	▲	▲	▲														●		
Z245																						●		
Z388									●															
Z857										●														
Z1137																●								
Z1289																							●	
Z1828					●	●					●													
Z1865																	▲	▲				●		
Z2055												●										▲		
Z2143													●	●	●					▲	■			●
合計	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1

影を詠み込んだ琉歌	改作琉歌	「影」を詠み込んだ改作琉歌の元となった和歌の歌書																												
		平安時代									鎌倉時代											室町時代			江戸					
	風情集	狭衣物語	後拾遺和歌集	関白大臣歌合	俊頼髓脳	袋草紙	童蒙和歌抄	後六々撰	古本説話集	栄花物語	無名草子	時代不同歌合	十訓抄	古今著聞集	沙石集	歌枕名寄	世継物語	続千載和歌集	建保名所百首	拾遺愚草	夫木和歌抄	六百番歌合	新撰和歌六帖	為家集	為家千首	白河殿七百首	頓阿句題百首	明題和歌全集	題林愚抄	類題和歌集
Z57	●																													
Z907		●																												
Z1135																														
Z2356			●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●															
Z62									●																					
Z217																●	●	●	●	●										
Z1475																			●		●						●	●	●	
Z265																					●		●							
Z2536																														
Z128																								●						
Z2902																										●				
Z2958																														
Z1793																										●	●	●	●	
Z229																										●				
合計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2

春を詠み込んだ琉歌	改作琉歌	「春」を詠み込んだ改作琉歌の元となった和歌の歌書(2の1)																												
		平安時代												鎌倉時代								室町時代			江戸					
	古今和歌集	新撰和歌集	宗于集	古今和歌六帖	深窓秘抄	和漢朗詠集	三六人撰	中宮亮重家朝臣家歌合	深養父集	奥儀抄	和歌十体	伊勢物語	後拾遺和歌集	躬恒集	古来風体抄	俊成三六人歌合	定家八代抄	新時代不同歌合	桐火桶	家隆卿百番自歌合	壬二集	夫木和歌抄	新勅撰和歌集	新古今和歌集	玉葉和歌集	明題和歌全集	題林愚抄	菊葉和歌集	類題和歌集	
Z76	●	●	●	●	●	●	●	●						●	●	●	●	●												
Z83																														
T2954																														
Z235	●			●					●	●	●					●			●	●	●					●	●		●	
T3670											●											●								
Z314												●																●		
Z890																														
Z1459				●									●										●							
Z1419																						●			●	●		●		
Z1078																								●	●	●		●		
合計	2	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1	3	3	1	3	

春を詠み込んだ琉歌	改作琉歌	「春」を詠み込んだ改作琉歌の元となった和歌の歌書（2の2ー続き）														
		鎌倉時代			室町時代									江戸時代		
	新勅撰和歌集	拾遺愚草	夫木和歌抄	続草庵集	頓阿勝負付歌合	風雅和歌集	永享百首	春霞集	雪玉集	明題和歌全集	題林愚抄	浦のしほ貝	類題和歌集	漫吟集	為村集	
Z244	●															
Z1448				●								▲				
Z1588		●	●			●				●	●		●			
T3682					●											
Z1077							●									
Z1427								●								
T3644									●							
T870														●		
Z1084															●	
合計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

夏を詠み込んだ琉歌	改作琉歌	「夏」を詠み込んだ改作琉歌の元となった和歌の歌書																										
		平安時代										鎌倉時代										室町時代	江戸時代					
	古今和歌集	古今和歌六帖	後六々撰	深養父集	後撰和歌集	大和物語	和漢朗詠集	童蒙和歌抄	風情集	百人秀歌	百人一首	定家八代抄	定家十体	時代不同歌合	和歌用意条々	桐火桶	古来風体抄	瑩玉集	近代秀歌	八代集秀逸	今物語	十訓抄	詠歌一体	撰集抄	世継物語	井蛙抄	浦のしほ貝	為村集
Z1505	●	●	●	●					●	●	●		●	●	●											●		
Z1310																												
Z2320					●	●	●	●			●	●				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			
Z1508								●																			▲	
Z155																												●
合計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

秋を詠み込んだ琉歌	改作琉歌	「秋」を詠み込んだ改作琉歌の元となった和歌の歌書																													
	歌番号	平安時代					鎌倉時代										室町時代					江戸時代									
		古今和歌集	寛平御時后宮歌合	三十六人撰	貫之集	古今和歌六帖	新撰朗詠集	古来風体抄	俊成三十六人歌合	定家八代抄	近代秀歌	詠歌大概	百人秀歌	百人一首	三十番歌合	桐火桶	秀歌大体	嘉元百首	歌枕名寄	新勅撰和歌集	秋風和歌集	宝治百首	新千載和歌集	明題和歌全集	題林愚抄	頓阿百首A	尊円親王百首	類題和歌集	新明題和歌集	鳥の迹	衆妙集
み	T4167	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●	●	●																
込	Z1491	●			●	●	●		●					●	●	▲	■					■									
ん	T73		●															●													
だ	T4198																	●					●	●			●				
琉	Z1689																		●												
歌	Z1530																			●		●	●			●					
	Z1537																								●						
	Z1287																														
	Z1526																					●	●	●		●	●		▲		
	T4633																													●	
	Z530																												●		
	T2698																											●			
	合計	2	2	1	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	2	3	3	1	1	3	1	2	1	

冬を詠み込んだ琉歌	改作琉歌	「冬」を詠み込んだ改作琉歌の元となった和歌の歌書																
		平安時代					鎌倉時代							室町時代			江戸時代	
	歌番号	後撰和歌集	古今和歌六帖	和漢朗詠集	綺語抄	隆源口伝	堀河百首	古来風体抄	定家八代抄	玉葉和歌集	夫木和歌抄	為家集	嘉元百首	新後撰和歌集	歌枕名寄	六華和歌集	新千載和歌集	延文百首
Z1584	●	●	●	●	●		●	●	▲						●	■		
Z1568										●								
Z1581											●							
Z1579												●						
Z277						●							●	●				
Z1587																	●	
Z1574																		●
合計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

琉歌全集の最初の160首の中から の改作琉歌	改作琉歌	『琉歌全集』の「節組の部」の1~160番歌の中に見られる改作琉歌の元となった和歌の歌書																												
		平安時代							鎌倉時代							室町時代					江戸時代									
	続詞花和歌集	高陽院七番歌合	頭綱集	袋草紙	千載和歌集	林葉和歌集	金葉和歌集	宝物集	月詣和歌集	正治百首	歌枕名寄	万代和歌集	夫木和歌抄	千五百番歌合	宝治百首	白河殿七百首	河院撰政治家百首	御裳濯和歌集	現存和歌六帖抜粹本	新千載和歌集	新統古今和歌集	明題和歌全集	題林愚抄	新拾遺和歌集	草根集	正徹千首	類題和歌集	鳥の迹	為村集	
Z7	●	●	●	●					●	●	●	●							●	●										
Z25												●	●																	
Z28														●	▲						▲	▲					▲			
Z29					●	▲										■					●	●								
Z37																											●			
Z87																							●							
Z93						●											●				●	●				●		▲		
Z136	●				●		●	●		●								▲								●				
Z159																								●	●					
合計	2	1	1	1	2	1	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	3	3	1	1	1	3	1	1		

琉歌全集の二〇〇首の中からの改作琉歌	改作琉歌	『琉歌全集』の「吟詠の部」の1404～1604番歌の中に見られる改作琉歌の元となった和歌の歌書																									
	歌番号	平安時代					鎌倉時代												室町時代					江			
		金葉集	三井歌合	師兼千首	散木集	高陽歌合	玉葉集	宝治百首	夫木抄	正治百首	親清五女	続古今集	万代集	中古六歌	色葉和難	六百番合	拾玉集	新和歌集	三十番合	白河殿七	草庵集	風雅集	明題集	題林愚抄	新千載集	新拾遺集	類題集
Z1407						●																					
Z1411																				●							●
Z1417							●														●	●	●				●
Z1418								●	●																		
Z1421	●																										
Z1426							●			▲												●	●				●
Z1442											●	●															
Z1482		●	▲																					■			▲
Z1483	●			●	●		●						●	●								●	●				●
Z1551																				●							
Z1554						●		●							●	●						●					●
Z1555																	●										
Z1570						●																●	●				●
Z1577																		●									
Z1583								●											●			●	●				●
Z1593																						●			●		●
合計	2	1	1	1	1	3	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	7	5	1	1	9	

211～219 のページに提示した各表のまとめたデータからは、次のことが明らかとなる。

平安時代成立の歌集では、改作琉歌の元となったと考えられる和歌が多く見られるのは、次の歌集である。

- 1) 『古今和歌六帖』－6 首
- 2) 『古今和歌集』－5 首
- 3) 『金葉和歌集』と『和漢朗詠集』－3 首ずつ

したがって、琉歌人は改作琉歌を詠んだ際に、これらの平安時代成立の歌集を最も頻繁に参考にした可能性が指摘できるだろう。

また、当時の有名な平安時代成立の勅撰和歌集や物語の中から、次の歌書の和歌も学んだ可能性があるだろう。(括弧の歌数は、その歌集に含まれている改作琉歌の元となった可能性のある和歌の数である。なお、それぞれの異なる歌集の中に同じ和歌も見られる)。

- **勅撰和歌集**：『古今和歌集』(5 首)、『金葉和歌集』(3 首)、『千載和歌集』(2 首)、『後撰和歌集』(2 首)、『後拾遺和歌集』(2 首)
- **物語**：『大和物語』(2 首)、『宇津保物語』(1 首)、『落窪物語』(1 首)、『狭衣物語』(1 首)、『伊勢物語』(1 首)、『栄花物語』(1 首)

鎌倉時代成立の歌集の場合は、改作琉歌が詠まれた際に、主に学ばれたと考えられる歌集は以下の通りである。

- 1) 『夫木和歌抄』－10 首
- 2) 『定家八代抄』－7 首
- 3) 『玉葉和歌集』－6 首
- 4) 『新勅撰和歌集』、『宝治百首』や『歌枕名寄』－5 首ずつ
- 5) 『桐火桶』と『拾遺愚草』－4 首ずつ
- 6) 『続古今和歌集』、『為家集』、『世継物語』や『秋風和歌集』－3 首ずつ

また、当時の有名な鎌倉時代成立の勅撰和歌集、その選歌資料や物語などの中から、琉歌人は、次の歌書を参考にした可能性がある。

- **勅撰和歌集**：『玉葉和歌集』(6 首)、『新勅撰和歌集』(5 首)、『続古今和歌集』(3 首)、『新後撰和歌集』(2 首)、『新古今和歌集』(1 首)
- **勅撰和歌集の選歌資料**：『宝治百首』(5 首)、『正治百首』(2 首)、『嘉元百首』(2 首)
- **物語**：『世継物語』(3 首)、『今物語』(1 首)
- 『為家集』(3 首)、『為家千首』(1 首)、『百人一首』(1 首)

室町時代成立の歌書については、主に学ばれた歌書として、次の歌書である可能性が高いと考えられる。

- 1) 『明題和歌全集』－19首
- 2) 『題林愚抄』－14首
- 3) 『新千載和歌集』－5首
- 4) 『新拾遺和歌集』、『風雅和歌集』、『草根集』や『草庵集』－2首ずつ

また、当時の有名な歌書の中から、次の歌書が参考になったものとして挙げられる。

- 勅撰和歌集：『新千載和歌集』（5首）、『新拾遺和歌集』（2首）、『風雅和歌集』（2首）、『新続古今和歌集』（1首）、『新後拾遺和歌集』（1首）
- 選歌資料：『永享百首』（1首）、『延文百首』（1首）
- 頓阿の歌書：『草庵集』（2首）、『続草庵集』（1首）、『井蛙抄』（1首）、『頓阿句題百首』（1首）、『頓阿勝負付歌合』（1首）、『頓阿百首』（1首）

江戸時代成立の歌書に関しては、琉歌人は主に参考にした可能性が高いものは以下の通りである。

- 1) 『類題和歌集』－22首
- 2) 『新明題和歌集』－6首
- 3) 『鳥の迹』－4首
- 4) 『為村集』－3首
- 5) 『浦のしほ貝』－2首

以上のことを踏まえ、琉歌人は和歌を琉歌へ改作した際に、最も頻繁に参考にした歌書は、江戸時代成立の『類題和歌集』（22首）、室町時代成立の『明題和歌全集』（19首）や『題林愚抄』（14首）、そして鎌倉時代成立の『夫木和歌抄』（10首）や『定家八代抄』（7首）である可能性が高いと推定できる。

既述のように、改作琉歌の元となった和歌は、鎌倉時代と平安時代初出の和歌が最も多く、その殆どが当時有名な勅撰和歌集や物語などに含まれている歌である。琉歌人はそれらの和歌を平安時代や鎌倉時代成立の勅撰和歌集などから学んだ可能性もあり得るが、むしろ主に『類題和歌集』、『明題和歌全集』や『題林愚抄』のような室町時代や江戸時代成立の歌書を参考にした可能性が高いのではないかと考えられる。なぜならば、それらの歌書に含まれている改作琉歌の元となった和歌の殆どが、様々な勅撰和歌集の和歌と重なっているからである。様々な勅撰和歌集に見られる和歌がまとめられた『類題和歌集』など

のような一つの歌集のほうが、改作琉歌を詠む際に参考にするのは便利だったのではないかと考えられる。

また、改作琉歌を詠んだ琉歌人は、平安・鎌倉時代成立の勅撰和歌集より室町や江戸時代成立の『明題和歌全集』や『類題和歌集』等を主に参考にしたことを、あくまでも可能性としてのみ指摘するにとどまるのに対し、次の歌集については、確実に参考にしたことが指摘できる。琉歌人によって学ばれたと考えられる和歌集は、室町時代成立の頓阿の歌集や江戸時代成立の『新明題和歌集』、『鳥の迹』や『浦のしほ貝』である。これらの歌集に含まれる改作琉歌の元となったと考えられる和歌は唯一その歌集のみにあり、他の歌書には見られないのである。

本研究では、先行研究でも指摘されているオモロの改作琉歌 3 首に対し、和歌の改作琉歌を 93 首指摘できた。さらに、表現に関しては、琉歌と和歌の共通点が琉歌とオモロの共通点より多くあることが判明した。この結果は、琉歌の成立論にも関わるのではないかと考えられる。本章の最後に和歌から琉歌への流れ込みに関する一考察を展開したい。

5. 和歌から琉歌への流れ込みに関する一考察

既述の通り、琉歌は主に形式の側面から、オモロに由来している説が現在の通説となっている。しかし本研究では、琉歌の表現に関してはオモロより和歌の影響のほうが大きいことが判明した。その結果を踏まえ、琉歌はオモロの形式から影響を受けたとしても、表現の上では和歌に大きく影響され、琉歌として最終的に誕生したのではないかと推定できる。そのため、ここでは、和歌から琉歌への流れ込みに関する一考察を進めたい。

和歌から琉歌への流れ込みに関する考察は、主に表現の研究結果に基づくものである。第 1～4 章で対象にした琉歌の中から、オモロの改作琉歌を 3 首のみ指摘でき、それらの 3 首は全て従来の先行研究にも指摘されている。それに対し、和歌の改作琉歌は、93 首指摘でき、さらに、その殆どの例はこれまでに先行研究で取り上げられていない。調査対象の琉歌 742 首の中に、オモロの改作琉歌は 1%にも及ばないのに対し、和歌の改作琉歌は 12.5%を占めていることが明らかとなる。

さらに、和歌の改作琉歌のみならず、和歌の句と非常に似ている 1・2 句程度を有する琉歌も多く、改作琉歌の歌数を大きく上回る。さらなる精密な調査が必要であるが、これまでの調査では、とりわけ「春」「夏」「秋」「冬」を詠み込んだ琉歌の中で、琉歌の全句の半数は和歌の句に似ていることが判明した。表現に関する琉歌と和歌の共通点は、決して単なる偶然ではないだろうと考え

られる。

また、琉歌は、基本的に首里方言で書かれており、「琉歌」という名称は「和歌」という歌に対する名称であることはすでに述べた通りである。外間(1965)も「叙情詩としての発生基盤は中央にあり、その担い手は、貴族化した首里士族階層の人達であったはずである (p.24)」と述べている。さらに、「首里士族の貴族的思想の中で開花したウタは、整形的な詩形(文学性)と、三味線の律動(音楽性)を伴って地方に浸透し、庶民性に結びつくことによって叙情的世界の裾野を大きく広げることになった (p.25)」とも加えている。

したがって、琉歌は、和歌や和文学を意識していた首里王府の士族の間で最初に誕生し、時代が流れるにつれて一般の庶民の間で広がったのではないかとと言えるだろう。

琉歌は、和歌と違い、基本的に^{サンシン}三線によって伴奏し唄われる歌である。和歌は三味線と結びついていないが、1572年頃の戦国武将の様子が描かれている『利家夜話』の中から「新来の楽器〈三味線〉と当時流行の歌謡である小唄が結びついていたことがわかる」(池宮 1976、p.166)(〈 〉内は筆者加筆による)。

三味線は琉球から大和へ伝えられたと考えられている。その頃、琉球と大和の士族の交流も頻繁に行われていたと考えられる。当時の琉球王国の中でも三線が歌と結びついていたことは明らかであるが、「そのウタが琉歌形式であるという保障はない」(前掲、p.168)のである。したがって、三線の伝来に続いて、大和の交流の中で小唄や和歌を意識していた首里士族が、当時のウタを洗練させ、和歌等の表現を詠み込み、琉歌を生み出したのではないかと推定できる。このような琉歌は次第に田舎にも浸透し、最終的には一般の庶民の間にも広く歌われ、和歌と離れた新しい琉歌も詠まれるようになったのではないだろうか。

庶民の代表的な歌人としては、恩納なべが挙げられる。伊波(1975)は、「彼女の歌はすべてかういふ風に調の高いものばかりであるが、和歌の影響を受けなかった時代の琉歌は、大方かういふものであった (p.43)」と述べているように、恩納なべの生きていた時代について和歌の影響を受けていないものとする。しかし、恩納なべの生没については未詳であるものの、「詠歌の背景を推察するに尚敬王(1713-1751)、あるいは尚穆王(1752-1794)時代の人物と思われる」(上原 2010、p.42)ため、島津氏の琉球入りの100年以上の後に生きていたと考えられる。したがって、その時代にはすでに和歌の影響が琉球にも確実に伝わっていた時代となる。一般の庶民の間では、和歌の影響を受けた琉歌とはかけ離れた琉歌が詠まれたとしても、琉歌は和歌を意識していた首里士族の間で、最初に洗練され誕生した推定には反していないと考えられる。中国からの冊封使を芸能で歓待することを重んじた琉球王朝の文化の中で生まれた御冠

船踊をはじめ、玉城朝薫によって作られた「組踊」に続き、琉歌も首里王府で冊封史を歓待するために披露されるものとなった。中国の冊封史をもてなす際に、大和の芸能を元にして誕生した「組踊」と同様、琉歌も和歌の影響を受け首里王府で洗練され、誕生したのではないかと推定できる。昔から中国の文化と大和の文化を受け入れ、チャンプルにしながら独自の文化を生み出した琉球王国は、元々存在していたオモロの形式を元に、和歌の表現から影響を受け、最終的に沖縄文化の独自の歌である琉歌を作り出した可能性も考えられるだろう。基本的に不定型とされているオモロや宮古・八重山の民謡に対し、和歌と同様、定型した形式を持つ琉歌は、表現の観点からも和歌との共通点が多いことは偶然とは言えないだろう。

6. おわりに

本章では、第1～3章で指摘した「面影」「影」「春夏秋冬」を詠み込んだ改作琉歌に加え、『琉歌全集』の「節組の部」の1～160番歌と「吟詠の部」の1404～1604番歌を対象に新たな和歌の改作琉歌を指摘した。

また、第1～4章で指摘した和歌の改作琉歌をまとめたデータから次のことが明らかとなった。重複歌を除けば、第1～4章の調査対象にした琉歌742首中に、オモロの改作琉歌3首(0.6%)に対し、和歌の改作琉歌が93首あり、12.5%を占めている。それらの93首のおよそ半数(52首)は特定の歌人によって詠まれた歌であるが、残りのおよそ半数(41首)は読人知らずの琉歌である。このように、琉歌は最初に特定の人物によって詠まれたとしても、時代の流れにつれて大衆化したと言えるだろう。

また、93首の改作琉歌の元となった可能性のある和歌を105首指摘した。それらの105首の中に最も多いのは、鎌倉時代初出の歌であり、41首で39%を占めている。二番目に多いのは平安時代初出の和歌(27首、26%)である。続いて改作琉歌に三番目に大きい影響を与えたのは、室町時代初出の和歌(20首、19%)であり、そして最後には江戸時代初出の和歌(17首、16%)が挙げられる。また、当時に有名であった勅撰和歌集、その選歌資料や物語に含まれる和歌も少なくとも51首見られ、およそ半数を占めている。中には、藤原定家(3首)、為家(6首)や頼阿(6首)の和歌も数多く見られる。このような結果は那覇士族が学んでいた歌集に関する記録を裏付けているものとなっている。

琉歌人は具体的にどの歌書を参考にしたかといえ、可能性として最も高いのは、平安時代成立の『古今和歌六帖』、『古今和歌集』、『金葉和歌集』や『和漢朗詠集』、鎌倉時代成立の『夫木和歌抄』、『定家八代抄』や『玉葉和歌集』、室町時代成立の『明題和歌全集』、『題林愚抄』、『新千載和歌集』および江戸時

代成立の『類題和歌集』などが挙げられる。また、主な勅撰和歌集、その選歌資料や物語に含まれている和歌も数首指摘した。

歌集に含まれた改作琉歌の元の和歌の歌数を考慮すると、参考にされた可能性の最も高い歌書は、改作琉歌の元の和歌を 22 首含む江戸時代成立の『類題和歌集』や室町時代成立の『明題和歌全集』(19 首)と『題林愚抄』(14 首)であると考えられる。この結果からは、前述のように改作琉歌に最も影響を与えたのは平安と鎌倉時代初出の和歌ではあるが、琉歌人はその和歌をおそらく室町時代や江戸時代の歌集から学んだ可能性が高いと推定できるだろう。また、他の歌書には見られない和歌を含んでいる歌集もあることが本調査で明らかになったため、琉歌人はそれらの歌集を確実に学んだのではないかと結論付けられる。他の歌書に見られない和歌を含んだ歌集は、室町時代成立の頓阿の歌集である『草庵集』、『続草庵集』、『頓阿百首』、『頓阿句題百首』や江戸時代成立の『新明題和歌集』、『鳥の迹』や『浦のしほ貝』が挙げられ、それらの歌集は琉歌人によって確実に参考されたと考えられる。

以上のことを踏まえ、琉歌人は琉歌を詠んだ際、オモロより和歌の表現から影響を受けたと考えられる。表現の観点から、オモロより和歌のほうからの影響が大きく、オモロと違い、和歌と同様に定型を持つ歌である琉歌は、和歌からの流れ込みの下で首里貴族によって洗練され、誕生した可能性も考えられる。中国からの冊封使を芸能で歓待することを重んじた琉球王朝の文化の中で、日本芸能を元にして作られた玉城朝薫の「組踊」と同じように、琉歌も、冊封史を歓待するために和歌を意識していた首里士族によって最初に詠まれ、首里城で披露されるようになったのではないだろうか。そして、最初に中央の貴族によって詠まれたこのような琉歌は、次第に地方にも浸透し一般庶民の間にも親しまれる歌となり、琉歌独特の表現を段々詠み込むようになった現在の琉歌まで生長してきた、という考察も可能である。

第5章

オモロと琉歌における「大和」のイメージ

1. はじめに

オモロや琉歌は、両方とも沖縄本島で生まれ、オモロは1531年から1623年にわたり首里王府によって編纂された叙事歌であり、琉歌は正確な誕生年次について未詳でありながらも、遅くとも17世紀末には確実に存在していた抒情歌である。また、既述のようにオモロと琉歌との関係についても、琉歌はオモロを母体にして生まれたという説があり、琉歌とオモロが深い関係にあることは従来の先行研究で指摘されてきた。

こうした、時代的にも地理的にも互いにあまり離れていないオモロや琉歌の中に、「上り／^{のぼ}上て」という表現が数多く見られるが、これは物理的に高い場所へ移動するという当然の意味以外に、身分の高い人物（王様・按司等）や神々がいらっしゃる所へ参るという意味を表す場合もある。「上り／^{のぼ}上て」の全用例中、「大和」へ行くことを歌ったものも見られる（オモロで約11%、琉歌で1.4%を占める）。歴史的・文化的観点からも、重要な場所へ行く意味を含んだ「上り／^{のぼ}上て」が「大和」と連結しているところから、大和と国際関係を維持していた当時の琉球王国の人々にとって「大和」が重要な位置にある場所として認識され、高く評価されていたのではないかと推定できるだろう。しかし、オモロと琉歌における「大和」のイメージは、高く評価されている存在のみとして捉えているのか、それとも違うイメージも有するものなのであろうか。

本章では、オモロや琉歌の中で当時の「大和」はどのようなイメージで捉えられ、描かれているのかについて、考察を進めたい。「大和」という表現を含んだすべての琉歌とオモロを対象に調査し、両歌における「大和」のイメージが共に同じものであるのか否かという点を、本章で明らかにしたい。

また、「大和」のイメージという問題を扱う際、当時の歴史的・政治的な背景も関わることもあり、広い範囲では歴史的・社会的な状況もこの問題と一緒に考察する必要があると考えられる。しかし、ここでは歴史的・政治的な背景の詳しい考察は将来の研究課題とし、発想論や表現論という観点から、「大和」がオモロと琉歌という琉球文学の中でどのようにイメージされ、とらえられていたのかという点に限って考察する。その理由は先行研究（嘉味田1968、1977）においても、琉球文学における様々な表現の発想源となる精神等について、すでに考察が進められているものの、オモロや琉歌における「大和」という表現

のあり方については、いまだ指摘がされていないからである。そこで、「大和」という表現がオモロと琉歌の中で有する文学的な発想(イメージ)を明かにし、この表現に関するオモロと琉歌の共通点や相違点について報告し、分析したい。

なお、本論で用いたテキストは、『おもろさうし上・下』と『琉歌全集』である。またそれに加えて、『琉歌大成』も活用した。

2. オモロにおける「大和」のイメージ

「大和」という語は、仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞典・総索引・第2版』(1978)に、「広く日本本土を意味する」と記されている。大和およびそれと関連する人物または事物を歌ったオモロは、『おもろさうし』に、全1554首中21首見られる。ただし、それらの中で日本本土を意味する語は「大和」だけでなく、別に二つの違う語も見られる。一つは、「大和」が歌われる同じオモロの7首に見られる「やしる(山城)」で、同辞典によると、「京都の山城をいう。『る』は『ろ』のおもろ表記」と解説されており、「山城」は「大和」の対語である。また、別の1首のオモロには、「にほんうち(日本内)」という表現も見られ、同辞典によると、「日本中」という意味を持つ語である。『おもろさうし』の中には、「大和」が20首、「山城」は「大和」と対語関係をなす7首に見られ、そして「日本内」は1首のみに見られる。以上から、日本本土を具体的に歌ったオモロは、合わせて21首あることになる。

それでは、『おもろさうし』に見られる「大和」は、表現上どのようなイメージで歌われているのかという点について、以下に報告する。

「大和・山城・日本内」を歌った21首のオモロは、その内容によって整理・分類すると、次の四つのグループに分けることができる。

- ① 祝い(賛美)の歌 → 12首で57.1% (巻7-377、巻8-457、巻11-582、606、620、巻14-988、1018、巻15-1082、巻16-1144、巻17-1185、巻21-1426、1436)
右の①祝い(賛美)の歌はさらに二つのグループに分けることができよう。
- ① A 大和へ友好的な傾向を表す歌 → 6首(巻8-457、巻11-582、620、巻14-988、巻15-1082、巻21-1436)
- ① B 大和へ競争心を表す歌 → 6首(巻7-377、巻11-606、巻14-1018、巻16-1144、巻17-1185、巻21-1426)
- ② 反感の歌 → 5首で23.8% (巻3-93、96、97、巻14-1027、巻20-1364)

③ 「上て」の歌 → 3首で14.3% (巻10-538、巻11-637、巻21-1497)

④ 祈りの歌 → 1首で4.8% (巻13-783)

まず計3首の例のある③「上て」と歌われるオモロから取り上げる。これらの3首を観察すると、次の二つのことがわかる。第一に、3首のオモロは共に大和旅に買い物をしに行くことを描写していることである。特に、巻10-538のオモロを見てみると、当時貿易や造船術が発達していた様子がうかがえる。伊波普猷(1975)もこの歌を取り上げているテキストの中で造船術を予想させることについて述べている。また、第二にわかることは、「大和」と呼応している動詞として「上る」動詞が使われていることである。この場面で歌われる動詞「上る」には二つのニュアンスがあると考えられるが、まずその一つ目は、「大和」や「山城」を目的地として、「上て」と歌うオモロは、「地方から都へ行く」という意識の現れであるため、これらは沖縄本島にある琉球王国が地方であると認識した上での表現と言える。地方は文化的には、より低い所であり、都である「大和」や「山城」を文化的に高い所と認識した結果の表現である。これら3首のオモロから、当時の琉球王国と大和の関係のあり方の一端が知られるが、要するに社会的・文化的観点から、琉球王国は「下」、大和は「上」の位置にあったことがうかがえる。特に、薩摩藩の琉球への侵入(1609年)以降、両国の上下関係は明確なものとなった。また、動詞「上る」の二つ目のニュアンスとして考えられるのは、「地方から都へ行く」のではなく、ただ単に「北へ上る」、つまり「北上」することである。南島である琉球へ行く時に、「南下」する概念があるのに対し、逆に琉球から北方にある「大和」へ行く時に「北上」する概念があったのかもしれない。そうすれば、動詞「上る」は、上下関係に関する上述の一つ目のニュアンスと異なり、ただ単に北上するという二つ目のニュアンスも考えられ、かなりニュートラルな意味となる。筆者は、両方のニュアンスを認めつつも、一つ目のニュアンスを主張したい。なぜなら、3首のオモロの中では「大和」が貿易対象として歌われているため、貿易相手を友好的に思い、高く評価したと考えるほうが無理がないのではないかと考えられるからである。さらに、「上て」と歌われるオモロは、残りの三つのグループのオモロと比べて、「大和」に対する批判や賛美の発言を含まない点で異なる。すなわち、③は無難な内容のオモロであるため、これら3首に見られる「上て」のオモロはニュートラルもしくはプラス(友好的な)イメージとして捉えられよう。

「大和」を歌ったオモロの中で最も例の多いのは、①祝い(賛美)のオモロである。賛美される対象は一体何かといえば、琉球の権力者である国王や按司、それに神女、さらにグスクと呼ばれる城や神祭りなどの神事である。そして、

こうしたオモロの中には、次の二つの傾向も見られる。

その一つ目は、大和に対する友好関係を表現している点である。このような雰囲気を醸し出すオモロの例には、大和から来たり大和へ向かったりする船を祝福するもの、また大和の人たちに琉球王国で行われた祭りを見せたいと歌うものが見られる。つまり、そうしたオモロを見ている限り、大和と琉球王国の関係は良好な関係のように見える。さらに、これらのオモロも1首ずつ詳しく見れば、殆どの場合は貿易や造船を予想させる場面が浮かび上がり、貿易相手である琉球王国と大和との関係は友好的な関係にあるように歌われている。こうしたオモロは、①祝いのオモロの①Aの6首に見られ、祝いのオモロ全体の半数を占めている。

二つ目は、①祝いのオモロの①Bの6首（同グループの半数）であるが、これらは①Aとは異なる傾向が見られる。これらのオモロは、琉球の国王、按司、神女や地名を賛美し、その評判が大和にまでも鳴り轟くことを歌ったり、大和の有名な人物や地名に喩えたりもしている。こうした歌い方は、大和を誉め称え、大和への憧れを表しているとも解釈できる。しかし筆者は、琉球の名所や人物を大和にたとえることを通して、表現の上で大和の優れたところを賞美称賛しているというだけでなく、琉球を大和と重ね合わせることで、大和と同様に非常に優れた国家であるという、誇り高きプライドやある種の競争心や張り合う気持ちを示しているように感じられる。なぜかといえば、次に論じる2.と3.で見る琉歌の例からも明らかのように、大和への憧れを表す歌（琉歌のBグループ）は、ただ単に「大和」のことを賛美し、その中で「沖繩」（琉球）への賛美をわざわざ言及する必要はないからである。逆に、「沖繩」を賛美する時に、「大和」との比較が目立ち、上下関係にある「沖繩」は「大和」と同様に優れ、その評判は「大和」まで鳴り轟け、「大和」の権力者にも知ってほしい、と歌われており、張り合う気持ちが明瞭に表現されていると言える。

①とは逆に、②の反感の歌は明らかに日本と対立する気持ちを歌ったオモロである。②は計5首あり、大和を臣下にする、大和の兵士をこらしめることや大和の軍勢を呪詛し退けることなどが歌われ、大和や大和の軍に対する敵意の意識が明確に表現されている。1609年の薩摩藩の琉球への侵入以降、両国の上下関係は明確なものとなり、琉球王国は正式に王府領と認められたものの、実際には大和（薩摩）の臣下のように扱われた状況は、矛盾を含んだ複雑な両国の関係を生み出した。このような複雑な関係は、②の反感の歌から最も明確に読み取れる。

なお、敵意とは正反対の、好意の気持ちをはっきりと歌ったオモロも見られるが、それは最も数少ない④の祈り歌の1首である。このオモロは大和から来た船頭が無事に帰国することを、神に祈っている様子を歌っている。

以上をまとめると、大和を詠み込んだ 21 首のオモロの中、主に貿易相手として描かれている大和に対する友好的な感情を歌うオモロは合わせて 10 首あり、47.6%を占める。それは③の「上て」のオモロ 3 首、①の祝いの歌の中の①A の大和へ友好的な傾向を表す歌 6 首や④祈りの歌の 1 首である。それとは逆に、大和に対する競争心や張り合う気持ち、および反感までの気持ちを歌うオモロは合わせて 11 首あり、52.4%を占める。これは大和に対して好意的な気持ちを表すオモロと比べて、ほぼ同数であることが明らかになった。それらのオモロは、②の反感を表す 5 首と、①の祝いの歌の中の①B の競争心の歌 6 首で、11 首である。

なお、「大和」の対語表現である「山城」という語を用いたオモロは、反感の歌 4 首および「上て」の歌 3 首にのみ見られ、日本への対抗心か、貿易相手としての日本との関係を表す。そして、「日本内」という表現も 1 首のオモロ（祝いの歌）に見られるが、それは日本に対する競争の気持ちを歌っている。

3. 琉歌における「大和」のイメージ

大和を取り上げた琉歌は、重複歌を除く 19 首ある。その内訳は、『琉歌全集』に「大和」の例が 11 首、「日の本（ひのもと）」が 1 首である。また、『琉歌大成』の琉歌には「大和」を歌う例が 7 首見られる。なお、オモロに例のある「山城」や「日本内」は琉歌には一切見られない。

それでは、琉歌の例をオモロと同様に以下、その内容面から整理・分類してみると次のようになる。

- 祝いの歌 → 8 首で 42.1%
- 祈りの歌（その中、「お上り」の歌 1 首含む） → 4 首で 21%
- 切ない歌 → 3 首で 15.8%
- 喜びの歌 → 2 首で 10.5%
- 滑稽な歌 → 1 首で 5.3%
- 反感の歌 → 1 首で 5.3%

この結果を見れば、琉歌はオモロと比較してより多くのテーマがあり、内容的に豊かで複雑なことがわかる。そこで、上記の分類法を一層シンプルな分類の仕方に改めると、次のようにまとめられる。

- A 沖縄を賛美する歌 → 4首で 21.1% (『琉歌全集』の 2636 番歌、『琉歌大成』の 24・2178・4466 番歌)
- B 大和を賛美する歌 → 4首で 21.1% (『琉歌全集』の 1651・1709・2756 番歌、『琉歌大成』の 4467 番歌)
- C 大和に対する反感の歌 → 1首で 5.2% (『琉歌全集』の 1524 番歌)
- D 個人の感情、若しくは航海に関する歌 (大和に対する感情は歌わない) → 10首で 52.6% (『琉歌全集』の 552・876・1183・1200・1637・1675・2104 番歌、『琉歌大成』の 1454・1630・2595 番歌)

上の分類結果から、大和に対する反感の気持ちを歌った琉歌はCの1首のみであることが分かる。その数は、大和へ反感を表す5首と、大和へ競争の気持ちを表す6首の計11首あるオモロと比べて、琉歌には1首しかなく、極めて少ない。また、琉歌には、大和の語を詠み込む中に、A沖縄を賛美している歌数と、B大和を賛美する歌数は共に4首あることがわかる。したがって、琉歌の場合は沖縄と大和をどちらも優れているように歌っており、一つの国だけを賛美するという際立った偏りが見られない。加えて、沖縄や大和に対する気持ちを表現せず、愛する妻や夫などに対する個人的な感情、または、沖縄の人々にとって関心の高い航海の安全に対して感謝や喜びの気持ちを表したDの歌は10首と多く、その数がAやBの賛美の歌数を大きく上回っている。航海の要素が歌われている点は琉歌のみならず、琉歌とオモロの共通点として挙げられ、航海というものが当時の沖縄の人々にとっていかに重要なものであったかが両歌からもうかがえる。しかし、航海の描写以外にDの琉歌のみに見られる個人感情の描写という点は、オモロとは異なる点であり、琉歌の特徴の一つであると言えよう。

なお、「日の本」は琉歌に見える唯一の表現であるが、その歌は完全に沖縄のことを称賛しつつ、「日の本」にまでも、その評判が届くようにと願っているのである。そして琉歌の「日の本」と、オモロの「日本内」という表現を含んだ歌は、もっぱら沖縄を賛美し、大和に対する競争の気持ちを表している点で、共通している。

4. 「大和」のイメージをオモロと琉歌で比較する

ここでは、これまでの調査結果を踏まえ、オモロと琉歌から伝わる「大和」のイメージを比較する。

最初に、沖縄を賛美するオモロと琉歌をそれぞれ1首ずつ紹介する。オモロの場合は、沖縄を賛美するものは、すべて①祝い(賛美)の歌に属している。

まず、そのオモロを1首示す。

こいしのがさしふとのぼらが節

一 かさすちやは

だりじゆ 鳴響め

見れば 水 廻て

又 真物ちやは

又 なごの浜に

又 なごのひちやに

又 大和ぎやめ

だりじよ 鳴響め

〔大意〕

かさす若按司、立派な若按司は、げにこそ鳴り轟け。穏やかななごの浜、なごの直地に、げにこそ鳴り轟け。大和までも、げにこそ鳴り轟け。若按司を見ると、水走るような美しい顔である。

(巻11・606)

このオモロは、「かさす」という沖縄の権力者(久米島の按司)を賛美する歌であるが、その評判が大和までも鳴り轟くようにと祈る場面が歌われる。「沖縄の評判は大和までも届くように」という祈願は、オモロだけではなく琉歌にも見られ、共通している。しかしオモロの場合は、沖縄の優れた人物や場所をいつも大和まで鳴り轟かせ、大和と同様に優れていると大和に喩えて歌っているのに対し、琉歌はそれだけの態度に止まることなく、中には「沖縄は大和より勝れている」と表現しているものもある。その琉歌を1首示す。

(歌の表記)

大和あんどわたが
色香よりまさて
島のめやらべの
しなりきよらさ

(歌の読み方)

ヤマトウアングッタガ
イルカユイマサティ
シマヌミヤラビヌ
シナリチュラサ

〈意味〉日本の姉さん達の色香よりも、島の女の子の方がぴったり合っ
てきれいだよ。

(『琉歌大成』・4466 番歌)

琉歌には沖縄を誉める歌が4首あり、決して少なくはないだろう。中には、

上記のように沖縄のことを大和よりも優れていると賛美する歌もあり、大和に対する強い競争心とも言うべき気持ちが現れたものも見られる。その一方で沖縄を賛美する歌だけでなく、大和自体を賛美する歌も同様に4首ある。オモロと琉歌の共通点としては、賞美される大和に沖縄を重ね合わせる点が指摘できる。ところが、大和のみを賛美する琉歌が見られるのに対して、そうしたオモロは一切見られない。オモロの場合、沖縄は大和と対抗・競争するものという意識が強かったことがうかがえる。琉歌の場合は、沖縄の賛美と大和の賛美がそれぞれ個別になされている点で、オモロとは異なる。このような特徴を、以下のオモロと琉歌で示すことができる。

あかのこがよくもまたもが節

一 ^{かつれん}勝連わ ^{なお}何にぎや ^{たと}譬ゑる

^{やまと}大和の ^{かまくら}鎌倉に ^{たと}譬ゑる

又 ^{きむたか}肝高わ ^{なお}何にぎや

〔大意〕

勝連は、肝高は、あまりに勝れていて何にか譬えようか。それこそ、大和の鎌倉に譬えるのだ。

(巻16・1144)

続いては、琉歌の例を挙げる。

(歌の表記)

名に立ちゆる大和
お上りや下り
おかれよしめしやいる
お願しやべら

(歌の読み方)

ナニタチュルヤマトウ
ウヌブリヤクダリ
ウカリユシミシエル
ウニゲシャビラ

〈意味〉評判の高い大和にいらっしゃるときは、お上りもお下りもめでたく無事にお努めをおすましなさるようお願い致しましょう。

(『琉歌全集』・1709 番歌・小祿按司朝恒)

上に示したオモロは、沖縄の有名なグスク(城)の勝連が賛美されていると同時に、勝連が大和の鎌倉にたとえられている。こうした歌い方は、大和に対する競争の気持ちを表していると読み取ることができよう。しかし、琉歌は大和を賛美しているが、沖縄には一切言及せず、単に大和を賛美するだけであるため、大和に対する対抗意識は薄く、ほとんど感じられない。ただ、沖縄を賛美する琉歌の中には、大和よりも優れている沖縄を歌ったものもあるため、

大和に対する競争の気持ちが琉歌に一切ないとは言えない。しかし、琉歌には大和を個別に誉めている例が存在するため、オモロよりも琉歌のほうが大和を寛大な気持ちで認めていると考えられる。

大和に対する琉歌の寛大さは、C「反感の歌」を見ても同様に理解できる。大和のことを歌ったオモロの中には、②「反感の歌」が5首もあり、23.8%というかなり高い割合を示しているのに対し、同様の分類を行った琉歌の中で、反感の琉歌は1首(5.3%)しか見られない。以下に、反感のオモロと琉歌を1例ずつ挙げる(琉歌は上述の1首のみ)。

きせのしが節

一 ^{かねぐすく}兼城のろの

^{まぶ}守りよ^{おとまさ}わる弟勝り

やぐめさ

^{やまといくさ}大和軍 ^よ寄せらや

〔大意〕

兼城ののろ神女が、国かねののろ神女が守り給う勝れた弟者よ、恐れ多いことだ。大和軍が寄せたならば、弟者が退けてくれることであろう。

(巻20・1364)

又 ^{くに}国かねてののろの

(歌の表記)

沖繩秋山や
紅に染めて
大和吉村の
お茶の遊び

(歌の読み方)

ウチナアチャマヤ
クリナイニスミティ
ヤマトウユシムラヌ
ウチャヌアスイビ

〈意味〉沖繩は秋の山が紅葉して真っ赤になっているように、血に染まって苦しんでいるが、大和人の吉村という人はお茶の遊びをして楽しんでいる。

(『琉歌全集』・1524 番歌)

オモロの反感の歌と琉歌の反感の歌は、その用例数という点だけで差がある訳ではなく、内容でも相違がある。反感のオモロでは、主に大和の軍や大和そのものに対して強い反発を表現している。それに対して、反感の琉歌の場合は、大和そのものより大和の特定の人物に対して抗議し訴えるものである。勿論、この琉歌で、風刺の対象となっている吉村という人物は大和の代表者として捉えてもおかしくないのも、これも大和そのものに対する不満が歌われている場

面と見なすこともできよう。

オモロには、大和に対する反感および競争心という気持ちが読み取れる歌が過半数を占める 11 首あるのに対し、琉歌には反感の歌が僅かに 1 首のみである。琉歌の場合、沖縄や大和を誉め称える歌がそれぞれ 4 首ずつ存在する。このオモロと琉歌の異なる歌い方には、以下の二つの理由があったと考えられる。

一つ目の理由は、両歌の作成時代の差であると考えられる。「大和」を取り上げたオモロは全て巻 3 以降の巻に含まれていることがこの調査で分かった。巻 3～22 が編纂された 1623 年という年は、1609 年に起こった薩摩藩の琉球侵入から十数年が経った時代であり、「大和」である薩摩藩の支配の影響に伴った複雑な感情が最も強かった時代であっただろう。そのため、オモロにもその反感や競争心の気持ちが強く表れたと言える。それに対し、琉歌はおそらく 18 世紀初め、オモロより 1 世紀ほど経過した時代に盛んに作られるようになったので、その時代にはすでに大和に対する反感の気持ちが薄まっていたと推察される。したがって、オモロと違い琉歌には反感の歌が 1 首のみという結果になったのであろう。

また、「大和」の異なるイメージの二つ目の理由としては、両歌のジャンルの違いという点があると考えられる。オモロは基本的にフォーマルな儀式の場で歌われ、群れの発想を表していながら呪術機能も果たしていた叙事歌であるのに対し、琉歌はインフォーマルな民間の個人の間で歌われ、個人の発想を表現している抒情歌であるため、こうした違いが生まれたのであろう。

最後に、琉歌とオモロのジャンルの差という特徴について、以下の用例を取り上げながら、もう少し詳しく述べたいと思う。

琉歌には、個人の感情を題材にした歌が数多く含まれており、大和を歌った琉歌の中にも、航海の描写も含め感情をストレートに表現した歌が 10 首あり、52.6%を占めている。さらに、祈りや祝いの歌の中でも相手に対する個人の期待、喜びなどが歌われている。一方、オモロには個人の感情に関する例はほとんど見られず、国王・神女に対する敬意や賛美のみが見られる。これは、神祭りの儀式の場における歌であることから当然の帰結と言えよう。こうしたオモロと琉歌の違いは次の例からも知られる。

きみがなし節

一 源河成り思ひや

せぢ玉ぐすく

大和の鬼る かに ある

又 意地気成り思いや

〔大意〕

源河成り思い様は、勝れて活気のある成り思い様は、霊力豊かな美しいぐすくを造って栄えている。大和の勝れた人のようにぞ、勝れているのだ。

(巻 17・1185)

「源河成り思い」は名護市源河^{げんか}の神女の名であり、このオモロは、その神女を賛美し、祈るものである。沖縄の人物が賛美されているものの、大和との比較を必ず歌うのがオモロの特徴である。ここで注目したい点は、このオモロは個人の感情に一切触れず、神女の賛美や敬意のみを表す。これは儀礼という場における歌い方であろう。

一方、琉歌には個人的な感情を歌ったものが多い。以下、琉歌の例を挙げ、その中で個人の感情を前者のオモロと対比したい。

(歌の表記)

今帰仁の城

にやへ高さあれば

里前まゐる大和

見ゆらやすが

(歌の読み方)

ナチジンヌグスイク

ニャフェタカサアリバ

サトゥメメルヤマトウ

ミユラヤスイガ

〈意味〉今帰仁城がもっと高かったら、背の君のいらっしゃる大和も見えるであろうに、見えるのは海ばかり惜しいことだ。

(『琉歌全集』・876 番歌)

これは妻による愛しい夫に対する気持ちを歌う場面であり、ひたすら個人の感情を歌う琉歌である。

オモロも琉歌もともに大和を歌っているが、オモロの場合は神女に敬意を払うために神女を大和の優れた人物に喩えているのに対し、琉歌のほうは夫のことを思い、夫がいる遠い大和が見えるようになりたいという、個人的感情を歌っている。こうしたオモロからは、大和との競争心が多少感じられるが、琉歌の詠み手である妻は夫を中心に考えており、大和に対する気持ちは夫がそこに

行っているの、夫を慕いつづける妻はただ大和を見たいという切ない気持ちを吐露しているだけである。そこには、大和に対する競争心や反感は一切感じられない。この琉歌から読み取れる感情は、ただ切ない思慕の情だけであり、もし大和に対して何らかの反感を持ったとしても、それは個人の気持ちに過ぎず、両国家間のレベルで考えられる感情までには及んでいない。

5. おわりに

調査の結果、大和のことを取り上げたオモロと琉歌の数は、ほぼ同数であることが判明した。ほとんどの歌で、「大和」という語が使われているが、オモロには「山城」と「日本内」、琉歌には「日の本」という単語も、それぞれ独自に見られた。今回、調査対象としたオモロと琉歌では、同じ「大和」という語を用いているが、そのイメージについては、違いのあることが明らかとなった。

まず、「大和」と「上て」を歌ったオモロからうかがえる「上下関係の中で上にある大和の高い評価」というイメージは、決してすべてのオモロの中で同じものとはなっていないことが分かった。オモロの場合は、大和に対する反感や競争意識が表現されたものも多く、大和のことを取り上げたオモロの中で、半数以上を占めていることが判明した。そうしたオモロを見ると、沖縄が誉められると同時に、大和と重ね合わせて歌われるパターンが目立つ。

一方琉歌には、大和に対する反感の歌は1首しか見られず、その他に沖縄も大和もそれぞれ個別の歌を以って賛美されており、その数も4首ずつと同数であり、沖縄にも大和にも偏っていないことがわかった。また、残りの10首の琉歌は、単に航海の安全を喜ぶ様子や個人的な感情を歌っている。個人的な感情の描写という点は、主に琉球王国の国王、按司や神女を賛美する儀礼的歌謡のオモロには見られない抒情歌の琉歌の特徴である。

つまり、オモロは基本的にフォーマルな儀式の場で歌われ、群れの発想を表しているのに対し、琉歌はインフォーマルな民間の個人の間で歌われ、個人の発想を表現しているため、こうした結果になったのであろう。

また、オモロと琉歌の作成時代も考慮すれば、1609年に起こった薩摩藩の琉球入りの直後の1623年に編纂された巻3～22のオモロには大和に対する反感の感情が表れるのも自然であろう。それに対し、1世紀ほど経った時代に作られた琉歌にはそのような気持ちはすでに薄らいでいることが分かる。

結論としては、オモロの中の大和のイメージは、歴史的・政治的な背景によるものであり、反感の歌が5首も現れたと推察することができる。しかし、琉歌の場合は大和との歴史的・政治的な部分をほとんど持ち込まなかったのも、主に個人の感情や、安全な航海、無事に帰港する様子を表現した歌(D)が10

首あるのに対して、反感の歌はわずか1首という結果になったのであろう。

【付記】

本章は、「若手研究者論文」として掲載予定である「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」（『国際日本学』第11号、2013年）を母体とし、加筆修正したものである。

終章

沖縄本島で生まれた琉歌（抒情歌）は、従来の研究で沖縄オモロ（叙事歌）に由来している歌であるという考え方と、大和の文化、特に小唄の影響を受けながら誕生した歌であるという考え方の二つの説が出されている。現在、琉歌はオモロの影響を受け成立したという説が通説となっているが、筆者は表現の観点からは琉歌の起源はオモロではなく、琉歌と同じ抒情歌である大和の和歌に由来しているという見解に達した。

そう考える理由は、琉歌発生論をオモロや小唄に求める従来説は、主として歌の形式面を重視し展開しているが、表現の観点からは徹底的な調査がまだなされておらず、表現比較の側面からは、これまでの考え方と異なり、琉歌は、オモロよりも和歌との共通点が多く見られることが判明した。本論では、沖縄の琉歌とオモロ、そして大和の和歌の表現比較研究を行い、互いの影響関係を表現の観点から明らかにすることを試みた。

それについては、各章で指摘したように、特定の表現と動詞との呼応関係に見られる共通点が最初に挙げられる。それに加えて、徹底的な調査をもとに、琉歌とオモロ、琉歌と和歌の影響関係の程度をより正確に測定するために取り上げている和歌の改作琉歌とオモロの改作琉歌の数の比較である。琉歌は、どの時代の和歌から主に影響を受けているのか、琉歌人は、どの歌集を学んだ可能性が高いのかについての指摘も本論で行った。得られた結果を踏まえつつ、琉歌の発生に和歌からの流れ込みも可能であったらうという結論に達した。また、最後に、「大和」という表現を詠み込んだ琉歌とオモロの相違点に焦点を当て、オモロとの比較の中でオモロとは異なる琉歌の特色というものを明らかにすることができた。

なお、本論で行った研究は、これまでに調査の及んでいなかった広範囲の歌数を対象にし、その結果をまとめたものである。調査対象とした琉歌、オモロや和歌の全ては序章において示した文献に拠るものである。そして、各章ごとに得られた具体的な結論は以下の通りである。

まず、第 1 章では、「面影」を詠み込んだ琉歌、和歌やオモロを対象にした調査を行った結果、琉歌と和歌共に、「面影」と最も多く結ばれる動詞は「立つ」であり、「面影→立つ」という組み合わせが両歌共に最も高い割合を占めていることが判明した。琉歌と和歌におけるこの共通点は、両歌に何らかの関係性があることを示している。また、「面影→立つ」の組合せでは、両歌において幾つかの類似表現も見られる。第一に、和歌における 7 音の「面影ぞ立つ」（意味：

面影が立つ) および琉歌における 8 音の「^{ウムカジドゥタ チュル}面影ど立ちゆる」(意味: 面影が立つ) が挙げられる。「面影ぞ立つ」という句は、平安末期の初出で、鎌倉時代に多く見られ、藤原俊成や定家系列の当時有名な歌人によって詠まれた表現である。そして、この表現は藤原定家の次男である藤原為家が最も多く詠み、那覇士族が学んでいたとされる『為家集』にもこの句を含んだ和歌が見られる。したがって、琉歌人も藤原定家やその系列の歌人から影響を受け、和歌におけるこの句の 7 音調を琉歌に相応しい 8 音調に変形し、琉歌の中に 8 音句として取り入れた可能性があるかと推定できるだろう。

しかし、琉歌における「面影ど立ちゆる」という 8 音句は、オモロにも「面影ど立ち居る」のように 1 首見られ、オモロとも共通している。そのため、琉歌におけるこの句は和歌の「面影ぞ立つ」という 7 音句の変形であるのか、或いはオモロの 8 句がそのまま取り入れられているのか、という問題点については、いまだ解決されない。本論では、琉歌は、この句に関してオモロや和歌からの影響を受けているという両方の可能性について指摘しておいた。なお、この問題についてはさらなる調査が必要であるため、今後の研究課題としたい。

「面影→立つ」の組合せにおける琉歌と和歌の類似表現としては、第二に、和歌の 7・7 音の「見し面影の 立たぬ日ぞなき」(意味: 昔愛していた (人の)

面影が立たない日はない) および琉歌の 8・8 音の「^{ナリ シウカジヌ タタヌフィヤ}馴れし面影の 立たぬ日や

^{ネ サミ}ないさめ」(慣れ親しんだ (人の) 面影が立たない日はないだろう) という 2 句が指摘できる。なお、この表現はオモロには一切見られない。この 2 句を詠み込んだ和歌も藤原為家の私家集『為家集』に収められているものであり、この類似の 2 句を含んだ和歌と琉歌の詳しい分析をすると、為家のこの和歌が琉歌へ改作された可能性が指摘できる。また、上の句における和歌の「見し」および、琉歌の「馴れし」という表現は、ほぼ同じ意味を表すものである。さらに、両歌の中でそれらの表現と一致して数多く結ばれる表現として、「面影」のみが挙げられることは、両歌の大きな共通点となっていると言える。琉歌には、「見し」という表現は一切見られないことから、琉歌における「馴れし面影」という表現は和歌の「見し面影」という表現の変形でもあろうと言えるが、「馴れし」は和歌にも数多く見られるため、結局琉歌における創作の独自表現ではなく、和歌の表現をそのまま模倣したものであろう。なお、オモロには、上の 2 句のみならず、「見し」も「馴れし」も一切見られない。

また、「面影」を歌った琉歌には、上の類似表現や為家の和歌を改作した琉歌以外に、和歌と非常に似通った歌、いわゆる和歌を改作した琉歌と考えられる

ものも何首か指摘できた。本調査の結果、『琉歌全集』で「面影」を詠み込んだ 99 首の中から、和歌を改作したと考えられる琉歌は 11 首あり、11%になる。また、それらの改作琉歌は、特定の作者によって詠まれた歌が殆どであって、その琉歌の元になったと考えられる和歌を初出した時代で分類を行うと、最も多く見られるのは鎌倉時代の和歌であり、次に、江戸時代や室町時代の和歌である。そして、最も少ないのは平安時代初出の和歌となる。また、改作琉歌の元となった和歌の約 3 分の 1 は、勅撰和歌集や物語に見られる歌である。この結果は、琉歌人が勅撰和歌集や物語の中の歌などを積極的に学んでいたことを裏付ける結果であると言えよう。

以上のことから、琉歌は、「面影→立つ」という組合せに関する特定の句について、主に平安時代や鎌倉時代に初出した和歌における句から影響を受けたという可能性があるのに対し、和歌を改作した琉歌の場合は、影響を与えた和歌は、鎌倉時代（特に勅撰和歌集）や江戸時代（『新明題和歌集』など）の歌数が最も多いことが判明した。また、「面影ど立ちゆる」という琉歌の句に関しては、和歌のみならず、オモロからの影響も十分考えられる。しかし、それ以外の表現や句に関しては、オモロからの影響は全く確認できなかった。さらに、「面影」を詠み込んだ和歌の改作琉歌は既述のように 11 首指摘できたものの、オモロの改作琉歌は一切見られない。したがって、「面影」を歌った琉歌に関しては、オモロよりも和歌の表現の影響を多く受けていることが明確になった。

一方、琉歌には和歌と一致しない表現も多く見られる。例えば、和歌には見られない「面影→すぎる」や「面影→立ちまさる」という組合せが挙げられる。琉歌の場合は、「面影」が呼応する動詞「すぎる」や「立ちまさる」などによって、より積極的な感情が語られるのに対し、和歌の場合には、「面影→添ふ」という組み合わせを通じて奥ゆかしい趣や静かな、哀れさで溢れる和歌世界が感じられる。また、和歌における「面影に見ゆ」などといった普通の視覚表現は、琉歌

のほうでは、独特の表現である「目の緒ミヌフッサガテさがて」（意味：（面影は）まなじりにまわりついて）によって表される特徴も指摘できる。このような例から、琉歌は和歌の表現から影響を受けたとしても、大和とは異なる背景（環境）で歌い続けられてきたため、独自の表現を生み出し、それを今日まで保つことができた沖縄ならではの抒情歌であると言えるだろう。

第 2 章では、「面影」、「月影」、「水面や鏡に映る影」という 3 つの意を表す「影」という単語に注目し、その表現を詠み込んだ琉歌と和歌を対象に調査を行った。なお、「影」という語がオモロにはないため、第 2 章の調査対象は、琉歌と和歌のみとなった。

本調査の結果から、「影」を詠み込んだ和歌と琉歌共に「月影」の詠まれる歌が

殆どであり、「影」が見られる両歌の中で「月影」が過半数を占めていることがわかった。また、第1章で指摘した「面影→立つ」のような、「影→立つ」という呼応関係は、『琉歌全集』の琉歌には一切見られず、『国歌大観』の和歌にその例はあるものの、非常に少ないことが分かった。調査対象となった1万首以上の和歌の中では、「面影」の意味で詠まれた「影」を含んだ和歌には、「立つ」という単純動詞が「影」と呼応する例は1首しか見られず、それ以外の例は全て「立つ」の複合動詞を含むが、その数も非常に少なく、20首を下回るために、1万首以上の和歌の中ではその割合が0.2%にも及ばない。したがって、琉歌と和歌の両方に「面影→立つ」という組合せが非常に多く見られる点と共に、逆に両歌共に「影→立つ」という組合せが殆ど見られない点は、両歌の共通点と言える。さらに、「月影」という表現を含んだ歌数が、「影」を詠み込んだ琉歌と和歌で、最も多いことも新たな共通点として指摘でき、両歌の関係性を示すものとして理解できよう。

また、琉歌と和歌の関係の度合いをより正確に示す手段として、この第2章でも和歌の改作琉歌数を指摘した。「影」を詠み込んだ琉歌60首の中に和歌の改作琉歌が14首見られ、23%に及んでいることが判明した。それらは特定の歌人によって詠じられた琉歌と読人知らずの歌とで、それぞれ約半数を占めている。また、「影」を詠んだ全体の琉歌60首のみならず、和歌の改作琉歌14首の中でも、最も多く見られるのは「月影」を詠んだ琉歌であり、半数を占める。

第2章の改作琉歌14首の元となった可能性のある和歌の中で最も多く見られるのは、鎌倉時代初出の和歌で、続いて平安時代、そして残りは、室町時代成立の歌集に初めて見られる和歌である。また、これらの和歌から、大多数を占める歌数（およそ70%）は、藤原定家（2首）、為家（2首）、頓阿（1首）や勅撰和歌集（『後拾遺集』・『続千載集』）および物語（『狭衣物語』・『栄花物語』）に含まれた和歌であることを指摘した。この結果は、定家系列の歌人や勅撰和歌集・物語の和歌が占める3分の1程度の割合が確認された「面影」を含む改作琉歌の場合と比較すると、それらの歌人や和歌集から「影」を詠み込んだ改作琉歌への影響はより強く、およそ70%に達することが判明し、琉歌を詠じた士族がどの和歌集や和文学作品を学んだかについての根拠を強く裏付けることになっていると言える。

さらに、改作琉歌のみならず、特定の句の中でも和歌の影響を辿ることができた。「影」を取り入れた歌の場合は、とりわけ「さやかに照る月の影」、「四方に照る月の影」や「名に立つ月の影」がその例として挙げられる。この3つの表現についても、藤原定家、為家やその系列の歌人の影響を受けたものである可能性が大きいものと考えられる。

第3章では、歌における季節語に注目し、昔から沖縄の気候になじんだ季節

語「夏・冬・若夏・うりずん」のみが反映されて、「春・秋」は未使用のオモロに対し、琉歌は季節語に関してオモロと和歌のどちらに共通点が多く見られるのかという点を明らかにした。

その結果、琉歌は「夏・冬・若夏・うりずん」という沖縄の独特の季節を表す表現のみならず、和歌と同様に「春」と「秋」も詠み込んでおり、さらに、琉歌も和歌も「春」と「秋」は季節語として最も高い割合を占めていることが判明した。また、季節語と動詞との組み合わせに関しても、「夏」と「冬」と動詞との組合せだけではなく、オモロと琉歌の中に唯一見られる沖縄の独特の表現「若夏」と「うりずん」と呼応する動詞も琉歌とオモロとで一致していないことが明らかとなった。季節語と動詞／名詞との組み合わせに関しては琉歌と和歌との共通点が多く、特に「春」と「夏」の歌の中で、その傾向が強い。両歌共に「春」と最も多く呼応する動詞は「来る」であり、また、「夏」と動詞の組合せより「夏」と名詞の組合せが目立つ。しかし、和歌の中で動詞「来る」が「春」だけでなく、「秋」と「冬」にも最も多く呼応するのに対し、琉歌の場合には「来る」が「春」のみ最も多く結ばれることが分かる。この点は両歌で大きく異なる。

「春夏秋冬」の語を詠み込んだ琉歌と和歌の句ごとの調査も行ったが、対象となった両歌の全句の半数以上は類似していることが分かった。「春夏秋冬」を詠み込んだ琉歌は、和歌を改作した琉歌がオモロの改作琉歌よりも遙かに多く見られ、重複歌を除けば、415 首中に 43 首あり、10%程度となっている。殆どの歌はいままでの研究で指摘されていないものである。また、「夏」と「冬」を同時に取り入れたオモロの改作琉歌も 2 首見られるが、2 首ともすでに先行研究で指摘されており、筆者も第 3 章だけでなく、序章の中でもそのオモロの改作琉歌を取り上げている。このように、琉歌とオモロの関係も認められる。しかし、「春夏秋冬」を詠み込んだ 415 首の琉歌に 10%を占める和歌の改作琉歌 43 首と比較すれば、オモロの改作琉歌は 2 首のみであり、0.5%しかないため、オモロからの影響は改作琉歌に関しては、和歌からの影響より極めて弱いと言えるだろう。

季節語を詠み込んだ和歌の改作琉歌の内訳は、特定の歌人によって詠じられた歌数と読人知らずの歌数がほぼ同数となっていることが分かった。また、それらの琉歌の元となった可能性が高いと考えられる和歌は、その初出時代の分類をすると、平安時代初出の和歌が最も多く、また、二番目に多いのは、鎌倉時代の歌であることが分かった。続いては、室町時代や江戸時代初出の和歌である。また、重複歌や重複歌集を除けば、それらの和歌の中から 20 首が勅撰和歌集に、5 首が勅撰和歌集の選歌資料となっている百首に見られ、また、1 首が物語の中に見られる。このように、改作琉歌の元となった和歌の過半数は、当時有名であった和歌集に含まれている歌であることが明らかになった。季節

語を取り入れた歌の場合も、調査結果の過半数の和歌は、琉球士族が学んだ和文学の作品と一致することになった。具体的には、とりわけ『古今和歌集』、『新勅撰和歌集』、『新千載和歌集』や『玉葉和歌集』等が挙げられ、また、『伊勢物語』、『大和物語』や『世継物語』等も琉歌人によって参考にされた可能性が高いと考えられるだろう。また、季節語を詠み込んだ改作琉歌の元となった和歌には、藤原定家（1首）、為家（2首）、為教（2首）や頓阿（2首）の和歌も見られる。

このように、表現の観点から、季節語と動詞／名詞との組合せをはじめ、改作琉歌に関する徹底的な調査をもとに、季節語を詠み込んだ琉歌にはオモロより和歌のほうが大きな影響を及ぼしたと結論付けられる。

第4章では、これまでに指摘した改作琉歌には、『琉歌全集』の「節組の部」の最初の160首や同歌集の「吟詠の部」の1404～1604番歌を対象にした調査で指摘できた新たな改作琉歌を加え、それらの全ての改作琉歌に関する総合的なデータをまとめた上で、改作琉歌をめぐる問題を提起して、今後の見通しを示した。

重複歌を除けば、第1～4章の調査対象にした琉歌742首中に先行研究でも指摘されているオモロの改作琉歌3首（0.6%）に対し、和歌の改作琉歌が93首あり、12.5%を占めている。それら93首のおよそ半数（52首、56%）は、特定の歌人によって詠まれた歌であるが、残りのおよそ半数（41首、44%）は読人知らずの琉歌である。この結果から、琉歌は最初に特定の人物によって詠まれたとしても、時代の流れとともに大衆化したのではないかと推察されよう。

また、93首の改作琉歌の元となった可能性のある和歌を105首指摘した。和歌の初出時代の分類を行うと、最も多いのは鎌倉時代初出の歌（39%）で、続いて二番目に多く見られるのは、平安時代初出の和歌（26%）である。また、改作琉歌に三番目に大きい影響を与えたのは、室町時代初出の和歌（19%）であり、最後には江戸時代に初出の和歌（16%）となっている。また、当時有名であった勅撰和歌集、その選歌資料や物語に含まれる和歌も少なくとも51首見られ、およそ半数を占めている。中には、藤原定家（3首）、為家（6首）や頓阿（6首）の和歌も数多く見られ、105首中におよそ14%を占める。「面影」「影」や季節語を詠み込んだ改作琉歌の場合のみならず、この総合的な結果も、那覇士族が学んでいた歌集に関する記録を裏付けているものとなっている。

琉歌人が具体的参考にした勅撰和歌集、勅撰和歌集の選歌資料、物語は、以下の通りである。まず、勅撰和歌集に関しては、平安時代の『古今和歌集』、『金葉和歌集』、『千載和歌集』、『後撰和歌集』、『後拾遺和歌集』、鎌倉時代の『玉葉和歌集』、『新勅撰和歌集』、『続古今和歌集』、『新後撰和歌集』、『新古今和歌集』、

室町時代の『新千載和歌集』、『新拾遺和歌集』、『風雅和歌集』、『新続古今和歌集』や『新後拾遺和歌集』を学んだ可能性がある。また、勅撰和歌集の選歌資料に関しては、鎌倉時代成立の『宝治百首』、『正治百首』や『嘉元百首』、そして室町時代成立の『永享百首』と『延文百首』には改作琉歌の元となった和歌が含まれているため、それらの百首も琉歌人によって、学ばれた可能性があるであろう。そして、琉歌人は平安時代の『大和物語』、『宇津保物語』、『落窪物語』、『狭衣物語』、『伊勢物語』、『栄花物語』や鎌倉時代の『世継物語』と『今物語』もおそらく読んでいたと推測できる。

また、勅撰和歌集・選歌資料・物語に限らず、改作琉歌の元となった和歌が見られる例数を考慮すると、琉歌人は改作琉歌を詠じた際に参考にした可能性として最も高い歌書は、平安時代成立の『古今和歌六帖』、『古今和歌集』、『金葉和歌集』や『和漢朗詠集』、鎌倉時代成立の『夫木和歌抄』、『定家八代抄』や『玉葉和歌集』、室町時代成立の『明題和歌全集』、『題林愚抄』、『新千載和歌集』および江戸時代成立の『類題和歌集』などが挙げられる。その中から、改作琉歌の元となった和歌が最も数多く含まれている歌書は、江戸時代成立の『類題和歌集』や室町時代成立の『明題和歌全集』と『題林愚抄』であることが判明した。この結果からは、前述のように改作琉歌に最も影響を与えたと考えられるのは、第一に鎌倉時代初出の和歌と第二に平安時代初出の和歌ではあるが、琉歌人はその和歌をおそらく『明題和歌全集』や『類題和歌集』のような室町時代や江戸時代成立の歌集から学んだ可能性が高いと推定できるだろう。

また、他の歌書には見られない改作琉歌の元となった和歌も数多く含まれているため、琉歌人によって確実に学ばれたと推定できる歌集もいくつか見られる。その歌集は室町時代成立の頓阿の歌集や江戸時代成立の『新明題和歌集』、『鳥の迹』や『浦のしほ貝』等である。

改作琉歌や共通表現を踏まえ、琉歌はオモロより和歌の表現からの影響を大きく受けたと考えられる。表現のみならず、形式も定型化した琉歌（例えば、仲風）はオモロと違って、和歌との共通点が多いと言えるであろう。表現に関する共通点は、琉歌の成立論にも大きく関わるのではないかと考えられる。したがって、第4章では、琉歌は和歌からの影響で、和歌や和文学を意識していた首里士族によって洗練され、成立した可能性もあり得るのではないかと、という見通しを述べた。琉球王朝は中国から来た冊封史を歓待するために、様々な芸能を披露していた。その中で、「組踊」という沖縄の歌劇や琉歌が挙げられる。「組踊」は歌舞伎、能などという日本芸能を元にして創作された歌劇であることが知られている。同様に、琉歌も最初の頃に冊封史をもてなすために、和歌を意識していた士族によって作り出され、和歌の表現を多く詠み込むようになったのではないだろうか。のちに、首里王府から地方にも浸透し、一般庶民

の間で広がるようになるにつれて、沖縄独特の表現も多く詠み込むようになり、現在の琉歌まで発展してきたという推察もできるであろう。上述のように、琉歌の誕生には和歌の表現が大きな影響を及ぼした、つまり和歌から琉歌への流れ込みが行われた、という可能性も考えられるのではないか。

第5章では、琉歌とオモロの中で大和はどのようなイメージで描かれているのか、という問題の解明に取り組んだ。大和のことを取り上げた琉歌とオモロの歌数はほぼ同数である。ほとんどの歌で、「大和」という語が使われているが、琉歌の中には、「大和」の他に「日の本」という1例も見られ、またオモロの中には、「山城」と「日本内」も僅かながらあった。琉歌もオモロも同じ「大和」という語を取り入れているものの、そのイメージには若干の相違が見られることが、今回の調査で判明した。

まず、オモロの中には、「大和」が「上て」と呼応する歌も3首見られ、それらのオモロの中から「上下関係の中で上にある大和に対して高い評価がなされる」というイメージがうかがえる。しかし、このようなイメージは決して全てのオモロの中で同じようなものではないことが明らかになった。オモロの中には、大和に対する反感や競争意識の高い歌も多く、それらの歌は半数以上を占めている。このようなオモロの中で、沖縄も誉められるものの、大和と重ね合わせ、大和に譬えられているため、大和に対する強い競争の意識というものがうかがえる。

一方、琉歌には、大和に対する反感の歌というのは1首しか見られず、その他に沖縄も大和もそれぞれ個別の歌でもって賛美されており、その数も4首ずつと同数である。なお、琉歌の中で沖縄が誉められる際に、オモロと同じように大和と重ね合わせるパターンが見られ、琉歌にも大和に対する競争意識がなかった訳でもないと認められる。しかし、上述したように、琉歌の中には、大和も個別の歌を以って賛美されており、さらに、その歌数は沖縄が誉められる歌数と同数であるため、沖縄にも大和にも偏っていないことが明らかとなった。

また、残りの10首の琉歌は、単に航海の安全を喜ぶ様子や個人的な感情を歌っている。個人的な感情を大いに歌い上げている琉歌は、主に琉球王国の国王、按司や神女を賛美する儀礼的歌謡のオモロとは異なる特徴を持つと言える。つまり、オモロは基本的にフォーマルな儀式の場で歌われ、集団の見解を表しているのに対して、琉歌はインフォーマルな民間の個人の間で歌われ、個人の感情を表現しているため、個人的な感情の描写を含んでいる歌も多いのは当然であろう。また、オモロと琉歌の誕生時代も考慮すると、大和に対する琉歌とオモロの異なるイメージがより一層明らかとなるであろう。今回の調査対象となったオモロの巻3~22は、1623年に編纂されている。その時代は、島津氏の琉球入りが起こった1609年直後の時代となっているため、大和に対する反

感の気持ちも強かったことは、想像に難くない。それに対し、1世紀ほど経った時代に作られ、一般庶民の間で普及していたと思われる琉歌には、そのような気持ちは殆どなかったことが分かる。

オモロの中に表れる大和のイメージは、歴史的・政治的な部分を持ち込んだことから、反感の歌が5首も現れたと推察することができる。一方、抒情を主に取り上げている琉歌は、大和に対するイメージはプラスのものとなり、反感の歌はわずか1首にとどまる。また、個人の感情を表現した歌が殆どであることは、オモロには見られない、抒情歌である琉歌の特徴となっていると言える。

以上、本論の第1～5章の研究結果を踏まえ、抒情歌の琉歌は、表現や歌の内容に関しては、叙事歌のオモロより同じ抒情歌である和歌からの影響を受けたと考えられる。「面影ど立ちゆる」、「若夏」や「うりずん」等のような、単語レベルで琉歌に影響を与えたオモロと比べて、共通表現をはじめ、改作琉歌の歌数の側面からも、琉歌の成立には和歌の表現のほうが重要な役割を果たした、と結論付けられるであろう。

参考文献

- 秋山虔（2000）『王朝語辞典』理想社
- 池宮正治（1976）『琉球文学論』沖縄タイムス社
- 池宮正治（1982）『近世沖縄の肖像 上・下』ひるぎ社
- 池宮正治（1992）「万葉集と南島歌謡」『和歌文学講座 2・万葉集 I』勉誠社、
367-385 頁
- 石川盛亀（1998）『初心者のための「琉歌入門」』ニライ社
- 伊波普猷（1975）『伊波普猷全集 第九卷』平凡社、323-334 頁
- 岩佐美代子（1996）『玉葉和歌集全注釈・上巻』笠間書院
- 植月博（1996）『国書読み方辞典』（株）おうふう
- 上原直彦（2010）『琉歌百景』ボーダーインク
- （1983）『沖縄大百科事典・上巻』沖縄タイムス社
- 小沢正夫、松田成穂（1983）『古今和歌集・日本古典第九巻』小学館
- 押川かおり（1997）「『おもかげ』考—新古今的表現の一側面」『日本文学史論
—島津忠夫先生古稀記念論集—』世界思想社、92-107 頁
- 小野重朗（1972）「南島歌謡の発生と展開」『叢書 わが沖縄第五巻—沖縄学の
課題』木耳社
- 嘉手苺千鶴子（1996）「琉歌の展開」『岩波講座・日本文学史・第 15 巻 [琉球
文学、沖縄の文学]』岩波書店、57-78 頁
- 嘉手苺千鶴子（2003）『おもろと琉歌の世界』森話社
- 嘉味田宗栄（1968）『琉球文学発想論』星印刷
- 嘉味田宗栄（1977）『琉球文学表現論』沖縄タイムス社
- 神作光一、長谷川哲夫（2006）『新勅撰和歌集全釈・六』風間書房
- 金城朝永（1974）『金城朝永全集・上巻』沖縄タイムス社
- （1983）『国語大辞典』小学館
- 日下幸夫 編（2010）『類題和歌集』付録 本文読み全句索引、和泉書院
- 日下幸夫 編（2010）『類題和歌集』エクセル CD、和泉書院
- 西郷信綱（1963）『日本古代文学史 改稿版』岩波書店
- 酒井茂幸（2004）『草庵集 和歌文学大系 65』明治書院
- 島袋盛敏、翁長俊郎（1995）『標音評釈琉歌全集』5 版発行、武蔵野書院
- 清水彰（1984）『標音校注 琉歌全集総索引』武蔵野書院
- 清水彰（1994）『琉歌大成』沖縄タイムス社
- 編集委員会（1983-1992）『新編国歌大観・第 1 巻—第 10 巻 歌集・索引』
角川書店
- 編集委員会（1996）『新編国歌大観』CD-ROM 版 Ver. 2、角川書店

- 鈴木一雄校注（1986）『狭衣物語 新潮日本古典集成第 74 回 下』新潮社、
316－317 頁
- 世礼国男（1975）「琉球音楽歌謡史論」『世礼国男全集』野村流音楽協会
- 武田元治（1974）「中世歌論における『おもかげ』について」『群馬大学教育学部紀要 人文社会科学編』24 卷、1－16 頁
- 田島利三郎（1988）『琉球文学研究』第一書房
- 中田祝夫、和田利政、北原保雄（1983）『古語大辞典』小学館
- 中塚栄次郎（1928）『校註国歌大系 十三代集 第 5 卷』国民図書株式会社
- 長友武（1990）「琉歌の隆盛と和歌の影響」『鹿屋体育大学研究紀要・第 5 号』、
149－155 頁
- 仲原善忠（1958）「琉球の文学」『岩波講座日本文学史・第 16 卷』、岩波書店
- 仲原善忠（1969）『仲原善忠選集・中巻』沖縄タイムス社
- 仲原善忠、外間守善（1978）『おもろさうし 辞典・総索引・第 2 版』角川書店
- 仲程昌徳（1979）「沖縄・琉歌の発生とその現在」『短歌研究』36 卷 7 号、短歌研究社
- 中山盛茂（1969）『琉球史辞典』琉球文教図書株式会社
（2000－2002）『日本国語大辞典・第 2 編』小学館
（1983－1985）『日本古典文学大事典』岩波書店
- 比嘉春潮（1971）『比嘉春潮全集 第四巻』沖縄タイムス社
- 比嘉実（1975）「琉歌の源流とその成立」『沖縄文化研究 2』法政大学沖縄文化研究所、97－142 頁
- 樋口芳麻呂、後藤重郎校注（1996）『定家八代抄・上』岩波書店
- 外間守善（1965）「琉球文学の展望」『文学』33 卷 7 号、岩波書店
- 外間守善、仲程昌徳（1974）『南島抒情 琉歌百選』角川書店
- 外間守善（1976）『南島文学』角川書店
- 外間守善（1979）「沖縄文学の全体像」『沖縄文化研究 6』法政大学沖縄文化研究所、338－363 頁
- 外間守善、比嘉実、仲程昌徳（1980）『南島歌謡大成Ⅱ 沖縄編』角川書店
- 外間守善（1995）『南島の抒情－琉歌』中央公論社
- 外間守善、他（1995）『沖縄古語大辞典』角川書店
- 外間守善校注（2000）『おもろさうし 上・下』岩波文庫
- 前城淳子（2006）「琉歌歌語「雨」をめぐる」『琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集・第 12 号』87－128 頁
- 間宮厚司（2005）『おもろさうしの言語』笠間書院
- 間宮厚司（2008）『沖縄古語の深層 おもろ語の探究』森話社

三村晃功 編 (1976) 『明題和歌全集』 福武書店

三村晃功 編 (1976) 『明題和歌全集全句索引』 福武書店

Carter, S.D. (1997) *Unforgotten Dreams – Poems by the Zen monk Shotetsu*. New York: Columbia University Press

旧稿との関係一覧

第1章 琉歌、和歌やオモロの表現比較研究―「面影」をめぐる―

旧稿→「琉歌と和歌の表現比較研究―「面影」をめぐる―」（『沖縄文化』第112号、2012年）

第2章 琉歌と和歌の表現比較研究―「影」をめぐる―

旧稿→「琉歌と和歌の表現比較研究―「影」をめぐる―」（『法政大学大学院紀要』第70号、2013年）

第3章 琉歌の季節語（春夏秋冬）をめぐる―オモロや和歌との表現比較―

旧稿→「琉歌の季節語（春夏秋冬）をめぐる―オモロや和歌との表現比較―」（『日本文学誌要』87号、2013年）

第5章 オモロと琉歌における「大和」のイメージ

旧稿→「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」（『国際日本学』第11号、2013年に掲載予定）

【資料編（第1章）〔和歌〕】

※以下のデータは「面影」が詠まれる『国歌大観』の和歌を歌集別に、そして時代別に分類したものである。

※各歌集名に続き「X（X）首」という二つの数字を含んだ記号があるが、先の数字は歌集の中の「面影」を詠んだ歌数を示し、後（括弧内）の数字は「面影→立つ」を詠んだ歌数を示す。

※各歌集のところにある括弧の年次は歌集の成立年を示すものであるが、成立年が不明である場合には歌集の編集者の生没を表す。

※例：『万葉集』－14（0）首（770－781年） → 万葉集には「面影」を詠んだ歌が計14首、「面影→立つ」を詠んだ歌が0首見られる。また、歌集の成立は770－781年とされる。

※各歌の上にある括弧の数字は歌集による歌番号である。

奈良時代：（710年－794年頃）

（およそ80年間）

「面影」が出ている和歌：	14首
「面影」＋「立つ」が出ている和歌：	0首
頻出率：	0%

● 『万葉集』 － 14（0）首（770－781年）

（西本願寺本）

（399）

歌 陸奥之（ミチノクノ） 真野乃草原（マノノカヤハラ） 雖遠（トホケレド） 面影為而（オモカゲニシテ） 所見云物乎（ミユトイフモノヲ）

（605）

歌 暮去者（ユフサレバ） 物念益（モノオモヒマサル） 見之人乃（ミシヒトノ） 言問為形（コトトヒシサマ） 面影為而（オモカゲニシテ）

（755）

歌 如是許（カクバカリ） 面影耳（オモカゲニノミ） 所念者（オモホエバ） 何如将為（イカニカモセム） 人目繁而（ヒトメシゲクテ）

（757）

歌 夜之穂杼呂（ヨノホドロ） 吾出而來者（ワガイデテクレバ） 吾妹子之（ワギモコガ） 念有四九四（オモヘリシクヨ） 面影二三湯（オモカゲニミュ）

（1300） （譬喩歌 寄レ衣）

歌 今造（イマヌヘル） 斑衣服（マダラゴロモハ） 面就（メニツクト） /（オモカゲニ） 吾尔所念（ワレニオモホユ） 未服友（イマダキネドモ）

（1634） （反歌）

歌 高円之（タカマトノ） 野辺乃容花（ノヘノカホバナ） 面影尔（オモカゲニ） 所見乍妹者（ミエツツイモハ） 忘不勝裳（ワスレカネツモ）

（1798）

歌 立易（タチカハル） 月重而（ツキカサナリテ） 雖不遇（アハザレド） 核不所忘（サネワスラレズ） 面影思天（オモカゲニシテ）

平安時代：（794年－1185年）

（およそ390年間）

「面影」が出ている和歌：	294首
「面影」＋「立つ」が出ている和歌：	61首
頻出率：	20.7%

● 『道濟集』－ 2 (0) 首 (平安時代)
(書陵部蔵 351・835)

- (181) (なくなりてとぶらひにくだりて、のぼりたる人にあひて)
歌 おもかげに ちりにしはなの みえまがひ はるをわするる ときのなきかな
(296) (人のもとに)
歌 みえつるは ゆめかとおもひて さめたれば などおもかげに はなれざるらん

● 『亭子院歌合』－ 1 (0) 首 (913年)
(尊経閣文庫蔵十卷本)

- (3) (躬恒)
歌 さかざらむ ものならなくに さくらばな おもかげにのみ まだきみゆらむ

● 『古今和歌集』－2 (0) 首 (915年)
(伊達家旧蔵本)

- (681) (伊勢)
歌 夢にだに 見ゆとは見えじ あさなあさな わがおもかげに はづる身なれば
(1103) (をがたまの木、友則下) (くれのおも) (つらゆき)
歌 こし時と こひつつをれば ゆふぐれの おもかげにのみ 見えわたるかな

● 『仁和御集(光孝天皇)』－ 1 (0) 首 (930年以降)
(書陵部蔵 506・75)

- (13) (また御)
歌 あとたえて こひしきときの つれづれは 面影にこそ はなれざりけれ

● 『新撰和歌』－ 1 (0) 首 (930-934年)
(島原松平文庫蔵本)

- (50)
歌 玉かづら かづらき山の もみぢ葉は おもかげにこそ みえわたりけれ

● 『陽成院親王二人歌合』－ 2 (0) 首 (943年以前)
(尊経閣文庫蔵十卷本)

- (10) (右)
歌 こひわびて こころまどへる ねざめには おもかげをだに あふとたのまむ
(13) (左)
歌 めをさめて ひまよりつきを ながむれば おもかげにのみ きみぞみえける

● 『奈良帝御集』－ 1 (0) 首 (943 - 1006年?)
(書陵部蔵 506・75)

- (10) (奈良帝御集 [1奈良帝] 奈良御集)
歌 こむといへば あなてかしこし ふぢなみの おもかげにのみ みゆるいもかな

● 『貫之集(第3巻)』－ 1 (0) 首 (貫之の生没: 866? - 945年)
(陽明文庫蔵本)

- (543) (男なき家)
歌 かけておもふ 人もなければ 夕されば 面影たえぬ 玉かづらかな

● 『伊勢物語』－ 3 (1) 首 (950年まで)
(岩波文庫本)

- (38) (男)
歌 人はいさ 思ひやすらむ 玉かづら 面影にのみ いとど見えつつ

(86) (第四十六段 男)

歌 目かるとも 思ほえなくに 忘らるる 時しなければ **面影にたつ**

(114) (第六十三段 男)

歌 百年に 一年たらぬ つくも髪 我を恋ふらし 面影に見ゆ

● 『業平集〈第3巻〉』 - 1 (0) 首 (950年以降)

(尊経閣文庫蔵本)

(30) (ともなりける人のとほくまかりにける、わすれぬらむといひて侍りければ)

歌 わかるとも おもほえなくに わすらるる 時しなければ **おもかげ**に見ゆ

● 『後撰和歌集』 - 3 (0) 首 (951年)

(日本大学総合図書館蔵本)

(132) (さくらの花のちるを見て) (みつね)

歌 いつのまに ちりはてぬらん 桜花 **おもかげ**にのみ 色を見せつつ

(391) (つらゆき)

歌 玉かづら 葛木山の もみぢばは **おもかげ**にのみ みえわたるかな

(1208) (題しらず) (伊勢)

歌 **おも影**を あひ見しかずに なす時は 心のみこそ しづめられけれ

● 『猿丸集』 - 1 (0) 首 (951年頃)

(書陵部蔵 510・12)

(15) (かたらひける人の、とほくいきたりけるがもとに)

歌 ほととぎす こひわびにける ますかがみ **おもかげ**さらに いまきみはこそ

さいしょうちゅうじょうきんだちしゅんじゅううたあわせ

● 『宰相中将君達春秋歌合』 - 1 (0) 首 (963年)

(平安朝歌合大成)

(57) (あき)

歌 ひぐらしの こゑうちそふる あきのひは 春にまさると **おもかげ**のやま

みなものみねあきら

● 『信明集』 - 1 (0) 首 (源 信明の生没: 910-970年)

(正保版歌仙家集本)

(97) (かがみかりてかへすとて、しきのしたにかきつく、をとこ)

歌 あかつきの わかれはをしの かがみかも **面かげ**にのみ 人のみゆらん

もとすけ

きよはらのもとすけ

● 『元輔集〈第3巻〉』 - 1 (0) 首 (清原元輔の歌集: 957-976年)

(正保版歌仙家集本)

(96) (もとすけがこに侍りしものの、わかなのやうなる物して侍りしによみて侍りし)

歌 二葉にて みし**面影**も かはらぬに 若なつみける けふにあふかな

● 『多武峰少将物語』 - 1 (0) 首 (962年以降)

(多武峰少将物語・本文批判と解釈)

(48) (やま (少将の君))

歌 もろともに なでておほしし なでしこの つゆにもあてじと おもひしを あなおぼつかな めに
みえぬ はなのかげにや あたるらむと おもへばいとぞ あはれなる いまもみてしかと おもひつつ
ぬるよのゆめに みゆやとて うちまどろめど みえぬかな めのうつつまに かぎりなく こひしきを
りは **おもかげ**に みえても心 なぐさみぬ かたみにさこそ みやこをば おもひわするる ときやは
ある はるけきやまに すまへども つかまわすれず おもひやる くもみながらも あしがきの まぢ
かかりしに おとらずぞ あはれあはれと まこもかる よとともにこそ しのぶぐさ わがみやまにも
ふもとまで おふとしらなむ しらかはの ふちもしらずは ひたぶるに きみがたにのみ うきよかは
うれしきせをぞ ながれては見む

● 『安法法師集』 - 1 (0) 首 (979年ごろ)
(書陵部蔵 501・196)

(93) (四月一日)

歌 すぎにける 花ををしむと ながむれば おもかげにこそ はるもながむれ

● 『古今和歌六帖』 - 21 (1) 首 (976-987年)
(宮内庁書陵部蔵 510・34)

(2061) (おもかげ) (なりひら)

歌 めかるとも おもほえなくに わすらる ときしなければ おもかげにたつ

(2062) (さかのうへのらう女ある本)

歌 わがせこが おもかげやまの さかゝるまに われのみこひて 見ぬはねたしも

(2063) (さかのうへのらう女ある本)

歌 めをさめて ひまより月を ながむれば おもかげにのみ きみは見えつる

(2064) (さかのらう女かさのによらう)

歌 みちのくの まのかやはら とほけれど おもかげにし見 見えつるものを

(2065) (さかのらう女かさのによらう)

歌 見しときと こひつつをれば ゆふぐれの いもがしみかを おもかげにみゆ

(2066) (さかのらう女かさのによらう)

歌 ともしびの かげにかがよふ うつせみの いもがおもかげ こお風ゆ

(2067) (さかのらう女かさのによらう)

歌 しろたへの ころもでかへて われまつと あるらむきみは おもかげにみゆ

(2068) (みつねある本)

歌 さかざらむ ものとはなしに さくらばな おもかげにのみ まだきみゆらん

(2069) (みつねある本)

歌 夢にても 見ゆとは見えじ あさなあさな わがおもかげに はづる身なれば

(2070) (返) (伊勢)

歌 おもかげは みつにつけても 見えずやは ころろにのりて こがれしものを

(2072) (かさのによらうイ)

歌 ゆふぐれは ものおもひまさる 見し人の こととひしかほ おもかげにして

(2073) (かさの女らうやかもちともある本)

歌 かくばかり おもかげにのみ おもほえば いかにかもせん 人めしげくて

(2768) (いけのうへの大君)

歌 ゆふされば ものおもひまさる みし人の こととひしかほ おもかげにして

(2771) (いけのうへの大君)

歌 たちかはる 月かさなりて あはねども さねわすられず おもかげにして

(3101) (かさの女郎)

歌 わがせこが おもかげ山の さかさまに われのみこひて みぬはねたしも

(3228) (人丸)

歌 さととほみ こひわびにけり ますかがみ おもかげさらず 夢にこそみめ

(3876) (たまかづら) (つらゆき)

歌 たまかづら かづらきやまの もみぢばの おも影にのみ みえわたるかな

(3877) (つらゆき)

歌 かけておもふ 人もなけれど 夕されば おもかげたえぬ 玉かづらかな

(3894) (あさがほ) (やかもち)

歌 かすが野の のべのあさがほ おも影に みえつついもは わすれかねつも

(4030) (しをり)

歌 あづま路の さやのなかやま しげくとも 君きまさねば おもかげもせじ

(4187) (みつね六首)

歌 いつのまに ちりはてにけん 桜ばな おもかげにのみ 色をみせつつ

● 『兼盛集』 - 1 (0) 首 (平兼盛の歌集: 985-990年)
(書陵部蔵 506・8)

(43) (又)

歌 あなこひし 雲間の月に 人をみて おもかげにのみ そへるころかな

● 『能宣集〈第7巻〉』－ 1 (0) 首 (991年?)
(書陵部蔵 510・12)

(362) (しのびて心ざしふかくかたらひし女の、むつまじうははべらぬが、あき、ひんがしくにへまかりはべりしを、つつむことはべりて、かれよりもこれよりもおぼつかなくて、としもへだたりはべりにしかば、さるべきたよりしてつかはしはべりし)

歌 わかれにし あきよりのちは うちわたし 我がころもでに しらつゆの おきのみまさり 冬はまた きえせぬしもと むすぼほれ 長きよすがら めもあはで なげきあかせば あらたまの 春にしなれば つくづくと ながめくらして うつせみの なくなつければ むねのうちに もえのみわたる かやりびの けぶりをいかで おとにきく ふじの山にも くらべむと やへのくもみを はるばると へだててしかば きみもみな かひなきことを いかでなほ いまはしばしも ながさめん とこそわびては おもへども はなのほひに つけつつは むかしのそでに おどろかれ 月のあかきに よせつつは まづおもかげに みづからも 心のうちに こととへど あまつそらより ふくかぜの たよりにこゑも きこえねど かたらひおきし ことのはの かたみにとては いろふかき もみぢばかりを うちみれば いとどしぐれて ひとしれず あまたのとしを かぞへつつ こひをつむみと なりぬれば つひにはかくて やましの いつあふさかを こえむとすらん

● 『能宣集〈第3巻〉』－ 1 (0) 首 (大中臣能宣の歌集：984-991年)
(西本願寺蔵三十六人集*)

(308) (しのびてこころざしふかくかたらひはべりし女の、むつまじうは侍らぬが、秋ひむがしくににまかり侍りし、つつむこと侍りて、かれよりもこれよりも、おぼつかなくてとしもへだたり侍りしかば、さるべきたよりしてつかはしはべりし)

歌 わかれにし あきよりのちは うちわたし わがこころもて しらつゆの おきのみそはる ふゆはまた きえせぬしもと むすぼほれ ながきよすがら めもあはず なげきあかして あらたまの はるにしなれば つれづれと ながめくらして うつせみの なくなつければ むねのうちに もえのみわたりかやりびの けぶりをいかで おとにきく ふじのやまにも くらべむと おもへどやへの くもみをしへだててしかば きみもみず かひなきことに いかでなほ いまはしばしも ながさめむ とこそはわびて おもへども はなのほひに つけつつも むかしのそでに おどろかれ つきひにそへて おもかげを みつつこころを こととへど あまつそらより ふくかぜの たよりにこゑも きこえねば かたらひおきし ことの葉の かたみにとては いろふかき もみぢばかりを うちみれば いとどしぐれて ひとしれず あまたのとしを かくしつつ こひをつむ身と なりぬれど つひにはかくて 山しの いつあふさかを こえむとすらん

● 『一条摂政御集(伊尹)』－ 1 (0) 首 (藤原伊尹の歌集：947-992年頃)
(益田家旧蔵本*)

(157) (つれづれにこひしきままに、かがみのめぐりに、さくら、やまぶきをりたてて、みづとりなどすゑて思ふ)

歌 おもかげに みつつををらん 花のいろを かがみのいけに うつしうゑては

● 『斎宮女御集』－ 1 (0) 首 (徽子女王の私家集：985-997年頃)
(西本願寺蔵三十六人集*)

(258) (こ君のことなどのたまはせて、大君に)

歌 月日こそ あらぬそらなれ なき人の おもかげのみぞ かはらざりける

● 『賀茂保憲女集』－ 3 (0) 首 (993-998年?)
(榊原家蔵本)

(27)

歌 いろもかも みぎはにやどる やまぶきの おもかげだにも ちりのこらなん

(157) (逢ての恋)

歌 ほのかにも むすびしみづの おもかげに みえてこひしき 君にもあるかな

(170) (云云)

歌 こひわびて おもかげにのみ こひいれば ひとつ身になる 心ちこそすれ

なかつかさしゅう

● 『中務集〈第7巻〉』 - 1 (0) 首 (平安中期の歌集、生没：910 - 989年)
(書陵部蔵 510・12)

(297) (川ちかきところにて、いるがもとへ)

歌 なき人の おもかげ見ゆる かはきに はるるまなくも あきやこひしき

かねずみしゅう

みなもとのかねずみ

● 『兼澄集』 - 1 (0) 首 (源兼澄、平安中期成立の歌集)
(島原松平文庫蔵本)

(102) (すけちか)

歌 夢に見て あかずさめけむ おもかげを うつつのちよに なしみてしかな

みつね

● 『躬恒集〈第3巻〉』 - 2 (0) 首 (平安中期)
(西本願寺蔵三十六人集*)

(129) (くれのおも)

歌 いつしかと まつゆふぐれの おもかげに みえつつみえぬ ことのわびしさ

(378) (さくらはなのをちへいぬるをみて)

歌 いつのまに ちりはてぬらむ さくらばな おもかげにのみ いまはみえつつ

● 『伊勢集』 - 4 (0) 首 (平安時代中後期)
(西本願寺蔵三十六人集*)

(152) (はらからのなくなりたるを恋ひて)

歌 おもかげを あひみぬかずに なすときは 心のみこそ しづめられけれ

(160) (人のみつとだにいへとありしかば)

歌 夢にても みつとはいはじ あさなあさな わがおもかげに はづるみなれば

(325) (人)

歌 おも影は みづにつけても みえずやは 心にのりて こがれしものを

(413)

歌 かすがのの なかのあさがほ おもかげに みえつついまも わすられなくに

● 『業平集〈第7巻〉』 - 2 (0) 首 (平安中期)
(書陵部蔵 510・12)

(59) (ある人みなかにありしに、めかるればわすれやしたるといひたれば、ひさしくありて)

歌 わかるとも おもほえぬかな わすらるる ときしなれば おもかげにみつ

(95) (ともなる人ものへまかりて、わすれぬらむといひて侍りけるに)

歌 めかるとも おもほえなくに わすらるる 時しなれば おもかげにみゆ

みつねしゅう

● 『躬恒集〈第7巻〉』 - 2 (0) 首 (平安中期)
(書陵部蔵 510・12)

(153) (延喜十二年三月十八日亭子院和歌合に)

歌 さかざらむ ものとはなしに さくら花 おもかげにのみ まだき見えつつ

(265) (さくらはなちるを見て)

歌 いつの間に 散りはてにけん さくらばな おもかげにのみ 色はみえつつ

ただみねしゅう

● 『忠岑集〈第7巻〉』 - 1 (0) 首 (平安中期)
(西本願寺蔵三十六人集*)

(39) (をむなに)

歌 ゆめにだに つれなき人の おもかげを たのみもはてじ ころろくだきに

● 『貫之集〈第7巻〉』－ 1 (0) 首 (平安中期)
(天理図書館蔵本)

(50) (つくしにたちばなのきむよりの中納言帥かけてくださるに、このあはのかみとしさだくさぐさのものたてまつるによませたまふ三首)
歌 うち見えむ おもかげごとに たたかづら ながきかたみに 思へとぞおもふ

● 『四条宮主殿集』－ 1 (0) 首 (平安中期)
(書陵部蔵 501・156)

(123) (返し、あま)
歌 かへるひの たそかれどきを まちくらす おもかげはなど へだてやはする

● 『円融院御集』－ 1 (0) 首 (1001年以降)
(書陵部蔵 501・845)

(25) (月あかき夜、一品の宮、しもにおりさせたまふに、うへ)
歌 てる月の ひかりはしばし よそならば おもかげにのみ またるべきかな

● 『拾遺和歌集』－ 4 (0) 首 (1005年)
(京都大学附属図書館蔵本)

(393) (はしばみ) (よみ人しらず)
歌 おもかげに しばしば見ゆる 君なれど 恋しき事ぞ 時ぞともなき
(1036) (みつね)
歌 さかざらむ 物とはなしに さくら花 おもかげにのみ まだき見ゆらん
(1275) (平兼盛)
歌 おもかげに 色のみのこる 桜花 いく世の春を こひむとすらん
(549) (兼盛)
歌 おもかげに いろのみのこる さくらばな いくよのはるを こひんとすらん

● 『忠岑集〈第3巻〉』－ 1 (0) 首 (平安時代後期－1006年以降)
(書陵部蔵 501・123)

(53)
歌 ゆめにだに つれなき人の おもかげを たのみもはてじ ころろくだくに

● 『金玉歌合』－ 4 (1) 首 (1004-1012年)
(書陵部蔵 501・58)

(50) (右)
歌 心とめて 草木の色も ながめおかむ おもかげにだに 秋やのこると
(73) (卅七番 左)
歌 人のみる おもかげならば いかになほ 我が身にそふも うれしからまし
(81) (四十一番 左)
歌 よもすがら 恋ひなく袖に 月はあれど みしおもかげは かよひしもせず
(94) (右)
歌 なれてみし おもかげせめて 忘れよ たちそへばこそ 恋しさもそへ

● 『馬内侍集』－ 1 (0) 首 (1004-1012年)
(三手文庫蔵本)

(188) (ときどきみゆる人、むまやそこにいらるといひたれば)
歌 あくがれて ゆくへもしらぬ 春駒の おもかげならで みゆるよぞなき

● 『源氏物語』－ 2 (0) 首 (1009年?)
(日本古典文学全集 12～17)

(56) (光源氏)
歌 面影は 身をも離れず 山ざくら 心のかぎり とめて来しかど

(729) (薰)

歌 絶えはてぬ 清水になどか なき人の おもかげをだに とどめざりけん

だいにたかとおしゅう

● 『大式高遠集』 - 2 (0) 首 (藤原高遠) (1011-1013年)
(書陵部蔵 501・190)

(233) (返し)

歌 おもかげは せきのしみづに うかぶれど 身をしづめたる みなそこぞうき

(282) (春風桃李花開日)

歌 はるかぜに 匂みをひらくる 花の色は むかしの人の おもかげぞする

すけちかしゅう

おおなかとみ

● 『輔親集』 - 1 (0) 首 (大中臣輔親) (1038年)
(書陵部蔵 154・549)

(104) (とあれば、はじめのはこと人かへしすれば、いまみつかへし)

歌 夢にても あかずさめけん おもかげを うつつの千世に ならべましかば

きんとうしゅう

● 『公任集』 - 1 (0) 首 (藤原公任) (1044年)
(書陵部蔵 501・739)

(546) (左大将朝光五節舞姫たてまつりけるを見てつかはしける)

歌 あまつ空 とよの明に みし人の 猶おもかげの しひて恋しき

● 『能因法師集』 - 4 (1) 首 (1045年)
(榊原家蔵本)

(47) (かがみをかるに、かげをだにみせじなどいひたる人に)

歌 ますかがみ みえかくれする 面影は こころのおにと いづれまされり

(145) (まがきの島)

歌 面影の なほ忘れられで みゆるかな まがきの島と むべもいひけり

(201)

歌 あまつ風 ふけひのうらに あらねども わがおもかげは 浪ぞ立ちそふ

(210) (みちのくによりのぼりたるむまのわづらひて、この国にてしぬるを見て)

歌 わかるれど あさかのぬまの こまなれば 面影にこそ はなれざりけれ

● 『玄玄集』 - 1 (0) 首 (1045-46年)
(彰考館蔵本)

(54) (閑院大将の五節の所に有りける女に)

歌 あまつ空 豊のあかりに みし人の なほおもかげの しひてこひしき

● 『夜の寝覚』 - 1 (0) 首 (11世紀中ごろ)
(日本古典文学大系 78)

(4) (中納言)

歌 忍ぶれど 面影山の おもかげは わが身をさらぬ 心地のみして

あかぞめえもんしゅう

● 『赤染衛門集』 - 2 (0) 首 (1041-1053年)
(島原松平文庫蔵本)

(148) (ほどへてわたくしにまうでたりしに、かの君のもとにかよふ人のまうでたりしにつけてやりし)

歌 君は来で 思ひやいでし 月みれば 面かげさへぞ そふ心ちする

(544) (たてまつりての夜、人のゆめに、ひげいとしろきおきな、このみてぐらをみながらとるとみ
ておこたりにき、いかのほどなるちごを、ちちのむかふるにやる人にかはりて)

歌 わかれとも しらずがほなる 面かげに 恋しとだにも おもはずもがな

さだよりしゅう

● 『定頼集〈第7巻〉』－ 1 (0) 首 (1053年頃)
(尊経閣文庫蔵本)

(410) (はじめてうへの女御どのおほんたいめんありて後、これよりさくらにきこえたまける)
歌 あかざりし よひの名ごりの 面影を やどの桜に よそへてぞみる

さだよりしゅう

● 『定頼集〈第3巻〉』－ 1 (0) 首 (藤原定頼) (1053年頃)
(出光美術館蔵本)

(88) (三月ばかり、はじめて女御殿に御たいめありてのち、これよりきこえたまひける)
歌 あかざりし よるのなごりの おもかげを やどのさくらに よそへてぞ見る

いせのたいふしゅう

● 『伊勢大輔集〈第3巻〉』－ 1 (0) 首 (989?-1060年?、平安時代歌人)
(東海大学蔵本)

(18) (御かへし)
歌 おもかげは 見しにかはらで やへざくら いろはむかしの 心地こそすれ

さがみしゅう

● 『相模集〈第3巻〉』－ 1 (0) 首 (998?-1061年?、平安時代の歌人)
(浅野家本*)

(314) (ゆめ)
歌 いくしき きみがおもかげ あらはれて さだかにつぐる ゆめをみせなむ

いせたいふしゅう

● 『伊勢大輔集〈第7巻〉』－ 1 (0) 首 (1060年以降)
(彰考館蔵本)

(91) (かへし)
歌 おもかげは みしにかはらで やへ桜 いろはむかしに にほひましけり

じょうじんあじやりのははしゅう

● 『成尋阿闍梨母集』－ 1 (0) 首 (1073年頃)
(書陵部蔵 501・182)

(59) (なげきくらしたるゆふぐれ、つねよりもおもかげにおぼえ給へば、ものおぼえぬ心地に、おはしたる心ちして)
歌 こひわたる ゆふぐれがたの おもかげを たそかれどきと いふにやあるらん

● 『弁乳母集』－ 2 (0) 首 (1017-1078年間の詠作?)
(書陵部蔵 553・17)

(98) (むかしみし人の、むかへかうの所に法師にてありしに)
歌 ゆめのうちに みしおもかげの かはらねば なほありしよの 心ちこそすれ
(102) (又)
歌 ますかがみ かげはなるめる 君なれど 猶わすられず なれしおもかげ

● 『後拾遺和歌集』－ 1 (0) 首 (1086年)
(宮内庁書陵部蔵 405・87)

(736) (題不知 大納言忠家)
歌 いかばかり うれしからまし おもかげに みゆるばかりの あふよなりせば

わかさのかみみちむねあそんむすめたちうたあわせ

● 『若狭守通宗朝臣女子達歌合』－ 1 (0) 首 (1086年)
(書陵部蔵 510・40)

(18) (右)
歌 恋ひしなば おもかげにもや わかれなん そればかりこそ 身をばはなれぬ

● 『榮花物語』－ 1 (0) 首 (1028-37年、1092年)

(日本古典文学大系 75・76)

(321) (五節の君)

歌 憂けれども 見し面影の 恋しきに 今宵の月を あかず見るかな

ぎょうそんだいそうじょうしゅう

● 『行尊大僧正集』－ 1 (0) 首 (1094年?)

(書陵部蔵 150・556)

(169) (御かへり事)

歌 ちりはてし なほおもかげに むつるとて かひなきはなの みやこにぞふる

つねのぶしゅう

● 『経信集』－ 2 (0) 首 (源経信の生没：1016-1097年、他撰)

(書陵部蔵 501・200)

(51) (返し)

歌 きみのみや ころろふかみの はなと見る わがおもかげに さらぬにほひを

(266) (返し)

歌 たれとかや すがたうつせる いけみづは わがおもかげに さらじとをしれ

● 『俊忠集』－ 1 (1) 首 (藤原俊忠の生没：1073-1123年)

(書陵部蔵 501・318)

(33) (かへし)

歌 君こふる なみだに月は みえねども おもかげのみぞ たちもはなれぬ

● 『忠盛集』－ 1 (1) 首 (歌人の生没：1096-1153年)

(日本大学蔵本)

(107) (納涼)

歌 夏ふかき をぎのはそよぐ ゆふぐれは あきのけしきぞ おもかげにたつ

● 『狭衣物語』－ 2 (0) 首 (11世紀末、平安末期)

(日本古典文学大系 79)

(68) (狭衣)

歌 涙川 流る跡は それながら しがらみとむる 面影ぞなき

(174) (狭衣)

歌 面影は 身をも離れず うちとけて 寝ぬ夜の夢は 見るとなけれど

● 『肥後集』－ 3 (1) 首 (1102-1103年)

(書陵部蔵 150・563)

(163) (月あかき夜、人人ものがたりなどしてそのまたのひ、やらんとてやらん、人のこふに)

歌 ほのみえし おぼろ月夜の おもかげは あまのいはとの いつかあくべき

(180) (おもかげ山)

歌 しらくもの たえてしらじな わかれては おもかげ山の たちみこふとも

(203) (月こひしき人になたり)

歌 おもかげの わすれぬ人に よそへつつ いるをぞつたふ 秋の夜の月

ほりかわひやくしゅう

● 『堀河百首』－ 1 (0) 首 (堀河天皇) (1105年)

(日本大学蔵本)

(753) (槿) (公実)

歌 あしがきの ひまよりみえし 槿は おも影さらぬ 花にぞ有りける

● 『郁芳門院安芸集』－ 2 (1) 首 (1106年)

(書陵部蔵 501・323)

(35) (返し)

歌 風さむみ さえもさえずも やまざとは みやこの月ぞ おもかげにたつ

(39) (夜もすがら、ははきのめのかたらひあかして)
歌 おもかげは 身にそひながら こひしさの なぐさまざりし あきのよひかな

ごうちしゅう おおえのまさふさ
● 『江帥集(匡房)』 - 1 (0) 首 (大江匡房) (1111年頃)
(書陵部蔵 501・153)

(90) (鳥羽院のとほくはぎの花を思ふ、内直廬)
歌 みやぎのの このしたつゆの おもかげは こはぎがすゑや ちしほなるらん

としよりずいのう みなもとの としより
● 『俊頼髓脳』 - 1 (0) 首 (源俊頼) (1113年)
(日本古典文学全集 50)

(39)
歌 咲かざらむ ものとはなくに 桜花 おもかげにのみ まだき見ゆらむ

● 『基俊集(第3巻)』 - 1 (1) 首 (1107-1118年)
(書陵部蔵 501・743)

(147) (月のおもしろきよ、ならに侍るこのこひしく侍りしかば、永縁そうづのもとにいひやりし)
歌 いときなき わが子を奈良の 里に置きて 今宵の月に 面影にたつ

● 『清輔集』 - 3 (1) 首 (生没: 1104-1177年)
(書陵部蔵 501・43)

(275) (寄花恋)
歌 おもかげに たつたの山の さくら花 あかでやみにし 人ぞかかりし

(314) (をさなき子をいはひていひつかはしける)
歌 千代ふべき 二葉の松の みどりこは 面影さへぞ ときはなりける

(369) (述懐)
歌 つくづくと 見しおも影を かぞふれば あはれいくらの むかしなるらん

● 『俊成祇園百首』 - 1 (1) 首 (藤原俊成の生没: 1114-1204年)
(谷山茂氏蔵本)

(46) (霧)
歌 霧のうちに まづおもかげに たつるかな にしの御かどの 石のきざはし

じゃくぜんほうししゅう
● 『寂然法師集』 - 1 (1) 首 (生没: 1117-1182年?、平安)
(書陵部蔵 501・313)

(71) (恋)
歌 ますかがみ みしおもかげの 身にそひて こころはきみに うつりぬるかな

● 『内蔵頭長実白河家歌合 保安二年閏五月十三日』 - 1 (1) 首 (1121年)
(陽明文庫蔵二)

(3) (二番 桜 左持 長実朝臣)
歌 かがみやま うつろふ花を みてしより おもかげにのみ たたぬひはなし

ろくじょうしゆりのだいぶしゅう あきすえ あきすえ
● 『六条修理大夫集(顕季)』 - 1 (0) 首 (藤原顕季) (1123年)
(大東急記念文庫蔵本)

(158) (於七条亭人人、桜の歌十首よみしに)
歌 ちりつもる かがみのやまの さくら花 おもかげにこそ よるもみえけれ

● 『金葉和歌集 初度本』 - 2 (2) 首 (1126-1127年)
(静嘉堂文庫蔵本)

(71) (翫山花といへることをよめる) (大宰大貳長実)
歌 かがみ山 うつろふはなを みてしより おもかげにのみ たたぬ日ぞなき

(376) (九月尽の心をよめる) (中原経則)
歌 あすよりは よもの山べの あきぎりの おもかげにのみ たたんとすらん

● 『金葉和歌集二度本』 - 4 (3) 首 (1126-27年)

(ナトルガム清心女子大学附属図書館蔵本)

- (45) (山桜をもてあそぶといへることをよめる) (大式長実)
歌 かがみやま うつろふはなを 見てしより おもかげにのみ たたぬ日ぞなき
(254) (九月尽の心をよめる) (中原経則)
歌 あすよりは よものやまべの あきぎりの おもかげにのみ たたむとすらん
(371) (物申しける人の前前中宮にまゐりにければなごりをしびて、月のあかかりけるよいひつかはしける) (藤原知房朝臣)
歌 おもかげは かずならぬ身に こひられて くもゐの月を たれと見るらん
(424) (月増恋といへることをよめる) (内大臣)
- 歌 いとどしく おもかげにたつ こよひかな 月をみよとも ちぎらざりしに

● 『散木奇歌集(俊頼)』 - 8 (5) 首 (1127年)

(書陵部蔵 501・723)

- (528) (かへし)
歌 君はさは 月みでのみや 思ひ出づる わがおもかげは はなれぬものを
(532) (田上にて月のあかかりける夜、むかし帥殿のおはしまししをりの事など思ひ出でてよめる)
歌 いにしへの 面かげをさへ さしそへて 忍びがたくも すめる月かな
(825) (あまのがはといふ所にてむかしあそばせ給ひし事のおもひいでられてよめる)
歌 恋しさに あはれむかしの おもかげを あまのかはせに やどしてぞみる
(834) (もとの三条にかへりつきて、見まゐらせばつねにみさせ給ひし所にもみえさせ給はざりしかば、あさましさに)
歌 ことごとに たつ面影は 人しれず おつる涙の かどでなりけり
(1081) (別当実行の家にて忘後人をこふといふ心を)
歌 かきたえし ほどふる河の そこ見れば ながれしみをぞ おもかげにたつ
(1088) (人のなくななくうらみければかへりてつかはしける)
歌 せたの里 橋の馬ふみ くちめおほみ その涙ぞ おもかげにたつ
(1175) (経年恋)
歌 としふれど こすのきけきの たえまより 見えししなひは おもかげにたつ
(1524) (旋頭歌中納言通俊のかつらの山里にて、人人旋頭歌に恋の心をよせてよまれけるによめる)
歌 つれなさを 思ひあかしの うらみつつ あまのいさりに たくもの煙 おもかげにたつ

● 『金葉和歌集三奏本』 - 2 (1) 首 (1126-27年)

(国民精神文化研究所刊影印本)

- (256) (九月尽のこころをよめる) (中原経則)
歌 あすよりは よもの山辺に あきぎりの おもかげにのみ たたむとすらん
(387) (物申しける人の前前中宮にまゐりにければ、なごりをこひて月のあかかりける夜いひつかはしける) (藤原知房朝臣)
歌 おもかげは かずならぬ身に こひられて くも井の月を たれとみるらん

みつつねしゅう

● 『光経集』 - 4 (0) 首 (生没: 1128 - 1179年)

(彰考館蔵本)

- (24) (不見恋)
歌 ゆめにだに まだみぬ人の おもかげを さそふもつらき 夜半の月かな
(275) (恋)
歌 くさまくら たびねの袖の つゆけさに おもかげぬらす 山のはの月
(427) (暮山恋)
歌 こひごろも きなれの山の ゆふつゆに おもかげながら ぬるる袖かな
(457) (名所花)
歌 よし野山 こぞふる雪の おもかげや はなのふぶきの あげがたのそら

● 『重家集』－ 3 (1) 首 (藤原重家の生没：1128－1180年)
(尊経閣文庫蔵本 慶応大学蔵本)

- (14) (恋)
歌 ゆめにだに **たち**もはなれぬ おもかげを やがてうつつに なすよしもがな
(185) (後朝恋十首)
歌 きみにこそ 我がころを とどめつれ われをはなれぬ 君がおもかげ
(597) (後朝恋)
歌 けさこそは われが心を わぎもこが そのおもかげに かへてきにけれ

● 『奥儀抄』－ 3 (0) 首 (1135-1144年)
(日本歌学大系 1)

- (77)
歌 さかざらむ ものとはなしに さくらばな おもかげにのみ まだきみゆらむ
(385)
歌 しきたへのころもでかれてわれまつとあらむ子どもは おもかげに見む
(416) (をとこ)
歌 ももとせにひととせたらぬつくもがみ我をこふらし おもかげに見ゆ

● 『待賢門院堀河集』－ 2 (1) 首 (1145年)
(島原松平文庫蔵本)

- (7) (ちりてのち花しおもふ)
歌 山ざくら 木ずゑみどりに なりぬれど かはらぬものは はなのおもかげ
(78) (恋)
歌 わすれにし 人はなごりも みえねども おもかげのみぞ **たち**もはなれぬ

● 『久安百首』－ 9 (5) 首 (1150年)
(書陵部蔵 155・36)

- (40) (秋二十首)
歌 をしみかね 入りぬる夜半の 月なれど 猶おもかげは とどめおきけり
(195) (羈旅)
歌 すみなれし 宿の事のみ 面影に あさ**たつ**旅の くさまくらかな
(396) (羈旅)
歌 東路の 野しまがさきの はま風に わがひもゆひし いもがかほのみ おもかげにみゆ
(470) (恋二十首)
歌 我が恋を 寝ては夢に見 覚めぬれば 面影に**たつ** あはぬまぞなき
(580) (恋二十首)
歌 おくりつる 人のなげきや とまるらむ 面かげに**たつ** あさねがみかな
(677) (恋二十首)
歌 袖ふかし 過ぎがてなりし うつりがの けさまでにほふ 面かげやなに
(858) (冬十首) たんごのかみのあきひろ 丹後守 顕広＝藤原俊成
歌 冬の夜の 雪と月とを みるほどに 花のときさへ おもかげ**ぞたつ**
(875) (恋二十首)
歌 思ひわび みし面かげは さておきて こひせざりけん 折ぞ恋しき
(1078)
歌 忘れにし 人はなごりも みえねども 面かげのみぞ **たち**もはなれぬ

● 『和歌一字抄』－ 4 (1) 首 (1150年)
(書陵部蔵 150・653)

- (183) (裏書云朝花) (定家)
歌 世のつねの 雲とは見えず 山桜 けさやむかしの 夢の面影
(328) (月増恋金) (花園左大臣)
歌 いとどしく **面影に立つ** 今夜かな 月を見よとも 契らざりしを
(367) (隔日恋裏) (関白)
歌 三日月の われて逢ひみし 面影の 有明までに 成りにけるかな
(901) (未忘昔意) (経信卿)
歌 故郷の 花の盛は 過ぎぬれど おもかげさらぬ 春の空かな

● 『秋風抄』－ 3 (0) 首 (1150年)

(群書類従本)

(162) (冬御うた) (院御製)

歌 天乙女 玉もすそひく 雲の上に 豊のあかりは おも影に見ゆ

(232) (藻壁門院少将)

歌 おもかげを うき身にそへて 恋ひしなば 後のよまでの つらさをやみん

(233) (少将内侍)

歌 むば玉の 夢はさめぬる 床の上に 猶おもかげの 見えもするかな

● 『秋風和歌集』－ 11 (4) 首 (1151年)

(宮内庁書陵部蔵本)

(863) (女につかはしける)

歌 あぢきなく なにと身に そふおもかげぞ それとも見えぬ やみのうつつに

(864) (恋歌あまたよみ侍りけるに) (少将内侍)

歌 むば玉の 夢はさめぬる とこのうへに なほ面影の 見えもするかな

(865) (さうへき門院の少将)

歌 おもかげを うき身にそへて こひしなば のちの世までの つらさをやみむ

(940) (権中納言もろつぐ)

歌 おもひかね うきおもかげや ながさむと 見ればかなしき ありあけの月

(943) (源雅定)

歌 面影は 見し夜の月に したはれて うきにも人の わすられぬかな

(970) (春恋といふことをよませたまける) (のちのとばのゐんの――)

歌 おもかげに とやまの霞 **たちそひて** 見しやむかしの 春のよの月

(1113) (千五百番歌合歌) (法橋顕昭)

歌 昔見し 月はあはれや まさりけん おもかげにさへ ぬるるそでかな

(1135) (題しらず) (院――)

歌 あまをとめ たまもすそひく 雲の上の とよのあかりは おもかげに見ゆ

(1166) (やすすけの王の母)

歌 風さむみ さえもさえずも 山ざとは みやこの月ぞ おもかげに**たつ**

(1295) (かへし) (入道前摂政)

歌 かすみにし けふの月日を へだてても なほおもかげの **たち**ぞはなれぬ

(1305) (かへし) (権中納言くにざね)

歌 君こふる なみだに月は みえねども おもかげのみぞ **たち**もはなれぬ

● 『内裏九十番歌合』－ 1 (0) 首 (1151-1154年)

(書陵部蔵伏・41)

(7) (四番 左勝) (為定卿女)

歌 やどれ月 露よりなれし おもかげを さゆる霜夜の 袖にのこして

ふくろぞうし

● 『袋草紙』－ 2 (0) 首 (1156-1159年)

(日本歌学大系2・和歌文学研究(陽明文庫本))

(331) (古今歌合難) (躬恒)

歌 さかざらむ ものならなくに さくら花 おもかげにのみ まだきみゆらむ

(593) (証歌) (躬恒)

歌 さかざらん 物とはなしに さくら花 おも影にのみ まだきみゆらん

きんひらしゅう

● 『公衡集』－ 1 (0) 首 (藤原公衡の生没: 1158 - 1193年)

(書陵部蔵 501・61)

(82) (うちもねず)

歌 ちぎりしに かはるうらみも わすられて そのおもかげは なほとまるかな

● 『太皇太后宮小侍従集』－ 1 (1) 首 (1160年)
(書陵部蔵 511・20)

(76) (初冬時雨)

歌 はつしぐれ しぐれてわたる たびごとに みねの木葉ぞ 面影に立つ

● 『有房集(第4巻)』－ 2 (0) 首 (1162年)
(書陵部蔵 150・567、501・309)

(208) (かへし)

歌 ことのねは まつふくかぜに かよひけり おもかげのみぞ へだてはてぬに

(437) (おととにてはべりしときふさの大夫、うせてはべりしいみのうちへ、もりとき入道がり申しつかはしし)

歌 うつせみの たまのゆくへは しらずして むなしくとまる からばかり かた身なりしも かぎりあれば けぶりとはやく なしてけり いまよりのちの なぐさめは さよのころもを ひきかけて 思ひねにねん ゆめのみか それももよに ひとよこそ なみだのたまの おのづから みしおもかげになづさはめ さてもなかなか うちさめば さらにわかれし 心ちして たきぎつきにし そのときの なげきにまたぞ なりぬべき あはれむかしの なきかげを なににつけてか わするべき ころのほどは ひだだくみ うつすみなはの なほくして ますみのいろは いにしへの あめわかひこの くだりつつ むかへとりけん たぐひなり これのみならず わがくにの やまとみことのことわざも つづけてたわに かきおけり ほねをばちりに うづみつつ なほはうづまぬ ながたてば げにこれのみの ことなれや ただこの中に いひしいでし うらみをのこす ことはただ ななそぢちかき たらちをに さきだちてゆく こととまた あづまのかたに ありときく そのはらからの そのなかに まづははきぎを なげかせて ねにかへりぬる このもとは くちばがしたに うづもるる このみとともに 人しれん やみぬることぞ このよには なほうきことと おもふらん いまはこれらも さておきつただのちのよを たすからむ ことをのみこそ いとなまめ おなじすたちし むらどりの たちおくれたる ひなどもは はぐくみたてし かぞいろの おもひにさらに おとらめや かかるうきよを みるからに 人のうきよぞ しられぬる いつきのみやの ゆかりとて あまてるかみの めぐみまで かぶることこそ かたからめ いせのはまをぎ かりしきて たびねをすべき たよりだに このゆかりにはうせはてぬ これらをむねに こめもちて おもふ思ひの くるしさも うきにならへる そのうへにあはれをしれる かたもあれば きみをたよりに おきながら またたれにかは いひもあはせん

● 『今撰和歌集』－ 1 (1) 首 (1165-66年)
(神宮文庫蔵本)

(119) (未対面恋) (顕広)

歌 ひとしれぬ 心やかかねて なれぬらん あらましごとの おもかげにたつ

● 『中古六歌仙』－ 1 (1) 首 (1165年までに)
(某家蔵本)

211 (桜)

歌 さくらばな ちりなんのちの おもかげに あさゐるくもの たたむとすらむ

● 『中宮亮重家朝臣家歌合』－ 1 (1) 首 (1166年)
(内閣文庫蔵本)

(114)

歌 夢にさへ 見し面影の 立ちそひて ぬるよもやすむ 心ちこそすれ

● 『統詞花和歌集』－ 2 (1) 首 (1167年)
(天理図書館蔵本)

(50) (藤原顕広朝臣)

歌 面影に 花のすがたを さきだてて いくへこえきぬ 峰の白雲

(654) (ときどきまうできかよふ人のむまをうしなひて、もしそこにまうできてや侍るとたづねければ)
(馬内侍)

歌 あくがれて ゆくへもしらぬ はる駒は おもかげならで みゆるよもなし

● 『実国家歌合』 - 1 (1) 首 (1170年)
(書陵部蔵 501・607)

(36) (右) (定長)
歌 夏衣 いそぐ中にも われはただ 散りにし花ぞ おもかげにたつ

● 『出観集』 - 2 (1) 首 (1170-1175年)
(覚性法親王) (書陵部蔵 501・90)

(728) (旅恋)
歌 みぬ人の そのおもかげは うつつにて たびねは夢の こちこそすれ
(779) (はるになりて南院にまゐりたるに、むかしうゑおき給へるむめのさかりにさきたりければ、
花につけてたてまつりける) (源俊重)
歌 おもかげも たちそふらめや 花の色に 君がまそでの にほひかとみよ

● 『歌仙落書』 - 2 (2) 首 (1172-1173年)
(群書類従本)

(84) (さくらさく山の春風たえせねばただひとすぢぞ立ちへだてなむ登蓮法師 八首風体たけ高くきら
きらしく、また面白くも侍るなるべし、嵐の山の秋の夕ぐれ、木木の梢まばらに成行くまに、大井川の
みせき錦をさらせるを、みむとやおぼゆる花を)
歌 さくらばな 散りなん後の おもかげに 朝ある雲の たたむとすらん
(104) (袖ぬらすさ夜のね覚を知がほにまくらになるるむしのこゑごゑ大宮小侍従 五首風体あまり
て比興を先とせり、青海波といふ舞をみる心地こそすれ、つれづれしきかたには、みめよき近衛とねりな
どやかいしろにたつらん 月前述懐)
歌 いとふらん くめちの神の 気色さへ おもかげにたつ よはの月かな

● 『風情集』 - 3 (1) 首 (1173-1178年)
(公重) (谷山茂氏蔵本)

(222) (恋)
歌 わすられぬ おもかげをのみ 身にそへて 人のこころの うとくもあるかな
(288) (恋)
歌 いかなれば つれなき人の おもかげの 我が身にそひて はなれざるらむ
(389) (月)
歌 しらなみに まがふさくらを たづぬれば おもかげにこそ まづはたちけれ

● 『右大臣家歌合 治承三年』 - 2 (0) 首 (1175年)
(歌合部類板本)

(26) (右) (基輔朝臣)
歌 おも影に とまるはかひも なかりけり 梢にちらぬ 紅葉ともがな
(49) (二十五番 左) (季経朝臣)
歌 朝夕に 面影さらぬ 都かな こころやさきに たちかへるらむ

● 『隆房集』 - 2 (1) 首 (1176年)
(書陵部蔵 501・134)

(11) (あひみることこそかたからめ、おもかげはたちもはなれねば)
歌 たちそへる きみがおもかげ やがてさは のちのよまでに わが身はなるな
(70) (とし月へだつれば、やうやうわするることもあるとおもへど、月日にしたがひて、ふかく
のみなりまされば、するかたなくて)
歌 ともしれば 身にそふ君が おもかげを いかにもえこそ おもひはなたね

● 『頼政集』 - 4 (0) 首 (源三位頼政集とも) (1176-1178年)
(書陵部蔵 511・15)

(80) (いまだ殿上をゆるされぬ事を歎き侍りしに、二条院の御時弥生十日比に行幸なりて南殿の桜
盛なるを一枝をらせて去年とことしといかがあると仰せ下され侍りしかば、枝に結付けてまゐらせ侍りけ
る)
歌 よそにのみ 思ふ雲ゐの 花なれば 面影ならで 見えこそあらめ

(81) (返し) (丹後内侍)
歌 さのみやは 面影ならで 見えざらむ 雲ゐの花に 心とどめば
(193) (秋花勝春花、範兼卿家)
歌 秋までも 面影にさく 桜ばな 野べの色みて 後ぞちりぬる
(480) (行路恋)
歌 とどめてし 我が心にや かはるらん みし面影に つれてきにけり

● 『林葉和歌集(俊恵)』 - 11 (2) 首 (1178年)
(神宮文庫蔵本)

(109) (左大将実定家にて、花を)
歌 花の色を あかず詠むる 面影や うつろひゆかん 時なかるべき
(126) (右大臣家百首中、花五首)
歌 さきみてる 花の面影 なかりせば 春のね覚や さびしからまし
(670) (林葉和歌集第五) (恋歌) (右大臣家百首内、初恋五首)
歌 恋はさは みし面影の 身にそひて たもとや濡す なにこそ有りけれ
(689) (左大将実定家にて)
歌 しなばやと あだにもいはじ 後の世は 面影だにも そはじと思へば
(694) (師光君家にて人人百首歌読み侍りしに、恋歌十首)
歌 身にそへる 君が面影 心あらば 行きてもかたれ なれるすがたを
(711) (又、歌林、人人歌十首よみ侍りしに)
歌 夢にとて 見えぬものから まどろめば 面影にさへ **立別れぬる**
(759) (影供会に)
歌 中中に 夢もけしきは うかりけり 面影のみぞ おもがはりせぬ
(769) (恋田舎人同)
歌 わすれずよ ひなのすまひに なれ初めし うなみをとめが 其面かけを
(784) (触事思出恋歌林苑)
歌 おのづから **立ちはなるれば** 面影を 荻ふく風の またさそひくる
(826) (昔思出恋同)
歌 おもかけは 昔ながらに 身にそひて 我のみ年の 老いにけるかな
(902) (道女帰恋)
歌 おろしおく いもがあさでの 面影の またをぐるまに のりにけるかな

● 『教長集』 - 1 (1) 首 (生没：～1178年まで)
(書陵部蔵続群書類従本)

(397) (遥思駒迎句題百首)
歌 こまむかへ おもかけに**たつ** こよひかな もじのせきやに もるつきをみて

● 『長秋詠藻(俊成)』 - 5 (4) 首 (1178年)
(国会図書館蔵本)

(58) (冬歌十首)
歌 冬のよの 雪と月とを みる程に 花の時さへ おもかけに**立つ**
(74) (恋歌二十首)
歌 おもひわび 見しおもかけは さておきて 恋せざりけん をりぞ恋しき
(207) (崇徳院近衛殿に御幸ありし日、遠尋山花といふ心をよませたまひし時よめる)
歌 おもかけに 花のすがたを **先だてて** いくへこえきぬ 嶺の白雲
(316) (未対面恋といふことをよみける)
歌 人しれぬ 心やかねて なれぬらん あらましごとの 面影**ぞ立つ**
(526)
歌 夜とともに おもかけにのみ **立ちながら** 又見えじとは など思ふらん

● 『林葉累塵集』 - 8 (2) 首 (1178年)
(寛文十年板本)

(159) (太田資早)
歌 おもかけの たがはぬ雲ぞ 峰に**たつ** 夢に花みし ねての朝けは
(183) (長嘯)
歌 ねやのうちに 梢の月の さそひきて 枕ならぶる 花のおもかけ

(493) (三首歌よみ給ふ中に)

歌 竹とりの よよの昔は あとふりて おもかげのこる 月の宮人

(797) (吉浦景雄)

歌 山鳥の はつをの鏡 よそにのみ 見るおもかげに ねはなかれつつ

(969) (契沖)

歌 頼めこし ことのはよりも 忘れぬ おもかげいかで 人にかへさむ

(1002) (伊達氏宗清)

歌 うしと見し 心はさても したはぬを 面影さらぬ 人や何なる

(1338) (だいしらず) (治賢)

歌 さよ姫が おもかげとてや 残るらん ひれふる山の 有明の月

(1367) (むすめの身まかりたまへるまたの年の春一周忌の日よみたまうける長歌) (長嘯)

歌 いにしはる 霞のころも さかさまに きてし月日の ゆきめぐり いつしかけふは あづさ弓 や
よひの中の いつかにも なりにけるこそ あはれなれ あととふ法の ともしびの 光さやかに かか
げなし わがやのうちに ありとある 人のかずかず ことさらに いもひをしつつ こひしのび ほと
けにつかへ さくら花 をりたむくれば かをりあふ かうのほひも よそならず みだのみくにぞ
おもほゆる またうべもなき ここのしなの はちすの花の うてなにし ことあやまたず むまれよと
いのるころは ひだたくみ うつすみなはの ひとすぢに おもひいり江の たまがしは かわかぬそ
での ためしかも としへぬるか と 歎くあまり せめてわする 草をだに つまんとすれば すみよ
しの 岸におふてふ たねたゆる 時にしあへば かひもなし かへすころもの ゆめぢまで ゆるさぬ
関の せきもりは たれ逢坂に すゑつらん しなえうらぶれ 草も木も すべてむかへる ものごとに
そのおもかげは **まづぞたつ** あないきつかし これやこの ひのもとならで ありときく みみらくの
しま たれかした われにをしへよ なき人に あふとかいへば 波ぢわけ たづねも行きはるけえ
ぬ ありし別の うききはを 今ひとたびは かたるべく 身さへあらぬと たどられて けぬるものと
も しらつゆの おくとはもとめ ぬるごとに いづちかとのみ またるらん 雲風さわぎ あまの原
ふみとどろかし なるかみの すごきゆふべは ふるづかに いそぎとぶらひ うづもれし 昔のしたに
も まどふやと ちからをそへて おもひやる 猶くやしきは かげろふの あるにもあらぬ みのほど
を ちよもやちよも ありへんと 行すゑかけて とにかくに などかをりをり いさめけむ あさまの
山の あさましく いけるかぎりは ふるさとの よもぎむぐらに まじりぬる ただつれづれと 深き
ねやに ひとりながむる やまと歌 したしき友と くちずさび おやのかふこの まゆごもり こもれ
るからに おほかたの いもせの中も まだしらず このひとつだに とどめねば 何をよそふる かた
みとて おのがうれへを なぐさめむ やまひの床に ふししづみ たえずもむねを くるしみし その
ありさまの かなしさを めにみすみすも いかがせし ひととせあまり うばたまの よるひるわかず
立ちさらで あとよりたすけ まくらより なづとはすれど おのづから ひと日ひと日に よわり行く
けしきも今は するかりき たのむこととは 老いらくの いのちにかへて とどめむと ねがひを捨て
ぬ やほよるづの 神にちかひし ことのはも うけずなるみの うらちどり 立ぬになきて ふみおけ
る よしやはかなき あとなりと 後みむひとの なさけ有りて かたりもつたへ いひつがば ながれ
ての世の 名やは朽ちせん

りんげしゅう さねさだ

● 『林下集(藤原実定)』 - 2 (0) 首 (1179年)

(慶応大学蔵本)

(201) (林下集下) (恋) (哀傷) (雑) (恋廿首よみしに)

歌 ちなげき まどろめば又 みにそひて おもかげのみぞ はなれざりける

(245) (たえてのちあふといふだいを)

歌 我をさは まちやせにける おもかげの みえしはかはる こちやはせし

じしゅうさんじゅうろくにんうたあわせ

● 『治承三十六人歌合』 - 1 (1) 首 (1179年)

(三手文庫蔵本)

(11) (右) (皇太后宮大夫入道) (遠尋山花と云ふ事を)

歌 面影に 花の姿を **先だてて** 幾重越えきぬ 嶺の白雲

さんかしゅう

● 『山家集(西行)』 - 5 (0) 首 (1180年以降?)

(陽明文庫蔵本)

(598) (寄花恋)

歌 はなをみる 心はよそに へだたりて 身につきたるは 君がおもかげ

(621) (月)

歌 おもかげの わすらるまじき 別かな 名残を人の 月にとどめて

(639) (月)

歌 おもかげに 君がすがたを みつるより にはかに月の くもりぬるかな

(641) (月)

歌 あきの月 ものおもふ人の ためとてや うきおもかげに そへていづらん

(654) (恋)

歌 うちむかふ そのあらましの おもかげを まことになして みるよしもがな

● 『宝物集』－ 1 (1) 首 (1177-1181年)

(古典文庫 258)

(459)

(藤原基俊)

歌 いとけなき わが子をならの 里におきて 今宵の月に おもかげぞ立つ

● 『高倉院昇霞記』－ 2 (1) 首 (1182年)

(復刻日本古典文学館)

(18) (作者)

歌 むかしにも かはらずすめる はるの月 なきおもかげの かからましかば

(118) (作者)

歌 ゆふがほの ひかりをそへし 白露の きえにしかげぞ おもかげにたつ

● 『親宗集』－ 1 (1) 首 (1182年)

(尊経閣文庫蔵本)

(94) (供花会に、恋馬上人といふ心を)

歌 かり衣 むしのたれとは しらねども おもかげにたつ こまの行ずり

もろみつしゅう

● 『師光集』－ 1 (0) 首 (源師光) (1182年)

(三手文庫蔵本)

(70) (こひの心を)

歌 はやくみし そのおもかげの はなれねば きみゆゑみをも すてぬとをしれ

● 『千載和歌集』－ 2 (0) 首 (1183年)

(陽明文庫蔵本)

(96) (覚盛法師)

歌 あかなくに ちりぬる花の おもかげや 風にしられぬ さくらなるらん

(1166) (百首歌たてまつりける時、たびの心をよめる) (左京大夫頭輔)

歌 あづまちの のじまがさきの はまかぜに 我がひもゆひし いもがかほのみ おもかげにみゆ

● 『長秋草』－ 2 (1) 首 (1182-1184年)

(俊成) (書陵部蔵 150・638)

(23) (春)

歌 わするなど ちぎりしやはどは いかがあらん のにも山にも おもかげぞたつ

(188) (これらをおもひがけず前斎院の御そに人のつたへ、御らんぜさせたりければ)

歌 おもかげに きくもかなしき くさのほら わけぬそでさへ つゆぞこぼるる

● 『平家物語』－ 1 (1) 首 (1177-1184年)

(覚一本) (日本古典文学大系 32・33)

(24) (五条大納言邦綱)

歌 おもひやれ 君が面かけ たつ浪の よせくるたびに ぬるるたもとを

● 『月詣和歌集』－ 3 (0) 首 (1183年)

(静嘉堂文庫蔵続群書類従本)

(368) (恵円法師)

歌 あふことは うつつにそへる 面影と はかなきよはの 夢となりけり

(585) (思出昔恋といふことをよめる) (俊恵法師)
歌 おもかげは 昔ながらに 身にそひて 我のみとしの おいにけるかな

(588) (大輔)
歌 うきにのみ ならひにければ おもかげの きてはとまらぬ けしきなるかな

● 『西行法師集』－ 2 (0) 首 (1118-1190年・生没)

(石川県立図書館蔵本)

(635) (人におくれてなげきける人に遣しける)
歌 なき跡の 面影をのみ みにそへて さこそは人の 恋しかるらめ

(649) (恋歌中に)
歌 面影の わすらるまじき 別かな 名残を人の 月にとどめて

● 『聞書集(西行)』－ 1 (0) 首 (生没: 1118-1190年)

(伊達家旧蔵本*)

(113) (おなじさまのなげきしける人とぶらひけるに)
歌 なきあとの おもかげをのみ みにそへて さこそは人の こひしかるらめ

ながかたしゅう

● 『長方集』－ 3 (0) 首 (藤原長方) (1186年頃)

(神宮文庫蔵本)

(37) (池辺花)
歌 くもりなき 池の鏡の 底きよみ うつしとどめよ 花のおもかげ

(144) (恋部) (恋)
歌 かくしつつ あらぬそのよに 成りぬとも 見しおも影 はいかが忘れん

(179) (ほのかに見たる恋)
歌 わがせこは 松浦の山に すまねども 見しおも影や ひれふりし袖

うたあわせ ぶんじにねん

● 『歌合 文治二年』－ 1 (0) 首 (1186年)

(書陵部蔵 501・20)

(147) (左、あらましごとのほどばかりは、すこしこころはなぐさみぬべきことなれども、右、みのとがに思ひなしてひとをうらみぬ、さもありぬべし、とてまさるとさたはべりぬ)

(六番) (左) (有家朝臣)

歌 おもひやる ころづかひの よしもなく おもかげをのみ さそひきにけり

● 『六百番陳状』－ 2 (0) 首 (1193-1194年)

(日本歌学大系別巻 5)

(184) (顕昭)
歌 山鳥の はつをのががみ かけねども 見し面影に ねはなかれけり

(185) (隆信朝臣)
歌 面影を ほのみしま野に 尋ねきて ゆくへもしらぬ 鴉の草茎

● 『和泉式部統集』－ 1 (0) 首 (平安末期)

(榊原家蔵本)

(646) (おほかたにあるふみども、殿の御物忌おまへなるほどはえみぬに、そひたるふみばこのうはつけの心もとなさに、はしをあけてみるまに)

歌 これにこそ なぐさまれけれ おもかげに みゆるにはにぬ [??本のまま]

しよくしないしんのうしゅう

● 『式子内親王集』－ 4 (0) 首 (平安時代末期の歌人、生没: 1153-1201年?)

(書陵部蔵 501・32)

(77) (恋)
歌 みえつるか みぬ夜の月の ほのめきて つれなかるべき 面影ぞそふ

(110) (又春)
歌 此よには わすれぬ春の 面影よ おぼろ月よの 花のひかりに

(361) (正治百首歌たてまつりける時)
歌 花をまつ 面影見ゆる 明ぼのは 四方の木ずゑに かをる白雲

(373) (百首歌の中に)
歌 ながむれば みぬいにしへの 春までも 面影かをる やどの梅がえ

じゃくれんほうししゅう

● 『寂蓮法師集』－ 2 (0) 首 (寂蓮の生没：1139－1202年)
(書陵部蔵 501・725)

(114) (恋)
歌 いまはわれ うきをかざりと ながめても 心の外は なれし面かげ

(136) (秋恋在野外)
歌 みやぎ野を 霧のたえまに みしよりも 残る色なき 秋の面かげ

じゃくれんむだいひやくしゅう

● 『寂蓮無題百首』－ 1 (0) 首 (生没：1139 - 1202年)
(広島大学国文学研究室蔵本)

(32) (寂蓮無題百首〔14寂無百〕)
歌 みてもまつ にしをもよほす おもかげや いけのはちすの ねにかへるらん

しゅかくほっしんのうしゅう

● 『守覚法親王集』－ 1 (0) 首 (生没：1150-1202年・)
(神宮文庫蔵本)

(112) (あかつきのまくらに、なにとなく過ぎにしかたのはかなさなどおもひつづけて)
歌 なにごとも 夢になりゆく いにしへの おもかげのこる あけくれのそら

わかどうもうしょう

● 『和歌童蒙抄』－ 2 (0) 首 (12世紀中ごろ)
(古辞書叢刊(尊経閣本))

(319) (人体部) (面影)
歌 よのほどろ わがいでてくれば わぎもこが おもへりしくよ おもかげにみゆ

(881) (病難例) (躬恒)
歌 さかざらむ ものとはなしに さくらばな おもかげにのみ まだきみゆらむ

● 『とりかへばや物語』－ 2 (0) 首 (12世紀、平安末期)
(学術文庫 293～296)

(22) (女中納言)
歌 この世には 人の形見の 面影を わが身に添へて あはれとや見む

(65) (巻四) (大将(男尚侍))
歌 見馴れにし その面影を 身に添へて あはれ月日を 過ぐしけるかな

みなもととしより

● 『田上集』－ 1 (0) 首 (源俊頼) (平安末期)
(俊頼)(島原松平文庫蔵本)

(25) (たなかみにて、月のあかりける夜、むかし帥殿のおはしまししをりのことなどおもひ出でてよめる)

歌 いにしへの 面影をさへ さしそへて しのびがたくも すめる月かな

とれんこいひやくしゅう

● 『登蓮恋百首』－ 2 (0) 首 (平安末期)
(静嘉堂文庫蔵続群書類従本)

(45) (登蓮恋百首〔11登蓮百〕) (登蓮法師恋歌)
歌 とし月は へだて行くとも つらかりし その面かげは 身をもはなれず

(61) (登蓮恋百首〔11登蓮百〕) (登蓮法師恋歌)
歌 面かげは 見しままにこそ かはらぬに こころしもなど あらずなるらん

● 『朗詠百首』 - 1 (0) 首 (藤原隆房) (1177 - 1200年成立?)
(隆房) (群書類従本)

(83) (楊貴妃帰唐帝思)
歌 面かげを 恋ふる我が身に 添へおきて 命はのべの 露と消えにき

● 『公衡百首』 - 1 (0) 首 (藤原公衡) (1187年)
(「定家珠芳」所収本*)

(92) (旅恋)
歌 しらくもの ちへにへだつる やまちにも 猶はなれぬは きみがおもかげ

● 『言葉集』 - 1 (0) 首 (平安末期?)
(冷泉家時雨亭文庫蔵本)

(127)
歌 とはずなる 人はなごりも なきものを なにおもかげの みをしたふらん

● 『五代集歌枕』 - 2 (0) 首 (藤原範兼) (平安末期?)
(日本歌学大系)

(117) (貫之)
歌 玉葛 かづらき山の もみぢばは 面かげにのみ みえわたるかな
(692) (家持)
歌 たかまどの のべのかほばな おもかげに みえつついもは 忘れかねつも

● 『海人の刈藻』 (『国歌大観』による記号: 十 225) - 7 (0) 首 (平安末期?)
(鎌倉時代物語集成 1)

(56) (大納言殿の上 (殿の上))
歌 けふといへば なきおもかげも さそらひて 身をはなれぬぞ いとどかなしき
(57) (中納言殿の上 (右大臣の上))
歌 身をさらぬ そのおも影も かひなきに くちぬ袂ぞ つれなかりける
(58) (姫君 (中宮))
歌 ながらへて なきおもかげを したふこそ つらき我が身の ためしなりけれ
(59) (大納言の君)
歌 かずならぬ 身にしもかへて 時のまも なきおも影を みるよしもがな
(60) (按察使殿 (内大臣))
歌 夢ならで 又みぬ人の おもかげを わすれぬ身をぞ いとどうらむる
(106) (中納言入道)
歌 わすれめや 春のみやこの おもかげは みやまのおくの すみかなれども
(115) (中納言入道)
歌 恋しとよ 春の都の 花ならで まづおもかげの たゆるまぞなき

鎌倉時代: (1185年 - 1333年)
(およそ 150年間)

「面影」が出ている和歌: 1498 首
「面影」+「立つ」が出ている和歌: 215 首
頻出率: 14.4%

● 『新三井和歌集』 - 2 (0) 首 (少しの歌は平安、大部分は鎌倉時代)
(有吉保氏蔵本)

(277) (同じ歌合に、寒草霜深) (玄基法師)
歌 枯れぬるか 霜のまがきの 花すすき ほのかに残る 秋の面かげ

(303) (永仁元年九月尽、亀山殿御会十首題の中に、川上暮秋) (二品親王)
歌 古の 面かげとめて 大井川 ふかきながれに 秋ぞくれゆく

● 『紫禁和歌集』－ 10 (1) 首 (鎌倉初期成立)

(順徳院) (内閣文庫蔵本)

- (119) (不忘絶恋)
歌 しら雲は たえにし後の 山の端に なほ面影の 月ぞすみける
(164) (知らない漢字)
歌 故郷を たが面影に さそひ来て 月に物おもふ 夕ぐれの空
(232) (葛木山)
歌 玉かづら 葛城山の 秋の色や なれしもつらき 人の面影
(358) (神祇) (順徳院)
歌 賀茂やまや 見しは三月の 花のかげ こぞのみゆきの 面影ぞたつ
(428) (夜恋)
歌 面影は 見しよながらの 月影に かはる心を たれにうらみん
(451) (寄鏡恋)
歌 月やどる 氷の袖の ます鏡 みし面影は かきくらしつつ
(507) (見恋)
歌 涙にも わりなき物か 袖の月 みるものからの 人のおもかげ
(659) (伊吹山)
歌 玉かづら いぶきの山の 秋の露 たがおも影を 松むしの声
(898) (三月十五日比、二百首和歌)
歌 あきらけき ならの都の 夜半の月 みぬ面影も すむ心かな
(1064) (旅恋)
歌 都にも よそなる人の 面影を したはぬ旅に 何うらむらん

● 『松浦宮物語』－ 3 (0) 首 (鎌倉初期成立)

(古典籍複製叢刊)

- (20) (少将(橘氏忠))
歌 たぐへける 人のこころや かよふらん おもかげさらぬ なみのうへかな
(38) (橘氏忠)
歌 おもふとも 恋ふともしらぬ おもかげの 身にそふとこは 夢もむすばず
(63)
歌 みなれては 恋ひずもあらじ おもかげの わすられぬべき わが身ならねば

つちみかどいんぎょしゅう

● 『土御門院御集』－ 4 (0) 首 (鎌倉初期成立)

(書陵部蔵 511・9)

- (162) (雪月花時最憶君)
歌 おもかげも たえにし跡も うつりがも 月雪花に のこるころかな
(412) (名所恋)
歌 うつの山 過ぎにし夢の おもかげに みはてぬ夢は うつつなりけり
(438) (鏡)
歌 ますかがみ 恋しき人は みえなくに わがおもかげの なにうつるらん
(440) (席)
歌 ぬるがうちに みしおもかげも わすられで うつつにあかす 夜半のさむしろ

● 『浄照房集』－ 3 (0) 首 (鎌倉初期)

(光家) (書陵部蔵 501・128)

- (11) (あきのくに、おほやまかなさかなどいふみ山の中にゆきくれて、月のゆくへもみえざりしに、は山しげ山わけこえて、こうのうらにうちいづるほど、月かげもりきて侍りしに)
歌 みやこより ちぎりし月も やまのはの うつればかはる そでのおもかげ
(24) (にし山にて、春のよ、月をみて)
歌 ながめじと おもひしものを ふるさとの おもかげさそふ はるのよの月
(38) (はかたの正ふくじにて、夏恋といふことを)
歌 なつごろも うつるもつらし おもかげの みじかきよはの ありあけの月

● 『後堀河院民部卿典侍集』－ 1 (0) 首 (鎌倉初期)
(三手文庫蔵本)

(18) (寄鏡恋)
歌 おもかげは さらぬかがみの かげにだに なみだへだてて えやはみえける

● 『寂身法師集』－ 1 (1) 首 (鎌倉初期)
(書陵部蔵統群書類従本)

(367) (詠百首和歌 寛元三年於関東詠之 春廿首 寂身法師)
歌 おもかげに おりある雲を さきだてて またれがほなる 山桜かな

● 『後鳥羽院定家知家入道撰歌』－ 1 (0) 首 (鎌倉時代)
(家良) (書陵部蔵 406・22)

(125) (雑)
歌 したひくる 月をかたみの 浦浪の みやこをかけて 残る面かげ

● 『信生法師集』－ 4 (0) 首 (0) (鎌倉時代)
(書陵部蔵 501・170)

(21) (月の夜、御はかだうでつやし侍るに、御おもかげは只今もむかひたてまつりたる心ちして、心をいたましむるなる故宮の月に、いとど松風吹きそへて、昔今の事おもひのこさす、ことなく、みかさの月かげなびくによひまでいたり給ひしに、おもひがけぶり、ひびみなしたてまつりしほどの事などは、このよの外に成りぬるも、わすれ給ふべくもなし、薪つきにし暁のそら、かたみのけぶりだにゆくへもしらず、かすめる空はただとど (きママ) を、ささわけしあかつきにあらねども、かへさは、袖の露も数まさりしをりなんど、ただきのふけふとうつりゆくゆめをかぞふれば、はやななどせ成りにければ、おどろかるるは、かなしともおろかなり、すべて生滅のことわり、をしむべきならず、かなしむべきならねど、尺尊入滅のきさらぎ十五夜の空、鶴林の煙にかきくれにしは、六道覚悟の聖者よりはじめて、うれへざる物なく、我師入滅我即入滅ともかなしび、こころなき草木のよすがまで、うれへのいろをふくみき、いはんや、濁世末代のおろかなる凡夫、いかでか涙の色そでにいせず、かなしびの声ほかに聞えざらん、むかしにかはらぬ有明の空のけしきはつれなくおぼえて)

歌 ながめ侘びぬ 煙となりし 面影も かすめる月も 明がたの空

(113) (初恋)

歌 われも又 あやなくけふや ながめまし みずもあらずの こすの面影

(166) (返事)

歌 のちの世に さめても我は わすれじな みはてぬ夢の のこるおもかげ

(204) (返事)

歌 これまでも 西をぞしたふ 山のはに 入りにし月の あとの面影

● 『親清四女集』－ 8 (1) 首 (鎌倉時代の歌人)
(書陵部蔵 501・248)

(13) (待月)

歌 まちわびて そらさへつらき 山のはに みる心ちする 月のおもかげ

(32) (夜餞別)

歌 ゆく人の おもかげとめよ たびごろも 袖にわかるる 月のかたみに

(55)

歌 さほひめの ねくたれがみの おもかげや やなぎのいと の 露のたまくら

(66)

歌 きてなれし せこが衣の くれなゐも おもかげにたつ いはつつじかな

(104)

歌 冬がれの 菊のかきねに ふるゆきは まだうつろはぬ 花のおもかげ

(125)

歌 みればまつ なみだにくもる かたみにて 月のあだなる 人のおもかげ

(157) (月おぼろなる夜、むかしのともにゆめのやうにたいめしたりしち、申しつかはし侍りし)

歌 おもひいでて なみだぞかすむ 春の夜の 夢ばかり見し 月のおもかげ

(223)

歌 みるもうし わかれしままの ありあけに おもかげのこす 月のかたみは

● 『親清五女集』－ 10 (2) 首 (鎌倉時代の歌人)
(書陵部蔵 501・303)

- (140)
歌 ありしよを おもひいでつれば **おもかげ**も ただそのままの なみだなりけり
(149)
歌 わすればや みしよの月を かたみにて なみだのそこに のこる**おもかげ**
(150)
歌 わすれずよ つれなくいでし **おもかげ**の 月にのこれる ありあけのそら
(180) (薰大将)
歌 なみださへ さぞながれけむ みし人の **おもかげ**にたつ うちの河なみ
(270) (うき舟の君)
歌 春の夜の ありあけの月の **おもかげ**や 身の中ぞらの しるべなりけむ
(275) (すみ侍る所のはなみにまうできて侍りしつぎのひ、雨いたうふるに平のちか成がもとより)
歌 わすられぬ きのはなは **おもかげ**も しをれやすらん けふの春雨
(339) (平親時女あづまへ下り侍りしころ、ひきぐしてかもへまうで侍るとて、四のあね)
歌 かひなしや 袖のみぬれて **おもかげ**の **たちもと**まらぬ かも河なみ
(340) (ちか時がむすめ)
歌 **おもかげ**は とどまらずとも おもひいでよ もろともにみる かも川水
(347) (あるとしの正月十一日、れん花わう院のしゆじやうの御かう見侍りしに、はるともみえずゆきかきくらしふりながら月はいとどさえまさりて風すさまじうふくに、くるまのうちもひややかなりし、人人の上のきぬどもはらひもあへずみえしに、のりぐしたりしにようぼうのまわりかよひつる人、くろきそでにことにしろくたまりていとみどころありしを、又あしたなにとまれいはばやと申しはべりしかば、その人にかはりて)
歌 それとだに さやかにやみし ふるゆきの 月にあまぎる 夜はの**おもかげ**
(374) (かへし)
歌 いつのまに あるるのきばと なりぬらん 見しよはちかき はなの**おもかげ**

● 『長明集』－ 2 (2) 首 (鴨長明の生没：1155-1216年)
(書陵部蔵 511・12)

- (3) (長明集〔13長明〕春) (梅花誰家)
歌 われもいま はしのばんやどに 梅うゑじ まだみぬ花の **面影**にたつ
(4) (はなを思ふこころをよめる)
歌 思ひやる 心やかねて ながむらん まだみぬ花の **おもかげ**にたつ

● 『定家八代抄』－ 10 (0) 首 (藤原定家の生没：1169-1241年)
(書陵部蔵 210・674)

- (178) (題しらず) (新) (大納言経信)
歌 古郷の 花のさかりは 過ぎぬれど **おもかげ**さらぬ 春の空かな
(724) (人におくれたる人をとぶらふとて) (新) (西行法し)
歌 なきあとの **面かげ**をのみ 身にそへて さこそは人の 恋しかるらめ
(879) (左大将朝光五節のまひ姫奉りけるかしづきをみてつかはしける) (新) (大納言公任)
歌 あまつ空 とよのあかりに みし人の **猶面かげ**の しひて恋しき
(1056) (題しらず) (新) (西行法し)
歌 **おもかげ**の わすらるまじき 別かな 名残を人の 月にとどめて
(1073) (千五百番歌合に) (新) (後京極摂政)
歌 身にそへる その**面かげ**も 消えななん 夢なりけりと 忘るばかりに
(1157) (題不知) (後) (大納言忠家)
歌 いかばかり うれしからまし **面かげ**に みゆるばかりの 逢ふ夜なりせば
(1312) (和歌所歌合に、遇不逢恋) (新) (俊成卿女)
歌 夢かとよ 見し**おもかげ**も 契りしも わすれずながら うつつならねば
(1371) (新) (八条院高倉)
歌 くもれかし ながむるからに 悲しきは 月におぼゆる 人の**おもかげ**
(1720) (新) (後京極摂政)
歌 古里は あさぢが末に 成りはてて 月にのこれる 人の**おもかげ**
(1796) (新) (懷恋慕偲仰於仏)
歌 別れにし その**面かげ**の 恋しきに 夢にも見えよ 山のはの月

● 『荒木田永元集』 - 1 (0) 首 (生没 : 1169 - 1245 年)
(根津美術館蔵本)

(35) (草花露滋)

歌 おもかげに かぜのけしきは おとづれて つゆもろくなる にはのはぎはら

● 『登蓮法師集』 - 1 (1) 首 (1182-1188 年)
(徳川黎明会蔵本)

(2) (桜)

歌 さくらばな ちりなんのちの おもかげに あさみるくもの **たたむ**とすらん

● 『隆信集〈第4巻〉』 - 13 (2) 首 (1182-1204 年)
(龍谷大学蔵本)

(99) (後京極殿、左大将ときこえ給ひしとき歌合に、新樹)

歌 おもかげは しぐれんあきの もみぢにて うすもえぎなる 神なみの杜

(414) (ははに侍りし人、こころざしはかたみにおろかならずながら、中将なりいへ、さだいへなど、そのいもうとたちもあまたうちつづきいできて、のちはわが身ひとつ、ちちかはりたる身にて、いと心ぼそながら、それにつけてもいよいよ心ざしはあさからずおもひかはしてすぎ侍りしに、心よりほかなることによりて、としの三とせまであひむかふこともなかりしを、たまたまなかよくなりて、ひごろ月ごろのうらみもわすれて、あはれにかなしくのみおもふほどに、そのとしのきさらぎのころ、はかなく見なしつるを、かかりけるものゆゑ、みとせまでいぶせてすぎにけるかなしさも、いよいよかぎりなく、又ありありてかくいまはのときにもなかよくなりて、のちのわざなど、ほいのままにみやづかひつるおやこのちぎりのふかさも、ひとかたならずおぼえて、法性寺といふところの山のおくにをさむとて、なくなくおぼえける)

歌 みとせまで こひつつみつる おもかげを あかでや苔の 下にくちなん

(421) (民部大輔のりまさの朝臣のむすめにとしごろすみ侍りしが、ほいならぬさまになりてのち、とし月つもりて、かの朝臣もみまかりて、いと心ぼそきさまにて侍るよききて、とぶらひにまかりて)

歌 すみなれし むかしの跡を きてみれば おもかげのみぞ あるじなりける

(486) (後法性寺殿百首に、あふこひ)

歌 よそにても 朝夕なれし おもかげの こよひはさらに めづらしきかな

(493) (後法性寺殿、右大臣御とき、後百首に、のちのあしたの心を)

歌 とどめつる 我がところにや ちがふらん かへるをおくる けさのおもかげ

(517) (大輔が百首に、あふてあはぬこひ)

歌 ゆめにだに あはでうかりし いにしへも **面影にたつ** 歎やはせし

(539) (親盛入道歌合し侍りしに)

歌 **面影**は わがひとりねの ところにおきて いづくにたれと よをあかすらん

(551) (千五百番歌合に)

歌 あさゆふに うき**面影**を みなれぎを さすがにさても なぐさみやせん

(573) (寄鳥恋)

歌 おもかげを ほのみしまのに 尋ぬれば 行へもしらぬ もずの草ぐき

(624) (またこれより)

歌 おもかげは さやかにそれと わかねども 契りし月を 忘れやはする

(929) (雑四) (人をうらみかねてつかはしし)

歌 かすがのの わかむらさきの いろふかく 思ひそめては としふれど しのぶもぢずり しのぶれば 心のうちに みだれつつ やるかたもなき いぶせさに もらしてのちも いけみづの ふかきおもひを くみてしる 人しなれば かずならぬ 身をうきくさの ねをたえて 世にもすまじと おもへども 山のおくまで **たちそはん** そのおもかげの くるしさに あるにもあらで よにふれば 心はそらに かりがねの ねをのみなきて 夜もすがら かたく袖の つゆけさは 秋ののべとも なりぬれば こはぎがしたの さをしかの こゑたつばかり かなしきを 思ひしづめて すぐせども かくてのみ世に ありあけの 月よりほかに ともなくて 我が身かげとし なりぬれど 人にはそはぬ ものゆゑに 心にふかく 君をのみ しめぢがはらの さしもぐさ さしてたのむる むつごとの 憑むべきをも きかねども この世ひとつの 契にて かかる思ひは よもやまの たにのした水 あさからじ と 思ふばかりに きにくにの なぐさの涙の なぐさめて しばしもいかで ありそ海の その心を しらなみの しらすばかりの ことのはもがな

(936) (よをそむきて侍りしを、五条の三位入道のゆめかうつつかなど侍りしあはれは、なほつきせぬ心ちして、そののちふつか三かありて申しおくりし)

歌 しのぶぐさ しげりのみます むかしにや うき世のほかは かよふらん いでにし家の ふること

の のこるくまなく いまさらに 露ときえにし おもかげも あとにとまれる ことのはも 袖のみぬ
れて かなしきを 有りともなくて あり明の あかしかねつる 秋の夜も ややくれがたの むしのね
を ともたのみて ながさむる こゑの色さへ よわりゆく 心ぼそさは ささがにの いとひても猶
いとふべき うき世にかくて すみぞめの ころもばかりは そめつれど はれせぬ霧に むせびつつ
ながき夢ぢの さめぬまを 今はむみやうの くもきえて 心のつきも はれよとや おなじはちすを
ねがふべき さとりあらはす 君がことのは

(939) (宣陽門院の御領、をはりのくになりける所を、させるあやまちもなきにめされて、みとせま
で返し給はらざりけるを、いまはさてやみぬべきにこそと思ひたえぬる心ちして、さまなどもかへてのち、
このことをよきやうに申せなどいひつけたりし人のもとより、かくよをそむきぬときこしめして、いとな
んあはれに、おどろきおぼしめす、その御しやうはかならず返し給はるべきよしなん御けしき侍るといひ
つかはしたれば、その人のもとへよろこびながら、このなが歌をよみてなんきこえける、かつは故院の御
えいなどをもかきとめまゐらせて、あさゆふの御おこなひなどをも、その御まへにてせさせ給ふよしきき
ければ)

歌 かけまくも かしこきみ世に つかへつつ としへにしみは とまりみて むなしきあとに つきも
せず かくるころは ふかきうみ たかき山とも あふぎこし はこやの山の おもかげを いまもな
ごりの 君が世の よろづよまでの かたみとて かきとどめてし 水ぐきの あとのしるしは 見えね
ども 猶たちいでて おいのなみ ふけひの浦に おとろへて ゆきかくれなん あとまでも 君がやち
よに つかへよと おもふあまりに つるのこの やしはごまでも をしへおく 心のうちは いはしみ
づ かものかはなみ そこきよし いまは我が身の をはりなる あはれをかけば すみぞめの たもと
もせばき うれしさを 身にあまるまで つつみてしかな

ひでよし

● 『如願法師集』 - 4 (0) 首 (藤原秀能の生没：1184 - 1240年)

(書陵部蔵 501・321、150・551、150・552)

(279) (夏)

歌 しらせばや みしおもかげに 袖ぬれて なれしいづみは わきかへるとも
(612) (和歌所御歌合に、夜恋を)

歌 中中に みしはそれとも なかれかし わすれて人の おもかげぞうき
(613) (和歌所御歌合に、夜恋を)

歌 わくらばの ことのはさへに かれにしを みしおもかげの かたみがほなる
(666) (貞応元年秋のころ、或人のもとより)

歌 ながらへて とふもうつつと おもふかは きえにしゆめに のこるおもかげ

● 『袖中抄』 - 4 (1) 首 (1185-1190年)

(日本歌学大系別巻2)

(174) (俊頼)

歌 としふれど こすのきげきの 絶えまより 見えししなひは 面影にたつ
(250) (河立向) (かはたちむきて) おもふそら やすからなくに云云)

歌 夜之穂杼呂 (よのほどろ) わがいでてくれれば わぎもこが おもへりしくよ おもかげにみゆ
(570)

歌 ももとせに ひととせたらぬ つくもがみ われをこふらし おもかげにみゆ
(780)

歌 わぎもこが 急まひまびきの 面影に かけつつもとな おもほゆるかな

● 『寂蓮結題百首』 - 2 (1) 首 (1187年)

(書陵部蔵 501・152)

(15) (かいつばたみづにうつる)

歌 からころも きつつなれけむ おもかげも なみまにうつす はなのゆふばえ
(66) (たかがりのかへるみち)

歌 みかりのを ゆきのひかりに ふみわけて かへればとりぞ おもかげにたつ

● 『季経集』 - 1 (1) 首 (1190年頃)

(書陵部蔵 501・317)

(71) (同家歌合に、旅を)

歌 まだきより おもかげにたつ みやこかな ころやさきに たちかへるらん

● 『俊成五社百首』 - 2 (1) 首 (1190年)
(書陵部蔵 501・763)

(348) (權)
歌 日影さす ほどをもまたぬ 權は ただ面影の 花にや有るらん
(277) (旅恋)
歌 わするなと 契りし宿は いかがあらん 野にも山にも 面影ぞたつ

● 『玄玉和歌集』 - 6 (3) 首 (1191-92年)
(高松宮旧蔵本)

(183) (月前遠情といふ心を) (太皇太后宮小侍従)
歌 いとふらん くめぢの神の けしきさへ おもかげにたつ 夜半の月かな
(284) (題不知) (橘惟村)
歌 雪つもる よしのの山の あげぼのや 雲にまがひし 花のおもかげ
(501) (崇徳院近衛殿に御幸侍りける日、遠尋山花といふ心を) (皇太后宮大夫俊成)
歌 面影に 花のすがたを さきだてて いくへ越えきぬ 岑のしら雲
(571) (花の歌とて読める) (行円法師)
歌 おもひやる 四方のたかねの 花ざかり 見る面影に 雲をかけつる
(683) (皇太后宮大夫俊成)
歌 朝日さす ほどをもまたぬ 朝顔は ただ面かげの 花にぞ有りける
(707) (左大将)
歌 紅葉ちる 岑の嵐の くらきよに おもかげにたつ 袖の色かな

ろっぴやくばんうたあわせ

● 『六百番歌合』 - 16 (1) 首 (1193年)
(日大総合図書館蔵本)

(105) (廿三番 左勝) (女房)
歌 おもかげに 千さとをかけて 見するかな 春のひかりに あそぶいとゆふ
(182) (右) (隆信)
歌 おもかげは しぐれしあきの もみぢにて うすもえぎなる 神なびのもり
(513) (十七番 左勝) (定家)
歌 夢かさは 野への千くさの おもかげは ほのぼのまねく すすきばかりや
(642) (右勝) (信定)
歌 みればけに なかなかにとて うとくとも なほおもかげの はなるべきかは
(659) (左右共申無難之由 判云、左のすぎのこずゑに在明の月といひ、右のすぎのこずゑのゆふぐれのそらといへる、ともにいとをかしくも侍るかな、左はみわのやまは侍らねど、なかなかをかしくきこゆ、ありあけの月の殊にさびて、まさるとも可申を、右、ゆふぐれのそら又おとるべくもみえ侍らねば、猶持と申すべくや) (卅番 左勝) (定家)
歌 おもかげは をしへしやどに さきだちて こたへぬ風の 松にふくこゑ
(763) (廿二番 左持) (定家)
歌 あらざらん のちのよまでを うらみても その面影を えこそうとまね
(789) (判云、左、有明のつれなくみえし別よりと云ふ歌は、人のつれなかりしより、暁ばかりうき物はなしといへるなり、但さはありとも、月をもめでじといへらんもたがふべからずや、右の夢は人のなさけにやはあるべきと聞ゆれど、末句宜しくみゆ、右すこしまさり侍らん)
(五番 左) (定家)
歌 おもかげも わかれにかはる かねのおとに ならひかなしき しのめの空
(791) (云、左歌、彼喜撰が歌をいふに、詞かすかにして始終不慥とはかやうの体にや侍らん、右歌のせめての字、誠にいと叶ひても聞え侍らねども、袖におちくるなどいへる、心ふかく聞ゆ、右勝らん)
(六番 左勝) (女房)
歌 つきやそれ ほのみし人の おもかげを しのびかへせば 有明のそら
(839) (判云、左歌、彼小町が、あしもやすめずかよへどもといへる心をとりに、ねざめまでなほくるしきはといへる、たくみにみえ侍り、右歌、よはにや君がといへる歌をもととして、こころにかかるおきつ白浪といへる、又宜しく聞え侍り、持とすべし) (卅番 左勝) (女房)
歌 見しひとの ねくたれがみの おもかげに なみだかきやる さよのたまくら

(895) (左右共於難者不見之由申す判云、左歌、風体をかしからんと聞えたり、右歌、涙の色のかはりゆくらん心、優にこそみえ侍るを、只旅行をなげく歌にて、恋の心すくなくや侍らん、なぞらへて持と申すべきにや) (廿八番 左勝) (有家)

歌 たびねする われをばとこの あるじにて まくらにやどる さよのおもかげ

(898) (右) (寂蓮)

歌 きよみがた いはしくそでの なみのうへに おもひもわびし みがおもかげ

(906) (右) (中宮権大夫)

歌 あきの月 いもがおもかげ さそひきて わがころにも やどすなりけり

(1007) (右申云、おもひかたむる、ききよからず、左方申云、無難判云、左、ききよからず、ききよきもさることにて、かたむる、かたき、病なるべし、もじの関の勝歟)

(廿四番 左持) (女房)

歌 ふるさとに みしおもかげも やどりけり ふはのせきやの いたまもる月

(1053) (右方申云、左無指難、左申云、涙の河の千鳥、さすがにいかが判云、左、書札のたえだえなるによせて、雲の雁みえみみえずみといへる、心をかしく詞優なるべし、右、夜はの袂に風ふけてといひ、涙の川に千鳥鳴くなりといへる、すがた詞共に宜しく聞ゆ、左方の難は、枕のしたにあまぞつりするなどだにこそはよむことなれ、左歌の心もをかしくは侍れど、右歌のすがたいますこしたちまさるにや)

(十七番 左) (顯昭)

歌 やまどりの はつをのかがみ かけねども 見しおもかげに ねはなかれけり

(1054) (右勝) (隆信) (右申云、無難、左申云、みしまのにもずの草ぐきをよまれたるはいかに、証歌の侍るか、なくては如何判云、両首ふるき心、山鳥鏡によせて面影になき、もずの草ぐきを思ひてみしまのたづぬる、各古き事をもとせり、但、みしまのにもずの草ぐき可有証歌之由、如何、何の野によむべし、よむまじといふ事やは侍る、左、ねはなかれけりといへるよりは、ゆくへしられぬといへるすがた宜しくきこゆ、右の勝と申すべくや)

歌 おもかげを ほのみしまのに たづぬれど ゆくへしられぬ もずのくさぐき

(1105) (判云、左歌、梢に人のたゆるやうなることは、さもあることなれど、よそふることはかやうにいふもつねの例なるうへ、すみなれし人は木ずゑにといへる、すがた宜しく聞えて、下句も又優なるべし、右歌、初五字耳根塞ぎ、声#34236;をはらへる心あまりにや侍らん、左、ことのねにのみといへる、定勝にや侍らん) (十三番) (寄絵恋) (左勝) (定家)

歌 ぬしやたれ みぬよのいろを うつしおく ふでのすさびに うかぶおもかげ

● 『道家百首』 - 3 (1) 首 (藤原道家の生没：1193-1252年、1216年成立)
(書陵部蔵 503・244)

(13) (道家百首〔18道家百〕 冬日詠百首応製和歌)

(右大臣正二位兼左近衛大将臣藤原朝臣道家) (春廿首)

歌 よしのがは いはもとざくら めもはるに なみにたちそふ 花のおもかげ

(68) (冬十五首)

歌 秋のよの たまくらなれし 月かげの おもかげながら つもるゆきかな

(80) (恋十五首)

歌 うたたねの ゆめともさらば まぎれなで 見しやうつつに のこるおもかげ

● 『佚名家集』 - 1 (0) 首 (1195年以降)
(徳久邇文庫) (徳久邇文庫蔵本)

(77) (恋歌中に)

歌 ちぎりおきし すゑはなみだの 玉かづら かけはなれても のこるおもかげ

● 『無名草子』 - 1 (0) 首 (1196 - 1202年、鎌倉初期)
(日本思想大系 23)

(28) (薫大将)

歌 絶え果てぬ 清水になどか 亡き人の 面影をだに とどめざりけん

よしつね

● 『三十六番相撲立詩歌』 - 2 (0) 首 (藤原良経の生没：1169-1206年)
(島原松平文庫蔵本)

(44) (右) (旧宅)

歌 ふる郷は あさぢがすゑに 成りはてて つきにのこれる 人のおもかげ

(68) (右) (夜恋)
歌 みし人の ねくたれがみの 面影に なみだかきやる さよのた枕

● 『後京極殿御自歌合 建久九年』 - 4 (1) 首 (1198年)
(永青文庫蔵本)

(139) (此つがひ又、心の花にといひ物とや人のなどいへるこころ、おのおのいうにして勝劣分きがたし、仍持とすべし) (七十番) (左) (夜恋)

歌 みし人の ねくたれがみの 面影に 涙かきやる さ夜の手枕

(143) (左の、よさの海松なりけりと云へる心殊にをかしく侍るを、右の、うちぬる宵もといひ吹きだにすさめと侍るすがた、猶有りがたく見え侍るにや、勝と申すべくや侍らん七)

(十二番) (左) (寄閑恋)

歌 故郷に 見し面影も うつるらん 不破の関やの 板まもる月

(146) (右) (舟中恋)

歌 浮舟の たよりもしらぬ 浪路にも みし面影の たたぬ日ぞなき

(184) (右) (旧郷の心を)

歌 旧郷は 浅茅が末に 成りはてて 月に残れる 人の面影

● 『和歌色葉』 - 3 (1) 首 (1198年)
(日本歌学大系3)

(58)

歌 さかざらむ 物とはなしに 桜花 面影にしも まだき 立つらむ

(151)

歌 しきたへの 衣手ぬれて われまつと あはむ子どもは 面影にみゆ

(208)

歌 ももとせに ひととせたらぬ つくもがみ 我を恋ふらし 面かげにみゆ

● 『無名和歌集』 - 5 (0) 首 (1198年ごろ)
(慈円) (書陵部蔵 501・828)

(74) (恋歌とて)

歌 人しれず あひみぬさきの おもかげを あらぬさまにや おもひつくらん

(77) (恋歌とて)

歌 まどひいづる こひちにすすむ おもかげは かへさをしらぬ しるべなりけり

(86) (題不知)

歌 にごりえと むすぶちぎりは なりぬれど なほおもかげは うかぶなりけり

(98) (依恋発心と云ふ事を)

歌 おもかげの しばのいほにも はなれぬは なほすみぞめの そでぬらせとや

(109) (迷路不会恋)

歌 ちぎりしや そらだのめなる おもかげの みちふみまどふ みちしるべする

● 『祐茂百首』 - 2 (0) 首 (生没：1198 - 1269年)
(国立歴史民俗博物館蔵本*)

(8) (山家待花)

歌 いほむすぶ やまのをのへの しらくもに こころいそがす はなのおもかげ

(76) (忍遇恋)

歌 あけぬとや 月にかこちて なげかまし しのびにみつる よはのおもかげ

● 『中院集』 - 1 (0) 首 (藤原為家の生没：1198 - 1275年)
(為家) (書陵部蔵 153・216)

(31) (遇不逢恋)

歌 何ゆゑか 人の心は あらぬ世に 見し面影の かはらざるらん

● 『御室五十首』 - 5 (1) 首 (1199年)
(書陵部蔵 501・795)

(77) (秋十二首)

歌 あやしくも 月の光は くまなきを さびたる夜半の 庭の面かげ

(408) (詠五十首和歌) (左京権大夫隆信) (春十二首)
歌 わすれては それかとぞ思ふ 山桜 しるべとたのむ 花のおもかげ
(505) (詠五十首和歌) (左近衛権少将定家)
歌 面影に 恋ひつつまちし さくら花 さけば立ちそふ 嶺のしら雲
(546) (旅三首)
歌 面影の 身にそふ宿に 我まつと をしまぬ草や 霜がれぬらん
(817) (詠五十首和歌) (寂蓮) (春十二首)
歌 行く春も をしむ心は 暮れやらで 花のあたりに なれし面かげ

● 『正治初度百首』 - 17 (4) 首 (1200年)
(書陵部蔵 501・909)

(62) (冬十五首)
歌 竹の葉は おぼろ月夜に 風寒(さ)えて むらむらこほる 庭のおもかげ
(150) (秋)
歌 故郷の みかきが原の 月見れば むかしのことぞ おもかげにたつ
(314) (百首和歌) (御室守覚法親王) (春)
歌 この本に 花まちかねて ながむれば おも影よりぞ さきはじめける
(338) (夏)
歌 手にむすぶ 井での玉水 そこすみて みえけるものを 秋のおも影
(348) (秋)
歌 おも影に すまもあかしも さそひきて 心ぞ月に うらづたひける
(718) (詠百首和歌) (権大納言忠良) (春)
歌 木のもとに なれしなごりや 残るらん おも影しらぬ 花の色かな
(1219) (秋日詠百首応太上皇製和歌) (散位正四位下臣藤原朝臣隆信上春)
歌 山ざくら 散りなん後の おも影を かはらず見せよ 嶺のしら雲
(1324) (夏) (藤原定家)
歌 ぬぎかへて かたみとまらぬ 夏衣 さてしも花の おも影ぞたつ
(1412) (詠百首和歌 上総介藤原家隆上) (春)
歌 はつせ山 一むらかすむ ながめより 雲みにあまる 花のおもかげ
(1475) (恋)
歌 ほの見てし 人の心は うき草の した行く水の さそふおもかげ
(1574) (恋)
歌 かくばかり 面影にのみ たちそへば これをや逢ふと 思ひなさまし
(1582) (恋)
歌 思ひかね ほのめかしつる おもかげの ながめぞ西に 在明の月
(1781) (恋)
歌 おもひきや ありし其夜の 面影の たちみにつよく ならん物とは
(1935) (夏)
歌 まだしらぬ 衣の玉の 面影も 心にかくる はちすばの露
(1960) (冬)
歌 面影に 秋の名残を とどめ置きて 霜の籬に 花を見るかな
(2239) (秋)
歌 秋といへば おどろく風の 音よりも まづ面影に 出づる月かけ
(2283) (羈旅)
歌 おもひいづる 人や都に なかるらん こととふ月に そはぬ面かげ

● 『正治後度百首』 - 17 (3) 首 (1200年)
(内閣文庫蔵本)

(232) (月)
歌 花の春 なれし名残の 面かげよ 秋の月とは ちぎらざりしを
(244) (冬) (雪)
歌 御狩野や 雪はふりきぬ これも又 ぬるとも花の 春の面かげ
(330) (草花)
歌 たちかへり ふりにし庭の 花薄 しのばれぬべき 秋のおもかげ
(331) (月)
歌 ながめばと 契りし人は なけれども 月にしのばぬ 面かげぞなき

- (336) (紅葉)
歌 面かげは 庭の梢も 竜田山 心ばかりの 秋のけしきに
- (358) (想)
歌 いまぞしる のこるくまなき 面影に 心の月の すまんゆくへも
- (428) (秋草) (花)
歌 くれゆけど にほひはさらに かはらねば 猶面かげに みやぎのの萩
- (527) (秋草) (花)
歌 宮城のの こ萩が色も まだみねど 袂にうつる 面かげのすり
- (565) (暁)
歌 さらに又 見ぬいにしへの 面影も 心のうちに ありあけのそら
- (575) (山路)
歌 むかしこえし 跡のなさけの 面影も 竜田の山の 夕暮の空
- (583) (禁中)
歌 いにしへの いつつの人も なしつばに みぬ面かげは なほのこりつつ
- (634) (月)
歌 ひかりみつ もちのおもかげ いつなれや かたまゆ残す 有明の月
- (685) (宴遊)
歌 さもこそは 雪をめぐらす 色ならめ おもかげに見ゆる うす物の袖
- (710) (花)
歌 かへるさも 忘れぬ花の 面影は やどの桜の 木ずゑなりけり
- (811) (はな)
歌 春の夜の 夢路にかよふ 面影や 花のさかりの うつつなるらん
- (817) (夏 ほととぎす)
歌 郭公 ききだにわかぬ 一こゑの 面かげのみぞ あり明の空
- (893) (くじ)
歌 雲のうへの をとめのすがた みるをりぞ よしのの宮も 面かげにたつ

いわしみずわかみやうたあわせ しょうじにねん

● 『石清水若宮歌合 正治二年』 - 3 (0) 首 (1200年)

(三康図書館蔵本)

- (39) (左歌すみ家を吉野のおくにかへて心のはてを花に見えん程さもときこゆ、右、買臣が錦をきて故郷にかへる事、詩歌ふりたることばなればめづらしからずや、仍以左為勝)
(廿番 左持) (藤原公仲朝臣)
歌 おも影を 花のうつつに なして見ば ひさしかるべき 山ざくらかな
- (41) (左は花ををしむおもかげをうつつになし、右はあかずみるなごりを夢にむすばんと、共にやさしくきこゆれば持などにや) (廿一番 左持) (藤原伊綱)
歌 あかぬまも ちりぬる後も さくら花 面影のみぞ 常磐なりける
- (48) (右) (長明)
歌 面影を こそより雪は ふるせども なほめづらしき みねの初はな

● 『三百六十番歌合 正治二年』 - 5 (1) 首 (1200年)

(天理図書館蔵本)

- (115) (五十八番 左) (隆信朝臣)
歌 山ざくら ちりなむのちの おもかげを かはらずみせよ みねのしらくも
- (314) (右) (仁和寺宮)
歌 おもかげに すまもあかしも さそひきて ころぞ月に うらづたひする
- (632) (右) (隆信朝臣)
歌 とどめつる わがころにや ちかふらむ かへるをおくる けさのおもかげ
- (636) (右) (定家朝臣)
歌 おもかげは をしへしやどに さきだちて こたへぬかぜの まつにふくこゑ
- (643) (卅四番 左) (左大臣)
歌 みし人の ねくたれがみの おもかげに なみだかきやる さよのたまくら

● 『親盛集』 - 1 (0) 首 (1200年以降没)
(彰考館蔵本)

(72) (恋) (人のもとにつかはしける)
歌 うらみかね わするるひまも ありぬべし ただ**おもかげ**の なからましかば

● 『熊野懷紙』 - 1 (1) 首 (1200-1201年)
(古筆断簡*)

(84) (海辺冬月)
歌 千鳥なく こよひののちの **おもかげ**に 月すむなみの **たたむ**とすらん

● 『新古今和歌集』 - 19 (1) 首 (1201年)
(谷山茂氏蔵本)

- (148) (題しらず) (大納言経信)
歌 故郷の 花のさかりは すぎぬれど **おもかげ**さらぬ 春の空かな
- (693) (皇太后宮大夫俊成)
歌 へだて行く よよの**面かげ** かきくらし 雪にふりぬる としの暮かな
- (837) (人におくれてなげきける人につかはしける) (西行法師)
歌 なきあとの **おもかげ**をのみ 身にそへて さこそは人の こひしかるらめ
- (940) (藤原雅経)
歌 故郷の けふの**面かげ** さそひこと 月にぞちぎる さよのなか山
- (941) (和歌所月十首歌合のついでに、月前旅といへる心を、人人つかうまつりしに)
(摂政太政大臣)
歌 わすれじと ちぎりていでし **面かげ**は みゆらんものを 古郷の月
- (1004) (左大将朝光、五節舞姫たてまつりけるかしづきをみて、つかはしける)
(前大納言公任)
歌 天つそら とよのあかりに みし人の 猶**面かげ** のしひて恋しき
- (1126) (千五百番歌合に) (摂政太政大臣)
歌 身にそへる その**おもかげ**も きえななむ ゆめなりけりと わするばかりに
- (1136) (水無瀬恋十五首歌合に、春恋の心を) (皇太后宮大夫俊成女)
歌 **面影**の かすめる月ぞ やどりける 春やむかしの そでの涙に
- (1185) (題しらず) (西行法師)
歌 **面かげ**の わすらるまじき わかれかな なごりを人の 月にとどめて
- (1219) (貫之)
歌 かけておもふ 人もなけれど ゆふされば **おもかげ**たえぬ 玉かづらかな
- (1265) (肥後)
歌 **面かげ**の わすれぬ人に よそへつつ いるをぞしたふ 秋のよの月
- (1270) (八条院高倉)
歌 くもれかし ながむるからに かなしきは 月におぼゆる 人の**面影**
- (1326) (皇太后宮大夫俊成女)
歌 露はらふ ねざめは秋の むかしにて 見はてぬ夢に のこる**面かげ**
- (1333) (水無瀬の恋の十五首歌合に) (雅経)
歌 見し人の **面影**とめよ 清見がた 袖にせきもる 波のかよひぢ
- (1390) (題しらず) (定家朝臣)
歌 かきやりし そのくろかみの すぢごとに うちふすほどは **面かげぞたつ**
- (1391) (和歌所歌合に、遇不逢恋のころを) (皇太后宮大夫俊成女)
歌 ゆめかたよ みし**面影**も ちぎりしも わすれずながら うつつならねば
- (1394) (崇徳院に百首歌たてまつりける時、恋歌) (皇太后宮大夫俊成)
歌 おもひわび 見し**面影**は さておきて こひせざりけむ をりぞこひしき
- (1681) (百首歌よみ侍りけるに) (摂政太政大臣)
歌 古郷は 浅茅がすゑに 成りはてて 月にのこれる 人の**面影**
- (1960) (心懐恋慕、渴仰於仏)
歌 別れにし その**面かげ**の 恋しきに 夢にもみえよ 山のはの月

● 『通親亭影供歌合 建仁元年三月』－ 1 (1) 首 (1201年)
(東大国文学研究室蔵本)

(59) (十番 左) (宮内卿)
歌 鶺鴒よる おきつしまねの いはつつじ おも影にたつ かがり火の影

せんとうくだいごじゅうしゅ

● 『仙洞句題五十首』－ 2 (0) 首 (1201年)
(書陵部蔵 502・23)

(6) (冬日同詠五十首応製) (正四位下行左近少将兼安芸権介藤原朝臣定家上)
歌 春霞 かすみそめぬる と山より やがて色そふ 花の面影

(10) (俊成卿女)
歌 面かげの 花を山路の しるべにて 跡なき峰の 雲を分けきぬ

● 『老若五十首歌合』－ 3 (0) 首 (1201年)
(永青文庫蔵本)

(73) (三十七番 左) (前権僧正)
歌 面影や 花より後も のこるらん めかれぬ物は ころなりけり

(95) (四十八番 左) (定家)
歌 としのうちの きさらぎやよひ 程もなく なれてもなれぬ 花の面影

(484) (右) (雅経)
歌 故郷の けふの面影 さそひこと 月にぞちぎる さよの中山

● 『和歌所影供歌合 建仁元年八月』－ 2 (0) 首 (1201年)
(群書類従本)

(34) (右) (宗安)
歌 明けゆくは 秋きにけりと しら露に おき分れぬる 夏の面影

(78) (右) (寂蓮)
歌 都人 月はへだてぬ おもかげに ならはぬものは さをしかの声

● 『石清水社歌合 建仁元年十二月』－ 1 (0) 首 (1201年)
(内閣文庫蔵本)

(20) (右) (寂蓮)
歌 面かげは みやこながらの うたたねに まつかぜぞふく さやの中山

しゅつかくほっしんのう

● 『御室撰歌合』－ 1 (0) 首 (守覚法親王) (1201年成立)
(永青文庫蔵本)

(81) (左、よろしく侍れど、右、ことにやさしければ、此番、いかにも右勝にて侍るべきなりと被仰出了) (四十一番 左) (隆房卿)

歌 冬がれの 野べのけしきを ながむれば 秋みし花の 面影もなし

● 『建仁元年十首和歌』－ 2 (0) 首 (1201年)
(有吉保氏蔵本)

(37) (尋花問主作者同前仍略之)
歌 尋ねつる やどの梢の なさけまで わすれがたみや 花の面かげ

(198) (山路風雪)
歌 よしの山 雪ちる風に こえ行けば 冬よりをしき 花のおも影

● 『水無瀬恋十五首歌合』－ 8 (1) 首 (1202年)
(日大総合図書館蔵本)

(2) (右) (俊成卿女)
歌 面影の かすめる月ぞ やどりける 春やむかしの 袖のなみだに

(48) (右勝) (定家)
歌 おも影も まつ夜むなしき 別にて つれなくみゆる 在明の空

(88) (右勝) (宮内卿)
歌 契りしも あらずなりける 面影は ありしなごらの わたりなれども

(95) (左、かぢ枕すとはてて侍る、いかがなど侍りしを、右の、身をうしまどもさまで侍らぬにやとて、持にさだまり侍りしなり) (四十八番 左勝) (親定)
 歌 おもふ人を うきねの夢に みなと河 さむる袂に のこる**面かげ**
 (98) (右勝) (家隆)
 歌 うき枕 浪になみしく 袖の上に 月ぞかさなる なれし**面影**
 (104) (右) (雅経)
 歌 みし人の **面影**とめよ 清みがた 袖にせきもる 浪のかよひぢ
 (110) (右) (定家)
 歌 すまのうらや 浪に**面影** **たちそひて** せき吹きこゆる 風ぞかなしき
 (126) (右) (雅経)
 歌 ささのくま ひのくま河に ぬるる袖 ほさでや人の **面影**もみん

● 『千五百番歌合』 - 24 (6) 首 (1202年)

(高松宮旧蔵本)

(262) (右) (兼宗卿)
 歌 **おもかげ**に こぞのさくらを さかせてぞ 花まつほどは ながさめにする
 (299) (左、すはのうみのこほり、右、おくやまのゆきの木ずゑ、とりどりに見え侍れば勝負難定歟)
 (百五十番 左) (顕昭)
 歌 よし野山 みやこながらぞ いりにける **おもかげにたつ** 花のたよりは
 (323) (左歌、はるさめのふるののをざさといへる詞つづきよろしくこそ見え侍るめれ
 右歌はことなる事なき述懐に侍るうへに愚老が歌に侍りけり、たまたま判者の人数にまかりあたり、例によりて勝負をつけずや侍るべからん) (百六十二番 左) (保季朝臣)
 歌 **おもかげ**を はるのほひに **さきだてて** 枝にしられぬ 花を見るかな
 (347) (左歌、よし野の山の雪、心ありて見え侍り、右歌は、はつせのてらのかねしばしなつげそといへる、心とりどりに侍るを、なほやまのしらゆききえがてにするといへる心宜しくや侍らん、まさると申すべきにや) (百七十四番 左) (小侍従)
 歌 つくづくと はなにむかひて いざさらば ちりなんのちの **おもかげ**にせむ
 (414) (右) (定家朝臣)
 歌 あかざりし かすみのころも **たちこめて** 袖のなかなる 花の**おもかげ**
 (529) (右) (家隆朝臣) (左歌、さほひめのそむる心、おほかたは山姫をはるはさほひめといひ、秋はたつたひめとはいへれど、春も秋も花の色色にとりてはすみれのみにやはおどろくべからむ、右歌、なほおもかげに桜花といひて、やよひの雲のくれがたの空といへる、尤宜しく侍るべし、以右為勝)
 歌 さらに又 なほ**おもかげ**に さくらばな やよひの雲の くれがたのそら
 (607) (右) (越前)
 歌 夏ごろも いそぎかへつる かひもなく **たちかさねたる** はなの**おもかげ**
 (797) (右) (通光卿)
 歌 さなへとる けふ**おもかげ**に **たちそめて** いな葉もそよの 秋のはつかぜ
 (811) (右) (雅経)
 歌 いにしへや 見ぬ**おもかげ**も **たち**ばなの 花ちるさとの 在明の空
 (954) (四百七十八番 左) (良平)
 歌 かがみかと みゆるひむろの こほりにぞ あらはれにける 冬**のおもかげ**
 (1391) (次)
 歌 松にふく 風こそあらね 霧のうちに かすみし春の 月**のおもかげ**
 (1468) (ねやのうちにさす月かげにめざめつつかたしくそでのつゆはらふなり)
 (七百三十五番 左) (顕昭)
 歌 むかしみし 月はあはれや まさりけん **おもかげ**にさへ ぬるる袖かな
 (2043) (右) (定家朝臣)
 歌 ゆきふかき まののかやはら あとたえて まだこととほし 春**のおもかげ**
 (2294) (右歌のこころ、つねに見なれたる心地しはべり左歌、下句の初、みみにたちて侍るにや、仍為持) (千百四十八番 左) (讃岐)
 歌 もろともに ありあけの空ぞ またれける ほのみかづきの よひ**のおもかげ**
 (2348) (左、いひしりて優に見たまふに、いはもとすげは、ねがたき事にのみききならひて侍るに、ただねばかりにはいかがと覚え侍れど、又さることもなどかはべらざるべき右、心さもと覚えて、詞宜しくいひくだされて侍り、猶右の可為勝にや) (千百七十五番 左) (公経卿)
 歌 ならべこし 枕はうとき **おもかげ**の うらめしながら なほぞはなれぬ

(2375) (右) (俊成卿女)

歌 おもひねの ゆめのうきはし とだえして さむる枕に きゆる**おもかげ**

(2380) (左歌、風吹けばいはうつ浪のおのれのみくだけでものおもふころかな、といへる歌にやにてはべる、これもやがてこの歌の心などをとらんとよまれたる歟右歌、心は侍るに、艶書をむすぶなど云ふ事をよまれたるぞまめまめしからぬこちし侍れど、難までははべらねば、可為持) (千百九十一番 左) (季能卿)

歌 **おもかげ**に ゆくへをとへば あぢきなく しらぬ涙の こたへがほなる

(2418) (千二百十番 左) (隆信朝臣)

歌 あさゆふに うき**おもかげ**を みなれざるを さすがにさても なぐさみやせん

(2493) (右) (定家朝臣)

歌 **おもかげ**は なれしなごらの 身にそひて あかぬころの たれちぎるらん

(2501) (右) (寂蓮) (右歌は、いつしかとくれをまつまのおほぞらはくもるさへこそうれしかりけれ、と申す歌の心にや、後拾遺に隆家卿歌、さもこそはみやこのほかのやどりせめうたてつゆけきくさ枕かな、これはただ三文字なれども、おきどころかはらねば、このことばによりてきよらにきこゆ、又ふるしとも申しつべし、但、あまりの事歟、ことばづかひなどよろしくみゆれば、右まさるとも申し侍りぬべし)

歌 **おもかげ**は くもるそらだに あるものを うたてくまなく すめる月かな

(2511) (右) (兼宗卿) (左歌は、ことわりはきこえたれど、詞くだけでや侍らん) (右歌は風情よろしく侍れば、為勝)

歌 あさゆふに なれゆく君が **おもかげ**は つらき心の ほかにやあるらむ

(2552) (千二百七十七番 左) (左大臣) (左歌は、身にそへるおもかげきえなば

ゆめとおもひてわすれんと侍る、さもと覚え侍り)

歌 身にそへる その**おもかげ**も きえななむ 夢なりけりと わするばかりに

(2606) (千三百四番 左) (具親) (左歌、宜しくよまれて侍るめり)

歌 いとはるる 身にそへとしも おもはじを ころならぬや 君が**おもかげ**

(2800) (あなしがはげにおとたかくきこゆなりしきしのぶべき露のむしろに) (千四百番 左) (公経卿)

歌 たつた山 こえしむかしの **おもかげ**は ふもとのさとの ありあけの月

● 『仙洞影供歌合 建仁二年五月』 - 2 (0) 首 (1202年)

(東大文学研究室蔵本)

(67) (八番 左持) (俊成卿女)

歌 夢かるとよ 見し**面影**も 契りしも わすれずながら うつつならねば

(74) (右) (鴨長明)

歌 まちなれし 名残ばかりの うたたねに **おも影**さそふ 玉だれの月

● 『若宮撰歌合 建仁二年九月』 - 2 (0) 首 (1202年)

(有吉保氏蔵本)

(1) (一番) (春恋) (左右同 左持) (俊成卿女)

歌 **おもかげ**の かすめる月ぞ やどりける 春や昔の 袖の涙に

(19) (左歌、色もなくてやこぼれつるなど、殊宜しきさまなり、右もめづらしくは侍れども、猶左の勝にや侍らん) (十番) (左旅泊恋) (右海辺恋) (左) (家隆朝臣)

歌 うき枕 浪になみしく 袖の上に 月ぞかさなる なれし**面影**

● 『水無瀬桜宮十五番歌合 建仁二年九月』 - 2 (0) 首 (1202年)

(書陵部蔵 501・74)

(1) (一番) (左) (春恋) (俊成卿女) (左右ともにかすみ、左ははるやむか

しの夜半の月になびき、右はそれかとばかり見えし明ぼの花に立ちまよふによりて、いづれまされともさだめがたし)

歌 **おもかげ**の かすめる月ぞ やどりける 春やむかしの 袖の涙に

(19) (左の歌は、色もなくてやこぼれつるなどといへることよろしき様なり、右も、珍しくは侍れども、猶左はすぐれてや侍らむ) (十番) (左) (海辺恋) (家隆朝臣)

歌 うき枕 波になみしく 袖の上に 月ぞかさぬる なれし**面影**

● 『慈鎮和尚自歌合』 - 1 (0) 首 (1190-1203年)
(永青文庫蔵本)

(202) (月あかかりける夜三位入道のもとへ) (右勝)
歌 紅葉ふく 風のたよりに 月おちて しもにうらある 庭のおもかげ

● 『通具俊成卿女歌合』 - 2 (0) 首 (1203年以前?)
(古筆断簡*)

(4) (九番 柳のめにぞ玉はぬく、などいふ事も思ひいでられて、かたがたころなきにあらねば、持などや申すべからん) (左)
歌 わがこころ しらぬやまぢの しらくもを いくへかさねつ はなのおもかげ
(21) (右)
歌 へだてゆく よよのおもかげ かきくらし ゆきとふりぬる としのくれかな

● 『影供歌合 建仁三年六月』 - 1 (0) 首 (1203年)
(東大国文学研究室蔵本)

(30) (右) (前常陸介隆重)
歌 なつふかき 野原の色に さそはれて 露にしをるる 秋のおも影

● 『秋篠月清集(良経)』 - 14 (3) 首 (1204年)
(天理図書館蔵本)

(225) (居処十首)
歌 ふるさとは あさちがすゑに なりはてて 月にのこれる 人のおもかげ
(308) (遊糸)
歌 おもかげに ちさとをかけて みするかな はるのひかりに あそぶいとゆふ
(365) (暁恋)
歌 つきやそれ ほのみし人の おもかげを しのびかへせば ありあけのそら
(369) (夜恋)
歌 みし人の ねくたれがみの おもかげに なみだかきやる さよのたまくら
(383) (寄関恋)
歌 ふるさとに 見しおもかげも やどりけり ふはのせきやの いたまもる月
(450) (初恋)
歌 やまのはに おもへばかはる 月もなし ただおもかげぞ こよひそひぬる
(511) (南海漁父百首) (春十五首)
歌 おもかげに もみぢの秋の たつたがは ながるるはなも にしきなりけり
(620) (夏廿首)
歌 はなのいろの おもかげに たつ なつごろも ころもおぼえず はるぞこひしき
(885) (恋十五首)
歌 みにそへる そのおもかげも きえななむ ゆめなりけりと わするばかりに
(1060) (暁更盧橘)
歌 たち花の にほひにさそふ いにしへの おもかげになる ありあけの月
(1092) (夏月を)
歌 なつのよは くものいづくに やどるとも わがおもかげに 月はのこさむ
(1202) (返し)
歌 きみと見む そのおもかげを やどしても そでははれなる わがやどの月
(1420) (舟裏恋)
歌 うきふねの たよりもしらぬ なみぢにも みしおもかげの たたぬひぞなき
(1480) (院影供のついでに当座、月前旅を)
歌 わすれじと ちぎりていでし おもかげは 見ゆらむものを ふるさとの月

● 『百詠和歌』 - 4 (0) 首 (1204年)
(内閣文庫蔵本)

(36) (濤如白馬來 伍子胥しにて、かばね大江にすてられぬ、その霊、水神となりて白馬にのりてあらはると云へり)
歌 難波江の あしのはなげの こまの色と しづみしあとの 浪のおもかげ

(80) (玉蘂含霜動 花橘、白きたまのうるへるがごとし、此ゆゑに霜を含めるに似たりと云へり)
 歌 吹く風に なみよる霜や たちばなの 花ちる里の 庭のおもかげ
 (137) (船) (黄帝剝木為舟画鷁浪前開) (ふねのかしらに鷁といへる鳥のかしらをつくり
 て、文鷁首と名づく、鷁は水鳥なり、よく水になれたる故に舟にかたどれり)
 歌 あかしがた 鳥がくれゆく 水鳥や あさこぐ舟の 跡のおもかげ
 (205) (琵琶) (推手前曰琵琶、引手却曰琵琶半月分絃出 びはの腹に穴あり、半月の如し、甲に有遠
 山之号)
 歌 遠山の いづれのをより 出でつらん なかばの月の 夜はの面影

かさもとときども

● 『前長門守時朝入京田舎打聞集』 - 2 (0) 首 (笠間時朝の生没：1204-1265年)
 (書陵部蔵 501・282)

(119) (題不知)
 歌 さだかにも ねらればこそは 夢にだに 見しおもかげを 人にかたらめ
 (221) (歳暮)
 歌 くれてゆく 年のつもりは おいらくの そのおもかげに あらはれにけり

● 『物語二百番歌合』 - 2 (0) 首 (1206年以前)
 (穂久邇文庫蔵本)

(26) (右) (中宮にしのびておはしましそめてあしたに)
 歌 おもかげは 身をぞはなれぬ うちとけて ねぬよのゆめは みるとなけれど
 (180) (右) (あすかゐのかたみのあふぎを御らむじて)
 歌 なみだがは ながるるあとは それながら しがらみとむる おもかげぞなき

● 『露色随詠集』 - 3 (1) 首 (1204-1216年)
 (鏝也) (書陵部蔵 501・195)

(15) (露色随詠集二 自歌六百首) (贈答三十七首) (月百首) (伊勢島松人)
 歌 さみだれに ほのかに月の 見えつるは おもかげなれや おもふあまりの
 (79) (住靈鷲山及諸住所)
 歌 ながむれば わがいほりより すみのぼる わしのみやまの 月のおもかげ
 (101) (閑居百首)
 歌 あと見えぬ こころのゆくへ ながむれば おもかげたてる みよしののいほ

● 『八雲御抄』 - 2 (1) 首 (1204-1242年)
 (日本歌学大系別巻3)

(50) (躬恒)
 歌 さかざらむ 物とはなしに さくらばな おもかげにのみ まだきたつらむ
 (159) (家持)
 歌 たかまどの 野べのかほばな おもかげに みえつついもは わすれかねつも

● 『無名抄』 - 1 (1) 首 (1211年)
 (日本古典文学大系 65)

(38) (俊成自讃歌事) (五条三位入道(俊成))
 歌 面影に 花の姿を 先立てて 幾重越え来ぬ 峰の白雲

じさんか

● 『自讃歌』 - 3 (0) 首 (1211年?)
 (京大附属図書館蔵本)

(26) (摂政太政大臣)
 歌 わすれじと 契りていでし 面影は 見ゆらんものを ふるさとの月
 (72) (俊成卿女)
 歌 おもかげの かすめる月ぞ やどりける 春やむかしの 袖のなみだに
 (80) (俊成卿女)
 歌 夢かたよ 見しおもかげも 契りしも わすれずながら うつつならねば

● 『定家十体』 - 4 (0) 首 (1213年以前)
(書陵部蔵 266・211)

- (33) (俊成卿女)
歌 ゆめかるとよ みし**おもかげ**も ちぎりしも わすれずながら うつつならねば
(41) (俊成卿女)
歌 露はらふ ねぞめはあきの むかしにて 見はてぬ夢に のこる**おもかげ**
(210) (俊成卿女)
歌 **おもかげ**の かすめる月ぞ やどりける 春やむかしの 袖のなみだに
(225) (後京極殿)
歌 わすれじと ちぎりていでし **おもかげ**は みゆらんものを ふるさとの月

● 『金槐和歌集』 - 1 (0) 首 (1213年)
(実朝) (高松宮旧蔵本)

- (609) (秋のころいひなれにし人のものへまかりしに便につけてふみなどつかはすとて)
歌 うはの空に みし**面影**を おもひいでて 月になれにし 秋ぞ恋しき

● 『歌合 建暦三年九月十三夜』 - 3 (0) 首 (1213年)
(内閣文庫蔵本)

- (11) (六番) (旅宿恋) (左) (女房)
歌 おもひつつ ひとり旅ねの 夢にだに 見ゆとは見えぬ 人のお**もかげ**
(18) (右) (俊成卿女)
歌 **おもかげ**の したはぬ旅の ゆめさめて あはれみやこの 露はものかは
(19) (十番) (左) (為家)
歌 **面かげ**を いくへの雲に さそひきて かたしく山の 床のあきかぜ

● 『内裏歌合 建保二年』 - 2 (0) 首 (1214年)
(永青文庫蔵本)

- (114) (右) (雅経朝臣) (万葉に、あへのしま山夕露にといひ、古今の、さやの中山な
かなかにといへる本歌の心、いづれもおもへる所侍れば、勝負申しがたくや侍らん)
歌 月よなほ さやの中山 なかなかに なに**面影**の 秋のふる里
(124) (右) (俊成卿女)
歌 **面影**は ちぎりしままの ことのはに まだきしぐるる 秋の色かな

● 『月卿雲客妬歌合 建保二年九月』 - 1 (0) 首 (1214年)
(島原松平文庫蔵本)

- (39) (人しれずかよふ心のくるしさはいづれもおなじにほの下みち)
(廿番) (左) (俊成卿女)
歌 はかなしや 夢ちたえゆく 鳥のねに なきてわかれし 人のお**もかげ**

● 『禁裏歌合 建保二年七月』 - 2 (0) 首 (1214年)
(内閣文庫蔵本)

- (42) (右) (菅原淳頼)
歌 月影に ちぎりて出でし **おもかげ**を わすれずしのぶ ふるさとの空
(47) (右) (範宗朝臣)
歌 このごろは 秋をしのだの もりにきて 月の露ちる 袖のお**もかげ**

● 『月卿雲客妬歌合 建保三年六月』 - 1 (0) 首 (1215年)
(内閣文庫蔵本)

- (16) (右) (丹後守藤原範宗)
歌 しら露の みなさき原 分けなれて やどるや月の 秋のお**もかげ**

● 『建保名所百首』－ 7 (3) 首 (1213-1218年)
(曼殊院蔵本)

- (69) (葛木山大和国) (藤原忠定)^{たださだ}
歌をとめごが かづらき山の 山桜 霞にもれし 面影ぞたつ
(529) (伊吹山近江国)
歌 玉かづら いぶきの山の 秋の露 たが面かげの 松虫の声
(567)
歌 おもかげは 日も夕暮に 立ちそひて 野島によする 秋の浦波
(693) (安達原陸奥国) (藤原知家)^{ともいえ}
歌 ふる雪に 安達の原の しらま弓 春の梢の 面かげぞたつ
(838) (浜名橋遠江国)
歌 逢ふことは はまなのはしに 行きまよひ 跡なき波に 残る面影
(852) (磯間浦紀伊国)
歌 かもめみる いそまのうらの 夕波に たが面影を かけて待つらん
(1100) (玉河里陸奥国)
歌 月の秋 雪のあしたも 卯の花の おもかげたえぬ 玉河の里

● 『拾遺愚草(定家)』－ 55 (17) 首 (1216年)
(書陵部蔵 510・511)

- (67) (恋廿首)
歌 夢のうちに それとてみえし 面影を 此世にいかで 思ひあはせん
(112) (見浦百首文治二年円位上人勸進之) (詠百首和歌) (侍従) (春廿首)
歌 いまもこれ すぎても春の 面影は 花みる道の 花の色色
(167) (恋十首)
歌 恋はよし 心づからも なげくなり こはたがそへし 面影ぞさは
(191) (山)
歌 あけぬとも 猶おもかげに 立田山 恋しかるべき 夜はの空かな
(453) (秋)
歌 又もあらじ 花より後の 面影に さくさへをしき 庭のむら菊
(496) (雑)
歌 おもかげは ただ目のまへの 心ちして 昔としのぶ 浮世なりけり
(503) (重奉和早率百首文治五年三月 詠百首和歌同題) (春)
歌 たづねきて 秋みし山の おもかげに あはれたちそふ 春霞かな
(577) (恋)
歌 たびねする あらき浜辺の 波の音に いとどたちそふ 人のおもかげ
(638) (花月百首建久元年秋、左大将家) (詠百首和歌) (権少将) (花五十首)
歌 梢より ほかなる花の 面影に ありしつらさの にたる風かな
(787) (神祇十)
歌 おも影に 思ふもさびし うづもれぬ ほかだに冬の 雪のしら山
(843) (枯野)
歌 夢かさは のべの千草の おもかげは ほのぼのなびく 薄ばかりや
(855) (尋恋)
歌 おもかげは をしへしやどに さきだちて こたへぬ風の 松にふくこゑ
(864) (怨恋)
歌 あらざらん 後の世までを 怨みても その面影を えこそうとまね
(866) (暁恋)
歌 おもかげも わかれにかはる 鐘の音に ならひかなしき しののめの空
(893) (寄絵恋)
歌 ぬしやたれ みぬよのことを うつしおく 筆のすさびに うかぶ面影
(921) (夏十五首)
歌 ぬぎかへて かたみとまらぬ 夏衣 さても花の 面影ぞたつ
(1014) (春廿首)
歌 あかざりし 霞の衣 たちこめて 袖のなかなる 花の面かげ
(1069) (冬十五首)
歌 雪ふかき まののかやはら 跡たえて まだこととほし 春のおもかげ

- (1084) (恋十五首)
歌 おも影は なれしなごらの 身にそひて あらぬ心の たれちぎるらん
(1112) (尋花)
- 歌 鳥のこゑ 霞の色を しるべにて おもかげ句ふ 春の山ぶみ
(1130) (谷鹿)
- 歌 さをしかの あさゆく谷の 玉かづら 面影さらず 妻やこふらん
(1166) (恋廿五首寄名所)
- 歌 たづねぬは おもひし三輪の 山ぞかし わすれねもとの つらき面かげ
(1180) (雑廿五首旅五首春、夏、秋、冬、暁)
- 歌 おもかげに あらぬ昔も たちそひて なほしののめの 旅ぞかなしき
(1248) (野島崎)
- 歌 おもかげは 日もゆふ暮に たちそひて 野島によする 秋のうら浪
(1376) (恋十五首)
- 歌 くるる夜は 面影みえて 玉かづら ならぬ恋する 我ぞかなしき
(1478) (旅)
- 歌 古郷に とまる面影 身にそひて 旅には恋の みちぞはなれぬ
(1526) (盧橘驚夢)
- 歌 袖の香は 花たちばなに のこれども たえてつれなき ゆめの面かげ
(1568) (遇不会恋)
- 歌 よそ人は なになかなかの 夢ならで やみのうつつの みえぬ面かげ
(1671) (恋)
- 歌 おもかげは たつたの山の はつもみぢ 色に染めてし むねぞ焦るる
(1687) (述懐)
- 歌 なぐさめは 秋にかぎらぬ 空の月 春よりのちも 面かげの花
(1713) (旅)
- 歌 おもかげの ひかふるかたに かへりみる みやこの山は 月織くして
(1735) (仁和寺宮五十首建久九年夏) (詠五十首和歌) (左近衛権少将藤原定家)
- 歌 面影に こひつつまちし 桜花 さけばたちそふ 峰の白雲
(1776) (旅三首)
- 歌 おもかげの 身にそふやどに 我まつと をしまぬ草や 霜がれぬらん
(1788) (院五十首建仁元年春 春日応太上皇製和歌五十首 正四位下行左近衛権少将兼安芸権介臣藤原朝臣定家上) (春)
- 歌 としのうちの きさらぎやよひ ほどもなく なれてもなれぬ 花のおもかげ
(1829) (院句題五十首建仁元年十一月 冬日同詠五十首応製和歌) (正四位行) (初春待花)
- 歌 春霞 かすみそめぬる と山より やがてたちそふ 花の面影
(2079) (旅行)
- 歌 かへりみる その面影は たちそひて ゆけばへだたる 峰の白雲
(2156) (朝花)
- 歌 よのつねの 雲とはみえず 山桜 今朝や昔の 夢のおも影
(2316) (建久六年秋ころ、大将殿にて末句十をかき出でてよむべきよし侍りに、当座)
- 歌 こしかたは みな面影に うかびきぬ 行すゑてらせ 秋のよの月
(2477) (御返し)
- 歌 おも影の それかと見えし 春秋も きえて忘るる 雪の明ぼの
(2540) (暁恋)
- 歌 面影も まつ夜むなしき 別にて つれなくみゆる 有明の空
(2546) (関路恋)
- 歌 すまのうらや 浪に面影 たちそひて 関吹きこゆる 風ぞかなしき
(2551) (建久五年夏左大将家歌合、恋三島江)
- 歌 うつりにき 我が心から みしま江の 入江の月の あかぬ面影
(2573) (恋不離身といふ心を)
- 歌 心をば つらき物とて 別れにし 世世の面影 なにしのぶらん
(2596) (寄糸恋)
- 歌 夏引の いとしもなれし 面影は たえてみじかき 後ぞかなしき
(2625) (かぎりなく忍びて、人にしらせざりける人に)
- 歌 あぢきなく なにと身にそふ 面影ぞ それともみえぬ やみのうつつに

(2626) (返し)

歌 いつもの たが**おもかげ**か 身にそはむ 夢にまさらぬ やみのうつつに

(2640) (恋歌よみける中に)

歌 かきやりし その黒かみの すぢごとに うちふす程は **面影ぞたつ**

(2667) (ひさしくかきたえたる人に)

歌 **おもかげ**の 身にそふ袖の 匂ゆゑ ただその色に しむ心かな

(2701) (みなせどのの山のうへの御所つくられてのちまゐりて、池など見めぐりてまかりいづとて、清範朝臣のもとへ)

歌 **おも影**に もしほの煙 **立ちそひて** 行かたつらき 夕がすみかな

(2726) (返し)

歌 おいらくの 世のことわりを 身にしれど まだ**おも影**は **たちもはなれず**

(2749) (同年九月十三夜、前大僧正の御もとにたてまつる)

歌 **おもかげ**に おほくの今夜 しのぶれど 月と君とぞ かた見なりける

(2814) (そののち日数へて、又あれより)

歌 春のよの おぼろ月よも おぼろけの 夢ともみえぬ 花の**面かげ**

(2837) (おなじころ人のとぶらへりし、返し)

歌 **おもかげ**は まだかぎりとも たどられず いとしも人の しづのをだまき

(2856) (又のとし三月七日、かもに御幸侍りしつぎの日、大僧正十首御歌、返し)

歌 とほさかる 月日のうさを かぞへても **面影**のみぞ いとどけぢかき

(2868) (返し)

歌 かすみにし けふの月日を へだてても 猶**面影**の **たちぞはなれぬ**

しゅういぐそういんがい

● 『拾遺愚草員外(定家)』 - 8(0)首 (1216年)

(書陵部蔵 510・511)

(8) (春本雖無部分、為一見安書之)

歌 軒ばにぞ まだ**面影**は みえながら さめゆく夢も 梅のにほひに

(74) (恋)

歌 けふはまた ありしよりけに ねをぞなく うきだにそひし よその**面かげ**

(90) (雑)

歌 はまゆふや かさなる山の いくへとも いさしら雲の その**面影**

(310) (冬五首)

歌 さくら花 をしみしくれも まだちかき **おもかげ**ながら 時雨する冬

(330) (建久七年秋ころ、いたはること侍りてこもりゐたる夕つがた、大将殿よりこの歌をかみにおきてただいまと侍りしかば、使につけてまゐらせし、いまみれば歌にてもなかりけり)

歌 らむせいの 花のにしきの **面影**に いほりかなしき 秋の村雨

(365) (建久三年九月十三夜、左大将殿にまゐりたりしかば、にはかに人人めしにつかはして、いまこんといひしばかりに、といふ歌をかみにおきてよませられしに、これらはかきとどむべき物にもあらねど、筆をだにそめあへぬみだれがはしさもなかなかやうかはりてやとて)

歌 あまた見し 秋にもさらに おもほえず かばかりすめる 月の**面かげ**

(470) (閑日一思旧、旧遊如目前)

歌 **おもかげ**は ただ目のまへの 夢ながら かへらぬむかし あはれいくとせ

(537) (夜)

歌 昔とて こふともあはん 物なれや なに**面影**の 秋の夜の空

● 『定家卿百番自歌合』 - 5(2)首 (1216年)

(書陵部蔵 501・74) (自詠)

(110) (右) (五十五番) (左勝) (歌合百首)

歌 **おもかげ**は をしへしやどに **さきだちて** こたへぬかぜの 松に吹く声

(131) (六十六番) (左) (千五百番)

歌 **おもかげ**は 馴れしなごらの 身にそひて あらぬ心の 誰契るらん

(132) (右勝) (恋不離身)

歌 こころをば つらきものとして わかれにし よよの**おもかげ** 何したふらん

(144) (右) (無題)

歌 かきやりし そのくろかみの すぢごとに うちふすほどは **おもかげぞたつ**

(146) (右) (一字百首)
歌 はまゆふや かさなる山の 幾重とも いさしら雲の その面影

● 『内裏百番歌合 建保四年』 - 2 (0) 首 (1216年)
(書陵部蔵 151・361)

(6) (右) (越前)
歌 ちりぬれど かたみは久し むめの花 とまる面かげ 袖のうつりが
(169) (八十五番) (左持) (実氏)
歌 うたたねに つれなくみえし 面かげは 夢と知りても 猶やうらみん

つちみかどのいんひやくしゅ

● 『土御門院百首』 - 1 (0) 首 (1216年)
(書陵部蔵 151・181)

(75) (後朝恋)
歌 わすれめや おも影さそふ 在明の 袖にわかるる よこ雲の空

● 『歌合 建保四年八月廿二日』 - 2 (0) 首 (1216年)
(永青文庫蔵本)

(61) (卅一番) (左勝) (経通)
歌 旅ごろも きつつかれ行く ふる郷の おもかげのみぞ 袖にのこれる
(64) (右勝) (康光)
歌 思ひねの 草のまくらの 夢路にも わすれずのこる 人の面影

● 『歌合 建保四年八月廿四日』 - 1 (0) 首 (1216年)
(永青文庫蔵本)

(80) (右) (範基)
歌 なさけなく 成行く人の 面かげは 夢にもつらき ならひのみかは

● 『源家長日記』 - 2 (0) 首 (1216-1221年)
(古典文庫)

(16) (八条院に高倉殿と申す人)
歌 くもれかし ながむるからに 悲しきは 月におぼゆる 人のおもかげ
(186) (僧正)
歌 面影を こはいかにせん 昨日など けふをかざりと かたらざりけん

● 『右大臣家歌合 建保五年九月』 - 1 (0) 首 (1217年)
(書陵部蔵 510・41)

(3) (二番) (左勝) (宰相中将) (両首いづれも優にこそ侍るめれと申出し侍りしに、
待つに物うき、とはいかによめるぞと侍りしかば、秋も深行くををしむとて、月まつ心もおこたるにや侍
らんと申し侍りしを、人人、物うくは月に心ざしなくやと定め申され侍りしうへは、左いと宜しくみえ侍
れば、勝と定められ侍りにき)
歌 ながき夜の 秋さへいたく ふけぬらし 待出づる月の かはる面影

● 『建春門院中納言日記』 - 3 (0) 首 (1219年?)
(たまきはる〈健御前の記〉の総索引)

(4) (作者)
歌 おもかげの みし人かずは わすれねど かたるはゆめに かはらざりけり
(9) (作者)
歌 わすられぬ そのおもかげに こひわびて わがくろかみを かたみとやみん
(12) (作者)
歌 かざりなき おもかげばかり とどめおきて いかなるみちの すがたなるらん

● 『歌合 建保七年二月十二日』 - 3 (0) 首 (1219年)
(内閣文庫蔵本)

(34) (右勝) (範宗朝臣)
歌 おのづから 夢に見えけん おもかげを それとばかりは 今やしるらん

(46) (右) (範綱)
歌 おのづから ぬる夜明行く かねの音に むすびもはてぬ 夢の面影
(47) (廿四番) (左) (兵衛内侍)
歌 身にそへる うき面影の 別より これをかたみの 有明の月

● 『為家集』 - 14 (7) 首 (藤原為家の生没：1219-1271年)

(書陵部蔵 501・431)

(135) (建長五三)
歌 よしさらば 風もいとはじ 山桜 見ぬおもかげぞ 春は久しき
(155) (弘長元)
歌 よしさらば ちるまではみじ 山桜 花のさかりを おもかげにして
(156) (弘長元)
歌 古の 大内山の さくらばな おもかげならで みぬぞかなしき
(189) (花浮澗水寛元四年日吉三社歌合)
歌 麓なる 谷のさくらの ます鏡 ゆきと浪との 面影ぞたつ
(272) (春貞応三)
歌 面影は よそなる雲に たちなれし たかまの桜 花咲きにけり
(547) (同五八)
歌 色かはる 雲のはたへの 秋風に 初かりがねの おもかげぞたつ
(1043) (深夜恋建長三年)
歌 こぬ人の おもかげみえて いたづらに ひかりぞいづる いざよひの月
(1146) (寄鬘恋同年早卒百首)
歌 玉かづら おもかげばかり 身にそへて おもひし末に かけはなれけり
(1303)
歌 わすられぬ 人のおもかげ 立ちそへど ひとりぞこゆる あしがらの山
(1304) (建長五十二)
歌 ふじの山 たかねの煙 行きかへり みし面影の たたぬ日ぞなき
(1307) (文永元年粉河寺卅三首)
歌 みねの雲 磯べの波と かはれども 猶ふる郷の おもかげぞたつ
(1513) (同八年二月照心仲業入道勸進三首経料紙料)
歌 わすれては おもかげ遠く こふるかな ありとおもはぬ むかしなれども
(1791)
歌 みねの雲 浦わの波と 分けきても 都はさぞな おもかげぞたつ
(1908) (春草)
歌 おもかげを 今いづくとは しらねども 春かぜわたる 野べのわか草

● 『為家千首』 - 11 (2) 首 (生没：1219-1271年)

(書陵部蔵 501・141)

(90)
歌 かづらきや さかぬさくらの おもかげに まづたちならす みねのしら雲
(95)
歌 おもかげは よそなるくもに たちなれし たかまのさくら 花さきにけり
(255) (夏百首)
歌 ふるさとは すみけん人の そでのかも 花たちばなに のこるおもかげ
(444) (秋二百首)
歌 ながむれば まだみぬくもの ほかまでも おもかげさそふ あきのつきかな
(623) (恋二百首)
歌 つれもなく なほありあけの おもかげを うきにはたへて しのびつるかな
(697) (恋二百首)
歌 うきをしる 心はこひに まけはてて ただおもかげに ぬるるそでかな
(707) (恋二百首)
歌 ながめつつ よひのままなる とりのねに うきおもかげは かへりだにせず
(725) (恋二百首)
歌 ひとりのみ あかせるよはの とりのねは うらみなれにし おもかげもなし
(750) (恋二百首)
歌 するらめや はつかの月の はつかにも みしおもかげに 恋ひわたるとは

(782) (恋二百首)
歌 おもかげの うきにまぎれば おのづから わするるとがも ながさみなまし
(796) (恋二百首)
歌 きえねただ そでにかつちる たまかづら おもかげたえぬ ゆふぐれもうし

ちょうかくほっしんのうしゅう

● 『澄覚法親王集』 - 2 (0) 首 (生没: 1219 - 1289年)
(書陵部蔵 501・266)

(9) (春雪)
歌 ちるはなの うきおもかげを さそひつつ かすめるそらに あはゆきぞふる
(213) (朝恋)
歌 きぬぎぬに あかでわかれし おもかげの いまも身にそふ あさぼらけかな

どうじょほっしんのう

● 『道助法親王家五十首』 - 10 (0) 首 (1220年)
(国立歴史民俗博物館蔵本)

(164) (遠帰雁)
歌 雲にいる こゑもすがたも きえはてて おもかげばかり かへるかりがね
(167) (遠帰雁)
歌 帰るかり 霞みていぬる 山のはに おもかげのこる しのめの月
(264) (河款冬)
歌 咲きかかる 下ゆく水の おも影に かはなみおもき きしの山ぶき
(370) (夜盧橋)
歌 月かげに むかしわすれぬ おもかげの げに橋は 袖の香ぞする
(837) (恋) (寄雲恋)
歌 わするなよ 夕の雲の 跡もなく 空になりぬる 人のおもかげ
(854) (恋) (寄雲恋)
歌 わすれずよ うき雲がくれ すむ月の ほのかにみえし 人のおも影
(960) (寄枕恋)
歌 かくてよに ふるき枕の 跡はあれど ねやはむなしき ひとのおも影
(968) (寄枕恋)
歌 うたたねの 夢てふものを 契りにて 有りしまくらに のこるおもかげ
(1014) (山旅)
歌 おもかげに 今おく露ぞ しげりゆく むかしにこゆる うつのやまみち
(1032) (山旅)
歌 ふる里の 空もたよりの 月に又 みしおもかげのさ やの中山

● 『安嘉門院四条五百首』 - 3 (1) 首 (生没: 1222-1283年?)
(島原松平文庫蔵本)

(146) (女郎花)
歌 おもかげは ほのかになりぬ をみなへし うゑしまがきも 遠ざかりつつ
(161) (九月尽)
歌 くもまゆく 有明の月の 面影を 身にそへながら 秋ぞわかるる
(345) (薄) (阿仏尼)
歌 あづまぢの うら風なびく をばなにも まのの入江の 面かげぞたつ

ほうじょう

● 『時広集』 - 4 (0) 首 (北条時広の生没: 1222 - 1275年)
(書陵部蔵 501・219)

(137) (逢恋)
歌 こひこひて いまはこよひの ちぎりにも わがおもかげに ものぞかなしき
(142) (春恋)
歌 みし人の おもかげかすむ はるのよに わが身むかしの 月もうらめし
(152) (筑波山)
歌 つくば山 みねどもさらに わすれぬは ふかきちぎりの ひとのおもかげ
(155) (浜名橋)
歌 おもかげは それとも見えて ゆきとまる はまなのはしに あきかぜぞ吹く

● 『海道記』 - 5 (4) 首 (1223年)

(日本古典全書)

(8) (作者)

歌 苗代の 水にうつりて 見ゆるかな 稲葉の雲の 秋のおもかげ

(29) (作者)

歌 夏草は まだうら若き 色ながら 秋に **さきだつ** 野辺のおもかげ

(38) (作者)

歌 袖ふりし 天つ乙女が 羽衣の **面影にたつ** あとの白浪

(44) (作者)

歌 忘れじな 浪のおもかげ **たちそひて** すぐるなごりの 大和多の浦

(49) (作者)

歌 とひきつる 富士の煙は 空にきえて 雲になごりの **おもかげぞたつ**

● 『六代勝事記』 - 1 (0) 首 (1223-1224年)

(群書類従・帝王)

(4) (六代勝事記〔366六代勝〕 (作者))

歌 風吹かぬ 御代にも猶ぞ おもひいる 入りにし月の 春のおもかげ

しょくかせんらくしよ

● 『続歌仙落書』 - 3 (0) 首 (1222-1224年)

(彰考館蔵本)

(51) 次 (春日社歌合に暁月を)

歌 古郷の 花のさかりは すぎぬれど **おもかげ**さらぬ 春のけふかな

(89) (出家の後かにもまゐりてみたらしに手あらふとて)

歌 みぎの手も その**面かげ**も かはりぬる われをばしるや みたらしの神

(105) (和歌所の歌合に遇不逢恋といふことを)

歌 夢かるとよ みし**おもかげ**も 契りしも わすれずながら うつつならねば

すけひらしゅう

● 『資平集』 - 1 (0) 首 (源資平の生没: 1223 - 1284年)

(書陵部蔵 501・316)

(91) (恋)

歌 わたのはら おき行く舟の ほのかにも みし**おもかげ**を かけてこふらし

どうじよほっしんのう

● 『詠十首和歌』 - 2 (0) 首 (道助法親王) (1225年)

(国立歴史民俗博物館蔵本)

(7) (溪雲)

歌 山びとの **おもかげ**かよふ しらくもに はなまちわたる たにのかけはし

(110) (窓灯)

歌 おきわかれ さてもいでにし **おもかげ**の のこるもつらき まどのともしび

ごとばいんじうたあわせ

● 『後鳥羽院自歌合』 - 1 (0) 首 (1226年)

(内閣文庫蔵本)

(18) (右) (待恋) (人はよもかかるなみだ、とつづき、身のならひにぞつれなかるらん、まことにあはれに、およびがたくみえ侍るほどに、たのめぬ人のおもかげに名のみはふかぬ、といへる、こころもふかくなほ有りがたく見侍れば)

歌 うつつにも たのめぬ人の **おもかげ**に なのみはふかぬ 庭の松風

● 『新勅撰和歌集』 - 15 (4) 首 (1230年)

(樋口芳麻呂氏蔵本)

(18) (題しらず) (曾禰好忠)

歌 さほひめの **おもかげ**さらず おるはたの 霞たちきる はるののべかな

(57) (崇徳院近衛殿にわたらせ給て、遠尋山花といふ題を講ぜられ侍りけるによみ侍りける)

(皇太后宮大夫俊成)

歌 **おもかげ**に 花のすがたを **さきだてて** いくへこえきぬ 峰の白雲

- (129) (暮春の心を) (入道二品親王道助)
 歌 わすれじな 又こむはるを まつの戸に あげくれなれし 花のおもかげ
 (827) (家歌合に、夜恋の心を) (後京極摂政前太政大臣)
- 歌 見しひとの ねくたれがみの おもかげに なみだかきやる さよのたまくら
 (846) (百首歌めされける時)
- 歌 うきふねの たよりもしらぬ 浪ぢにも 見しおもかげの たたぬ日ぞなき
 (916) (藤原教雅朝臣)
- 歌 おもかげは 猶ありあけの 月草に ぬれてうつろふ そでのあさつゆ
 (921) (寂蓮法師)
- 歌 うらみわび 思ひたえても やみなまし なにおもかげの わすれがたみぞ
 (922) (俊恵法師)
- 歌 しなばやと あだにもいはじ のちの世は おもかげだにも そはじとおもへば
 (923) (左近中将公衡)
- 歌 ちぎりしに かはるうらみも わすられて そのおもかげは 猶とまるかな
 (924) (前大納言忠良)
- 歌 世のうさや きこえござらむ おもかげは いはほのなかに おくれしもせじ
 (950) (題しらず)
- 歌 ひとはいさ おもひやすらむ たまかづら おもかげにのみ いとど見えつつ
 (1240) (なきひとびとをおもひいでてよみ侍りける) (八条院高倉)
- 歌 かずかずに ただめのまへの おもかげの あはれいくよに としのへぬらむ
 (1246) (周忌はててよみ侍りける)
- 歌 なごりなき けふはきのふを しのべども たつおもかげは はつる日もなし
 (1249) (賀茂重保身まかりてのち、つねにうたよみ侍りけるものどもあとにまかりあひて、友にあひて友をこふといへる心をよみ侍りけるによめる) (覚盛法師)
- 歌 うちむれて たづぬるやどは むかしにて おもかげのみぞ あるじなりける
 (1346) (権中納言通俊桂の家にて、旋頭歌よみ侍りけるに、こひの心をよめる) (俊頼朝臣)
- 歌 つれなさを おもひあかしの うらみつつ あまのいさに たくものけぶり おもかげにたつ

● 『建礼門院右京大夫集』 - 7 (1) 首 (1232年)

(九州大学蔵本)

- (47) (老人を恋ふ)
- 歌 つくもがみ こひぬ人にも いにしへは おもかげにさへ みえけるものを
 (120) (人の心のおもふやうにもなかりしかば、すべてしられずしらぬむかしになしはててあらなど思ひし比)
- 歌 つねよりも おもかげにたつ ゆふべかな 今やかぎりとおもひなるにも
 (171) (月の夜、れいのおもひいでずもなく)
- 歌 おもかげを 心にこめて ながむれば しのびがたくも すめる月かな
 (173) (なにとなく、ねやのさむしろうちはらひつつ、おもふことのみあれば)
- 歌 ゆふされば あらましごとの おもかげに 枕のちりを うちはらひつつ
 (215) (又、これもりの三位中将、くまのにて身をなげてとて、人のいひあはれがりし、いづれもいまのちをみきくにも、げにすぐれたりしなどおもひいでらるるあたりなれど、きはことにありがたかりしかたちようい、まことにむかし今みる中にためしもなかりしぞかし、さればをりをりにはめでぬ人やありし、法住寺殿の御賀に、せいがいはまひてのをりなどは、光源氏のためしもおもひいでらるるなどこそ人人いひしか、花のにほひもげにけおされぬべくなど、きこえしぞかし、そのおもかげはさることにて、みなれしあはれ、いづれかといひながらなほことにおぼゆ、おなじこととおもへと、をりをりはいはれしを、さこそといらへしかば、されどさやはあるといはれし事など、かずかづかなしともいふばかりなし)
- 歌 春の花の 色によそへし おもかげの むなしきなみの したにくちぬる
 (225) (さてもげにながらふる世のならひ、心うくあげぬくれぬとしつつ、さすがにうつし心もまじり、物をとかくおもひつづくるままに、かなしさもなほまさる心地す、はかなくあはれなりける契のほど、我が身ひとつのことにはあらず、おなじゆかりのゆめみる人は、しるもしらぬもさすがおほくこそなれど、さしあたりためしなくのみおぼゆ、むかしも今ただのどかなるかぎりあるわかれこそあれ、かくうき事はいつかはありけるとのみおもふもさる事にて、ただとかく、さすがおもひなれにしことのみわすれがたさ、いかでいかで今はわすれむとのみおもへど、かなはぬかなしくて)
- 歌 ためしなき かかるわかれに なほとまる おもかげばかり 身にそふぞうき

(329) (人のうれへ申ししことのあるを、さるべきひとの申しさたするをきけば、後白河院の御時おほせくだされけるなどとして、このさめやらぬ夢とおもふ人の、蔵人の頭にてかきたりけるとて、その名をきくにいかがあはれのことものめならむ)

歌 おもかげも その名もさらば きえもせで ききみるごとに ころもどはず

● 『洞院摂政家百首』 - 19 (2) 首 (1232年)

(西澤誠人氏蔵本)

- (112) (内大臣実氏)
歌 ちらぬより こぼるばかりに 咲く花の おもかげつらく にほふ山風
- (117) (大納言四条坊門)
歌 見ても又 なににたとへん 春の夜の 明行く程の 花のおも影
- (146)
歌 吉野山 花のおも影 **立ちぬらし** かつがつかかる 嶺のしら雲
- (976) (三位侍従母)
歌 見し人も つもる跡なき 面影は 雪ふるさとの むかしなりけり
- (1001) (内大臣実氏)
歌 月を見る 秋のならひと いひなして 面かげやどせ 袖のなみだに
- (1101) (内大臣実氏)
歌 思ひする うつつの末の 夢なれば みゆとは見えじ つらき面かげ
- (1137) (兵部卿成実)
歌 うきながら あらば逢ふ夜を 頼みても たえてひさしき 玉のおもかげ
- (1189) (後朝恋五首) (大殿)
歌 今とはとて 出でぬる跡の 袖のうへに おもかげとむる 有明の月
- (1237) (三位範宗)
歌 おもかげの 有明の月ぞ 残りける 涙数そふ 袖のわかれに
- (1246) (行能朝臣)
歌 とどめつる 心にちがふ おもかげに 行くもとまるも あかつきぞうき
- (1271) (侍従隆祐)
歌 おも影の かたみとだにも やすらはで おなじ別の 有明の月
- (1302) (大納言四条坊門)
歌 鏡山 うつればかはる 世にしあれば 猶わすられぬ 人のおもかげ
- (1344) (行能朝臣)
歌 まちし夜の 更けしならひの 面影に またうらめしき 有明の月
- (1347) (信実朝臣)
歌 身にそふを あらぬかとだに 見るばかり なれしにかはる おもかげもがな
- (1356) (家長朝臣)
歌 世にしらぬ おぼろ月夜の 面影も めぐり逢ふべき かたみだになし
- (1373) (三位侍従母)
歌 面影を うき身にそへて わかれしに かはらぬ月は あり明のそら
- (1395) (関白)
歌 葛のはの 葉におく露の 玉かづら 中中さらぬ おもかげもなし
- (1450) (信実朝臣)
歌 忘ればや とばかり物を おもひせば うき面かげの なにかそはまし
- (1512) (権中納言定家)
歌 古郷に とまる面影 **たちそひて** 旅には恋の 道ぞはなれぬ

● 『光明峰寺摂政家歌合』 - 6 (0) 首 (1232年)

(永青文庫蔵本)

- (28) (右) (信実朝臣) (右歌、又優に侍れど、うきたびの涙すこしたしかにきこゆとて、左可勝之由被定)
- 歌 うきたびの なみだくもりて ますかがみ 面かげそはぬ つらさをやみむ
- (39) (廿番) (左持) (親季朝臣)
歌 ますかがみ みぬめの浦の 名もしらず たがおもかげに かけてこふらむ
- (43) (廿二番) (左持) (中宮少将)
歌 ますかがみ わが身をしれる 外に又 なきてもいはむ おもかげぞなき

- (79) (四十番) (左) (家長朝臣)
 歌 よるひかる たまかと人をみてしより その**おもかげ**に ますかげぞなき
 (106) (右) (下野)
 歌 草まくら あだにむすびし 夢なれど さもわすられず のこる**おもかげ**
 (135) (右) (京極中納言定家)
 歌 夏引の いとしもなれし **おもかげ**は たえてみじかき 後ぞかなしき

じゅんとくいんひやくしゅ

● 『順徳院百首』 - 1 (0) 首 (1232年)
 (書陵部蔵 151・181)

- (84) (五首一一に妖艶、いつれと申がたく候)
 歌 月もなほ みし**おも影**は かはりけり なきふるしてし そでの涙に

しゅんぜいきよじょしゅう

● 『俊成卿女集』 - 6 (0) 首 (1233年)
 (神宮文庫蔵本)

- (17) (恋)
 歌 思ひねの 夢のうき橋 とだえて 覚むる枕に きゆる**おもかげ**
 (126) (雪)
 歌 みし人も つもる跡なき **面影**は 雪ふるさとの むかしなりける
 (147) (逢不遇恋)
 歌 **面影**は うき身にそへて 忘れしに かはらぬ月は 有明の空
 (202) (水無瀬恋十五首歌合に、春恋の心を)
 歌 **面影**の 霞める月ぞ やどりける 春やむかしの 袖のなみだに
 (203) (被忘恋のころを)
 歌 露はらふ 寝覚は秋の 昔にて 見はてぬ夢に 残る**面影**
 (212) (月歌とて)
 歌 秋ごとの 月を雲井の かたみにて みしよの人の かはる**おもかげ**

● 『御裳濯和歌集』 - 1 (0) 首 (1233年)
 (天理図書館蔵本)

- (354) (僧正慈円伊勢に百首歌たてまつらせける時のおなじき百首歌中に) (権中納言定家)
 歌 さならでも 秋の**おもかげ** おほよどの まつをつらしと うら風ぞふく

● 『定家名号七十首』 - 1 (0) 首 (1233年頃?)
 (冷泉家時雨亭文庫蔵本)

- (38) (旅)
 歌 あさなげに 身にやはそふと ふりすてて ゆけどわかれぬ 人の**おもかげ**

● 『新時代不同歌合』 - 3 (0) 首 (1220-1236年?)
 (内閣文庫蔵本)

- (17) (右) (八条院高倉)
 歌 くもれかし ながむるからに かなしきは 月に覚ゆる 人の**面かげ**
 (119) (右) (大納言隆房)
 歌 うきながら みし**面かげ**の かはらぬや さすがになれし 形見なるらん
 (150) (右) (大納言基良)
 歌 ますかがみ しらぬ翁は みなれにき 今更たどる **面かげ**ぞうき

うつのみやかげつな

● 『沙弥蓮愉集』 - 5 (0) 首 (宇都宮景綱の生没：1235 - 1298年)
 (国立歴史民俗博物館蔵本)

- (216) (夏述懐)
 歌 **おもかげ**や みる夏ごとに かはるらん としをくまるる 山の井の水
 (256) (題をさぐり侍りしに、沢辺女郎花をよめる)
 歌 **おもかげ**を のこしてみばや 女郎花 野沢の水の 花のかがみに
 (429) (忍恋)
 歌 わが中は とほ山どりの ますかがみ **おもかげ**ばかり よそにこひつつ

(430) (忍恋)

歌 おもかげは とほ山どりの ねをぞなく はつをのががみ みぬよかさねて

(560) (返し)

歌 おもかげは さぞ身をさらず なりぬらん 心をやらぬ 時しなければ

● 『遠島御歌合』 - 1 (0) 首 (1236年)

(永青文庫蔵本)

(123) (六十二番) (左勝) (少輔) (左歌、三とせをまちし人の心、やさしきさまなり、右歌、ことしもおなじ秋の木枯、これもあしからず見ゆれども、左は猶かつべし)

歌 ちぎりしも 面影さへや たえぬらん 三とせを待ちし 人の心は

● 『範宗集』 - 12 (1) 首 (1232-1238年)

(書陵部蔵 150・585)

(8) (羈中霞)

歌 みやぎ野に 秋のおもかげ **たちまぜて** かすみの袖も 萩が花ずり

(206) (仙洞百首内建保四年) (夏十五首)

歌 やまがつの たけのかきほの はかなきに たがおもかげの ゆふがほのはな

(314) (建保二十一日内裏三首歌合内) (月色似秋)

歌 しらつゆの めでのさきはら わけなれて やどるか月の 秋のおもかげ

(528) (夜恋)

歌 おもかげの 月ぞさやかに やどりける まくらのちりを あらふなみだみ

(529) (暁恋)

歌 あふとみる またねの夢の おもかげは たもとのこる ありあけの月

(548) (同年七月二日) (羈中恋)

歌 このごろは あきをしのだの もりにきて 月のつゆちる 袖のおもかげ

(554) (同十二月十一日旬影供歌) (寄鏡恋)

歌 おもかげも なれしなごりの ますかがみ いかなるかたに うつりはつらん

(579) (建暦二年四月十一日当座五十首内) (寄月恋)

歌 雲間より ほのかに人を みか月の あかでいりにし よひのおもかげ

(580) (建暦二年四月十一日当座五十首内) (寄月恋)

歌 おほかたの 月のなごりも ありあけを 我がみひとつに さらぬおもかげ

(583) (被知恋)

歌 おのづから ゆめにみえけむ おもかげも それとばかりは いまやしるらん

(601) (浜名橋)

歌 あふことは はまなのはしに ゆきまよひ あとなきなみの のこるおもかげ

(620) (建保四年仙洞百首内) (恋十五首)

歌 うつつにも かはらざりけり ねぬるよの ゆめのただちに かよふおもかげ

ふじかわごひやくしゅ

● 『藤川五百首』 - 6 (0) 首 (1237-1238年)

(寛文七年板本)

(45) (彼歌に風なし、然ども一首の体よく見え侍るに、ただ風の題のみなり、枕に梅がかの薫する寒風の体、風もなく侍れどもさながら風の心地してこそ侍れ、堪能のなす所なり、又、くらき雨夜の星や出づらんとむすばれぬる、余情限なかるべし、不及筆舌、歌の面を工夫あるべし、又、星をよめるは星か梅かといふ事侍るによつてとある説侍れども、不用之)

歌 面影も 匂ひにそひて かた敷の 袖に夜ぶかき 梅の下かぜ

(70) (苔の緑と侍るに庭の心明なり、あかなくにおのが衣衣暁の心あり、苔のむす庭に散りたる花

を吹く風に苔の緑の花ぞわかるると侍り、しののめのほがらほがらと明行けばおのが衣衣成るぞかなしき、庭落花題にある事を一色も歌にはあらはさで、心に題をもたせて侍り、筆の限に非ず、工夫し給ふべし)

歌 横雲の 峰にぞ残る 梢より わかる庭の 花のおもかげ

(83) (帰郷とていそがるる事なれば、鳥類もさこそ侍りつらん、八声の鳥をも待ちわびて急ぎ立つらん、誠に哀ふかく侍り、心なき草木鳥獸に心を付けてよめる和歌の一体なるべし、惣別心体歌の本意たるべし、又、八声の鳥といひて深夜の心あらはされ侍り)

歌 したふぞよ まだ深き夜の 月影に おもかげとはで 帰る雁がね

(126) (廬橘驚夢)

歌 袖の香は 花橘に 残れども 絶えて難面(つれな)き 夢のおもかげ

- (336) (遇不会恋)
歌 よ所人は なに中中の 夢ならで やみのうつつの みえぬ**面かげ**
(465) (夕月よに宿かり初めて有明を友とし侍らば、まことに羈中にて侍るべきなり)
歌 さそひくる 故郷人の **面影**に 月こそ旅の 露をそへけれ

ていかりょうじせんうたあわせ

● 『定家隆両卿撰歌合』－ 1 (1) 首 (1236-1239年)
(天理図書館蔵本)

- (63) (卅二番 左)
歌 おも**かげ**は をしへし宿に **さき立ちて** こたへぬかぜの まつに吹くこゑ

● 『言はで忍ぶ』－ 9 (0) 首 (1235-1251年)
(いはでしのぶ物語本文と研究)

- (67) (おとど (内大臣))
歌 おも**かげ**に よそへてぞみる なでしこの つゆはとまらぬ かたみなれども
(91) (内大臣)
歌 しかばかり かよふおも**かげ** 身にとまる 君ならでまた たれをかこたん
(105) (内のおとど)
歌 見し秋の おも**かげ**さそふ あさがほの はなさへつらき あけぼのの空
(161) (入道宮 (女院))
歌 まきばしら よりみし人の おも**かげ**の さらずはながき かたみならまし
(177) (前斎院)
歌 おなじ世を そむくならひも かけてだに 忘れわびにし 人のおも**かげ**
(215) (前斎院)
歌 忘ればや うきにくたび 思へども なほおも**かげ**の 身をもはなれぬ
(260) (大しやう (左大将))
歌 むらさきの 色はかはらぬ ふちなみに おも**かげ**さへも とほざかり行く
(285) (右大将)
歌 ひとめみし きりのまよひの おも**かげ**に むせぶおもひの としはへぬれど
(296) (右大将)
歌 すてはつる うきに心の たちかへり またおも**かげ**を なににみつらん

● 『他阿上人集』－ 14 (1) 首 (生没：1236-1319年)
(彰考館蔵本)

- (57) (遊行の聖さきの度、当麻へ御入の時の心を、と読みける由、人の申しければ)
歌 よひ近く 覚めて見残す **面影**を 又むすびつつ 暁の夢
(57)
歌 **面影**は 結びもとめず 後先も おぼえぬ夜の 夢のはかなさ
(598) (同じき年、暁月房合点の歌 春)
歌 ひとりねの 窓より西に 月更けて 枕にかすむ 夢の**面影**
(622) (秋)
歌 月見れば 昔覚ゆる おも**かげ**の わすられ難く ありしことわざ
(639) (恋)
歌 古郷の **面影**さそふ 月見ても 尚恋しきは 都なりけり
(1126) (大上人御詠下) (正安三年冬の比、伊勢国修行の時、ほそ谷の如阿弥陀仏一周忌の追孝の為とて、彼跡より召請し侍りけるに、おはしてよみ給ひける)
歌 一めぐり すぐな時雨の 跡とへば 雲がくれせし 月のおも**かげ**
(1130) (延慶の比、勝田証阿弥陀仏越前左近大夫蓮昭、我が所に召請申し侍りて、極月の別時勤行ありて出で給ひける時、申遣し侍りし)
歌 忘れずよ 唱へし御名の 其声も きく心地して 残るおも**かげ**
(1133) (返し)
歌 おも**影**の 耳に残らば 声たてて ともに唱へし 御名を忘るな
(1226) (或人よみて送りける)
歌 命待つ 迎への雲に **立ちそひて** 必ず見えよ 月の**面影**
(1355) (泊月)
歌 月はただ みつのとまりの **面かげ**ぞ いつも心に 思ひ出でける

- (1358) (古郷月)
 歌 荒れにける 難波の宮の 面かげの 忘れながら 月はかはらじ
 (1385) (寄月恋)
 歌 我が恋は あきはてて見る 月なれや さもすさまじき 人の面かげ
 (1391) (寄都恋)
 歌 月に見し 都の秋の 恋しきは 忘れがたき 人の面かげ
 (1394) (寄庵恋)
 歌 恋しさを 遁れて入りし 庵りまで 憂身にそふか 人の面影

● 『檜葉和歌集』 - 7 (1) 首 (1237年)

(上巻 尊経閣文庫蔵本・下巻 天理図書館蔵本)

- (32) (はなをたづぬる心を) 惠経法師
 歌 たづねゆく 心やさきに かよふらん まだみぬはなの おもかげにたつ
 (472) (法橋名円)
 歌 しらざりき とふのすがごも ななふには おもかげをのみ ならふべしとは
 (495) (右京権大夫入道師光のもとにて、人人、百首の歌よみ侍りける中に、恋の歌) (俊恵法師)
 歌 みにそへる いもがおもかげ 心あらば ゆきてもかたれ なれるすがたを
 (607) (僧都光覚童に侍りける時、花林院の僧正のもとにつけて侍りけるが、こひしくやおぼえけむ、月のころよみてつかはしける) (前左衛門佐基俊)
 歌 いとけなき わがこをならの みやにおきて こよひの月の おもかげにみゆ
 (623) (貞算法師)
 歌 おもかげは からとまりまで ゆくなみを たもとにかくる まつらさよひめ
 (670) (だいしらず) (法橋名円)
 歌 くさまくら ふる里人の おもかげも ならべてみつる 秋のよの月
 (768) (だいしらず) (読人不知)
 歌 よしの山 いまいくかありて 白雲の おもかげならぬ 花をながめむ

● 『後鳥羽院御集』 - 15 (3) 首 (1239年)

(書陵部蔵 501・639)

- (253) (秋二十首)
 歌 春のよの おぼろ月夜の おもかげを しばしみせける 夕霧のやど
 (652) (詠五百首和歌) (春百首)
 歌 おもかげぞ 夕るる雲も まがひけん たぐひおよばぬ 山ざくらかな
 (928) (恋百首)
 歌 さても猶 おもかげたえぬ 玉かづら かけてぞこふる くるる夜ごとに
 (936) (恋百首)
 歌 野分せし むかしの秋の ゆふべより おもかげさらぬ 山のはの月
 (942) (恋百首)
 歌 まどろまで 月にあかせる 夜ごろへて 夢ちもうとき 人の面影
 (952) (恋百首)
 歌 思へただ 逢ふ夜まれなる あけくれに 露きえわびし 人のおもかげ
 (982) (恋百首)
 歌 思草 葉ずゑもいまは 霜がれて 秋の末葉の 人の面かげ
 (996) (恋百首)
 歌 おもかげを いく夜の月に のこすらん つれなくみえし 人の名残に
 (1049)
 歌 ささめかり 野ばらの露に さぬれつつ 恋の衣の おもかげぞたつ
 (1402) (同外宮卅首御会) (冬)
 歌 はなをまつ よしのの松の 雪の色に かねてぞ春の おも影はたつ
 (1604) (旅泊恋)
 歌 思ふ人を うきねの夢に みなと川 さむるたもとに のこる面かげ
 (1636) (秋野)
 歌 旅ねする 野原秋かぜ 身にしめて 面かげさらぬ 故郷の月
 (1697) (寄旅恋)
 歌 足引の 山わけ衣 かわくほど わすれぬ袖の 夜はのおもかげ

(1716) (建保元年十二月十四日御会水無瀬殿当座) (冬月)
歌 をみごろも たつ面かげぞ へだて行く 月はそのよに めぐりあへども
(1766)
歌 うつつには たのめぬ人の おも影に 名のみはふかぬ 庭の松かぜ

たかすけしゅう

● 『隆祐集』 - 5 (1) 首 (1240年以降?)
(書陵部蔵 501・838)

(60) (曉述懐)
歌 明がたの 山のはちかき 月のみぞ なき面影を 空にみせける
(208) (右同題五首中、大殿百首)
歌 おも影の かたみとだにも やすらはで おなじわかれの 在明の月
(251) (孟蘭盆右、光俊朝臣当座会)
歌 なき人の 此世にかへる 面影の あはれふけゆく 秋のともし火
(292) (返し)
歌 おもひいでて ふかき心も たのまれず あさぎはをのに のこる面影
(299) (そへて)
歌 山の井の にごらぬ水を むすびても やがてわかれし 面影ぞたつ

むねたかしのうさんびやくしゅう

● 『宗尊親王三百首』 - 1 (0) 首 (生没: 1242 - 1274年)
(天理図書館蔵本)

(60) (よしの川せかばや春のやすらはんをられぬ花の浪のうたかた、後鳥羽院御製)
歌 さくら色の 衣ふきかへす 春風に 夢となり行く 花のおもかげ

● 『春日若宮社歌合 寛元四年十二月』 - 1 (0) 首 (1243年)
(書陵部蔵 501・553)

(31) (十六番 左勝 従三位藤原頭氏)
歌 逢ふと見る その面影も いたづらに さめてはかなき うたたねのゆめ

● 『新撰和歌六帖』 - 18 (3) 首 (1243-44年)
(日大総合図書館蔵本)

(221) (あした)
歌 おいにける ほどもはかなし あさごとの たらひの水に うかぶおもかげ
(866) (おや)
歌 いかなりし 世世の契に たらちねの おもかげをだに おぼえざるらむ
(1236) (おもかげ)
歌 わかるとて わが身にそへし なさけかは しられでのこる 人のおもかげ
(1237) (おもかげ)
歌 あさ夕は わすれぬままに 身にそへてど ころをかたる おもかげもなし
(1238) (おもかげ)
歌 みるもうし かはる心の とし月に ありしまなる 人のおもかげ
(1239) (おもかげ)
歌 身にそへる 人のおもかげ よしなきを いとはんとても むくかたぞなき
(1240) (おもかげ)
歌 あかざりし 人のおもかげ とどめ置きて わが身にさらぬ かたみとぞみる
(1329) (しらぬ人)
歌 われぞその 人ともいはぬ おも影を おぼめくよひは 夢かうつつか
(1403) (ふたりをり)
歌 たちそはぬ いまにてしりぬ おも影は 人のこぬまの かたみなりけり
(1432) (日ごろへだてたる)
歌 三か月の われてあひ見し おもかげの あり明までに なりにけるかな
(1518) (おもひいづ)
歌 わかれせし あかつきがたの 空みれば またおもかげの たちかへり つつ
(1522) (むかしをこふ)
歌 いにしへの くもみに見てし 夜はの月 そのおもかげぞ いまも恋しき

- (1844) (あふぎ)
 歌 おもかげを なかばかくせる さしあふぎ さてもひかりぞ そふこちする
 (2001) (かや)
 歌 霧ふかき まのかやはら おもかげの ほのみしよりぞ 身をばはなれぬ
 (2118) (あさがほ)
 歌 忍びつま おきてわかれの そでがきに おもかげのこる あさがほのはな
 (2406) (やまなし) (衣笠きぬがさ (内大臣) 家良いえよし)
 歌 足びきの 山なしのはな さきしより たなびく雲の おもかげぞたつ
 (2407) (やまなし)
 歌 ききわたる おもかげ見えて 春雨の 枝にかかれる やまなしのはな
 (2617) (かほどり)
 歌 わすられぬ そのおもかげは かほどりの こゑきくにだに ねはなかれつつ

● 『壬二集(家隆)』 - 22 (1) 首 (1245年)

(蓬左文庫蔵本)

- (173) (恋)
 歌 ぬれば夢 さむれば向ふ 面かげに なれてもよその 物思へとや
 (177) (恋)
 歌 清みがた 浪も袂も ひとつにて みし面かげを よする月影
 (272) (雑恋十首)
 歌 涙川 すゑにあふ瀬を ありとだに くみてしらす 面影もがな
 (285) (寄名所恋十首)
 歌 面かげに なほぞ忘れぬ ふちふのの かたち原の 有明の月
 (409) (院百首正治二年) (春)
 歌 はつせ山 一むらかすむ ながめより 雲ゐに余る 花の面かげ
 (472) (恋)
 歌 ほのみてし 人の心は うき草の 下ゆく水の さそふ面かげ
 (518) (院百首千五百番歌合是也、建仁元年) (春)
 歌 さらにまた なほおもかげに 桜花 やよひの雲を 明がたの空
 (938) (秋二十首)
 歌 ながめつつ 過ぎにし秋の 面かげや まださきそめぬ のべのはつ花
 (957) (冬十五首)
 歌 かがみ山 秋みし月の 面かげも 時雨にくもる 冬はきにけり
 (1069) (月)
 歌 このほどは はるかにおもふ うら山も 月よりほかの 面影ぞなき
 (1076) (九月尽)
 歌 有明の ほのかにみえし 面影も おくらぬ空に かへる秋かな
 (1228) (旅)
 歌 秋の月 さやの中山 さやかにも 故郷人ぞ おもかげにたつ
 (1836) (雑十首)
 歌 面かげの 君にしられぬ ねをぞなく 問ふ人あらば 月にこたへよ
 (2461) (月の歌とて)
 歌 月みれば むかしの秋の 面かげに さしもつきせぬ 我が涙かな
 (2592) (炉辺懐旧)
 歌 誰となく なれしまとみの 面かげも 昔に残る 宿の埋火
 (2701) (恋部) (恋歌あまたよみ侍りしとき)
 歌 面かげよ それをことにと ながめても なべて雲ゐの 秋のよの月
 (2745) (恋部) (恋歌あまたよみ侍りしとき)
 歌 いかにせん ただ思ひねに ぬる玉の 夢の枕に さむる面かげ
 (2806) (旅泊恋)
 歌 うき枕 浪になみしく 袖の上に 月ぞかさなる なれし面影
 (2817) (承元四年粟田宮歌合に、寄月恋)
 歌 忘れぬる 契りし月の 袖の上に ぬるるがほなる 人の面かげ
 (2907) (恋歌あまたよみ侍りしに)
 歌 忘ればや ゑじの焼く火も それながら とよのあかりの みえし面かげ

(3142) (五六日ありて、又これより十首をつかはすとて)
歌 春の夜の おぼろ月夜も おぼろけの 夢にもみえぬ 花の面かげ

(3192) (定家卿一品経勸進之時、授記品)
歌 十とせあまり 三とせの夢の 面かげや 遥にききし 行末の月

● 『院御歌合 宝治元年』 - 1 (0) 首 (1247年)

(書陵部蔵 501・74)

(132) (右) (小宰相) 左歌むさしのの遠望申しならひたることに侍るを、あまぎる雪の明ぼのとては、かぎりみえぬところいま一きはおもひやられ侍るべし、右うたみなせ山ちかきみかり、よみふるさぬさまに侍るうへ、おなじ雪もおもかげのこるとては、いかばかりかはと心わきまへがたくこそ、右はこころあさく、左は雪ふかく侍れば、むさしののはるかの勝にこそ)
歌 みなせ山 ちかきみかりの おもかげや かたのの雪に 猶のこるらん

● 『弁内侍日記』 - 5 (4) 首 (1246-1252年)

(和泉書院影印叢刊 50)

(124) (権大納言さねを)
歌 御はぎの ふときほそきも たちそひて 月にわすれぬ よはのおもかげ
(127) (弁内侍)
歌 わすれずよ 月のおもかげ たちそひて その御はぎも くるしかりけり
(208) (弁内侍)
歌 いまもさぞ 世世のおもかげ かはらめや 秋のこよひの もち月のこま
(221) (弁内侍)
歌 ふちなみの かざしによりし おもかげの などて春にも たちわかるらん
(222) (弁内侍)
歌 このはるの かざしによりし おもかげの たちわかれぬる 心ちこそせぬ

● 『深心院関白集』 - 1 (1) 首 (藤原基平の生没：1246-1268年)

(基平) (書陵部蔵 501・263)

(29) (月驚絶恋)
歌 うきながら 月に たちそふ おもかげの わすれもはてぬ こころよわさよ

● 『長景集』 - 4 (2) 首 (安達長景の生没：1247-1285年)

(書陵部蔵 501・320)

(66) (傾月)
歌 山のはに 入るかたちかき 月見れば またれし空の おもかげ ぞたつ
(98) (夏恋)
歌 夏ぐさの しげるのもせの わすれ水 見しより後は おもかげもなし
(132) (建治元年、平宗頼長門にくだり侍りし後、かの国におもかげ山といふ所侍るよききて、つかはし侍りし)
歌 身にそへる おもかげ山の 月を見ば おもひもいでよ ふるさとの空
(144) (無常)
歌 かなしさは ゆふべの雲の なごりまで もえしけぶりぞ おもかげ にたつ

● 『万代和歌集』 - 17 (2) 首 (1248年)

(竜門文庫蔵本)

(113) (百首歌中に) (式子内親王)
歌 ながむれば 見ぬいにしへの はるまでも おもかげかをる やどのむめがえ
(340) (春情寄花といふことを 橘俊綱朝臣)
歌 はるのひの かざしのやまの さくらばな ちりかふことぞ おもかげ にたつ
(387) (おなじ心を 前左大将実有)
歌 くとくと 見てもめかれず いけ水の はなのかがみの はるのおもかげ
(1888) (兵部卿親王元良家歌合に、寝悟恋といふことを) (読人しらず)
歌 こひわびて こころまどへる ねざめには おもかげをだに あふとたのまむ
(2214) (後法性寺入道前関白、右大臣のときの百首に、後朝恋を) (皇嘉門院別当)
歌 かへるさは おもかげをのみ 身にそへて なみだにくもる ありあけのつき

(2275) (恋歌に) (平長時)
 歌 もろともに はなれじとおもふ なかならば わが**おもかげ**や 君にそふらむ
 (2280) (月のあかき夜人にたまはせける) (円融院御製)
 歌 てる月の ひかりもしばし よそならば **おもかげ**にのみ またるべきかな
 (2368) (和泉式部)
 歌 かたらひし こゑぞこひしき **おもかげ**は ありしぞながら ものもいはねば
 (2369) (百首歌のなかに) (前摂政左大臣)
 歌 **おもかげ**を いかでわすれん ころこそ つらしとおもふ ふしもありしか
 (2431) (百首歌たてまつりけるとき、寄月恋を) (前大納言基良)
 歌 さてもまた いかなるよはの つきかげに うき**おもかげ**を さそひそめけむ
 (2437) (題不知) (平兼盛)
 歌 あなこひし くもまのつきに 人を見て **おもかげ**にのみ そへるころかな
 (2554) (万代和歌集卷第十三) (恋歌五) (題しらず) (仁和御製)
 歌 あとたえて こひしきときの つれづれは **おもかげ**にこそ はなれざりけれ
 (2695) (後京極摂政家六百番歌合に) (法橋顕昭)
 歌 やまどりの はつをのががみ かけねども 見し**おもかげ**に ねはなかれけり
 (2726) (宣仁門院一条)
 歌 あはれなり 身に**たちそひし** **おもかげ**の ゆめにさへまた とほざかりぬる
 (2728) (恋のころを) (藤原為継朝臣)
 歌 いかにて はかなくさめし ゆめなれば その**おもかげ**の かぎりなりけん
 (2977) (月いとあかかりけるよ、むかしを思ひいでて) (俊頼朝臣)
 歌 いにしへの **おもかげ**をさへ さしそへて しのびがたくも すめる月かな
 (3544) (枇杷皇太后宮かくれたまひてのち、月を見て) (五節)
 歌 うけれども 見し**おもかげ**の こひしさに こよひのつきを あかず見るかな

● 『宝治百首』 - 25 (2) 首 (1248年)
 (書陵部蔵 501・910)

(802) (夏十首) (首夏)
 歌 昨日まで 花にまがひし しら雲の 面影うすく **たつ**衣かな
 (819) (成実)
 歌 **たちなれし** 花の面かげ したひきて ひとへにつらき 夏衣かな
 (1263) (為氏)
 歌 ひかりそふ 玉しく庭の ともし火に 面影みゆる 星逢のそら
 (2240) (豊明節会) (御製)
 歌 あまをとめ たまもすそひく 雲の上の 豊明ぞ 面かげにみゆ
 (2403) (基良)
 歌 さても又 いかなる夜はの 月影に うき**おも影**を さそひ初めけん
 (2413) (有教)
 歌 三日月の ほのかにみてし **おも影**を うはの空にや 恋渡るべき
 (2414) (師継)
 歌 ほのかなる **おもかげ**ばかり みか月の われて思ふと しらせてしかな
 (2422) (寂西)
 歌 みずもあらぬ 人のおも影 いつよりか 空行くよはの 月にそひけん
 (2428) (禅信)
 歌 月ゆゑに なれにし人の **おも影**は やがて思ひの たよりとぞなる
 (2430) (按察)
 歌 さだかには みもせぬ人の **おもかげ**を 何ぞや月に 思ひいづらん
 (2435) (弁内侍)
 歌 袖にしも 月ゆゑとまる **おも影**の なにと身にそふ 涙なるらむ
 (2437) (下野)
 歌 月をだに くもらぬ空に みしものを 誰が**おも影**の かきくらすらむ
 (2438) (寄雲恋) (御製)
 歌 はかなしや 夢のおも影 きえはつる 朝の雲は かたみなれども
 (2513) (俊成女)
 歌 **おも影**を 夢にまがへよ むかしみし 夕の雨の 恋のつまでも

- (2601) (基家)
 歌 夢ぢには なこそ関や つづくらん 我が身にかよふ **おも影**ぞなき
 (2949) (高倉)
 歌 我が恋は 遠山鳥の ねをたえて なぐさむ程の **おも影**もなし
 (3038) (寄鏡恋) (御製)
 歌 **おも影**の とまるやあると 帰るさの あさごとにみる ます鏡かな
 (3049) (為経)
 歌 心こそ へだてはつとも ますかがみ みし**おもかげ**を えやはうつさぬ
 (3060) (為氏)
 歌 ますかがみ なに**おも影**の のこるらん つらき心は うつりはてにき
 (3063) (為継)
 歌 **おも影**の なれしかがみの ほかに又 かはる心の うつりやはせん
 (3074) (少将内侍)
 歌 むかひみて みゆとはいかが おもふべき **おも影**ばかり さらぬかがみを
 (3084) (隆親)
 歌 **おも影**に 涙のみこそ とまりけれ 昔がたりの たまらのそで
 (3270) (按察)
 歌 ほのかにも いく夜かはみし いにしへの **おもかげ**さへに のこるともし火
 (3341) (真観)
 歌 この山の 麓にぞみる くれ竹の 葉室の里の よよの**おも影**
 (3776) (成実)
 歌 かへりみる 故郷人の **おも影**も 野行き山行き 遠ざかるなり

ほっしょうじためのおしゅう

ためのお

● 『法性寺為信集』 - 4 (0) 首 (藤原為信：1248年生まれ)
 (書陵部蔵 501・9)

- (60) (暮春)
 歌 ゆくはるの いまはのなごり かすみつつ えぞいひしらぬ けふの**おもかげ**
 (261) (夢中逢恋)
 歌 うつつまで なさけになして したふかな つらさをみせぬ 夢の**おもかげ**
 (341) (吉田大納言の女中納言すけ、人まろをこひて侍りしを、書いてつかはし侍りしかば、かれより)
 歌 いまぞみる 夢の**おもかげ** そのままに うつしとめける 筆のあととは
 (342) (返し)
 歌 いまもみて 夢の**おもかげ** かはずは 心もうつせ やまとことのは

● 『現存和歌六帖抜粋本』 - 2 (1) 首 (1249年)
 (永青文庫蔵本)

- (114) (為家)
 歌 あな恋し 小屋の戸いでし かたびさし 久しくみねば **面影ぞたつ**
 (330) (山なし) (為家)
 歌 ききわたる **面影**みえて 春雨の 枝にかかれる 山なしの花

げんそんわかろくじょう

● 『現存和歌六帖』 - 1 (0) 首 (1249年頃)
 (国書遺芳所収本*)

- (674) (やまなし) (前大納言為家)
 歌 ききわたる **おもかげ**みえて はるさめの えだにかかれる やまなしのはな

● 『艶詞』 - 3 (2) 首 (鎌倉中期成立)
 (隆房) (扶桑拾葉集本)

- (10) (見る事こそなけれども、おもかげは立ちはなれねば)
 歌 **たちかへる** 君が**おもかげ** やがてさは のちの世までに 我にはなるな
 57 (とし月つもれば、やうやうわする事もやとおもへども、日にそへてふかくのみなれば、かなしくて)
 歌 ともしれば 身にそふ君が **おもかげ**を いかにもえこそ おもひはなれぬ

(78)

歌 さてもわれ 君につかへて こしかたは 春はみやまの 花になれ いまは雲井の 月かげの のど
かにてらす 御代にあひて ころろゆく事 おほけれど かすがの山の ふちなみの こだかき色に 人
しれぬ 心をつくし そめしより ねてもさめても わすられぬ 思ひなるかな よしなさは かつみる
うちも むねさわぎ 見ぬまはまして けふいくか いつかいつかと またれつつ さるはまたみる た
びごとに 人にことなる ふししばは はかなき事も さもぞただ ためしもなきと 思ひしむ ことの
おほさは なか川の まさごのかずに たとへても あかざおぼえて なにとして かくしも人に こと
なると 思ひにつけて 中中に つらくさへこそ おぼえけれ けふ又見ても またこひし 見るかひお
ほき たまづさは さらにいはず てにふれし 物としなければ はかもなき ちりのはしまで なつ
かしみ とりつみておく かくまでに ただあぢきなく おぼゆるに みかさの山の さか木葉の 宮こ
のたびに うつるとか あめのしたみな さわぎつつ わきていかにと おもふにも さわぐ心は おほ
かぜに くだくるなみに ことならず 思ふもくるし 雲のうへに かよひし道は たえまおほみ たま
たまかかぐ ともし火の 影ほのかなる よひのまの なごりはさらに さてももぞ せんかたもなき
こちなる としたちかへる いそぎにも なにしか春の ひかりをも たれをかまたん すさまじや
花のにしきを たちきても きみみぬ色は ものうくて ことにもあらぬ なみだこそ たもとにかかれ
かくしつ つむつきとへぬる ややふけし 夜半にあひみし そのほどの 心のまよひ いへばえに た
とへていはん かたもなし そののちさらに こひしさの 色をそへぬる 心ちして やがてうかれし
たましひは 袖の中にや いらにけん 身にはかへらず つくづくと ながむる心 いとどしく あられ
ぬまに さりとては 神ほとけにぞ いのらめと たのみなれにし みたらしの 水のながれを たづ
ねても みそぎかひなき あぢきなき さてもかたへの もろ人に またさそはれて ちはやぶる 神の
きたのに おもむけば はれぬ心を しりがほに 空さへくれし あめのうち あまやどりして をぐる
まを かれとばかりに 見やられし たけの一むら めにかけて さてだにしばし あらばやと おもふ
かひなく やりすぐる なごりよいかい そよさらに しのびがたきを まはなくて そのくるかずに
あかずとも ひまもとめてん あやにくに とほざかり行く こずゑさへ ほのかになりし ほどよげに
そぞろにすすむ なみだこそ せきもとまらず おちまされ さてもかからぬ をりをりの てうはいせ
ちゑ じよゑちもく これらをたより さならでも 見ましなれまし いはましと ただおもかげの **た
ちぞそふ** はるになりても けふははや 廿日になりぬ あかざりし ただ一たびの ときのまの それ
ばかりなる うきよげに いかにせんせん いかにせんせん

● 『西行物語』 — 2 (0) 首 (鎌倉中期成立)

(文明本) (西行全集〈書陵部本〉)

(153) (西行)

歌 なきあとの おもかげをのみ 身にそへて さこそは人の 恋しかるらめ

(177) (西行)

歌 おも影の わすらるまじき 別かな なごりを人の 月にとどめて

ながつな

● 『前権典厩集』 — 3 (0) 首 (藤原長綱) (鎌倉中期)

(書陵部蔵 501・151)

(102) (恋歌の中に)

歌 なくしかの おきふしわぶる 秋にあへず きえてわすれぬ 人のおもかげ

(138) (亡父かくれ侍りにしのち)

歌 世中の うさぞ身にそふ なきこふる そのおもかげは 月日へだてて

(169) (むかしのおもかげたびたびうつつして、ことにおもふがごとくなりけるを、よろこび申すとて)

歌 もとの身に ふたたびむかふ おもかげは このよひとつに おもふとやしる

ながつな

● 『長綱集』 — 1 (0) 首 (鎌倉中期)

(書陵部蔵 501・155)

(177) (法輪寺にまうでたる人の、いづれみせきのと申したるかへり事に)

歌 このはちる あき行く水の おもかげに ぬるるたもとや あらはれにけむ

● 『色葉和難集』 — 2 (0) 首 (鎌倉中期)

(日本歌学大系別巻2)

(445) (をとこ)

歌 百年に 一とせたらぬ つくもがみ 我をこふらし おもかげにみゆ

(905)

歌 敷妙の 衣手かれて 我まつと あるらんいもは 面影にみゆ

● 『^{ためよしゅう}為世集』 - 1 (0) 首 ^{にじょうためよ} (二条為世の生没: 1250 - 1338 年)
(井上宗雄氏蔵本)

(50) (惜花)

歌 とどまらで 散るとも花の 面影は をしむ心に 猶や残らん

● 『続後撰和歌集』 - 8 (1) 首 (1251 年)
(宮内庁書陵部蔵 405・88)

(489) (百首歌めされしついでに、豊明節会) (太上天皇)

歌 あまをとめ たまもすそ引く 雲の上の とよのあかりは おもかげにみゆ

(851) (人にたまはせける) (光孝天皇御製)

歌 あとたえて 恋しき時は つれづれと おもかげにこそ はなれざりけれ

(886) (藤原為継朝臣)

歌 いかかねて はかなくさめし ゆめなれば そのおもかげの かぎりなりけん

(944) (恋歌の中に) (権大納言長家)

歌 わすられぬ まだおもかげは それながら わかれしことの ふりにけるかな

(958) (題しらず) (曾禰好忠)

歌 わすれにし 人はなごりも 見えねども おもかげのみぞ **たちもはなれぬ**

(969) (権大納言公基)

歌 月やどす そでにもしるや うき人の おもかげそへて うらみわぶとは

(976) (九月十三夜十首歌合に、寄月恨恋) (権中納言師継)

歌 思ひわび うきおもかげや なぐさむと 見ればかなしき 在明の月

(1372) ([異本歌] 題不知) (躬恒)

歌 いつのまに 散りはてぬらん 桜花 おもかげにのみ 色をみせつつ

● 『影供歌合 建長三年九月』 - 6 (1) 首 (1251 年)
(内閣文庫蔵本)

(384) (右) (中納言資季)

歌 いかになん うかりし人の 面影の 月に**たちそふ** あかつきの空

(387) (ふけゆく月にうさぞまされると侍るよりは、つらき人にぞねはなかれけるはいうにやと申して為勝) (百九十四番) (左勝) (権大納言公基)

歌 月やどす 袖にもしるや うき人の 面影そへて うらみわぶとは

(399) (ひとりね人わろき、げに聞ゆるよし各申す、あまのすむさとをうき身といへる、歌がらよろしとて勝ち侍りき) (二百番) (左勝) (参議為氏)

歌 面影は 忘れがたみに ながらへて 我がためつらき よはの月かな

(410) (右勝) (権中納言師継)

歌 思ひ侘び うき**おも影**や なぐさむと みれば悲しき 有明の月

(416) (右勝) (成茂)

歌 いかになん 月のとがとは 思はねど うき**面影**に おつるなみだを

(417) (ある身なりけりよろしからずや、おつるなみだめおどろかぬことに侍れど、勝つべきよし各申定む) (二百九番) (左勝) (雅言)

歌 **面影**は みしよの月に したはれて うきにも人の 忘れぬかな

● 『典侍為子集』 - 1 (0) 首 ^{ためこ} (従二位為子の生没: 1251 - 1316 年)
(龍谷大学蔵本)

(11) (こひ)

歌 おもかげは さらばあらずも なりねかし その世のおなじ 人とおもはじ

● 『十訓抄』 - 1 (1) 首 (1252 年)
(古典文庫本)

(6)

歌 さかざらむ ものとはなしに 桜花 おもかげにのみ まだき **立つらむ**

● 『雲葉和歌集』－ 4 (1) 首 (1253-1254年)

(内閣文庫蔵本・彰考館蔵本)

- (89) (雲葉和歌集巻第二) (春歌中花部) (百首歌たてまつりし時) (式子内親王)
歌 はなをまつ おもかげあまる あげぼのは よものこずゑに かをるしらくも
(142) (後京極撰政治家十首歌合に、朝花) (前中納言定家)
歌 よのつねの ものとは見えず やまざくら けさやむかしの ゆめのおもかげ
(854) (冬の歌に) (徳大寺左大臣)
歌 おいらくの かがみのやまの おもかげは いただくゆきの いろやそふらん
(1025) (後法性寺入道前関白家百首歌に、過不逢恋) (皇太后宮大夫俊成)
歌 よとともに おもかげにのみ たちながら まだみえじとは などおもふらん

● 『古今著聞集』－ 1 (0) 首 (1254年)

(日本古典文学大系 84)

- (179)
歌 思ひやる 心やきつつ たはれけん 面影にのみ みえし君かな

かねゆきしゅう

やまももかねゆき

● 『兼行集』－ 2 (0) 首 (楊梅兼行の生没：1254 - 1304年以降)

(神宮文庫蔵本)

- (27) (花)
歌 春しきぬ 今咲きなんの 詠より 梢にうかぶ 花の面かげ
(38) (御歌合、春夜)
歌 あかで猶 くれつる花の 面かげを ゆめに口のこす 春のうたたね

● 『百首歌合 建長八年』－ 5 (0) 首 (1256年)

(逸翁美術館蔵本)

- (601) (あたら夜のおのがたぐひなど侍る、心のうちにありて詞ほかにあらはれずなどは、かやうの事にや侍らんとおぼえ侍るに、はなれてうかぶ秋の紅葉も、又心ありてこそきこえ侍れ、ひとしくや侍らむ) (三百一番) (左持) (二位中将)
歌 いまよりは 夢のうちにや のこるべき あかで別れし 花のおも影
(920) (右勝) (小宰相) 左本歌云、きかばやなそのかみ山の時鳥ありしむかしのおなじこゑかと、こしの句すゑの七字おなじきうへ、ねとこゑとは、はばかりべくぞ侍らん、右鏡の山にふれるしら雪は、しらぬおきなのおもかげも、げにあはれにぞみえ侍らん)
歌 年へたる 誰が**おも影**の とまるらん 鏡の山に ふれる白雪
(1125) (五百六十三番) (左持) (入道大納言)
歌 月のすむ いた井のし水 せきとめて 心にうかぶ 秋のおも影
(1465) (右勝) (実伊) 右歌すがたは左にまさらず侍れど、恋しきかたにのみなきはかずそふならひにて侍るも、此身のうへひとかたならず思ひしられて、右を勝と申しなすかたも侍りぬべし)
歌 つくづくと おもへば恋し あるはなく なきは数そふ 人のおも影
(1516) (九百四十九番) (左) (帥)
歌 **おも影**も わするばかりに へだつれば 年月のみぞ つらさなりける

● 『新和歌集』－ 9 (0) 首 (1259 - 1261年)

(彰考館蔵本)

- (27) (花のさくべきころ、雪のふり侍りければ) (藤原時朝)
歌 うらぎらし 猶ふる雪に 山ざくら 枝にこまれる はなのおもかげ
(388) (左近中将為教)
歌 たえずすむ **面影**みせて きさらぎや 同じむかしの 望月の空
(463) (壬生二品身まかりぬとききて、たよりにつけて申しつかはしける)
歌 いかばかり かつなげくらむ よそにだに みし**面影**の さらぬ別を
(485) (はかなくなりける人のはかにまかりて) (藤原朝基)
歌 なき人の **おもかげ**とまる あとにきて けふはたもとに つゆをかけつつ
(489) (武蔵守平経時の室身まかり侍りけるころ) (藤原泰綱)
歌 ゆめとのみ 思ひてだにも なぐさまじ みし**おもかげ**の うつつならずは
(621) (題不知) (蓮生法師)
歌 **おもかげ**は なみだの露に うつりけり 見るも悲しき 有明の月

(623) (稲田姫社十首歌に) (藤原朝景)
歌 つれもなき 人のおもかげ いくたびか ありあけの月に おもひいづらん
(677) (むつきのはじめ雪のふる日、藤原泰綱もとへ申しつかはしける) (平長時)
歌 いまははや このめも春の 花のえに おもかげみする けさのしら雪
(820) (だいしらず) (蓮生法師)
歌 としをへて なれにしあとの おもかげを かたみに見よと たれとどめけん

● 『為家五社百首』 - 6 (2) 首 (1260年)
(書陵部蔵 501・88)

(410) (あられ) (春)
歌 いにしへの かしまがさきの おもかげに あられふるなり あけのたまがき
(414) (ゆき) (伊)
歌 あまのはら あけしいはとの おもかげも あなおもしろの ゆきのあしたや
(461) (住)
歌 あかほしの 光さやけき あか月は あけしいはとの おもかげぞたつ
(535) (逢不遇恋) (賀)
歌 とりのねに さそはれいでし おもかげの こひしきたびに なくなくぞゆく
(591) (鶴) (賀)
歌 おもかげの こけのそでにも かかるかな ふたたびかざす かもものふぢなみ
(650) (住)
歌 たまつしま たづねしいその うらづたひ まくらのなみも おもかげぞたつ

● 『新三十六人撰 正元二年』 - 3 (0) 首 (1260年)
(静嘉堂文庫蔵本)

(204) (八条院高倉)
歌 くもれかし ながむるからに 恋しきは 月におぼゆる 人のおもかげ
(213) (俊成卿女)
歌 面影の かすめる月ぞ やどりける はるやむかしの そでのなみだに
(219) (俊成卿女)
歌 夢かとよ 見し面かげも 契りしも わすれずながら うつつならねば

としみつしゅう

ひのとしみつ

● 『俊光集』 - 2 (0) 首 (日野俊光の生没：1260 - 1326年)
(書陵部蔵 501・690)

(308) (月百首歌よみ侍りに)
歌 月のよは みぬ海河の あはれまで おもかげうつす 庭の池みづ
(430) (羈中恋)
歌 いく野山 かさなるくもを へだてても なほわすられぬ 人のおもかげ

● 『弘長百首』 - 7 (1) 首 (1261年)
(百首部類板本)

(95) (融覚)
歌 よしさらば ちるまでは見じ 山桜 花のさかりを おもかげにして
(96) (融覚)
歌 いにしへの 大内山の 桜花 おもかげならで 見ぬぞかなしき
(496) (行家)
歌 別れつる そのおもかげの あさね髪 涙をかけて ゆらく玉の緒
(503) (基家)
歌 面影を こふるあまりの しるべにぞ 空もたよりの 月は見えける
(518) (為氏)
歌 あかざりし その面影の かたみとも いひてかひなき 山の井の水
(525) (行家)
歌 面影を なにぞ中中 身にそへて 見し夜の月の 雲がくるらん
(617) (融覚)
歌 峰の雲 いそべの浪は かはれども なほふるさとの おもかげぞたつ

● 『閑月和歌集』－ 5 (2) 首 (1261-1262年)
(文化庁蔵本*)

- (51) (花歌の中に) (前大納言為家)
歌 おもかげは よそなるくもに **たちなれし** たかまのさくら はなさきにけり
(397) (権律師寛実)
歌 たびごろも たちわかれにし ふるさとの おもかげたえぬ よこぐものそら
(398) (やよひのころ、たちまの湯へまかりはべりけるみちにて) (山階入道左大臣)
歌 おもひおく みやこのはなの おもかげの **たちもはなれぬ** やまのはのくも
(417) (羈旅月を) (従三位隆博)
歌 わすられぬ おなじみやこの おもかげを 月こそそらに へだてたりけれ
(422) (羈中浦といふことを) (従三位顯名)
歌 ふるさとの おもかげさそふ いもがしま 月をかたみの うらづたひつつ

● 『東撰和歌六帖』－ 1 (0) 首 (1261-1265年)
(島原松平文庫蔵本)

- (190) (権律師仙覚)
歌 面影の うつらぬ時も なかりけり ころや花の かがみなるらん

● 『三十六人大歌合 弘長二年』－ 3 (0) 首 (1262年)
(書陵部蔵特・61)

- (72) (右) (三品親王家小督)
歌 いかせむ 散りにしはなの おもかげを わすれむとすれば みねの白雲
(127) (左)
歌 思ひ侘び うきおもかげや なぐさむと みればかなしき 在明の月
(135) (左)
歌 まだみねば おもかげもなし なにしかも まののかや原 露みだるらん

● 『詠歌一体』－ 1 (0) 首 (1261-1275年)
(日本歌学大系 3)

- (7) (詠歌一体 [3 1 4 詠歌一])
歌 三日月の われてあひみし 面影の 有明までに なりにけるかな

● 『藤谷和歌集』－ 6 (1) 首 (冷泉為相の生没: 1263-1328年)
(為相) (島原松平文庫蔵本)

- (103) (嘉元元年百首歌奉りける時、薄)
歌 岡のべや すすきかたよる 秋かぜに はるの柳の おもかげ**ぞたつ**
(142) (百首歌奉りしに、月)
歌 わかれにし そのおもかげの ままならば これやかぎりの 晨明(ありあけ)の月
(179) (嘉元元年百首歌奉りける時、雪)
歌 霜までは 千種の跡も 見し野辺の 雪にわかるる 秋のおもかげ
(218) (おなじ心を)
歌 うきかたに いかなる夢の かよふらむ わがおもひでは ひとつおもかげ
(234) (延慶三年八月十五夜、平貞時朝臣よませ侍りし五首歌に)
歌 うき人の わが**面影**と いひおかば こぬ夜の月も なぐさみもなし
(311) (嘉元二年竹園御会に、名所池)
歌 古しへの 忍ぶのすだれ かげ消えて おもかげうかぶ 広沢のいけ

● 『続古今和歌集』－ 16 (2) 首 (1265年)
(尊経閣文庫蔵本)

- (125) (弘長元年百首歌たてまつりけるに、はなを) (前大納言為家)
歌 よしさらば ちるまでは見じ 山ざくら はなのさを おもかげにして
(132) (入道前太政大臣)
歌 あかずみる はなのこのまを もるつきに おもかげとめよ くものうへ人
(432) (欲入月) (太上天皇)
歌 ありあけの そらにぞにたる やまのはに いらかりぬる つきのおもかげ

(982) (前内大臣基家百首歌合に) (大納言顯朝)
 歌 まだみねば おもかげもなし なにしかも まののかやはら つゆみだるらん
 (1139) (宝治二年百首歌に、寄月恋を) (後鳥羽院下野)
 歌 つきをだに くもらぬそらに 見しものを たがおもかげの かきくらすらん
 (1192) (恋歌とて) (土御門院小宰相)
 歌 はかなくて みえつるゆめの おもかげを いかねしよと またやしのぼん
 (1252) (前中納言定家)
 歌 あぢきなく なにと身にそふ おもかげぞ それとも見えぬ やみのうつつに
 (1253) (建長五年三首歌に、寄衣恋を) (院大納言典侍)
 歌 おもかげは **たちもはなれず** からころも わかれしままの そでのなみだに
 (1385) (日吉社恋五首歌合に) (前大納言隆房)
 歌 うきながら みしおもかげの かはらぬや さすがになれし かたみなるらむ
 (1386) (だいしらず) (藻壁門院少将)
 歌 おもかげを うきみにそへて こひしなば のちのよまでの つらさをやみん
 (1414) (返し) (光明峰寺入道前摂政左大臣)
 歌 かすみにし けふのつきひを へだてても 猶おもかげの **たちぞはなれぬ**
 (1511) (弘長元年百首に、花を) (前大納言為家)
 歌 いにしへの おほうち山の さくらばな おもかげならで みぬぞかなしき
 (1522) (花歌とてよめる) (権律師仙覚)
 歌 おもかげの うつらぬ時も なかりけり ころやはなの かがみなるらむ
 (1739) (たなかみの家にて、月あかかりける夜、むかしおもひいでてよみ侍りける) (俊頼朝臣)
 歌 いにしへの おもかげをさへ さしそへて しのびがたくも すめる月かな
 (1835) (出家ののちよみ侍りける) (前大納言基良)
 歌 ますかがみ しらぬおきなは 見なれにき いまさらたどる おもかげもうし
 (1922) (巻第八、七五六の次) おなじ仙洞にてかさねて如法写経し侍りしとき、普賢大士白乘象夢
 の心をよみ侍りける) (権大僧都憲実)
 歌 みる夢の 面かげまでや うかぶらん きさの小川の 有明の月

けいぎよくわかしゅう むねたか
 ● 『**瓊玉和歌集**』 - 2首(0) (宗尊親王の家集) (1264年成立)
 (宗尊親王) (書陵部蔵 501・736)

(11) (たてまつらせ給ひし百首に、春雪)
 歌 山たかみ 風に乱れて ちる花の おも影つらき 春のあは雪
 (370) (逢後契恋)
 歌 いかになむ 逢ふまでとこそ 歎きしに そのおも影の そへて恋しき

● 『**歌合 文永二年七月**』 - 1(1)首 (1265年)
 (書陵部蔵 501・151)

(30)
 歌 おも影を 春のほひに **さきだてて** 枝にしられぬ 花をみるかな

● 『**歌合 文永二年八月十五夜**』 - 3(0)首 (1265年)
 (永青文庫蔵本)

(22) (右) (右兵衛督藤原朝臣為教)
 歌 ほのかなる おもかげばかり みえながら まつほどおそき 山のはの月
 (129) (六十五番) (欲入月) (左勝) (女房)
 歌 あり明の 空にぞにたる 山のはに いらかりたる 月の面影
 (146) (右) (長雅卿)
 歌 面影を わすれやすると いらがたの 月に心を いづちやらまし

● 『亀山殿五首歌合 文永二年九月』 - 1 (0) 首 (1265年)
(書陵部蔵 501・533)

(88) (四十八番) (左勝) (真観) (右歌ことなるさた侍らざりしにや、左歌、題心存知したるにこそ、と右方申されしかば、勝ち侍りけるにや、右歌、源氏物語歌のことばづかひ、いと優にこそ侍りけるを、当座に申出づる人侍らずしてまけになりになり、左歌おもかげの見えずなりけん月日ぞまことにおぼつかなく侍りしかども、右させる事なしとて以左為勝)
歌 うきながら しばしはみえし **おもかげ**も いつの月日か かぎりなりけん

● 『白河殿七百首』 - 4 (0) 首 (1265年)
(内閣文庫蔵本)

(223) (沢女郎花) (忠継朝臣)
歌 **面影**を うつしてとめよ 女郎花 野ざはの水に 秋はくるとも
(502) (寄鏡恋) (御製)
歌 形見とて みるもはかなし ます鏡 とまらざりける 人の**面影**
(519) (寄絵恋) (忠継朝臣)
歌 **おも影**は ゑにかきとめて みつれども しらぬは人の 心なりけり
(649) (山家経年) (新大納言)
歌 すむ人の **おも影**とめぬ 山の井の みくさもとらで 年ぞへにける

● 『伏見院御集』 - 21 (2) 首 (生没：1265-1317年)
(古筆断簡他)

(97) (往事)
歌 みしうちの よそぢのゆめを かぞふれば なき世かずそふ 人の**おもかげ**
(216) (于時神木御坐洛中) (春月)
歌 やへがすみ かすめるそらに さよふけて それとばかりの **おもかげ**の月
(414) (暮秋月)
歌 あきにみむ その**おもかげ**も いまいく夜よを へてほそき ありあけの月
(445) (寄月秋正和二年)
歌 みなれぬる 月はいつもの あきながら わが**おもかげ**や あらずなりなん
(462) (月)
歌 はつあきの うかりし月の **おもかげ**も みとせをかけて 又めぐりきぬ
(503) (春月)
歌 月はなほ もとのむかしの 春ながら 我が身ひとつの あらぬ**おもかげ**
(578) (寄別暮春)
歌 春のみ口 なれこし人の わかれとても ただ時になる **おもかげ**ぞかし
(716) (春水)
歌 **おもかげ**ぞ その世のはるに かはりぬる 花ちりしきし にはのいけ水
(856) (秋)
歌 **おもかげ**も ころろにちかき ながめかな みしやくも井の 秋の夜の月
(863) (月歌中に)
歌 むかしをば **おもかげ**さそふ あきの月 ゆくすゑみする ひかりともがな
(1105) (旅)
歌 うみ山の くもとなみとを へだてても しのぶみやこの **おもかげ**ぞたつ
(1413) (冬風)
歌 ふきあるる こよひの風に ききぞ思ふ あけなむ庭の **おもかげ**のゆき
(1427) (冬衣)
歌 やまあゐの をみの衣に ゆきちりし くも井のにはぞ **おもかげ**にたつ
(1610) (往事都如夢)
歌 さめてのち すぎての後の **おもかげ**よ なのみぞかはる ゆめとうつつと
(1837) (花)
歌 はるをあさ みさむき木ずゑの 花やいつぞ **おもかげ**みせて 雪はちれども
(1940) (冬月)
歌 世世へても とよのあかりの ころときけば **おもかげ**ちかき くものうへの月
(2004) (懐旧月)
歌 月のみや はじめなき世の 昔より いまにかはらぬ 同じ**おもかげ**

(2014) (冬歌中に)

歌 たまもひく をとめのすがた 代代へても おもかげちかき 雲の上の月

(2162) (月)

歌 恋ひしのぶ くも井の月よ みし世には わがおもかげも かはるのちまで

(2168) (正月七日)

歌 あをむまや むまのつかさの ひきつれて わたりしにはは おもかげにみゆ

(2289) (冬人倫)

歌 このごろの くもみの月を おもひやりて なれしをとめは おもかげにみゆ

ふしみのいんぎよしゅう

● 『伏見院御集 冬部』 - 2 (0) 首 (生没: 1265 - 1317 年)
(有吉保氏蔵本)

(67) (冬)

歌 ややちかき はるとやかねて さくはなの おもかげかよふ 木木のしらゆき

(94) (口水懐旧)

歌 ももしきや すみこし宿の みかは水 みし世にかへる おもかげもがな

りゅうようわかしゅう

むねたか

● 『柳葉和歌集』 - 3 (0) 首 (宗尊親王の家集) (1266 年)
(宗尊親王) (書陵部蔵 151・414)

(148) (春雪)

歌 山たかみ 風にみだれて ちる花の おもかげつらき 春のあはゆき

(695) (夏)

歌 いにしへの 面影みせて あまくだる ほしのをかべに とぶ螢かな

(798) (恋)

歌 かたみとて 何おもかげの 残るらむ かれにしものを まののかや原

● 『竹風和歌抄』 - 12 (3) 首 (1266-1272 年)
(宗尊親王) (愛知教育大附属図書館蔵本)

(149) (隔日来)

歌 こととひし おも影ばかり かたみにて いくか過ぎきぬ 夕ぐれのそら

(165) (面影)

歌 中中に みなれし人の 面影は わかれてしもぞ 身にはそひける

(297) (霞)

歌 あづま路や へだてはてにし おも影の 猶たちそふは かすみなりけり

(306) (春月)

歌 ほのかなる 昔の夢の おもかげを かすみてみする 春のよの月

(452) (絶恋)

歌 さても猶 いかになしよの ゆめまでか その面かげの 絶えずみえけん

(664) (恋)

歌 逢ひみしも 夢ばかりなる 面かげの なにとうつつの 身にとまるらん

(701) (文永六年五月百首歌) (春)

歌 わすれめや かすめる春の 夕まぐれ ほのかにみえし 花のおもかげ

(730) (冬)

歌 身の上に まだこぬ老の おも影も かねてかなしき 野べの朝霜

(800) (雑)

歌 あはれなり うきもわすれぬ ならひとて 面かげにたつ 東路の山

(914)

歌 さだかにも おぼえぬ夢の 面かげや やみのうつつの 名残なるらん

(919) (雑)

歌 春秋の かすみも霧も 分けこえて おもかげにたつ さやの中山

(1010) (鏡)

歌 朝夕に 面かげうつす 鏡こそ わかれし君が かたみなりけれ

● 『中書王御詠』－ 3 (0) 首 (宗尊親王の家集) (1267年)

(宗尊親王) (書陵部蔵 501・87)

(32) (あづまに侍りし時、春歌とて)

歌 としをへて 身にそひながら こひしきは はなのみやこの はるのおもかげ

(191) (百首の歌の中に)

歌 そのままの ただありあけを かぎりにて まだみぬ月に のこるおもかげ

(200) (寄原恋)

歌 かたみとて なにおもかげの のこるらん かれにしものを まののかやはら

● 『春の深山路』－ 4 (0) 首 (1268年)

(影印校注古典叢書 31)

(6) (作者)

歌 人はいさ わすれがたみの 思ひいでは 月に見しよの 花のおもかげ

(7) (内の中納言のすけ)

歌 わすれめや 人のこころは うつるとも 月と花との よはのおもかげ

(34) (長相朝臣)

歌 立ちよれば 月にぞみゆる かがみ山 しのぶ宮この よはのおもかげ

(51) (女房(作者))

歌 かきつけし その名ばかりを 水ぐきの あとにぞ忍ぶ 人のおもかげ

● 『嗟峨の通ひ路』－ 1 (0) 首 (1269年)

(古典文庫)

(7) (安嘉門院右衛門佐)

歌 楨の戸を いでがてにせし 面影を 暮るる夜毎の 月に恋ひつつ

● 『最上の河路』－ 1 (0) 首 (1269年)

(古典文庫)

(14) (作者)

歌 道すがら わすれわびぬる 小倉山 みなれし里の 雪の面かげ

● 『実材母集』－ 19 (6) 首 (実材母の生没：1267-1293年)

(書陵部蔵 501・296)

(12) (かがり火のかけにてほの見しままにて、にはかに宮こへのぼりにしを、おくれてきける人につけて)

歌 かがり火の ほの見しままに 別れにし おもかげのみや 身をこがすらん

(47)

歌 なきたまの かへるけぶりの ほのかにも せめてたちそふ おもかげもがな

(180) (おもひねにや、ありしなごらのさまにて、夢にみえ侍りしかば)

歌 むかし見し おもかげさらぬ よはの月 いまもなみだに かきくらすかな

(198) (八月十五夜、よもすがらながむる月も、かげさびしうみえしかば)

歌 おもかげを さそふもかなし 秋のよの ながきかた見に 月をのこして

(211) (ひととせの秋、はまなのはしのうへにて、おもふどち月見し事思ひいでられて)

歌 たびのそら 月にのこれる おもかげを はまなのはしに 恋ひわたるかな

(226) (やよひのころ、あねむすめなくなりけるよしきき侍りしかば、ちかごろかたみにうらむる事の侍りしも、みなわすられて、かなしともいはんかたなし)

歌 きくもうし やよひのそらの 夕かぜに さそはれにける はなのおもかげ

(231) (人のくににありけん、かうのけぶりもがなとぞおぼえける)

歌 おもかげの たつらんかうの けぶりだに たえてかなしき わが思ひかな

(233) (ありしなごらのさまにて、夢にみえ侍りしかば)

歌 うきことを かたりあはする ほどもなく さめてくやしき ゆめのおもかげ

(238) (かへし)

歌 すみはてぬ なかばの月の おもかげに たつもかなしき あとのしらなみ

(419) (山家の水)

歌 なき人の おもかげだにも とどまらで 涙ながれし やどのまし水

(508)

歌 よしの山 ちりにし花の かた見とや おもかげにたつ みねの白雲

(516)

歌 夏衣 たつことやすき このもとに 身をもはなれぬ 花のおもかげ

(640) (物うたがひせし人に)

歌 わすられぬ 人のかたみや 恋ひわぶる 袖のなみだに のこるおもかげ

(641) (物うたがひせし人に)

歌 みし人を おもひいづれば おもかげも くもるや月の あたとなるらん

(651)

歌 みるめなく かれにし人の おもかげは たつもかなしき 袖のうらなみ

(779) (寄日恋)

歌 くもりなき 日にむかひても おもかげを おもひいづれば かきくらすかな

(808) (返し)

歌 みても猶 あかぬころを とどむれば たちはなれめや 花のおもかげ

(852) (丈六のすがたを池水花のうへにおきて、おもへば真身におなじ、といへるを)

歌 いけ水の はなにうつろふ おもかげも そらすむ月の おなじ光ぞ

(880) (南無阿弥陀仏の七首の歌)

歌 たぐひなく 思ひぞいづる ふかき夜の 月に契りし 人のおもかげ

● 『しのびね物語』 - 2 (0) 首 (1271年)

(中世物語の基礎的研究)

(11) (しのびねの女院)

歌 たちかへり ちぎりて出でし おもかげを うき身にそへて われぞわすれぬ

(18) (きんつね)

歌 思ひいる み山がくれの すまひにも かたみにつなぐ 人のおもかげ

● 『人家和歌集』 - 7 (1) 首 (1271年)

(大倉精神文化研究所蔵本)

(51) (普光園入道前関白かくれて後、寄月懐旧といふことを)

歌 有りしよの 其おもかげも たちそひて 月にぞいとど ねはなかれける

(87) (題不知)

歌 みてすぐる よそぢの夢の おもかげぞ 今と思へば 昔なりける

(208) (人家和歌集巻第九 円空上人二首) (春のころみまかりにける人ののちのわざしてよみ侍りける)

歌 はる山の 煙となして みし人の おもかげさらず たつ霞かな

(246) (もろこしにとしひさしくありて、帰朝して月を見て)

歌 古里の おもかげそひて みし月は 又もろこしの かたみなりけり

(260) (坐禅の時よめる)

歌 ゆりのうへに しづかなるよの 暁は 心にのこる おもかげもなし

(278) (実承法師一首) (寄月恋を)

歌 おもひ出づる おもかげまでや つらからん わかるる空の 有曙の月

(496) (題不知)

歌 年ふれど 有りしながらの おもかげや 身をもはなれぬ かたみなるらん

● 『風葉和歌集』 - 7 (0) 首 (1271年)

(丹鶴叢書本)

(101) (北山にて紫のうへはつかに御らんじそめて、帰り給ひて又の日遣されける) (六条院御歌)

歌 おもかげは 身をもはなれず 山桜 心のかぎり とめてこしかと

(535) (もろこしにわたるとて、道より女のもとにつかはしける) (はままつの中納言)

歌 身にそへる 面影のみぞ こぎはなれ ゆく波ちとも おくれざりけり

(542) (かへし) (右中将)

歌 とどむるも 心はみえぬ 物なれば 猶おもかげぞ こひしかるべき

(582) (のじまにまかりて月まちいでたる折しも、しかのなきけるに、思ひいづること侍りければよめる) (のじまの三位中将)

歌 おもかげを 浪よりいづる 月にみて あかぬ名残を をしか鳴くなり

(836) (おなじさまにてあかさせ給ひつる女のもとに、つかはさせ給ひける)
(さごろものみかどの御歌)

歌 **おもかげ**は 身をもはなれず うちとけて ねぬよの夢は みるとなけれど
(1273) (広沢のかたにまかりて、月をみて) (野じまの三位中将)

歌 すみ馴れし むかしの人の **おもかげ**を 月にぞみする ひろ沢の池
(1413) (よその思の御かどの御うた)

歌 如何にせむ うきはものかは このみただ おしあけがたの そらの**おもかげ**

● 『石清水物語』－ 1 (0) 首 (1271年以前、鎌倉)

(中世物語の基礎的研究)

(6) (中将(右大将))

歌 花ゆゑに 恋しき人の **面かげ**を さそふたよりの 春風もがな

● 『恋路ゆかしき大将』－ 2 (0) 首 (1271年以降?)

(物語文学の研究・桂宮本叢書 16)

(31) (女御(ふぢつぼの女御))

歌 やどごとに 花の**おもかげ** わすれねど たれもいはでの くちなしの色

(73) (この女君(帥宮の姫君))

歌 いまはとて こけのしたには くちぬとも みし**おもかげ**は 身をもはなれじ

せっしょうけつきじっしゅうたあわせ

● 『摂政家月十首歌合』－ 5 (0) 首 (1275年)

(東大文学研究室蔵本)

(92) (右) (安嘉門院右衛門佐) (右のおもかげつつむ、又いかにと心うべきにか、おもかげと申すものは、心にうかびて身をさらず、いかなる人の中にも、あやめらるべきことにはあらぬものなり、もりやせんとはべる初句より、いうなることはありがたくや、袖のなみだのふかき心はしのばれて、しらぬことになむ侍れば、なほ上歌の忍恋、さりとはかつべくや)

歌 もりやせむ くもまはつかに 見しつきの **おもかげ**つつむ そでのなみだも

(100) (右) (左衛門督)

歌 たえはつる ちぎりぞつらき うき人の **おもかげ**とめし 月をみるにも

(103) (五十二番) (左勝) (法印道雲) (左歌、上下句すべらかにきこえ侍れど、わが人をわすれたらんもちからなき事には侍れど、うちまかせぬやうにやとて、馬内侍が昔もおもひいでられて、尤可為勝)

歌 わすられし ひとのつらさも いまさらに **おもかげ**さらぬ あきのよの月

(104) (右) (則雅) (右歌、君わすれずはわれもわすれじと申す歌を、をかしくこそひきなされたれ)

歌 わすられば わすれなましを うき人の **おもかげ**のこる 月ぞかなしき

(107) (五十四番) (左持) (教頭) (両方、初句心にくきすがたにはあらねど、すゑさまあしからず侍れば、為持)

歌 いまはただ ちぎりしよはの 月のみや **おもかげ**かよふ かたみなるらん

● 『都路の別れ』－ 1 (0) 首 (1275年)

(古典文庫)

(7) (作者)

歌 こし方の **おもかげ**とめよ かがみ山 けふより後の わすれがたみに

● 『住吉社三十五番歌合』－ 3 (0) 首 (1276年)

(建治二年)(京都府立総合資料館蔵本)

(10) (右) (津守宿禰宣平)

歌 ふるさとは **面影**さらぬ あり明の 月にたびゆく 秋ぞかなしき

(10) (右) (津守宿禰宣平)

次 歌 **おも影**の ふるさとかよふ 有明も かたみとみるは ながさまれつつ

(12) (右勝) (僧禅忍)

次 歌 袖のうへの 月の**おも影** したはれて かりねの夢は みるもかひなし

● 『別本和漢兼作集』 - 2 (0) 首 (1277 - 1279年)

(島津忠夫氏蔵本)

- (395) (寄月恨恋) (権右中弁雅言朝臣)
 歌 おもかげは みしよの月に したはれて うきにも人の わすられぬかな
 (543) (過不逢恋) (民部少輔在嗣)
 歌 もろともに ながめし月は 出でぬれど 又もあひみぬ 人のおも影

● 『続拾遺和歌集』 - 18 (3) 首 (1278年)

(尊経閣文庫蔵本)

- (601) (皇太后宮大夫俊成女)
 歌 秋ごとの 月を雲みの かたみにて 見し世の人の かはるおも影
 (802) (未対面恋といへる心を) (皇太后宮大夫 俊成)
 歌 ひとしれぬ 心やかねて 馴れぬらん あらましごとの おも影ぞたつ
 (901) (前左兵衛督教定中将に侍りける時歌合し侍りけるに、寄月恋) (真昭法師)
 歌 こぬ人の おも影さそふ かひもなし ふくれば月を 猶うらみつつ
 (941) (建保百首歌たてまつりける時) (光明峰寺入道前摂政左大臣)
 歌 うたたねの 夢ともさらば まぎれなで みしやうつつに のこる面影
 (954) (後嵯峨院御製)
 歌 中中に おも影さらぬ かたみにて いまはあだなる よはの月かな
 (956) (百首歌たてまつりし時) (入道二品親王性助)
 歌 はかなしや いひしばかりの かたみだに おも影つらき 有明の月
 (972) (寄月恋) (祝部成茂)
 歌 いかにせん 月のとがとは 思はねど うきおも影に おつる涙を
 (976) (藤原為兼朝臣)
 歌 わすれずよ 霞のまより もる月の ほのかにみてし よはの面かけ
 (1054) (文永二年九月十三夜五首歌合に、絶恋) (光俊朝臣)
 歌 うきながら しばしは見えし おも影も いつの月日か 限りけん
 (1068) (題しらず) (後鳥羽院御製)
 歌 さても猶 おも影たえぬ 玉かづら かけてぞこふる くるる夜ごとに
 (1070) (恋歌の中に) (前関白左大臣鷹司)
 歌 わすられぬ そのおもかげを 身にそへて いつを待つまの 命なるらん
 (1077) (前関白左大臣一条)
 歌 面影を いかにおすれむ 心こそ つらしと思ふ をりもありしか
 (1216) (老後述懐といふ事を) (徳大寺左大臣)
 歌 おいらくの かがみの山の 面影は いただく雪の 色やそふらん
 (1285) (題しらず) (よみびとしらず)
 歌 春ごとに なれこし人の おも影を 又しのべとや 花のさくらん
 (1300) (返し) (権中納言師時)
 歌 君こふる 涙に月は 見えねども おも影のみぞ たちもはなれぬ
 (1306) (返し) (権中納言師時)
 歌 あらぬよの とよのあかりに あふ人は みし面かけを こひぬ日ぞなき
 (1329) (冷泉太政大臣身まかりにけるのちよみ侍りける) (常盤井入道前太政大臣)
 歌 おも影を 忘れんと思ふ 心こそ わかれしよりも かなしかりけれ
 (1333) (父前中納言定家すみ侍りける家にとしへて後かへりまうできて、むかしの事をおもひ出でてよみ侍りける) (法印覚源)
 歌 おもかげは あまたむかしの 故郷に たちかへりても ねをのみぞなく

● 『女房三十六人歌合』 - 3 (0) 首 (1278年以降?)

(志香須賀文庫蔵本)

- (22) (俊成卿女三位侍従具定母)
 歌 おもかげの かすめる月ぞ やどりける 春やむかしの 袖のなみだに
 (23) (俊成卿女三位侍従具定母)
 歌 夢かとよ 見しおもかげも 契りしも わすれずながら うつつならねば
 (88) (八条院高倉)
 歌 くもれかし ながむるからに かなしきは 月におぼゆる 人のおもかげ

● 『雅有集』－ 5 (0) 首 (飛鳥井雅有) (1278 - 79年)
(天理図書館蔵本)

- (498) (霜)
歌 雪おもる みやまのまつのおもかげや のきばのをぎの しもの下をれ
(517) (旅恋)
歌 草枕 むすびならぶる おもかげを いもやみるらん ふるさとのゆめ
(551) (未発花)
歌 おもかげに まづさくはなや 山ざくら まだしこころの いろにみゆらん
(628) (妓女)
歌 みるたびに 身にぞしみけん をとめごが ゆきをめぐらす 袖のおもかげ
(798) (霞浦)
歌 ほのかにも みしおもかげの かはらぬは かすみのうらの あまのもしほび

● 『政範集』－ 12 (3) 首 (1278-1288年)
(天理図書館蔵本)

- (61) (寄夜恋)
歌 われながら なれしや夢と たどるよの ねざめにうかぶ おもかげもうし
(64) (寄柱恋)
歌 そのままに あはでひさし のまきばしら つねによりぬし おもかげぞたつ
(68) (寄馬恋)
歌 ありあけの つきげのこまよ 心して おもかげのこる みちなはやめそ
(113) (待花)
歌 さきなばと またるるはなの おもかげや 心にかかる くもにたちそふ
(245) (寄星恋)
歌 わすれずよ 雲まにまよふ 夕つづの あかでほの見し 人のおもかげ
(247) (寄柱恋)
歌 おもかげは たちもはなれじ 契こそ あさぎのはしら くちはてぬとも
(296) (雲間月)
歌 わすられぬ たがおもかげを かこたまし むら雲まがふ 秋のよの月
(358) (寄山鳥恋)
歌 山どりの はつをのかがみ はつかにも みしおもかげを 恋ひつつぞなく
(391) (寄月草恋)
歌 うき人の おもかげうつす 月くさの 花もあだなる 色はうらめし
(393) (寄鏡恋)
歌 みるもうし たえぬつらさを ますかがみ なみだのそこに のこるおもかげ
(461) (末摘花)
歌 見し人の すゑつむはなの くれなゐは うつるかがみの おもかげもうし
(462) (紅葉賀)
歌 袖ふりし かざしのもみぢ ちりすぎて うつろふ菊に にほふおもかげ

● 『十六夜日記』－ 3 (2) 首 (1279年)
(日本古典全書)

- (87) (作者)
歌 あづまぢの 磯山かぜの たえまより 浪さへ花の おもかげにたつ
(91) (権中納言の君(大宮院の権中納言))
歌 しら浪の 色もひとつに ちる花を おもひやるさへ おもかげにたつ
(105) (作者)
歌 はかなしや 旅ねの夢に まよひきて さむればみえぬ 人のおもかげ

● 『沙石集』－ 1 (0) 首 (1283年)
(日本古典文学大系 85)

- (84) (哀傷歌の事) (或人)
歌 しばしだに わすればこそは ながさまめ おもかげばかり うきものはなし

● 『光吉集』 - 4 (1) 首 (生没：127?-1352年)

(書陵部蔵 501・281)

(209) (正中二年春宮の歌合に、寄雲恋)

歌 みし夢の おもかげさへや くもるらむ あしたの雲ぞ 雨となりゆく

(213) (同じ心を)

歌 涙にも くもらでみばや うき人の おもかげさそふ ありあけの月

(218) (弾正尹親王家五十首に、同じ心を)

歌 みしままの おもかげばかり うつつにて ゆめにかはらぬ 契なりけり

(250) (寄花無常を)

歌 おもかげぞ **たちもはなれぬ** なき人は 雲となりてや 花にそふらむ

● 『比叡社歌合』 - 1 (0) 首 (1290-1299年?)

(志香須賀文庫蔵本)

(67) (とふ人の跡ふりうづむゆきを見むあれにしにははさもあらばあれ)

(卅五番) (左) (綱有)

歌 はなかとよ わかれし秋の おもかげに 草葉をかざる にはのはつゆき

● 『公賢集』 - 11 (1) 首 (生没：1291-1360年) (1334年以降作られた歌)

(島原松平文庫蔵本)

(19) (鶯)

歌 いつしかと 花のおもかげ すすむるは まだきこずゑに きゐるうぐひす

(274) (雑) (羈中山当座)

歌 こえきつる いくへのみねは わすられて みやこのやまぞ おもかげに**たつ**

(304) (節会、兀子)

歌 別れつる おもかげはなほ ありあけの 月をぞかこつ しののめのそら

(307) (李夫人同)

歌 おなじくは けぶりにかよふ おもかげに こころのうちを はるけましかば

(416) (山雪)

歌 さきちりし 花のおもかげ それながら にほはぬ雪を わくる山ごえ

(471) (後朝恋)

歌 したへども かひこそなけれ わかれつる おもかげとめぬ 有明の月

(539) (月前初恋)

歌 三日月の さやかにも見ぬ おもかげに あやなく我ぞ まよひそめぬ

(593) (寄鏡恋)

歌 見るままに おつるなみだは ますかがみ もしやと思ふ おもかげはなし

(619) (暁月)

歌 有明の かすかにのこる おもかげも いまはまたこん 秋ぞ見るべき

(685) (元応元年八月廿四日歌合十五番 夕待月)

歌 有明の ころとおもへど 待ちなれし ゆふべのそらの 月のおもかげ

(826) (寄鏡恋)

歌 面影の うつすかがみに とどまらば 恋しき人を さてもみましを

● 『中務内侍日記』 - 4 (0) 首 (1292年)

(和泉書院影印叢刊 31)

(10) (作者)

歌 あしびきの 山ほととぎす しひてなほ まつはつれなく ふくる夜に とばかりたたく まきの戸
は あらぬくひなど まがへても さすがにあけて たづぬれば しげき草葉の 露はらひ わけ入る人
の すがたさへ 思ひもよらぬ をりにしも いともかしこき なさけとて つたへのべつる ことの葉
を わが身にあまる 心地して げによにしらぬ ありあけの 月にとどむる おもかげの 名ごりまで
こそ わすれかねぬれ

(26) (作者)

歌 めぐりあふ けふまちえても 面影の かすめる月は ものぞかなしき

(30) (あやのこうちの三位)

歌 花ならで ちりにしあとの おもかげは たえぬなげきの のこるばかりぞ

(39) (作者)

歌 世にすまば 又みんところ 思ひしか おもかげなれし 山の井の水

● 『永仁元年内裏御会』 - 8 (0) 首 (1293年)
(書陵部蔵 501・339)

- (25) (月前恨恋)
歌 夜もすがら ただそのままの **面かげ**に むかはでむかふ 月もうらめし
(40) (八月十五夜同詠五首応製和歌) (正二位行権大納言兼右近衛大) (将春宮大夫臣藤原朝臣家教上)
歌 うきかたに 人はかはれる **面影**を 我のみ月に 思ひよせぬる
(45) (八月十五夜同詠五首応製和歌) (正二位行権大納言臣藤原朝臣実泰上)
歌 よしいまは わすれんと思ふ **面影**を 又うかべぬる 月もうらめし
(50) (八月十五夜同詠五首応製和歌) (正二位臣藤原為世上)
歌 おもひ出づる **面かげ**さへに つらけれど かたみともみし 有明の月
(62) (秋夜同詠五首応製和歌) (従二位臣藤原朝臣雅有上)
歌 このままの**面影**のみやとどまらん月のあたりを過ぐるかりがね
(84) (八月十五夜同詠五首応製和歌) (正四位下行左近衛権中将臣藤原朝臣為実上)
歌 うきそでも おなじ月こそ みるらめと あらぬころの うとき**面かげ**
(89) (八月十五夜同詠五首応製和歌) (正四位下行左近衛権中将臣中宮権亮美濃権介臣藤原朝臣為道上)
歌 恨みわび はてはかたみの 月だにも **おもかげ**かへて なみだ落ちけり
(104) (八月十五夜詠五首応製和歌) (従四位上行左近衛権少将臣藤原朝臣隆教上)
歌 月をさへ うらみやいでむ うき人の **おもかげ**つらき するべばかりに

● 『明日香井和歌集』 - 36 (7) 首 (1294年)
(雅経) (日本大学蔵本)

- (9) (鳥羽百首建久九年五月廿日始之毎日十首披講之) (詠百首和歌) (侍従) (立春)
歌 けさよりは はなになりぬる **おもかげ**の ながめにかはる ゆきのあけぼの
(12) (花)
歌 これぞこの かすみのうちの こずゑより まづ**さきだちし** **おもかげ**の花
(36) (五月雨)
歌 さみだれの おなじくもまに あきを見て ひとりはれたる **おもかげ**の月
(43) (月)
歌 **おもかげ**を なににわすれん 秋のすゑ ながめなれたる 有曙のつき
(66) (歳暮)
歌 春よいかに としをこめてや たちぬらん よひよりかすむ **おもかげ**のそら
(67) (歳暮)
歌 はるたたん こほりのしたの **おもかげ**や うちいでがたの なみのはつ花
(77) (恋)
歌 あやなしや おさふる袖に うつりきて なみだにしづむ 君が**おもかげ**
(82) (恋)
歌 あかなくに **たちかへりぬる** **おもかげ**や ながめにうつす 有明の月
125 (月)
歌 はなのほる なれしなごりの **おもかげ**よ 秋の月とは ちぎらざりしを
(137) (冬) (雨)
歌 みかりのや 雪はふりきぬ これもまた ぬるとも花の はるの**おもかげ**
(221) (夏)
歌 いにしへや みぬ**おもかげ**も **たちばな**の はなちるさとの ありあけの月
(312) (詠百首和歌建仁二年八月廿五日) (正五位下行左近衛権少将藤原春二十)
歌 ききもせず みもせぬ山の あらしまで **おもかげ**つらき はなのうへかな
(376) (雑二十)
歌 ながむれば 月はむかしの かたみかは あらましかばの 人の**おもかげ**
(439) (旅)
歌 みしよはの 月にみやこを とひかねて しほれふしぬる 袖の**おもかげ**
(488) (雁)
歌 かりのくる みやこのあきの **おもかげ**に ところよの月や ひとりすむらん
(519) (後朝)
歌 **おもかげ**は なほありあけの つきくさに ぬれてうつろふ 袖のあさつゆ
(523) (片思)
歌 あはれとも おもはぬひとの **おもかげ**に かずかきわぶる みづからぞうき

- (576) (秋)
歌 いでやらぬ 月まつよひは あしびきの やまのあなたの おもかげもうし
- (703) (傀儡)
歌 たび人の おもかげつらき かがみやま うつればかはる ちぎりなるらん
- (917) (雑十)
歌 ふるさとの けふのおもかげ さそひこと 月にぞちぎる さよの中やま
- (1072) (久恋)
歌 とし月も むなしきそらに うつりきて ふるきながめに なれぬおもかげ
- (1107) (関路恋)
歌 見し人の おもかげとめよ きよみがた そでにせきもる なみのかよひぢ
- (1109) (河辺恋)
歌 ささのくま ひのくまがはに ぬるるそで ほさでや人の おもかげも見む
- (1132) (同夜和歌所当座秋月五首)
歌 あかしがた おもかげかよふ 月かげに みやこにちかき 浪のかよひぢ
- (1158) (被忘恋)
歌 いつまでか なれしなごりの おもかげの わするほどの 袖のうへの月
- (1176) (寄月恋)
歌 またじただ なほあきのよは なが月の ありあけのつきの おもかげもうし
- (1220) (秋旅)
歌 月よなほ さやのなかやま なかなかに なにおもかげの あきのふるさと
- (1294) (春日社歌合同三年三月七日野花)
歌 ちるはなの のもりのかがみ くもらん おもかげつらき よものあらしに
- (1340) (待野花)
歌 秋とおもふ こころのいろや さきだちて おもかげうつす のべのはぎはら
- (1474) (精進間恋)
歌 おもかげの しめのうちにも たちそひて きよきころもの 袖ぬらしつつ
- (1499) (さめがゐにて)
歌 おもひゆく そのおもかげに 袖ぬれて むすばぬ夢も さめがゐの水
- (1601) (九日、つひにかくれ侍りにければ、その比あまたの歌よみける中に)
歌 おもかげは たちにし月を へだてても わかれはけふの ゆふぐれのそら
- (1610) (九日、つひにかくれ侍りにければ、その比あまたの歌よみける中に)
歌 こもなほ おもかげのみぞ 残りける おくりし月よ ゆくへしらせよ
- (1611) (九日、つひにかくれ侍りにければ、その比あまたの歌よみける中に)
歌 こけのしたも みる心地する おもかげに はぐくみたてし 袖ぞくちぬる
- (1615) (九日、つひにかくれ侍りにければ、その比あまたの歌よみける中に)
歌 さきだちし おもかげのみぞ 有あけの つきせぬものは 涙なりけり
- (1625) (返事)
歌 いにしへの わしのたかねに ことよせて このおもかげぞ ありあけの月

● 『隣女集』 - 24 (1) 首 (1295年)

(雅有) (内閣文庫蔵本)

- (142) (恋)
歌 たづねゆく わがしるべせよ 夜半のつき なれにしそでの つゆのおもかげ
- (211) (霞)
歌 うどはまに ぬぎしをとめが あまつ袖 おもかげたてる はるがすみかな
- (236) (春歌の中に)
歌 いつしかと またるるはなの おもかげも ちるはものうき はるのあはゆき
- (696) (寄夢恋)
歌 おもひねの 夢さへおなじ つれなきの うつつににたる よはのおもかげ
- (856) (なき人の鏡をみて)
歌 ある程ぞ かがみはうつす なき人の おもかげみるは こころなりけり
- (858) (亡父が墓所へまかりて)
歌 わけいりて むかしをこふる このもとに おもかげあらぬ 月ぞもりくる
- (984) (待花)
歌 まちわぶる おもかげみせて 吉野山 花にさきだつ 峰のしら雲

- (1026) (花歌中に)
歌 このごろと おもふもかなし をぐら山 ふもとののはなの こぞのおもかげ
(1217) (山月)
歌 いにしへの おもかげみえて まつらがた ひれふる山の このまもるつき
(1272) (紅葉歌中に)
歌 あき風に ははそ色づく さほ山の 峰はこひしき 秋のおもかげ
(1328) (をさきが原といふ所にて)
歌 みちすがら わすれわびぬる をぐら山 みなれしさと の ゆきのおもかげ
(1500) (よもぎ)
歌 ふるさとに 軒をあらそふ よもぎふの もと見し庭の おもかげはなし
(1516) (ふかくさ山)
歌 みしよこそ おもかげさらね ふかくさや ふりにし里の 山のはの月
(1617) (裳)
歌 わぎもこが ひきものすがた うちへて おもかげにのみ こひぬ日はなし
(1801) (待花)
歌 さらにだに またるる花の おもかげを ほのかに見せて かかるしら雲
(1854) (花後春風)
歌 ちる花の おもかげのこす かたみさへ あだなる雲に はる風ぞふく
(2272) (恋) (初恋)
歌 さやかにも みざりし月の おもかげに くもりそめぬる 我がなみだかな
(2312) (後朝恋)
歌 けさはしも たれに別れて 帰らん わが身はなれぬ 君がおもかげ
(2314) (後朝恋)
歌 わかれぢに ともなふ月は 明けはてて おもかげ残る そでの朝つゆ
(2373) (寄卯花恋)
歌 よひよひに 待ちえし袖の おもかげを かきねにのこす にはのうのはな
(2473) (鏡山にて)
歌 こしかたの おもかげみせよ かがみ山 けふより後の わすれがた見に
(2489) (さどの国へながされて侍りし人のもとへ申しつかはし侍りし)
歌 人しれず ねてもさめても おもひやる おもかげならで いつかあひみむ
(2577) (右題をあまたよみ侍りし中に)
歌 ゆめならで いかでふたたび たらちねの 昔ながらの おもかげを見ん
(2578) (右題をあまたよみ侍りし中に)
歌 おもひいづる おもかげならで たらちねと いまひとたびの あふこともがな

● 『歌合 永仁五年当座』 - 3 (0) 首 (1297年)

(天理図書館蔵本)

- (38) (右) (冬池) (教良卿女)
歌 へだてても なほこひしきは ここのへの いけのみぎはの ゆきのおもかげ
(38) 次 (右) (冬池) (教良卿女)
歌 とりどりに おもかげうかぶ 池水も 木だちふりぬる かげやすずしき
(47) (をりふしにかはるすがたもあはぬよをかさぬる袖もいづれともなし)
(廿四番) (左) (恋枕) (持) (為相朝臣)
歌 いかにて ゆめをもまたむ なれし夜の おもかげとほき とこのまくらに

● 『歌合 永仁五年八月十五夜』 - 2 (0) 首 (1297年)

(内閣文庫蔵本)

- (32) (右勝) (定成朝臣)
歌 もろともに みし面影の 月ぞとて ながめなぐさむ 我ぞはかなき
(38) (右) (中納言典侍)
歌 更くるまで 閑に (しづか) 月を 詠むれば 千里もうかぶ 秋の面影

● 『和歌口伝』 - 1 (0) 首 (1294-1298年)

(日本歌学大系 4)

- (236) (祝部成茂)
歌 いかにかせむ 月のとがとは おもはねど うきおも影に おつるなみだを

● 『尊円親王詠法華經百首』 - 1 (0) 首 (生没: 1298 - 1356年)
(内閣文庫蔵本)

(70) (如是諸色像皆於身中現)

歌 おもかげに つれつつひとの 身にそはば つれなしとても なにかうらみん

● 『五種歌合 正安元年』 - 3 (0) 首 (1299年)
(島原松平文庫蔵本)

(30) (右勝) (九条左大臣女)

歌 風にさぞ ちるらん花の 面かげの 見ぬいろをしき 春のよのやみ

(43) (廿二番) (恋形見) (左持) (女房)

歌 夕暮の 空をかたみと むかへども 恋しき人の 面かげもなし

(53) (廿七番) (左) (家親朝臣)

歌 面影の はかなき跡は 残れども げにたのむべき かたみだになし

● 『遺塵和歌集』 - 9 (0) 首 (1300年)
(宮内庁書陵部蔵 501・275)

(16) (おなじ御会に、夕帰雁を) (高階成尚)

歌 おもかげは かすみながらに 行く雁の こゑこそかへれ 春のゆふぐれ

(17) (月前帰雁を) (新陽明門院兵衛佐)

歌 すぎぬるか かすめるつきの なかぞらに おもかげきゆる 春のかりがね

(179) (中納言典侍親子朝臣の歌合に、絶恋を) (成朝があね)

歌 うきながら 身にそふものと なりにけり わかれしままに のこるおもかげ

(181) (高階成尚)

歌 わかれにし ただそのままの おもかげぞ うきにまぎれぬ かたみなりける

(183) (絶恋を) (法眼快増)

歌 身にそへる おもかげのみや 逢ふことの たえにしなかの なさけなるらん

(260) (正安二年の四月にまでのこうちどのにて御まりの侍りしを、しのびてのぞき侍りけるに、こぞの三月にかめやまどのの御まりに、為通朝臣まゐりたりしいまのやうにおぼえてあはれなりければ、藤大納言のもとへ申しつかはしける)

歌 たちならぶ 人はかはらぬ このもとに なきおもかげぞ さらにかなしき

(261) (かへし)

歌 なみだのみ まづこのもとに さきだちて なきおもかげぞ ある心ちせし

(262) (なげくこと侍りて)

歌 かたみとて あるもはかなき おもかげの さらぬわかれに ねはなかれつつ

(274) (弘安のころあづまへまかりて侍りけるに、みちのほどの宿宿をよみつづけけるながうた)

歌 たびごろも みやこをたてば あげがたの 月影のこる このまより すぎのしるしも あらはれて
たが相坂の 関のとに あげはなれゆく よこぐもの 世にたえざりし 宮ばしら のこるわらやぞ は
てしなき すゑは打ち出の ふなわたり ひらの山かぜ 海ふけば せたのなが橋 ゆきめぐり 野地の
しの原 露ふかく たつ秋ぎりの しづくさへ 猶もる山の したもみぢ みればかがみの 山かげに
たちよらばやと おもへども 老その杜は そのままに 年へぬる身は はづかしや こてふかまうの
えちがはら 都率天にや かよふらん 四十九院は おぼつかな 雲にほえけん いぬがみの とこの山
こそ やさしけれ ながるる河の 名をとばば いさとや人も こたふべき 小町おぼゆる 小野ばんば
うきよの夢を さめが井も みささぎちかき かしは原 もののふいます ふはのせき せきのはらより
いにしへの 野がみのこだち たづぬとも もとの心を しらざらん たる井の水は かひあらじ あと
の青はか いたづらに いづれのよより あれぬらん 世わたるみちは 一すぢに まぼるもわるき 株
せかば 日かげをさふる かさぬひは ひるの程にも すぎぬべし すのまたくろだ 門なみに たつる
をりとの いへいへに ふけるかやべの あつたとて 宮みひさしき 神がきに 猶行すゑを いのりつ
つ 浪まをいそぐ なるみがた いかなるこまの なづみてか くつかけといふ さとならん みしりの
はやし 影しげき 二村やまは いとあやし あやしやみれば ささがにの くもでとききし やつはし
にしたゆく水の おもかげも むかしへだつる かきつばた をざきやはぎに つくりをか つくりな
らぶる かりやがた みやちあかさか わだうへの そばなる本野 いとどをし いま橋おほや たかせ
山 こゆればみゆる ふじのねは げにつぼしりの すがたにて 猶時しらず のこるゆき ならぬおも
ひの 煙まで たちならぶべき かたなきに 河をへだつる 松はしの 浜名につづく はしもとは ま
ためにとまる やどなれや たれに心を ひきまなる 君もおもへば あはれなり 池田のぬしのはな
のうへ 吹きこすかぜの つてにても なくふくろふの もろごゑは かけてもきかじ かけ河の 浪の

なる滝 このさとも 山口しるき かたなれば さ夜の中山 なかなかに きにける程の しられつつ
猶ふるさとの こひしくて 涙かわかぬ 袖にまた 山ぢのつゆを かさぬれば さてきく河の ゆかし
きに おなじ流や くみてまし 島田まへしま 見わたせば わかるせぜの 大井がは ふぢ枝をかべ
う津の山 つたもかへでも しげりつつ 逢人あらば ことづての せまほしきにも いまさらに かの
在原の ころこそ 心ぼそさも かなしけれ てごしせなかは きよみがた おきつおほわだ ゆひの
はま かんばらあしや ふじかはの そこみえざりし はやさこそ おもひいづるも ただならぬ たご
の浦浪 いつとなく たたぬ日もなき 旅人は みつけいま井に ゆきつれて ただうきしまの 原中は
せばくもみえぬ みちなるに 車かへしと いふめるぞ 思ひもかけぬ 心ちする よしやよしなし み
ちすがら なれつるきみを こひごろも たれきせがはの ながれても またあひさはを たのむらん
とぶさたつなる あしがらも 一よなりけり 竹のした 関もとさかう はやすぎて こいそ大いそ さ
がみがは かたせこしごへ こしかたの 道のまなる すさみとも のちみん人や おもひあはせん

おおえのもちしげ

● 『茂重集』 - 3 (0) 首 (大江茂重の生没は不詳が、鎌倉時代と思われる)

(書陵部蔵 501・304)

(118) (冬) (初冬)

歌 昨日くれし 秋のわかれの おもかげを 一夜へだてて 冬ぞきにける

(151) (夕恋)

歌 おもかげは 身をもはなれぬ かたみにて ゆふべになれば まちうかれつつ

(194) (懐旧)

歌 思ひいづる そのおもかげは とどまらで したふ心ぞ 身をばはなれぬ

● 『三十番歌合(正安二年~嘉元元年)』 - 2 (0) 首 (1300 - 1303 年)

(群書類従本)

(49) (左の御歌、下待つところの頼さへよわりゆくにや、おぼえず涙のせきとめ難きよし、いとせ
ちなる心なり、そほふるといふ詞は、伊勢物語に出でたるを、よくとり結ばせ給ふ事凡慮の外に侍る、万
葉集にも、いやひこのおのれ神さびあまひこのたな引く日すら霰そほふる、と侍る、何れもふりまさる心
にや、右のかたも、誰かきくやと疑ひて、人を空しく待ちなしては、涙にあくる暁の鐘を我のみこそと身
ひとつにおもふ恋路のわりなさも、いかで浅くは侍らん、仍持とこそなし侍らめ) (廿五番)

(寄夢絶恋) (左) (女房)

歌 おのづから 思はぬ夢に 入りくとも 面影絶えて たどりもやすらん

(56) (右) (家親朝臣)

歌 かはりぬる 契なれども 思ひねの 夢はみし夜の 同じ面影

● 『歌合 正安四年六月十一日』 - 5 (0) 首 (1302 年)

(書陵部蔵 501・515)

(1) (歌合正安四年六月十一日 [89 正安四]) (歌合正安四年六月十一日当座)

(一番) (夢中見恋) (左持) (御製)

歌 恋しさの ねてや忘ると 思へども 又名残そふ 夢の面かけ

(4) (右勝) (一条局)

歌 袖にせく 涙ながらの 手枕に 面かけかよふ うたたねの夢

(5) (三番) (左勝) (宮御方)

歌 あだに見て 覚めぬる夢の 面影を うつつの後も 猶のこさばや

(6) (右) (大納言局)

歌 おのづから ぬるが中なる 面影も みるとしもなき 夢ぞはかなき

(7) (四番) (左持) (為景朝臣)

歌 面影も しらでやこひん ぬるがうちに みるを夢とて たのまざりせば

● 『新後撰和歌集』 - 28 (4) 首 (1303 年)

(宮内庁書陵部蔵 兼右筆「二十一代集」)

(83) (花歌の中に) (前関白太政大臣)

歌 あはれにも むかしの春の おも影を 身さへ老木の 花にみるかな

(141) (題不知) (九条左大臣女)

歌 ちりはてし 花よりのちの 峰の雲 忘れぬ色に 残るおもかげ

(475) (豊明節会のころを) (前関白太政大臣)

歌 見しままに 思ひやりてぞ しのばるる とよのあかりの 月のおもかげ

- (558) (前中納言定家)
歌 かへりみる その**面かげ**は **立ちそひて** ゆけばへだつる 峰のしら雲
- (566) (大蔵卿隆博)
歌 わすられぬ おなじ宮この **面かげ**を 月こそ空に へだてざりけれ
- (568) (前参議雅有)
歌 立ちよれば 月にぞ見ゆる かがみ山 しのぶ宮この 夜半の**面かげ**
- (572) (天台座主道玄、日吉社にて人人にすすめ侍りける二十一首歌の中に)
(普光園入道前関白左大臣)
- 歌 宮こにて 見し**面影**ぞ 残りける 草のまくらの ありあけの月
- (585) (やよひの比、たじまのゆあみにまかり侍りける道にてよみ侍りける)
- 歌 おもひおく 宮この花の **面影**の **たちもはなれぬ** 山のはの雲
- (605) (帰朝のち月をみて、もろこしの事を思ひ出でてよみ侍りける) (志遠上人)
- 歌 ふる郷の **おも影**そひし 夜半の月 又もろこしの かたみなりけり
- (659) (具足諸相願) (中原師光朝臣)
- 歌 みそぢあまり ふたつのすがた たへなれば いづれもおなじ 花の**おも影**
- (871) (右近大将道平)
- 歌 あふとみる 我がおもひねの **面かげ**を さめてもたのむ 程ぞはかなき
- (873) (法印長舜)
- 歌 **面影**の うきにかはらで みえもせば いかんせんとか 夢をまつらむ
- (874) (建保六年内裏歌合、恋歌) (常磐井入道前太政大臣)
- 歌 うたたねに つれなくみえし **面影**は 夢としりても 猶やうらみむ
- (1028) (前大納言実教)
- 歌 かたみとて われこそみつれ **面影**を 人はのこさぬ 有明の月
- (1043) (後京極撰政家六百番歌合に) (前中納言定家)
- 歌 **おも影**は をしへし宿に **さきだちて** こたへぬ風の 松にふく声
- (1065) (前大納言基良)
- 歌 さても又 いかなる夜はの 月影に うき**おも影**を さそひそめけん
- (1069) (恋歌中に) (源親長朝臣)
- 歌 つれなくぞ 猶**おも影**の 残りける 又も見ざりし ありあけの月
- (1070) (遊義門院大蔵卿)
- 歌 うきながら さても身にそふ **面影**の わすれぬのみや かたみなるらん
- (1071) (法眼行濟)
- 歌 わすれずよ しばしといひし かへるさの 袖のわかれに 残る**おもかげ**
- (1072) (源家清女)
- 歌 なれし夜の 床はかはらぬ 思ひねに 又みる夢の **おもかげ**ぞなき
- (1119) (百首歌たてまつりし時、忘恋) (遊義門院権大納言)
- 歌 ことのはに そへても今は かへさばや わすらるる身に のこる**面かげ**
- (1133) (恋歌中に) (藤原宗秀)
- 歌 **おもかげ**の うき身にそはぬ 中ならば われもや人を わすれはてまし
- (1429) (弘安元年、百首歌たてまつりし時) (前右兵衛督為教)
- 歌 見ても又 ありしにもにぬ **面影**や 老をますみの かがみなるらん
- (1532) (津守国平、身まかりてのちよめる) (津守国助)
- 歌 ある世にも かくやはそひし **面影**の **たちもはなれぬ** 昨日けふかな
- (1535) (東二条院の半物河浪、もの申しけるをとこ、身まかりにけるがをしへおきけるとて、かつらの流の琵琶をひきけるを聞きて) (常磐井入道前太政大臣)
- 歌 なかばなる 月のかつらの **おもかげ**を 思ひいでてや かきくもるらん
- (1537) (前大僧正隆弁、八月十五夜身まかりて侍りける一周忌に、結縁経歌そへて秋懐旧といふ事を)
(前大納言実冬)
- 歌 めぐりあふ 去年のこよひの 月みてや なき**面かげ**を 思ひいづらむ
- (1543) (八月十五夜、後一条入道前関白のことを思ひ出でてよみ侍りける) (大蔵卿隆博)
- 歌 もろともに 見しよの秋の **面影**も わすれぬ月に ねをのみぞなく
- (1545) (源時長朝臣身まかりてのち、第三年の春いもうとのもとに申しつかはしける) (源兼孝朝臣)
- 歌 わかれにし のちの三とせの 春の月 **おもかげ**かすむ 夜はぞかなしき

● 『嘉元百首』 - 34 (9) 首 (1303年)

(書陵部蔵 154・31)

- (3) (詠百首和歌) (春廿首) (霞)
歌 おも影や 春の空とも たちぬらん わきて霞の 色はみえねど
(75) (逢不遇恋)
- 歌 おも影も いまやいかにと なるみがた しほひはとほく 成りまさりつつ
(513) (花)
- 歌 あかざりし 心にのこる 面影や ちりぬる花の かたみなるらん
(552) (霞)
- 歌 草のうへの 露みし秋の おもかげに 玉ちりかへて あられふるなり
(801) (春雪)
- 歌 まださかぬ 花のおもかげ さきだてて 風にちりくる 春のあは雪
(874) (忘恋)
- 歌 わればかり さてもいかにと したへども おも影ながら とほざかりつつ
(954) (雪) (正二位臣藤原朝臣為世上)
- 歌 雪つもる あまのしほやの 煙にも ふじのたかねの おも影ぞたつ
(1008) (花) (正二位行権大納言臣藤原朝臣公頭上)
- 歌 花おそき 木ずゑの空の ゆふ霞 かねてにほひの 面影ぞたつ
1172 (忘恋)
- 歌 身をすれば おもひたえぬる 面影の 人にもさこそ とほざかるらめ
(1173) (忘恋)
- 歌 よしさらば おもかげながら わすれねよ うき形見とは 人ものこさじ
(1177) (雑) (二十首暁)
- 歌 かねのおとも かはらざりけり ゆふぐれの おもかげかよふ 暁の空
(1254) (雪)
- 歌 よしの山 はなのさかりの おもかげに さながらみせて つもる白雪
(1348) (落葉)
- 歌 さすがなほ 秋のおも影 のこりけり あらしにつもる 庭の紅葉に
(1370) (逢不逢恋)
- 歌 わかれにし そのおも影の ままならば みしやかぎりの 有明の月
(1537) (月)
- 歌 雲の上に なれし昔の 面影も わすれやすくと 月にとはばや
(1539) (月)
- 歌 おもひ出でん 後のつらさと 成りぬべし いるまでなるる 月の面影
(1681) (関)
- 歌 面影も みしはわすれず 清見がた 関よりをちの 月のいりうみ
(1707) (花)
- 歌 たづねても まだみよしのの 花ざかり おも影までも にほふ比かな
(1762) (不逢恋)
- 歌 まことなき 夢のただちの おもかげは 誰がいつはりに 通ひそめけん
(1836) (薄) (為相)
- 歌 をちのへや すすきかたよる 秋風に 春のやなぎの 面影ぞ立つ
(1856) (雪)
- 歌 しもまでは 千草のあとと みしのべの 雪にわかるる 秋の面かげ
(1867) (不逢恋)
- 歌 したひもに つけたる草は 名のみして 心にかれぬ 人のおもかげ
(1868) (不逢恋)
- 歌 うき方に いかなる夢か かよふらん わがおもひねは ひとつおもかげ
(1914) (花)
- 歌 ちりぬとも おも影をだに 山桜 わすれぬほどや 花になれまし
(2084) (山)
- 歌 さてもわが おも影かはる かがみ山 みしも昔に 年はへにけり
(2411) (尚侍料紙裏面淡之上紅下花田 有四季雑薄絵)
- 歌 おも影は まづさきだちて 山桜 木ずゑつれなき 春にも有るかな
(2472) (尚侍料紙裏面淡之上紅下花田 有四季雑薄絵)
- 歌 いつなれし 面影ぞとも かこたれず ただ身にそふを なくさめにして

- (2510) (一条殿御局)
 歌 おも影を かすむ梢に さきだてて まだ花おそき 春の山のは
 (2588)
 歌 舟のうちに としをつみけん いにしへの 雲のなみ路ぞ 面影にたつ
 (2610) (権大納言局前藤大納言為世卿女)
 歌 今よりは またる花の おも影に たつたの山の みねの白雲
 (2625) (権大納言局前藤大納言為世卿女)
 歌 袖の香は はなたちばなに うつりきぬ おも影みせよ うたたねの夢
 (2656) (権大納言局前藤大納言為世卿女)
 歌 雪ふれば かねてぞみゆる かがみ山 ちりかふ花の 春の面影
 (2674) (権大納言局前藤大納言為世卿女)
 歌 言の葉に そへても今は かへさばや わすらるる身に のこるおも影
 (2692) (権大納言局前藤大納言為世卿女)
 歌 しのぶれば おも影ぞそふ 玉かづら かけてもしらぬ 昔なれども

● 『歌枕名寄』 — 28 (5) 首 (1303年)

(万治二年板本)

- (1076) (右、同じ比深草へ御幸侍りけるに、霧のふかく立ちて侍りければと云云) (伏見院)
 歌 きえはてし 煙のすゑの 面かげも 立ちそふきりの ふかくさの山
 (1281) (同十七) (為家)
 歌 いにしへの おほうち山の さくらばな 面かげならで みぬぞかなしき
 (1636) (葉室里) (光俊)
 歌 この山の ふもとにぞみる くれ竹の はむろのさとの よよの面かげ
 (1783) (槿)
 歌 春日野の 野べの朝がほ おもかげに 見えつついもは わすれかねつも
 (2295) (後七) (紅葉) (貫之)
 歌 玉かづら かづらき山の もみぢ葉は おもかげにのみ 見えわたるかな
 (2459) (千五百) (西園寺)
 歌 たつた山 こやしむかしの 面かげは ふもとのさとの あり明の月
 (2668) (同八) (貌花) (家持)
 歌 たかまどの 野べのかほ花 面かげに 見えつついもは わすれかねつも
 (5006) (新古十) (雅経)
 歌 故郷の けふのおもかげ さそひこと 月にぞちぎる さよの中山
 (5187) (新古十四) (雅経)
 歌 見し人の 面かげとめよ きよ見がた 袖にせきもる 波のかよひぢ
 (5206) (六百番) (寂蓮)
 歌 清見がた 岩しく袖の なみの上に おもふもわびし 君がおもかげ
 (5528) (千十八) (旋頭歌) (顕輔)
 歌 あづまぢの 野島がさきの 浜風に 我がひもゆひし いもがかほのみ おもかげにみゆ
 (5867) (里) (俊頼朝臣)
 歌 勢多の里 はしのたまふみ 朽ちめおほ みそこのなみだぞ おもかげにたつ
 (6209) (金一) (大式長実)
 歌 かがみ山 うつろふ花を みてしより おもかげにのみ たたぬ日ぞなき
 (6219) (続拾十七) (徳大寺左大臣実能公)
 歌 老いらくの かがみの山の おもかげは いただく雪の 色やそふらん
 (6220) (新後八) (前参議雅有)
 歌 立ちよれば 月にはみゆる かがみやま しのぶみやこの 夜半の面かげ
 (6245) (建保名所百) (松虫) (順徳院)
 歌 玉かづら いぶきの山の 秋の露 たがおもかげぞ 松むしのこゑ
 (7113) (真野萱原) (万三) (笠女郎)
 歌 陸奥之 (ミチノクノ) 真野乃草原 (マノノカヤハラ) 雖遠 (トホケレド) 面影為而 (オモカゲ
 ニシテ) 所見云物乎 (ミユトイフモノヲ)
 (7114) (続古十一) (権大納言顕朝)
 歌 まだみねば おもかげもなし なにしかも まののかやはら 露けかるらん
 (7116) (中務卿親王)
 歌 故郷の 人のおもかげ 月に見て 露わけあかす まののかやはら

- (7117) (新六) (衣笠内大臣)
 歌 霧ふかき 真野のかやはら **面かげ**の ほの見しよりぞ 身をばはなれぬ
 (7546) (六百番) (隆信)
- 歌 **面かげ**を ほの見しま野に 尋ねきて 行衛もしらぬ もずの草ぐき
 (8625) (続古十八) (月) (後嵯峨院)
- 歌 **おもかげ**の 外にもものこる 妹がしま これやかたみの 浦のもしほ火
 (8656) (建保百) (鴨) (康実)
- 歌 鴨のよる 磯まの浦の 夕なみに たが**面かげ**を かけてみつらん
 (9154) (島)
- 歌 **面かげ**の さきだつ月に ねをそへて わかれはちかの しまぞかなしき
 (9255) (面影山 顕昭歌枕長門国云云) (六帖)
- 歌 我がせこが **おもかげ**山の さかさまに われのみこひて あはぬねたしも
 (9256) (面影山 顕昭歌枕長門国云云) (六帖)
- 歌 わかれにし つらさや今も 残るらん **おもかげ**山の 有明の月
 (9276) (照月山)
- 歌 朝日かげ てる月山の てる月ぞ **面かげ**にして みんないふものを
 (9288) (今案、丹後右琴引浜、又源重之が日向国琴引の松ある絵をよめる歌、しら波のよりくる糸を
 をにすげて風にしらぶることひきの松、云云、山何国哉挿頭山 筑紫在之云云、不詳) (俊継)
- 歌 春の日の かざしの山の さくら花 ちりかふことぞ **面かげ**にたつ

● 『仙洞五十番歌合 乾元二年』 - 2 (0) 首 (1303年)

(書陵部蔵 501・544)

- (87) (四十四番) (左) (為相朝臣) (左もいとよろしく侍れど、右猶優艶にしてまさるべき
 よし各申し侍りて為勝)
- 歌 あはれわが 待ちし心は あらぬよに **おも影**ばかり 残る夕暮
 (90) (右勝) (新宰相) (左、こころあるさまに侍るを、こちよりと侍る、すこしおきおほ
 せずきこゆるにや、右、恋のこころをかしくはべれば勝つべきよしさだめられ侍りにき)
- 歌 思ひつもる つらさも今よ 心よわし ただ**おも影**の 夕暮の空

ごにじょういんにひやくしゅ

● 『後二条院二百首』 - 1 (0) 首 (1303年)

(内閣文庫蔵本)

- (76) (忘恋)
- 歌 契置きて わすれし人の **おもかげ**は つらきものから こひしかりけり

● 『為兼家歌合(乾元二年)』 - 1 (0) 首 (1303年)

(書陵部蔵 501・553)

- (41) (右) (為兼卿)
- 歌 秋の名残 ながめし空の 有明に **おも影**ちかき 冬の三日月

● 『歌合 乾元二年五月』 - 1 (0) 首 (1303年)

(内閣文庫蔵本)

- (30) (右) (経親卿)
- 歌 **面かげ**の こころにそはぬ 時ぞなき 見しはむかしに 人のなれども

● 『拾遺風体和歌集』 - 4 (0) 首 (1304年頃)

(有吉保氏蔵本)

- (10) (百首歌中に) (式子内親王)
- 歌 ながむれば みぬいにしへの 春までも **面影**かをる 屋どの梅がえ
 (269) (題不知) (従三位顕名)
- 歌 ふる里の **おもかげ**うかぶ いもが島 月のかたみの 浦づたひつつ
 (301) (中院御製)
- 歌 うつつとも 思ひあはせん をりはいつぞ 其夜の夢に みえし**おも影**
 (335) (逢不逢恋 光俊)
- 歌 忘れめや 袖引きとめて 有明に 又よといひし 人の**おもかげ**

● 『続門葉和歌集』 - 19 (0) 首 (1305年)

(東大寺図書館蔵本)

- (9) (前権僧正教範)
歌 ふるさとの 昔の春の おもかげを 花にのこして 匂ふむめが枝
- (60) (権律師頼駿)
歌 さきなばと 思ふ心の あらましに まづおもかげの 花を見るかな
- (61) (前権僧正憲深)
歌 人しれず まづ面影に さく花を いつか梢に うつしても見ん
- (62) (法印定任)
歌 花もはや さくべき比と 思ふより おもかげまよふ 岑のしら雲
- (142) (続門葉和歌集卷第三 夏歌 更衣のこころをよみ侍りける) (前権僧正教範)
歌 たちかへて 袖には見えぬ いろながら 心にのこる はなのおもかげ
- (313) (あづまにすみ侍りけるに大蔵卿重経のもとより、)
歌 有りし世に かはらぬ月の 面影も 宮古の外は いかがすむらん
(と申しおくり侍りける返しに 法印憲淳)
- (364) (桜会ひさしくたえてまちどほに侍りしに、永仁の秋の比、雨のいのりのかへり申すとて童舞いとおもしろく侍りければ、楽屋のまへのさくらの枝にむすびつけ侍りける) (よみ人しらず)
歌 はなにまちし その色色の おもかげを おなじさくらの 紅葉にぞ見る
- (444) (海辺雪を) (権律師賢誉)
歌 ふればきゆる あとよりやがて しらなみの よする渚は 雪のおもかげ
- (450) (岡雪を) (権少僧都運雅)
歌 風にうらみ 露にしほれし おもかげも 雪に残らぬ 岡のくずはら
- (525) (寛尊法師)
歌 いきてけさ かへらんものか うつりがに そふおもかげの おくらざりせば
- (535) (前大僧正聖兼)
歌 おもかげの 身にそひこずは おのづから 人を忘るる ひまやあらまし
- (542) (法印憲淳)
歌 有明の わかれはあきの むかしにて つれなき月に 残るおもかげ
- (570) (乍恨不忘恋といへる心を) (俊毫法師)
歌 いかなれば わがためにしも うき人の そのおもかげの 忘れざるらん
- (583) (法印実勝)
歌 有明の おもかげ残す 月にさへ 今朝はわかるる 横ぐものそら
- (636) (法印宗遍)
歌 さよごろも たちわかれにし あかつきの おもかげさえぬ 閨のうちかな
- (794) (文集の送老詩に可憐鏡中頻今朝老昨日といへる心をよめる) (観心院八清丸)
歌 あさなあさな かはるかがみの おもかげも 昨日やけふの 老と成るらん
- (857) (程をへて此歎き年経ても猶わすらるまじきよしなど返事申しけるにそへける) (聖戒上人)
歌 年ふとも おとろふまじき すがたかな うつる日数に 残るおもかげ
- (973) (経の中に生死涅槃猶如昨夢と説ける文につきて読みて、人の許へつかはしける) (法印憲淳)
歌 さめやらぬ 旅ねの夢の おもかげを きのふになして いつか見るべき
- (974) (返し) (聖戒上人)
歌 旅寝して さむるうつつの あらばこそ 昨日のゆめの おもかげも見め

ごにじょういんぎよしゅう

● 『後二条院御集』 - 4 (0) 首 (1305年)

(書陵部蔵 154・540)

- (12) (暮春雲)
歌 あかなくに ちりにしはなの 面かげを なほみよしのの 山のはの雲
- (69) (野霰)
歌 しらつゆの 玉ぬきかけし おもかげの あられにのこる まのはぎはら
- (97) (夢中恋)
歌 恋しさの ねてやわすると おもへども 又なごりそふ 夢のおもかげ
- (108) (可書入) (夢中逢)
歌 見る程は ゆめともしらぬ おもかげの さめてかなしき うたたねのどこ

● 『歌合 嘉元三年三月』 - 1 (0) 首 (1305年)

(神宮文庫蔵本)

(22) (右勝) (生覚)

歌 夜な夜なの 月を形みと むかへども みしよにかへる 面影はなし

● 『とはずがたり』 - 16 (0) 首 (1306年)

(日本古典集成 20)

(21) (作者)

歌 帰るさの 袂は知らず 面影は 袖の涙に 有明の空

(25) (作者)

歌 君だにも ならはざりける 有明の 面影残る 袖を見せばや

(29) (御所 (後深草院))

歌 知られじな 今しも見つる 面影の やがて心に かかりけりとは

(32) (巻二) (新院 (龜山院))

歌 いかにせん うつつともなき 面影を 夢と思へば 覚むる間もなし

(39) (有明の月)

歌 悲しとも 憂しとも言はん 方ぞなき かばかり見つる 人の面影

(49) (近衛大殿)

歌 短夜の 夢の面影 さめやらで 心に残る 袖の移り香

(51) (巻三) (作者)

歌 つらしとて 別れしままの 面影を あらぬ涙に また宿しつる

(56) (作者)

歌 わが袖の 涙に宿る 有明の 明けても同じ 面影もがな

(66) (御所 (後深草院))

歌 面影も 名残もさこそ 残るらめ 雲隠れぬる 有明の月

(67) (作者)

歌 数ならぬ 身の憂きことも 面影も 一方にやは 有明の月

(70) (御所 (後深草院))

歌 面影を さのみもいかが 恋ひ渡る 憂き世を出でし 有明の月

(86) (作者)

歌 立ち寄りて 見るとも知らじ 鏡山 心の中に 残る面影

(99) (作者)

歌 隈もなき 月になり行く 眺めにも なほ面影は 忘れやはする

(119) (作者)

歌 忘れじな 清き渚に 澄む月の 明け行く空に 残る面影

(158) (作者)

歌 露消えし 後の形見の 面影に また改まる 袖の露かな

(159) (作者)

歌 虫の音も 月も一つに 悲しさの 残る隈なき 夜半の面影

● 『為忠集』 - 3 (1) 首 (1307年)

(神宮文庫蔵本)

(6) (花をまちわぶる心を人人よみ侍りけるに)

歌 またじとを おもふところに ながめやる ねてもさめても 花のおもかげ

(207) (逢不逢恋を人人よみ侍りければ、とりあへず)

歌 面かげを わが身にそへて わかるは 月みる夜半の ふくるなりけり

(247) (宴遊)

歌 めであかぬ 雪をめぐらす そでの香に うつる心や おもかげにたつ

● 『龜山院御集』 - 12 (0) 首 (1307 - 1314年?)

(書陵部蔵 506・71)

(79) (恋)

歌 おなじ世に みしはうつつも かひなくて 夢ばかりなる 人のおもかげ

(143) (待月)

歌 まつほどの ころはれぬる 我が身には いでぬにみゆる 月のおもかげ

(165) (見恋)

歌 かぎりなき 心うつりて **おもかげ**を 見るはおもひの ますかがみかな

(176) (稀恋)

歌 たなばたも たえぬひと夜は よがれせず みとせに見つる 君が**おもかげ**

(178) (隠恋)

歌 **おもかげ**を 雲のいづくに やどすらん そらがくれする ありあけの月

(216) (落花埋路)

歌 ふるさとの **おもかげ**さへぞ わすれぬる はなにまよへる しがの山みち

(227) (別恋二首)

歌 **おもかげ**を 二にわりし ますかがみ これやかぎりの ためしなるべき

(240) (別恋)

歌 うしといふ ありあけのそらの 月なくは **おもかげ**とめぬ わかれならまし

(250) (五月雨久)

歌 **おもかげ**も わするばかりに 雲とちて この月はみぬ 五月雨のそら

(283) (月驚絶恋)

歌 夜半の月 みざらましかば たえはてし その**おもかげ**も 又はあらじを

(306) (契久恋)

歌 さだめなき しぐれはもとの しぐれにて めぐりもあはぬ 君が**おもかげ**

(323) (恨絶恋)

歌 うらみても さすがなれにし **面かげ**の うかりしままに たえむとや見し

● 『詠五十首和歌』 - 1 (0) 首 (1309年以前?)

(金沢文庫) (金沢文庫蔵本)

(30) (月前懐旧)

歌 月のみか 秋もむかしに かはらじを ゆめになりぬる 人の**おもかげ**

● 『和歌詠草』 - 2 (0) 首 (1309年以前?)

(金沢文庫) (金沢文庫蔵本)

(20) (証)

歌 さととほき やまぢのいほの かきをまで もれてくまなき 月の**おもかげ**

(38) (静)

歌 見てもまた あかぬわかれの かなしきは ゆめになりぬる 人の**おもかげ**

● 『十五番歌合(延慶二年~応長元年)』 - 1 (0) 首 (1309-1311年)

(尊経閣文庫蔵本)

(6) (右) (永福門院内侍)

歌 かれたてる ちくさももとの すがたにて 月にのこれる **おもかげ**の秋

● 『夫木和歌抄』 - 62 (14) 首 (1310年)

(静嘉堂文庫蔵本)

(696) (百首御歌中、万代) (式子内親王)

歌 ながむれば みぬいにしへの 春までも **面かげ**かをる やどの梅が枝

(994) (遊糸) (六百番歌合、遊糸) (後京極摂政)

歌 **面かげ**に 千里をかけて みするかな 春のひかりに あそぶいとゆふ

(1169) (百首御歌 光明峰寺入道摂政)

歌 芳野川 岩本桜 めもはるの 浪に**立ちそふ** 花の**おもかげ**

(2341) (百廿八首韻歌) (前中納言定家卿)

歌 なぐさめは 秋にかぎらぬ そらの月 はるよりのちも **おもかげ**の花

(2361) (六百番歌合、新樹) (隆信朝臣)

歌 **おもかげ**は しぐれし秋の もみぢにて うすもえぎなる かみなびのもり

(4316) (永久二年太神宮禰宜百首(ママ)歌合、女郎花) (読人不知)

歌 かがみ山 むかひの野べの をみなへし **おもかげ**さらず みつるけふかな

(4344) (嘉元元年百首、薄) (参議為相卿)

歌 岡野辺や 薄かたよる 秋風に 春の柳の **面影ぞたつ**

(4573) (あさがほ、六一) (躬恒他本伊勢歌)

歌 かすがのの 野べの朝がほ **面影**に 見えつついもは わすれかねつも

- (5277) (同年毎日一首中) (民部卿為家卿)
 歌 **面かげ**に 思ひぞ出づる 乙女子が 月ふみのぼる 雲の通ち
- (5455) (建久七年秋、左大将家にて置一字三十一首) (前中納言定家卿)
 歌 らんせいの 花のにしきの **面かげ**に いほりかなしき 秋のむら雨
- (5498) (文永八年毎日一首中) (民部卿為家卿)
 歌 しら露の 玉のおびする かきごしに 雪かと思ゆる 庭の**面かげ**
- (5528) (夜) (前中納言定家卿)
 歌 むかしてて こふともあはん 物なれや なに**面かげ**の 秋のよの空
- (5589) (建保三年名所百首御歌) (順徳院御製)
 歌 たまかづら いぶきの山の あきのつゆ 誰が**面かげ**を まつむしのこゑ
- (5914) (文治二年百首) (前中納言定家卿)
 歌 またもあらじ 花よりのちの **面影**に さくさへをしき 庭のむらぎく
- (5947) (九十九首菊歌中) (従三位為実卿)
 歌 **面かげ**は 梅やなぎにも かさなりて はるあきかよふ やへぎくの花
- (6576) (百首歌中) (前中納言定家卿)
 歌 霧に見し **面影**よりも さびしきは 霜にくもれる 野辺の明ぼの
- (6601) (六百番歌合、枯野を) (前中納言定家卿)
 歌 ゆめかさは 野べの千種の **面かげ**は ほのぼのなびく すすきばかりや
- (6794) (貞応二年当座百首、暁渡千鳥) (民部卿為家卿)
 歌 都おもふ ありあけの月の すみだ河 **おもかげ**ばかり ちどりなくなり
- (7175) (嘉元元年百首、雪) (参議為相卿)
 歌 霜までは 千草の跡も 見しのべの 雪にわかるる 秋の**おもかげ**
- (7212) (後京極摂政家詩歌合、雪中松樹低) (大蔵卿有家卿)
 歌 をとめ子が 袖しろたへに たちかさね うちふすよひの とこの**面かげ**
- (7919) (題不知、六帖) (読人不知)
 歌 ともし火の かげにかがよふ うつせみの いもがゑみがほ **おもかげ**にみゆ
- (8009) (六百番歌合、暁恋) (後京極摂政)
 歌 月やそれ ほのみし人の **面影**を しのびかへせば あり明の空
- (8012) (朝) (六帖題、朝、新一) (衣笠内大臣)
 歌 老いにける ほどもはかなし 朝ごとの たらひの水に うかぶ**おもかげ**
- (8313) (同) (正三位知家卿)
 歌 をとめ子が かづらきの山 ざくらかすみにもれし **おもかげぞたつ**
- (8314) (かざしの山、国未勘春歌中、万代) (橘俊綱朝臣)
 歌 春の日の かざしの山の さくらばな ちりかふことぞ **面影にたつ**
- (8384) (千五百番歌合) (野宮左大臣)
 歌 竜田山 こえしむかしの **面かげ**は ふもとの里の あり明の月
- (8546) (おも影山、因幡) (題不知、六五) (坂上郎女)
 歌 わがせこが **おもかげ**山の さかさまに われのみこひて あはぬねたしも
- (8547) (家集、いなばおもかげの山) (祐举)
 歌 いなばよとよに とはましものを とひしのみ／のび わすれがたき **おもかげ**のやま
- (8548) (永久四年七月忠隆家歌合、月) (藤原為忠朝臣)
 歌 澄みのぼる **おもかげ**山の 月みれば 心もそらに うつりぬるかな
- (8784) (石清水三首歌合、旅宿風) (寂蓮法師)
 歌 **おも影**は 都ながらの うたたねに 松風ぞふく さやの中山
- (9545) (宝治二年百首) (後九条内大臣)
 歌 夢路にも なこそこの関や つづくらん わが身にかよふ **おもかげ**ぞなき
- (9660) (宝治十首歌合、野外雪) (土御門院小宰相)
 歌 みなせ山 ちかきみかりの **おもかげ**や かたのゆきに なほのこるらん
- (9901) (題しらず、万三) (笠女郎)
 歌 みちのくの まののかや原 とほけれど **おもかげ**にして みゆといふものを
- (10276) (嘉元三年楚忽百首) (従三位為実卿)
 歌 男山 よどのわたりの 春のなみ 南の海に **面影ぞたつ**
- (10436) (ちかのしま、肥前従一位拾子かくれて後、十首歌読み侍りけるに、島月を、明玉)
 (後一条入道関白)
- 歌 **面影**の **先だつ**月に 音をそへて わかれはちかの 島ぞかなしき

(10769) (謙徳公)
 歌 **面影**に 見つつををらむ 花の色を かがみの池に うつしうゑては
 (10852) (嘉元元年竹園御会、名所池) (参議為相卿)

歌 いにしへを しのぶの簾 かげたえて **面影**うかぶ ひろ沢の池
 (11954) (六百番歌合、旅恋) (寂蓮法師)

歌 きよみがた いはしく袖の なみのうへに おもふわびしき 君が**おもかげ**
 (12737) (六帖題御歌、**面かげ**) (中務卿のみこ)

歌 山鳥の をろのかがみの 霜ぐもり うき**面かげ**を かけて恋ひつつ
 (12738) (六百番歌合、寄鳥恋) (法橋顕昭)

歌 やまどりの はつをの鏡 かけねども みし**おもかげ**に 音はなかれけり
 (12810) (建保三年名所百首) (藤原康光)

歌 かもめゐる いそまのうらの 夕浪に たが**おもかげ**を かけてまつらん
 (12863) (六百番歌合、寄鳥恋) (隆信朝臣)

歌 **面影**を ほのみしまのに たづぬれば 行へもしらず もずの草ぐき
 (13508) (嘉元元年百首、不逢恋) (参議為相卿)

歌 したひもに つけたる草は なのみして ころにかれぬ 人のおも影
 (13668) (文永五年毎日一首中) (民部卿為家卿)

歌 まだしらぬ 玉のうゑ木の **面影**も ゆきの梢に みるこちする
 (13720) (文応元年毎日一首中) (民部卿為家卿)

歌 色かへぬ 松はすくなき 初せ山は なる紅葉も **おもかげぞたつ**
 (13947) (六帖題、山なし、新六二(ママ)) (民部卿為家卿)

歌 聞きわたる **面影**見えて 春雨の 枝にかかれる 山なしの花
 (13948) (六帖題、山なし、新六二(ママ)) (衣笠内大臣)

歌 あしびきの 山なしの花 咲きしより たな引く雲の **面影ぞたつ**
 (14657) (家集) (基俊)

歌 いとけなき わが子をならの 里におきて こよひの月に **面影にたつ**
 (14817) (せたのさと、近江) (家集) (俊頼朝臣)

歌 せたのさと はしのむまふみ くちめおほみ そのなみだぞ **面影にたつ**
 (14930) (こやの戸) (寛元三年結縁経百首) (民部卿為家卿)

歌 あなこひし こやの戸いでし 片庇 ひさしくみねば **面影にたつ**
 (14974) (にしのかど) (祇園社百首 皇太后宮大夫俊成卿)

歌 きりのうちも まつ**面かげ**に **たつ**るかな にしのみかどの いしのきざはし
 (15558) (題不知、六五) (読人不知)

歌 今つくる まだら衣の **おもかげ**に われにおぼほゆ あまはきねども
 (16072) (しら山、加賀十題百首、神祇) (前中納言定家卿)

歌 **おもかげ**に おもふぞさびし うづもれぬ ほかだに冬の 雪のしら山
 (16332) (天王寺にまうで給ふ時、百首御歌) (慈鎮和尚)

歌 のりのみちや さぞ**おもかげ**に **たつた山** けさのかすみの あまのはごろも
 (16766) (春風桃李花開日) (大宰大貳高遠)

歌 春風に ゑみをひらくる 花の色は むかしの人の **おもかげ**ぞする
 (6771) (家集、寄煙恋) (前民部卿雅有卿)

歌 なき人は かへるけぶりも たてぬべし いけるつらさぞ **おもかげ**もみぬ
 (16885) (喜多院入道二品親王家五十首、旅) (前中納言定家卿)

歌 **おもかげ**の 身にそふやどに われまつと をしまぬ草や しもがれぬらん
 (17052) (六帖題、ひる) (権僧正公朝)

歌 うちたゆむ ひるまの夢の **おもかげ**は くもにもあらず あめにもあらず
 (17074) (兵部卿元親王家歌合、寝悟恋) (読人不知)

歌 こひわびて ころろまどへる ねざめには **おもかげ**をだに あふとたのまん
 (17121) (六百番歌合、寄絵恋) (前中納言定家卿)

歌 ぬしやたれ みぬよのことを うつしおく ふでのすさびに うかぶ**おもかげ**
 (17215) (としをへたる恋) (俊頼朝臣)

歌 としふとも こすのきけきの たえまより 見えししなひは **おもかげにたつ**

● 『柳風和歌抄』 - 4 (0) 首 (1310年)

(内閣文庫蔵本)

- (29) (名所の花といへるころを) (式部卿親王家藤大納言)
歌 おもひやる みやこのはるの おもかげに むかしをもみる しがのはなぞの
(71) (右衛門督為相卿家に歌合し侍りける時、三日月) (暁月法師)
歌 有明の すゑにまちかき なごりとして おもかげにたる よひの三か月
(106) (内裏百首歌の中に) (権中納言為兼卿)
歌 きりに見し おもかげよりも さびしきは しもにこもれる のべのあけぼの
(116) (権中納言為兼卿)
歌 庭は月 こずゑははなの おもかげに はる秋かよふ ゆきのあけぼの

● 『玉葉和歌集』 - 32 (4) 首 (1313年)

(宮内庁書陵部蔵 兼右筆「二十一代集」)

- (180) (光明峰寺入道前摂政内大臣に侍りける時よませ侍りける百首歌に、尋花といふことを)
(前中納言定家)
歌 鳥の声 霞の色を しるべにて 面かげ匂ふ 春の山ぶみ
(256) (春夜の心を) (九条左大臣女)
歌 風にさぞ ちるらん花の 面影の みぬ色をしき 春の夜のやみ
(301) (夏御歌の中に) (永福門院)
歌 うすみどり まじるあふちの 花みれば 面かげにたつ 春の藤波
(688) (前中納言定家)
歌 こしかたは みな面かげに うかびきぬ 行末てらせ 秋の夜の月
(832) (暮秋十首歌たてまつりし時) (前大納言為兼)
歌 心とめて 草木の色も ながめおかん 面かげにだに 秋や残ると
(860) (前中納言定資)
歌 ちりつもる 四方のこの葉に うづもれて 秋みしみちは 面かげもなし
(1322) (式部卿親王家にて題をさぐりて歌よみ侍りけるに、おなじ心を) (平国時)
歌 あふとみる その面かげの 身にそはば 夢ぢをのみや 猶たのむべき
(1348) (藤原俊言朝臣)
歌 身にそはば ながさみぬべき 面かげに など恋しさの なほまさるらん
(1363) (月のあかき夜、后宮しもにおりさせ給けるに) (円融院御製)
歌 てる月の 光はしばし よそならば 面かげにのみ またるべきかな
(1402) (月前待恋) (関白前太政大臣)
歌 身をさらぬ 面かげばかり さきだちて つけ行く月に 人ぞつれなき
(1448) (後法性寺入道前関白家に百首歌よませ侍りける中に) (皇嘉門院別当)
歌 かへるさは 面かげをのみ 身にそへて 涙にくらす 有明の月
(1479) (おなじ心を 別当)
歌 うくつらき 人のおもかげ わが涙 ともにぞうかぶ 月のよすがら
(1480) (六帖の題にて歌よみ侍りけるに、日ごろへだてたりといふことを) (前大納言為家)
歌 みか月の われてあひみし 面かげの ありあけまでに なりにけるかな
(1486) (十首歌合に寄月恋といふことをよませ給うける) (院御製)
歌 夜もすがら 恋ひなく袖に 月はあれど みし面かげは かよひしもこず
(1518) (寄夢恋) (左大臣)
歌 おもひねの 夢にうれしき 面影の さながらやがて うつつともがな
(1531) (恋歌の中に) (後徳大寺左大臣)
歌 心こそ うとくもならめ 身にそへる 面影だにも われをはなるな
(1597) (後二条院御製)
歌 恋しさの ねてやわすると 思へども またなごりそふ 夢の面かげ
(1746) (後法性寺入道前関白家に百首歌よませ侍りけるに遇不逢) (恋) (皇太后宮大夫俊成)
歌 よとともに 面かげにのみ たちながら また見えじとは などおもふらむ
(1750) (絶恋の心を) (前大納言為家)
歌 朝夕は わすれぬままに 身にそへど 心をかたる おもかげもなし
(1767) (中納言家持につかはしける) (笠女郎)
歌 夕されば もの思ひまさる みし人の こととひしさま 面影にして
(1821) (寄面影恋といふ心をよませ給うける) (院御製)
歌 人の見する 面かげならば いかばかり 我が身にそふも うれしからまし

(1919) (新院位させ給ひにける年の四月、祭の比、権大納言三位のもとより女使せし世のことなどいひて、)

歌 あはれなり 君もやしのぶ そのかみの みたらし河の けふのおもかげ
(と申して侍りける返事にかきそへ侍りける) (従三位為子)

(1971) (返し) (前中納言定家)

歌 物ごとに こぞの**面かげ** ひきかへて おのれつれなき もち月の駒
(1975) (入道前太政大臣)

歌 久かたの 月はむかしの 鏡なれや むかへばうかぶ 世世のおもかげ
(1982) (月をよみ侍りける) (従三位為子)

歌 われのみぞ もとの身にして 恋ひしのぶ みし**面かげ**は あらぬよの月
(1989) (八月ばかりに、かつらといふ所にまかりて、水に月のうつりて侍りけるをもらともに見し人に後につかはしける) (清原元輔)

歌 おもひいづや 人めなかりし 山郷の 月と水との 秋のおもかげ
(1999) (返し) (山階入道前左大臣)

歌 ややふくる わが世のほどの **面影**を 雲るの月に いかがならべむ
(2317) (元暦元年世の中さわがしく侍りける比、平行盛備前の道をかたむとてだんの浦と申す所に侍りけるに、八月十五夜月くまなきに、過ぎにし年は経正、忠度朝臣などもらとも侍りけるを、いかばかりあはれなるらむと思ひやられてそのよし申しつかはすとて) (全性法師)

歌 ひとりのみ 波まにやどる 月をみて むかしの友や **面かげにたつ**
(2318) (返し) (平行盛)

歌 もらともに みし世の人は 波のうへに **おもかげ**うかぶ 月ぞかなしき
(2380) (秋の比、人のみまかりにける跡にて有明月をひとりみてよみ侍りける) (深心院関) (白前左大臣)

歌 なくなくも したひてぞみる なき人の **おもかげ**ばかり ありあけの月
(2482) (むかし見し人の世をのがれて侍りけるをみて) (弁乳母)

歌 夢のうちに みし**面かげ**の かはらねば 猶ありし世の ここちこそすれ
(2581) (読人しらず)

歌 はかなしと おもひもはてじ 夢ぢには 又あひみける 人のおもかげ

● 『統現葉和歌集』 - 12 (2) 首 (1313年)

(群書類従本)

(66) (百首歌たてまつりし時) (前大納言為世)

歌 くるるまで みつるなごりに 山ざくら かへるさ送る 花のおもかげ
(68) (百首歌たてまつりしとき 前大納言実教卿)

歌 **おもかげ**は 尚**立ちさらで** このもとに くれても花の 色をみるかな
(312) (嘉元百首歌たてまつりしとき、月) (権中納言公雄卿)

歌 くものうへに なれし昔の **おもかげ**も わすれやすと 月にとはばや
(412) (永仁元年龜山殿十首歌に、河上暮秋) (二品法親王覚)

歌 いにしへの **面かげ**とめて 大井川 ふるきながれに 秋ぞくれ行く
(625) (藤原為道朝臣身まかりての比人のとぶらひて侍りしかば) (前大納言為世)

歌 かなしさを なげく涙に うかびきて なき**おもかげ**ぞ ある心ちする
(626) (平時範身まかりて侍りけるを、とかくなして又の日かの所へまかりてよみける) (藤原敏行)

歌 なき人の 煙となりし 跡とへば 夕の雲ぞ **おもかげにたつ**
(652) (春宮権大夫雅長卿身まかりにける秋、月を見侍りて申しつかはしてける) (為道朝臣女)

歌 いづくにか みし**おもかげ**の 残るらむ 宿はむかしの 秋のよのつき
(653) (返し) (春宮権大夫雅長卿女)

歌 秋のよの 月もむかしの やどながら など**おもかげ**の のこらざるらん
(687) (度会朝棟神主)

歌 **おもかげ**を なみにうつして 宮河や 神代の秋に かへる月かな
(733) (我見灯明仏本覚光瑞如此の心を) (権少僧都憲守)

歌 むかし見し **おもかげ**ながら めぐりきて おなじ光の 山のはの月
(741) (御返し) (西花門院)

歌 すぎきつる なごりはいとど ます鏡 残るともなき 夢の**おもかげ**
(763) (惣重上人)

歌 たかの山 この暁の **おもかげ**を こころの月に うつしてぞみる

● 『詩歌合 (正和三年)』 - 2 (0) 首 (1314年)
(書陵部蔵 501・627)

- (98) (右) (長俊)
歌 見しままの 月ぞいまも (ママ) 残りける かれのの霜の 秋のおもかげ
(114) (右) (光忠朝臣)
歌 面影も かはりはてぬる 冬の野に 秋みしままの 月ぞ残れる

● 『花十首寄書』 - 3 (2) 首 (1315年)
(書陵部蔵 501・380)

- (15) (頓覚)
歌 いまも又 きのふのはなの おもかげに たちもかはらぬ しらかはのなみ
(26) (実教)
歌 おもかげぞ とほざかり行く いにしへの みはしのはなの ちかきまもりは
(141) (浄弁)
歌 面かげの たちにし日より さくら花 さけるたかねに かかるしら雲

● 『正和四年詠法華經和歌』 - 1 (0) 首 (1315年)
(書陵部蔵管見記卷一六所収本)

- (51) (喜賀丸)
歌 うつりゆく むかしはとほく なりぬれど なほわすられぬ よよのおもかげ

● 『七夕七十首』 - 1 (0) 首 (藤原為理^{ためまさ}の生没: ? - 1316年)
(為理) (群書類従本)

- (61) (禁中七夕)
歌 雲の上は ほしのやどりの ちかければ おもかげかよふ 庭のともし火

● 『続後拾遺和歌集』 - 11 (0) 首 (1316年)
(宮内庁書陵部蔵 兼右筆「二十一代集」)

- (300) (建保二年内大臣家百首歌に、谷鹿) (前中納言定家)
歌 さをしかの あさ行く谷の 玉かづら おも影さらず 妻やこふらむ
(742) (賀茂経久)
歌 面影の 残るにつけて かなしきは 夢の枕の わかれなりけり
(846) (おなじ心を) (法眼行胤)
歌 とどまらぬ 今朝の別の 面影は 身にそひながら 猶したふかな
(892) (逢不会恋を) (前大僧正実超)
歌 袖ぬれし せきの清水の おも影も こえて忘れぬ あふ坂の山
(897) (題しらず) (平貞宗)
歌 さだかにも みざりし人の 面影を 何ゆゑ月に 思ひ出づらん
(903) (宝治百首歌めされける時、寄雲恋) (後嵯峨院御製)
歌 はかなしや 夢のおも影 きえはつる あしたの雲は かたみなれども
(930) (寄鏡恋) (源重泰)
歌 面影の かはるよりこそ ます鏡 うつるころの 程もみえけれ
(931) (権大納言基嗣)
歌 なみだにも くもらぬ物は ますかがみ みしおも影の 名残なりけり
(932) (宣旨典侍)
歌 ます鏡 みしおも影は とどまらで あらぬ涙の などうかぶらむ
(1158) (題しらず) (藤原秀賢)
歌 いにしへは おなじ月日を へだてにて 心にかよふ 世世の面影
(1243) (贈従三位為子身まかりてはての日、民部卿為藤すすめ侍りける歌中に、月前思故人といへることを) (従三位為理)
歌 なき跡の かたみとまでや 契りけん おも影のこす 秋の夜の月

● 『為理集』 - 18 (1) 首 (1316 年没)

(書陵部蔵 501・262)

- (34) (花間待月)
歌 おもかげは くれてものこる さくら花 月にそふべき 色ぞまとるる
(43) (曲水宴、同家会)
歌 ながれゆく 岩間のなみは くれぬれど おもかげうかぶ 花のさかづき
(53) (羈中花、吉田中納言会)
歌 こし方の おもかげなれど さくら花 又行すゑの 花とこそみれ
(144) (禁中七夕)
歌 雲のうへは 星のやどりの ちかければ おもかげかよふ 庭のともしび
(187) (恋) (二月十日、左宰相中将家会) (初恋)
歌 よそながら 思ひそむるを ちぎりにて はや身にそへる 人のおもかげ
(206) (見恋)
歌 思ひねに かよひだにせよ みずもあらず みもせぬ夢の よその面影
(209) (後朝恋)
歌 きぬぎぬの あかぬまたねの 夢はみて おもかげさそふ 袖のうつりが
(262) (早春滝)
歌 面影は こほるもおなじ たきつせに 音づれてこそ 春はきにけれ
(378) (春五首)
歌 立ちかへる 雲もさくらの おもかげに したひなれたる はるの鶯
(491) (霧間雁)
歌 おもかげの ちかづくばかり みえそめて 霧にのこれる はつかりのこゑ
(498) (月前思故人)
歌 なき跡の かたみとまでや ちぎりけん おもかげのこす 秋のよの月
(596) (遇恋)
歌 つれなさを なげきしよりや うからまし おもかげとめて 心かはらば
(607) (恨恋)
歌 今はただ なれしむかしの おもかげと 人のつらさぞ 身にのこりける
(628) (六月十日、左宰相中将家会) (暁恋)
歌 おもかげは さむる枕に とどまりて ゆめもわかれの あり明の月
(636) (左宰相中将家会) (馴後増恋)
歌 よそにみし 面影にだに なぐさみき なれてあかずと なに思ふらん
(803) (恋歌の中に)
歌 こころには にぬおもかげぞ したはるる つらさをしひて 思ひいづれど
(804) (恋歌の中に)
歌 おもかげの つらきこころの ままならば さのみや人を わすれざるべき
(816) (雑歌のなかに)
歌 いくよとも しらぬむかしの おもかげに かすみでのこる ふるさとの月

● 『悦目抄』 - 1 (1) 首 (1317-1319 年)

(日本歌学大系 4)

- (46)
歌 咲かざらむ 物とはなしに 梅花 面影にのみ 立ちて見ゆらん

● 『文保百首』 - 52 (7) 首 (1318 年)

(書陵部蔵 501・895)

- (212) (春日同詠百首応製和歌) (従一位臣藤原朝臣道平上) (春二十首)
歌 さかぬより おもかげをまづ 先だてて はなまつやまに かかるしらくも
(219) (春日同詠百首応製和歌) (従一位臣藤原朝臣道平上) (春二十首)
歌 行く春の わすれがたみの おも影を 霞に残す 有明の月
(414) (秋日同詠百首応製和歌) (太政大臣従一位臣藤原朝臣実重上) (春二十首)
歌 ちらぬまに 折らばやつさじ 山桜 おもかげばかり 家づとにして
(684) (恋二十首)
歌 たまさかに きてもとまらぬ あだ人は うき面影を 又したへとや
(712) (詠百首応製和歌) (従一位臣藤原朝臣公頭上) (春二十首)
歌 みよし野は まだふるとしの 面影に 春きても猶 花のしら雪

(729) (夏十五首)
 歌 うの花の さきしかきねの **面影**を 梢にのこす 軒のたちばな

(780) (恋二十首)
 歌 いかにせん 夢の名残の 身をさらで 覚めてもむかふ 人の**面影**

(887) (恋二十首)
 歌 よなよなの まくらになるる **面影**や みるかひもなき かたみなるらん

(982) (恋二十首)
 歌 **面影**を ほのみか月の 入りしより 在明までに あはぬ君かな

(1015) (夏日同詠百首応製和歌) (正二位臣藤原朝臣為世上) (春二十首)
 歌 くるるまで 見つる名残に 山桜 かへるさおくる 花の**面かげ**

(1084) (恋二十首)
 歌 かくてただ げにつれなくは **おもかげ**も われになみせそ 在明の月

(704) (詠百首応製和歌) (従一位臣藤原朝臣公頭上) (春二十首)
 歌 まちむかふ 花の**面影** **さきだちて** 風に雪ちる 春の明ぼの

(1111) (春日同詠百首応製倭歌) (正二位行民部卿臣藤原朝) (臣実教上) (春二十首)
 歌 **おもかげ**は **猶立ちさらで** 木の本にく れても花の 色をみるかな

(1118) (夏十五首)
 歌 散りすぎし 青葉の桜 **面影**を かきねにのこす 庭のうの花

(1184) (恋二十首)
 歌 いとはるる 身の程しらで うき人に うき**面かげ**の **立ちやそふらん**

(1465) (冬十五首)
 歌 忘れめや とやまの雪の 朝ぼらけ 春に**先だつ** 花の**面かげ**

(1473) (恋二十首)
 歌 おもひねの 夢のうちにも みゆるかな わすれずしのぶ 人の**おもかげ**

(1480) (恋二十首)
 歌 あかなくて 今朝のうつつの **面影**を せめてまたねの 夢にだにみん

(1481) (恋二十首)
 歌 わすられぬ うつつになれし **おもかげ**を さながらいまは 夢になせとや

(1561) (冬十五首)
 歌 ちる花の **面影**みえて 桜あさの かりふのはらに ふれるしら雪

(1581) (恋二十首)
 歌 せめてわが なぐさむ方と まつ夢の **面影**をさへ 人やをしまむ

(1680) (恋二十首)
 歌 **おもかげ**ぞ いつしかかはる ます鏡 みざりしよりも くもる涙に

(1783) (恋廿首)
 歌 わすられぬ **面影**ぞ猶 残りける ありしにかぎる 人の契りに

(1881) (恋二十首)
 歌 身をさらぬ **面影**そへて ほしわびぬ つれなきにのみ ぬれし袂を

(1952) (秋二十首)
 歌 **おもかげ**も まだこぬ冬を **さきだてて** 初霜さむき まののかやはら

(1984) (恋二十首)
 歌 今ここに みる心ちして みえぬかな おきわかれつる 人の**おもかげ**

(2012) (詠百首和歌) (頓覚上) (春)
 歌 わすれめや 昔みはしの 桜ばな 今は雲井の よその**面かげ**

(2015) (詠百首和歌) (頓覚上) (春)
 歌 みよしのは こぞみし雪の **面影**に 花吹きふぶく 山おろしの風

(2081) (恋)
 歌 **面影**を 急にかきとめて 身にそへん まことすくなき かたみなりとも

(2082) (恋)
 歌 我ばかり わすれぬ夢の **面影**の うきがかたみと なにのこるらん

(2083) (恋)
 歌 いかにせん みしよの月の **面かげ**の かはらでかはる 人のこころを

(2181) (恋二十首)
 歌 身にそふも なかなかくやし うきになり つらさにかへる 人の**おも影**

- (2210) (早春同詠百首応製和歌) (正三位臣藤原朝臣雅孝上) (春二十首)
 歌 色もかも 人しれずのみ いそがれて 心になるる 花のおもかげ
 (2284) (恋二十首)
 歌 かたみとて とどめもおかぬ **面かげ**を 忘れはてじと 思ふはかなさ
 (2294) (雑十首)
 歌 とし月の つもるへだても なき物は **面影**にそふ むかしなりけり
 (2343) (秋二十首)
 歌 **面影**は ただそのままに のこるかな 昔はなれし 雲の上のつき
 (2382) (恋二十首)
 歌 心にぞ むすびてきゆる 水のあわの うきかた人の なるる**おもかげ**
 (2484) (恋二十首)
 歌 今はまた 残るかたみも なかりけり **面影**だにも さだかならねば
 (2584) (恋二十首)
 歌 我ばかり わするるよなく なげけとや うき**面影**を 猶残すらん
 (2777) (恋)
 歌 わすれずよ 雲まの月の 其ままに まち出でし夜の 人の**面かげ**
 (2890) (雑十首)
 歌 古郷の 夜半の**おも影** さそひこよ 都にかよふ 月ならば月
 (2984) (恋二十首)
 歌 もろともに なれしそのよの **おもかげ**は 身にそひながら 猶ぞ恋しき
 (3119) (従三位宣子)
 歌 よひのまに 入りぬる月の **面かげ**を のこしてみする 庭のうの花
 (3155) (従三位宣子)
 歌 跡もなき 野べの千草の 霜がれに のこるを花の 秋の**おもかげ**
 (3178) (従三位宣子)
 歌 むば玉の 夢にもつらき **面影**に かへす衣の たのみ []
 (3184) (従三位宣子)
 歌 きぬぎぬも 今はよそなる 袖の上に 猶**面影**の 有明の月
 (3215) (昭訓門院春日)
 歌 **面影**や 春より後も しのばれん 霞になるる 有明の月
 (3278) (昭訓門院春日)
 歌 かたみとて **面影**のこる 月もなし 有あけならぬ 比の別は
 (3281)
 歌 わすらるる うき身にのこる **面影**に **猶たちかへる** ちぎりをぞまつ
 (3291) (昭訓門院春日)
 歌 まどろまぬ うきねの浪の 枕にも 見る**面影**は []
 (3383) (少将内侍)
 歌 ありし世の かたみもかなし ます鏡 うきにはかはる **面影**もがな
 (3391) (少将内侍)
 歌 ふるさとに たへてもすまじ **おもかげ**の のこる昔を しのば []

● 『続千載和歌集』 - 34 (4) 首 (1319年)

(宮内序書陵部蔵 兼右筆「二十一代集」)

- (64) (嘉元百首歌たてまつりし時、花) (贈従三位為子)
 歌 いまよりは またるる花の **面かげ**に **たつたの山の** 嶺のしら雲
 (68) (正治百首歌たてまつりける時) (式子内親王)
 歌 花をまつ **面かげ**みゆる 明ぼのは よもの木ずゑに かをる白雲
 (113) (花歌の中に) (源兼氏朝臣)
 歌 へだて行く むかしの春の **面かげ**に また**たちかへる** 花の白雲
 (165) (すずりのふたにさくらを入れて、入道前太政大臣につかはされる) (伏見院御製)
 歌 ちりまがふ **面かげ**をだに 思ひやれ 尋ねぬ宿の 花のしら雪
 (732) (すぎをしき) (入道前太政大臣)
 歌 わすれずよ 霜の下なる 花薄 をしきかたみの 秋の**面かげ**
 (827) (返し) (前参議雅孝)
 歌 いくくにも 猶**面かげ**の 身にそへば 月のみやこを おもひこそやれ

(1036) (百首歌めされしついでに)
歌 山鳥の はつをのかがみ ひとめみし **面かげ**さらず 人の恋しき
(1264) (高階成兼)
歌 おもひねの 枕にみえし **面かげ**は 夢としりても 猶ぞ恋しき
(1358) (藤原宗行)
歌 月だにも **面かげ**とめよ 衣衣の 袖のわかれを したふ涙に
(1362) (法皇御製)
歌 きぬぎぬの 袖の涙を かたみにて **おもかげ**とむる 有明の月
(1379) (朝恋を) (大蔵卿隆博)
歌 わすればや はかなき夢の 名残ゆゑ けさの枕に のこる**面かげ**
(1393) (人の鏡のうらに書付けける) (藤原宗秀)
歌 **面かげ**を おもひもいづな ます鏡 またこそ人も こころうつらば
(1408) (道義法師)
歌 **おもかげ**も 涙にはては くもりけり 月さへ人の 契わすれて
(1410) (百首歌奉りし時) (権中納言為藤)
歌 **面かげ**ぞ いつしかかはる ます鏡 みざりしよりも くもる涙に
(1497) (嘉元百首歌に、逢不逢恋) (万秋門院)
歌 いつなれし **面かげ**ぞとも かこたれず ただ身にそふを ながさめにして
(1498) (題しらず) (僧正覚円)
歌 めぐりあふ 月はかはらぬ **面かげ**を いかなる雲の **たちへだつらん**
(1499) (弘安百首歌奉りける時) (前大納言為氏)
歌 **おもかげ**の わすれぬばかり かたみにて まちしににたる 山のはの月
(1500) (恋の歌中に) (大蔵卿隆博)
歌 もろともに まち出でし夜の **面かげ**も さらに恋しき 山のはの月
(1502) (順徳院御製)
歌 月も猶 みし**面かげ**や かはらん なきふるしてし 袖のなみだに
(1505) (為道朝臣)
歌 おのづから ともに見しよの **面かげ**も むかしになりぬ 秋のよの月
(1510) (法眼行濟)
歌 もろ友に みしをかたみの **面かげ**に 月ぞなみだを 猶さそひける
(1517) (藤原泰宗)
歌 もろ友に ながめし夜はの 月ばかり **おもかげ**残る かたみとぞなる
(1518) (平齊時)
歌 わすれずよ やへ雲がくれ 入る月の へだてし中に 残る**面かげ**
(1529) (恋歌の中に) (今出川院近衛)
歌 みずもあらず さめにし夢の わかれより あやなくとむる 人の**面かげ**
(1533) (弘安百首歌めされける次に) (龜山院御製)
歌 おなじ世に みしはうつつも かひなくて 夢ばかりなる 人の**面影**
(1535) (祝部成良)
歌 おのづから みしやそのよの **おもかげ**も いかなる夢の 契なりけん
(1605) (鴨祐敦)
歌 ちぎらずよ うき**面かげ**を 残し置きて 忘らるるみの 形見なれとは
(1660) (おなじ心を) (法印覚寛)
歌 かへる雁 こし路の空の 白雲に 都の花の **面かげ****やたつ**
(1675) (祝部行氏)
歌 をらずとも 人にかたらん 山桜 みる**面かげ**を 家づとにして
(1769) (藤原忠能)
歌 **面かげ**ぞ 猶残りける いもがしま かた見のうらの 有明の月
(1947) (月催懐旧と云ふ事を) (藤原忠資朝臣)
歌 見しことも かはらぬ月の **面かげ**や ただめのまへの 昔なるらん
(2036) (龜山院の御事おもひいでて) (前大僧正道性)
歌 わすらるる 時こそなけれ あだにみし ととせの夢の 秋の**面影**
(2062) (なき人を夢にみて) (前大僧正道性)
歌 **面かげ**を 心にのこす おもひねの 夢こそ人の かたみなりけれ

(2066) (平貞朝母身まかりにける時よめる) (平貞房)
歌 うつつとも 夢ともわかぬ 面かげの 身にそひながら わかれぬるかな

● 『元応二年八月十五夜月十首』 — 1 (0) 首 (1320年)
(書陵部蔵伏・576)

(20) (八月十五夜同詠月十首和歌) (頼清)
歌 あきらけき 御代の昔の おもかげや こよひの月の 光なるらん

● 『外宮北御門歌合 元亨元年』 — 7 (1) 首 (1321年)
(龍谷大学図書館蔵本)

(36) (右勝) (朝棟)
歌 浅茅生の 露の跡とふ 月のみや 霜にもかれぬ 秋のおもかげ
(127) (同前) (六十四番) (懐旧夢) (左) (朝名)
歌 たのまずよ 見るもはかなき 夢路より 面影ばかり 通ふ昔は
(131) (六十六番) (左) (富行)
歌 はかなしや さむればもとの 古に 又立ちかへる 夢のおもかげ
(133) (六十七番) (左) (行俊)
歌 なき人の おもかげ見せて ぬるがうちの 夢はむかしも 隔たざりけり
(136) (右) (秀長)
歌 面影も 有りしばかりに 見る程の 夢ぞ昔の かた見なりける
(139) (是も両首心詞同じ、不可有勝劣歟) (七十番) (左持) (貞蔭)
歌 おもかげの 人だのめなる 昔かな 見てもとまらぬ 夢にかよひて
(144) (右) (朝棟)
歌 おもかげは さらに残る いにしへを 猶忍べとや 夢にみゆらん

● 『資広百首』 — 1 (0) 首 (1323年頃)
(書陵部蔵 501・264)

(98) (雑十五首)
歌 たらちめの なきおもかげを みる夢に おどろかされて むかしをぞとふ

● 『龜山殿七百首』 — 8 (1) 首 (1323年)
(書陵部蔵 501・848)

(14) (湖霞) (左大弁宰相公明)
歌 ふりにける 春やむかしの 面かげも かはらずかすむ 志賀のから崎
(107) (花面影) (六条前中納言)
歌 面影を かすめる雲に さきだてて さくらいろなる 二月の空
(109) (惜花) (前藤大納言)
歌 とどまらで ちるとも花の 面かげは をしむ心に 猶やのこらん
(273) (初雁幽) (源三位)
歌 おもかげは それとしもなし 夕暮の みねとびこゆる 初かりのこゑ
(393) (池寒蘆) (御製)
歌 水鳥の あをばは冬も かれねども あし間さえ行く 池のおもかげ
(437) (故郷雪) (為親朝臣)
歌 さく花の 面かげのこせ 白雪を とはぬもつらし しがのふる郷
(514) (夢恋) (六条前中納言)
歌 今も猶 さめてうつつに かなしきは 心にのこる 夢の面かげ
(570) (夢恋) (六条前中納言)
歌 我が思ふ 人をかたみに しのおとも うき面影は うつしとどめじ

● 『石清水社歌合 元亨四年』 — 1 (0) 首 (1324年)
(久保田淳氏蔵本)

(24) (右勝) (従一位行左大臣)
歌 おも影を なほとめじとや かへるかり 霞む夕べの 空に鳴くらむ

● 『臨永和歌集』－ 15 (0) 首 (1331年)

(神宮文庫蔵本)

- (56) (題しらず) (二品法親王慈)
歌 にごれただ うつればやがて 散る華の おもかげみする 庭の池水
(76) (文保三年後宇多院に百首歌たてまつりける時) (前関白左のおほいまうちきみ)
歌 行く春の わすれがたみの おもかげを かすみのにのこす 有明の月
(77) (春宮大夫公宗卿母)
歌 おもかげや 春より後も しのばれん かすみになるる 有明の月
(87) (新院御製)
歌 あふひ草 かざすやけふの 神まつり たてしつかひも 面影にみゆ
(400) (侍従忠定卿)
歌 むばたまの 夢路ばかりは なかなかに みゆるもつらし 人のおもかげ
(411) (正中二年八月十五夜内裏にて五首歌講ぜられける時、月前恋と云ふ事を) (按察使公敏卿)
歌 おもかげも なほ見せじとや めぐりあふ 月もなみだに かきくもるらん
(430) (おなじ心を) (藤原行朝)
歌 なぐさめし 夢のちぎりも よがれして 面影をのみ 涙にぞみる
(482) (羈中暁恋と云ふ事を) (前大納言為世卿)
歌 旅ごろも 袖のわかれに 立ちそひて おもかげおくる ありあけの月
(483) (恋歌の中に) (今出川院近衛)
歌 おなじよと なにしたふらん 有明の おもかげばかり さらぬわかれを
(493) (元徳二年九月十三夜うへののをのこども三首歌つかうまつりけるついでに、稀逢恋と云ふ事をよませ給うける) (今上御製)
歌 あはぬまも わするるとしは なけれども 又おどろかす おもかげぞうき
(508) (嘉元百首歌に、逢不遇恋) (万秋門院)
歌 いつなれし おもかげぞとも かこたれず ただ身にそふを なぐさめにして
(517) (春宮大夫公宗卿)
歌 いかにせん 残るかたみの おもかげも へだてはてぬる 中の契を
(528) (藤原行房朝臣)
歌 今は又 残るかたみも なかりけり おもかげだにも さだかならねば
(530) (本空法師)
歌 とほざかり おもかげしたふ ひとりねに 忘れ形見の 夢ぞはかなき
(631) (あづまに月を見てよみ侍りける) (前参議雅孝卿)
歌 おもかげも 月にとどめて 雲のうへに つかへし秋ぞ さらにわすれぬ

● 『松花和歌集』－ 3 (0) 首 (1331年)

(内閣文庫・国文学研究資料館・住吉神社・久曾神昇氏蔵本)

- (98) (冬のうたとて) (前権僧正雲雅)
歌 秋の色は 露も残らぬ あさぢふに 月よりほかの 面かげぞなき
(181) (平光平)
歌 こぬひとの おもかげさそふ 月だにも ふけてはつらき そでのうへかな
(235) (少将内侍)
歌 故郷に たへてもすまじ 面かげの 残るむかしを しのばざりせば

● 『一宮百首』－ 2 (0) 首 (1331年)

(尊良親王) (尊経閣文庫蔵本)

- (38) (秋) (萩)
歌 花もまた おもひいづらん 秋はぎの とぐちになれし きみがおもかげ
(81) (絶恋)
歌 面かげの なほうき身には のこるかな おもひたえぬる 契なりとも

● 『拾藻鈔』－ 7 (0) 首 (1334年)

(公順) (書陵部蔵 501・283、東山御文庫蔵本)

- (306) (民部卿家三首、寄月恋)
歌 こぬ人の おもかげばかり いたづらに なれていくよの 月を見つらむ

(315) (帥親王家五十首、後朝恋)

歌 きぬぎぬの おもかげのこす 月だにも あけはなれぬる そらぞかなしき

(415) (高山寺関白こと侍りしたのとし、彼あとにて花を見て)

歌 たちよれば 袖をぞぬらす 見し人の おもかげのこす 花のした露

(428) (返し)

歌 山のはに かくれし月の おもかげは わすれずながら やみぞかなしき

(429) (いはくらにすみ侍りしころ、民部卿、入寺すべきよしたのめおきて早世侍りしかば、その事など申し侍りしついでに御子左中納言もとへ)

歌 いまこんと いひしばかりの おもかげを 月にしたひて ねのみぞなく

(445) (民部卿、病のゆかに、いま一たびとて対面し侍りし事など申しおこせ侍りしついでに、法印長舜もとより)

歌 いかんせむ おもかげばかり 身にそひて またもかへらぬ 人のわかれを

(446) (返し)

歌 そのままに 又もかへらぬ わかれには おもかげのみぞ かたみなりける

● 『三五記』 - 2 (0) 首 (鎌倉後期成立)

(日本歌学大系 4)

(9) (俊成女)

歌 露はらふ ねざめは秋の 昔にて 見はてぬ夢に のこるおもかげ

(187)

歌 三日月の われてあひみし 面影の 有明までに なりにけるかな

● 『桐火桶』 - 3 (0) 首 (鎌倉後期成立)

(日本歌学大系 4)

(189) (摂政良経)

歌 忘れじと 契りて出でし 面影は 見ゆらむものを ふるさとの月

(216) (亡父卿女)

歌 面影の かすめる月ぞ 宿りける 春やむかしの 袖の涙に

(218) (亡父卿女)

歌 夢かたよ 見し面影も 契りしも 忘れずながら うつつならねば

● 『曾我物語』 - 1 (0) 首 (鎌倉末期成立)

(真名) (古典籍叢刊〈妙本寺〉)

(56) (箱根別当)

歌 夢ならで 又も合ふべき 身ならねば 見る面影に 袖くちぬべし

● 『権大納言典侍集』 - 1 (0) 首 (生没年未詳が、鎌倉末期)

(親子) (書陵部蔵統群書類従本)

(54) (同じ時、恋)

歌 いかなれや 夕ぐれごとに 面かげの 見るここちして 今宵恋しき

じょうべんしゅう

● 『浄弁集』 - 1 (0) 首 (鎌倉末期)

(書陵部蔵 406・24)

(7) (春雪)

歌 春やとき 霞みもあへず 散る花の 面影さむく 雪は降りつつ

● 『尚賢五十首』 - 1 (0) 首 (鎌倉末期)

(書陵部蔵 415・341)

(4) (尚賢五十首〔5 1 尚五十〕 (詠五十首和歌) (主殿允大江尚賢) (雨後梅)

歌 雨はれて ぬれ色ふかき 梅の花 見口おもかげも かへるべしやは

● 『正覚国師集』－ 2 (0) 首 (夢窓 疎石の生没：1275 - 1351年)
(元禄十二年板本)

(35) (観応三年三月廿一日、左武衛將軍禪閣并相公羽林同道して来臨、法談後、庭前花下にて人人歌よみける次に)

歌 これや又 春のかたみと なりなまし ころにちらぬ 花の面影

(86) (無常の歌をすすめけるとき)

歌 あだながら 心にのこる おもかげぞ けぶりとならぬ すがたなりける

● 『自業和歌集』－ 5 (0) 首 (春日若宮神主中臣祐臣の生没：1283 - 1342年)
(祐臣) (書陵部蔵 501・180)

(24) (永仁三年千首歌に、花を)

歌 まちかぬる 心のうちに あるものを 雲さへみする 花のおもかげ

(42) (嘉元三年に名所百首よみ侍りし中に)

歌 ちりぬとも わすれじものを 鏡山 ころにうつす 花のおもかげ

(68) (嘉元二年花百首に)

歌 かたみとも いつまでかみむ 山桜 おもかげばかり のこるしら雲

(208) (古寺暁月といふことを)

歌 いにしへの おもかげのみや 残るらむ とよらのてらの 在明の月

(238) (初冬時雨といふことを)

歌 冬のきて しぐれかへたる 夕暮も さすがに秋の おもかげぞする

室町時代

(およそ 240 年間)

「面影」が出ている和歌： 1187 首
「面影」+「立つ」が出ている和歌： 126 首
頻出率： 10.6%

● 『風に紅葉』－ 1 (0) 首 (南北朝・室町時代)
(鎌倉時代物語集成 2)

(47) (内の大臣)

歌 ありし夜の ゆきふるさとは うづもれて すみこし人の おもかげぞなき

● 『夢の通路』－ 2 (0) 首 (室町時代)
(古典研究会叢書)

(4) (権大納言)

歌 手折りつる 枝にころを しめぬれば いとどあかれぬ 花のおもかげ

(61) (若君 (権大納言))

歌 又や見む 身にしむまでに おく露の そのたそかれの 花のおもかげ

● 『徽安門院一条集』－ 1 (0) 首 (南北朝時代)
(尊経閣文庫蔵本)

(2) (徽安門院一条集 [35 徽安門])

歌 そらの色は ややかすめども ふるとしの おもかげのこる 雪のとほ山

● 『貞秀集』－ 1 (0) 首 (松田貞秀) (南北朝 - 室町時代)
(続群書類従本)

(78) (旅月)

歌 わかれこし みやこの秋の おもかげを 月にぞのこす まののかや原

● 『曾我物語』－ 1 (0) 首 (南北朝期・室町初期成立)
(仮名) (日本古典文学大系 88)

(8) (女(玉津島明神の御つかひ))
歌 今はとて わすれやすらん 玉かづら 面影にのみ いとど見えつつ

● 『井蛙抄』－ 4 (1) 首 (南北朝時代前期成立)
(日本歌学大系 5)

(179) (巻第二 取本歌事)
歌 たづねぬは おもひしみわの 山ぞかし わすれねもとの つらきおもかげ
(346)
歌 みちのくの まののかやはら とほけれど おもかげにして みゆといふものを
(478) (顯輔卿)
歌 あづまぢの のじまがさきの はまかぜに わがひもゆひし いもがかほのみ おもかげにみゆ
(544) (大夫入道(俊成))
歌 おもかげに 花のすがたを さきだてて 幾重こえきぬ 嶺の白雲

● 『源氏物語古注釈書引用和歌』－ 3 (1) 首 (鎌倉-南北朝時代)
(古注釈書 4 種)

(349) ((3・4))
歌 ゆめにだに みゆとはみえじ あさなあさな わがおもかげに はづる身なれば
(422) (てならひ(2・3・4))
歌 ももとせに ひととせたらぬ つくもがみ われをこふらし おも影にたつ
(1403) (玉鬘)
歌 人はいさ おもひやすらん 玉葛 おも影にのみ いとどみえつつ

● 『古今和歌集古注釈書引用和歌』－ 1 首 (1) (南北朝期成立)
(古注釈書 12 種)

(104)
歌 おしててるや 難波の浦の 明日(あきらひ)に 見そめて美女(わぎもこ)が 恋しき影の 面影に
立つ

● 『義経記』－ 1 (0) 首 (室町初期・中期成立)
(日本古典文学大系 37)

(7) (静吉野山に棄てらるる事) (静)
歌 在りのすさみの にくきだに 在りきの後は 恋しきに 飽かで離れし 面影を 何時の世にかは
忘るべき 別れの殊に 悲しきは 親の別れ 子の別れ 勝れてげに 悲しきは 夫妻の 別れなりけり

● 『蔵玉集』－ 2 (0) 首 (1320-1388年?室町時代)
(島原松平文庫蔵本)

(32) (吹) (面影草) (昔、男女あかずして別れ侍りける時、鏡に面影を互にうつして、此鏡をうづみ畢はんぬ、其所より山吹生出でける云云、巨細、忘衣の物語にあり
昔、大和国奈良原と云ふ所にある男、山城国みでの里にすむ女にかよひけり、互の志不浅、而るに互の親しかりて初めて彼の男女云ひけるは、志雖深切、今より会ふ事不可叶と云ひて、鏡をとり出でて互に面影をうつして、若し再会あらん時は此鏡をほり出だすべしと云ひて、籬の下にうづむ、後の年の春、此所より款冬生出でたり、男あはれに思ひて不断此所に独すみて歎きける、親此事を聞きて、鏡をほり出でてとぎて又うづむ、其年の秋、又此所より槿華生出でたり、其時、此男、さては他の心ありとて忘れけりと云云)
歌 故郷の 面かげ草の 夕ばえや とめしかがみの 余波ならまし
(33) (鏡草)
歌 面かげを たがひにとめし かがみ草 忘衣の 名残うらめし

● 『建武三年住吉社法楽和歌』－ 10 (0) 首 (1336年)
(尊経閣文庫蔵本)

(4) (見月増恋)
歌 うきことも 涙ながらに おもひいでて 月こそさそへ 人のおもかげ

- (14) (見月増恋)
歌 おもかげの うかぶさへうし わするなど 月をかたみに なにちぎりけん
- (19) (見月増恋)
歌 わすれんと おもひなりぬる おもかげを またおどろかす 月もうらめし
- (28) (見月増恋)
歌 いづるまは わするるまある おもかげも うつればくもる そでの月かげ
- (48) (見月増恋)
歌 おもひいでて なほしのべとや うき人の おもかげみする よなよなのつき
- (63) (見月増恋)
歌 おもひいづる ひとのおもかげ くもるまで 月ゆゑもろき わがなみだかな
- (68) (見月増恋)
歌 月ゆゑは なほこひしさの ますかがみ うきおもかげは みるもかひなし
- (78) (見月増恋)
歌 もろともに みし夜の秋を おもひいでて 月に恋しき 人のおもかげ
- (88) (見月増恋)
歌 はてはまた 月をぞかこつ おのづから やみはあやなき おもかげもあり
- (93) (見月増恋)
歌 月ゆゑに こころやなほも なれぬらん あらましごとに ふかきおもかげ

● 『朗詠題詩歌』 - 3 (0) 首 (1338年)

(書陵部蔵統群書類従本)

- (388) (王昭君)
歌 かはりける わがおもかげの たぐひかと 涙にくもる 月をみるかな
- (392) (王昭君)
歌 いまこそあれ いかにしりてか かねてより うきおもかげを うつしおきけん
- (444) (交友)
歌 まとみせし 月とはなとの おもかげを いくはるあきに おもひいづらん

● 『北野社百首和歌(建武三年)』 - 2 (0) 首 (1336 - 1343年)

(書陵部蔵 458・1)

- (32) (見月) (通阿上人)
歌 いにしへの おもかげにのみ 返りけり むかへば月に 老をわすれて
- (70) (侍多千億仏)
歌 面かげや [] うつつと なりつらん あまたさめける 夢になれきて

にじょうためしげ

● 『為重集』 - 1 (0) 首 (二条為重の生没: 1325 - 1385年)

(書陵部蔵 206・703)

- (339) (被忘恋)
歌 今ぞげに 残るとはしる あはで身に はなれしほどの 人のおもかげ

じどうしんのうしゅう

● 『慈道親王集』 - 3 (0) 首 (1339年以降)

(書陵部蔵 150・565)

- (104) (天王寺別当、おもひのほか、しばしとどめられし時、名所月といふ題にて)
歌 面かげも わすれずかへれ なにはがた 月にみしよの 秋の浦なみ
- (168) (寄鏡恋)
歌 かはりゆく 人のつらさも ますかがみ うきおもかげに ぬるる袖かな
- (186) (寄月懐旧)
歌 わすれずよ かめのを山の あきの月 うきおもかげに 袖はぬれつつ

はなぞのいんぎよしゅう

● 『花園院御集』 - 2 (0) 首 (1342年以前?)

(光厳院) (書陵部蔵 151・370)

- (32) (七夕)
歌 目にちかき 面影ながら 年もへぬ 雲井の庭の 星合の秋

(89) (雪中懐旧)

歌 むかしをば うづみや残す 白雪の ふりにし世のみ うかぶおもかげ

こうえい

● 『持明院殿御歌合 康永元年十一月廿一日』 - 1 (0) 首 (1342年)
(書陵部蔵 501・553)

(31) (十六番) (左) (兼覚)

歌 あやしくも 見し面影の うかびきて やがてもまよふ 我がころかな

じみょういんどのぎょかいわか

● 『持明院殿御会和歌』 - 5 (0) 首 (1342年)
(刈谷市中央図書館蔵本)

(5) (持明院殿御会和歌〔163持明会〕 (康永元年十一月九日 初雪 持明院殿御会御歌)
(雪) (御製)

歌 おもかげぞ 先うかびける 山かげや 軒ばにめぐる 松のしら雪

(7) (御製)

歌 おもかげも のこると誰か しら雪の ふりにし世世ぞ さらにこひしき

(8) (御製)

歌 おもかげぞ 先うかびぬる 雪にしも めぐれる山の 松のかずかず

(18) (御製)

歌 おもひやる 心にうかぶ おもかげに 見る心地する ゆきの山ざと

(22) (御製)

歌 ながめても 先こひしきぞ うかびぬる み山のさとの 雪のおもかげ

● 『院六首歌合 康永二年』 - 1 (0) 首 (1343年)
(日大総合図書館蔵本)

(89) (右) (真乗)

歌 わすれかねて うきおもかげの 身にそふや たえてののちも かた身なるらん

● 『金剛三昧院奉納和歌』 - 1 (0) 首 (1344年頃)
(尊経閣文庫蔵本)

(103) (つ) (実性)

歌 つたへきて いまもあふげば わしの山 面かげのこる 在明の月

● 『藤葉和歌集』 - 12 (2) 首 (1345年)
(群書類従本)

(18) (嘉元百首歌に、霞をよませ給うける) (亀山院御製)

歌 おもかげや はるの空にも **たちぬらん** わけて霞の 色は見えねど

(47) (正中二年百首歌奉りける時) (権中納言公雄)

歌 おもかげは まづ **さきだちて** しら雲の たな引く山に 花を待つかな

(494) (入道親王覚誉)

歌 うき人の 面かげならぬ 月にしも なれて幾夜か 物おもひけん

(539) (前大納言尊氏家にて、同じ心をよみ侍りける) (藤原為実)

歌 おもひやれ あしたの床の おもかげは 夢にみてだに おきうかりしを

(542) (題しらず) (よみびとしらず)

歌 うき人の 心もしらで たちかへる 今朝の別に のこるおもかげ

(557) (源和氏細川阿波守)

歌 おもかげに しばしなぐさむ 夢をだに ゆるさぬ夜半の かねの音かな

(567) (藤原実古朝臣)

歌 あふとみる おもかげまでは かはらぬを 夢にはのこる うつり香ぞなき

(573) (亀山殿七百首うたに、夢恋) (前中納言有忠)

歌 今もなほ さめてうつつに かなしきは ころろのこる 夢の面かげ

(594) (あひなれ侍りける女の許より、日数へて花をおこせたりければ、さらでだにわするまなき

佛をそへてみせたる花もなつかし、とさねとほの朝臣、人にかはりて申遣しける返しに) (よみ人しらず)

歌 花にそふ 面かげなくは 山桜 ちりなん後は 忘れもやせむ

(596) (よみ人しらず)

歌 わすられぬ **面かげ**のみと 思ひしに また身にそふは 涙なりけり

(627) (八月十五夜仙洞にて、をのこども題をさぐりて歌つかうまつりしに、恋月といふことを)
(藤原為嗣朝臣)

歌 わすられし 秋の心の つらけれど 月を名残に したふ**面影**

(629) (建武元年八月十五夜内裏にて、五首歌講ぜられける時、見月増恋の心をよみ侍りける)
(前中納言季雄)

歌 いとどうき **面かげ**そへて 我が為の 秋とや月の 空に見すらん

● 『拾玉集(慈円)』 - 32 (5) 首 (1346年)

(青蓮院蔵本)

(274) (後朝恋)

歌 したふかと 見えつるけさの **おも影**を 暮れまつほどの なぐさめにせん

(462) (恋十首)

歌 人しれず あひみぬさきの **おもかげ**を あらぬさまにや 思ひつくらむ

(463) (恋十首)

歌 思ひいづる こひちにすすむ **面かげ**は かへさをしらぬ するべなりけり

(705) (鶯)

歌 鶯の いでぬるこゑを ききとめて ふるすにぞ見る 春の**おも影**

(794) (別)

歌 ひとりさへ 涙すすむる たよりかな 別れしほどの 袖の**おも影**

(1274) (恋十五首) (**おもかげ**に)

歌 思ひをば いかでしらせん すがたこそ その**おも影**に あらはれぬとも

(1275) (恋十五首) (**おもかげ**に)

歌 物おもふ 人の**おもかげ** あらはれて 夢ならずとも いもはみるらん

(1276) (恋十五首) (**おもかげ**に)

歌 かくばかり かよふ心の するしあらば わが**おも影**も **たたず**や有るらむ

(1277) (恋十五首) (**おもかげ**に)

歌 けふまでは **おもかげ**にても なぐさめつ 後の世までも 見るよしもがな

(1278) (恋十五首) (**おもかげ**に)

歌 にごり江と 結ぶ契は なりぬれど なほ**おもかげ**は うかぶなりけり

(1330) (花月百首) (桑門時貞) (花五十首)

歌 雲にまがふ たかねのはなの **おも影**は ちらで心に かかるなりけり

(1409) (梅)

歌 梅の花 さかねど色は 見るものを **おも影**なきは にほひなりけり

(1492) (仏寺)

歌 たのむべし もろこしぶねの **おも影**を うつしとどむる 山川の水

(1614) (見恋、勝、かねむね卿)

歌 見ればげに 中中にとて うとくとも なほ**おも影**の はなるべきかは

(1728) (十二番左)

歌 **おも影**に もみちの秋の **たつ田川** ながるる花も にしきなりけり

(1729) (右勝)

歌 たつ田川 柳のまゆに みつるかな よしのの山の 花の**おも影**

(2821)

歌 法のみち さぞ**おも影**に **たつ田山** 今朝の霞の あまのはごろも

(4313) (蛍照故郷)

歌 いにしへの **おもかげ**みする ほたるかな たかつの宮の まつの梢に

(4482) (花)

歌 よしの山 **おも影**さらぬ ながめより よるさへ峰の 花を見るかな

(4616) (恋七首)

歌 ぬくぼるし 人の**おもかげ** 身にそひて ひとりぬみのみ せられぬるかな

(4774) (雪)

歌 やま里の 庭も木ずぬも ふりとちて **おも影**さむき 雪の曙

(5178) (わが歌どもはわすれたればかかず文治六年、寂蓮入道思ふ事ありていつもの大社へまうでてかへりてのち、ふみやりたりし返事にかく申したり)

歌 むかし思ふ 八雲の空に **たつものは** 色をわくべき 君がおもかげ

(5179) (返事)

歌 とまりある 心につねに かかりしは 八雲の空に 出でし**面かげ**

(5218) (此歌の事を定家朝臣申したりけるとて、また左大将よみてつかはしたる) (喜撰余流)

歌 もみぢふく 峰のあらしの くらき世に **おもかげ**にたる 袖の色かな

(5337)

歌 わが思ふ 君がすみかの **おも影は 松たつかどの** 春のけしきに

(5368) (御返事)

歌 きみとみん その**おも影**を やどしても 袖あはれなる わがやどの月

(5416) (建久四年俊成入道の許へ倩思禅門長此道欲貽十首贈答於後代よし申遣すとて、十月下旬在明月いつよりもめでたかりしをながめて風情あまたいできたれば、かつはむなしくはいかがとて遣す)

歌 冬ぞかし いとゆふあそぶ 春の空の **おもかげ**までに すめる月かな

(5544) (返事不覚悟、出家入道之後如此余執無益之由也方今遥思四明之風景忽十首之露詞、不顧客嘲窃寄禅居而已) (門下槐樹)

歌 まだ見ねば しらずながらの 山なれど 梢の秋に かよふ**おもかげ**

(5591) (権禰宜従四位上荒木田神主元延)

歌 あはれみの ためしはそれぞ 神ち山 みゆらんものを **おもかげ**の空

(5740) (負)

歌 **おもかげ**や 花よりのちも のこるらん めかれぬ物は 心なりけり

(5742) (負)

歌 **おもかげ**や 花よりのちも のこるらん 目かれぬものは ころなりけり

とうじいんひやくしゅ

あしかがたかうじ

● 『等持院百首』 - 1 (0) 首 (足利尊氏) (1346年)
(尊氏) (内閣文庫蔵本)

(70) (恋二十首)

歌 思ひわび ねられぬままに 夢にさへ かよひたえぬる 人の**面かげ**

けんこうほうししゅう

● 『兼好法師集』 - 1 (0) 首 (1345-1349年)
(尊経閣文庫蔵本)

(197) (懐旧)

歌 なき人の **おもかげ**さへに たえねとや うたて月日の とほざかるらん

● 『風雅和歌集』 - 23 (4) 首 (1349年)
(九大附属図書館蔵本)

(142) (花をおもふ心をよめる) (鴨長明)

歌 思ひやる ころやかかねて ながむらん まだみぬはなの **おもかげ**に**たつ**

(211) (花をたづねてともなひ侍りける人に、つぎの日つかはしける) (後光明照院前関白左大臣)

歌 けふもなほ ちらで心に のこりけり なれし昨日の 花の**おもかげ**

(883) (永仁五年五節のまゐりの日、申させ給ひける) (龜山院御歌)

歌 **おもかげ**も みる心ちする むかしかな けふをとめこが 袖のしら雪

(884) (御返し) (伏見院御歌)

歌 しのぶらし をとめが袖の しら雪も ふりにしあとの けふの**おもかげ**

(939) (祭主定忠)

歌 ゆきうつる ところどころの **おもかげ**を ころにとむる たびのみちかな

(981) (宝治百首歌中に、寄月恋) (花山院前内大臣)

歌 ほのかなる **おもかげ**ばかり みか月の われておもふと しらせてしかな

(1026) (進子内親王)

歌 ねられねば 夢にはあらじ **おもかげ**の 心にそひて 見ゆるなりけり

(1054) (後照念院前関白太政大臣)

歌 **おもかげ**は ころのうちに **さきだちて** 契りし月の かげぞふけぬる

(1126) (別恋の心を) (後伏見院御歌)

歌 又やみん 又や見ざらん とばかりに **おもかげ**くるる けさのわかれち

- (1186) (恋歌の中に) (前中納言公雄)
 歌 おもかげは のこるかたみの うつつにて また見ぬ夢の さむるまもなし
 (1205) (六帖題にて歌よみける中に、あやを) (前左兵衛督為成)
 歌 夕ぐれは 思ひみだれて 雲とりの あやに恋しき 人のおもかげ
 (1214) (恋歌あまたよませ給ひけるに)
 歌 恋しさに なりたつ中の ながめには おもかげならぬ 草も木もなし
 (1294) (おなじ心を) (藤原隆清朝臣)
 歌 かはらぬも 中中つらし もろ友に 見しよの月は おなじおもかげ
 (1296) (恋歌の中に) (中院前太政大臣)
 歌 うき物と うらみてもなほ かなしきは おもかげさらぬ ありあけの月
 (1301) (永福門院内侍)
 歌 あはれ又 夢だにみえで あげやせむ ねぬ夜の床は おも影にして
 (1352) (恋歌に) (権大納言資名)
 歌 わすらるる わが身も人も あらぬ世に たがおもかげの 猶のこるらむ
 (1393) (恋御歌の中に) (伏見院御歌)
 歌 おもかげの とまるなごりよ それだにも 人のゆるせる かたみならぬを
 (1464) (二条院御時、いまだ殿上ゆるされぬ事をなげき侍りけるころ、やよひの十日ごろ大内に行幸なりて、南殿の桜さかりなるを一枝をらせて、こぞとことしといかがあるとおほせられけるに、えだにむすびつけてたてまつりける) (従三位頼政)
 歌 よそにのみ おもふ雲ゐの 花なれば おもかげならで 見えばこそあらめ
 (1467) (文保三年、後宇多院にたてまつりける百首歌の中に) (権中納言公雄)
 歌 わすれめや むかしみはしの さくら花 いまは雲ゐの よそのおも影
 (1852) (世をのがれてのち、大納言三位にびはのふをかへすとて) (欣子内親王)
 歌 くもれよし なかばの月の おもかげも とめてみるべき たもとならねば
 (2009) (後醍醐院かくれ給ひて後、人の夢に)
 歌 おのづから まぼろしにもや かよふらむ わがすむ山の おもかげにたつ
 (、と見え給ひければ、この歌の一句をおきて経のれうしのためによみ侍りける歌の中に) (前左大臣)
 (2015) (安嘉門院四条)
 歌 夢にさへ **たちもはなれず** 露きえし 草のかげより かよふおもかげ
 (2039) (文学上人遠忌の日よみ侍りける) (高弁上人)
 歌 九のめぐり 春はむかしに かはりきて おもかげかすむ けふの夕ぐれ

● 『光厳院三十六番歌合 貞和五年八月』 — 1 (0) 首 (1349年)
 (天理図書館蔵本)

- (51) (廿六番) (左) (俊冬) (左もことに難なくは侍れど、涙のところにふしまちの月、ほとほと金玉の光ありていみじく艶にめづらしきよし、満座申之)
 歌 かくてしも 又いつまでぞ なれしよに かはらぬ月を おもかげにして

● 『竹むきが記』 — 1 (0) 首 (1349年)
 (うたゝね・竹むきが記)

- (16) (作者)
 歌 いかがせむ おも影したふ 有明の 月さへくもる きぬぎぬの空

● 『為世十三回忌和歌』 — 6 (0) 首 (1350年)
 (東京大学史料編纂所蔵本)

- (20) (懐旧)
 歌 秋ぞうき 露と月とを かたみにて 消えにし跡に のこる面影
 (36) (懐旧)
 歌 みし事は かはりゆく世の ならひにも 昔を残す 人のおもかげ
 (38) (懐旧)
 歌 めぐりあふ おなじ月日の 面影や しのぶむかしの 名残なるらん
 (52) (懐旧)
 歌 いにしへを おもひいづれば 袖ぬれて 涙にのこる 人の面かげ
 (62) (懐旧)
 歌 身をさらぬ その面影を かたみにて 空に月日ぞ 遠ざかり行く

(100) (懐旧)

歌 おも影を したふ涙の つゆのまに ととせ三年の 秋は来にけり

ごふこうおんいんひやくしゅ

にじょうよしもと

● 『後普光園院百首』 - 2 (0) 首 (二条良基) (1352年)

(良基) (京都女子大学附属図書館蔵本)

(14) (かへる雁いまはの心ありあけの月と花との名こそをしけれ、後京極殿)

歌 おもかげを 後しのべとや 有明の 月をのこして はなのちるらん

(71) (恋廿首)

歌 うき人の おもかげばかり 残してや 月は涙に くもりはつらん

● 『経旨和歌』 - 2 (0) 首 (1355年)

(書陵部蔵統群書類従本)

(63) (詠賢賢経、観心無心法不住法倭歌) (沙門慈永)

歌 照しみし 心の鏡 清ければ 夢も現も おなじ面影

(71) (詠摩訶迦葉法因為上倭歌) (沙門契愚)

歌 みても猶 をられぬ花の 面影は 人の心や 種となるらん

● 『守遍詩歌合』 - 1 (0) 首 (1356年以前)

(書陵部蔵 501・582)

(16) (右)

歌 花にみし おなじ梢の おもかげも わするばかりに しげるころかな

● 『三百六十首和歌』 - 3 (0) 首 (1356年ごろ)

(島原松平文庫蔵本)

(23) (中納言定家)

歌 竿姫の 遠山まゆの うす墨に かすむ柳の はるの面かげ

(61) (為家)

歌 よしさらば 散るまでは見じ 山桜 はなのさかりを 面影にして

(183) (定家)

歌 おも影は 時雨るる秋の 紅葉にて 薄萌黄なる 神なびの森

● 『延文百首』 - 36 (3) 首 (1357年)

(書陵部蔵 154・32)

(159) (進子内親王花色内陰十八枚薄下絵蝶鳥裏霞、高一尺)

歌 かれはつる 色こそかはれ なほあきの 面影のこる をばなかるかや

(166) (進子内親王花色内陰十八枚薄下絵蝶鳥裏霞、高一尺)

歌 ふりつもる 雪のこのまの あさづくひ はなにかをりし 春の面かげ

(214)

歌 さかぬより まづおもかげぞ うかびける 花ちかげなる 木木の梢に

(215)

歌 けしきだつ 桜がうへの うす霞 心にほふ はなの面かげ

(330)

歌 色色の はなにさくべき 面影も 秋ちかくなる 草のすゑずゑ

(385)

歌 しきしのび 面影さらぬ 小菰に ねてもねられず おきもみられず

(483)

歌 身をさらぬ 面影のみや ますかがみ うつりし中の かたみなるらん

(583) (寄鏡恋)

歌 わがしのぶ おもかげうつせ ますかがみ こひしき時の なくさみにせん

(612) (春月)

歌 わすられぬ 春や昔の おも影の さだかにもなく かすむ夜の月

(675) (寄関恋)

歌 うつつこそ へだてはつとも あふとみる 面影ゆるせ 夢の関守

(783) (寄鏡恋)

歌 面影は 心にとめて ますかがみ それは手なれし かたみばかりぞ

- (883) (寄鏡恋)
歌 ますかがみ うつりやすきは 心にて とともにみし世の 面影ぞなき
- (1183) (寄鏡恋)
歌 おもかげの うつすかがみに とどまらば こひしき人を さてもみましに
- (1283) (寄鏡恋)
歌 わが中は 野守のかがみ みくさみて よそながらみし 面影もなし
- (1376) (寄橋恋)
歌 そのままに とだえし中の 契ゆゑ 面影のこる ゆめの浮はし
- (1424) (郭公)
歌 郭公 おもかげをさへ したへとや かたぶく月に なきてすぐらん
- (1476) (寄橋恋)
歌 うつつとも わかぬその夜の 面影を なほ恋ひわたる 夢のうきはし
- (1513) (花)
歌 いつよりか はなの梢に たちそはん 面影いそぐ みねのしら雲
- (1583) (寄鏡恋)
歌 したひわび 面影うかぶ 心こそ いつもくもらぬ かがみなりけれ
- (1683) (寄鏡恋)
歌 面影に おもひはいとど ますかがみ など涙にも くもらざるらむ
- (1872) (寄雲恋)
歌 かりそめの 夢をぞしたふ 雲となり 雨と成りにし 人のおもかげ
- (1883) (寄鏡恋)
歌 くもれただ ますみのかがみ 面影の うかぶもつらし わするばかりに
- (1913) (花)
歌 面影も まだみぬかたの 山ざくら さけるさかざる たれにとはまし
- (2017) (花)
歌 吹くかぜに みぎはの桜 ちりしきて 池のかがみの 面影もなし
- (2102) (権大納言藤原忠季) (春二十首) (霞)
歌 わたのはら 霞みわたれば ときわかぬ 波にも花の 面影ぞたつ
- (2183) (寄鏡恋)
歌 玉くしげ かたみとむかふ かがみにも そのおも影の うつりやはする
- (2283) (寄鏡恋)
歌 涙さへ へだつる中の 面影や とほ山どりの かがみなるらむ
- (2361) (冬十五首) (冬月)
歌 冬のよの 月みるごとに 身にしみし とよのあかりの おも影ぞたつ
- (2366) (雪)
歌 山あらしに あまぎる雪の 朝ぼらけ 桜ふきまく 春の面影
- (2383) (寄鏡恋)
歌 面影も とまりやはする ますかがみ うつればかはる 人のこころに
- (2483) (寄鏡恋)
歌 おもひのみ ますみのかがみ あさごとの 我が面影も おとろへにけり
- (2683) (寄鏡恋)
歌 はては又 わが面影の かはるよに むかふかがみも うらみられつつ
- (2713) (花)
歌 さきやらぬ はなまつ程の 山のはに 面影みせて かかるしら雲
- (2783) (寄鏡恋)
歌 面影の なにのこるらん ますかがみ うつればかはる 人の契に
- (3083) (寄鏡恋)
歌 いかにして みし面影の ますかがみ へだつる中の つらさなるらん
- (3211) (帰雁)
歌 すぎぬなり かすむ雲路の 春の雁 きえゆくほどを 面影にして

ほうきょういんひやくしゅ

あしかがよしあきら

● 『宝篋院百首』 - 1 (0) 首 (足利義詮) (1357年)
(義詮) (高城功夫氏蔵本)

- (89) (絶恋)
歌 村雲の ひま行く月の 絶絶えに なりぬる中に のこるおもかげ

● 『吉野拾遺』 - 1 (0) 首 (1358年以降)
(群書類従本)

(20) (親房北の方)
歌 そむきても 猶忘れぬ 面影は うき世の外の 物にや有るらん

● 『新千載和歌集』 - 44 (3) 首 (1359年)
(宮内庁書陵部蔵 兼右筆「二十一代集」)

(76) (前大納言為家)
歌 面かげは よそなる雲に 立ちなれし たかまの桜 花さきにけり
(246) (嘉元百首歌奉りける時、盧橘) (贈従三位為子)
歌 袖の香は 花たちばなに かへりきぬ 面かげみせよ うたたねの夢
(390) (駒牽の歌とてよませ給うける) (花園院御製)
歌 むかしみし 雲井は遠く へだてつれど 面かげちかき もち月の駒
(464) (題しらず) (権大納言公明)
歌 山のべの 尾上の月の ますかがみ 面かげみてや 鹿の鳴くらん
(653) (題しらず) (後鳥羽院御製)
歌 をみ衣 たつ面かげぞ へだて行く 月はその夜に めぐりあへども
(712) (元亨三年八月内裏にてうへのをのこども題をさぐりて歌つかうまつりける時、月前雪といへることを) (按察使公敏)
歌 花をみし 面かげさらで 吉野山 月にみがける 峰のしら雪
(786) (世中住みわびてさまかへなむと思ひて、あねのさきだちて津の国ひやうごの称名寺といふ寺に侍りけるもとへまかりけるに、こやのしゆくといふ所にとまりてふる郷の事のみわすれがたうかきくらす心ちし侍りけるをりしも、八月十五夜の月いとくまなき空のけしきは宮こにて見しにもかかはらず侍りければ思ひつづけける) (権中納言為明女)
歌 月をみて 難波のうさも なぐさむは こやふる郷の 秋の面影
(840) (御返し) (西花門院)
歌 過ぎきつる 名残はいとど ます鏡 ありとしもなき 夢の面かげ
(1146) (題不知) (従二位兼行女)
歌 いつなれし 面かげとてか 夜はの月 ながむる袖に まづうかぶらん
(1158) (恋の歌の中に) (源基氏朝臣)
歌 ひとりねに 逢ふとみえつる 面影の さむる夢ぢを したにわびつつ
(1164) (題しらず) (西園寺内大臣女)
歌 いかにて 見えつる夢の 面かげぞ さしもゆるさぬ 中の契に
(1176) (前大納言公蔭)
歌 起きもせず ねもせであかす 床の上に 夢ともなしの 人の面かげ
(1233) (百首歌たてまつりし時、寄鏡恋) (関白左大臣)
歌 我が中は 野守のかがみ み草みて よそながらみし 面かげもなし
(1235) (百首歌たてまつりし時、寄鏡恋) (前大納言為定)
歌 涙さへ へだつる中の 面かげや 遠山鳥の かがみなるらん
(1236) (中納言家持におくりける歌の中に) (笠女郎)
歌 みちのくの まののかや原 とほけれど 面かげにして みゆといふものを
(1367) (延慶三年八月十五夜平貞時朝臣よませ侍りける五首歌に) (前中納言為相)
歌 うき人の わが面影と いひおかば こぬ夜の月も なぐさみなまし
(1430) (後岡屋前関白左大臣)
歌 面かげの 身にそふ今朝の 名残こそ 忘がたみの つらさなりけれ
(1431) (後九条前内大臣)
歌 いさやまた めぐりあふべき 別とも たのまぬ中に のこる面影
(1465) (百首歌たてまつりし時、寄橋恋) (内大臣)
歌 うつつとも わかぬその夜の 面かげを 猶恋ひわたる 夢のうきはし
(1466) (おなじ心を) (伏見院御製)
歌 面かげは みしをかぎりの とだえにて 逢ふ夜むなしき 夢の浮橋
(1470) (藤原景綱)
歌 うつつとて なに面かげの 残るらん みしよは夢の 契なりしを
(1471) (藤原政範)
歌 我ながら なれしや夢と たどるよのね 覚にうかぶ 面かげもうし

- (1527) (題しらず) (前大僧正道意)
 歌 **面かげ**も かよへばこそは かよふらめ うき人さそへ 秋の夜の月
 (1598) (左近中将義詮)
 歌 **面影**の 何残るらむ ますかがみ うつればかはる 人のちぎりに
 (1599) (題しらず) (進子内親王家春日)
 歌 **おもかげ**の うかぶもかなし 諸共に ながめし夜半の 月ぞと思へば
 (1600) (大江広房)
 歌 わすらるる わが**面影**は そはずとも なれこしまの 月はみるらむ
 (1601) (源頼康)
 歌 **面かげ**は かはらぬ中の あり明に いまはた何か つれなかるらん
 (1602) (場子内親王)
 歌 **おもかげ**も 忘るばかりの 年月を うき身にそへて なげかるかな
 (1603) (権大納言実俊母)
 歌 わすれじよ われだに人の **面かげ**を 身にそへてこそ かたみともせめ
 (1604) (文保百首歌たてまつりける時) (権中納言公雄)
 歌 **面影**を 絵にかきとめて 身にそへむ まことすくなき 形見なりとも
 (1605) (いかなりける時にかよませ給うける) (法皇御製)
 歌 見し人は **面影**ちかき おなじ世に 昔がたりの 夢ぞはかなき
 (1606) (元亨三年九月尽日内裏五首歌に、恨恋を) (前中納言惟継)
 歌 年へても うき**面影**の 忘れぬや 心にのこる うらみなるらむ
 (1607) (題しらず) (常元法師)
 歌 わすれかね 猶したはるる **面影**は うき年月も 隔てざりけり
 (1608) (源宗氏)
 歌 契りしは みな偽の むかしにて うきをかたみと 残る**おもかげ**
 (1609) (嘉元百首歌たてまつりける時、忘恋) (後山本前左大臣)
 歌 わればかり さてもいかにと したへども **面影**ながら 遠ざかりつつ
 (1610) (恋の歌中に) (永陽門院左京大夫)
 歌 あかざりし **面影**ばかり うつしても 契はさてや やまのゐの水
 (1858) (法印定熙)
 歌 久方の 月にむかしの こととはん さらでは残る **おもかげ**もなし
 (2127) (文保百首歌たてまつりける時) (前中納言雅孝)
 歌 年月の つもるへだても なき物は **面かげ**にそふ むかしなりけり
 (2208) (元亨四年八月十五夜の月もかきくもりて雨ふり侍りければ、あしたに法眼行済もとより民部卿為藤の事など申し侍りける次に、雨となる涙に月もかきくれて心のやみぞ空にしられし、と申して侍りける返事に) (前大納言為世)
 歌 夜もすがら **面影**みせて くもりしは 月も思ひの 程やしりけん
 (2225) (人におくれて又のとしよみ侍りける) (高階宗成朝臣)
 歌 かたみとて あるもはかなき **面影**の さらぬ別に ねはなかれつつ
 (2244) (伏見院御製)
 歌 消えはてし 煙の末の **面影**も **立ちそふ**霧の ふかくさの山
 (2258) (昭訓門院小督が母身まかりにけるをなげきける比、生処夢にみるここと侍ると法眼源承もとよりとひて侍りければ) (法眼行済)
 歌 歎きわび 打ちぬるひまも あらばこそ なき**面かげ**を 夢にだにみめ
 (2263) (法眼行済あひしりて侍りける女身まかりにける比つかはしける) (前大納言為氏)
 歌 遠ざかる 月日につけて いかばかり なき**面かげ**の 恋しかるらむ
 (2264) (返し) (法眼行済)
 歌 とほざかる 月日ぞいとど なげかるる なき**面影**は 身にとまれども

● 『続草庵集』 — 6 (0) 首 (1358-1360年)

(頓阿) (承応二年板本)

- (275) (前関白殿北野社法楽三首、寒草)
 歌 霜枯の まののかや原 風寒(さ)えて **面かげ**にのみ 残る秋かな
 (366) (弾正少弼頼遠家にて歌よみしに、別恋)
 歌 契をも 人はのこさぬ 別路に **面影**ばかり 何とまるらむ

(419) (西行上人跡の双輪寺に住み侍りし比、二月十六日人人来りて仏事行ひ、歌読み侍りしことを思ひ出でて)

歌 昔とぞ 又しのぼるる 跡とひし その二月の はるの**面影**

(423) (聖護院二品親王家後五首、羈中見月)

歌 よしさらば 夢路はたえね 草枕 月を都の **面影**にして

(505) (とほき所なる人、みづからの歌二千首を歌合にして判をこひ侍りしを、しるしつかはし侍りしにそへて侍りしなうた)

歌 雲み路の はるけき程は あしびきの 山のいく重も しられぬに これにそはれる とし月の つもれる数を かぞへつつ おやのかふこの まゆごもり いぶせくてのみ すぐしきぬ いかなる風の たよりもと うはの空には まちながら やへたつ嶺の 秋ぎりの へだててうとく なりぬるに あまとぶかりの たまづさを 思ひの外に まちみつつ こはぎにあまる しら露の おき所なく おもほえて なみだは袖に まづおちぬ 雲のたえまの 夕づく夜 おぼつかなさも はれそめて なほ同じよは丹生の河 ことかよふせも のこりけり これだに有るを 和歌の浦の あまのすさみの もしほ草 かきあつめたる まきまきを みるこそいとど うれしけれ 千千のこがねに 千千の玉 声をあはする ことちして 雪降りつもる ふじの根の すがたも高く いさぎよく むめ咲くやまの 夕がすみ 色も匂ひも 立ちそめて 山田のはらの あやすぎの すぎたることも さらになく ふかき入江に さすさをの およばぬかたも なかりけり これこそふるの 中みちの むかしききこし みちならめ とも難波づの よしあしは われだにわかで すぎぬるに しかまにそむる かちまけを さだめむことぞ たつきなき さてはりまぢの いなみのの いなみむことも かへりては いともかしこく ありければ かけひにうくる やまみづの あさき心に まかせつつ もじの関守 かきとむる ふでの思はん こともげに なほはづかしの もりなれや あか井の杉の 木の本は わすれぬことの はじめにて 花と月との をりふしの 露のなさけの かずかずぞ しのぶの種と なりにける もみぢかつ散る 秋のくれやまともろこし ことのはの 色をまじへし いにしへぞ **面影**に 残りける その代の人も 今にははや あるはすくなく なりにけり あらぬよをのみ みづのえの 浦島が子の ことちして 玉のをごとの ををたちし むかしの人の ことろのみ おもひしられて かなしきに かかることばの 花みてぞいける命の かひはありける

(565) (「たきのこほりは なほやとくらん」といふ句に「雪もまだ きえぬに春は たつの門」) (連歌) 歌 山路はなほも 秋のおもかげ ふる雪を きくより後の 花とみて

● 『草庵集』 - 14 (2) 首 (1359年)

(頓阿) (承応二年板本)

(41) (遠山霞)

歌 霞たつ うらよりをちの かがみ山 おもかげばかり のこる春かな

(99) (民部卿家三十首に)

歌 **面影**を 又やしのばん 春のよの 月にかすみて 帰るかりがね

(165) (侍從中納言和歌所歌人さそひて花見せし時、夜思花)

歌 よるは猶 我が身にぞそふ くるるまで 木ずゑにみつる 花の**面影**

(315) (軒菖蒲)

歌 いにしへの かやが軒ばの おもかげを かりふく宿の あやめにぞみる

(702) (冬歌中に)

歌 いまも猶 秋みし花の **面かげ**に **たち**ののはらの しもの下草

(1032) (寄月恋)

歌 わすらるる **面影**ばかり さだかにて 月は涙に はるる夜もなし

(1058) (おなじ家十首に、面影恋)

歌 したひわび 別れし程の **面影**の うきしもなどか 身にはそふらん

(1158) (藤原基任、おもひの外的事によりていなばの国にくだりて後、かしらおろしぬとききて、申しつかはし侍りし)

歌 そのままに 忘れず忍ぶ **面影**も かはるときくぞ さらにかなしき

(1175) (名ある琵琶の、むかし常に見侍りしが、この道すてて後、つたはりきて侍りし時よみ侍りし)

歌 **面影**も のこらぬものを いかにして なかばの月の めぐりきにけん

(1297) (羈旅を)

歌 草まくら おもかげさらぬ 古郷の 夢路になどか とほざかるらん

(1313) (不断光寺にて歌よみ侍りし時、同じ心を)

歌 こしかたの 山は残らぬ 浪路にも なほ故郷の おもかげ**ぞたつ**

(1327) (先師仁誉法印弘法寺旧跡にまかりて)

歌 故郷の よよのおもかげ 思ひ出でて そぞろに袖の ぬるるけふかな

(1389) (宝池をよめる)

歌 はちすさく たからの池に こぐ舟の まづ**面影**に うかびぬるかな

(1413) (等持院贈左大臣家に住吉の社をつくりて歌講ぜられしとき、神祇)

歌 住吉の 神の宮ゐを うら波の **おもかげ**ながら うつすやどかな

● 『頓阿句題百首』 - 7 (1) 首 (1361-1362年)

(彰考館蔵本)

(1) (百首和歌古集五言一句為題 合点頓阿 春十五首遥峰帯晩) (霞) (頓阿)

歌 菅原や 伏見の暮の **面影**に いづくの山も **たつ**かすみかな

(67) (守)

歌 夢なれや 春は幾日も あら玉の 年にまれなる 花の**面かげ**

(185) (嗣)

歌 よひの間の 山の端出でし **面影**を 浪に残して 月ぞかたぶく

(187) (守)

歌 初瀬山 霞にまがふ **面影**の 霧にのこれる 秋のゆふぐれ

(274) (宗)

歌 **おもかげ**を 有りしながらに 見る夢は うつつになるぞ 別なりける

(280) (嗣)

歌 山桜 あだなる色も ひとつにて 見るに猶そふ 人の**おもかげ**

(452) (守)

歌 谷川の ながれをむすぶ たびごとに あふ**おもかげ**や 友と成るらん

● 『愚問賢注』 - 1 (0) 首 (1363年)

(日本歌学大系 5)

(15) (京極入道中納言)

歌 **面影**の ひかふるかたに かへり見る 都の山は 月ほそくして

● 『新拾遺和歌集』 - 27 (4) 首 (1364年)

(宮内庁書陵部蔵 兼右筆「二十一代集」)

(84) (二品法親王守覚家五十首歌に) (前中納言定家)

歌 **面影**に 恋ひつつ待ちし さくら花 さけば**立ちそふ** みねのしら雲

(104) (花間鶯といふことを) (前大納言実教)

歌 雲に入る **面かげ**つらし 花のえに 鳴きて木づたふ 春の鶯

(112) (伏見院御製)

歌 なれてみし 雲ゐの花も よよふりて **面かげ**かすむ 九重の春

(167) (白河院の北面にて、花未忘といへることをおほせごとにてつかうまつりけるに) (源仲正)

歌 あかざりし 心に春や とまるらむ 猶**おもかげ**の さらぬ花かな

(195) (首夏をよませ給うける) (院御製)

歌 けふも猶 かすむと山の 朝ぼらけ 昨日の春の **面かげぞたつ**

(409) (嘉元百首歌たてまつりける時、おなじ心を) (権中納言公雄)

歌 雲のうへに なれし昔の **面かげ**も 忘れやすくと 月にとはばや

(858) (母のをはりけるおも影猶身にそふ心ちし侍りて) (藤原秀茂)

歌 今はとて みし**面影**の さらに猶 身にそふ物と なりにけるかな

(859) (なげく事侍りける比よみ侍りける) (近衛関白前左大臣)

歌 明くれは 身をも離れぬ **面影**の ありてなきこそ はかなかりけれ

(860) (浄土寺入道前太政大臣かくれ侍りて後よめる) (前大僧正公豪)

歌 時のまも 忘れればこそ なぐさまめ **面影**ばかり うき物はなし

(861) (信実朝臣身づから影をうつしおきて侍りけるを身まかりて後見侍りてよめる) (如円法師)

歌 思ひ出でて みるもかなしき **面影**を なに中中に うつし置きけん

(993) (千五百番歌合に) (皇太后宮大夫俊成女)

歌 思ひねの 夢のうき橋 とだえして さむるまくらに きゆる**面影**

(997) (寄夢恋) (従三位為信)

歌 誠なき 夢のただちの **面影**は たがいつはりに かよひそめけん

(1016) (寄鏡恋の心を) (土御門院御製)

歌 ます鏡 恋しき人は みえなくに 我が**おも影**の なにうつるらん

- (1018) (題しらず) (権中納言実直母)
 歌 山鳥の をろの鏡の よそながら みし**面影**に ねこそなかるれ
 (1148) (寄月恋) (弾正尹邦省親王)
 歌 うき人の **おも影**そへて たのむよも こぬよも独 月をみるかな
 (1198) (暁別恋の心を) (前中納言基隆)
 歌 **面影**を のちしのべとや 在明の 月にも人の おきわかるらむ
 (1199) (題しらず) (法印顕詮)
 歌 忘れずよ いまはといひし 衣衣の **おも影**残す ありあけの月
 (1271) (題しらず) (源基幸)
 歌 今はただ 思ひ絶えにし **おも影**の はかなくかよふ 夢のうき橋
 (1300) (恋歌中に) (前中納言季雄)
 歌 みしままの かたみなるべき 月だにも うきより外の **面影**ぞなき
 (1303) (山階入道前左大臣家十首歌に、寄秋月恋) (権中納言公雄)
 歌 身をさらぬ **面影**ばかり さやかにて 月のためうき わが涙かな
 (1304) (題しらず) (寿暁法師)
 歌 いかなれば **たちもはなれぬ 面影**の 身にそひながら 恋しかるらん
 (1349) (正和五年九月十三夜後醍醐院みこの宮と申しける時、五首歌めされけるに、月前恨恋)
 (前大納言経継)
 歌 **面影**は わがみにそへる つらさにて うらみぬ月に ぬるる袖かな
 (1350) (前大納言為定)
 歌 見ても猶 物おもへとや うき人の わが**面影**を 月にそへけん
 (1352) (中納言為藤)
 歌 人をこそ 恨みはつとも **面かげ**の わすれぬ月を えやはいとはん
 (1640) (月前遠情といふ事を) (小侍従)
 歌 いとふらん 久米ぢの神の けしきまで **面影にたつ** よはの月かな
 (1684) (大江忠広)
 歌 冬枯の まののかや原 ほに出でし **面かげ**みせて おける霜かな
 (1724) (冬の御歌の中に) (後伏見院御製)
 歌 みしやいつぞ 豊明の そのかみも **面影**とほき 雲の上の月

● 『六華和歌集』 — 14 (2) 首 (1365年)
 (島原松平文庫蔵本)

- (64) (玉吟) (家隆)
 歌 さほ姫の 遠山まゆの うす墨に かすむ柳の 春の**面かげ**
 (143) (俊成)
 歌 **おもかげ**に 花のすがたを **さきだてて** いくへこえきぬ 岑の白雲
 (144) (定家)
 歌 鳥のこゑ 霞の色を しるべにて **面かげ**にほふ 春の山ぶみ
 (203) (為家)
 歌 よしさらば 散るまではみじ 山桜 花のさかりを **面かげ**にして
 (251) (続古) (権律師仙覚)
 歌 **おもかげ**の うつらぬ時も なかりけり 心や花の かがみなるらむ
 (504) (源氏)
 歌 **面かげ**は しぐるる秋の 紅葉にて うすもよぎなる 神なびの杜
 (757) (拾愚) (定家)
 歌 こしかたは みな**おもかげ**に うかびきぬ 行末てらせ 秋の夜の月
 (1070) (為相)
 歌 うき人の わが**おもかげ**と いひおかば こぬ夜の月も ながさみやせん
 (1079) (藻辟門院安芸)
 歌 **おもかげ**を うき身にそひて 恋ひしなば 後の世までの つらさをやみん
 (1102) (源仲正)
 歌 くみかはす はつ手枕の ほどけても なほはなれぬは 今朝の**面影**
 (1112) (西行)
 歌 **おもかげ**の 忘らるまじき 別かな 名残を人の 月にとどめて
 (1113) (平重直)
 歌 **面かげ**の 身をなぐさめて かよひしも いまは昔の 夢の年月

(1382) (藤原伴綱)

歌 乙女子が 豊明の みかは水 移しし影ぞ おもかげにたつ

(1487) (八条院高倉)

歌 くもれただ ながむるごとに かなしきは 月におぼゆる 人の面かげ

● 『年中行事歌合』 - 4 (2) 首 (1366年)

(国文学研究資料館蔵本)

(72) (右 寄南殿橋恋 新中納言)

歌 よそながら みはしのもとの 面影に 花たちばなの 香さへなつかし

(75) (此左は、もろこしに、紅葉に詩を書きて御溝にながし侍る事の因縁有るにや、我が国にも、柿葉に思ふ心をするしてうかべたる事も侍るにや、こと長ければ細にするさず、右、清涼殿の呉竹河竹の台によせて侍れば、別の子細なし卅八番) (左) (寄夜御殿恋) (前大納言)

歌 立ちそひて きえぬおもひの くるしきは かいともしせし 人のおも影

(78) (右) (寄桐壺恋) (兼熙) (左、古今の、ひとりある人のいねがてにするとある歌の心、面白くとりよせて侍り、右、花鳥の色にも音にもと云へる桐つぼの更衣の事にや、是はなき人を忍びたるにやと申し出だす人侍りしうへ、歌がらも萩の下ばは色まさるよし定め申し侍るにや萩の戸と申すは、萩をうゑられたればかやうに名付けられたるにや、清涼殿の北の方二間の前の程にて侍るなり、大内には、前に透垣の様なる物あるにやとおぼえ侍る、桐壺と申すは淑景舎なり、桐を庭に植ゑられたる故に桐壺と申すなり、舎を壺と申すにや、たとへば雑舎など申す様に、大内のうちにはちひさき殿なり)

歌 花鳥の 色ねにつけて おもふにも たぐひなかりし 人の面影

(81) (四十一番) (左) (寄梅壺恋) (貞世) (此番、左右ともに幽玄のよし一同に褒美し侍りしにや、判者も持たるべきよし定め申しき左は、源氏物語の秋好中宮のいつきの宮にまゐりて、大極殿にて別のくしをさし給ひし後、冷泉院に入内ありて梅壺にすみ給ひし事にや、思ひよそへられたるもいうなる上、梅壺は凝花舎にて侍れば、こりしくといへる事も詞のたよりありて、いとやさしく聞え侍るに、右又、躬恒が雷鳴壺にてねてあかすらんとよめる、殊に優に侍るにや、雷鳴壺とは襲芳舎なり、昔は雷鳴の時は、大将以下近衛次将まで警固して御門を守護し奉りけるなり、雷鳴の陣とも申すにや)

歌 いかにして 別のくしの 面影を こりしく花に なほ残しけん

● 『新玉津島社歌合 貞治六年三月』 - 1 (0) 首 (1367年)

(永青文庫蔵本)

(107) (五十四番) (左) (仲光)

歌 山ふかく わけ入るはなの おもかげを かつみせそむる みねのしら雲

けいうんほういんしゅう

● 『慶運法印集』 - 2 (0) 首 (1368年頃)

(天理図書館蔵本)

(83) (蚊遣火)

歌 さびしとて 柴折りくべし 面影を 煙にのこす 里のかやり火

(222) (絶恋)

歌 面影の 残る形見も かひぞなき ありし一よも 現ならねば

● 『安撰和歌集』 - 4 (0) 首 (1369年)

(静嘉堂文庫蔵統群書類従本)

(68) (前僧正光誉)

歌 うき人の おもかげやもし とまるらん 月さへみれば なみだなりけり

(77) (阿闍梨頼真)

歌 思ひいづる そのおもかげや おのづから つれなき人の かたみなるらん

(78) (阿闍梨寛厳)

歌 忘れぬ おもかげばかり 身にそへて つれなき人は うとく成りつつ

(420) (平等性智) (権僧正兼惠)

歌 あすか川 ふち瀬もともに おしなべて 同じみかさの 水のおもかげ

● 『南朝三百番歌合 建徳二年』 - 2 (0) 首 (1370年)

(祐徳中川文庫蔵本)

(58) (右) (季茂朝臣)

歌 わすればや そのおもかげは ありあけの 月にわかれし 人のつらさを

(90) (右) (經高朝臣)
歌 ゆふづくひ ほのかに見てし おも影よ まためぐりあふ 雲間ともがな

● 『仙洞歌合 崇光院(応安三年～四年)』 - 1 (0) 首 (1370 - 1371年)
(国立歴史民俗博物館蔵本)

(100) (右) (重資卿)
歌 あふとみば ゆめにいのちを かぬとても そのおもかげは たれかのこさむ

● 『百番歌合(応安三年～永和二年)』 - 2 (0) 首 (1370 - 1376年)
(書陵部蔵伏・18)

(53) (逢恋) (八十二番) (左勝) (賢恵)
歌 あふことも 日比はゆめの おもかげを こよひうつつの 枕にぞ見る
(66) (右) (二条)
歌 我のみや わすれがた身に したひみむ おもかげまでは 人もへだてし

● 『李花和歌集』 - 9 (2) 首 (1371年)
(宗良親王)(尊経閣文庫蔵本)

(250) (中院准后よみたる歌どもかきあつめて見せ侍りし中に、)
歌 萩の戸の 昔の秋の 面影に 今だにかかる 袖の露かな
(、とありしそばに書きそへてつかはし侍りし)
(307) (池月)
歌 さる沢の 池の玉もも くもらねば 月にぞうかぶ ひとの面かげ
(313) (駿河国にてしばしなれにし人の程経て後音づれたりし返事に)
歌 わすれめや 清見が磯の なみまくら せきちの月を 面影にして
(471) (恋歌) (百首歌よみ侍りし中に)
歌 タぐれは まだみぬ人を こふるかな 雲のはたてを 面影にして
(557) (別恋を)
歌 面影の 友にたちいでて わかれなば なにか身にそふ かたみならまし
(566) (恋百首歌よみ侍りし中に)
歌 ねてもみえ ねでもわすれぬ 面影を 夢ばかりには いかかなすべき
(802) (正平十五年三月十四日、御子左大納言入道身まかりけるよしきこえしかば、あはれともなかなかことの葉もなき心ちし侍りて、月日をのみなげきくらし侍りし程に、宮こへ便宜ありしかば、哀傷五十首歌よみて為遠朝臣もとへつかはし侍りし)
歌 いつしかと 春くる空の うす霞 消えし煙の おもかげにたつ
(826) (正平十五年三月十四日、御子左大納言入道身まかりけるよしきこえしかば、あはれともなかなかことの葉もなき心ちし侍りて、月日をのみなげきくらし侍りし程に、宮こへ便宜ありしかば、哀傷五十首歌よみて為遠朝臣もとへつかはし侍りし)
歌 いまは世に ありともしらぬ 面影を 月はなにとて さそひきぬらん
(840) (正平十五年三月十四日、御子左大納言入道身まかりけるよしきこえしかば、あはれともなかなかことの葉もなき心ちし侍りて、月日をのみなげきくらし侍りし程に、宮こへ便宜ありしかば、哀傷五十首歌よみて為遠朝臣もとへつかはし侍りし)
歌 なきや夢 ありしやゆめと たどるかな おもかげのこる 夜半の枕に

● 『三十番歌合(応安五年以前)』 - 2 (0) 首 (1372年以前)
(書陵部蔵 501・74)

(26) (右) (尊熊) (右歌、初五文字ぞなれてきこゆるにや、童子のかぶし、無下にあれてこそ侍れ、左歌、ことわりさだかにきこえ侍らず、月日のうつり行くもしらぬ山里に、月のあはれより秋をおどろくよしをよめるにこそ、いかさまにも右にはまさり侍るべし)
歌 ながめしや み山のいほの 秋の月 またうき世にも かへるおもかげ
(41) (左、木枯非嵐歟、右第三句、雖不珍重、聊為勝) (廿一番) (左勝) (大律)
歌 あらし吹く かれののすすき しもさえて 秋みし色は おもかげもなし

● 『頓阿勝負付歌合』－ 1 (0) 首 (1372年)

(祐徳中川文庫蔵本)

(19) (十番) (暮春) (左勝)

歌 はなに見し そのおもかげも 余波なく こずゑしげりて 春ぞくれぬる

● 『六花集注』－ 1 (0) 首 (1374 - 1452年成立)

(古典文庫)

(263)

歌 陸奥の 真野の萱原 遠けれど 面影にこそ 見ゆといふものを

● 『南朝五百番歌合』－ 33 (3) 首 (1375年)

(書陵部蔵 501・620)

(17) (あさ日かげそなたの空にこもりくの初瀬の山ぞはや霞みける)

(九番) (左勝) (権中納言実興)

歌 霞たつ 尾上の春の あげぼのに おもかげばかり のこる松がえ

(18) (右) (源頼武朝臣)

次 歌 霞みはつる 山の奥より ゆかしきは 尾上にたてる 松の面かげ

(106) (次) (右) (関白)

歌 帰る雁 面かげかすむ 月の夜の ころろづくしは 猶まさりけり

(174) (右勝) (前大僧正頼意)

歌 なれきつる 八十の春も あはれしれ 三代の昔の 花の面影

(618) (右) (太宰帥親王)

歌 みしままに その面影も かきくもり やがてしぐるる 袖のうへかな

(656) (右) (前大僧正頼意)

歌 山鳥の をろの鏡の 面影も へだつる中は いつかあひみむ

(767) (偽の名をぞたてましにしき木の千づかも過ぐる今夜なりせば)

(三百八十四番) (左勝) (権大納言公長)

歌 面影の のこるかたみや 衣衣の 涙にうつる あり明の月

(768) (次) (右) (前大僧正頼意)

歌 おも影の かた見をのこす 月をみて まどほの衣 袖はしをれぬ

(769) (おも影のかた見をのこす月をみてまどほの衣袖はしをれぬ)

(三百八十五番) (左) (前大納言光有)

歌 有明の 月さへ袖に やどりきて 別をのこす 面かげもうし

(784) (右) (源資氏)

歌 いかにせん さてもやみると おもひつつ 又ねの夢に 面かげもなし

(784) (次) (右) (源資氏)

歌 かはらじな 面影そへて 別れつる おなじ又ねに 夢はなくとも

(792) (右勝) (前大僧正頼意)

歌 したひつる 袖の別の そのままに 立ちもはなれぬ けさの面かげ

(792) (次) (右勝) (前大僧正頼意)

歌 別れても 猶そのままの 面かげに かはるころや つらさそふらん

(798) (次) (右勝) (春宮権大夫師兼)

歌 別れにし その面かげの かはらねば 契りし月ぞ つらさそへける

(819) (四百十番) (左持) (女房)

歌 かきくもる 袖の涙の 玉ゆらに みし面かげは 身をもはなれず

(820) (次) (右) (源資氏)

歌 面影よ 身をやはなるる 玉ゆらも よるはさながら かよふ夢かな

(823) (四百十二番) (左) (無品法親王)

歌 あだにみし その面かげは 夢ながら さめぬうつつに 猶なげくかな

(825) (四百十三番) (左持) (弁内侍)

歌 わかれにし その面かげを かたみにて いく有明を ひとりみつらん

(826) (次) (右) (権大納言実為)

歌 面かげの いく有明に なりぬらん ふりし枕に ちりつもるまに

(835) (四百十八番) (左勝) (左衛門督長親)

歌 思出でて 心にしのぶ 面かげや 人の契らぬ かたみなるらん

- (836) (次) (右) (源頼武朝臣)
 歌 面影を 人の契らぬ かたみぞと おもへばいとど たのみな的身や
 (847) (四百廿四番) (左勝) (権大納言公長)
- 歌 なにとただ みし面影の うかぶらん わすらる身の 袖の涙に
 (848) (次) (右) (源頼武朝臣)
- 歌 音羽川 おとにききても いとどなほ みし面かげや めにうかぶらん
 (854) (右) (中納言光資)
- 歌 契りこし ことのはのなど かはるらん その面かげは わすられぬ身に
 (884) (右) (関白)
- 歌 身をさらぬ 面かげばかり とめおきて 我をばなに とふるしはつらん
 (884) (次) (右) (関白)
- 歌 忘れめや 逢せは又も 中川の ながれてふりし 人のおもかげ
 (893) (四百四十七番) (左持) (前関白)
- 歌 おも影も へだてはててや 山鳥の はつをの鏡 かけしかひなく
 (894) (右) (春宮権大夫師兼)
- 歌 これも又 いつまでかはと かなしきは たえにし中に のこる面影
 (894) (次) (右) (春宮権大夫師兼)
- 歌 山鳥の をろの鏡も うかるべし たえし面かげ 猶もへだてば
 (927) (四百六十四番) (左) (権大納言公長)
- 歌 古郷は 面かげをさへ へだてきぬ わけつる山の 跡のしら雲
 (932) (右勝) (源資氏)
- 歌 古郷の おも影うかぶ 月みれば 秋ぞたびねの 時となりける
 (967) (わかぬの浦にみかく心の玉やこれさらずはすまんむねの月かは)
 (四百八十四番) (左) (権大納言公長)
- 歌 なに事を 忍ぶにしもは あらねども すぎにしかたぞ 面影にたつ
 (968) (次) (右勝) (前大僧正頼意)
- 歌 松のかぜ かけひの水よ これならぬ むかしのいほの 面かげはなし

● 『大山祇神社百首和歌』 - 2 (0) 首 (1375年以前)

(大山祇神社蔵本)

- (67) (恋二十首) (寄月恋) (源頼之朝臣)
 歌 ありし夜の おもかげのこす 月にさへ 涙くもりて とほざかりぬる
 (83) (寄鏡恋) (平実之)
- 歌 こひしさの ますみのかがみ みるたびに 思ひぞいづる 人のおもかげ

ちょうけいてんのう

● 『長慶天皇千首』 - 3 (0) 首 (1376年)

(書陵部蔵谷・174)

- (29) (花鏡)
 歌 おもかげの うかばぬひまぞ なかりける こころや花の かがみなるらむ
 (32) (花形見)
- 歌 さくら花 こころにのこる おもかげや かぜのさそはぬ かたみなるらん
 (170) (春夜夢)
- 歌 したひえぬ 花のおもかげ うかびきて/かつさめて なごりこひしき はるのよの夢

● 『熱田本日本書紀紙背懷紙和歌』 - 4 (1) 首 (1377年)

(熱田神宮宝物館蔵本)

- (56) (暮春款冬)
 歌 芳野河 散りにし花の おもかげも いまはたかはる きしのやまぶき
 (70) (詠三首和歌) (沙弥元可) (山路落花)
- 歌 みちもせに ちりしく花の かがみ山 こずゑははるの おもかげもなし
 (185) (夏暁月)
- 歌 あかつきの 雲にあひにし おもかげの うきに明行く みじか夜の月
 (455) (待花)
- 歌 山ざくら なほまちわぶる おもかげに たちてもよしや みねのしら雲

● 『嘉喜門院集』－ 5 (0) 首 (1377年)
(尊経閣文庫蔵本)

(2) (嘉喜門院集〔141嘉喜門〕(天授三年七月十三日、中務の宮より新葉集のために嘉喜門院へ御うたを申され侍りければ、きよがかせられけるつつみがみにかきてたてまつりける) (藤大納言実為)

歌 見るまに 袖こそぬるれ なれしよの おもかげのこる きみがことのは

(22) (正平廿三年世の中りやうあんに侍りし比、この春うつしうゑられし桜の散りたる枝につけて内の御方より)

歌 うゑおきし むかしの人の かた見とて たをるさくらは おもかげもなし

(67) (御かへし)

歌 おもひやる 都のそらの おもかげも おなじながめの 秋のよの月

(82) (ぶん中二年霜月廿日比、雪いたうふり侍りし日、こぞのふゆあさのにて御らんぜられし雪のしきなどおぼしめしいづるよし申されて)

歌 かきくらす みねのしら雪 それながら ともに見し世の おもかげはなし

(100) (正平廿三年、倚廬のみ所よりあはれなる事ども申され侍りし御ふのついでに)

歌 おもひやれ 見しおもかげも かき暮れて なき人こふる 袖のなみだを

かざんいんながちか

● 『耕雲千首』－ 13 (0) 首 (花山院長親) (1377年)
(書陵部蔵 508・207)

(19) (山霞)

歌 おも影も よそにはみえぬ 鏡山 山かきくもり かすむ春かな

(79) (関春月)

歌 さほ姫の 空に霞の 関すゑて おも影こもる 春の月かな

(154) (花面影)

歌 おのづから 風のさそはぬ おも影も しばしぞ残る 花の木の本

(383) (原鹿)

歌 みちのくの まののかや原 鹿ぞ鳴く なびかぬ妻を おも影にして

(603) (寄月恋)

歌 こぬ人の おも影ながら 更けぬなり われや行くらん いざよひの月

(644) (寄磯恋)

歌 おも影も みらくすくなく なりにけり 入りぬる磯の 松とせしまに

(647) (寄島恋)

歌 おも影も 我に残すな いもが島 よしやかたみの うらみはてにき

(659) (寄寺恋)

歌 月残る 雲のはやしの 明けがたも 其おも影も 忘れやはせし

(672) (寄床恋)

歌 おのづから たのむ夢ぢも たえはてて ねられぬ床に 残る面影

(703) (後撰かかる恋せじ本歌にて候はんずるやらん、よりよりめづらしき体に候はで、いたくの詞とも聞え候はず候ふ) (寄桂恋)

歌 おも影を 月のかつらに たぐへしも 目にみるまでの 契なりけり

(733) (寄山鳥恋)

歌 おも影も へだてやせまし 山鳥の はつをのかがみ うつりはてなば

(760) (寄裳恋)

歌 わぎも子が あかものすその 引きはへて みしおも影の 忘れもせぬ

(915) (夢中懐旧)

歌 あはれにぞ なきおも影ぞ かよひける 親のいさめし うたたねの夢

むねよししんのう

● 『宗良親王千首』－ 8 (0) 首 (1377年ごろ)
(群書類従本)

(81) (春暁月)

歌 おもかげも いとど霞みて 有明の 月にわかるる 春のよの夢

(120) (夜花)

歌 みし夢の おもひ出でらるる 花の香に さぞな面影 春のよの月

(154) (花面影)

歌 青葉なる 桜にそはぬ 面影を よそにぞのこす 峰の白くも

(523) (野霜)

歌 色かはる かたちのをのの 霜がれに 秋みし花の おもかげもなし

(624) (寄岡恋)

歌 わすれめや 夢にも人を みづぐきの をかの朝けに かへる面かけ

(663) (寄戸恋)

歌 わぎもこが かどでのすがた ほのかにも みし面影ぞ 月におぼゆる

(758) (寄席恋)

歌 すぎぬれば うつつを夢に すが席 おもかげばかり しき忍ぶかな

(1015) (関白左大臣)

歌 ますかがみ 人はとどめぬ おもかげの みる度ごとに などうかぶらん

かざんいんもろかね

● 『師兼千首』 - 11 (0) 首 (花山院師兼) (1378 - 1380年?成立)

(書陵部蔵 501・772)

(121) (山花)

歌 さらにだに またずしもあらぬ 山桜 おもかげそへて かかる雲かな

(369) (羈中秋夕)

歌 古郷の おもかげそはぬ 昔だに 夕は秋の ながめせし身を

(495) (暮秋霜)

歌 長月や すゑ野の霜の 朝ぼらけ 今だに秋の おもかげはなし

(659) (暁別恋)

歌 せめてその 面影をだに とどめおけ つらき別の あり明の月

(664) (逢不遇恋)

歌 引きとめし 面影も猶 忘れねば 袖こそ人の かたみなりけれ

(666) (限一夜恋)

歌 忘れねよ はじめもしらず はてもなき 一夜の夢に 残る面影

(700) (絶後形見恋)

歌 ひたすらに たえなばたえね うき中の わすれ形見に 残るおもかげ

(705) (寄風恋)

歌 うかりける そのよの夢の 面影よ しなどの風に たぐへてしかな

(714) (寄朝恋)

歌 忘れめや 別の袖に みだれつる ねくたれがみの 今朝のおもかげ

(720) (寄冬恋)

歌 さえ侘びて 独ぬる夜の 袖の霜 むすばぬ夢に 残るおもかげ

(880) (名所崎)

歌 しがらきの 外山の霧の たえまより 面影みゆる から崎のまつ

やくしじんきんよし

● 『公義集』 - 2 (0) 首 (薬師寺公義) (1379 - 1381年成立)

(島原松平文庫蔵本)

(22) (春月)

歌 いとど又 野守のかがみ おもかげも 見えぬばかりに かすむ月かな

(108) (薄)

歌 行きかへり ふりけん袖の 面影を 残すしめのの 花すすきかな

● 『新葉和歌集』 - 24 (3) 首 (1381年)

(国立公文書館内閣文庫蔵本)

(70) (日前宮によみてたてまつりける五十首歌中に) (冷泉入道前右大臣)

歌 さかぬより まづおも影を さきだてて まつ日かさなる 山桜かな

(168) (新樹を) (前大僧正頼意)

歌 花にみし 昨日の春の おも影も いつしかかはる 夏木だちかな

(331) (中務卿宗良親王しなのの国よりのぼりて、河内国山田といふ所に住み侍りし比、九月十三夜月いとあかりしに申しおくり侍りし) (関白左大臣)

歌 おも影も みしにはいかに かはらん をば捨ならぬ 山のはの月

(407) (暮秋霜といふ事をよみ侍りける) (春宮大夫師兼)

歌 長月や すゑのの霜の 朝ぼらけ 今だに秋の 面影はなし

- (644) (新葉和歌集卷第十一) (恋歌一) (題不知) (読人不知)
 歌 夕ぐれは まだ見ぬ人を こふるかな 雲のはたてを **おも影**にして
 (830) (右近大将長親)
- 歌 こぬ人の **面影**ながら 更けぬなり 我やゆかんの いざよひの月
 (857) (別恋を 中務卿宗良親王)
- 歌 **おも影**の とともに**立出でて** わかれなば なにか身にそふ かたみならまし
 (868) (百首歌中に、後朝恋をよめる) (文貞公)
- 歌 別れつる **おもかげ**ながら まどろめば さぞな又ねの 夢も見えける
 (870) (五百番歌合に) (兵部卿師成親王)
- 歌 別れにし その**面影**を かた見にて いく夜の月を 独みつらん
 (899) (恋の歌中に) (祥子内親王)
- 歌 **おもかげ**ぞ 猶わすられぬ あだなりし 契は夢の うちになしても
 (929) (月前祈恋をよませ給ける) (後醍醐天皇御製)
- 歌 **おもかげ**は 雲井のよそに 成りぬれど 月にぞいのる めぐりあふ夜を
 (933) (正平廿年閏九月十三夜内裏にて人人題をさぐりて月百首歌よみ侍りけるに、寄月恋を)
 (権大納言公夏)
- 歌 **おもかげ**を さそへばくもる 月をしも 形見なれとは など契りけん
 (935) (恋の歌中に) (兵部卿師成親王)
- 歌 月をみば さても心の なぐさまで うき**面影**の なにうかぶらん
 (937) (五百番歌合に) (左近大将公長)
- 歌 何とただ みし**面影**の うかぶらん 忘らるる身の 袖の涙に
 (938) (右近大将長親)
- 歌 思ひ出でて 心にしのぶ **おもかげ**や 人の残さぬ かたみなるらん
 (939) (題しらず) (前内大臣隆)
- 歌 いとはるる うき身にそひて 遠ざかる 心にもにぬ 人の**面かげ**
 (940) (寄鏡恋を) (後村上院御製)
- 歌 **おもかげ**も かはるやいかに ますかがみ 人の心の よそにうつらば
 (941) (後醍醐天皇御製)
- 歌 忘れれば **おもかげ**かはれ ます鏡 われぞあらぬと 思ひなしてん
 (944) (返し)
- 歌 かくばかり なほ**面影**は そふものを わかると人に 見えけるぞうき
 (1039) (五百番歌合に) (前大僧正頼意)
- 歌 なれきつる 八十年の春も 哀しれ 三代の昔の 花の**おもかげ**
 (1049) (春月の心を) (権大納言時経)
- 歌 いにしへの **おもかげ**かよふ 雲のうへの 月にみしよの 春をとばばや
 (1104) (春宮にて人人五十番歌合に) (権中納言経高母)
- 歌 わすられぬ 雲井の秋の むかしまで **おもかげ**さそふ 夜半の月かな
 (1308) (下総国におもむき侍りける時、あはたぐちの山庄をすぐとて思ひつづけ侍りける) (文貞公)
- 歌 この里に みゆきせしよの **おも影**ぞ けふは涙と ともに**さきだつ**
 (1340) (返し) (前大僧正頼意)
- 歌 したへども みし世の春は うつりきて あだなる花に 残る**おもかげ**

● 『新後拾遺和歌集』一 27 (2) 首 (1384年)

(宮内庁書陵部蔵 兼右筆「二十一代集」)

- (76) (延文百首歌に、花) (宝篋院贈左大臣)
 歌 さきやらぬ 花待つほどの 山のはに **おもかげ**みせて かかる白雲
 (118) (題しらず) (藤原実方朝臣)
- 歌 くるとあくとも みてもめかれず 池水の 花のかがみの 春の**おもかげ**
 (163) (新後拾遺和歌集卷第三) (夏歌) (正治二年百首歌たてまつりける時) (前中納言定家)
- 歌 ぬぎかへて かたみとまらぬ 夏衣 さてしも花の **面かげ****ぞたつ**
 (164) (千五百番歌合に 嘉陽門院越前)
- 歌 夏衣 いそぎかへつる かひもなく **立ちかさねたる** 花の**おもかげ**
 (1008) (百首歌たてまつりし時、聞恋) (左大臣)
- 歌 **面影**も まだみぬ中に ふくかぜの たよりばかりを 何たのむらん
 (1012) (法印善算)
- 歌 待ちわびて しばしまどろむ うたたねの 夢にもみせよ 人の**面かげ**

- (1028) (題しらず) (高階宗頭)
歌 くもるとも よしや涙の まず鏡 わが**おもかげ**は みてもかひなし
(1127) (為冬朝臣)
- 歌 思ひ出づる 雲まの月の **面かげ**は またいつまでの わすれがたみぞ
(1181) (三善頼秀)
- 歌 **面かげ**を わすれもやらぬ 心こそ 人の残さぬ 形見なりけれ
(1193) (前大納言宗明)
- 歌 むすびおく もとの契の **面かげ**も みえぬ野中の みづからぞうき
(1202) (貞和二年百首歌たてまつりけるに) (後岡屋前関白左大臣)
- 歌 遠ざかる 人の心に まかせなば みし**面かげ**も 身をやはなれん
(1204) (逢不遇恋) (祝部行親)
- 歌 むかしとも 思ひなされぬ **面かげ**に おなじ世つらき 身の契かな
(1205) (題しらず) (権律師実蔵)
- 歌 **面影**の 残るかたみも かひぞなき みしよの夢の 契ならねば
(1209) (題しらず) (今出川院近衛)
- 歌 おなじ世に 何したふらむ 有明の **おもかげ**ばかり さらぬ別を
(1212) (百首歌たてまつりし時、逢不遇恋) (前関白左大臣)
- 歌 いまは又 ありしその夜の **面影**も つらきかた見に 月ぞ残れる
(1217) (題しらず) (西園寺入道前太政大臣)
- 歌 待つとせし ならひばかりの 夕暮に **面かげ**残る 山のはの月
(1218) (三十首歌講ぜられける時、寄鏡恋) (左衛門督資康)
- 歌 **面かげ**は 残るともなき まず鏡 くもる涙も よしやいとほじ
(1222) (三十首歌講ぜられける時、寄鏡恋) (左衛門督資康)
- 歌 月日のみ うつるにつけて まず鏡 みし**面かげ**は 遠ざかりつつ
(1223) (宝治百首歌たてまつりける時) (前大納言為氏)
- 歌 まずかがみ 何**おもかげ**の 残らん つらき心は うつりはてにき
(1230) (題しらず) (源頼之朝臣)
- 歌 はかなくや 人はゆるさぬ **面影**を わすらるる身に そへて残さん
(1233) (百首歌めされし次に、おなじ心をよませ給うける) (太上天皇)
- 歌 心にも 今は残らぬ ちぎりとや いとひし程の **おもかげ**もなき
(1426) (源高秀)
- 歌 かへりこぬ ならひばかりを 昔にて みしは昨日の よよの**面かげ**
(1433) (光厳院御製)
- 歌 みし人は **面かげ**ちかき おなじ世に 昔がたりの 夢ぞはかなき
(1435) (法眼宗濟)
- 歌 夜な夜なは かよふ夢ちや うつつにも **面影**ちかき むかしなるらむ
(1439) (六条摂政のおもひに侍りけるによめる) (前大納言忠良)
- 歌 夢ならば 又もみるべき **面かげ**の やがてまぎるる 世をいかにせん
(1463) (後深草院の御ことおぼしめしいだして、七月十六日、月のあかりけるによませ給うける)
(伏見院御製)
- 歌 かぞふるは ととせあまりの 秋なれど **面影**ちかき 月ぞかなしき
(1464) (母の身まかりて後よめる) (法印実甚)
- 歌 わすらるる ひまなき物は **面かげ**も さらぬわかれの 名残なりけり

● 『あきぎり』 - 3 (1) 首 (南北-室町時代)

(鎌倉時代物語集成 1)

- (9) (中宮)
歌 いかがせん こひしき人の **おもかげ**は いけのそこにも とまらざりけり
(50) (宮の大納言)
- 歌 こん世にも ちぎりはくちじ 人しれず ふかくたのむは きみが**おもかげ**
(65) (中納言)
- 歌 いとざくら むすびとどめて わかれにし 花のぬしこそ **おもかげにたて**

● 『為定集』 - 2 (0) 首 (二条為定の生没: 1293 - 1360 年) (室町中期の成立?)
(書陵部蔵 501・706)

(85) (月前恨恋)

歌 みてもなほ ものおもへとや うき人の わが**おもかげ**を 月にそへけん

(99) (寄鏡恋)

歌 涙さへ へだつるなかの **おもかげ**や とほ山鳥の かがみなるらん

● 『隠岐高田明神百首』 - 2 (0) 首 (1387 年)

(高田神社蔵本)

(11) (去雁遥) (前参議長綱)

歌 とほざかる **面かげ**をだに 見るばかり かすまでかへれ 春のかりがね

(80) (寄絵恋) (藤原季尹朝臣)

歌 **面かげ**を うつつかひこそ なかりけれ ^{しょうてつ}ものだにいはで のこるかたみは

● 『草根集』 - 122 (12) 首 (正徹の生没: 1381-1459 年、1473 年編纂)
(正徹) (ナトクム清心女子大学蔵本)

(106) (早春) (残)

歌 春のきる よもの霞の うす衣 今朝より夏の **おもかげぞ立つ**

(129) (十一) (早春天)

歌 **おも影**ぞ けふもかはらぬ 天の原 ふりにし年の 春やたつらん

(322) (連峰霞) (七)

歌 霞みこめ つらなる峰の 塵ばかり 残るかわたる 雁の**おも影**

(847) (残)

歌 老いらくの むかしをおもふ **面影**ぞ みなものごとに かすむ夜の月

(882) (春暁月) (四)

歌 **おも影**の 猶うとまれぬ 有明に ゆかりかすめる 月のうす雲

(1111) (見花) (一)

歌 おとろふる 我が身の春の **面影**に のこすをうしと 花やいとはん

(1125) (見花) (十一)

歌 **おも影**も 梢の月に かすむなり 花に見し世の 春の夜の夢

(1236) (対花思昔) (四)

歌 われぞうき むかしの花の **面影**は いとどさかりに かはるすがたを

(1294) (花面影) (七)

歌 さく花に うつつる心や うらむらん 去年の桜の ふかき**おも影**

(1295) (花面影) (十二)

歌 見し色を 忘れし花の 貌鳥も 音に啼く山の 春の**面影**

(1296) (花面影) (十二)

歌 わすられぬ 去年の**おも影** あらそはば いづれの花を 身にはそへまし

(1297) (花面影) (十二)

歌 忘ればや 見し**おも影**を 老が身に そふるもうしと 花やいとほむ

(1366) (十三)

歌 此春は 都ながらに たれこめて 太山桜ぞ **おも影にたつ**

(1427) (落花) (七)

歌 まどろまで こぞの桜の 塵の世を おもふ枕に つもる**おもかげ**

(1489) (寄花雑)

歌 月のかほ 花の姿に いにしへの **おも影**のこす すまのうら浪

(1514) (杉間桜) (十)

歌 ふもと寺 杉の庵の 山ざくら 今朝**おも影**ぞ 在明の月

(1541) (夕春雨) (七)

歌 のこるなり 夕山かづら かすみかけ ふる春雨に あくる**おもかげ**

(1637) (帰雁遠) (四)

歌 さほ姫の 遠山まゆの **おも影**に 今朝ぞみだれて 帰る雁がね

(1729) (野雲雀) (四)

歌 つまこめし 野守の鏡 **面影**の かすめる空に なくひばりかな

(1864) (款冬) (十四)

歌 ちりかかる さくらが本の 山吹や うき紅葉ばの 雪の**おもかげ**

(2089) (郭公) (一)
歌 ほのかにぞ 月はこのれる 郭公 今一こゑを 面影にして
(2122) (待郭公)
歌 郭公 心にかけて 思ふ夜は 雲まの月の おも影のこゑ
(2215) (新樹風) (二)
歌 露しげる 木下はらひ 吹く風の めに見ぬ色や 秋のおも影
(2378) (夏草) (一)
歌 夏草の しげみが上の おも影よ 霜がれはつる 野べの木がらし
(2491) (廬橘散) (四)
歌 しらぬ世の 猶おも影に 橘の 雪ふる苔の 袖の香ぞする
(2676) (樗) (残)
歌 ちり過ぎし 外面の桐の 花の色に おも影近く 開く樗かな
(3573) (岡葛) (七)
歌 かた岡の 松の雪まの おも影に かへる葛は の月の下かぜ
(3637) (十一)
歌 秋も又 いなばの上に おりぞたつ 麓の霧や 田子のおもかげ
(3647) (秋夕) (五)
歌 うかびきぬ うきを心に かさぬれば 去年の夕の 秋の面かげ
(3685) (秋夕雨) (二)
歌 秋山や 面かげばかり 先そめて 梢色なき 夕時雨かな
(3852) (月) (一)
歌 こととはん たそかれ時の 山のはに おもかげしるく 出づる月かな
(3999) (夢後見月) (十)
歌 覚めてみる 空もむかしの 秋ならじ 夢の面かげ 月にそはずは
(4136) (湖月) (三)
歌 高島や かちののを花 面かげに たつや興行く 浪の上の月
(4233) (月似古) (十二)
歌 やどせ袖 ふりぬる人の 面かげも 見しよのままの 月の涙を
(4306) (月前風) (三)
歌 吹く風の めにみず遠き 海山も 月にさやけき 秋のおもかげ
(4468) (夜鹿) (八)
歌 ね覚して 鹿のねきけば 月に霧 萩さくのべの 露の面かげ
(4515) (遠山初雁) (五)
歌 くれゆかば 遠山ひめの まゆを引く 雁さへきえて おもかげもなし
(4553) (夕雁) (十一)
歌 面かげぞ つらなりきたる やど過ぐる 夕の雁は いでてみねども
(4730) (野萩) (二)
歌 あづまぢや わくる萩原 面かげに 先宮木のの 露の衣手
(5002) (山初冬)
歌 面影も いとどほそ江に 木の葉ちり 秋はいなさの 山ぞ冬立つ
(5120) (寒草) (一)
歌 秋過ぎし 野守のかがみ 氷みて 面かげかはる 霜の下草
(5933) (庭雪) (七)
歌 草も木も うゑし所を わすれねば 跡なき雪に 残る面かげ
(5973) (風前雪) (十)
歌 見てもにず 雪をめぐらす 面影に 風のすがたを まなぶことのは
(6029) (原雪) (十四)
歌 里人の 夢のおもかげ したふとも 雪に跡みし まののかや原
(6065) (霰) (五)
歌 あられちる 朽葉が上の 面かげや みぬさ手向けし 杜のかしは木
(6185) (冬野) (十一)
歌 すずみせし 松の下風 そのままに 草を冬のの 夏のおもかげ
(6274) (冬夢) (六)
歌 面かげの さむる枕に かすむかな 夢のかよひぢ 春ふかくして
(6427) (草根集 次第不同恋部二字題 初恋) (九)
歌 忘ればや ただこよひこそ みずもあらぬ 面影ばかり 新枕すれ

(6491) (忍恋) (七)
歌 くるるまの 花のおもかげ 身にそはば ねても別れじ 春のよの夢
(6494) (忍恋) (十)
歌 いつよりか つらきおもかげ へだたりて 涙にむかふ 人となりけん
(6576) (別恋) (六)
歌 草も木も おもかげならぬ 色ぞなき うき衣衣の しののめの道
(6644) (恨恋) (残)
歌 面影を 人こそしらね ますかがみ うら見ん鳥の 音にたてずとも
(6717) (忘恋) (九)
歌 なれし夜の 面影もうし 忘れ草 おふてふ野べに あさき沢水
(6897) (帰恋) (七)
歌 別れかね まきの戸出づる くろかみを われとひかふる さ夜の面影
(6952) (夜恋 残)
歌 むば玉の 見し黒かみの 面かげは やみのうつつぞ いとどさやけき
(6960) (旅恋) (三)
歌 いく夜さて うき面影の 旅やつれ 人にはなくて したひきぬらん
(6961) (旅恋) (三)
歌 我ぞあらぬ おもかげとめて 古郷を いでにし月は もとの身にして
(6969) (旅恋) (残)
歌 あさは野や ふる郷人の おも影も たつみわこそすげ 今夜宿かせ
(6972) (春恋) (三)
歌 あかざりし 袖の別の 梅がかに 面影かすむ 月ぞのこれる
(6974) (春恋) (六)
歌 夕ま暮 それかと思えし 面影も かすむぞかたみ 在明の月
(6978) (春恋) (十三)
歌 さかり見し 花に立ちそふ 面影は 夢ちにまよふ 春の山ぶみ
(6979) (春恋) (残)
歌 かたみとや すまの若木の 桜花 かすみのうちの 春のおもかげ
(6991) (秋恋) (六)
歌 身ひとつを 其世の秋に うれふれば 面影ならぬ 在明の月
(7036) (恋夕) (十三)
歌 わすれぬを 思ひすては むかへども 我がゆふぐれと したふ面影
(7077) (不逢恋) (残)
歌 見し人の 心につるる 面影の そはばあふ夜を さのみいそがじ
(7086) (難忘恋) (十一)
歌 あやにくに 忘れんと思ふ 心より 出でてもり行く よよのおもかげ
(7123) (暁逢恋) (三)
歌 月もうし わかるる比の 有明に まち見る夢を 残す面影
(7278) (懇切恋) (十三)
歌 身にとまる 匂もちかき 面影に こよひはひとり ぬるとしもなし
(7285) (難忘恋) (六)
歌 はかなしと おもひ捨つるを たよりにて したふかとはき 夢の面影
(7288) (難忘恋) (十)
歌 あやにくに 忘れんとすれど わざととふ 人やりならぬ さよのおもかげ
(7289) (難忘恋) (十一)
歌 ふしておもひ おきつの浜の 松はこで 在明の月に 残る面影
(7301) (見夢恋) (十二)
歌 身にそはば あらしよ夢の 面影に 枕ならべて あくる別は
(7305) (不見恋) (三)
歌 しらざりき うきて雲ある 浪の上に 見えぬこじまの 松の面影
(7345) (無隙恋) (六)
歌 面影の 又やはさのみ 身にしまむ つま吹きかへす こすの秋かぜ
(7354) (ね覚恋) (十)
歌 あげばをし ね覚ののちの いねがてに 枕ならぶる さ夜の面影
(7355) (ね覚恋) (十)
歌 おどろきし 夢の面影 よのつねの ね覚ならぬを する涙かな

(7356) (ね覚恋) (十二)
 歌 ほの見える たえつる夢の うち橋に わたり帰らぬ さよの**面影**
 (7362) (悦偽恋) (十四)
 歌 身にそへむ あらぬ心に 成りゆかぬ 其世ながらの あかぬ**面影**
 (7363) (**面影恋**) (十)
 歌 **面影**は 身をもはなれぬ うつつにて うつつぞまれの 夢の**面影**
 (7364) (**面影恋**) (十一)
 歌 おもひしれ 我が**おもかげ**の 人のため うかりしをだに 君も忘れじ
 (7374) (山家恋) (三)
 歌 駒おろす 木幡の山の ささのくま **おもかげ**さわぐ 宇治の川浪
 (7378) (野宿恋) (十四)
 歌 今夜ねて かたしくまのの かや原に 遠き**おもかげ** **たつ**あらしかな
 (7380) (閑居恋) (六)
 歌 夕まぐれ 松にいざなふ **面影**の しづかならぬを とふあらしかな
 (7382) (閑居恋) (十一)
 歌 はかなしと 岩まの水の おとづれも きけばながれを つたふ**面影**
 (7398) (羈中恋) (十一)
 歌 旅の空 行くをはるけき 恋ぢにて 夜夜の枕に うすき**おもかげ**
 (7402) (旅泊恋) (十一)
 歌 夜もすがら ひとつ泊の 友舟に 見し**おも影**を よする浪かな
 (7412) (春尋恋) (十)
 歌 過ぎぬるか 霞にくまは なほありて **おも影**まよふ 花の山ざと
 (7414) (春見恋)
 歌 宿やこれ 霞のうちの 見し花の **おも影**にほふ 色もかはらで
 (7423) (十)
 歌 雲霧の まよふ道かは 宿ごとに **たつ面影**も 猶しるべせよ
 (7435) (秋旧恋) (九)
 歌 床の露 ふるき涙に 水草みて 我が**おもかげ**も みえぬ秋かな
 (7546) (始尋縁恋) (七)
 歌 たづねくる 山路の春も とひかねぬ ゆかり消えにし 花の**おもかげ**
 (7555) (乍見隠恋) (六)
 歌 枕にぞ **面影**まよふ 雲のはに ほのあらはれし 月のなきよは
 (7603) (時時見恋) (十)
 歌 つれなさの **面影**かくせ 三か月の われて又みる 有明のくも
 (7608) (残形見恋) (七)
 歌 **面影**の さらぬ形見ぞ くもりなき 残るかがみは ちりつもれども
 (7612) (思移媒恋) (残)
 歌 宿ながら ほのみし月の しるべする 人こそまされ ならぶ**面影**
 (7648) (草根集 次第不同恋部三字題 寄雲恋) (十)
 歌 茂れ草 野中の水に 空の雲 わするまなく うかぶ**面影**
 (7922) (寄原恋) (六)
 歌 草の原 とへど白玉 露消えて かはらぬ月に やどる**面影**
 (8017) (寄鏡恋) (残)
 歌 都をば へだつるすまの 山鳥の かがみにうつせ さらぬ**面影**
 (8021) (寄筵恋) (三)
 歌 **面影**は ありて身にそふ 言の葉の ならぶかひなき 床のさ筵
 (8123) (九)
 歌 むなしてふ うつほ柱に かくれしや 猶九重に **面影ぞたつ**
 (8362) (寄月恋) (六)
 歌 忘れぬ 涙のうちの **面影**も 袖にこぼるる 有明の月
 (8377) (寄月恋) (十)
 歌 詠めつつ 人の**面影** ならなくに 忘れぬ月の かほぞ身にしむ
 (8429) (寄秋月恋) (二)
 歌 なく涙 人にもみえよ 夜もすがら **面影**さらぬ 月のかがみに
 (8463) (寄月見恋) (六)
 歌 尋ねても 月に心は 見えてみつ のこらば残れ 人の**面影**

- (8591) (李夫人)
 歌 なにかせん 煙のうちの **面かげ**の 消えてむなしき 後の思ひは
 (8646) (閑中灯) (七)
- 歌 **おもかげ**の 残る灯 夢覚めて 古りにし人の 玉かとぞみる
 (9407) (夜雨) (七)
- 歌 ふる雨の その心に 友はみな あるもむかしの くらき**おもかげ**
 (9644) (山家) (八)
- 歌 **おもかげ**に 猶したひきて 世のうきめ 見えぬ山とは 思ひなされず
 (9790) (田家) (九)
- 歌 小山田や 秋のいなばの **おもかげ**を かりほの雲ぞ 夕日色づく
 (9823) (田家興) (六)
- 歌 刈小田の おちぼあらそふ 里のこに 猶むら鳥の **面影**ぞたつ
 (10091) (半夜旅泊) (六)
- 歌 磯まくら 浪に月おち 鳥なくも まだ**面影**の さ夜中のかね
 (10208) (湖眺望) (一)
- 歌 **面影**に みぬをみるかな 箱根路や 坂の上なる にほの水うみ
 (10222) (夕遠望) (十四)
- 歌 海山は ただ**面影**ぞ 見しかたの 暮行くままに めぢはたゆれど
 (10238) (寢覚遠情) (十四)
- 歌 むかしだに 見ぬ世の人の **面影**を おもひさだめぬ 夢に別れて
 (10248) (暁眠覚) (十)
- 歌 おきあかし かりによりそふ 檼柱 さむるか夢の **おもかげ**ぞたつ
 (10267) (懐旧) (一)
- 歌 **面かげ**に 見し世のありて 何かせむ 忘れぬ夢を はらへ松風
 (10270) (懐旧) (三)
- 歌 おもひいでて 心みだれぬ **面影**の 一にもあらぬ 世世の故人
 (10308) (閑居懐旧) (六)
- 歌 月やあらぬ 昔の人の **面影**と すめる宿とふ 軒の松かぜ
 (10309) (雨中懐旧) (七)
- 歌 雨ぞうき こまかに世世の ふることも **面影**うかぶ 聞のたもとに
 (10315) (暁懐旧) (六)
- 歌 昔見し あまたの人の **面影**も せばき夜床に 在明の月
 (10408) (寄鏡述懐) (三)
- 歌 老いぬれば かはる鏡を いとふ身に もとの**面影** などしたふらん
 (10414) (二)
- 歌 世世を見し 夢の**面影** たつちりの いそぢの床を はらふ松かぜ

● 『雅世集』 - 21 (2) 首 (生没: 1390-1452年)

(島原松平文庫蔵本)

- (26) (見花)
 歌 **面影**よ 後いかにせん 山ざくら めかれぬ花に けふもくらして
- (75) (草漸青)
 歌 うらがれし **面影**見えて あさ霜の ふる葉にまじる 野べの若草
 (105) (岡新樹)
- 歌 ます鏡 むかひの岡の 夏木だち ちりにし花の **面かげ**ぞなき
 (121) (隣蚊遣火)
- 歌 中がきも 霧の籬の **面影**に けぶりたちくる しづが蚊遣火
 (171) (寄月往事)
- 歌 **面影**の うかべる雲は 跡なくて むかしの月ぞ 空にのこれる
 (222) (をみなへし)
- 歌 見ずもあらず 見もせぬ霧の まがきより **面影**なびく 女郎花かな
 (312) (雪朝望)
- 歌 月に見し **面影**よりも 朝ぼらけ 千里くまなき 雪の山の端
 (333) (おもかげに)
- 歌 形見とて 人はのこさぬ **面影**に むかふちぎりぞ 今ははかなき

- (366) (末松山)
歌 雪に見し **面影**かへて 霞なる 春のながめの すゑの松山
- (398) (寒草霜)
歌 霜八たび おきてかれぬる 花なれや その七草の **面影**もなし
- (408) (おもかげに)
歌 物ぞおもふ あまた旅ねし **面かげ**に **面影**そひて 遠ざかる身は
- (459) (峰紅葉)
歌 小倉山 ありしともしの **面影**を 峰の木の間の 紅葉にぞ見る
- (531) (崎月)
歌 浪間より ほのみのさきの 秋の月 **面影**ながら あかぬ夜半かな
- (603) (岡五月雨)
歌 五月雨は 日数つもりて かの岡に 草かる人の **面影**もなし
- (632) (霧中嶋)
歌 夕づく日 うつる沢辺の うす霧に **面影**見えて 鳴や立つらん
- (682) (羈旅)
歌 行きかへり **面かげ**遠き ふる郷に かけてもよわし 夢の浮橋
- (691) (寄月懐旧)
歌 月にこそ 思ひも出づれ 秋のそら 雲なへだてそ 世世の**おも影**
- (711) (題不知)
歌 契りしも 今は夜寒の 秋ふけて **面影**遠し 浅茅生の月
- (721) (巖残雪 住吉法楽 永享九八十五)
歌 住吉の きし**たつ**浪の **おもかげ**も いはねにのこる 春の雪かな
- (743) (夏草深)
歌 花もがな **面影**にせん 道のべの まののかやはら 夏ふかきころ
- (757) (寄月往事)
歌 **面影**の うかべる雲は 跡なくて むかしの月ぞ 空に残れる

● 『経氏集』 - 4 (0) 首 (15世紀?)
(東大史料編纂所蔵本)

- (293)
歌 立ちかへり 見ざりしほどの わがこひに **おもかげ**そへて なげくころかな
- (295) (遇不逢恋)
歌 わすれずは なぐさむ方と なりもせで など**おもかげ**の うきをそふらむ
- (382) (草庵集を見侍りて僧都経賢が許へ返し遣すとて)
歌 玉をなす ことの葉ごとに つゆきえし **おもかげ**のこる 草のいほかな
- (394) (寄月祝)
歌 千代かけて みがく鏡の **おもかげ**に 月もくもらぬ 天のかぐ山

● 『津守和歌集』 - 1 (1) 首 (1397-1398年)
(千葉義孝氏蔵本)

- (58) (津守国平身まかりて後よめる) (国助)
歌 ある世にも かくやはそひし **面影**の **立ちもはなれぬ** 昨日けふかな

● 『菊葉和歌集』 - 19 (2) 首 (1398年)
(宮内庁書陵部蔵 152・413、伏 70)

- (7) (六十番歌合に、初春をよませ給ける) (崇光院御製)
歌 紫の 袖をつらねし **面かげ**の 霞もいくへ けふのはつ春
- (231) (実富朝臣)
歌 忘れめや 嵐に花は 散敷きて 在明残る 庭の**面かげ**
- (268) (実富朝臣)
歌 散る花の 名残を思ふ 比しにも **面影**うかぶ 峰の白雲
- (294) (卯月の初め、遅桜の咲きたりけるをみてよめる) (よみ人しらず)
歌 **面影**は 春見し花に かはらねど 青葉がちなる 遅桜かな
- (295) (百首歌の中に) (入道前左大臣)
歌 あかざりし 春の別の かなしきに **面影**うかぶ 遅桜かな
- (299) (題を探りて歌つかまつりけるに、岡新樹を) (源経定)
歌 見し花を しのびの丘の 夏木立 青葉の外は **面影**もなし

- (572) (関駒迎をよめる) (前右大臣)
 歌 相坂や これぞ昔の **面かげ**に 関路を出づる 望月の駒
 (640) (題しらず) (前右大臣)
 歌 淡路島 月おちかかる 波の上の **面影**とめよ 須磨の関守
 (808) (応永三年の百首に) (従三位政子)
 歌 野べの色は 霜枯れはてて 見し秋の **面影**もなき 比ぞさびしき
 (809) (題しらず) (実富朝臣母)
 歌 秋の色は **面かげ**もなき 詠かな 霜枯れわたる 野べの冬草
 (905) (故郷雪をつかうまつりける) (三善為徳)
 歌 **面影**は 花にぞまがふ さざ波や 志賀の都の 雪の明ぼの
 (923) (題しらず) (よみ人しらず)
 歌 詠むれば 雪にくもれる 鏡山 霞みし花の **面影ぞたつ**
 (924) (前右大臣)
 歌 さゆるよの 雪の光の 鏡山 都の月の **面影ぞたつ**
 (1051) (おなじ心を) (実富朝臣)
 歌 ひとめ見し その**面影**を 身にそへて うはの空なる 恋もするかな
 (1318) (題しらず) (賢恵法師)
 歌 いたづらに むかひぞふくる つくづくと 人はこぬ夜の **面影**の月
 (1345) (題不知) (前右大臣)
 歌 きぬぎぬの **面影**もうし とはぬ夜も きかじやさらに 暁のかね
 (1367) (くものうへなる人をほのかにのぞきて心のみかかりけるを、ひとのいかがととひたりける返事に) (従二位栄子)
 歌 おもへただ ほのみし月の **面影**の うき身をさらぬ 比の思ひを
 (1460) (不会恋を) (御製)
 歌 **面かげ**も わするばかりに へだてきて 又とみぬ夜の 夢ぞあやなき
 (1461) (季富朝臣)
 歌 **おもかげ**は 心にいつも のこれども 逢ふと見し夜の 夢は絶えにき

● 『為尹千首』 - 10 (1) 首 (生没：1361-1417年)

(志香須賀文庫蔵本)

- (107) (野遊)
 歌 あきつ野の 薄みじかき **おも影**の つばなぬきつつ けふもくらしつ
 (154) (花**面影**)
 歌 **面影**ぞ 猶うとみえぬ 桜ばな ちるはうかりし 春の山風
 (199) (三月尽夜)
 歌 なれなれて 花の**面影** 鳥の声 夢になせとや よひのうたたね
 (271) (夏山)
 歌 これやみし さくらの山の 青木立 **面影**うとく しげりあひぬる四 43 為尹千
 (345) (径女郎花)
 歌 きぬぎぬの **面影**見せて 女郎花 ささわくる野の つゆにさくなり
 (563) (野雪)
 歌 千草さく 野辺の**面影** 露もなし 雪の一色の あげぼのの空
 (622) (寄峰恋)
 歌 うき人の 袖ふる山の みねの雲 **猶おもかげ**に **立ちて**恋ひつつ
 (675) (寄簾恋)
 歌 つてにみし さてもすこしの **面かげ**の 涙をさへに かけそふるかな
 (686) (寄葛恋)
 歌 **おもかげ**は ただ恋ひそひて くずがきの 人うらめしき 夕暮の空

● 『正徹千首』 - 19 (2) 首 (生没：1381-1459年)

(広島大学蔵本)

- (26) (嶺霞)
 歌 霞みこめ つらなる峰の ちりばかり 残るかわたる 雁の**面影**
 (78) (花)
 歌 さく花に うつる心や うらむらん 去年の桜の ふるき**面影**

- (114) (洛花)
歌 この春は 都ながらに たれこめて 深山桜ぞ おもかげにたつ
- (217) (郭公)
歌 ほのかにぞ 月はこのれる 時鳥 今一声を おもかげにして
- (233) (樗)
歌 散過ぎし 外面の桐の 花の色に 面影ちかく さく樗かな
- (572) (雪)
歌 草も木も うゑし所を わすれねば 跡なき雪に のこる面かげ
- (625) (別)
歌 草も木も 面影ならぬ 色ぞなき うき衣衣の しののめの道
- (643) (初尋縁恋)
歌 尋ねくる 山路の雲も 問ひかねぬ ゆかり消えにし 花のおもかげ
- (663) (面影恋)
歌 思ひしれ 我が面影の 人のため うかりしをだに 君もわすれじ
- (664) (春恋)
歌 夕ま暮 それかと思えし 面影も かすむぞかたみ 有明の月
- (677) (閑居恋)
歌 はかなしと 岩まの水の 音づれも きけばながれを つたふおもかげ
- (680) (旅恋)
歌 いく夜まで うき面影の 旅やつれ 人にはなくて したひきぬらん
- (682) (旅泊恋)
歌 夜もすがら ひとつとまりの 友舟に 見し面影を よする波かな
- (696) (難忘恋)
歌 ふして思ひ おきつの浜の 松はこで 有明の月に のこる面影
- (728) (寄雨恋)
歌 見し人の 面影はこぶ 秋かぜに 雲もいくたび 身にしぐるらん
- (849) (田家)
歌 刈小田の 落ぼあらそふ 里の子に 猶村鳥の 面影ぞたつ
- (926) (夕遠望)
歌 海山は ただ面影ぞ 見しかたの 暮れゆくまに めぢはたゆれど
- (968) (李夫人)
歌 何かせん 煙の中の 面影の 消えてむなしき 後のおもひは
- (986) (懐旧)
歌 面影に 見し世のありて 何かせん 忘れぬ夢を はらへ松かぜ

● 『鶴岡放生会職人歌合』 - 2 (0) 首 (室町中期)
(松下幸之助氏蔵本*)

- (18) (五番) (左) (絵師) (判云、月は、雲鳥の綾もおりえたる心地して侍れど、ゑじまの波は見どころたちまさると申すべし、恋の番も、左、やみのうつつは優に侍るべし、右は、つくろはぬ様にきこえて歌めきたる事なければ、猶左の勝にこそ)
- 歌 くろかみを やみのうつつに かきやりて 見ぬ面影を うつしかねつつ
- (30) (八番) (左) (鏡磨)
歌 露深き かたばみ草を たもとにて しぼりかくれば おもかげも見ず

ごすこういん

● 『沙玉集 I』 - 5 (0) 首 (後崇光院) (1403 - 1434 年成立)
(後崇光院) (書陵部蔵伏・8)

- (113) (山花)
歌 芳野山 花より外の こずゑまで 面かげにほふ 峰の白雲
- (161) (寄月顕恋)
歌 いかにして 世にはもれけん 面影も おぼろ月夜に たどる契を
- (176) (なれはすれども)
歌 おも影に なれはすれども 見し人の 行へはそはぬ 月ぞかひなき
- (218) (寒草纒)
歌 野べの色は 霜がれながら むら薄 ほのかにのこる 秋のおも影

(239) (おなじ九月尽に) (秋恋)
歌 恋ひしたふ 人のゆくへや 秋の月 そふ**面かげ**に なみだ露なり

ごすこういん

● 『沙玉集Ⅱ』 - 7 (0) 首 (後崇光院) (1403 - 1434 年成立)
(後崇光院) (書陵部蔵 501・644)

(21) (返し二首あり、みえず) (又返し)
歌 あはれいかに 一方ならぬ **面影**を 忘れがたみに 袖ぬらすらん
(52) (神楽)
歌 見ずしらぬ その神の代の **面影**を 雲みに残す あか星の声
(121) (庭橘)
歌 **面かげ**は みぬ昔まで 橘の 花ちる庭に 在明の月
(155) (絶恋)
歌 **面かげ**は みしよのままの うつつにて ちぎりはたゆる 夢のうきはし
(198) (因幡山)
歌 秋の田に みし**面かげ**も 冬くれば あらぬいなばの 峰の白雪
(251) (冬 初冬)
歌 ふゆはまだ あさけの空も みし秋の **面かげ**ながら うち時雨れける
(503) (秋恋)
歌 とひもこぬ うき**面かげ**を さそひきて 人だのめなる 秋のよの月

しんけいしゅう

● 『心敬集』 - 11 (1) 首 (心敬の生没：1406-1475 年、1463-1468 年の歌)
(島原松平文庫蔵本)

(8) (春月)
歌 **面影**は 春や昔の 空ながら 我が身ひとつに かすむ月かな
(73) (寄露恋)
歌 よもぎふに 残るもかなし おき出でし あかつき露の あとのおも**かげ**
(111) (雨中待花)
歌 それながら 色も匂も 花ならで **面影**むかふ 春雨の空
(136) (海上待月)
歌 待ちなれし 都の山の **面影**も **立ちそふ**浪に ぬるる月かな
(185) (高山待月)
歌 空にやは 月も急がぬ くるる夜は **面かげ**たどる ふじの白雪
(188) (春秋野遊)
歌 **面影**は 花鶯の 野べながら 千草うつろひ 松虫ぞなく
(206) (百首和歌花二十首)
歌 忘れえぬ よもぎが露に 立ちぬれて 我が**面影**や 花に見えまし
(226) (月二十首)
歌 やどりきて しのぶの軒の **面影**を 旅ねの袖に ぬらす月かな
(239) (月二十首)
歌 とみにみし 都の月の **面影**も 涙ながらに くもる夜もなし
(241) (露十首)
歌 古郷の よもぎが露の **面影**は 袖にこぼれぬ 夕暮もなし
(260) (述懐十首)
歌 ことの葉も 旅のふせ屋に おとろへて たどりし程の **面影**もなし

● 『松下集』 - 46 (5) 首 (生没：1412-1494 年)
(正広) (国会図書館蔵本)

(217) (初雪)
歌 村村に 枯れたつ庭の 花薄 今朝ふる雪に 秋の**面かげ**
(313) (寒草)
歌 夏や見し **面かげ**たかき 山薄 ふもとの塵と かるる比かな
(576) (旅宿思恋)
歌 **面影**の 身にそひけりな などてわれ しげき葎に やどをかりけん

(757) (その比、正般藏主、清定法師、外郎祖田など、吉野の花みんとて都よりくだり侍れば、能阿をさそひ思ひたち各各見侍るに、花の題を十首づつとりて藏王権現に法樂せし) (初春待花)
 歌 天地の 春にひらけし 朝より 先みよしのの 花の**面かげ**

(769) (一統などしげく興行ありしかども書付くるにおよばず、此兵庫助、老僧の脇足の侍るを形見にとて所望あるに、出だし侍るに、清岩のけふそくとする歌を書きてとありしに、いなみがたくてよみ侍る)
 歌 みるたびに 清き岩ほの 苔衣 袖をやすめし **面影ぞたつ**

(992) (寄夜恋)
 歌 いとふ身に 人やはおくる 誰ならん 雨風の夜を しのぐ**面かげ**

(1002) (月前恋)
 歌 **おもかげ**の 身にそふのみを するべにて 我が方はらに ふし待の月

(1014) (寄月恋)
 歌 **おも影**の 我が身にそふを 二心 有りとしてめづる 月やうらみん

(1017) (文明十七年正月三日、風ふき雪ちりて三日の月もみえず、心におもひつづけて)
 歌 雪あられ ふぶきのそこの **面影**に 出づるもほそき 春の三か月

(1038) (旧恋)
 歌 かよひこし ふる野の草の 秋の露 いまも涙に 残る**面影**

(1065) (寄月恋)
 歌 月こよひ **面影**おくる 心ざし つつむにあまる 袖の露かな

(1223) (僅見恋)
 歌 **おも影**を いつか忘れん 引きかくる きぬのひまより 見つるまゆ墨

(1269) (廿三日、遮那院と云ふ坊にて一座ありしに) (花初開)
 歌 世にひらく なにはの法の 初花を 今もさくらに **おも影ぞたつ**

(1352) (待不堪恋)
 歌 **おも影**を 我が身にそへて いりもむを けしからずとや 媒のみん

(1419) (旅宿暁鐘)
 歌 見る夢は 東に覚めて 鐘の声 いまだ都に 残る**おもかげ**

(1432) (寄旅恋)
 歌 いとふとも 此たびゆるせ あり明に **おも影**つるる さ夜の中山

(1438) (絶不知恋)
 歌 みし人は いづくに有りて あはざらむ **面影**まよふ 空のうき雲

(1453) (野行幸)
 歌 **立ちつづく** 野べの御幸の かり衣 その**面影**に たづぞ鳴くなる

(1525) (対花思昔)
 歌 かた見との あしたの雲の 花ぞさく 花やむかしの 人の**面かげ**

(1561) (夏雑物)
 歌 都にて 祇園生れの 山鉦を わたすはけふと うかぶ**おも影**

(1570) (初雁)
 歌 荻原や みし人こふる 秋風に **面影**よする 初雁のこゑ

(1582) (廿三日夕、板倉備中入道宗永所にて、右兵衛佐義廉の子息栄棟喝食対面申、杯の次に一首詠じ侍りて、さかづきをさし申すと、備中申せしかば、とりあへず短冊にかきてまゐらせし歌、折ふし雨そそきし侍るに)
 歌 ながらへて 思ひかけずよ いにしへの **おも影**はこぶ 袖の村雨

(1646) (旧恋)
 歌 いにしへを おもへばふるの 神杉も 木だかく成りて 遠き**面影**

(1649) (寄雲恋)
 歌 **面影**を わすれんとすれば 古の あしたの雲ぞ 峰にかかれる

(1673) (十日、引撰寺月次歌合に遠山初雪)
 歌 三上山 けさふりそめて 浪のうへに **面影**よする 富士の白雪

(1727) (廿日、金光寺月次三首歌合に河辺柳)
 歌 河かぜに 柳みだれて 一葉ちる **おも影**うつす つばくらめかな

(1856) (晚鐘遠)
 歌 **おも影**は なにはの寺ぞ 橋もなき ながらにまよふ 入あひの声

(2000) (漸待花)
 歌 春の雪 さそひてうづむ **面影**を 桜にうつす 峰の白雲

(2019) (春雪)
 歌 よし野山 した待つ花の **面かげ**を 冬にぞかへす 峰の白雲

- (2067) (夕顔)
歌 雪うづむ こしのひら屋の 面影を 夏に水のの 夕顔の花
- (2161) (冬部 冬嵐如秋)
歌 荻原や さわぐ嵐の 夜半のこゑ しばし過ぎにし 秋の面影
- (2224) (初見恋)
歌 とき有りて 一たびひらく 花やこれ 人にうへなく 向ふ面かげ
- (2249) (忍逢恋)
歌 いつかさて 忍のすだれ うごかさで 我が身入りつる 人のおもかげ
- (2292) (不知名恋)
歌 誰にとひ なにとか人を 夕ま暮 花を御階に 出でし面影
- (2296) (名所恋)
歌 そでかはす 二上山の 峰の雲 それも嵐の 余所のおもかげ
- (2330) (心中忍恋)
歌 われしらば なげく姿を 人やみむ 思ひはいれじ よその面影
- (2350) (寄橋恋)
歌 たれかとひ くめの岩橋 みる夢に なかばは絶えて かよふ面影
- (2367) (寄花恋)
歌 むかへども 面影分くる めづかひを 心がはりと 花や恨みん
- (2906) (右) (神楽)
歌 雲のうへ 庭火によるの 蜚 うたへど秋の 面影もなし
- (2948) (右) (海辺雪)
歌 わたの原 みぬもろこしも 浪にきて 面影うかぶ 雪の遠山
- (3015) (廿一番左) (難忘恋)
歌 月をめで 花をみるにも 面影の 先さき立ちて とふ思ひかな
- (3033) (三十番左) (寄鐘待恋)
歌 契りきや ひとつ嵐の 松にきて 面影はこぶ 入相のこゑ
- (3091) (五十九番左) (旧事恋)
歌 みちの草 いく世の夢に 枯れぬらん 古き枕に かよふ面かげ
- (3093) (六十番左) (寄鐘恋)
歌 寺古りて 道行く人の つく鐘 に待と別の 面かげぞたつ
- (3119) (七十三番左) (面影恋)
歌 いとふ身に 人のはそひて 人になど わが面影の 別れはつらん
- (3147) (八十七番左) (等思兩人恋)
歌 袖の露も いづれのかたか ふかからむ 面影分くる ふるの中道

● 『なぐさめ草』 — 1 (0) 首 (1418年)
(慰草 (松平文庫本))

- (12) (作者)
歌 岩ねもる 清水に春の 面影を とめてやかへる 松の藤なみ

● 『宗祇集』 — 5 (1) 首 (生没: 1420-1502年)
(天理図書館蔵本)

- (27) (周防国に侍りしとき百首歌よみしに、おなじ心を)
歌 おもかげは かすめるはなも とほからで こずゑにまよふ はるの山ごえ
- (137) (紅葉の歌の中に)
歌 打ちそそく 紅葉のうへの 一しぐれ 色をのみやは おもかげにせむ
- (223) (寄鏡恋)
歌 なにかおもふ たとへば君が おもかげも かがみのうちの かりのかたちを
- (283) (寄月懐旧といふ事を)
歌 見るたびに おもかげ立ちぬ わするなど 月にむかしの 人やちぎりし
- (288) (ほどなく文月十日比かへり侍りし道に、観音のおはします堂にとまりて、かの名号を句のかしらにおきて歌よみ侍りし中に)
歌 さまざまに かたちをわくる ちかひあらば うつつにみする おもかげもがな

● 『慕風愚吟集』 — 3 (1) 首 (1421年)
(堯孝) (書陵部蔵 501・696)

(96) (此よし、刑部公長算興元子ききて)
歌 木のもとも さびしきかげと きくからに なほしのぼるる 花のおもかげ
(127) (当座三十首に) (梢蟬)
歌 うぐひすの 花にさへづる 面かげは とほき木ずゑの せみのもろごゑ
(234) (立待月)
歌 あかずみし 昨日のみねの いざよひも 猶面かげに **たちまち**の月

かざんいんながちか

● 『**耕雲百首**』 - 2 (0) 首 (花山院長親) (1428年頃)
(彰考館蔵本)

(66) (待恋)
歌 うしつらし 誰が**面影**の うかぶらむ こぬをならひの よひよひの月
(69) (暁別恋)
歌 あり明の 月なき比の わかれちは **おもかげ**さへに のこらざりけり

しもれいぜいもちため

● 『**為富集**』 - 6 (2) 首 (下冷泉持為の家集) (1429年)
(持為) (国立歴史民俗博物館蔵本)

(21) (独懐旧)
歌 たらちをの 袖の下にて **生立ちし** 身におも影も そふ月日かな
(64) (月)
歌 うき秋の 数そふそでの 涙にも **おも影**かはる 月はみざりき
(152) (忘恋)
歌 たづねても 人ぞたどらん **面影**を みしや其とも おぼえざりせば
(240) (絶恋)
歌 行へなき その**面影**に **立消えぬ** いもせの山の 嶺のゆふ雲
(266) (八月廿日、明静巳日にあたり侍りければ、今の道万物うくおぼえ侍りて、焼香之次に御名号をよみ侍る)
歌 ながむれば みぬ**面影**も うかびいでて 月明に すめる空かな
(314) (見恋)
歌 月にのみ むかふ心の 色にしれ **面かげ**うつす 袖のなみだを

● 『**歌林良材**』 - 2 (1) 首 (1429-1441年)
(日本歌学大系別巻7)

(135) (定家)
歌 かきやりし そのくろかみの すぢごとに うちふすよひは **面影ぞ立つ**
(482) (家持)
歌 たかまどの 野べのかほ花 **面かげ**に みえつつ妹が 忘れかねつも

● 『**続巫槐集**』 - 10 (2) 首 (生没：1430-1488年)
(雅親) (書陵部蔵 500・172)

(223) (月前鹿)
歌 さをしかの 涙しぐれて すむ月に **面影**かはる 妻やこふらん
(301) (享徳二年正月十三日、室町殿卅首御当座に、雪)
歌 ただひとへ 松のはだれに ふりそめし **おも影**かへて つもる雪かな
(319) (恋部) (忍恋)
歌 なほたどる **おも影**ながら 忘れじな おぼろ月夜の ふかき契りは
(332) (享徳二年八月十三日、室町殿月次三首御会に、月催恋)
歌 もろともに みしよぞつらき わすられぬ その**面影**は 月にかこたじ
(339) (後朝恋)
歌 **おも影**は あはれをしるか 別れつる あしたの床に **立ちかへりつつ**
(463) (享徳二年二月二日、亡父一周忌に人人にうたすすめ侍りしに、おなじ心を)
歌 たちそひし 春や昔も 今はただ **おもかげ**にのみ 残るかなしき
(464) (享徳三年八月四日、持之朝臣十三廻忌勝元朝臣勸進に、おなじ心を)
歌 とほざかる 月日のかへる けふしもぞ みし**面影**は 更にかなしき

- (466) (長祿二年十月十六日、満元朝臣三十三廻に道堅勸進せしに、おなじ心を)
 歌 忍ぶぞよ 三十あまりの 庭の面に その**面影**も **立ちし**むかしを
 (468) (文明十二年十月七日、道堅十三廻忌に政国勸進せしに、おなじころを)
 歌 年をへて うつつの月日 めぐれども ねてみるほどの **おも影**もなし
 (606) (七十七番 よきか右)
 歌 よひの間に きてだにかへれ かた時も みてなぐさまん 君が**面影**

● 『下葉集』 - 22 (1) 首 (生没：1430-1486?年)

(堯恵) (書陵部蔵 155・38)

- (19) (梅有遅速)
 歌 花もみぬ かた枝は雪の **おもかげ**に 消えて梅咲く 軒の山里
 (34) (帰雁幽)
 歌 **面影**の なきてかすめる 曙は 心に残る 春の雁金
 (47) (春草)
 歌 霜さゆる こぞのかれのの **面影**に わか葉さびしき 春の浅ぢふ
 (51) (堯孝法印高倉室にて、浦春曙)
 歌 忘れじの **おもかげ**なれや このねぬる よさの湊の 春の曙
 (78) (花**面影**)
 歌 **面影**は 忘るる草の 種ならで 軒のしのぶに 花ぞ散敷く
 (130) (夏鳥)
 歌 雲うづむ 木末を出でて みやまには **おもかげ**残る 時鳥かな
 (131) (海辺にておなじころを)
 歌 郭公 こぬともことわり 浪の上に かへらん山は **おもかげ**もなし
 (399) (夏初見恋)
 歌 荻はらや 目にみえ初むる **面影**も いさや夏のの 下の秋風
 (400) (見恋)
 歌 **おもかげ**や はやちの風の 下荻に みえてとまらぬ 秋のしらつゆ
 (402) (見切恋)
 歌 玉すだれ 吹きかへす霧の 身にしむも あらき野分の **面影**の露
 (403) (寄月見恋)
 歌 **おもかげ**は かりてもほさぬ 大よどの 月を袂に やどしつるかな
 (405) (聞恋)
 歌 こたへする 山はさすがに みえながら **おもかげ**もなき 谷の声かな
 (420) (孤恋)
 歌 我が涙 くもる日ならぬ **面影**の みえても人に そふかひぞなき
 (423) (見形厭恋)
 歌 さても人 うつつし心や 朝かがみ わが**面影**を そむくとぞみる
 (432) (別恋)
 歌 **面影**は おくりつくさで いそがれぬ やみははなるる 東雲の空
 (445) (寄梨恋)
 歌 **おもかげ**は みる人もなき 宮の内に うきてすさびの つまなしのはな
 (551) (をばすてやまはいづくなるらむと、堂前の峰の上よりはるかにみやりて)
 歌 よしさらば 見ずとも遠く すむ月を **おもかげ**にせん 姨捨のやま
 (577) (羈中雲)
 歌 **面影**は その海山と しらねども 旅には雲の 限をぞみる
 (588) (上野にて優遊(ママ)せし時、あさまのたけの煙一群たちのぼる)
 歌 忘るなよ 思ひのこせと 浅間山 消えしけぶりの **おもかげに立つ**
 (593) (春夢)
 歌 **面影**の 何のこるらん 散る花に おどろかさるる 春のよの夢
 (620) 堯孝法印、高倉古跡を尋ね侍るに、ただ春の草葉にうづもれて露のみしげく侍りければ)
 歌 **おもかげ**の これやむかしと 露はらふ 跡は草葉に 春雨ぞふる
 (621) (夏の比、紀盛憲祖父智侃遠忌にあたり侍りし日)
 歌 昔むかふ 人はまぎれぬ **おもかげ**も かへる空なき みじかよの夢

● 『持為集Ⅰ』－ 3 (0) 首 (下冷泉持為の家集) (1432年)
(国立歴史民俗博物館蔵本)

- (63) (不見恋)
歌 おもかげの それかとたどる ちぎりだに なみだあやしき よそのゆふぐれ
(93) (稀恋)
歌 つらきかな まためぐりあふ おもかげも たどるばかりの なかの月日は
(122) (別恋)
歌 おもかげの さだかにはなし ふけてとひ かへるさもまだ あけぬよのそら

● 『永享百首』－ 11 (1) 首 (1434年)
(百首部類板本)

- (38) (性脩)
歌 雪はなほ ふりにし年の 面影に 残るとやまの 春ぞさえぬる
(129) (公保)
歌 おも影は うきたつ雲に まづ見えて 花につれなき 春の色かな
(132) (貞成)
歌 花はまだ かつさきそむる 色ながら やがてさかりに むかふおもかげ
(572) (兼良)
歌 霜さゆる まののかや原 うづもれて 秋見し露の 面影もなし
(578) (公名)
歌 冬枯し 野もせの草は 見し秋の 面影残る 霜のはつはな
(581) (持基)
歌 霜枯の まののかや原 そのままに 乱れてのこる 秋のおもかげ
(659) (貞成)
歌 神の代の 見ぬ面影も 有明の 月にすみ行く あか星のこゑ
(853) (寄鏡恋) (御製)
歌 日にそへて いとど思ひぞ ますかがみ みし面影の 曇りはてねば
(854) (貞成)
歌 くもれただ みれば涙の ますかがみ まことにそはぬ 人のおもかげ
(858) (公冬)
歌 忘れぬ 思ひは猶や ますかがみ 見し面影の うかぶなみだに
(861) (公保)
歌 涙ゆゑ 遠ざかる身の ます鏡 その面影の かげをだにみず

● 『持為集Ⅱ』－ 2 (0) 首 (下冷泉持為の家集) (1434年)
(書陵部蔵 150・636)

- (22) (恨絶恋)
歌 うき瀬ぞと 思絶えにし 面影を 涙の川に 猶のこしつつ
(124) (十六日、和歌所会) (紅葉如酔)
歌 秋といへば しぐるる色に 出でにけり 紅葉をたきし 人の面影

● 『持為集Ⅲ』－ 3 (0) 首 (下冷泉持為の家集) (1437年)
(書陵部蔵 150・630)

- (60) (絶久恋)
歌 おもかげぞ 猶身にちかき 秋をへて 人はふりにし よもぎふの月
(100) (恋天象)
歌 涙しく 袖に夜がれぬ 月ばかり 見しおもかげや 猶やどすらん
(126) (冬月)
歌 水鳥の 青ばにさゆる 月や猶 おもかげのこす 夏の夜の霜

● 『孝範集』－ 2 (0) 首 (木戸孝範の生没：1434 - 1502年以降)
(九州大学附属図書館細川文庫蔵本)

- (61) (庭橋、梢蟬)
歌 夕風は 松のうらやむ 面影に 花橋の 雪はらふらむ

(108) (寄露恋、寄閑恋)

歌 面影は 身をもはなれず なれなれて わかれしかたは しら川の関

● 『新統古今和歌集』 — 33 (4) 首 (1439 年)

(宮内序書陵部蔵 兼右筆「二十一代集」)

(33) (ふるき詩の句を題にて百首歌よみけるに、遥峰帯晚霞といふことを) (頓阿法師)

歌 すが原や 伏見のくれの 面かげに いづくの山も たつ霞かな

(80) (百首歌の中に) (式子内親王)

歌 ながむれば みぬいにしへの 春までも 面かげかをる 宿の梅がえ

(125) (応安四年内裏にて、人人題をさぐりて歌つかうまつりける時、花始開といふ事を)
(儀同三司実)

歌 昨日まで 面影にみし しら雲の けふは色そふ 山ざくらかな

(152) (貞和百首歌に) (中園入道前太政大臣)

歌 たちなれし かたならねども 忘れぬは よそにみはしの 花の面影

(646) (正治百首歌に) (二条院讃岐)

歌 面かげに 秋の名残を とどめおきて 霜の籬に 花をみるかな

(691) (雪の歌の中に) (前参議雅有)

歌 ちるは花 つもるは月の 光にて おもかげわくる 庭の白雪

(703) (嘉元百首歌に) (贈従三位為子)

歌 雪ふれば かねてぞみゆる かがみ山 ちりかふ花の 春のおもかげ

(984) (二品法親王覚誉家五十首歌に) (法印経賢)

歌 ふる郷を 夜ぶかくいでし 面影の 月にたちそふ 旅の空かな

(992) (月前旅行を) (中務卿宗尊親王)

歌 古郷の 人の面かげ 月にみて 露わけあかす まののかやはら

(998) (弘長元年百首歌たてまつりけるに) (前大納言為家)

歌 峰の雲 いそべの波は かはれども 猶ふる郷の 面影ぞたつ

(1000) (文保百首歌たてまつりける時) (中宮大夫公宗母)

歌 まどろまぬ うきねの波の 枕にも みる面かげは 都なりけり

(1108) (寄鳥恋といふことをよませ給うける) (後小松院御製)

歌 面影を よそにみつつや 山鳥の はつをのかがみ へだてはつべき

(1193) (おなじ心を) (兼好法師)

歌 いかにせん 神のうけける 御そぎとて みし面影も わすれはてなば

(1198) (千五百番歌合に) (藤原隆信朝臣)

歌 朝夕に うき面かげを みなれぎを さすがにさてや ながさみやせん

(1306) (恋歌の中に) (花園院冷泉)

歌 かきくらす 涙のひまの あらばこそ 今の別の 面影もみめ

(1343) (後小松院位におはしましける時うへのをのこども題をさぐりて歌つかうまつりけるに、後朝恋) (権中納言実清)

歌 わかれしは つらきながらの 面影や しひて又ねの 夢にみゆらん

(1390) (延文百首歌に、おなじ心を) (入道一品親王尊道)

歌 ます鏡 うつりやすきは 心にて とともにみし夜の 面影ぞなき

(1416) (寄菀恋) (平宗宣朝臣)

歌 もろともに ちりうちはらひ ねし床の おもかげ残る 夜半のさ菀

(1423) (おなじ心を) (前大僧正杲守)

歌 しのぶべき おも影だにも 身にそはず ありし一夜の やみのうつつは

(1427) (寄月恋) (源頼之朝臣)

歌 ありし夜の 面影残る 月にさへ 涙くもりて 遠ざかりぬる

(1430) (恋歌の中に) (談天門院)

歌 さらに又 涙ぞくもる もろともに みし面影や 月にそふらむ

(1459) (文保百首歌に) (前大納言為定)

歌 我ばかり 忘るる世なく なげけとや うき面影を 猶残すらむ

(1488) (建長三年九月十三夜影供歌合に、寄月恨恋といふ事を) (前大納言為氏)

歌 面影は わすれがたみに ながらへて 我がためつらき 夜半の月かな

(1518) (百首歌たてまつりし時、寄鏡恋を) (前参議通敏)

歌 思ひのみ ますみのかみ せめてさは うき面影は 残らずもがな

(1524) (前中納言雅孝)

- 歌 かたみとて とどめもおかぬ **面影**を 忘れはてじと 思ふはかなさ
 (1569) (孟蘭盆の心を) (藤原隆祐朝臣)
- 歌 なき人の この世にかへる **面かげ**の あはれふけゆく 秋のとし火
 (1593) (題しらず) (女御徽子女王)
- 歌 月日こそ あらぬ空なれ なき人の **面影**のみぞ かはらざりける
 (1594) (後九条前内大臣家の歌合に) (前僧正実伊)
- 歌 つくづくと 思へば恋し あるはなく なきは数そふ 人の**おもかげ**
 (1642) (花歌の中に) (前大納言実躬)
- 歌 わすれめや 六代につかへて 春ごとに なれし雲井の 花の**面かげ**
 (1721) (後深草院横川の安楽谷に御幸のついでに、むかしつかへける事など仰事ありけるのちに奏し侍りける) (真縁上人)
- 歌 思ひ出づる 雲井の月の **面影**も 横川の水に すましてぞみる
 (1780) (よみ人しらず)
- 歌 妹が島 かたみのうらの さ夜千鳥 **おも影**そへて 妻や恋ふらむ
 (1835) (永和百首歌に) (後常磐井前右大臣)
- 歌 山の色 水のながれも いにしへに 猶**おもかげ**の 残るやどかな
 (2022) (反魂香の心をよめる) (従三位行能)
- 歌 見ても猶 身をこそこがせ 時のまの 煙のうちに 消ゆる**おもかげ**

あねのこうじもとな

● 『**卑懐集**』 - 7 (0) 首 (姉 小路基綱の生没: 1442 - 1504 年)
 (基綱) (宮城県図書館伊達文庫蔵本)

- (100) (暮春)
- 歌 心あらば 月もかすみて 行く春の **おもかげ**をだに そらにとどめよ
 (173) (夏歌中に疎屋夕顔)
- 歌 数ならぬ やどりゆかしき かいまみに ひかりそへたる はなの**おもかげ**
 (491) (内裏着到)
- 歌 怨みじな くもるにかへて よはの月 こぬ**おもかげ**を さそふ情は
 (512) (後朝恋)
- 歌 うつりがも さながら残る **面影**の それしもつらき 今朝の床かな
 (514) (後朝恋)
- 歌 さめやらぬ **面影**ぞそふ つくづくと おもふ又ねの 夢かうつつか
 (555) (恋天象)
- 歌 **面影**は 時雨れもはてぬ かた見にて ふるき涙に のこる月かな
 (698) (文明十四年十二月、後花園院十三年御仏事いとなまれて、内裏にて懺法講おこなはれしころ、甘露寺亭にて人人歌よみ侍りしに、鶴といふ事を)
- 歌 身にそへる **面影**ならで しらぬよを まもる心の やみやかなしき

あねのこうじもとな

● 『**基綱集**』 - 2 (0) 首 (姉 小路基綱の生没: 1442 - 1504 年)
 (国立歴史民俗博物館蔵本)

- (40) (原郭公) (文明十三千首)
- 歌 なく声を **面影**にして 時鳥 夜深くすぐる まののかや原
 (152) (逢不会恋) (明応元八廿二水無瀬殿御法楽)
- 歌 くやしくぞ それを限の **面影**と かねてしらぬは さだかにもなき

● 『**前摂政家歌合 嘉吉三年**』 - 8 (2) 首 (1443 年)
 (永青文庫蔵本)

- (74) (右) (大僧都)
- 歌 さくら花 ちりてののちの **面影**は やよひの空に 在明の月
 (223) (百十三番) (後秋) (左) (経清) (左はおもかげかすかにきこえ侍り、右はたけあらんと読めるにや、なずらへて持とせり)
- 歌 朝な朝な くれゆく秋の **面影**も とほざかりぬる 有明の月
 (290) (右) (持純)
- 歌 猶**ぞたつ** 春と秋との なか空に 花ももみぢも 遠き**面影**

(366) (右) (氏数)

歌 あげば又 なみだや袖に さみだれの 雲間の月の 宵の**面影**

(366)

歌 かきやりし そのくろかみの すぢごとに うちふす程は **面影ぞたつ**

(372) (右) (小宰相)

歌 あふことは 名のみなりけり みじかよの 夢かたとどる 人の**面影**

(402) (右) (中納言)

歌 あり明の 月はたれゆゑ のこれども わかれし人の **おもかげ**もなし

(493) (二百四十八番) (左) (持房) (左右同等たるによて、持とせり)

歌 夏草の ことしげくとも わすれめや **面影**ふかき 野の宮の秋

● 『春夢草』 - 41 (2) 首 (生没: 1443-1527年)

(肖柏) (寛政十二年板本)

(36) (秋二十首) (河辺早秋)

歌 **おもかげ**も 身にしむ比や いもがひも ゆふは河原の 秋のはつかぜ

(364) (旅宿逢恋)

歌 あはれ又 草の枕の **面影**を いくくのさとの 月にやどさむ

(373) (従門帰恋)

歌 あぢきなし むなしくかへる 桜戸の つれなきをさへ **面影**にして

(391) (海路眺望)

歌 舟いだす 波に**面かげ** 八十島の 夕暮かなし 塩がまの浦

(410) (詠百首和歌) (春二十首)

歌 桜花 よしまたるとも **おもかげ**を 四方の梢の 春の曙

(475) (恋十五首)

歌 なぐさめよ **面影**をだに 心とや 花にもとめし しののめの空

(593) (佐夜中山)

歌 旅にして 有明の空の 長月や 見し**面影**は さやの中山

(658) (春恋)

歌 **面影**の かすめる花に 詠めして 忘がたみの 春ぞくるしき

(736) (遠峰霞)

歌 伊駒山 ふかき霞に **おもかげ**の たかねうづまぬ 春の明ぼの

(809) (帰雁幽)

歌 雲みにぞ こたへてかすむ **面かげ**は なはしろ水の 春のかり金

(830) (春歌下) (待花)

歌 さきぬとも かくこそはあらめ 朝霞 をぐらが峰の 花の**面かげ**

(831) (春歌下) (雨中待花)

歌 まどのうちに おもふもかくや 春の雨の やしなひ**たてん** 花の**面影**

(832) (春歌下) (尋花)

歌 とひゆけば 野にも山にも 桜花 心まどひの **面かげ**もうし

(840) (春歌下) (遠尋山花)

歌 朝露を わけそほちつつ 夕月夜 かすむ山路の 花の**面影**

(841) (春歌下) (連日尋花)

歌 まよへただ 霞にくるる 遠山路 なぎたるあさの 花の**おも影**

(846) (春歌下) (霞中花)

歌 かすめただ もろこしまでも 敷島の 大和のみかは 花の**面影**

(847) (春歌下) (霞中花)

歌 かばざくら わが**面かげ**に さほ姫の かすむる花と たれかみざらん

(858) (春歌下) (朝見花)

歌 おもひつつ ねての朝けの 横雲に 夢ともわかぬ 花の**面かげ**

(974) (春歌下) (舟中暮春)

歌 船いだす 浪ちの末も **面影**は くれにし春の 志賀の花園

(977) (春歌下) (三月尽)

歌 さらにまた わかれはてにし 花鳥の **面かげ**をしく くるる春かな

(987) (夏歌) (山新樹)

歌 **おもかげ**の 花だにのこれ 夏山の すそのの草ば 吹きかくるまで

(1016) (夏歌) (郭公稀)

歌 たえだえに なれるもよしや 時鳥 野にも山にも **面影**のこゑ

- (1150) (秋歌上) (萩風)
歌 萩原や かざしけん世の **面かげ**も 月に有明の 秋風のこゑ
(1385) (江冬月)
歌 うら島が **たてし**煙の **面かげ**も 冬はあとなく 水の江の月
(1399) (冬歌) (河上氷)
歌 うつりこし 花も紅葉も 初せ川 とめぬ氷に うかぶ**面影**
(1482) (春夢草下) (恋歌上) (聞恋)
歌 さしむかふ 中にもえやは おきふしを こまかにききて 思ふ**面影**
(1493) (春夢草下) (恋歌上) (待恋)
歌 待つとせし 心やよわる さむしるに よひのま深けて やどる**面かげ**
(1499) (春夢草下) (恋歌上) (待夜深恋)
歌 さそひくる 月にいくたび 深けぬらん **面影**はらふ 萩の上風
(1505) (春夢草下) (恋歌上) (初逢恋)
歌 なぐさめし あらましごとの **面かげ**は あらぬにほひに やどるさむしろ
(1542) (春夢草下) (恋歌上) (後朝恋)
歌 わかるとも 人や思ひし 明ぼのの 花にむかふも **面影**のそら
(1545) (春夢草下) (恋歌上) (後朝切恋)
歌 いへばえに 人も思ひし **面影**の 花にこぼるる しののめの露
(1553) (春夢草下) (恋歌上) (逢不遇恋)
歌 すがむしろ 心とどめぬ よひよひの **面影**をさへ 玉のをにして
(1587) (春夢草下) (恋歌上) (羈中恋)
歌 **面かげ**は 都ながらの 横ぐもに あらぬおもひの さやの中山
(1598) (恋歌下) (寄月恋)
歌 夜もすがら おもひの空を すむ月の はらへばかてに うかぶ**面かげ**
(1709) (恋歌下) (寄鏡恋)
歌 **面影**も やどさばやどれ ますかがみ あひにあひぬる 秋夜の月
(1726) (恋歌下) (寄枕恋)
歌 夢かるとよ 枕うごかす **面影**に うちおどろけば 有明のそら
(1913) (雑歌上) (唐人)
歌 かしこきも かりばのえもの むば玉の 夢の**面かげ** 世にぞ名高き
(1914) (雑歌上) (楊貴妃)
歌 いかなりし 千千に分けけん 心をも ひとりのうへに やどす**面影**
(1953) (雑歌上) (かへし)
歌 思ひおく 袖のけしきの **面影**に 行かたまよふ たびの空かな
(2038) (雑歌下) (藤原長正かたへ霜おきたる篠につけて)
歌 ささのはの 霜夜の月の さむしるに 思ひやすらん やどる**面かげ**
(2121) (雑歌下) (玄左長正入道いときなくありしよりあひなれ侍りき、和歌にこころざし
ふかく、廿歳よりうちに歌数もいとおほくよみて、ほどにも過ぎたる作と見え、上古の風にもかよふにや
とおぼえき、十四歳にて歌合に、羈中関を、都いかにへだたりぬらんおとにのみ聞きこしものを白河の関、
とよみて奇特なるやうに人人感じ侍りし、十八九の比にや、よみおき書きつらねて、愚老が瓦礫にあはせ
て五十番に愚判くはふべきよしのぞみしかば、彼あやにくにまかせ侍りし、前内府一覽ありて、おくに一
首をくはへなどし給ひし、大かた万の道に心をすましてあはれふかきものなりき、思ひかけぬ事にあたり
て世をはやくせしかば、愁涙たゆるまもなく、思はぬ夜半もなかりき、ある夜夢に見え侍りて、これより
後は夢にてもみえこじと申すとおぼえて、夢中にもかなしびおもひし、覚めて後よみ侍りし)
歌 さだかなる **面影**かなし 夢にだに 又はとはじと いひしーこと

● 『正徹物語』 — 3 (0) 首 (1444-1452年)
(日本古典文学大系 65)

- (34)
歌 夕まぐれ それかと見えし **面影**の 霞むぞかたみ 有明の月
(35)
歌 袖ふれし 人こそ見えね 花の香の **面影**かをる 春の明ぼの
(112) (定家)
歌 蘭省の 花の錦の **面影**に 庵かなしき 秋のむら雨

● 『碧玉集』 — 18 (2) 首 (生没 : 1445-1523 年)

(政為) (寛文十二年板本)

- (86) (陽明御会に、白梅)
歌 山里の 雪の木ずゑの **面影**も いまはたさむく にほふむめかな
(116) (臥柳自生枝)
- 歌 青柳の 枝さしそふる 春なくは **ただおもかげ**や 水の埋木
(542) (月似扇 濟繼朝臣会に)
- 歌 それも名を かるとこそきけ **かはほりの 面影**ならぬ 空の月かな
(551) (おなじこころを)
- 歌 待出でし 月にならば **とひやこん たのめぬ友も 面かげぞたつ**
(694) (寒草)
- 歌 **おもかげ**の 千種もあれど 夕霜の **をばなの袖ぞ** ひとりしをる
(696) (原寒草)
- 歌 **面影**の 秋とは (はと) とへば 草の原 **かれしをしのぶ** 露まよふなり
(750) (野雪 前内大臣家当座に)
- 歌 ふり出づる 雪をやまねく **面影**の 花野の薄 **のこるかれ葉も**
(808) (侍従大納言許よりかやうに申送り侍る、十二月十四日暮つかたより雪ふりいで、ほどなくつ
もりたるに、夜ぶかき月のくまなきにおき出でて、むかし今の事おもひつづけ侍りし)
- 歌 思ひわび おき出づる月の 雪の上に 跡なき夢や 世世の**面かげ**
(883) (逢増恋)
- 歌 見しやいかに 一夜の夢の 枕より おもへばあらぬ **おもかげ**の月
(898) (旅恋 二階堂会に)
- 歌 結びすてし おもひもかなし **面かげ**の 身にそふ夢は 野にも山にも
(1005) (風 愛宕法樂、政元勸進)
- 歌 さえさえて 今こむ春の **面影**に 枝をならさぬ 雪の山かぜ
(1035) (窓 二階堂故判官三廻忌とてすすめ侍るに)
- 歌 せめてその **おもかげ**にみむ 月だにも むなしき窓の 五月雨の空
(1140) (羈中暁)
- 歌 かり枕 あり明の月も ふる郷の **おもかげ**ながら おきいでてゆく
(1142) (羈中燒)
- 歌 こひしさに そむけははてじ 故郷の **おもかげ**ながら 残るともし火
(1150) (遠山眺望)
- 歌 月のはや 空に明行く 山とほみ ふりつむ雪を **おもかげ**にして
(1153) (短夢 三月尽身まかりける人の追善に、辞世の歌を上におきて)
- 歌 まどろまで 見し夢なれや 花鳥の 帰らぬ道に さそふ**面かげ**
(1175) (おなじ心を、蓮空一廻に)
- 歌 わかれしは またおなじ世の **面影**を かへらぬ道に 今しのぶらん
(1180) (四月廿三日基綱卿第三回に)
- 歌 あらばさぞ ともにみえまし **おも影**の **立ちそふ**我ぞ 老いて残れる

● 『堯孝法印集』 — 3 (1) 首 (1446 年)

(群書類従本)

- (26) (今度、還補真桑庄、稲葉山程近し、仍為逸興如此詠之、但、彼行平中納言の古歌は、いなばの国のいなば山也、同名たるばかりにおもひよせ侍る、不可有混乱事也、人数、正徹禪師、下総入道素欣、沙弥常勲、正晃、知蘊、藤原氏世、此外一族等少少、鶴丸 十日、又まうで侍りしに、昨日夜に入りて会はててかへりしに、夕月夜其興侍りき、今朝うす雪ふりて春の空いとえんにおぼえければ、六条殿、左女牛、五条天神、因幡堂、三条八幡宮など巡礼)
- 歌 さえかへる 夕の月の **面影**も わすれぬけさの 春の雪かな
(131) (親元箏をかきならず) (同日、智蘊夜前一座難忘侍るよし申して)
- 歌 松風に にほひし花の いろいろぞ **面影**に**たつ** 宿のふぢなみ
(160) (雲浮野水)
- 歌 朝雲の まよふ野ざはも よそならぬ 庭の清水の **面影**にみゆ

● 『題林愚抄』 - 132 (18) 首 (1447-1470 年)

(寛永十四年板本)

- (128) (嘉元御百首) (法皇)
歌 面影や はるの空とも 立ちぬらん わきて霞の 色はみえねど
- (481) (弘安百首) (権中納言)
歌 咲かぬまの 花の面影 まづ見えて 春のこずゑに つもるあは雪
- (714) (玉) (九条左)
歌 風にさぞ 散るらん花の 面影の みぬ色をしき 春の夜のやみ
- (751) (延文百首) (梶井宮尊胤)
歌 忘れぬ 春やむかしの 面影の さだかにもなく かすむよの月
- (825) (女房)
歌 面影に 千里をかけて みするかな 春の光に あそぶいとゆふ
- (839) (千) (覚盛法師)
歌 あかなくに ちりぬる花の 面影や 風にしられぬ さくらなるらん
- (845) (続古) (権律師仙覚)
歌 面影の うつらぬ時も なかりけり 心やはなの かがみなるらん
- (860) (新後拾) (宝篋院贈左大臣)
歌 咲きやらぬ 花まつ程の 山のはに 面影みせて かかるしらくも
- (886) (新勅) (俊成)
歌 面影に 花のすがたを さきだてて いくへこえきぬ みねの白雲
- (931) (思花) (風) (鴨長明)
歌 思ひやる 心やかねて 詠むらん まだみぬ花の 面影にたつ
- (933) (夜思華) (頓阿)
歌 夜は猶 我が身にぞそふ くるるまで 梢にみつる はなの面影
- (974) (翫山花) (金) (大式長実)
歌 鏡山 うつろふ花を みてしより 面影にのみ たため日ぞなき
- (1096) (花間鶯) (新拾) (前大納言実教)
歌 雲にいる 面影つらし 花のえに なきて木づたふ 春のうぐひす
- (1111) (花面影) (六条前中納言)
歌 面影を かすめる雲に さきだてて 桜色なる きさらぎの空
- (1189) (花未忘) (源仲正)
歌 あかざりし 心に春や まさるらん 猶面影の しらぬ花かな
- (1250) (続千) (法印覚寛)
歌 かへるかり 越路の空の 白雲に 都の花の 面影やたつ
- (1271) (為重)
歌 過ぎぬなり かすむ雲路の 春のかり 消行く程を 面影にして
- (1295) (実泰公)
歌 面影を 猶とめじとや かへる雁 かすむ夕べの 空になくらん
- (1534) (新勅) (入道二品道助)
歌 忘れじな またこん春を 松の戸に あけくれなれし 花の面影
- (1635) (新拾) (院)
歌 けふも猶 かすむ外山の 朝ぼらけ きのふの春の 面影ぞたつ
- (1636) (宝治御百首) (法親王)
歌 きのみまで 花にまがひし 白妙の 面かげうすく たつ霞かな
- (2192) (新千) (贈従三位為子)
歌 袖のかは はな橘に かへりきぬ おもかげみせよ うたたねのゆめ
- (3729) (新千) (公明)
歌 山鳥の をのへの月の ますかがみ 面影みてや 鹿のなくらん
- (3750) (谷鹿) (続後拾) (前中納言定家)
歌 さをしかの あさ行くたにの 玉かづら 面影さらず 妻や恋ふらん
- (3936) (前中納言定家)
歌 こしかたは みな面影に うかびきぬ 行末てらせ 秋のよの月
- (4276) (月前遠情) (新拾) (小侍従)
歌 いとふらん くめちの神の けしきまで 面影にたつ よはの月かな
- (4277) (月前思故人) (続後拾) (従三位為理)
歌 なき跡の かたみとまでや 契りけん 面影のこる 秋のよのつき

(4819) (金) (中原経則)
 歌 あすよりは よもの山べの 秋霧の 面影にのみ たたむとすらん
 (5198) (池寒蘆) (亀山殿七百首) (御製)
 歌 水鳥の 青羽は冬も かれねども 蘆まさえ行く 池のおもかげ
 (5716) (豊明節会) (続後撰) (太上天皇)
 歌 あま乙女 玉もすそひく 雲のうへの とよのあかりは 面影にみゆ
 (5721) (新後撰) (前関白太政大臣)
 歌 見しままに 思ひやりてぞ 忍ばるる とよのあかりの 月のおもかげ
 (5813) (新統古) (前参議雅有)
 歌 ちるは花 つもるは月の 光にて おもかげわくる 庭のしら雪
 (5870) (月前雪) (新千) (按察使公敏)
 歌 花とみし 面かげさらで よしの山 月にみがける 峰の白雪
 (6402) (永徳御百首) (国量)
 歌 人はなほ かたりつくさぬ おもかげも やがて心に なにとまるらん
 (6419) (未対面恋) (続拾) (俊成)
 歌 人しれぬ 心やかねて なれぬらん あらましごとの 面かげにたつ
 (6428) (六百番歌合) (定家朝臣)
 歌 面かげは をしへし宿に さきだちて こたへぬ風の 松にふくこゑ
 (6606) (永徳二十五夜内裏五首) (権大納言三位)
 歌 面かげの かはらぬ月に 思ひいでよ 契りは雲の よそになるとも
 (6686) (玉) (関白前太政大臣)
 歌 身をさらぬ おもかげばかり さきだちて 更行く月に 人ぞつれなき
 (6693) (為明卿)
 歌 面かげを 待ちいづる月に さきだてて みる空もなく ふくるよはかな
 (6839) (新拾) (前中納言基隆)
 歌 面かげを のちしのべとや 有明の 月にも人の おきわかるらん
 (6869) (土御門院)
 歌 わすれめや 面影さそふ 有明の 袖にわかるる よこ雲のそら
 (6871) (藤葉) (藤原為実)
 歌 おもひやれ あしたのこの 面影は 夢にみしだに おきうかりしを
 (6883) (月増恋) (金) (内大臣)
 歌 いとどしく 面かげにたつ こよひかな 月をみよとも 契らざりしに
 (6884) (見月増恋) (建武元十五夜内五首) (前中納言季雄)
 歌 いとどうき 面影そへて 我が為の 秋とや月の 空にみすらむ
 (6913) (新古) (俊成女)
 歌 夢かとよ みし面影も ちぎりしも わすれずながら うつつならねば
 (6936) (俊成)
 歌 よとともに 面かげにのみ 立ちながら 又みえじとは など思ふらん
 (6944) (万秋門院)
 歌 いつなれし 面影ぞとも かこたれず ただ身にそふを なぐさめにして
 (6957) (祝部行親)
 歌 むかしとも 思ひなされぬ 面かげに おなじ世つらき 身の契かな
 (6958) (已上同) (前関白左大臣)
 歌 今はまた ありしそのよの 面影も つらきかたみに 月ぞ残れる
 (6962) (真観)
 歌 わすればや 袖ひきとめて 有明に またよといひし 人の面影
 (6976) (右大臣冬)
 歌 たえはてて わすれもすべき おもかげの みし比よりも 心にぞそふ
 (6984) (実覚)
 歌 わかれにし その面影の ままならば これやかぎりの 有明の月
 (7014) (遊義門院権大納言)
 歌 ことのはに そへても今は 返さばや わすらるる身に 残る面影
 (7021) (新千) (後山本左大臣)
 歌 わればかり さてもいかにと したへども 面影ながら 遠ざかりつつ
 (7047) (続拾) (光俊朝臣)
 歌 うきながら しばしはみえし 面影も いつの月日か かぎりなりけん

(7050) (玉) (為家)
歌 朝夕は わすれぬままに 身にそへど 心をかたる **面かげ**もなし
(7060) (元亨二御会) (実教卿)
歌 うとくなる 契にかへて **面かげ**の 身にそふべしと 思ひやはせし
(7061) (永徳御百首) (為重卿)
歌 かたみとも なにをたのまん **面影**の うきを恨みて 遠ざかりつつ
(7088) (日比隔恋) (玉) (六帖題) (為家)
歌 みる月の われてあひみし **面影**の 有明までに 成りにけるかな
(7104) (新千) (前中納言惟経)
歌 年へても うき**面かげ**の わすれぬや 心にのこる うらみなるらん
(7154) (新拾) (前大納言経継)
歌 **面影**は わが身にそへる つらさにて 恨みぬ月に ぬるる袖かな
(7155) (為定)
歌 見ても猶 物思へとや うき人の わが**面影**を 月にそへけん
(7157) (已上同) (為藤)
歌 人をこそ うらみはつとも **面かげ**の わすれぬ月を えやはいとほん
(7159) (続後撰) (権中納言公基)
歌 月やどす 袖にもしるや うき人の **面影**そへて うらみわぶとは
(7160) (続後撰) (権中納言師継)
歌 思ひわび うき**面影**や なぐさむと みればかなしき あり明の月
(7172) (夢恋) (龜山殿七百首) (有忠卿)
歌 今も猶 さめてうつつに かなしきは 心にのこる ゆめのおも**かげ**
(7234) (已上同) (有家朝臣)
歌 たびねする 我をばとこの あるじにて 枕にやどる さよの**面影**
(7249) (春恋) (新古) (俊成女)
歌 **面かげ**の かすめる月ぞ やどりける 春やむかしの 袖のなみだに
(7295) (六百番歌合) (定家朝臣)
歌 **面かげ**も わかれにかはる かねの音に ならひかなしき しののめの空
(7298) (女房)
歌 月やそれ ほのみし人の **面かげ**を しのびかへせば ありあけの空
(7321) (新勅) (後京極摂政)
歌 みし人の ねくたれがみの **面かげ**に 涙かきやる さよの手枕
(7352) (恋月) (新千) (前大僧正行意)
歌 **面かげ**も かよへばこそは かよふらめ うき人さそへ 秋のよの月
(7354) (恋月) (新千) (進子内親王家春日)
歌 **面かげ**の うかぶもかなし もろともに ながめしよはの 月ぞとおもへば
(7355) (恋月) (新千) (大江広房)
歌 わすらるる わが**面かげ**は そはずとも なれこしまの 月はよるらん
(7356) (月前恋) (藤葉) (為嗣朝臣)
歌 わすられし 秋の心の つらけれど 月をなごりに したふ**おも影**
(7370) (月前恋) (元亨元十三夜仙洞御会) (光吉)
歌 涙にも くもらでみばや うき人の **面かげ**さそふ 秋のよの月
(7372) (月前恋) (藤葉) (入道覚誉親王)
歌 うき人の **面かげ**ならぬ 月にしも なれていくよか 物おもふらん
(7377) (月前恋) (続千) (平齊時)
歌 わすれずは やへ雲がくれ いる月の へだてしなかに のこる**おも影**
(7380) (月前恋) (続古) (宝治百首) (後鳥羽院下野)
歌 月をだに くもらぬ空に みしものを たが**面影**の かきくもるらん
(7383) (寄月恋) (続拾) (祝部成茂)
歌 いかにせん 月のとがとは 思はねど うき**面影**に おつるなみだを
(7387) (寄月恋) (続千十四) (道義法師)
歌 **面影**も はては涙に くもりけり 月だに人の ちぎりわすれて
(7388) (寄月恋) (為氏)
歌 **おもかげ**の わすれぬばかり かたみにて 待ちしににたる 山のはの月
(7389) (寄月恋) (為道)
歌 おのづから とみにみしよの **おも影**も むかしになりぬ 秋のよの月

(7392) (寄月恋) (已上同) (大蔵卿隆博)
 歌 もろともに 待ちいでしよの **面影**も さらに恋しき 山のはの月
 (7394) (寄月恋) (新拾) (彈正尹邦省親王)
 歌 うき人の **面かげ**そへて たのむよも こぬよもひとり 月をみるかな
 (7402) (寄月恋) (已上同) (西園寺入道)
 歌 待つとせし ならひばかりの 月くれに **面かげ**のこる 山のはのつき
 (7409) (寄月恋) (基良卿)
 歌 さても又 いかなるよはの 月かげに うき**面影**を さそひそめけん
 (7414) (寄月恋) (按察)
 歌 さだかには みもせぬ人の **面影**を なにぞや月に 思ひいづらん
 (7417) (寄月恋) (有教卿)
 歌 みか月の ほのかにみてし **面影**を うはの空にや 恋ひわたるべき
 (7421) (寄月恋) (弘安御百首) (隆弁)
 歌 みしままの その**面影**は 絶えはてて つらさぞのこる 有明の月
 (7424) (寄月恋) (元亨月五十首) (公蔭)
 歌 **面影**も わすれぬ程や 有明の 月にはのこる かたみなりけん
 (7426) (寄秋月恋) (新拾) (権中納言公雄)
 歌 身をさらぬ **面影**ばかり さやかにて 月のためうき 我がなみだかな
 (7438) (寄雲恋) (続後拾) (宝治百首) (後嵯峨院)
 歌 はかなしや 夢の**面かげ** 消えはつる あしたの雲は かたみなれども
 (7640) (寄橋恋) (内大臣)
 歌 うつつとも わかぬそのよの **面影**を 猶恋ひわたる 夢のうきはし
 (7641) (寄橋恋) (伏見院)
 歌 **面影**は みしをかぎりの とだえにて あふよむなしき 夢の浮はし
 (7645) (寄橋恋) (新拾) (源基幸)
 歌 今はただ 思ひたえにし **面かげ**の はかなくかよふ 夢のうきはし
 (7922) (恋部四) (寄鳥恋) (六百番歌合) (隆信朝臣)
 歌 **面かげ**を ほのみしま野に たづぬれば 行へしられぬ 鴉の草ぐき
 (7931) (恋部四) (寄鳥恋) (高倉)
 歌 わが恋は とほ山鳥の ねをたえて なぐさむほどの **面影**もなし
 (8075) (寄玉難恋) (続後拾) (源重泰)
 歌 **面かげ**の かはるよりこそ ますかがみ うつる心の ほどもみえけれ
 (8077) (新千) (関白左大臣)
 歌 わが中は 野もりのかがみ みくさゐて よそながらみし **面影**もなし
 (8078) (新千) (為定)
 歌 涙さへ へだつる中の **面かげ**や とほ山鳥の かがみなるらん
 (8080) (左近中将義一詮)
 歌 **面かげ**の なにのこるらん ますかがみ うつればかはる 人の心に
 (8083) (新拾) (権中納言実直母)
 歌 山鳥の をろのかがみよ (ママ) そながら みし**面影**に ねこそなかるれ
 (8084) (土御門院)
 歌 ますかがみ 恋しき人は 見えなくに わが**おも影**の なにうつらん
 (8088) (寄鏡恋) (新後拾) (為氏)
 歌 ますかがみ なに**面影**の 残るらん つらき心は うつりはてにき
 (8095) (寄鏡恋) (延文御百首) (為明卿)
 歌 はては又 我が**おもかげ**の かはる世に むかふかがみも うらみかれつつ
 (8096) (寄鏡恋) (延文御百首) (為道女)
 歌 身をさらぬ **面かげ**のみや ますかがみ うつりし中の かたみなるらん
 (8097) (寄鏡恋) (延文御百首) (有光卿)
 歌 思ひのみ ますみのかみよ あさごとの 我が**おも影**も おとろへにけり
 (8098) (寄鏡恋) (新後拾) (高階宗顕)
 歌 くもるとも よしや涙の ますかがみ わが**面影**は みてもかひなし
 (8246) (寄絵恋) (六百番歌合) (定家朝臣)
 歌 ぬしやたれ みぬよの色を うつしおく 筆のすさびに かよふ**面影**

(8249) (寄絵恋) (判云、忽にかくいもすこしたしかなるやうにやと聞え侍れど、まことすくなきなど花山の僧正の歌のていにやと思ひたまへられて、右勝と申すべきにや) (白川殿七百首) (忠継朝臣)
 歌 面影を 絵にかきとめて みつれども しらぬは人の ころなりけり
 (8250) (寄絵恋) (龜山殿七百首) (季雄卿)
 歌 わがおもふ 人をかたみに 忍ぶとも うき面影は うつしとどめじ
 (8251) (寄絵恋) (新千) (公雄)
 歌 面影を 絵にかきとめて 身にそへん まことすくなき かたみなりとも
 (8354) (寄灯恋) (弘安御百首) (隆弁)
 歌 さても又 いつかわすれん 面影の ほのかにみえし 窓のともし火
 (8439) (寄夢恋) (新拾) (俊成女)
 歌 おもひねの 夢のうきはし とだえして さむる枕に きゆる面かげ
 (8447) (寄夢恋) (藤葉) (実知朝臣)
 歌 あふとみる 面かげまでは かはらぬを 夢にはのこる うつりがぞなき
 (8461) (寄面影恋) (玉) (院)
 歌 人のみする 面かげならば いかばかり わが身にそふも うれしからまし
 (8462) (寄面影恋) (新千) (陽子内親王)
 歌 面影も わするばかりの とし月を うき身にそへて なげかずもがな
 (8463) (寄面影恋) (新千) (実俊母)
 歌 わすれじよ われだに人の 面影を 身にそへてこそ かたみともせめ
 (8464) (新拾) (寿暁法師)
 歌 いかなれば 立ちもはなれぬ 面かげの 身にそひながら 恋しかるらん
 (9006) (山家送年) (白川殿七百首) (新大納言)
 歌 すむ人の 面かげとめぬ 山のゐに みくさもとらで 年ぞへにける
 (9406) (月前遠情) (新拾) (小侍従)
 歌 いとふらん くめぢの神の けしきまで 面影にたつ よはの月かげ
 (9605) (懐旧) (藤秀賢)
 歌 いにしへは ただとし月を へだてにて 心にかよふ よよのおもかげ
 (9616) (懐旧) (嘉元御百首) (為子)
 歌 しのぶれば 面影にそふ 玉かづら かけてもしらぬ むかしなれども
 (9625) (秋懐旧) (新後撰) (前大納言実冬)
 歌 めぐりあふ こぞのこよひの 月みてや なき面影を 思ひいづらん
 (9628) (月催懐旧) (続千) (藤原忠資朝臣)
 歌 見しことも かはらぬ月の 面影や ただめのまへの むかしなるらん
 (9804) (騎射) (元弘立后屏風) (御製)
 歌 見ずもあらず 見もせぬ世世の 面影を のこしてたえぬ こまの跡かな
 (9838) (已上同) (為氏朝臣)
 歌 光そふ 玉しく庭の ともし火に おもかげみゆる ほしあひのそら
 (9859) (駒牽) (新千) (花園院)
 歌 むかしみし 雲みはとほく へだつれど 面影ちかき もち月の駒
 (9979) (楊貴妃) (風桃李花開日秋露) (大宰大貳高遠)
 歌 春風に ゑみをひらくる 花の色 むかしの人のおもかげぞする
 (9984) (家集寄煙恋) (雅有卿)
 歌 なき人は かくる煙も たてぬべし いけるつらさぞ おもかげもみぬ

● 『畠山匠作亭詩歌』 - 1 (0) 首 (1448年)

(国立歴史民俗博物館蔵本)

(12) (左京大夫教親)
 歌 むすびしも みぬ世の露の 玉かづら おもかげのこる とこなつの花

● 『亜槐集』 - 20 (0) 首 (生没: 1448-1490年)

(雅親) (寛文十一年板本)

(343) (尋花)
 歌 花とみし 雲はおもかげ きえゆけど おもひかへらで 山路をぞとふ
 (351) (終日見花)
 歌 おき出でて むかひし花の あげぼのの おもかげばかり くるる色かな

(361) (嶺花)
 歌 花の色に かすみも幾重 にほふらん おもかげふかき みねの白雲

(363) (夜花)
 歌 おもかげは くらきのきばに みゆれども 花に月まつ はるのうたたね

(364) (夜思花)
 歌 かつちるを おもかげながら 花の陰 ねてかさめてか やまかぜの音

(365) (夜思花)
 歌 ねぬる夜も めはさめにけり 夕ぐれの 花のにほひを おもかげにして

(388) (巖躑躅)
 歌 ふる雪の おもかげにまた かへるまで いはほにもさく 白つつじかな

(859) (寄夢恋)
 歌 つらくのみ みえつる夢の おもかげを 身のちぎりにぞ おもひあはする

(873) (昼恋)
 歌 かづらきの 神やはかくる おもかげに ひるねおどろく 夢のうきはし

(907) (おなじこころを)
 歌 おもひねの 床はなれ行く 夢だにも なほおもかげを かたみとはして

(918) (惜別恋)
 歌 衣衣に つらきなみだよ しばしまて うきおもかげを せめてとどめん

(925) (同じ心を)
 歌 今朝もなほ 言葉のこりて 鳥の跡 おもかげながら かきくらしつつ

(929) (逢不会恋)
 歌 うき事の ためしなりつつ 別れ路の おもかげしのぶ あけぐれの空

(935) (寄鬢恋)
 歌 ねくたれの その玉かづら おもかげを かたみとまでは おもひかけきや

(936) (寄鏡恋)
 歌 はなれじと いひしかがみに 移らねど けにおもかげの 身にやそひけん

(1097) (寄鏡述懐)
 歌 朝ごとの かがみはさても みるがうちに 世のおもかげの かはらずもがな

(1102) (懐旧歌の中に)
 歌 しのぶらん おもふもかなし おもかげは きのふをこそぞ 夢のむかしに

(1104) (常徳院御一廻に、懐旧を)
 歌 うかりしを こぞとやいはん ことし又 めぐる月日に ちかきおもかげ

(1173) (御返事)
 歌 くれたけの よよを重ねて たらちねの つかへし道は ひさかたや 天つ日影の やぶしわかず
 てらす内にも このきみの おほせかしこみ いにしへに たち帰りにし 和歌の浦に 波のしわをも
 たたむより 苔のたもとの おなじくは 岩ほが中に すまばやと あらましなながら としをへて 猶の
 がれえぬ ことの葉の 花をそふとて ここのへの 雲の上には 月をめで ひろき梢の みぎりには
 四本の下に たちならし するべとなりし みちみちの その一かたも まなびかね 身をとにかくに
 なげくまに さても別れの かぎりある 六十三とせの きさらぎや つひに朽ちぬる あをやぎの い
 とよわけには 見えしかど をはりみだれず ひとすぢに となへし御名を ききしとき 三のこころの
 まことにて たのむ人をば すてずてふ ふかきちかひの かはらずは 仏も御手を さづけつつ 花の
 うてなに うつるべき ことも今やと たのもしく おもひかへせど かへりこぬ 道のならひは うつ
 せみの むなしきからに むかひみて 夢もうつつも わかざりし 心まどひに ほどもなく 明行くに
 しの やまかづら たかねをかけて なびきつる 夜半の煙の すゑまでも うらめしかりし 藤ごろも
 立つ事やすく 春くれて 雨もなみだも ふりまさり おもひ晴れせぬ をりふしの うきをとはるる
 たまづさに せめてなぐさの はまちどり あとはかずかず おほけれど ををたちける ふることに
 思ひよそふる なげきさへ いまはかひなく 見るにこそ さらにつらさも ますかがみ 又おもかげの
 うかぶより なみだくははる 水ぐきに おもふばかりの ことをだに かきもながさで やま川の 岩
 間にむせぶ こころをば さながら君も くみてしらなん

(1180) (常徳院かくれ給ひしころ、思ひつづけ侍る)
 歌 はじめなく をはりなき世に めぐりきて おのづからなる ことわりを みしもききしも とどま
 らず 過ぎし中にも たのみつる ひろき樹の かげかくす やみのうつつは たれもみな 夢にまさら
 ぬ おもひにて 心まよひの とにかくに 日数うつりて 卯月てふ 名もうらめしき ここぬかの 朝
 のけぶり たつとみし なみだもきりて まぼろしの 有るかなきかの おもかげは なに中中のこ
 るらん なれにしことを つくづくとおもへばかなし 和歌の浦に 道をまなびて まなづるの あさ
 る渚の しほがひに 玉もかずかず あらはれん 波の打ちぎき 人しれず かけしこころは そでぬる

る やすがとのみぞ なりはつる 哀むかしべ いひおきし まれなるよはひ 七そぢの あまれるまで
に ながらへて をしからぬみの かはりゆく ならひもがなと おもへども 猶おくれゐて なげく比
かな

● 『仙洞歌合 後崇光院 宝徳二年』 - 5 (0) 首 (1450年)
(書陵部蔵 501・545)

(28) (右勝) (法印堯孝)
歌 西河や ふるきみゆきの 面影に 紅葉もうかぶ 水のしら波
(61) (卅一番) (遠嶺雪) (左勝) (勝) (二条)
歌 やよしばし 雲なかくしそ 峰の雪 はれまを富士の 面影にみん
(92) (右) (右衛門督雅親)
歌 猶たどる 面影ながら わすれじな おぼろ月夜の ふかき契は
(101) (五十一番) (左持) (参議政賢)
歌 人しれず あふ夜の夢の 面影に 残る契も 猶やしのぼん
(111) (五十六番) (左持) (勝) (侍従持為)
歌 さもあらぬ 面影のみや 宇治の里 まつらん人に 声はかよへど

● 『為広集I』 - 3 (1) 首 (生没: 1450-1526年)
(東京大学史料編纂所蔵本)

(104) (廿四日) (花盛)
歌 かづらきや 花の盛は あま雲の めに見るも猶 よその面かけ
(170) (寄月恋)
歌 取りかへし 扇ばかりを しるしにて ゆくへぞたどる 月の面影
(171) (寄雲恋)
歌 とにかくに 身はうき雲の よそながら 見し面影の **立ちもはなれず**

● 『為広集III』 - 3 (0) 首 (生没: 1450-1526年)
(書陵部蔵 501・792)

(26) (待恋)
歌 人はさて たのめしままの 有明に 面影ひびく 鐘もうらめし
(71) (去十五夜家会月次に、対月憶昔)
歌 今夜はと みし世の月も 面影の 雲井にかへる すまの浦波
(93) (夕霧)
歌 面影や 夢にもこゆる 波ならん 立つ夕霧の 末の松山

● 『閑塵集』 - 2 (1) 首 (生没: 1452-1510年)
(兼載) (書陵部蔵 155・265)

(7) (百首歌よみしに、春浜霞)
歌 ももへにや かすみもなびく みくまのの 浦のはまゆふ おも影もなし
(245) (別恋)
歌 おも影は **身に立ちそへど** わが心 のこすはみえじ かへるさの空

● 『東野州聞書』 - 2 (0) 首 (1455-1457年)
(日本歌学大系 5)

(20) (東林寺)
歌 面影は そふ心地して ねぬるよの 夢かとぞ思ふ 頼みばかりぞ
(127) (堯孝)
歌 忘れじな 涙ながらの 夜半の月 さだかならぬを おもかげにして

ふしみのみやくにたかしんのう

● 『邦高親王御集』 - 2 首 (0) (伏見宮 邦高親王の生没: 1456 - 1532年)
(続群書類従本)

(5) (山早春)
歌 吉野山 いづくはあれど 春来ては まだき霞も 花の面影
(58) (寄月恋)
歌 いたづらに 待つ夜の空は 更けはてて ねもせぬ月に 人のおもかけ

● 『心敬私語』 — 2 (0) 首 (1463年ごろ)
(天理図書館善本叢書7)

(74)

歌 夏草や 春のおもかげ 秋の花 [夏草や春のおもかげ秋の花]

(91)

歌 おもかげの とほくなるこそ かなしけれ

● 『柏玉集』 — 45 (5) 首 (生没: 1464-1528年)
(後柏原院) (寛文九年板本)

(58) (山霞)

歌 山鳥の はつ尾のかがみ 面影に 春立ちがたと 霞たなびく

(129) (嶺残雪)

歌 桜さく 面かげのこせ 山鳥の 尾上にかすむ 去年の白雪

(175) (朝柳)

歌 つゆけさも あかぬ柳の 朝ねがみ 人にもかるや 春の面かげ

(237) (春曙)

歌 面影の 春も今こそ さだかなる やみのうつつの 明ぼののそら

(264) (見花)

歌 いにし年 わすれぬ花の 面影は 今の色かに とほざかりつつ

(427) (暮春月)

歌 有明の 月みるうちに みる夢は 昔なりけりな 春の面かげ

(441) (余花)

歌 夏木立 わか葉の露に さき出でて 面かげならぬ 花もみえけり

(448) (卯花作垣)

歌 おもかげは 雪になびかぬ 色もなし 卯花垣ね 竹のしたかぜ

(544) (あふぎのかぜ)

歌 玉すだれ 夏ははし居の 面影に 扇の風の 打ちかをりつつ

(684)

歌 立ちかくす 霧のよ所めの 女郎花 ほのかなりしも 花の面影

(687) (薄)

歌 くるるまで 人やはとまる 花薄 むれたつ野べの そでの面かげ

(754) (鹿声増興)

歌 白露の 奥深き野の 鹿の音も たが面影の 花の色色

(755) (鹿声懐興)

歌 しら露の おくふかきのの 鹿の音も たが面影の 花の色色

(872) (寄月述懐)

歌 雲のうへや 昔を今の 面かげは 月ひとりなる 秋もはづかし

(905) (明石浦)

歌 明石がたみ せばやと思ふ 人しもて 面影うかぶ 波の上の月

(935) (惜月)

歌 身にとめて 面影ならん 空や猶 秋は過ぐとも 有明の月

(940) (月恋旧人)

歌 かなしきは 心にうかぶ 面影の 又みぬ人ぞ 月にまぎれぬ

(1028) (九月尽)

歌 とはばその 露とこたへて 別行く 袖にやきえん 秋の面かげ

(1109) (天象)

歌 一とせに みしなにくれの 面かげも うづもれぬべき 雪の上の月

(1211) (連日鷹狩)

歌 心ひく 道はゆづるの たえじとや けふのかりばを 明日の面かげ

(1256) (柏玉和歌集第七) (恋歌上) (寄月恋永正中一)

歌 み初めつる 思ひよいかに 三日月の 面影そはむ くれごとのそら

(1263) (初恋)

歌 物ぞ思ふ 月のはつよの はつかなる 面影したふ 空のはたてに

(1308) (聞音恋)

歌 わりなしや 月なき空の こたへのみ こすの隙もる 面影にみて

- (1313) (寄海恋)
歌 いづくとか いなみの海の 波の間に 千重にかくるる 面かげにみん
- (1316) (寄月恋)
歌 みても猶 面影のみの 夕月よ おぼつかなきや 思ひなるらん
- (1341) (寄月恋)
歌 かたらはぬ 月の面影 いかさまに 枕ならべて 侘びつつもねん
- (1366) (尋恋)
歌 又きても 逢せはなしや 面影も 猶みがくれの 中がはの水
- (1395) (寄秋枕恋)
歌 待ちわびて 月にぞかはす さよ枕 面かげのみの そふをたのみに
- (1408) (偽恋)
歌 面かげの 月やはとはぬ まてといひて こぬ人しもぞ 偽もなき
- (1415) (逢恋)
歌 から衣 かへさでこゆる 面かげは 誰が夢ならし 我が身ならめや
- (1424) (逢夢恋)
歌 又もみん 面かげのこせ ふかきよの くらぶの山の 夢のやどりに
- (1449) (おもかげ)
歌 今朝は猶 面影にそふ 恋しきや うつつながらの 夢をみつらん
- (1533) (旅宿逢恋)
歌 思はずや 古郷人の 面かげに まぎるる夢 はみてもいかがと
- (1545) (難忘恋)
歌 面かげも なげきもわきて いつの時 いつの折とか 人にしのばん
- (1563) (寄月恨恋)
歌 なぐさめど そふ面影の 月をだに 又みもはてず うき涙かな
- (1584) (曙雲)
歌 面影に 花もわかれず うば玉の よは白雲の あげぼのの山
- (1780) (旅宿)
歌 恋にふる 故郷人の 面かげを 旅ねの夢に やつしてやみん
- (1850) (寄世懐旧)
歌 我のみや その世ばかりの 面影も ふるきにしたふ 百敷の内
- (1927) (卯花作牆)
歌 面かげは 雪になびかぬ いろもなし うの花がきね 竹のしたかぜ
- (2087) (難忘恋)
歌 面影も なげきもわきて いつの時 いつのをりとか 人に忍ばん
- (2141) (薄)
歌 くるるまで 人やとはまる 花薄 むれたつ^{たつ}のべの 袖のおもかげ
- (2165) (恋) (初恋)
歌 物ぞ思ふ 月のはつよの はつかなる 面かげしたふ 空のはたてに
- (2244) (女郎花)
歌 たちかくす^{たかくす} 霧のよそめの をみなへし ほのかなりしも 花の面かげ
- (2259) (九月尽)
歌 とはばその 露とこたへて わかれ行く 袖にやきえん 秋の面かげ
- (2313) (朝柳)
歌 露けさも あかぬ柳の 朝ね髪 人にもがなや 春のおもかげ

● 『南都百首』 - 1 (1) 首 (1473年)
(兼良) (内閣文庫蔵本)

- (48) (権)
歌 朝貌の 花にもきりの はれまより みそめのさきの 面影ぞたつ^{たつ}

● 『武州江戸歌合 文明六年』 - 1 (1) 首 (1474年)
(内閣文庫蔵本)

- (30) (右) (資雄)
歌 こぬ秋に 露もこぼれて ささのはの み山の嵐 面影にたつ^{たつ}

● 『筑紫道記』 - 2 (1) 首 (1480年)
(宗祇旅の記私注)

- (15) (作者)
歌 うら風の 吹上の秋の おもかげも 波にたちそふ 池のしら菊
(23) (作者)
歌 はかなしや 袖より外に みし月を おもかげならで いつかやどさん

● 『将軍家歌合 文明十四年六月』 - 4 (0) 首 (1482年)
(国立国会図書館蔵本)

- (83) (まき檜原すぎたつ山のはをしげみまだ影みえずくるる夜の月) (四十二番)
(左) (右衛門督為広)
歌 まさかきに かけしかがみの おもかげも 月にぞのこる あまのかぐやま
(93) (いたづらにたれかいをねんすむ月に松かぜすさびくるる秋の夜) (四十七番)
(左) (前関白)
歌 なれきつる むかしの秋の おもかげも うかぶを月の かがみとやみむ
(94) (右) (左大将冬良)
歌 たがためぞ わりしかがみの おもかげを 月にもうつす あきの夜の空
(154) (右) (関白)
次 歌 よひのまに きてだにかへれ かた時も みてなぐさまむ きみが**おも影**

● 『常縁集』 - 9 (2) 首 (1484年)
(書陵部蔵 152・215)

- (44) (故郷春月)
歌 月ならで むかしの春の おもかげは ありとしもなき 志賀のふるさと
(55) (夏) (余花)
歌 春くれし おもかげなれや 夏山の あを葉にのこる はなのひとと
(160) (夕紅葉)
歌 くるる日の おもかげながら たつたやま みねの紅葉の いろに見えつつ
(247) (田雪)
歌 あきかぜに たちしほなみの おもかげは さすがにのこる 小田のしらゆき
(277) (夜歳暮)
歌 ひととせは ひとよばかりの たまくらに のこれるゆめの おもかげぞみし
(307) (別恋)
歌 わかれぢの おもかげながら ありあけの 月はつれなく などのこるらむ
(338) (湖水眺望)
歌 行く舟に おもかげばかり からさきの おきつ夕べに のこる松かぜ
(383) (旅泊重夜)
歌 かぢまくら うきねのとこの かずそひて おもかげとほき ふるさとのそら
(389) (題不知)
歌 まつしまや をじまのとまや くれはてて なほ**おもかげ**に うらかぜぞふく

● 『歌合 文明十六年十二月』 - 5 (1) 首 (1484年)
(三康図書館蔵本)

- (98) (右) (右衛門督為広)
歌 すみの江や 神世の秋の おも影を 波にうつして 月すみ渡る
(143) (第二第五句かけあひ侍らぬにや初五 文字いかにぞやきこえ侍れど、大方はことなる無難敷 左右方人申すところ相当せるにや、しからば持に侍るべし七十二番) (左)
(沙弥宗伊)
歌 さ夜中に おし明けぬらし 槇の戸を たててぬれども おも影のくる
(148) (右) (前大僧正増運)
歌 あさなげに わが恋ひをれば つれなさの つらきものから おも影にみゆ
(158) (右勝) (権大納言高濑)
歌 しきたへの 枕のあたり わすれかね わかれしいもが おも影にたつ
(160) (右) (左衛門大尉藤原政行)
歌 烏羽玉の 夜の明けゆけば おき出でし いもが**おも影** 忘れかねつも

● 『称名院集』 - 13 (3) 首 (生没：1487-1563年)

(公条) (祐徳中川文庫蔵本)

- (257) (暮春)
歌 今はただ 花にまがへし 面影も 猶立ちとまれ 春のしら雲
(555) (荻驚夢) (永正十二三十首)
歌 はかなしや 荻のうへ吹く 秋の風 露にあらそふ 夢のおもかげ
(938) (遠山雪) (百)
歌 花にこそ まづはとふべき みよしのの 雪よりちかき はるの面影
(1043) (見恋) (御着)
歌 忘ればや 霞にこめて 山ざくら たぐへむほどの おもかげもなし
(1045) (見恋) (百)
歌 ほのかにも かたるばかりの 面影に 夢てふものは 枕にぞみし
(1047) (僅見恋) (多武峰法楽)
歌 窓のうちの ゆかしきのみのおもひにも 袖はくるしき けふの面影
(1122) (見増恋) (三十首)
歌 おもかげを 見しはしばしの なぐさみと おもふはつひの 思ひなりけり
(1165) (絶恋) (御着)
歌 おもかげも わするばかりの たえ間には たどりやせまし 夢のうき橋
(1176) (昼恋)
歌 あぢきなく くらしかねては したひけり よるは夢にも 見えし面かげ
(1185) (留形見恋) (百)
歌 かたみぞと みるもはかなし ますかがみ うつしもとめぬ 人の面影
(1236) (寄鏡恋)
歌 立ちされば こと面影の ます鏡 むかふがうちを たのむはかなさ
(1274) (名所山)
歌 雲かかる 山はかづら木 玉かづら おもかげにたつ 道のさがしき
(1505) (影夢庵追善)
歌 たぐひなき 心をしれば 面影の うつすをみても 涙おちけり

● 『拾塵集』 - 14 (1) 首 (1491-1492年)

(政弘) (祐徳中川文庫蔵本)

- (58) (春曙)
歌 見てしかな 見ぬ面影の 玉津島 きくにもうかぶ 春の明ぼの
(87) (花面影)
歌 わすられぬ 去年のさかりの 面かげを ならべて二木 向ふ花かな
(121) (苗代)
歌 せき入るる 苗代水に うかぶなり 稲葉の風の 秋の面かげ
(143) (新樹)
歌 夏木立 わすれんとすれど 見し花の 面かげ散す 山風もなし
(435) (寒草)
歌 いろもなき 庭の籬の 霜の下に 猶のこりたる 秋の面影
(528) (羈中の歌に)
歌 ゆきかへる 宮この人の 面かげは 猶おとろへぬ 草枕かな
(580) (馴不逢恋)
歌 まれに見し 面かげばかり 向ふさへ くるしきものを 人ぞつれなき
(618) (契明日恋)
歌 かねてより 面影にのみ 立まちの 月にたのむる いざよひの空
(719) (寄面影恋)
歌 逢ふと見て わかれはしらぬ 夢の跡に もしやうつつと たどる面影
(720) (寄面影恋)
歌 いたづらに そふはかひなし おなじくは ことばの葉かはす 面かげもがな
(726) (疑恋)
歌 おもかげに 跡なき雲を のこしてや 人のことばの 花にまがへん
(728) (寄月恋)
歌 思ひわび よそへて見れば 秋の夜の 月の名をしき 人の面かげ

(731) (恨恋)

歌 うらみわび 我さへまたぬ 夕暮に 猶面かげの いかでとふらん

(1051) (亡父十三廻にあたりける日よみ侍りける)

歌 うつつとは まだおぼえずよ 十とせあまり 三とせの夢の 秋の面影

● 『和歌深秘抄』 - 1 (0) 首 (1493年)

(続群書類従本)

(9)

歌 よしの山 今は桜の おもかげに 見しよのこすや 跡のしら雲

しちじゅういちばんしよくにんうたあわせ

● 『七十一番職人歌合』 - 2 (0) 首 (1500年ごろ)

(尊経閣文庫蔵本)

(182) (四十六番) (暮露の心、月いかばかりの法の光をかひろめ侍るべき、信仰もなく覚ゆ、右、住の江の月に対して、名たかき楓橋のわたりをも、わが故郷といひ出でたる所、他人のおよぼざる風体、彼仲麿が三笠の山の月にもすみまさりてこそ侍らめ)

歌 すみよしの いら江の月や ふるさとの 姑蘇城外の あきのおも影

(260) (左右ともに、わが宗旨をあげたり、法の勝劣を論ずべからずこれ又ともに、観音勢至を使とし、十羅刹女を思ひかけたり、且はおそれなきにあらず、光源氏の物語にも、法けだちくすしからむ、と申すめり、左右ともに、しかるべからず)

歌 一目見て わすられざりし おも影は 十羅せち女も かくやとぞおもふ

● 『雲玉集』 - 5 (1) 首 (1510年頃)

(剛窓) (神宮文庫蔵本)

(53) (花盛といふところを) (為家)

歌 よしさらば ちるまでは見じ 山桜 花のさかりを 面影にして

(107) (点のうちなり) (ひととせの御歌合に、臨水惜花)

歌 うつしゑに みし面影の いかなれや くもるもつらき 花のかがみを

(362) (此歌、褒美申し殊に判ぜしを、後人の申す事に松風かならず明がたおぼつかなしといひし、かかる分別もなき人人歌よみたてし出題などせられけるや、感心と存ずるは、二星適逢未叙別緒依依之恨、五夜将曙頻驚涼風颯颯之声、涼風はずしき風なれどきぬぎぬにはおどろくこそ一しほ身にしみて存ずれ、風は夕、暁、月の出入、時つ風とてをりに随ひてふく、五句ととのつて心ふかき歌をいかで見損じ申すべき、御歌とは後こそ存ずれ、此七夕の序は、篁が甥小野美材がかく、朗詠は諸人耳にふれて真実をしる人なし、別緒はわかれのをなり、別のをとは何事ぞや、星は年一たびあふはたまたまなり、はやくかへるはうらみなれど、明年又あはんとちぎるが別をつなぐをなり、此たのみばかりに恨をのべずとなり、依依はよりよりとてその時時なり、只かなしきは五更の天に風さそひてきつさつとあけ方になるに驚くと、此詞を吟ずるたびに七夕にかはりて別涙にしづむなれども、人は肝心ともおもはぬやらん、札記に、雖有嘉肴弗食則不知其甘、雖有至道弗学則不知其善矣) (或所にて五十首、追日増恋を) (納叟)

歌 いかにぞや ほのみる月の 面影も もちより後の いざよひの空

(396) (ある所にて、月前恋をよみ申せし) (納叟)

歌 みしは猶 おなじ世ながら たきものの 煙のうちの 面影にして

(435) (ふるき歌に、あまた見しとよのあかりのもろ人のきみしもものをおもはするかな、とあり)

(枯野)

歌 草も木も かれのの末の 一松 なほその人の おもかげぞたつ

● 『桂林集』 - 2 (0) 首 (生没：1520-1597年)

(直朝) (島原松平文庫蔵本)

(140)

歌 立ちいでて 見おくる空に ありあけの 月もきえゆく 人のおもかげ

(141) (後朝恋)

歌 とともにみし その面影は のこりけり わすれがた見の 今朝の月影

● 『春霞集』 - 2 (1) 首 (1571年頃)

(元就) (内閣文庫蔵本)

(24) (霞のにほひ花に映じけむ、みどころあるさまとぞ申すべき)

歌 面影に たたずはなになに したはまし 花ちる跡の 嶺のしら雲

(36) (年年歳歳の花は、松の不変にもおとらざるべし) (満願寺にて椿を見侍りて)
歌 面影は 深山木ながら 花ぞとも けさしら露の 玉椿かな

● 『為広集Ⅱ』 - 5 (0) 首 (生没：1450-1526年)
(書陵部蔵 501・827)

(20) (思)
歌 面影の なにそは跡に のこるらん さりとて夢の 覚むるものゆゑ
(33) (初花)
歌 面影に 野山の桜 なれてけり 花こそけふを はじめなれども
(58) (恋鏡)
歌 恋はさて たもとのみかは 朝ごとに むかふ鏡も なみの面影
(74) (廿六日、大樹当座、春志賀花園)
歌 咲くからに 浦わの波の 面影も 昔にかへる しがの花ぞの
(91) (仲秋)
歌 今夜はと すまの浦わに 見し月の 面影のみや 都なりけん

江戸時代：(1603年-1868年)

(およそ260年間)

「面影」が出ている和歌： 616 首
「面影」+「立つ」が出ている和歌： 80 首
頻出率： 12.9%

● 『伊勢物語古注釈書引用和歌』 - 2 (0) 首 (この2首の歌は江戸初期成立)
(古注釈書9種)

(99) (第五十三段)
歌 衣衣に なる在明の 別れには 面影ならぬ 草も葉もなし
(102) (第六十五段)
歌 いかにせん 恋せし神の みそぎとて そのおもかげも 忘れはてなば

● 『雪玉集』 - 119 (14) 首 (1510年~江戸初期成立)
(実隆)(寛文十年板本)

(34) (山早春)
歌 おもかげを そらにかすめて あしがきの 花にまぢかき みよしのの山
(76) (野外朝霞)
歌 朝まだき なぎさの花の 面影も たつやかたのの 春の霞に
(184) (梅似雪)
歌 春きても 雪にきほひて 咲きそめし 面影さらず 匂ふ花かな
(188) (夜梅)(于文明十三)
歌 梅花や みにまぎれぬ 匂ひより みえこぬ色も おもかげぞたつ
(251) (池柳)(永正四十御月次)
歌 たが春の 面影ならし 青柳の みどりをうつす 池の鏡は
(348) (帰雁幽)(文亀二二御月次)
歌 おも影は 心あてなる 雲路にも かすみはてたる かりのこゑかな
(377) (永正九七御月次)
歌 いそぐより 手にとるばかり にほふかな 枝にこもれる 花のおも影
(394) (初花)
歌 みるたびに ただ初花の 色もなほ まちえたるけふを 面影にせん
(403) (見花恋友)(永正十二閏二御月次)
歌 花やしる 此世かのよと みし人の おほくの春を さそふ面かげ
(422) (遠花)
歌 あし垣の よしのの花に 分けいれば 面影のみの 雲ぞまぢかき
(426) (曙花)(続撰吟集三)
歌 おもひいでば 花なき里に ながむとも 此面かげや 春のあけぼの

- (490) (花似雲)
歌 思ふには それとわかでや 嶺の雲 花のときはの **面かげ**にせん
- (520) (花面影) (文亀>>内裏花見>>)
歌 春のはな ちるをなげきし **面影**の 又咲きはかり 千代もへぬべし
- (599) (天文二三廿五月次御会)
歌 **面かげ**を 花にしべば とりも今 入りぬる雲の 行へかなしも
- (619) (春葛木山)
歌 はるきては それならぬ雲も 花かづら 葛木山の **おもかげにたつ**
- (676) (夕つかた都にまかりいたりしに、雲井のはなの梢はるかに見わたされ侍りしに)
歌 昨日みし ふるき都の **おもかげ**も けふ九重の 花のゆふばえ
- (679) (遠帰雁、やすらへやまだ夜はふかきの下)
歌 あまつかり かへりみもせず 行く跡の かくるるまでに したふ**おも影**
- (692) (新樹) (永正十二四御月次)
歌 日をへつつ しげる梢の みどりにも 猶**たちそふや** 花の**面かげ**
- (1092) (遠雁)
歌 かへりゆく つばめやそれと まがふまで 雲ゐのかりの きゆる**面かげ**
- (1221) (山月入簾) (永正二八御月次)
歌 玉すだれ まきあげてみし みねの雪の **おもかげ**ながら むかふ月かな
- (1336) (月似扇)
歌 **面かげ**は 秋の扇の それながら さもおきがたき 袖の月かな
- (1347) (残月越関)
歌 **おもかげ**に そはざらめやは 今朝わかれ あす相坂の 月とみるとも
- (1378) (対月恋旧人)
歌 いくめぐり 月にながめて 忍ぶらん あらましかばの 世世の**面かげ**
- (1466) (紅葉如醉) (永正五九御月次)
歌 あはれいかに くれなゐながら 春ならぬ 秋の木のはは はなの**面かげ**
- (1515) (浸天秋水白茫茫) (永正元八御月次)
歌 いつとなき ふじのみ雪の **面影**も ただ秋風の たごのうらなみ
- (1845) (三首懐紙永正十一七御月次)
歌 忘ればや ほのかなりしも **面影**は さだかにそふを うきおもひかな
- (1848) (寄月見恋)
歌 村雲の 俄にきえて 行く月の みずとやいはむ あかぬ**面かげ**
- (2002) (寄月恋)
歌 ながめじな 忘れむと思ふ **面かげ**を かならず月の さそひもぞくる
- (2012) (寄月見恋)
歌 村雲の にはかにきえて ゆく月の みずとやいはむ あかぬ**面かげ**
- (2043) (寄山祈恋)
歌 たをやめの かづらき山の **おもかげ**に 祈るちぎりは みねのしら雲
- (2119) (寄菴恋) (永正六六御月次)
歌 あふとみし 夢のさ菴 のこる夜に 又さばかりの **おもかげ**もがな
- (2219) (残月越関)
歌 **おもかげ**に みやこの春の かすみもや 有明の月の しら川のせき
- (2465) (対月懐旧) (永正四九四御月次)
歌 月よなど 世世の**おもかげ** さそひこと ちぎらぬ空の かきくらすらん
- (2466) (対月懐旧) (永正四九四御月次)
歌 思ひ出づる をりふしごとの **面かげ**を なにのうへにも 月は残して
- (2473) (往事眇茫)
歌 きえねただ みし世ははても しら雲の むなしき空に うかぶ**面かげ**
- (2475) (文亀元年九月廿一日、東山の御寺にまゐりて、ありし山作所の跡ををがみ奉るとて)
歌 **面影**は ここもかしこも **たちそへど** 煙の跡の 野べぞ身にしむ
- (2630) (統秋身まかりにける時、いたみの十首内) (統撰六)
歌 めのまへに きえぬ**おもかげ** ものいはば たえず昔の ことやかはさん
- (2638) (異本残月越関、おもかげにみやこの春の下)
歌 **おもかげ**に そはざらめやは 今朝わかれ あすあふさかの 月とみるとも
- (2648) (けふをその年の三とせもの下)
歌 心のみ 雪の明ぼの 月の暮 ただつくづくと むかふ**おもかげ**

(2863) (湖帰雁)
 歌 ひとり行く 雲井のかりの **面影**も かすかに残る 志賀のはま松
 (2911) (見恋)
 歌 しられじな あやなくけふの 思ひより **面かげ**にのみ ながめわぶとも
 (2923) (寄里恋)
 歌 すむさとは 遠つあすかの 夢にても みえよやくべき 宵の**面かげ**
 (3022) (寄雲見恋)
 歌 風のまへに うきたつ雲の 行ずりに よしやそれとも あらぬ**面かげ**
 (3106) (山冷有微雪)
 歌 **面かげ**や 身にしむものの さむからぬ 今朝見えそむる 峰の白雪
 (3115) (無夕不思量)
 歌 恋しさは 折ふしごとの **面かげ**も さらにゆふべの ものとなりぬる
 (3145) (往事思如昨)
 歌 ますかがみ うつりかはれる 年月も きのふけふかの 世世の**面かげ**
 (3189) (羈中雪)
 歌 旅衣 よぶかき雪の やど出でて みやこの野べに かへる**面かげ**
 (3200) (寄門恋)
 歌 **おも影**の おくるもあやし 門さして なしとこたふる 宿のかへるさ
 (3277) (寢覚時鳥)
 歌 時鳥 いくよなよなの ねざめにも この一こゑを **おもかげ**にせん
 (3355) (一夜百首) (春二十首永正六十一二) (子日松)
 歌 舟岡の むかしのねのび けふも猶 **面かげ**うかぶ 松のむらだち
 (3524) (伝聞恋)
 歌 よの中は ことのみぞよき さしも草 みぬ**面影**は したはずもがな
 (3624) (人伝恋)
 歌 越えぬまは くるしきものを よしの山 いかにかにほふ はなの**おもかげ**
 (3714) (雪)
 歌 さきにほふ 花ともいはじ 待ちえたる 雪は木ごとの 今朝の**面かげ**
 (3863) (梅薫夜風)
 歌 **おもかげ**も 匂ひにそひて かたしきの 袖に夜ぶかき 梅のしたかぜ
 (3868) (暁庭落花)
 歌 よこ雲の みねにぞ残る こずゑより わかる庭の 花の**おもかげ**
 (3947) (月羈中友)
 歌 さそひつる ふる里人の **面かげ**に 月こそ旅の 露をそへけれ
 (3965) (待花)
 歌 するやいかに **おもかげ**にして 春のはな 枝の雪より いそぎこしみを
 (4027) (恋二十五首) (寄名所恋)
 歌 あだ波の へだてし後は **面かげ**に 残るばかりの うらのはつしま
 (4030) (雑二十五首) (旅) (春)
 歌 春がすみ **立ちいでしあとの 面かげ**は 野にも山にも へだてやはする
 (4062) (百首和歌) (春二十首) (堀川院初百首之題) (五夜間詠之) (立春) (柳)
 歌 青柳の しだりそめたる あさ露や たがねくたれの 春の**面かげ**
 (4122) (炉火)
 歌 ながきよを ひとり有る身は うづみ火の もとの友のみ **おもかげ**にみゆ
 (4185) (夜)
 歌 うたふよの 雲井の庭火 ほのぼのと 明けし岩戸を 残す**面かげ**
 (4204) (池)
 歌 玉もにも 月ぞかくれぬ さる沢の 昔かなしき いけの**おもかげ**
 (4280) (鵜川)
 歌 **面かげ**に 網代のかがり うかひきて 八十うち川に うぶねさすなり
 (4481) (花盛)
 歌 けふをこそ のちも忍ばむ **面かげ**に 残すばかりの 花の色かに
 (4532) (女郎花)
 歌 **立ちかくす** きりのよそめの 女郎花 ほのかなりしも 花の**面かげ**
 (4543) (山月)
 歌 すみのぼる 月のふもとの 山のはや ちりのはじめの あきの**面かげ**

(4562) (九月尽)
 歌 とはばその 露とこたへて わかれ行く 袖にやきえん 秋の**面かげ**

(4606) (逢恋)
 歌 から衣 かへさでみゆる **おもかげ**は たが夢ならじ わが身ならめや

(4620) (偽恋)
 歌 **おもかげ**の 月やはとはぬ まてといひて こぬ人しもぞ 偽りもなき

(4670) (朝柳)
 歌 露けさも あかぬ柳の 朝ねがみ 人にもがなや 春の**おもかげ**

(4779) (寄杜恋)
 歌 まきはしら **面かげ**かなし 思ひ出づる ときはのもりの くちのこるみは

(4836) (寄世懐旧)
 歌 われのみや その世ばかりの **面かげ**に ふるきにしたふ 百しきのうち

(4868) (柳)
 歌 朽ちのこる 柳も猶や 玉かづら **面かげ**しのぶ 世世のはる風

(4905) (橘)
 歌 むかしとて 跡なき世世の **面かげ**や はな立花の 雪にのこれる

(4984) (庭雪)
 歌 四方の山の かがみもあれど めにちかき **面かげ**あかぬ 庭の雪かな

(4995) (初恋)
 歌 うしとだに おもひもわけず 昨日けふ 誰が**おもかげ**の 身にはそふらん

(5062) (葛木山)
 歌 **面かげ**に 明行く雲の かづらきや 霞のまゆと まがふころかな

(5171) (鏡山)
 歌 またるるは 春の**面かげ** かがみ山 老をばよそに かすみへだてよ

(5264) (新樹)
 歌 うすくこき 緑にもなほ **立ちそふ**や おそくとかりし 花の**面影**

(5345) (寄枕恋)
 歌 ことのはも かはすばかりの **面かげ**を ぬるよなよなの 手枕にして

(5542) (幻)
 歌 明ぐれの 夢にまぎれぬ **面かげ**を たまゆらかへす まぼろしもがな

(5584) (彼御寺にありしうち、時々おもひつづけし事どもを御影のうへの御製の卍一字をかしらに
 すゑてかきつづけてなむ侍りし)
 歌 うつしもて 鏡をみても そのをりの さながらいまも むかふ**面かげ**

(5595)
 歌 にはのをしへ その折折の **面かげ**に **立ちてみみてみ** さぞしたふらん

(5613)
 歌 匂ひあり とみしや一とせ 花の本に **立ちまじはりし** 春の**面かげ**

(5649) (恋鬘)
 歌 身にそふも 人やは残す 玉かづら あらぬすぢなる 後の**おもかげ**

(5691) (花雲)
 歌 **面かげ**の そをだに花の かなしきは 風にまかする みねのしら雲

(5861) (閑中灯)
 歌 思ひいづる 心の友は ともしびの かべにいく度 むかふ**面かげ**

(5968) (逢増恋) (尊海)
 歌 **面かげ**も かはり行くまで ますかがみ 思へばなにに あひみ初めけむ

(6010) (春虫)
 歌 かはづのみ かはらぬこゑか 故郷の 井でのその世は **面影**もなし

(6143) (同両卿明月論之詞云) (巫台府実隆卿) (やまともろこし月をもてあそぶ事おほむね
 四時にすべてねんごろなる中に就きて三秋をすぐれたりとす、ことにその名をえたるはこれ葉月の中の五日に過ぎざるべし、しかれども宿霧つねに望をへだて狂雲ややもすれば影をねたむ、いにしへより今にいたれるうらみなり、あらかじめ明夜の陰晴しりがたきがため金樽に竹の葉のあらたなる風を賞し、素琴に菅のねのながき夜ををしむはけだし十四夜の事ならし、誠に今宵の清光すでに明日の嘉名のをかうばへり、ひとり感慨の思ひにたへず、のこりの灯を螢壁の底にそむけみじかき筆を免輪のもとにはしらしめてたまたま十五首の和歌をつづれり、いはゆる浅香やまのふかきさかあささきイカをしづみ吟じ、難波津のあしよしを思ひめぐらせるにもあらず、ただ時にあたれる思ひをのべ心ざしのゆく所にまかするのみなりといふことしかり)

歌 手をふれし 物ともかけて 思ひはてじ 見し**面影**は 月のかつらを
 (6260) (旅宿夢)
 歌 **面影**は ふる郷ながら 行きやらぬ 夢路露けき 草まくらかな
 (6381) (右和歌七篇唐律三絶、卒答佳製以呈卑懐云) (堯空) (続撰吟集一云)
 (入道前のおほきおとど二七日念仏のうちにおもひつづけ侍りし) (堯空)
 歌 むそぢあまり いく春秋の 花になれ 月にむかひし 人の**おもかげ**
 (6396) (文亀元年九月廿八日) (後土御門院御一回御製、弥陀の名号をかみにおきて)
 歌 あけぬよの 夢の中より めぐりきぬ 去年みし月の 今の**面かげ**
 (6542) (恋廿首) (寄月恋) (実隆)
 歌 **おもかげ**の 今も雲とや 成りにけむ 見しよへだてて 月ぞ時雨るる
 (6550) (寄原恋) (実隆)
 歌 かりねせし まののかや原 分出でて 見し**面影**に まよふゆめかな
 (6559) (寄枕恋) (基綱)
 歌 ことのはも かはすばかりの **おもかげ**を ぬるよなよなの 手枕にして
 (6573) (うちまかせて我国と可詠事如何其沙汰之様候哉) (山霞)
 歌 **おもかげ**に 秋みし霧や **立田山** かすみかかれる みねの松ばら
 (6581) (帰雁幽)
 歌 天つかり わすれがたみの **おもかげ**も そをだに後と 霞みてぞ行く
 (6648) (見恋)
 歌 あらかりし 野分の風や さそひけん 身にしむ秋の 花の**おもかげ**
 (6668) (思往事)
 歌 たらちねの おやのむかしの **おも影**は いぶせくも有るか 遠ざかりつつ
 (6933) (遠山雪)
 歌 花にこそ まづはとふべき みよしのの 雪よりちかき はるの**面かげ**
 (6952) (留形見恋)
 歌 かたみぞと みるもはかなし ます鏡 うつしもとめぬ 人の**おもかげ**
 (7169) (雪玉集卷第十七) (百首住吉法楽) (春二十首)
 歌 さほ姫の **おもかげ**いづく よもの空 きえあへぬ雪の 山はかがみに
 (7203) (秋二十首)
 歌 いこま山 雲みにみえし **おもかげ**も きりのそこなる なみのうへかな
 (7264) (李夫人)
 歌 物いはぬ なげきをさらに たきそへて 煙のうちの **面かげ**もうし
 (7403) (萩)
 歌 **おもかげ**も 身にしむ色や 萩が花 ちるらむころの をのの秋かぜ
 (7463) (夢)
 歌 **おもかげ**の これにたりとて もとめこし 夢をわが君の 代にもみせばや
 (7519) (見恋)
 歌 ほのかなる **面かげ**ながら みにしめて おもひあはする 夢をだにみん
 (7665) (僅見恋)
 歌 はかなくも 夢にまさらぬ **おもかげ**の いづくのなみの みにとまるらん
 (7709) (春雪散風)
 歌 散りまがふ 花の**おもかげ** **さき立ちて** 雪にもつらき はるのやまかぜ
 (7894) (枯野)
 歌 **おもかげ**を ちくさにしのぶ 袖のうへは 枯のの霜や 秋にまさらむ
 (7950) (初恋)
 歌 **思ひたつ** 心のうちに たぐひきて なれしににたる 人の**おもかげ**
 (8002) (暁恋)
 歌 うらみはて おもひたえても かなしきは ねざめねざめに のこる**面かげ**
 (8128) (蛭(秋)源氏名)
 歌 秋風に ほのぼの見えて なく声も きこえぬむしの よるの**おもかげ**
 (8148) (大永廿一、源国定許へ妻母の訪より)
 歌 なれなれて 花の**おもかげ** かたしきて 露にやあかす はるのよの夢
 (8155)
 歌 **おも影**は ここもかしこも **立ちそひて** けぶりのあとの 野べぞみにしむ
 (8156) (常徳院殿御十七年時道堅法師所へ被遣之) (永正二三廿六)
 歌 **面かげ**は ありしなごらるを うつしても こころ言葉に なにをとめまし

(8159) (贈答) (道堅法師)

歌 したふとも 心こと葉の たぐひなき 色こそ花に ありしおもかげ

● 『衆妙集』 — 8 (1) 首 ^{ほそかわゆうさい} (細川幽齋の生没：1534—1610年、没後編纂)
(幽齋) (東京大学国文学研究室蔵本)

(155) (正月七日会始に、山朝霞)

歌 このねぬる 朝けの風も 山姫の 面影そへて たつ霞かな

(160) (文禄三年正月廿一日月次会初に、霞添山気色)

歌 山姫の かざしの桜 まだきより 面影にほふ 朝がすみかな

(276) (花面影)

歌 月のうちの かつらもはなや 咲きぬらん おもかげにほふ 天つ春かぜ

(277) (花面影)

歌 なれなれし 面影とめて わがみこそ 咲きちる花の かたみなりけれ

(396) (八月十五日月次会当座に、寄月哀傷)

歌 なき人の 面影そへて 月のかほ そぞろに寒き 秋の風かな

(449) (松雪)

歌 うつすとも えやは及ばむ 雪の松 白きを後の 面影にせば

(491) (逢後増恋)

歌 あひみしは 夢ばかりなる おもかげを あはれうつつに こふるころかな

(801) (作者)

歌 あげぼのや 風のうへなる うす霧に かすみの山の おもかげぞたつ

● 『通勝集』 — 9 (3) 首 (生没：1556-1610年)
(東洋文庫蔵本)

(2) (通勝集 [39通勝] (冬夜詠百首和歌一夜百首) (春廿首)

(継春於丹州被改通勝為継春) (山霞)

歌 雲ならぬ 霞も花の 面影に 匂ふばかりの みよしのの山

(167) (雪中眺望十四日)

歌 時しらぬ おもかげなれや 朝夕に 都のふじの 雪の明ぼの

(174) (纒見恋廿一日)

歌 影うすき ほたるにまがふ おもかげも もえし思ひの たねにやはあらぬ

(265) (寄風恋 物語ノ心也)

歌 面かげは 立ちもはなれず 身にしむや 野分の風の 名残なるらん

(278) (寄鏡恋)

歌 つれなさの 人に思ひぞ ますかがみ 我がおもかげの うきにつけても

(537) (竜田山)

歌 秋といへば まづおも影ぞ たつた山 紅葉の比は 遠きさかりも

(647) (待月)

歌 おもかげは まつ山のはに 先だちて いづる間おそき 秋のよの月

(684) (寄鏡恋)

歌 打ちとけて いつかは我と ともかがみ うき面かげは 人にはつれど

(1186) (あまぎる雪の) (継春)

歌 けさのまの あまぎる雪の 面影も 夕日にはるる 遠の山のは

● 『惺窩集』 — 5 (0) 首 ^{せいかしゅう} (藤原の生没：1561 - 1619年) (1627年の序)
(惺窩文集所収本)

(18) (氣象巖)

歌 心あてに いはほはたかく 見えななん むかしの人を おもかげにして

(35) (いにし夏の夜、いたくふくるまで宗隆などともなひ、月みることのありし、屋梁の残月に顔色をうたがひし人もさる事やありけむ)

歌 ともなひし おもかげながら 夏の夜の あだのかたみの 月ぞかなしき

(70) (冬)

歌 神の代の 雪の島ねの 朝戸あけて おもかげむかふ よもの山山

(165) (もろこしへわたらんとのあらましにてつくしまでくだりし時、しる人のもとへよみてつかはしける)

歌 なれてこし 人の心を 月にはなに おもひいくへの 山のおもかげ

(218) (題しらず)

歌 面かげは ありしながらも せめてげに ものいひかはす ならひありせば

● 『挙白集』 - 31 (9) 首 (生没: 1569-1649年)

(長嘯子) (慶安二年板本)

(180) (春のうたの中に)

歌 帰るかり にくからなくに おもひねの とこよの花の 夢のおもかげ

(233) (故大閤秀吉公より花歌五十首めしけるとき、一夜によみはべりける)

歌 よしなしや 何おもかげの さくら花 さきてちらずは おなじ古里

(286) (玄治法印のもとにて、終日対花と云ふことを)

歌 今朝よりも 夕くれなみや ます鏡 月こそうつせ 花の面影

(302) (慶安二年やよひの比、おなじこころを)

歌 ねやのうちに 梢の月の さそひきて 枕ならぶる 花のおも影

(349) (雨後花)

歌 まぼろしに あひてなきけん 面影も 又よそふべき はな桜かな

(375) (花のうたの中に)

歌 きえねただ 霞の間より ほのみえし 此世におはぬ 花の面かげ

(391) (見樹院立詮のもとにて二首の中、落花随風といふことを)

歌 面影の 花には風も まくず原 さそひかねてや 身をうらむらん

(871) (公軌がもとにて、おなじこころを)

歌 おもかげは さめても猶ぞ 有明の 夢路にしろき うたたねの月

(956) (驚月庵にて催せし三首に)

歌 竹とりの 世世のむかしは 跡ふりて おもかげのこる 月の宮人

(1063) (月前霧)

歌 あけぬとも おもかげたたむ うす霧の ほのめく山に のこるよの月

(1109) (夕菊)

歌 夕ぎりの まがきへだてて みるきくは かへすけぶりの おもかげぞたつ

(1219) (旅泊千鳥)

歌 なれなれて 声きかぬよも 浦ちどり おもかげにたつ 波枕かな

(1234) (門弟景軌は此道にこころざしふかく、ことばの花もいろふかきすきものなり、うたひとつかきてといひけるに、かきてつかはすとて)

歌 あさち山 かれたつ冬の 色さめて おもかげふれる 峰の初雪

(1342) (未見恋)

歌 おぼつかな 聞きしばかりの 人づてに まことすくなき 面影ぞたつ

(1374) (夕恋)

歌 日くるれば たつおも影を 身にそへて そのままにこそ 打ちふされけれ

(1384) (恋のうたの中に)

歌 たのめつつ こぬよなよなも 先だつは おもかげさへや いつはりはする

(1411) (山家恋)

歌 恋しさに かくるる山の おくまでも おもかげかよふ 夕暮の空

(1669) (旅) (旅のうたの中に)

歌 おもかげの わすれぬ山も かすむらん 古郷とほし 春の明ぼの

(1689) (哀傷) (むすめの身まかりける又の年の春、花をみて)

歌 まづかなし 花を見月を ながめても そのおも影は むかひ消えつつ

(1710) (青木主殿忠城、消息ばかりにていまだ対面なかりしに、遠き国へまかるとて、なごりをしなどいひおこされし時)

歌 みぬ人は おもかげもなし よそながら ただ聞きわたる 音にわかれて

(1715) (題しらず)

歌 もろくちる 花につけても かなしきは ただその春の 夢の面影

(1720) (むすめの三回忌のころ、おとうと宗連もとより、)

歌 なぐさまぬ 三とせの春の 山ざくら なき面かげは 花にのこれど

(、とありしに)

(1737) (物名) (玄琢法印のもとにて、たかがみねといふことを)
歌 ぬしやたが 香みねどもきぬの そらだきに ぬぎおく妹が 面影^{ぞたつ}

(1897)
歌 ちりて出でし みやこの花の おもかげに また^{立ちむかふ} ふじのしら雲
(1915) (おなじくはべる人)

歌 おもかげは うつさずとても かがみ山 なをなつかしみ いざよりてみん
(1932) (作者)

歌 おもかげも 我わすれめや きよみがた せきにむかへる みほのまつばら
(2018) (挙白集卷第十) (うなみ松)

歌 いへばえに げにぞかなしき いまはとて たぶさとつる 夜はのおもかげ
(2028) (挙白集卷第十) (うなみ松)

歌 おもかげは ありし世のごと 身にそひて まだなき人と おもほえぬかな
(2083) (作者)

歌 もろともに こぞみし月や さそふらん あまのとわたる 人のおもかげ
(2091) (詠一回忌長歌)

歌 いにしはる かすみの衣 さかさまに きてし月日の ゆきめぐり いつしかけふは あづさゆみ
やよひの中の 五日にも なりにけるぞと あはれなれ あととふ法の ともし火の ひかりさやかに
かかげなし わがやの内に ありとある 人のかずかず こと更に いもひをしつつ こひしのび 仏に
つかへ さくらばな をりたむくれば かをりあふ かうのにほひも よそならず みだのみくにぞ お
もほゆる またうへもなき ここのしなの はちすの花の うてなにし ことあやまたず むまれよと
いのるこころは ひだたくみ うつすみなはの ひとすぢに 思ひ入江の たまがしは かわかぬそでの
ためしかも としへぬるかた なげきあまり せめてわするる くさをだに つまんとすれば 住よしの
きしに生ふてふ たねたゆる ときにしあへば かひもなし かへす衣の ゆめちまで ゆるさぬ関の
せきもりは たれあふさかに すゑつらむ しなえうらぶれ くさも木も すべてむかへる ものごとに
そのおもかげは ^{まづぞたつ} あないきづかし これやこの ひのもとならで ありときく みみらくの
島 たれかしたる われにをしへよ なき人に あふとかいへば なみぢわけ たづねもゆきて はるけえ
ぬ ありしわかれの うききはを いまひとたびは かたるべく 身まであらぬと たどられて けぬる
ものとも しらつゆの おくとはもとめ ぬるごとに いづちかとのみ またるらん 雲風さわぎ あま
のはら ふみとどろかし なるかみの すごき夕は ふるつかに いそぎとぶらひ うづもれし 昔のし
たにも まどふやと ちからをそへて おもひやる なほくやしきは かげろふの あるにもあらぬ み
のほども 千世もや千世も ありへんと 行末かけて とにかくに などかをりをり いさめけん あさ
まの山の あさましく いけるかぎりは ふるさとの よもぎむぐらに まじりぬる ただつれづれと
ふかきねやに ひとりながむる やまとうた したしき友と くちずさみ おやのかふこの まゆごもり
こもれるからに おほかたの いもせの中も まだしらず 子のひとつだに とどめねば 何をよそふる
かたみとて おのが愁を なぐさめむ やまひの床に ふししづみ たえずむねを くるしみし その
有さまの かなしさを めにみすみすも いかがせし ひととせあまり うばたまの 夜ひるわかず た
ちさらで あとよりたすけ まくらより 2ネづとはすれど おのづから ひと目ひとひに よわりゆく
けしきもいまは しるかりき たのむこととは おいらくの いのちにかへて とどめんと ねがひをす
てぬ 八百万の 神にちかひし ことのはも うけずなるみの うらちどり 立るになきて ふみおける
よしやはかなき あとなりと 後みん人の 情ありて かたりもつたへ いひつがば ながれての世の
名やはくちせん

(2110) (夢のただち)

歌 あふとみし 夢はさめても なき人の おもかげさらぬ とこのうへかな

● 『黄葉集』 - 27 (6) 首 (生没: 1579-1638年)

(光広) (元禄十二年板本)

(93) (後朝恋)

歌 黒髪の おもかげさらぬ うつりがに またねさへこそ おきうかりけれ
(190) (見恋)

歌 ききしより みしおもかげの ますかがみ 身にそふ物と ^{立ちぞはなれぬ}
(338) (春たちける日)

歌 あら玉の ことしぞ春は またれける 先おもかげの 花ぐもりして
(340) (長尾天神の法楽とて人のよませけるに、同じ心を)

歌 わきてけさ おもかげに咲く 此はなの 山どりの尾の ながき春日を
(349) (山霞)

歌 ながめやる おもかげきえて 此ごろは まちかき山の 霞をぞみる

- (350) (照高院宮にて)
歌 あさなあさな 霞に匂ふ **おもかげ**の まぢかさみつる 嶺のしら雲
- (351) (霞添山気色)
歌 みずやけさ 遠山ざくら **おもかげ**に 霞みそめたる 峰の白雲
- (478) (池辺花)
歌 みしままの **おもかげ**うつす 池水に 花のおもはむ 老もはづかし
- (530) (春色浮水)
歌 咲かばみむ 花の鏡と おもふより をられぬ水に うかぶ**面影**
- (538) (風前落花)
歌 散りそめし **面影**とめて 風やふく 花にまがふな 枝のしら雪
- (718) (河初秋)
歌 **立田川** まだ初秋に **おもかげ**は ちらぬ紅葉の 水くくるなり
(777) (院聖廟御法楽に、薄風)
- 歌 **おもかげ**は 柳が枝の 糸なれや すすきになびく 庭の秋かぜ
(804) (初学百首の中に)
- 歌 わかれつる 名残をおもふ **おもかげ**に 今ききかふる 初雁の声
(817) (崎霧)
- 歌 **面影**は **立ちのこしけり** 霧の中も 心あてなる から崎の松
(872) (月前霧)
- 歌 あけぬとも **おもかげ**たえん うす霧の ほのめく山に 残る夜の月
(916) (紅葉添雨)
- 歌 咲く花の **面影**みせて 色まさる 紅葉にふるも 春雨の空
(1031) (未見恋)
- 歌 おぼつかな 聞きしばかりに 人づての まことすくなき **面影ぞたつ**
(1095) (待恋)
- 歌 今はとて とはぬにならふ よひよひを 又もたのめし **面影ぞたつ**
(1124) (後朝恋)
- 歌 玉しひの 袖に入りにし わかれより またねの床に そはぬ**おもかげ**
(1127) (後朝恋)
- 歌 **面影**の けさは身にそふ うつりがよ さはうつつなり 夢の手枕
(1128) (後朝恋)
- 歌 よこ雲の たえて別れし **おもかげ**は 猶こそのこれ 有明の月
(1218) (佐夜中山)
- 歌 有明の 月に都の 春の夢 **おもかげ**をしき 佐夜中山
(1259) (富士)
- 歌 年へても 忘れぬ山の **おもかげ**を 更に忘れて 向ふ不二かな
(1281)
- 歌 年へても くろかみ山の **おもかげ**は かはらぬものの 名にや**立つらん**
(1365) (常有此好夢)
- 歌 たえずみる 夢のただちは うつの山 うつつもわかぬ 花の**おもかげ**
(1372) (随喜功德無量無辺)
- 歌 見ぬ人の かたりつたふる **面影**に 思ひやらるる みよしのの花
(1450) (一品宮智仁親王追悼) (一品宮桂光院殿の御ことよ、すゑの露もとよりえぶのならひとだ
に、ただ涙にくれておもひとるべきことわりにもあらず、雲がくれにし月の、又めぐりあふべき空だのめ
とてもなければ、姨捨山のよすがには、せめて無価宝珠といふことを六くさのかしらに置いて、なき御か
げにいささかこころざしをのぶることになりぬ)
- 歌 けふごとの 昔がたりも なしはてて 身はありがほに かふる**面かげ**

● 『内裏歌合(天正七年)』 - 1 (0) 首 (1580年以降)
(彰考館蔵本)

- (46) (右勝) (兼成卿)
歌 たのまじと 思ひぬる夜の **おもかげ**も つれなき床の 上にきえつつ

● 『後十輪院内府集』 - 33 (1) 首 (生没：1588-1653年)
(通村) (書陵部蔵 501・683)

- (103) (春雪散風)
歌 木木の枝に ふるしら雪を ちる花の おも影にふく 庭の春かぜ
(198) (帰雁幽) (元和曼殊院宮聖廟法楽)
歌 はるかなる 雲路のそらに 面影も かすみて残る 雁の一つら
(214) (尋花) (慶長十六九十六仙洞百首続歌当座御会)
歌 花はなほ みえぬ山ぢを わけぞ入る をのへの雲を おも影にして
(243) (月前花) (元和四三七於祐甫草庵当座)
歌 後も猶 思ひ出づべき 面影や 月と花との ありあけの山
(245) (霞隔花) (同三三六夜内当座御会)
歌 立ちまよふ 霞にもるる 花の香に みぬ面影を さそふ山かぜ
(267) (寛永三三廿四内月次御会)
歌 いつの春 その折ふしと 面影も 花におぼゆる 人ぞおほかる
(329) (暮春雲 元和四十廿九内五十首御続歌)
歌 おも影の 花とだにみし 春もはや 残りすくなき 山のはの雲
(363) (夏) (寛永六閏二廿四内月次御会)
歌 あかづみし 昨日の花の 面かげに うちちる露の かげぞすずしき
(367) (夏) (正保三六廿四内月次御会)
歌 咲きみちて 青葉はまれに みし花の おも影とほく しげる木木かな
(644) (初雁) (寛永十四仙洞着到)
歌 けさぞ鳴く 昨日かすみし 面影も わすれぬ峰を こゆる雁がね
(690) (河上霧)
歌 さす袖も 霧のうちなる 面影に こゑのみくだる 淀の川舟
(892) (枯野) (正保二三廿八内当座御会)
歌 みしや夢 草葉のこらず 霜結ぶ 手枕ののの 秋のおもかげ
(1025) (春尋恋)
歌 かすむうちに やどこそわかね 面影は ただここにしも みるばかりなる
(1131) (月増恋) (正保二閏五廿四内月次)
歌 さそひくる 月やおもひの ますかがみ うつるばかりに むかふ面影
(1155) (難忘恋) (和二廿五内聖廟御法楽)
歌 うきふしも なさけをもみし こしかたは ただめのまへの 面影にして
(1156) (難忘恋) (元和二廿五内聖廟御法楽)
歌 うきふしも うれしきをりの 面影も 身をはなれたる 時の間はなし
(1165) (寛永八閏十廿五仙洞聖廟御法楽)
歌 草まくら ねぬよの床は 身にそへる 面影ならで 見る夢もなし
(1179) (寛永八八廿五仙洞同御法楽)
歌 たえはてて 後も身にそふ 面影に 心みだるる まののかや原
(1187) (恋面影) (元和四十廿九家月次)
歌 いづくにも うきは身にそふ 面影を わすれぬ人の 思出にして
(1188) (恋面影) (元和四十廿九家月次)
歌 つらきふし うきをりふしも 恋しさの 外にはみゆる 面影もなし
(1189) (恋面影) (元和四十廿九家月次)
歌 つれなさを 思ひ出でても こひしさの うきにまぎれぬ おもかげぞたつ
(1192) (恋鏡) (慶安三五七内当座)
歌 契りさへ よそにうつりし 鏡には わが面影も なみだへだてて
(1202) (寛永七十二廿一仙洞当座)
歌 こぬ人の 面影くもる そでの上に 涙や月の とがにかこたん
(1205) (寛永廿一九廿九内当座)
歌 ながめては うさもわすれん よひよひに わりなや月の さそふ面影
(1206) (正保五八十五同)
歌 あくがるる ならひも有り と みる月の 人はさそはぬ 面影ぞうき
(1237) (寄島恋)
歌 身にそひて 残るもつらし 行きてみぬ 面影のみの うらのはつ島
(1285) (青灯耿耿思悠悠) (元和四閏三四)
歌 いかにも猶 身をしをれとて 灯の さやかにむかふ 人のおもかげ

(1450) (寛永廿一十二八内当座)

歌 故郷の 夢路は風の つてならで ふかぬまかよふ 人の**面かげ**

(1451) (寛永廿一十二八内当座)

歌 名残あれや かりねの夢の **面影**を おき出でていそぐ やどにとどめて

(1452) (寛永廿一十二八内当座)

歌 ふる郷の 夢をこずゑに 吹きまぜて 嵐に残る 人の**おもかげ**

(1480) (懐旧) (元和三)

歌 ことのはを かはずばかりに なき人の **おも影**うかぶ ともし火の本

(1658) (ふじにて)

歌 ふじのねは ただ雲霧を すがたにて もとみしやまの **面影**もなし

(1663) (江文通が寂莫として神をいたましめ、手を分けて涙をふくむ郷の別、その心浅からずといへども、潘安仁が寢興して形を存し、遺音耳にある亡を悼む、そのあはれなほふかかるべし、爰に前相公氏成卿さりし長月のはじめつかた、願言むなしくして、鹿のなく野べの夕露袖にたえず、雁のくるみねの朝霧胸はれぬ思ひあり、かのおくるる程をかなしみ、あるをみるだにとなげきしふるごともおもひ出でられ、神な月ふりみふらずみしぐるる比、さだめなき世のならひも今さらおどろかれて、おろかなる心につたなき詞をつづりて、相公の綿綿の恨をはかり、惻側の情をとぶらふといふ)

歌 ねてもみえ ねでもみゆらん **面影**に 思ひなぐさむ ときのまやなき

● 『後葉和歌集』 — 1 (0) 首 (1669年)

(宮内庁書陵部蔵 510・33)

(321) (だいしらず) (よみ人しらず)

歌 ますかがみ みし**面影**の 身にそひて 心は君に うつりぬるかな

● 『後水尾院御集』 — 12 (1) 首 (生没：1596-1680年)

(内閣文庫蔵本)

(31) (霞)

歌 水無瀬川 とほき昔の **おもかげ**も **立つや霞**に くるる山もと

(498) (寄月旅)

歌 枕かる 煙も浪も ふるさとの **面かげ**うつす 月にかなしき

(558) (菊粧如錦)

歌 秋の菊 誰あかざりし **面影**に にしきぬもののはなのいろいろ

(651) (眺望山雪)

歌 春秋の 山の錦の **面かげ**も うづみはてたる 今朝の雪かな

(689) (見恋)

歌 人にかく そふ身ともがな みしままに 夢も現も さらぬ**面影**

(770) (夜恋)

歌 名残なほ 逢ふとみえつる 夢よりも さだかに向ふ 夜半の**面かげ**

(777) (寄月恋)

歌 諸ともに みし夜忘れぬ **面影**に 霧りふたがりて くもる月かな

(873) (水樹佳趣多)

歌 ふりせずよ 柳のかみも わかがへる 池の鏡の はるの**おもかげ**

(1076) (春曙)

歌 見しままの 心にとまる **面影**や たがならはしの 春の明ぼの

(1107) (女郎花)

歌 白露の かざしの玉の をみなへし よそひことなる 花の**おもかげ**

(1146) (後朝恋)

歌 我こそは さそひてかへる **面影**を 跡には人の さしもとどめじ

(1374) (野外虫)

歌 **面影**は たださながらに ひとことも かはさでさめし 夢ぞ悲しき

もちづきちようこう

● 『広沢輯藻』 — 7 (0) 首 (望月長孝の家集、生没：1619 - 1681年)

(長孝) (享保十一年板本)

(329) (三宅氏堅如詩歌の会せしに、夏雲奇峰多)

歌 雪とみれば **面かげ**寒し 夏山の 空にかさなる 峰のしら雲

(476) (ほどなく雨に成りぬるに)
歌 雨とふる 雲も煙の たぐひにて かへらん月の おもかげもがな
(581) (奉納百首に、霜)
歌 冬がれの 庭の**面影** 霜ふかし さぞ白菅の まののかやはら
(662) (海辺歳暮)
歌 もしほやく 煙も霞む **面影**に 春の隣の ちかの塩がま
(713) (奉納の百首歌に、後朝恋)
歌 身にそはば 今朝しもなどか 起きて行く 心にも似ぬ 人のおもかげ
(735) (旅恋)
歌 妹ににる 野山の浅茅 **面影**に よるは敷ねの 枕にぞかる
(747) (寄絵恋)
歌 うつさじな それも涙に 朽木垣 よしわすられぬ **面影**にして

● 『漫吟集』 — 4 (1) 首 (生没：1639-1701年)
(契沖) (天明七年板本)

(43) (霞)
歌 むさし野も おもかげにして みるばかり かすみはつれば 遠山もなし
(959) (河辺螢)
歌 おもかげに 昔はなりて まつら河 かはのせひかり とぶ螢かな
(1607) (紅葉)
歌 たつた山 春みし花の おもかげも 秋のにしきに **たちまじりつつ**
(1882) (原上雪)
歌 雪はまだ おもかげばかり ふりそめて なびきもはてぬ まののかやはら

● 『靈元法皇御集』 — 18 (0) 首 (生没：1654-1732年)
(高松宮旧蔵本)

(2) (霞)
歌 雪にみし おもかげもなく 山どりの 尾上へだてて たつかすみかな
(6) (残雪)
歌 見そめつる こぞをわすれぬ おもかげや おなじ尾上に のこるしら雪
(49) (駒迎)
歌 いにしへの 秋の雲井の おもかげに 引きかへさばや もち月の駒
(77) (旅恋)
歌 いかなれば ひとり旅ねの 身にそへて 故郷よりも こふるおもかげ
(233) (深夜帰雁)
歌 さよふかき そらゆくかりは おもかげの わすれがたみも とめじとやする
(350) (忘住所恋)
歌 いづこそと おもひぞまどふ たそがれの そらめにやみし 宿のおもかげ
(402) (海辺霞)
歌 かすみゆく なみのうへにも おもかげは 猶きえやらぬ 淡路しまやま
(463) (雁)
歌 かすみてし 春の翅の おもかげに 霧分けてくる かりの一つら
(488) (遠帰雁)
歌 おもかげも 何にとどめむ それとみぬ かすみのをちに かへるかりがね
(491) (庭花)
歌 庭にして 花ふきたてよ 春の風 ちりにしほどの **面かげ**もみん
(524) (寄枕恋)
歌 きえねただ おき出でし今朝の おもかげも 枕にのこる 人のうつりが
(566) (人伝恋)
歌 ゆめにも 見まほしきかな かたり出でし そのおもかげや 思ひあはすと
(624) (寄鏡恋)
歌 身にそふも うきまぼろしの **面かげ**を さやかにみする かがみともがな
(652) (草花露)
歌 わすれじな かれなん霜の 後までも なびく花野の 露のおもかげ
(677) (遇不逢恋)
歌 きえねただ 夢にまさらぬ **面影**の うつつにかへる 此世ならずは

(851) (七夕七首享保五年) (七夕月)

歌 天河 ながれにひたす ともし火の みぬ**面かげ**も 月にうかびて

(874) (契待恋)

歌 ちぎりては 問ふべき物と **面かげ**の まつまぞはるる 月やたのみむ

(979) (十首享保十四年三月十八日) (柿本社法楽有子細自当年如此於鎮守拝殿講之) (深山花)

歌 **おもかげ**は 此神がきに けふぞみる よし野のおくの 花のさかりも

● 『**草山和歌集**』 - 2 (0) 首 (1672年)

(元政) (寛文十二年板本)

(43) (人の名をよみし中に、李夫人)

歌 はかなさや ゆめにまさらむ **おもかげ**の けぶりにきゆる やみのうつつは

(115) (おなじところにて (=ちちのひさしくすみける家))

歌 **おもかげ**も たださながらの ふるさとを うづみなはてそ 庭のあさぢふ

● 『**逍遊集**』 - 18 (8) 首 (1677年)

(貞徳) (延宝五年板本)

(28)

歌 けさははや 柳さくらの 錦まで **おもかげ**こめて たつかすみかな

(125) (湖上霞)

歌 春霞 へだてて遠き よごの海の むかしの衣 **おもかげぞたつ**

(316) (山路尋花)

歌 夢かたよ みしをしるべの 山ぢには 雲となり行く 花の**おもかげ**

(358) (朝花)

歌 蝶鳥も まだぬる花の **面かげ**に むかへばさむる しののめの空

(475) (花透霞)

歌 玉津島 むかしの御名の **おも影**も しかじと花に たつかすみかな

(479)

歌 雪にこそ まがひはてけれ 山ざくら 雲が**たちみに** かはる**面かげ**

(899) (夏虫)

歌 露ふかき 草村ごとに **たつ**ものは 秋まつむしの こゑの**面かげ**

(1220) (淵月)

歌 あすか川 ふち瀬の月も きのと過ぎ けふもくれぐれ かはる**面かげ**

(1329)

歌 **おもかげ**の みえし煙に 雨ぐもの **たちかはれかし** 月のこよひは

(1831) (寒草纒残)

歌 かれ残る 草のみどりは 春の野の 雪まかき分けて もえし**面影**

(1891) (朝霜)

歌 朝霜の 萩のかれはの 煙より **たつや**焼野の 春の**面影**

(1895) (寒草霜)

歌 つくもがみ いただく霜の 女郎花 **面影にたつ** 秋やこふらし

(1899) (落葉霜)

歌 くれなゐの 落葉がうへに 霜ふりて さくら色なる 庭の**面かげ**

(1917) (初雪のふりし日、烏丸大納言殿へまゐりければ、光広卿、やどとふは先初雪をかごとにて友まつ後もいざなはれてよ返し)

歌 遠山に みし**面影**は ふりにけり けふ九重の にはのはつ雪

(2630) (源)

歌 けふにあけ きのふに過ぎて **立ちそへる** その**面影**や 日数なるらん

(2649) (東門跡亡母の七年忌に)

歌 哀なり その**面影**も なたとせや いきて有る身は めぐりくれども

(2835) (花有喜色)

歌 春山の かすみのうちに さく花や けぶりをめでし 人の**面かげ**

(2841) (暮春山)

歌 花の波 かすむばかりの 山のはに 又はつ春の **おも影ぞたつ**

● 『晩花集』 — 2 (0) 首 (下河辺 長流) (1681年自撰)
(長流) (文化十年板本)

- (36) (柳)
歌 山どりの そのしだりをの ますかがみ おもかげにたる いけのあを柳
(232) (月)
歌 みや人の むかしの袖も 月の夜は おもかげあそぶ たかまどのやま

● 『麓のちり』 — 5 (1) 首 (1682年?? (写本))
(天和二年板本)

- (54) (春暁月) (菅雄)
歌 見るとみし 夢の名残を 月やしる いく暁の はなの面かけ
(115) (ゆき雄)
歌 色になれ 音にさそはれし 花鳥の 面影そへて 春ぞ暮行く
(180) (夏山) (知雄)
歌 見し春の 心をこめて 夏山の 梢やはなの おもかげにたつ
(493) (全超法師)
歌 別来し 涙かわかぬ 床のうへに うき面影の ありあけの月
(649) (暁夢) (忠至)
歌 さまざまに 心をわけて 暁の かねにおどろく 夢の面かけ
なにわすてぐさ

● 『難波捨草』 — 3 (0) 首 (1688年)
(書陵部蔵本)

- (55) (花面影といふ事を) (正因法師)
歌 昨日みし 花の面影 身にさらで わが墨染の 袖ぞ匂へる
(84) (おなじこころを) (源信祥)
歌 世世にみし ならひしれとや 面影の かすみてすめる 春の夜の月
(197) (秋上) (初秋) (玉手)
歌 面影は 夏野の草の それながら 今朝は露ちる 秋の初風

● 『賀茂翁家集』 — 1 (0) 首 (賀茂真淵の生没: 1697 - 1769年) (1806年編纂)
(真淵) (文化三年板本)

- (174) (八月広沢池眺望といふことを)
歌 都人 見ぬ海山の おもかげも 月にうかべる ひろさはのいけ

● 『鳥の迹』 — 10 (2) 首 (1702年)
(元禄十五年板本)

- (79) (赤尾弥三左衛門秀澄)
歌 咲きぬやと 待たるる花の おも影を いく度峰の 雲ぞさそへる
(183) (暮春) (鈴木教高)
歌 とめがたき 隙行く駒の いつはあれど 春もうつろふ 花のおも影
(318) (月の歌の中に) (林美作守直秀)
歌 面影の かはらぬ月や かはるらん ながむる人の ころごころに
(358) (老後月) (山名玉山入道)
歌 老の身は 秋をかさねて かはれども 月は昔も おなじおも影
(470) (柳陰堂了寿)
歌 露に見し 真野のかや原 霜枯れて 残すともなき 秋のおも影
(514) (炭竈) (山名玉山入道)
歌 雪積る 小野のすみがま 埋れて 煙にふじの おもかげぞたつ
(547) (旅の歌の中に)
歌 ふるさとに にたる野山の おもかげを 見るも慰み 又みるもうし
(629) (月催懐旧) (藤堂備前守高堅)
歌 知るしらぬ おも影みえぬ 月ながら むかへばうつる いにしへの空
(665) (有馬次郎兵衛重広)
歌 思ふぞよ 親の手向の みづからも 曇る心に 遠きおもかげ

(739) (ひさ女土岐家)

歌 しばしとて **立ちとまりつる** 程だにも 幾度かはる ふじのおも影

● 『梶の葉』 — 7 (2) 首 (1707年)

(梶女) (宝永四年板本)

(33) (かぢの葉巻中) (恋の歌を人のよませ侍りしに)

歌 おもかげに いつのなさけに **たちぬらむ** 人はあとなき 風のうき雲

(53) (三月三日) (正信) (ある人のよめる、逢夢恋)

歌 しばしだに せめてさめずは はるの夜の ゆめはみじかき はなのおもかげ

(54) (おなじ心を)

歌 あふことは はかなきはるの ゆめぢかな やがてうつろふ はなのおもかげ

(92) (と有りしかへし)

歌 よひよひは おもかげながら まちいでむ あづまのはての 山の端の月

(105) (むかしを思ひ出づる事侍りて)

歌 つらくのみ すぎこしかたを しのべとや うきひとりねに **たてる**おもかげ

(113) (野寒草)

歌 みしやゆめ のこる草葉に 霜むすぶ 手枕の野の 秋のおも影

(124) (絶後恋)

歌 ちぎりしは むかしなりけり 思ひねの ゆめにはたえぬ 人のおもかげ

● 『新明題和歌集』 — 56 (5) 首 (1710年)

(宝永七年板本)

(118) (意光)

歌 雪にみし おもかげさへて 山のはも 春のひかりに 霞む長閑さ

(140) (弘資)

歌 おもかげは なほさながらに 遠ざかる 山やけさより 霞みそむらん

(145) (実光)

歌 きのみまで 雪みし軒の 山のはも おもかげ遠く 霞む春かな

(243) (谷出鶯) (基共)

歌 まだきえぬ 雪をや花の おもかげに さそはれいつる 谷の鶯

(305) (道晃)

歌 ふじのねを かさねはあげぬ おもかげや 春時しらぬ 雪の大ひえ

(323) (春雪) (仙洞)

歌 降りそめし おもかげかへす 山かぜや 春もあらちの みねのあは雪

(658) (春曙)

歌 みしままの 心にとまる おもかげや たがならはしの 春の明ぼの

(661) (道晃)

歌 横雲の しらむ高根に 咲く花の おもかげ匂ふ 春の明ぼの

(667) (春曙雲) (雅喬)

歌 春深き 雲はさながら みし花の おもかげ残す 明ぼのの山

(759) (雅庸)

歌 此比は 先心から わりなくも ねても覚めても 花のおもかげ

(794) (見花恋友) (通村)

歌 いつの春 その折ふしと おもかげを 花におぼゆる 人ぞおほかる

(997) (関帰雁) (道晃)

歌 面影を しばしとどめて 行く雁の 名には霞の せきの明ぼの

(1102) (有維)

歌 名残なく 春ぞくれ行く 藤浪の かかるばかりを おもかげにして

(1132) (暮春雲) (通村)

歌 おもかげの 花とだにみし 春もはや 残りすくなき 山のはの月

(1141) (三月尽) (雅喬)

歌 けふ暮るる 春の海辺の 名残あれや 波のみるめも 霞む面影

(1176) (雅陳)

歌 珍しいな 青葉が中に 咲くも今 みし初花の 面影にして

(1178) (余花) (資廉)

歌 夏山の 青葉をわけて 面影の あかぬ心を 花に咲くらん

(1195) (資慶)
 歌 たそかれの 卯花垣に 残りけり 朧月夜の 庭の**面かげ**
 (1668) (季信)
 歌 あつき日も あやしき岑の **面影**に **立つ白雲**の 色ぞ涼しき
 (1673) (重条)
 歌 花も見し **おもかげ**かへて 涼しくも 山は青葉に 匂ふ色かな
 (2009) (女郎花) (後水尾院)
 歌 白露の かざしの玉の をみなへし よそひことなる 花の**面影**
 (2322) (湖上月) (後水尾院)
 歌 影清き 同じたぐひの 秋の月 たが**おも影**か にほのうみづら
 (2438) (月前衣) (季信)
 歌 衣手に はらひもあへぬ 白雪の **おもかげ**みする 秋の夜の月
 (2738) (冬草) (隆尹)
 歌 白妙に 秋みし花の **おもかげ**の それのみ残る 霜の下草
 (2740) (通村)
 歌 みしや夢 草葉のこらず 霜結ぶ 手枕の野の 秋の**おもかげ**
 (2769) (経尚)
 歌 みし秋の **おもかげ**もれし 白露の 結びし後の 霜のまがきか
 (3090) (資慶)
 歌 大ひえや けさぞさやけき 白雪の 日数かさねし ふじの**面影**
 (3101) (眺望山雪) (後水尾院)
 歌 春秋の 山の錦の **おもかげ**も うづみ果てたる けさの雪かな
 (3229) (親綱)
 歌 **おもかげ**の **立ちやそはまし** 見初めつる 人の心に なれぬかぎりは
 (3230) (具詮)
 歌 言の葉も かはさばいかに よそながら みしだにあかぬ 人の**面影**
 (3450) (雅喬)
 歌 **面影**は 忘れがたみの 夜の夢 さめてもいかが おもひさまさん
 (3458) (通茂)
 歌 雲にながめ 雨にしをれて したひしや みしを忘れぬ 夢の**面影**
 (3463) (頼業)
 歌 今とはとて 起別れゆく 閨の戸に **おも影**のこす あり明の月
 (3473) (雅喬)
 歌 見送るも 中中つらき **面影**や 月待ちてとは なにとどめけん
 (3489) (後朝恋)
 歌 我こそは さそひてかへる **面影**を あとには人の さしもとどめじ
 (3503) (兼豊)
 歌 今朝のまは 中中うしや 衣衣の その**面影**の しひて残るも
 (3512) (見増恋) (後西院)
 歌 時雨する 木木こそたぐひ みる度に 色増り行く 人の**おもかげ**
 (3517) (寄月増恋) (当治)
 歌 みるに猶 うき**面影**の 身にそひて なみだにくもる 言葉のこさで
 (3567) (雅枝)
 歌 かりそめに みし**面影**の 年ふるも 契りは同じ 思ひとぞなる
 (3647) (恋**面影**) (通村)
 歌 思ひやる 心にゆきて 見えもせば わが**面影**の 人にわびしき
 (3648) (恋**面影**) (通村)
 歌 いづくにも うきは身にそふ **面影**を 忘れぬ人の 思ひ出にして
 (3649) (恋鏡)
 歌 契りさへ よそにうつりし 鏡には わが**面かげ**も 涙へだてて
 (3695) (関路恋) (後水尾院)
 歌 したひこし **面影**ながら 鳥がねに いそぐ関路の 習さへうき
 (3708) (方長)
 歌 鳥の音に おどろかされし 朝戸出に 残るもつらき 夢の**面影**
 (3712) (通村)
 歌 日暮るれば **たつ****面影**を 身にそへて やがて打ちふす 床のうへかな

(3713) (行豊)
 歌 面影も 猶身にそふや とはれつる 時日ににたる けふの夕べは
 (3721) (寄月恋) (後水尾院)
 歌 たのめしは ならずなる世に 面影の 昔おぼゆる 月さへぞうき
 (3722) (通村)
 歌 あくがるる 習ひも有り と みる月の 人はさそはぬ 面影ぞうき
 (3859) (時量)
 歌 うしやわが 身にそふ人の 面影の むかふかがみに うつるとはなき
 (3869) (実陰)
 歌 今こんと たのめしままの おも影は むなしく残る 夜はの小菫
 (3937) (公起)
 歌 咲く花の 面影みせて 此朝け 霞めるみねに かかる白くも
 (3943) (里煙) (時方)
 歌 夕間ぐれ 霞みし春の 面影に たつる煙や さとのかやり火
 (3972) (雅章)
 歌 墨書に つくり出でたる 遠山の 面影みせて 霞む春かな
 (4286) (海眺望) (後水尾院)
 歌 面影を 浦の煙に 先立てて 霞まん春も ちかのしほがま
 (4385) (寄月旅) (具起)
 歌 草枕 故郷人の おもかげは 月こそさそへ 夢はたえても
 (4391) (通村)
 歌 古郷の 夢路は風の 伝ならで 吹かぬまかよふ 人のおもかげ

ためむらしゅう

れいぜいためむら

● 『為村集』 - 18 (0) 首 (冷泉為村の生没：1712 - 1774年)
 (龍谷大学蔵本)

(73) (都霞)
 歌 君見よと 霞や遠き けぶりをも 都のふじに こむるおもかげ
 (97) (山花)
 歌 山ざくら 木木の盛の おも影は さながら峰に かかる白雪
 (250) (梅移袖)
 歌 あかず見し 名ごりとまれる 袖のかに 面かげさらぬ 梅の木のもと
 (597) (卯花)
 歌 消残る かきねの雪の おもかげに 一むら白く 咲けるうの花
 (1374) (冬野)
 歌 身にぞしむ 花野の秋の 面影も 霜に消行く 草の冬がれ
 (1376) (冬草)
 歌 冬寒き 野べの千草は かれはてて 秋見し花の 面かげもなし
 (1405) (積雪)
 歌 雪ふかく つもるあしたの 御そのふは 花の盛に むかふ面影
 (1540) (寄初草恋)
 歌 すゑつひに むすびもなれや 初草の はつかに見てし 人のおも影
 (1554) (晚帰恋)
 歌 思ひ置く あとにひかふる 面影に 行きやらぬ道の あくるよもうき
 (1583) (寄月恋)
 歌 みにしみし その面影は みか月の ほのかなりしも えこそ忘れね
 (1610) (春恋)
 歌 面かげや 身にとまりけん あひみしは おぼろげなりし 月のほそどの
 (1617) (不忘恋)
 歌 なにをかは うきふしにして 忘れまし 見ても見まくの 人の面影
 (1642) (初見恋)
 歌 あやなくも そのおもかげを したふかな 道行ぶりに あかずみそめて
 (1732) (寄床恋)
 歌 ただしばし あふとみしよの 夢覚めて 面影のこる ひとりねの床
 (1760) (羈中恋)
 歌 恋ひわぶる その面影は わかれても 身にそふたびの 道ぞ物うき

(1773) (羈中恋)

歌 へだてこし 都のいもが 面影を したひぞわぶる 旅のかりねに

(1826) (尋恋)

歌 さだかには をしへぬやどを とひかねて たどる身にそふ 人の面影

(2005) (望遠帆)

歌 まほかたほ 見えしもわかで 白波に おもかげきゆる 沖の友ぶね

たやすむねたけ

● 『悠然院様御詠草』 - 1 (0) 首 (田安宗武の生没：1715 - 1771年)

(宗武) (田藩文庫蔵本)

(40) (瑞春院尼君のませし殿の廢れぬる後、そのかみをおもひ出でて)

歌 見る度に 袖をぞぬらす 古への おもかげもなき 庭の草むら

● 『霞関集』 - 12 (2) 首 (1768年)

(寛政十一年板本)

(26) (丹波守政武磯野又近江守)

歌 春来ぬと むかへば花の おもかげも まだき霞に 匂ふ山眉

(296) (二条の御城に侍りし時、故郷のたよりに、うゑ置きしなでしこの花をつみて、幼きものどもの事などいひこしかば) (伴資善)

歌 生ひたちて 咲きそひけらし 故郷の おもかげしたふ 宿のなでしこ

(556) (佳孝)

歌 おもかげも のこさぬ秋を したはせて みそかの空は 見る月もなし

(725) (寄草恋) (道筑)

歌 しげり添ふ おもひのたねと なりにけり 草のはつかに 見てしおもかげ

(811) (ある人の云、此集夏歌、暁郭公、広温歌、同意あり、兩人もとより胡越をへだつ、自然に作意の同じき事、興あるにあらずや、滔滔たる我が国の歌、意詞同じきものおほかるべし、俱類さのみ除きがたかるべし、除かんとしひておもふもおろかなるべし、のぞかざらんはいと念なし、俱類の事、当集冬、あられの歌の所にしるせり、又、釈教の歌の所にもしるす) (来不留恋) (源万彦)

歌 おもかげの 何のこるらん とひ来ても 其ままかへる 人のつらさに

(818) (逢後増恋の心を) (遠江守ひろ通)

歌 かねてより 身に立ちそへる おもかげも あふ夜ののちは いとどはなれず

(821) (美作守直秀)

歌 おもかげは 立ちしよりげに 立添ひて わする人の 心にも似ぬ

(889) (独対孤灯座文集句題) (重澄)

歌 おもかげは 夢にだに見ぬ 閨のうちに ひとりおきみて むかふともしび

(1058) (題しらず) (美熙子榊原)

歌 見継ぐやと せめてぞねぶる 時のまの 夢に跡なき 人のおもかげ

(1061) (義正)

歌 見し夢の 行へいづくと 尋ぬれば 心のうちに のこるおもかげ

(1138) (子におくれて、無常の歌あまたよみける中に) (よし正)

歌 わすられぬ おもかげのみか なき人の 物いふ声も 聞く心地して

(1147) (題しらず) (源しげずみ)

歌 夢さめて いかになし夜と しのぶかな みしたらちねの 在りしおもかげ

● 『芳雲集』 - 42 (1) 首 (1787年)

(実陰) (天明七年板本)

(94) (霞遠聳)

歌 おもかげの 遠き高ねも 紛れなき 春や朝けの 霞なるらん

(715) (嵐山の花を)

歌 散るをみば 名もうかるべき 嵐山 ゆかで忍ばん 花の面影

(1194) (聞郭公)

歌 二声と 聞かぬ空だに 子規 したへば雲に 残るおもかげ

(2103) (月)

歌 思ひやる 明石も須まも みるたびに 心の空の 月の面影

- (2146) (十五夜曇りけるに)
歌 雲深き 空ぞとみても 名に忍ぶ 心に月の **面影**ぞすむ
- (2306) (寄月旅)
歌 仮枕 よしやねられじ 故郷の **面影**さそへ よはの月かけ
- (2590) (暮秋)
歌 此ままの **面影**ながら 行く秋の 形みに残れ 在明の月
- (2598) (暮秋月)
歌 暮れゆかば 又こん秋の 空までも 忘れがたみや 月の**おもかげ**
- (2814) (池水半氷)
歌 市の中に わけし鏡の **面影**を 移すや池の けさの氷は
- (2981) (積雪)
歌 月と見し けさの**面影** 埋れて 雪は野山の 四方の白雲
- (3005) (野雪)
歌 みし秋の **面影**消えて 草はみな 雪を花のの けさの明ぼの
- (3076) (常盤木雪)
歌 紅葉こそ よその色なる 松杉も 雪は梢の 花の**面影**
- (3087) (雪中興遊)
歌 あかず又 あすも来てみん 狩衣 かたのの雪は 花の**おもかげ**
- (3210) (冬沢)
歌 嶋の立つ 秋の哀も 冬がれの 野沢の月に 残る**面影**
- (3303) (聞恋)
歌 何とかく 心にしめて したふらん はかなく聞きし 人の**面かけ**
- (3313) (見恋)
歌 又やみん 身にしみ帰る 朝露に 有りし野分の 花の**面かけ**
- (3321) (僅見恋)
歌 かつみれど これもなかばは さしかくす 扇の隙の **面かけ**もうし
- (3327) (白地恋)
歌 幻の それかあらぬか 槇の戸に みもあへずして 入りし**おもかげ**
- (3332) (白地恋)
歌 **面かけ**は みをこそさらね 引きとめし 袖はしばしの 契りばかりに
- (3519) (逢夢恋)
歌 いかにて 今宵もみまし 夢ながら 又よといひて 覚めし**おもかげ**
- (3727) (忘住所恋)
歌 いづこぞと 思ひぞまどふ 黄昏の 空めにやみし 宿の**面かけ**
- (3852) (旅宿恋)
歌 身に添へて うつつに忍べ うつの山 夢は中中 うとき**面かけ**
- (3914) (寄月見恋)
歌 思ひ侘び みをなぐさめて みる月に 先かきくらす **おもかげ**もうし
- (4028) (寄梨恋)
歌 はなとみて たぐひもなしの 一枝を これは有るよに こふる**面かけ**
- (4093) (寄蕙恋)
歌 するらめや みしねくたれの **面かけ**を 我がさむしろに 敷忍ぶとは
- (4111) (寄絵恋)
歌 徒に うごく心は つらくとも 忽にもみてしか 人の**面かけ**
- (4112) (寄絵恋)
歌 **おもかげ**よ 忽にうつつしても なるべくは たが手をかりて 慰めにせん
- (4119) (寄挿頭恋)
歌 一めみし 人のかざしの 玉ゆらも かけて忘れぬ **面かけ**ぞ憂き
- (4144) (芳雲和歌集類題) (雑部) (朝日円如鏡)
歌 さほ姫も **面かけ**うつす 鏡かと てらす朝日に むかふ山まゆ
- (4243) (遠山如画図)
歌 限りなき 心をこめて かける絵の 山や千里に かすむ**おもかげ**
- (4259) (山影写水)
歌 山鳥の 尾上もこれを 鏡かと 長き日あかぬ 池の**おもかげ**
- (4269) (池水浪静)
歌 はるの水 みつてふ池の **面かけ**に 浪をさまれる 世をもみるかな

- (4312) (故郷路)
歌 通路も 蓬が袖と なりはてて もとこし庭の 面影もなし
- (4322) (石)
歌 さざれ石の 姿ながらに みてぞ知る おほきは山と ならん**面かけ**
- (4324) (盆石)
歌 まきあげて みし**面かけ**も こすの中に 残るや春の 山の白雪
- (4325) (盆石)
歌 名にきけば へだつる空の 雲の山 手にとるばかり 向ふ**おもかけ**
- (4810) (寄月懐旧)
歌 袖の上に 心の露を 置きそへて 月こそ宿せ よよの**面かけ**
- (4873) (野遊送年)
歌 **おもかけ**は みし年毎の 野べながら けふも円居の 春ぞふりせぬ
- (4885) (思往事)
歌 遠からぬ 身の古に かぞへても なきは数そふ 人の**おもかけ**
- (5100) (霞ノ入江)
歌 **おもかけ**に 同じ霞の なをとめて 入江の春や 後も忍ばん
- (5110) (三上山を東行之時)
歌 明仄や 雲の迷ひに 三上山 今よりふじの **面かけ****ぞ立つ**
- (5151) (かへし)
歌 **面かけ**に なしてしたはん 咲く菊の 色かは筆に うつす心を

よのこ

● 『佐保川』 - 4 (0) 首 (余野子の生没：? - 1788年)

(余野子) (国立国会図書館蔵本)

- (109) (かつら子といへるが身まかりて、又のとしの五月に)
歌 さみだれの 雨降るそらに むば玉の よみの国より 来なくてふ 山郭公 ふたがれる 岩とはあれど ひら坂は さかしからめど ゆきかよふ みちしあればや 五百重雲 八重雲わけて たちばなのもとのやどりを 年ごとに 定かにとへる ふる声は かはらぬものを ゆく雲の すぎにし君は いかさまに おもひへだてて よみ路ゆく するべの使 それにだに ことをもつげず なりにけん 是をおもへば うつし身は 大かたにだに かなしきに おなじよどのの あやめ草 根をふかめつつ おもひけん 人いかばかり 玉かづら **面影**をのみ 身にそへて 恋渡るらんと おもふにも たもとひづちて降る雨の みぎはまされる こちこそすれ
- (121) (反歌)
歌 あら磯に 寄する白浪 しくしくに かけておもほゆ 君が**おもかけ**
- (323) (かきうつし給へるふみにむかひて、いとどかきくらす心ちす)
歌 **おもかけ**の うかぶもはかな かへりこぬ 君がかたみの 水ぐきの跡
- (332) (ねみだれ髪)
歌 朝ねがみ おもひみだるる **おもかけ**や 露にしをるる きくの一えだ

● 『鈴屋集』 - 45 (5) 首 (1798-1803年)

(宣長) (寛政十年板本)

- (21) (春のはじめによめる歌ども)
歌 朝がすみ **さきだつ**花の **面影**も けふ初春の みよし野の山
- (49) (水郷春望)
歌 **おもかけ**も 春やむかしの 水無瀬川 山本遠き 夕がすみかな
- (110) (旅宿梅)
歌 ふるさとの 花の**面影** さそひ来て 旅寝なやます うめの下かせ
- (113) (梅薫袖)
歌 **おもかけ**は よるも**立枝**の うめの花 夕風ふれし 袖のにほひに
- (143) (晚霞)
歌 水無瀬川 山本かすむ **おもかけ**の 昔もとほき 春の夕ぐれ
- (178) (帰雁契秋)
歌 又来むと たのむの秋の 夕霧も **面影**遠く かすむかりがね
- (206) (春山)
歌 春ふかき 霞にきえて 咲く花の **おもかけ**ばかり にほふ遠山

(222) (遅日)
 歌 峰こえて おもへば長き 春日かな ふもとの花の けさのおもかげ

(230) (待花)
 歌 桜花 こころのまつの 木間より 面影にほふ 春のやまのは

(236) (遠尋花)
 歌 さきぬべき 花のこずゑも 風さえて 面影とほき はるの山ぶみ

(282) (霞中花)
 歌 春風に さそはぬ色も さそはれて 霞ににほふ 花のおも影

(289) (羈中花)
 歌 みやこかは 今朝見し花の 面影も 立ちそふ跡の 峰の白雲

(381) (落花のうたども)
 歌 つらかりし 嵐を今は かたみにて 青葉にさわぐ 花のおも影

(583) (晩夏)
 歌 河風に ちかきみそぎの 面影も かねて涼しき 浪の白ゆふ

(609) (荻)
 歌 ふかぬまも やどるか風の 面影に 上葉かたよる 露の荻原

(703) (山居月)
 歌 面影に すてしうきよも 恋しくて 月にこころは すまぬ山ざと

(713) (野月)
 歌 かくれなむ あしたの原よ 面影に かねてさびしき 秋のよの月

(733) (橋月)
 歌 おもかげに たつやながらの 橋柱 くちても月の すみ渡る夜は

(734) (橋月)
 歌 たとへける その面影の 恋しきに 月やむかしの ままのつぎはし

(749) (旅泊月)
 歌 見し月も それかあらぬか 浦山の おもかげかはる 浪のよるよる

(782) (霧中雁)
 歌 こゑはして 山立ちかくす 夕ぎりに 面影おつる かりの一つら

(922) (旅泊月)
 歌 ももくさの 色はかれのの 花薄 ほのかにのこる あきのおもかげ

(923) (寒草霜)
 歌 野べの霜 うらみわすれぬ 冬草に 何なかなかの 花の面影

(960) (禁中雪)
 歌 来む春も ちかきまもりの 桜花 おもかげ見せて つもる白雪

(1104) (逢不遇恋)
 歌 たちかへり つらき月日を へだてても 見し面影ぞ 身をも離れぬ

(1114) (絶恋)
 歌 うきながら 忘れもやらぬ 面影や たえにし中の 形見なるらむ

(1127) (夜恋)
 歌 又もねぬ やみのうつつの おもかげに 見し夢したふ さよのたまくら

(1131) (春恋)
 歌 身にぞしむ 春やむかしの 夕風に おもかげかすむ 袖のうめがか

(1141) (恋夢)
 歌 きえねただ 見しおもかげも 移香も 跡なき夢の 手枕の露

(1170) (寄月恋)
 歌 ちぎりおきし 月やあらぬと かこちても 面影とほき 有明のそら

(1226) (寄竹恋)
 歌 河竹の 一よ逢見し なごりより おきふしさらぬ 人の面影

(1280) (寄絵恋)
 歌 見し人は よそに心を うつしゑの おもかげばかり 何とまるらむ

(1304) (山寺に花見にものしけるに、はやく皆散りぬる程なりければ)
 歌 なごりあれや 青葉をわたる 山風に けふも猶ちる 花のおも影

(1357) (いにしへ人の名どもを題にてよめる中に) (小野小町)
 歌 今もなほ ながめせしまの おもかげは 露けき花に 見るこちして

(1413) (旅)
 歌 いる方の みやこの山の おもかげも 月に恋しき あづま路のそら

(1424) (旅宿夢)
 歌 見もはてぬ みやこの夢よ 中中に なに**面影**の さやの中やま
 (1475) (述懐)
 歌 思ひ出づる 三十の春も 三十年の かすみへだたる 花の**おも影**
 (1504) (人の十三年忌に、寄夢懐旧といふことを題にてうたすすめけるに)
 歌 年経れば **おもかげ**とほし 夢にだに 見るを見しよの わすれ形見も
 (1547) (大和国宇智郡なる栄山寺につたはりたる藤原武智麻呂大臣のふるきかたをうつせるかたに)
 歌 **面影**を 今もみなみの 藤の花 さかゆる山の 寺にのこりて
 (1594) (をりたる紅葉の枝を書きたるに)
 歌 一えだに あまたの木木の **面影も たつたの紅葉** 見るここちして
 (1616) (ふるきかがみに人のうたこひければ)
 歌 手にとれば うつるとなしに いにしへの **面影**見ゆる ますかがみかな
 (1790) (恋のうたども)
 歌 **面影**に かかりてもとな かぎろひの 一め見し子が わすらえなくに
 (1836) (後のあした)
 歌 露霜の おきて別れし 朝戸出の 君がすがたし **おもかげ**に見ゆ
 (1882) (花によす)
 歌 秋の野に 咲く花見れば **おもかげ**に 見えつつもとな 妹をしぞ思ふ
 (2214) (ちかき世ぶり桜花のうた)
 歌 かげろふの もゆる春日に 立出でて ふりさけ見れば あしひきの 山の尾上は きのふけふ 雲
 も霞も 色そひて にほふさくらの 花ざかり しるもしらぬも うちむれて 山分衣 はるばると ひ
 ばりなく野の はつわらび をりをり通ふ 春風も 袖にえならぬ 花の香や 見過しがたき 道のべの
 木の本ごとに たちよりにて なづさひゆけば 唐錦 こきまぜておる 青柳の いと長き日も すみぞめ
 の ゆふべになりて いとどしく まさる色香を あたらしみ 故郷人は うらむとも よし一夜はと
 くさまくら あかぬ木陰に 旅寝して 猶うば玉の よもすがら かすむ木の間の 月影に 見るほども
 なく 山寺の かねのひびきも ほのぼのと 花よりしらむ 山かづら かかるながめの 世には又 あ
 らしも絶えし 高根より さしものどけき 朝日影 うつろふ枝に こづたひて なく鶯の 羽風にも
 ただ一ひらは おのづから ちりくる色も しづかにて 見るにはあかぬ 花染の 衣の袖に 引きよち
 て をりかざしつつ けふもなほ 家路わすれて 梓弓 春の山べの 桜がり 世のうき事も 此ごろは
 しばし忘れて あるものを そも一年に 二たびは あひみぬ春と おもふにも あかぬは花の さかり
 にて ちらぬ日数を ながかれと しめ引きはへて ちはやぶる 神にもいのり 人ごとに 心のかぎり
 をしめども とまらぬいろを いかにせむ 此花ゆゑの としごとの 心づくしを かぞふれば まだ白
 雪の ふるとしに 見まがふ木木の 梢より **その面影**を 思ひそめ 日数つもれば あらたまの 春立
 ちかへる 山端に 心もかかる 朝霞 かすみそむれば 谷川の こほりのひまの はつ花は はつかに
 さけど 初草の 野べの雪間も かた糸の よるよるは猶 さえかへり ただいたづらに 春の日も あ
 また重なる から衣 ひもやや長き きさらぎや 吹来る風も 寒からで 真木の板戸の 朝戸出に 庭
 の一木を ながむれば 花の下ひも とききぬと このもかのもとに 咲きそめて 今はさかりも ほどち
 かみ 吉野たつたの おくまでも ころろかるる 八重がすみ 深くなりぬる ゆふべより 雲の雁
 の 玉づさも かきくらしふる 春雨に うつろふ色を 思ひねの 暁がたの 山おろし ふくかすれ
 ば 時のまに なべての桜 さくと見し 昨日の花も 春の夜の夢

いのうえふみお

● 『調鶴集』 - 3 (0) 首 (井上文雄の生没: 1800 - 1871年)
 (文雄) (慶応三年板本)

(106) (八重桜)
 歌 をと女子が 物はぢしたる **おもかげ**に 匂ひいでたる 八重ざくらかな
 (575) (契他生恋)
 歌 後のよと 契はおけど いかならむ **面影**さへに うまれかはらば
 (789) (老女)
 歌 おく霜に たわむおい木の ふし柳 なびきし春の **面かげ**もなし

● 『琴後集』 - 18 (2) 首 (1801-1808年)
 (春海) (文化十年板本)

(7) (元日雪のふりければ)
 歌 雪ながら あくる朝戸に さく花の **おもかげ**みせて 春は来にけり

- (82) (梅)
歌 なつかしき 花のゑまひを みし夢の おもかげうかぶ 梅の下かげ
- (93) (月前梅)
歌 梅のはな かをるやそれと みし夢の おもかげたどる 春のよの月
(198) (よしの山の花のさかりをみてかへり来て人のかたるをききて)
- 歌 花はみな 雲とぞかたる 一言に おもかげうかぶ みよしの山
(509) (七首) (七日の夜秋の七くさをよめる)
- 歌 棚機の おもかげみせて 沢水に すがたをうつす をみなへしかな
(577) (月)
- 歌 おのづから すまもあかしも おもかげに うかぶは月の 夜比なりけり
(603) (さくら河の月)
- 歌 みし春の おもかげかへて 桜川 あきはかつらの はなぞながるる
(651) (月前遠情)
- 歌 月にこそ おもかげうかべ 昔みし ままの入江の 秋のうら波
(781) (枯野をゆくとして)
- 歌 霜やたび ふるのの千草 枯れふして 花に分来し 面かげもなし
(917) (わらはよりみける人を心がけて)
- 歌 はねかづら なつかしとみし 面かげを かけてやいまに 恋ひわたらまし
(957) (逢増恋)
- 歌 あはぬ間の 心なりせば おもかげの 身にそふばかり 思はましやは
(1005) (並面恋)
- 歌 おもかげを とにもうつせば つつ井づつ むづつの水も むつまじきかな
(1017) (寄月恋)
- 歌 恨みわび なみだに月は くもれども なほおもかげの **立ちそはりつつ**
(1208) (月前懐旧)
- 歌 おもかげも 見し世ににたる 秋なれば 月のかがみも むつまじきかな
(1288) (如是相)
- 歌 水の上に うつろふ月の おもかげは ありとみゆるも 何かつねなる
(1553) (井)
- 歌 山ざとの むかししのばん をとめ子が おもかげうかべ 御井のま清水
(1654) (詠王昭君歌)
- 歌 雪まじり あられみだれて 夜もすがら 北ふく風の あらまましき 夜床の上に つくづくと 枕
そばだて きしかたを 思ひいづれば 人の世は ゆめなりけりな しづたまき いやしき我も 宮姫と
かずまへられて をすのうちに いつかれし世は あや錦 袖にかさねて 白玉を かづらにしつつ ま
すかがみ 見るおもかげの かぐはしき 花のゑまひを 我ながら われとたのみて 大王の めぐみの
露し あまねくは もれじとこそは 思ひつつ 有りけるものを さがなきや 筆にまかする うつし絵
の あらぬすさみの いつはりを 正しもあへぬ うきふしは せんすべをなみ いひしらぬ 国の界に
はるばると いでたつ道に おきそはる 袂の露の きえかへり 引きとどめたる 駒の上に しばしか
きなす 四の緒の たえぬ恨を はるけなん 世こそしらね をしからぬ 命と思へど 塵の身の ち
りもうせなで 春たてど 花もにほはず 秋来ても 紅葉もみえぬ あらやまの 岩かきこもる ふせ庵
に われにもあらで いたづらに 年はかさねつ おもひきや こともかよはぬ 国人を つまとむつび
て たをやめの まとひもなれぬ かは衣 袖さしかへて もろねせんとは
(1679) (棚倉のかうの殿の北の方うせ給ひての又のとしのはる、花のもとにこそをしのぶといふこ
とを、人人によませ給ひける時よみて奉れる歌)
- 歌 年月は ながるとすれど 立ちかへり 春こそ来ぬれ さく花は ちりぬと見しも 春くれば また
もにほへり 世のことは かくこそ有りけれ よしやさは いにけん人も さらにあふ 時もやあると
すみれさく 御園の芝生 かき分けて 露ふみならし 朝戸出に 君はこふれど 八重霞 たちやへだつ
る 春鳥の 来なく梢を をりかざし 陰におりて ゆふ庭に 君はまでども 入日さす かげやをぐ
らき 面影に **たつとはすれど** まさかには あひもみましや うつせみの 人のこの世は はかなかる
ならひといへど 花よりも あだなるものと おもひきや君

● 『うけらが花初編』 - 15 (4) 首 (1802年?)
(千蔭) (享和二年板本)

- (63) (早春雪)
歌 ひととせの 月と花との 面かげを 春たつそらの 雪に見るかな

(113) (江春月)

歌 ままの江や 玉もかりけむ **面かげ**も ほのかにうかぶ 春のよの月

(144) (女すのもとにゐたるに、をとこものいふ、桜の花さけり)

歌 さくら色の きぬのほひも さく花も **面影にのみ** あすや**たたまし**

(161) (石ゐのもとに立ちて桜のちるをみて)

歌 ままのゐに **立ちならしけむ** をとめ子が **おもかげ**みせて ちるさくらかな

(201) (霞中花)

歌 宮ひめの おもがくしせし **面かげ**に 滝のみやこの 花ぞかすめる

(315) (山家卯花)

歌 ふみわけて とひこし雪の **おもかげ**に うの花咲ける をののやまざと

(779) (神無月のやうかの日、あの津の君の染みの荘へまかりて紅葉を見てよめる)

歌 みそのふは 春おぼえけり 飛ぶ蝶の **おもかげ**みせて このは散りつつ

(871) (名所雪)

歌 みし花の **おもかげ**さらぬ よしの山 かをるばかりの 雪のあけぼの

(880) (雪中遠情)

歌 はし**立**や ききわたりこし **おもかげ**も こころにかかる けふの雪かな

(1061) (雪中恋人)

歌 待ちわびて 袖うち払ふ **おもかげ**も ゆきみまほしき 妹が門かな

(1159) (おもひいづ)

歌 人もかく おもひはいづや 思ひ出でて ながむる空に **おもかげぞたつ**

(1333) (湖水眺望)

歌 ふせの海や を舟よせけん 宮人の **面かげ**うかぶ 垂姫の崎

(1346) (人の一めぐりに、夏懐旧)

歌 みし人は **面影**もなし めぐりきて けふにあふちの 花は咲けども

(1368) (父君うせ給ひて十あまり三年に成りぬる八月の十三日、人人をつどへて、月の前にむかしをしのぶといふを題にて歌よみて手向け奉るによめる)

歌 **面影**を あふぎてしのび 古ことを ふしてはおもふ 袖の月かな

(1595) (京の小沢蘆庵、春よりやみて七月十日あまり一日によはひ七十ちあまり九にてみまかりぬるよし、雪岡大徳よりいひおこせければ、よみける歌并みじかうた)

歌 千はやぶる 神の御世より 伝へこし 吾が国ぶりは うつせみの 世の人ごとに 誰も皆 うたひ出づれど 長ちはの 神のまもらす すなほなる 大路はゆかず 八十くまの さき道をしも かにかくに たどりたどりて 大かたは 在経る中に 天雲に おもひあがりて 真心を たてつる人と 風の音の 遠音に聞きて 相見まく おもふものから 岩がねの ごとしきみ山 落ちたぎつ かしこき河を 三栗の 中にへだてて 老の身の せんすべをなみ 下にのみ しのべる心 おのづから かよひやしつる はゆまぢの 駅のをすず ふりはへて 言伝てしより まそ鏡 むかひみつとも かたみに ことはとはねど 其人の **面影**をしも 見るばかり おもひなりにて 玉あへば あひぬるものと むつまじみ おもへるわがせ 初秋の 露とけぬると 玉づさの 便にききて 現とも いめともわかず 麻ぎぬの そでしをりつつ ただなきに なきなげかれつ しかれども 年をあまたに わがせこが ひろひ集めし 玉の声 世にひびきつつ 五百千千の としは経ぬとも かぐはしき 名は国もせに 残らざらめや

● 『藤簞冊子』 — 2 (0) 首 (1804年)

(秋成) (文化三年板本)

(195) (楊太妃一捻紅を)

歌 いささめの いろにそみても 其君の **面影**見する 花の名だてに

(302) (傷岡雄之亡妻歌)

歌 夏過ぎて 秋は来ぬらし 吹く風の めにし見えねば 朝影を 涼しと人の 夕暮は さびしかりけり 荻の葉の 音はさやぎて 蟋蟀の 鳴く声きけば いにしへの 人のあはれと いひ次ぎし 時にはなりぬ 其秋の あはれちふことを 我のみの 身にしおふかは 妹なねは 秋たつ空の すずろにもよみちふ国を 何しかも 古さとのごと 立ちていにし むなしき牀に とどまりて いかによとかな 男じもの 腋ばさみたる はらからの 緑児とともに 泣く子なす したひなげかひ こいまるび 足摺しつつ まどふらん 人こそあはれ あすよりは いかによせましや 年月を 長くともひて かたらひし ことの悔しき 妹なねは よみちふ国に さきだちし うなゐはなりに あひ見つつ 手携はりて 遊ぶらん **面影**をだに 見まくほり 枕によれど いねがてに 夢もむすばず 荻の葉に 秋風さやぎ こほろぎの 鳴くよひよひの さね床ぞあはれ

● 『六帖詠草拾遺』－ 2 (1) 首 (1811年)

(蘆庵) (嘉永二年板本)

(245) (入夜恋佳妓)

歌 くるるまで 見し舞姫の 面かげの めにさへぎりて よるもねられず

(263) (寄月変恋)

歌 わが中の 浪こす袖の 月みても たのめし人の おもかげ ぞたつ

ろくじょうえいそう

おざわろあん

● 『六帖詠草』－ 12 (0) 首 (小沢蘆庵) (1811年)

(蘆庵) (文化八年板本)

(234) (月前落花)

歌 面かげを 後もしのべと やよひ山 有明の月に 花のちるらん

(1204) (不見恋)

歌 我ながら あやしやいつの 契とて みぬ面影の 身にはそふらん

(1243) (おもかげは)

歌 おもかげは みにそふかひも なかりけり 心のかよふ 契ならねば

(1266) (被忘恋)

歌 わするるか さらばわすれも はてずして 何なかなかに のこる面影

(1394) (勝義があづまへまかりけるみちの記をみするに、くさぐさをかしきことおほかなる中に、かすめるふじのあけぼのの気しきいはんかたなくよくかきたるに、かきそへたりし)

歌 みずもあらず みもせぬふじの 面かげを さながらうつす こののはの色

(1454) (王昭君)

歌 面かげを うつしかへずは さすらふる 我がうきめには 誰かあふべき

(1653) (初雪のあした、喜之がありしよにとひしをおもひいでて)

歌 消えかへり おもひぞいづる ふるきよの 面影うかぶ けさのはつ雪

(1658) (岐阜の安乗院身まかりける、としごろ詠草のついでに文はかよひけれど、いまだたいめもせざりし、いんさき東にくだりしとき、道までいでられけれど、それもさはりてたいめせざりしことよなどおもひいでて)

歌 面影も のこらでいとど はかなきは まだみぬ人の わかれなりけり

(1660) (この人まだいとわかければ、病のおこたることもやとたのむかたもありしを、今はいかがはすべき、かぎりあれば野べのおくりのまうけなどするに、心まどひめもきり何のこともおぼえず、なきがらながらあるほどはなほなきやうにもおもはねば、今はといへど別れがたきを、わが思ふほどは人はいかがはあるべき、夜もいたう更けぬといひそそのかす僧どもの誦経する声をきくも、すべてあらぬよに行きたらんこちして我にもあらず、さはいへどはたとどむべき道にもあらねば、いまひとめよのなごりにとうちみるに、かうやうの人はけはひかはりぬる物とかききしを有りし佛露たがはず、ひたひがみのうちかけられたるいつのよにかまたみとなみだせきあへず)

歌 黒かみの みだれてかかる 面影を ながきかたみと みるぞかなしき

(1672) (あひなれける女にはなれける頃、雅胤のもとより、なれにしを思ひかへさばなきとこにさぞ有りしよの恋しかるらん、とあれば申しつかはしし)

歌 なれなれし 昔にかへす 夢覚めて むなしき床に のこる面影

(1928) (二子乗舟)

歌 面影に 今もうかびて 行く舟の ゆきけん君は かへりましきや

(1944) (陟岵)

歌 ちち母の たびなる我を おもふらん 待つらんさまの 面影にみゆ

● 『筑波子家集』－ 4 (2) 首 (1813年?)

(文化十年板本)

(95) (あした)

歌 うつり香の 残るばかりは 夢ならで 夢かとたどる よはのおも影

(102) (ねざめのこひ)

歌 うたたねに みえつる夢は はかなくて つれなく残る 人のおも影

(121) (いへこぼちてあらたにつくりかふるに、としごろのなごりのみかは昔の事のいよよ遠くさへなりもてゆく心ちして)

歌 いへはみな あらずなりても なき人の おも影のみぞ 立ちかへるべき

(157) (秋のはじめつかたしづ子のなくなるをかなしびて)

歌 わたつみに くむとはなしに ひをかさね しほたれまさる あまごろも まどほにだにも 逢ふ事

の かたきわかれと なりにける 玉のゆくへと きくからに ことぞともなき 空をのみ ながめてふ
れば くもまよひ おちくるあきの 夕風の うたても萩に おとづれて いとど心も みだれぬる 露
のみしげき あさぢふに たれをまつむし かひなしと おもふものから 何しかも われもきほひて
なかるらん 花のあしたも 月のよも うれしきことも うきことも あるにつけては ともがきの へ
だてざりつる なからひは いかなるすぢか 玉かづら **おもかげにのみ** **たちそひて** つきしもはてず
したひつつ ふるの中道 なかなかに うき数そはる かなしさを いかほのぬまの いかさまに いひ
しもやらば 水のあわと 消えにし人を わすられぬべき

● 『八十浦之玉』 - 2 (0) 首 (1822年以降?)

(天保四年・文政十二年・天保七年板本)

(202) (恋のうた)

歌 足引の 此むかつをの をなののをの をてもこのもに さすわなの かなるましづみ わぎも子が
ゑまひまよひき 真玉手の 玉手さしかへ かきむだき あひぬる時は 日にけに やけたるむねも し
まらくは 思ひなぎぬと あそそには かつはたのみて かきほなす 人目をしぬび はふつたの わか
れしくれば **面かげ**の もとな見えつつ あやにこほしも

(873) (源朝臣正韶)

歌 小泊湍の はつせの山の 桜花 山のかひより 桜ばな かすみの間より ほのかにも 一目見しご
と 咲きにほふ はなのゑまひを おもはぬに よそに見しより **面影**に もとな見えつつ くるしくも
わすらえぬかも あかねさす ひるはしみらに ぬば玉の よるはずがらに すがのねの おもひみだれ
て あなくるし あないきづかし そこゆゑに 身さへやせつつ 物おもふわれぞ

● 『三草集』 - 14 (0) 首 (1827年)

(定信) (文政十一年頃板本)

(163) (鏡のうらに鑄させぬる二首)

歌 われならぬ みをもしるかな たらちねの **おもかげ**それと むかふところに

(164) (鏡のうらに鑄させぬる二首)

歌 さればさり むかへばむかふ **おもかげ**の 残るかがみの うちや何なり

(224) (月をよめる)

歌 **面かげ**も むかへばそれと うかびきぬ 代代のかたみの 秋のよの月

(367) (その御山のかぞいろの御寺にまうでて)

歌 なき人の **おもかげ**うかぶ 花の色も 遠くへだてて かすむ春かな

(446) (扇)

歌 半出づる 月の**おもかげ** あらはれて まねけばかよふ 袖の秋かぜ

(548) (なが月十三夜に)

歌 めでそめし その代の人の **おもかげ**も しのぶ夜遠き なが月のかげ

(573) (暮秋のけしきをよめる中)

歌 あぢさゐの 花の**面かげ** 猶みえて 尾花が雪に 秋ぞふり行く

(600) (草を)

歌 ちるは雪 残るは霜の **おもかげ**や はなも末ばの 池のかれあし

(651) (たかがりを)

歌 かりごろも かたのの春の **おもかげ**や 雪の花ちる 明ぼののそら

(714) (かぞいろのもち給へりし鏡を)

歌 ますかがみ むかへばうつる **おもかげ**は さらぬかたみの 契とぞみる

(850) (そのころよみしがうち)

歌 ともし火は きえてもきえぬ **面かげ**を やみにぞしたふ あかつきの床

(885) (こは重服ぬぎしをりにか有りけん)

歌 うちなびく 尾花のそでに なき人の **おもかげ**さそふ 庭の夕かぜ

(914) (寛光君三十三回の法会のをりよみしが中)

歌 世は遠く よしへだたても まちかきは 君が御声に 君が**おもかげ**

● 『桂園一枝』 - 4 (2) 首 (1830年)

(景樹) (文政十三年板本)

(596) (聞恋)

歌 ききしより ころろあてなる **おもかげ**の いやはかなしな 夢にさへ見ゆ

(647) (題しらず)

歌 やがて身を はなれざりけり くろかみの すゑふむばかり 有りし**面影**

(648) (題しらず)

歌 このごろは 夢もうつつも ひとつにて あけぬくれぬと 面かげに立つ

(953) (題しらず)

歌 よき人を よしとよく見し 夕より よしのの花の 面かげに立つ

● 『柿園詠草』 - 9 (3) 首 (1830年)

(諸平) (嘉永七年板本)

(139) (朝まだきより千本の花を見つつよみける)

歌 おもかげに 見つつしのばん 行末の 春もうれしき はなざかりかな

(315) (としどしの八月十五夜、若浦にてよめる歌の中に)

歌 わかの浦の 月にむかしの おもかげも うかぶるばかり 身は老いにけり

(511) (等思兩人)

歌 おもかげも 立ちあらそへる 二上に ただよふ雲や 吾が身なるらん

(521) (春恋)

歌 見しひとの おもかげなびく 若草に すがる胡蝶も なつかしきかな

(538) (恋の歌の中に)

歌 おもかげを うき身にそへて たちが緒の 絶えにし夢や さらにむすばん

(626) (古戦場といふ題にて歌よみける中に、しづが岳を)

歌 いつまでか そのおもかげの なびくらん 月より見えし 天のよさづら

(887) (又のとしのその日に)

歌 あし垣に ほたるはなちし おもかげは ひるさへみえて 露ぞみだるる

(891) (夜懐旧)

歌 更けゆけば むかしのよにや かへるらん 見しおもかげの さだかにぞたつ

(999) (月前花)

歌 うちかすむ 月に見しよの やどとへば おもかげばかり 花にほふなり

● 『浦のしほ貝』 - 9 (3) 首 (1845年)

(直好) (弘化二年板本)

(638) (河霧)

歌 をりくべて 焼かん煙の おもかげに きりこそかかれ うちの柴舟

(1037) (春夜増恋)

歌 いかにせん 梅の匂ひは みにしみて 霞める月に 面かげぞたつ

(1044) (不会恋)

歌 はかなしや まだみぬ人の おも影は たてどもそれと しらぬなりけり

(1053) (隔年恋)

歌 昔見し わがおも影を とどめても おもふらんこそ 悲しかりけれ

(1071) (難忘恋)

歌 たどられし たそかれ時の おもかげの さやかにまでは など残りけん

(1339) (伯父なりける人の身まかりて、又の月その日にあたりて墓にまうでて)

歌 おもかげを 思ひうかべて 向へども あらぬすがたの 君がなごりや

(1477) (葛城山)

歌 みやこより 見し面かげは かはれども おなじ雲井の かづらきの山

(1529) (返魂香)

歌 たちかへる 其面かげの なかりせば 空だきものと なりや果てまし

(1537) (達磨の持ちたる鏡に女うつれり)

歌 あづさ弓 九かへりの 春をへて ひらけし花の 面かげぞこれ

● 『亮々遺稿』 - 4 (1) 首 (1847年)

(幸文) (弘化四年頃板本)

(248) (卯花似雪)

歌 枝たわに ふりたる雪の おもかげを 夏しも見せて 咲ける卯花

(761) (亮々遺稿類題) (恋之部) (恋)

歌 旅にして 朝宵さらぬ おもかげは 逢見ん後や 身をはなるべき

(768) (亮々遺稿類題) (恋之部) (恋)

歌 よと共に おもかげさらぬ 恋なれば 夢もうつつも わかぬなりけり

(814) (聞恋)

歌 音にのみ ききつる人の いかなれば 面影にさへ たちわたるらん

けいえんいっししゅうい

● 『桂園一枝拾遺』 - 3 (0) 首 (1850年)

(景樹) (嘉永三年板本)

(74) (山桜遅)

歌 朝な朝な 心にはほふ おもかげの さかりひさしき 山ざくらかな

(290) (雲月通微明)

歌 浮雲の うすき所に なりぬらむ おもかげばかり にほふ月かな

(585) (寄鏡恋)

歌 ともに見し 其おもかげは ますかがみ 手にはとれども てにはとられず

● 『大江戸倭歌集』 - 11 (0) 首 (1860年)

(安政七年板本)

(186) (名所春月) (葛野千葉)

歌 みなせ川 ゆふべは霧の 面かげに かすみそめたる つきのしづけさ

(257) (夕花) (了仲古筆)

歌 ねても又 夢にやみえん 山ざくら この夕ばえの 花のおもかげ

(1293) (川蔭小山)

歌 ちる花の おもかげみえて 波の上に 雪をふきまく しがの浦風

(1439) (夢逢恋) (富教)

歌 夢さめて そのおもかげは 見えなくに のこるはそでの 涙なりけり

(1454) (近子荒井)

歌 鳥のねに おきわかれける おもかげの なごりはそでに 有明の月

(1490) (歌城)

歌 おもかげの おぼろに見えし わかれより さめてもかすむ 春の夜のゆめ

(1509) (独寝恋) (純正堀尾)

歌 おもひねに みしおもかげは 消果てて 吾が手枕は うつりがもなし

(1514) (恋夢) (隆殿藻刈)

歌 あまりにも おもふこころの ふかければ ゆめにもみゆる 君がおもかげ

(1908) (大塔宮五百回忌に鎌倉松が岡へをさむる歌とて人のすすめければ 駿河守頼寧)

歌 世世をへし かまくら山の 面かげを しのぶもはかな こけの下つゆ

(1911) (定家卿六百年忌に法印季文のすすめける手向の歌に月を) (少将忠学朝臣)

歌 みぬよまで おもかげうつる 今宵かな 月はむかしの 鏡とおもふに

(1972) (老後見鏡) (信近伴)

歌 むかしみし おもかげながら みてしかな 鏡もともに 老いやしぬらん

あま かるも

おおたがきれんげつ

● 『海人の刈藻』 (『国歌大観』による記号: 九 37) - 1 (0) 首 (大田垣 蓮月)

(1870年発表)

(蓮月) (明治四年板本)

(36) (古郷春月)

歌 志賀山や むかしの花の 面影も 朧にうかぶ はるのよの月

【資料編（第2章）〔琉歌〕】

※以下のデータは「面影」が歌われる『琉歌全集』の琉歌 99 首を列举したものである。

※括弧の番号は『琉歌全集』に拠る歌番号である。

※各歌の右側の表記は沖縄方言の発音であり、また歌の下部に作者の名前と歌の解説（現代語訳）がある。

1)

(38)

面影よ残す
許田の玉川に
なさけ手にくだる
水の鏡
(玉城親方朝薫)

ウムカジュ スクス
チュダヌ タマガワニ
ナサキ ティニ クダル
ミズィヌ カガミ
(タマグスイク ウェエカタ チョオクン)

解説：

許田の美しい井戸に立ち寄ってみると、昔情けのこもった手水をくんだという人の面影が、今でも水鏡に写って見えるようで、懐かしい。

2)

(92)

眺めゆる中に
面影よ残ち
山の端に入ゆる
月のらめしや
(美里王子)

ナガミユル ウチニ
ウムカジュ スクチ
ヤマヌ ファニ イユル
ツイチヌ ラミシャ
(ンザトゥ ヲオジ)

解説：

眺めている中に、月は面影を残し、西の山の端に隠れてしまった。恨めしい。

3)

(97)

秋の野にのがす
鶯のほける
春のおもかげの
残てをため
(尚穆王)

アチヌヌニ ヌガスィ
ウグイスィヌ フキル
ハルヌ ウムカジヌ
スクティ ヲウタミ
(ショオボク ヲオ)

解説：

秋の野になぜ鶯がさえずっているのか。春の面影が残っていたのか。第九〇一番歌と同様。

4)

(138)

なれし面影や
旅までもつれて
夜夜に手枕の
夢のしげさ
(宜保親方)

ナリシ ウムカジャ
タビ マディン ツィリティ
ユユニ ティマクラヌ
イミヌ シジサ
(ジブ ウェエカタ)

解説：

馴れ親しんだ面影は、旅先までもついて来、毎夜手枕の夢にしげく見え、恋しくてたまらない。

5)

(144)

宵も暁も
おぞで思出せば
花の面影の
立ちよまさて

ユイン アカツィチン
ウズディ ウビジャシバ
ハナヌ ウムカジヌ
タチュ マサティ

解説：

朝も暁もいつでも目が覚めたとき思い出してみると、恋しい人の花のような美しい面影が立ちまさるばかりである。

6) (長歌：8-8-8-8-6)

(148)

あかぬ別れ路の
面影やのかぬ
名残り有明の
月に打ち向ひ
思事やあまた
浜のまさご
(読人知らず)

アカヌ ワカリジヌ
ウムカジヤ ヌカヌ
ナグリ アリアキヌ
ツイチニ ウチンカイ
ウムクトゥヤ アマタ
ハマヌ マサグ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

飽まずに別れた時の面影が立ち退かず、その名残りの姿が有明の月にも写っている。色んな思いが湧き出て、浜の真砂のように尽きない。

7)

(165)

沙汰がしち呉ゆら
面影のまさて
はられはものかぬ
目の緒さがて

サタガ シチ キユラ
ウムカジヌ マサティ
ハラリワン ヌカヌ
ミヌヲウ サガティ

解説：

彼女が私の噂をしてくれるのだろうか。その面影が目の下にぶら下がり、払えども払えども消え去らずいつまでも目の前にちらついている。

8)

(214)

散り飛びゆる花や
糸に貫きとめて
里が**面影**や
肝にとめら
(読人知らず)

チリ トゥビュル ハナヤ
イトゥニ ヌチ トゥミティ
サトゥガ ウムカジヤ
チムニ トゥミラ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

散り飛ぶ花は糸に貫きとめ、夫の君の面影は我が胸にとめておきたい。

9)

(245)

日々に夏山の
青葉なるまでも
花の**面影**や
忘れぐれしや

フィビニ ナツイヤマヌ
アヲウバ ナルマディン
ハナヌ ウムカジヤ
ワスイリ グリシャ

解説：

日に日に夏山の木が青葉になっても、春の花の面影は忘れ難い。

10)

(264)

心あて吹かな
面影にだいんす
我肝夕間暮の
松のあらし
(本部按司朝救)

ククル アティ フカナ
ウムカジニ デンスィ
ワチム ユマンガイス
マツイヌ アラシ
(ムトウブ アジ チョオキユウ)

解説：

夕暮れの松の嵐よ、心して吹いてくれないか。夕暮れになると恋人の面影を偲ぶことだけでさえ、私の心は暗くわびしいので。

11)

(293)

見れば恋しさや	ミリバ クイシサヤ
昔さまさまの	ンカシ サマザマヌ
面影 ようつす	ウムカジユ ウツス
月のかがみ	ツイチヌ カガミ

解説：

昔の様々な面影をうつしている月の鏡を見ると、昔を恋いしのぶ情けが油然として湧き起こる。

12)

(297)

夢路通はしゆる	ユミジ カユワシユル
仲島の小橋	ナカシマヌ クバシ
さめて 面影 の	サミティ ウムカジヌ
まさて 立ちゆさ	マサティ タチュサ
(宜野湾王子朝祥)	(ジノオン フオジ チョオショオ)

解説：

毎晩夢路は仲島の小橋に通い、覚めては彼女の面影がいよいよ立ちまさるばかりだ。寝ては夢、覚めては現、恋に憂き身をやつす。

13)

(330)

別て 面影 の	ワカティ ウムカジヌ
立たば ぬきめしやうれ	タタバ ヌチミショリ
なれし匂袖に	ナリシ ニエイ スディニ
うつちあもの	ウツチ アムヌ

解説：

別れてから、面影が思い浮かべられるようでしたら、私の着物の袖に手を通して見て下さい。私の匂いを袖に移してありますから。

14)

(339)

思事のあても	ウムクトゥヌ アティン
よそに語られめ	ユスニ カタラリミ
面影 とつれて	ウムカジトウ ツイリティ
忍で拝ま	シヌディ フウガマ
(国頭親方)	(クンジャン ウェエカタ)

解説：

思うことがあっても、彼女以外のよその人に語ることができようか。彼女の面影と共に忍んで行き、彼女に会い、積もる思いを語りたい。

15)

(351)

しばし片時も	シバシ カタトウチン
忘る間やないらぬ	ワスイルマヤ ネラヌ
かなし 面影 と	カナシ ウムカジトウ
一期つれて	イチグ ツイリティ
(美里王子)	(ンザトウ フオジ)

解説：

しばし片時も彼女のことは忘れる暇はない。その愛しい面影と一生いつも一緒である。

16)

(358)

誰つれて今宵
月や眺めゆが
面影や立てて
一人さらめ

(読人知らず)

タル ツイリテイ クユイ
ツイチヤ ナガミユガ
ウムカジャ タティティ
フィチュイ サラミ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

誰を連れて今宵の月は眺めるか。彼女の面影は目の前に立ててはいるが、結局月を眺めるのは自分一人であろう。一人では侘びしい。

17)

(388)

宵も暁も
馴れし**面影の**
立たぬ日やないさめ
塩屋の煙

(与那原親方良矩)

ユイン アカツィチン
ナリシ ウムカジヌ
タタヌ フィヤ ネサミ
シュヤヌ チムリ
(ユナバル ウエエカタ リヨオク)

解説：

朝も晩も馴れ親しんだ人の面影は、目の前に立たない日とってはない。それはちょうど塩屋の煙が立たない日はないようなものだ。

18)

(523)

夕間暮とつれて
立ちゆる面影に
あさましや我肝
とれて行きゆさ

(読人知らず)

ユマンガキトウ ツイリテイ
タチュル ウムカジニ
アサマシヤ ワチム
トゥリテイ イチュサ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

夕間暮れとなると同時に恋人の面影が目の前に見えるようで、浅ましいことに我が心は呆然となり、何を考えることもできなくなっていく。

19)

(546)

けふやのがやゆら
面影のまさて
とかくなま時分
我沙汰めしやいら

(読人知らず)

キユヤ ヌガ ヤユラ
ウムカジヌ マサティ
トゥカク ナマジブン
ワサタ ミシエラ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

今日はどうしたのか、あのお方の面影がいつもより激しく立ちまざる。たぶん今頃、私のうわさでもしていらっしやるのだろう。

20)

(561)

里がいまゐ月の
近くなてさらめ
夢も**面影**も
しげくなとす

(読人知らず)

サトゥガ イメズィチヌ
チカク ナティ サラミ
イミン ウムカジン
シジク ナトウスイ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

夫が帰っていらっしやる月が近くなったのであろう。夢も毎晩のようにしげく見るようになり、面影もしげく立つようになった。

21)

(578)

朝夕**面影**の
いきやす忘れゆが
あはれこの母や
あとに残て

アサユ ウムカジヌ
イチャスイ ワスイリユガ
アワリ クヌ フッフウヤ
アトウニ ヌクティ

解説：

朝も晩もその**面影**をどうして忘れることができよう。子供を先立て、哀れこの母だけ後に残り。

22)

(594)

ねても**面影**の
忘らぬ故ど
夢に声**立てて**
浮名**立ちゆる**
(惣慶親雲上忠義)

ニティン ウムカジヌ
ワスイララヌ ユイドウ
イミニ クイ タティティ
ウチナ タチュル
(スウキ ペエエチン チュウギ)

解説：

寝ている間も恋人の**面影**を忘れることができず、夢を見ていながら声を立て、とうとう浮名が立つようになった。

23)

(603)

義理ともて互に
振別れてをすが
馴れし**面影**の
朝夕まさて
(読人知らず)

ジリ トウムティ タゲニ
フヤカリティ フウスイガ
ナリシ ウムカジヌ
アサユ マサティ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

義理だと思ひ、互いに別れてはいるが、馴れ親しんだ**面影**はどうやって忘れることができよう。朝も晩も思いまさるばかりだ。

24)

(660)

ままならぬ世界に
面影や残ち
行衛ないぬ人ど
百恨めしやる
(小祿朝恒)

ママナラヌ シケニ
ウムカジャ ヌクチ
ユクキ ネヌ フィトウドウ
ムムラミシャル
(ウルク チョオコオ)

解説：

自由にならないこの世に、**面影**だけ残しておき、生きているのか死んだのか、行方がさっぱり分からなくなった人が非常に恨めしい。

25)

(672)

いきやす忘れゆが
なれし**面影**の
うち向かる方に
向かて**立てば**
(小祿按司朝恒)

イチャスイ ワスイリユガ
ナリシ ウムカジヌ
ウチンカル カタニ
ンカティ タティバ
(ウルク アジ チョオコオ)

解説：

どうやって忘れようか、馴れ親しんだ**面影**が自分の向く方にいつでも見えるので、忘れ去ることができない。

26)

(713)

拝でなつかしやや
まづせめてやすが
別て**面影**の
立たばきやしゆが

ヲウガディ ナツィカシヤヤ
マズィ シミティ ヤスイガ
ワカティ ウムカジヌ
タタバ チャシュガ

解説：

お目にかかり、今までの悲しさはまず幾分慰められたが、今度お別れした後に、面影が立ったらどうしようか。

27)

(755)

見ちやる**面影**に
我無蔵よともて
いつも忘ららぬ
恋の迷ひ
(二階堂彦太郎)

ンチャル ウムカジニ
ワガ ンゾユ トウムティ
イツィン ワスイララヌ
クイヌ マユイ
(ニカイドオ ヒコタロオ)

解説：

ふと見た女の面影が自分の妻によく似ていたので、いつも忘れることのできない恋の悩みに迷うこの頃である。

28)

(793)

わがよだつはんち
里に打ちはけて
面影の**立たば**
我胸ともれ

ワガ ユダツイ ハンチ
サトウニ ウチハキティ
ウムカジヌ タタバ
ワ ンニ トウムリ

解説：

私の前掛けを外し、貴方にかけてあげます。別れた後、私の面影を思い出される場合は、この前掛けを私の胸だと思って下さい。

29)

(853)

今日やお行逢拝で
いろいろの遊び
あちやや**面影**の
立ちゆらとめば
(読人知らず)

キユヤ ウィチェ ヲウガディ
イルイルヌ アスイビ
アチャヤ ウムカジヌ
タチュラ トウミバ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

今日はお会いし、色々な遊びをし、非常に嬉しかったが、明日は今日の面影を思い出されるであろうと思うと、それが切なく思われる。

30)

(857)

面影のだいんす
立たなおき呉れば
忘れゆる暇も
あゆらやすが
(本部按司朝救)

ウムカジヌ デンスィ
タタナ ウチクキリバ
ワスイリユル フィマン
アユラ ヤスイガ
(ムトウブ アジ チョオキュウ)

解説：

面影は目の前に立たなければ、忘れる暇もあるはずだが、ずっと立っているので、忘れられない。

31)

(901)

秋の夜どやすが	アチヌ ヌドゥ ヤスイガ
鶯のほける	ウグイスイヌ フキル
春の面影の	ハルヌ ウムカジヌ
残てをたら	ヌクティ ヲウタラ

解説：

秋の夜であるが、鶯がさえずっている。もしや春の面影が残っていたのであろうか。第九七番歌と同様。

32) (形式：7-5-8-6)

(921)

あかぬ別れの	アカヌ ワカリヌ
つれなさや	ツィリナサヤ
朝夕面影の	アサユ ウムカジヌ
いつものかぬ	イツィン ヌカヌ
(読人知らず)	(ユミビトウ シラズ)

解説：

飽かぬ別れのつれなさは、面影が朝夕目の前にちらつき、消え去ることがない。

33) (形式：7-5-8-6)

(1000)

ねてもさめても	ニティン サミティン
忘らぬ	ワスイララヌ
なれし面影の	ネリシ ウムカジヌ
目の緒さがて	ミノヲウ サガティ

解説：

恋しい人の面影が絶えず眼前にちらつき、寝ても覚めても忘れられない。

34)

(1049)

菊よやしなやり	チクユ ヤシナヤイ
百代まで見ちやる	ムムユ マディ ンチャル
人の面影や	フィトゥヌ ウムカジヤ
花に残て	ハナニ ヌクティ
(豊里里之子)	(トユザトウ サトズヌシ)

解説：

菊を作り、百代まで長生したという人の面影が、花にも残り長命そうの相が伺われるのが面白い。(菊には百代草という異名がある)。(ストーリーも面白い)。

35)

(1063)

なれし面影や	ナリシ ウムカジヤ
忘れてやりしゆすが	ワスイテイ シュスイガ
<u>立別る</u> 袖に	タチ ワカル スディニ
匂まさて	ニヲウイ マサティ

解説：

慣れ親しんだ恋人の面影は、忘れようとするが、別れる時の袖の匂いがゆかしく、どうしても忘れられない。

36)

(1103)

面影や朝夕
わが袖にすがれ
また拜む間の
伽にしゆもの
(読人知らず)

ウムカジヤ アサユ
ワガ スディニ スイガリ
マタ ヲウガム ウエダヌ
トウジニ シュムヌ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

別れた後も面影は絶えず我が袖にすがってくれ。そうすればまた会うまでの間の相手とすることができる。

37)

(1133)

昔眺めたる
波の上のお月
なまに面影の
照りよませて
(神村親方)

ンカシ ナガミタル
ナミノウキヌ ウツイチ
ナマニ ウムカジヌ
ティリユ マサティ
(カミムラ ウエエカタ)

解説：

昔見た「波の上」(神宮である月見の名所)の月は、今も変わらず月光が照りまさって見える。

38)

(1137)

夜夜に手枕の
なれし面影や
誰がつれてくいたが
旅の空に
(義村王子朝宣)

ユユニ ティマクラヌ
ナリシ ウムカジヤ
タガ ツィリティ クキタガ
アビヌ スラニ
(ユシムラ ヲオジ チョオセン)

解説：

毎夜毎夜に、手枕を交わしなれた妻の面影を夢に見るが、一体この面影を旅の空まで誰が連れてきてくれたのであろうか。

39)

(1140)

別れゆる袖に
匂移ちたばうれ
面影の**立たば**
伽にしやべら

ワカリ ユル スディニ
ニエイ ウツチ タボリ
ウムカジヌ タタバ
トウジニ シャビラ

解説：

別れるにあたって、あなたの袖の匂いを私の袖に移して下さい。あなたの面影が立ったら、袖の匂いを伽にし、我が心を慰めることにしよう。

40)

(1141)

わくの糸かせに
くり返し返し
かけて面影の
まさて**立ちゆさ**

ワクヌ イトウ カシニ
クリ カイシ ガイシ
カキティ ウムカジヌ
マサティ タチュサ

解説：

おだまき(枠=わく)に糸かせをくり返し返し巻き付けていると、恋しい人の面影がくり返し眼前にちらつき、思慕情けが増すばかりである。

41) (長歌：8-9-7-8-8-8-8-6)

(1165)

桑もりになづけ
 上の山に待ちよらば
 いまうれ雨ふり
 名付けて来ならば
 ヨモンシヤハテンシヤ
 我事欠ぎゆめ
 事や欠かねども
 馴れし面影の
 まさて立ちゆら
 (読人知らず)

クワ ムイニ ナズイキ
 ウキヌ ヤマニ タチュラバ
 イモリ アミフイ
 ナズイキティ クナラバ
 ユムンシヤ ハティンシヤ
 ワガクトウ カジユミ
 クトウヤ カカニドウム
 ナリシ ウムカジヌ
 マサティ タチュラ
 (ユミビトウ シラズ)

解説：

桑の実をとっていることにかこつけ、上の山に待っているの、いらっしゃい。もし貴方が雨降りにかこつけて来なかったら、いいよ、困らないよ。だが、馴れし面影が立ちまさるであろうと思う。

42)

(1201)

寝れば夢しげさ
 おぞで面影の
立ちまさりまさり
 忘れぐれしや
 (読人知らず)

ニリバ イミ シジサ
 ウズディ ウムカジヌ
 タチマサイ マサイ
 ワスイリ グリシヤ
 (ユミビトウ シラズ)

解説：

寝れば夢をしげく見るし、覚めれば恋しい面影が眼前にちらつき、とても忘れられない。

43)

(1204)

面影の立てば
 宿にをられらぬ
 できややうおしつれて
 遊で忘ら

ウムカジヌ タティバ
 ヤドゥニ ヲウラリラヌ
 ディチャヨ ウシツイリティ
 アスイディ ワスイラ

解説：

一緒に楽しく遊んだ時の面影を思い出すと、家にじっとしていることができない。さあ、今日も連れ立って遊び、苦しさ等を忘れてしまおう。(よく働き、よく遊べ!、という。)

44)

(1226)

一人打向かて
 空よ眺めれば
 つれな面影や
 月につきやぬ

フィチュイ ウチンカティ
 スラユ ナガミリバ
 ツイリナ ウムカジヤ
 ツイチニ ツイチャン

解説：

一人空に向かい、眺めれば、恋人の面影が月についているように思われ、つれなく悲しい。(恋人が死んでしまった、月を見れば殊に故人の面影が思い出される、という。)

45)

(1228)

面影に匂の
立ちまさりまさり
 暮らさらぬあてど
 忍で着ちやる
 (読人知らず)

ウムカジヌ ニエイヌ
 タチマサイ マサイ
 クラサラヌ アティドゥ
 シヌディ ツイチャル
 (ユミビトウ シラズ)

解説：

恋人の面影に更に恋人の匂いが立ちまさり、我慢できなかつたので、忍んで来た。(男性の歌)

46)

(1229)

面影の立てば

自由なゆめ我身の

夜夜に風たよて

互に語ら

ウムカジヌ タティバ

ジユ ナユミ ワミヌ

ユユニ カジ タユティ

タゲニ カタラ

解説：

恋人の面影が立ったらとって、自分が自由にできるものではない。夜毎夜毎に風を便りにし、互いに思うことを語ろう。(女性の歌)

47)

(1289)

絵に写ちおけば

面影やあすが

物言ひ楽しみの

ないらぬつらさ

キニウツチ ウキバ

ウムカジャ アスイガ

ムヌイ タヌシミヌ

ネラヌ ツィラサ

解説：

人の姿を絵に写しておけば、なるほど面影はさながら(そのまま)その人を見るようであるが、物を言ったり話をしたりする楽しみのないのが侘びしい。

48)

(1300)

義理の別れ路や

かにもつれなさめ

朝夕**面影**や

いつものかぬ

ジリヌ ワカリジヤ

カニン ツィリナサミ

アサユ ウムカジャ

イツィン ヌカヌ

解説：

義理のための別れは、こんなにも辛いものであるか。朝夕面影は目の前から立ち退かず、いつも見えるような思いである。1784 番歌と同様。

49)

(1307)

別て**面影**の**立たば**伽めしやうれ

馴れし匂袖に

うつちあもの

ワカティ ウムカジヌ

タタバ トウジ ミシヨリ

ナリシ ニエイ スディニ

ウツチ アムヌ

解説：

別れた後私の面影を思い出された時は、この着物を伽にして下さい。私の匂いを袖に移してあるので。

50)

(1309)

沙汰しゆゆら今宵

照る月もきよらさ

無蔵が**面影**の**立ち**よまさて

サタ シュユラ クユイ

ティル ツィチン チュラサ

ンゾガ ウムカジヌ

タチュ マサティ

解説：

彼女が私のうわさをしてくれるのであろう。今宵は月も美しく輝き、彼女の面影が特に強く思い出される。

51)

(1717)

八十八月の
祝の面影も
ひきよせて見ゆさ
今日の座敷
(護得久朝置)

ハチジュハチグツツイヌ
イウエヌ ウムカジン
フィチ ユシティ ミユサ
キユヌ ザシチ
(グキク チョオチ)

解説：

八八才になると、八月八日にお祝いするが、今日のお座敷の様子は、その時の面影を引き寄せてみるような心地がする。

52)

(1782)

あかぬ語らたる
人の面影や
あはれ琴の音に
まさて立ちゆさ
(保栄茂朝意)

アカヌ カタラタル
フィトウヌ ウムカジャ
アワリ クトウヌニ
マサティ タチュサ
(ビン チョオイ)

解説：

飽くことを知らず語り合った人の面影は、琴の音にもまさり、我が心を強く引きつける。

53)

(1783)

あかぬ眺めたる
花の面影や
照る月と共に
宿につれて
(読人知らず)

アカヌ ナガミタル
ハナヌ ウムカジャ
ティル ツイチトウ トウムニ
ヤドゥニ ツイリティ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

飽かず眺めた花の面影は、照る月と共に我が家までも着いてき、忘れることができない。

54)

(1784)

あかぬ別れ路や
かにすつれなさめ
朝夕面影の
いつも残て

アカヌ ワカリジヤ
カニスィ ツイリナサミ
アサユ ウムカジン
イツィン ヌクティ

解説：

恋人との飽かぬ別れは、こんなにも辛いものか。恋しい面影が朝夕いつも目の底に残り、払い除けることができない。1300 番歌と同様。

55)

(1799) (2x 面影)

遊び面影や
まれまれど立ちゆる
里が面影や
朝も夕さも

アスイビ ウムカジャ
マリマリドゥ タチュル
サトゥガ ウムカジャ
アサン ユサン

解説：

一緒に遊んだ時の面影は、まれまれに思い出されるが、恋人の懐かしい面影は、朝も晩もいつも思い続けで、忘れるときはない。

56)

(1801)

遊びゆためわらべ
 いなおとななたる
 花の**面影**も
 見知りかねて
 (渡久山政規)

アスイビユタミ ワラビ
 イナ ウトゥナ ナタル
 ハナヌ ウムカジン
 ミシリ カニティ
 (トウクヤマ シイチ)

解説：

遊んでいたか乙女よ。早もう大人になり、花の面影を見知りかねるくらいだ。

57)

(1814)

あはれわが恋や
 三つ葉芹心
 いつも**面影**や
 三人つれて
 (富永実文)

アワリ ワガクイヤ
 ミツイバシリ グクル
 イツイン ウムカジャ
 ミチャイ ツイリティ
 (トウミナガ ジツイブン)

解説：

我が恋は三つ葉の芹のようなもので、いつも面影は三人連れ合っている。

58)

(1825)

いきやす忘れゆが
 住み馴れしおそば
 朝夕**面影**や
 袖にすがて
 (読人知らず)

イチャスイ ワスイリユガ
 スミナリシ ウスバ
 アサユ ウムカジャ
 スディニ スィガティ
 (ユミビトウ シラズ)

解説：

恋人の傍で暮らしたことをどうやって忘れることができよう。恋しい面影は朝夕自分の袖にすがり、振り放そうとしても、放されるものではない。

59)

(1828)

幾里へちやめても
 なれし**面影**や
 おへも離れらぬ
 袖にすがて
 (池城親雲上)

イクリ フィジャミティン
 ナリシ ウムカジャ
 ウフィン ハナレラヌ
 スディニ スィガティ
 (イチグスイク ペエエチン)

解説：

幾里隔てても、恋しい面影は少しも離れない。いつも袖にすがっている。

60)

(1863)

沖縄と八重山
 縁の糸はへて
面影の立たば
 互に引かな
 (大工廻安祥)

ウチナトゥ ヤキマ
 キンヌ イトゥ ハイティ
 ウムカジュ タタバ
 タゲニ フィカナ
 (ダクジャク アンショオ)

解説：

沖縄と八重山の間、縁の糸を引き延べ、面影が立ったら、互いに引き合うようにしよう。

61)

(1865)

惜しむ別れ路の
花の面影や
いつも明け雲の
空に残て
(読人知らず)

ヲウシム ワカリジヌ
ハナヌ ウムカジヤ
イツイン エキウムヌ
スラニ ヌクティ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

別れ路で惜しい別れした花の美しい面影は、いつも明け雲の空を見る時、思い出し、恋しくなる。

62)

(1867)

おぞで取て投げる
とがもないぬ枕
里が面影や
夢にしちゆて
(よしや)

ウズディ トウティ ナギル
トゥガン ネヌ マクラ
サトゥガ ウムカジヤ
イミニ シチュティ
(ユシヤ)

解説：

恋人の面影を夢に見、覚めてから夢であったかと悔しくなり、とがもない枕を投げ付けてしまった。(よしやの恋人は、仲里按司だった)。

63)

(1877)

思切らんすれば
無蔵が面影の
立ちまさりまさり
目の緒下て
(仲順親雲上)

ウミチラン スィリバ
ンゾガ ウムカジヌ
タチマサイ マサイ
ミノヲウ サガティ
(チュンジュン ペエエチン)

解説：

思い切つて別れようとすれば、恋人の面影が絶えず眼前にちらつき、忘れることができない。

64)

(1881)

面影とつれて
いきやす別やべが
語たても飽かぬ
なれしおそば

ウムカジトウ ツィリティ
イチャスイ ワカヤビガ
カタティン アカヌ
ナリシ ウスバ

解説：

恋しい面影だけと一緒に、これから先どうしようか。朝夕お話を承り、いつもお傍で楽しく暮らしていたのに、お別れし、私は一人になってはどうなるかと心細くなる。

65)

(1882)

面影の**立たば**
沙汰よしゆんともれ
夢しげくならば
泣きゆんともれ

ウムカジヌ タタバ
サタク シュン トウムリ
イミ シジク ナラバ
ナチュン トウムリ

解説：

もしもこちらの面影を頻繁に見るようだったら、私がうわさをしていると想って下さい。夢がしげくなったら、私が泣いていると思っして下さい。

66)

(1886)

思て自由ならぬ
人の**面影**の
のけてのけららぬ
肝にすがて
(花城里之子)

ウムティ ジユナラス
フィットウヌ ウムカジヌ
ヌキティ ヌキララス
チムニ スィガティ
(ハナグスイク サトゥヌシ)

解説：

いくら思っても、どうにもならない人の**面影**が、払い除けようとしても除けられず、心にすがり、忘れられない。

67)

(1924)

義理のませ垣や
面影も共に
通はさぬことの
禁止やならぬ
(翁長筑親雲上)

ジリヌ マシガチャ
ウムカジン トウムニ
カユワサヌ クトゥヌ
チジヤ ナラス
(ヲウナガ チク ペエエチン)

解説：

義理というまがきは、恋をする人は通さないだろうが、**面影**も共に通さないという禁止はできない。

68)

(1976)

島や白雲の
おし隠ちをすが
のよで**面影**の
手とて引きゆが
(金武朝芳)

シマヤ シラクムヌ
ウシカクチ ヲウスイガ
ヌユディ ウムカジヌ
ティトゥティ フィチュガ
(チン チョオホウ)

解説：

島は白雲が押し隠しておるが、なぜ**面影**は手を取って引くように、我が心を引っ張るのであろうか。

69)

(1983)

首里親国人の
面影とつれて
うにゆる芋も放ち
思ど仕事

シュイウエグニンチュヌ
ウムカジトゥ ツィリティ
ウニユル ヲウン ハナチ
ウミドゥ シクチ

解説：

首里お国の人の**面影**が立つと、芭蕉糸を繋いでいる仕事を放り出し、物思いにふけるのが仕事となるありさまだ。

70)

(1992)

捨てゆらばとても
面影も共に
切れてあとかげも
立たぬごとに
(読人知らず)

スイティ ユラバ トウティン
ウムカジン トウムニ
チリティ アトゥカジン
タタン グトゥニ
(ユミビトゥ シラズ)

解説：

捨てていくなら、とてもものに**面影**も一緒に断ち切り、あとかげがないようにしてほしい。

71)

(1999)

袖に匂移ち
朝夕眺めたる
花の**面影**の
忘れぐれしや
(玉城親方朝薫)

ステイニ ニエイ ウツチ
アサユ ナガミタル
ハナヌ ウムカジヌ
ワスイリ グリシャ
(タマグスイク ウエエカタ チョオクン)

解説：

袖に香りを移し、朝夕眺めた花の面影を、忘れることはできない。(花=恋人)

72)

(2034)

月見しちあれが
花見しちあれが
面影どまさる
夜も昼も
(読人知らず)

ツイチミ シチ アリガ
ハナミ シチ アリガ
ウムカジドウ マサル
ユルン フィルン
(ユミビトウ シラズ)

解説：

月見しても、花見しても、彼女の面影が夜も昼も立ちまさるばかりだ。

73)

(2055)

共に眺めたる
夜半の**面影**や
いつも有明の
月に残て
(本部按司朝救)

トゥムニ ナガミタル
ユワヌ ウムカジヤ
イツィン アリアキヌ
ツイチニ ヌクティ
(ムトウブ アジ チョオキユウ)

解説：

恋人の面影は、共に眺めた夜半の有明の月に残っており、いつも有明の月を見る度に思い出すのである。

74)

(2086)

ぬきやがらば沖縄
入りさがて八重山
互に**面影**や
月に照らさ
(漢那庸森)

ヌチャガラバ ウチナ
イリサガティ ヤキマ
タゲニ ウムカジヤ
ツイチニ ティラサ
(カンナ ヨオシン)

解説：

月が東方の海上に出たら、そこは沖縄だ。また西方の海上に入り下がったら、そこは八重山だ。それで互いに面影を月に照らし、忍び会うことにしよう。

75)

(2096)

のよで**面影**や
つれて来ち呉たが
おへも離れらぬ
目の緒下がて
(読人知らず)

ヌユディ ウムカジヤ
ツイリティ チチ クキタガ
ウフィン ハナリラヌ
ミノフウ サガティ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

なぜこんな遠い所まで、恋人の面影を連れてきてくれたか。少しも傍を離れることがなく、絶えず目にちらついて見えるようで、かえって苦しい。

76)

(2099)

肌寒くなれば
波のよるひるも
かなし**面影**の
まさて**立ちゆさ**
(又吉全道)

ハダ サムク ナリバ
ナミヌ ユル フィルン
カナシ ウムカジヌ
マサティ タチュサ
(マテエシ ゼンドオ)

解説：

秋風が吹き、肌寒くなれば、波が寄ったり引いたりすると同じように、夜も昼も懐かしい彼女の面影が、いよいよまさって見える心地がする。

77)

(2128)

振られゆる我身に
のよで**面影**の
打ち向ひ向ひ
袖にすぎる
(瑞慶覧昌綱)

フラリユル ワミニ
ヌユディ ウムカジヌ
ウチンカイ ンカイ
スディニ スイガル
(ズイキラン ショオコオ)

解説：

振られている自分に、なぜ彼女の面影はこちらに打ち向かい、袖にすぎりついて来るのであろう。

78)

(2139)

待ちかねる人の
面影よ立てて
しほらし匂送る
花のなさけ
(具志頭朝香)

マチカニル フィトウヌ
ウムカジユ タティティ
シュラシ ニエイ ウクル
ハナヌ ナサキ
(グシチャン チョオコオ)

解説：

待ちかねている人の面影を偲ばせ、ゆかしい香りを送る花の情けが嬉しい。

79)

(2143)

まどろめばおへも
忘れゆらとめば
またも**面影**の
夢に見ゆさ
(小橋川朝昇)

マドウルミバ ウフィン
ワスイリユラ トウミバ
マタン ウムカジヌ
イミニ ミユサ
(クワシチャ チョオショオ)

解説：

ちょっとでも眠ったら、忘れることがあろうかと思えば、面影がまた夢に見えるありさまである。

80)

(2174)

無蔵が**面影**や
道しるべしちゆて
行衛しらつゆに
ぬれて行きゆさ
(佐渡山安豊)

ンゾガ ウムカジャ
ミチ シルビ シチュティ
ユクキ シラツィユニ
ヌリティ イチュサ
(サドウヤマ アンポオ)

解説：

恋人の面影を道しるべとし、行衛の知らない彼女の跡を追ひ、山路の露に濡れながら尋ねて行く。

81)

(2181)

袖合たる昔
忘するなやう互に
いつも面影や
月に残ち

(佐渡山安豊)

ムツイリタル ンカシ
ワスイルナヨ タゲニ
イツイン ウムカジヤ
ツイチニ ヌクチ
(サドウヤマ アンホオ)

解説：

睦み親しんだ昔のことは忘れないでくれ、面影はいつも一緒に眺めた月に互いに残しておき、月を見る度に思い出すことにしよう。

82)

(2183)

目にも見られらぬ
手にも取られらぬ
かなし面影や
肝にすがて

(兼本里之子)

ミニン ミラリラヌ
ティニン トウラリラヌ
カナシ ウムカジヤ
チムニ スィガティ
(カニムトウ サトウヌシ)

解説：

恋人の愛しい面影は、目にも見られず、手にも取られず、ただ心にはかりすがりついて離れない。

83)

(2201)

夢に無蔵おそば
おぞで面影の
目の緒立つ波に
我袖ぬらち

(盛島親方)

イミニ ンゾ ウスバ
ウズディ ウムカジヌ
ミヌヲウ タツ ナミニ
ワ スディ ヌラチ
(ムリシマ ウェエカタ)

解説：

夢には恋人の傍にいるように思い、覚めては面影が目の前に見えるようで、袖を濡らしてばかりいる。

84)

(2213)

夜や夢しげく
昼や面影の
立ちまさりまさり
忘れぐれしや

(読人知らず)

ユルヤ イミ シジク
フィルヤ ウムカジヌ
タチ マサイ マサイ
ワスイリ グリシャ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

夜は毎夜のように、しきりに夢を見るかと思えば、昼は昼で面影が幻のように現れ、忘れることができない。

85)

(2219)

別かて面影や
互にあらやすが
暮らさらぬあすや
一人さらめ

ワカティ ウムカジヤ
タゲニ アラ ヤスイガ
クラサラン アスイヤ
フィチュイ サラミ

解説：

別れた後、面影を偲ぶということは、互いにあるはずだが、胸を焦がし、暮らしかねているのは私一人であろう。

86)

(2222)

別れても無蔵が
なさけ有明の
月に面影や
照りよまさて

ワカリ ティン ンゾガ
ナサキ アリアキヌ
ツイチニ ウムカジヤ
テリユ マサティ

解説：

別れた後も、彼女の愛情は忘れることができず、有明の月を見る度に、一緒に眺めた時の面影が思い出され、恋しい情けが一層切になる。

87)

(2226)

忘れて忘れぬ
友の面影や
あがり立つ雲に
いつも残て
(護得朝置)

ワスイティ ワスイララヌ
トゥムヌ ウムカジヤ
アガリ タツ クムニ
イツィン スクティ
(グキク チョオチ)

解説：

暁に別れた友の面影は、忘れようとしても忘れることができない。いつも夜明けの東の空に立ちのぼる雲を見る度に思い出すのである。

88)

(2227)

忘れてやり言ちも
忘れぬ朝夕
馴れし面影の
目の緒下がて
(読人知らず)

ワスイラ ティ イチン
ワスイラリミ アサユ
ナリシ ウムカジヌ
ミノヲウ サガティ
(ユミビトウ シラズ)

解説：

恋しい人の面影は、忘れようといっても、忘れるものではない。朝夕親しみ馴れた面影は目の前にちらついているような心地がする。

89)

(2228)

忘れてやりしちも
朝夕面影の
立ちまさりまさり
目の緒下がて
(小祿按司朝恒)

ワスイラ ティ シチン
アサユ ウムカジヌ
タチ マサイ マサイ
ミノヲウ サガティ
(ウルク アジ チョオコオ)

解説：

恋しい人の面影は、忘れようとしても、朝夕立ちまさるばかりで、いつも目の前にちらついているような心地である。

90)

(2233)

忘れてやり言ちも
いきやす忘れゆが
朝夕面影や
目の緒下がて

ワスイラ ティ イチン
イチャスイ ワスイリユガ
アサユ ウムカジヤ
ミノヲウ サガティ

解説：

忘れよといっても、どうやって忘れることができよう。面影は朝夕目の前にちらつき、忘れることはできない。

91)

(2282)

面影と名残
つれる哀れさに
つつみかくさらぬ
袖の涙
(瑞慶覧昌綱)

ウムカジトウ ナグリ
ツイリル アワリサニ
ツイツイミ カクサラヌ
スディヌ ナミダ
(ズイキラン ショオコオ)

解説：

面影と名残が共に立つ哀れさに、袖の涙を包み隠すことができず、つい人前で悲しみを表してしまった。
(解説：恋人より、肉親を悲しむ由)

92)

(2395)

面影よ残す
昔この川に
縁の水汲だる
無蔵がてほさ
(与那原親方良矩)

ウムカジユ ヌクス
ンカシ クヌ カワニ
キンヌ ミズイ クダル
ンゾガ ティフサ
(ユナバル ウエエカタ リヨオク)

解説：

昔の面影を残しているこの許田の井戸で、手水を汲み、縁を結んだという人の手がほしい。

93)

(2397)

かにもつれなさめ
面影と名残り
いつも仲島の
浦に残て
(岸本賀雅)

カニン ツイリナサミ
ウムカジトウ ナグリ
イツイン ナカジマヌ
ウラニ ヌクティ
(チシムトウ ガガ)

解説：

こんなにつれないものか、いつも仲島の浦に彼女の面影と名残が残り、忘れることができない。

94)

(2463)

行けやう行かゑんで
言ちど出ぢたすが
馴れし面影の
後引きゆさ
(渡嘉敷通睦)

イキヨ イカキンディ
イチドウ うジタスイガ
ネリシ ウムカジヌ
ウシル フィチュサ
(トゥカシチ ツウブク)

解説：

家を出る時は、行っていらっしやい、行って来るよと、立派にあいさつをし、出てきたのだが、慣れ親しんだ面影が後髪を引くようで、足の運びも遅れがちになる。

95)

(2468)

音信や絶えて
面影やしげく
馴れぬよそ島や
つらさばかり
(金武朝隠)

ウトウズイリヤ タイテイ
ウムカジャ シジク
ナリヌ ヌスジマヤ
ツイラサ ビケイ
(チン チョオイン)

解説：

おんしん

音信は絶え、面影はしげく、馴れない異郷の空は辛いことばかりだ。

96)

(2485)

月も眺めれば
馴れし古里の
面影どまさる
旅の空や

(佐久本嗣順)

ツイチン ナガミリバ
ナリシ フルサトウヌ
ウムカジドウ マサル
タビヌ スラヤ

(サクムトウ シジュン)

解説：

旅の空で月を眺めると、住み馴れし古里の面影がまさるばかりである。

97)

(2495)

花の島をても
馴れし親兄弟の
面影ど立ちゆる
朝も夕さも

(読人知らず)

ハナヌ シマ ヲウティン
ナリシ ウヤチヨデヌ
ウムカジドウ タチュル
アサン ユサン

(ユミビトウ シラズ)

解説：

遊郭の仲島は、華やかで面白い所であるが、故郷の親兄弟の面影が朝夕思い出され、恋しくて堪らない。

98)

(2887)

かなが島我島
長布ははへて
面影の立たば
おれが上から

解説：

かな(愛人)の島(故郷)と私の故郷に長い布を引き延べておき、面影が立ったら、その上から行ったり来たりし、会うことにしよう。

99)

(2903)

ものいこゑもないらぬ
おもかげも見らぬ
うちよする波の
音声ばかり

解説：

話声もなく、面影も見えない。ただ打ち寄せる波の音声ばかりである。

ムヌイグキン ネラヌ
ウムカジン ミラヌ
ウチユスイル ナミノ
ウトウグキ ビケイ

【資料編 (第3章) - 「春」】

琉歌における「春」と結ぶ動詞、形容動詞	『琉歌全集』(首)	『琉歌大成』(首)	合計(首)	合計(%)
春	83	55	139	/
春風 (なびく・たとして・立つ・ひびく)	7 (3・0・0・1)	8 (7・3・1・0)	15 (10・3・1・1)	/
春雨 (降る・濡れる・晴れる)	6 (4・2・0)	4 (2・0・2)	10 (6・2・2)	/
初春 (なる)	15 (6)	0	15 (6)	/
全ての表現 (春・春風・春雨・初春)	111	67	178	100%
来る (めぐて春くれば/いつも春くれば/のきゆて春くれば/花も春くれば/来ちやる(きやすが))	11 (6/2/1/1/1)	12 (1/4/1/1/5)	23	12.9%
～春くれば (上記参照)	10	7	17	9.5%
なる (春になる/初春になる)	8 (2/6)	1 (1/0)	9 (3/6)	5%
待つ	5	1	6	3.4%
知る	2	1	3	1.7%
春に浮かされて/心浮かされて (心うきやがゆる)	2/3	0	5	2.8%
過ぐ	1	3	4	2.2%
春に誘はれる	2	1	3	1.7%
行く (暮れて行く)	3 (2)	0	3	1.7%
忘る	3	0	3	1.7%
いつも春と思て	1	1	2	1.1%
春に糸かけて/つなぐ	1/1	0	2	1.1%
別る	1	0	1	0.5%
会ふ	1	0	1	0.5%

「春」の琉歌によく使われる表現	『琉歌全集』(首)	『琉歌大成』(首)	合計(首)	合計(%)
春	111	67	178	100%
のどかなる	3	0	3	1.7%
みどりさし添へる	10	2	12	6.7%
(春の様々な物を) 見る	3	9	12	6.7%
(春の様々な物を) 眺む	5	4	9	5%
春の花盛り／盛り／盛る	5／2／3	3／1／1	8／3／4(計15)	(計8.4%)
春ごとに	3	4	7	3.9%
春や花ごとに	2	1	3	1.7%
春の曙／春のあけあけに	0／2	4／0	4／2	2.2%／1.1%
霞(霞ともて:2、霞立つ:2、かすむ:1、霞そめて:1、霞わたて:1)	2	5	7	3.9%
いつも春ともて	1	1	2	1.1%
糸柳(イトウヤナジ、或いはイトウヤジと読む)	1	3	4	2.2%
青柳(アヲウヤジ、或いはアヲウヤナジとも読む)	5	0	5	2.8%
柳(ヤナジと読む)	0	8	8	4.5%
花／梅／桜	50／11／5	21／4／2	71／15／7	39.8%／8.4% ／3.9%
松／鶯	12／19	2／8	14／27	7.8%／15.1%
匂ひ	19	6	25	14%
色+まさる(色どまさる、またも色まさる、色まさりまさり、色どまさらしゆる等)	5	4	9	5%
しほらしや	14	4	18	10.1%
きよらさ	9	8	17	9.5%
うれしや／喜び	13／1	1／1	14／2	7.8%／1.1%

「春」の琉歌によく使われる表現					『琉歌全集』(首)	『琉歌大成』(首)	合計(首)	合計(%)		
遊ぶ					11	2	14	7.8%		
若					8	6	14	7.8%		
くりしや／恋し／つれなさ／恨めしや／懐かしや					1／0／0／0／1	0／2／1／2／3	1／2／1／2／4	(計 5.6%)		
和歌の「春」と結ぶ動詞や その他の表現	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	千載集	新古今集	新勅撰集	続後撰集
春	105	89	96	106	57	33	87	159	135	121
立つ	8	4	4	7	5	0	2	1	5	11
来 (春くれば)	8 (3)	9 (4)	10 (6)	12 (0)	2 (0)	3 (2)	7 (3)	10 (3)	12 (3)	7 (1)
春めく	0	0	3	1	0	3	0	1	1	1
行く	0	0	3	4	2	1	4	5	2	5
暮る	0	0	0	1	1	0	4	8	5	5
知る	4	3	5	4	4	2	5	4	4	1
なる	3	4	2	1	0	1	1	5	4	0
経	0	0	2	1	0	0	2	3	2	4
重ねる	0	1	0	0	0	0	2	1	1	1
のどけし+のどかなる	2	2	2	0	3	0	1	1	4	3
悲し／つらし	0	0	0	1	1	0	1	0	3	3／5
あはれ	0	1	0	0	0	1	2	5	4	0
恋し+恋ふ	2	0	3	1	0	0	1	3	3	3
をし+をしむ	0	2	0	2	3	0	3	2	1	3
別る+別れ	0	0	0	1	0	0	1	1	0	1

和歌の「春」と結ぶ動詞や その他の表現	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	千載集	新古今集	新勅撰集	続後撰集
春	105	89	96	106	57	33	87	159	135	121
限り	0	2	0	1	2	1	1	4	1	1
過ぐ	1	1	2	2	2	0	1	3	4	0
初春	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
青柳	1	0	1	2	0	2	0	6	4	2
柳	3	2	1	0	1	0	0	3	0	1
春霞	24	8	11	4	4	1	2	8	3	9
霞	4	2	5	7	5	4	8	21	26	23
春雨	8	8	0	2	3	1	3	10	4	4
春風	2	4	4	2	4	4	3	14	9	11
春ごとに	2	2	0	6	3	2	1	1	2	1
春ながら	1	0	1	0	0	0	1	1	2	0
春かける	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0
春の曙	0	0	0	1	0	0	2	5	5	1
去る	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
待つ	1	3	2	1	2	1	0	2	2	0

和歌の「春」と結ぶ動詞や その他の表現	万葉集	定家	為家集	為家 (その他)	草庵集 (頼阿)	井蛙抄 (頼阿)	頼阿 (その他)	伊勢物語	源氏物語 (追加: 狭衣物語)	合計 (首)	合計 (%)
春	225	31	209	243	117	57	76	14	35 (+3)	1998	100%
立つ	4	1	16	16	3	1	1	1	0	90	4.5%
来 (春くれば)	16 (7)	0	17 (6)	21 (1)	3 (0)	1 (0)	8 (1)	0	1 (0)	147 (40)	7.4% (2.5%)
春めく	0	0	0	0	0	2	1	0	0	13	0.7%
行く	2	1	13	7	4	4	2	0	1	60	3%
暮る	4	0	5	14	4	1	8	0	1	61	3%
知る	1	0	14	10	5	1	3	0	2	71	3.6%
なる	9	0	2	0	3	0	1	1	0	37	1.9%
経 (春をへて)	0	0	3	3	2	0	0	0	0	22	1.1%
(春を) 重ねる	0	0	2	0	0	1	1	0	0	10	0.5%
のどけし+のどかなる	0	2	14	4	6	2	1	2	1	50	2.5%
悲し/つらし+つれなし	9	0	5	1	0	0/1	0/1	0/0	0/0	24	1.2%
あはれ	3	0	1	3	0	0	0	0	0	20	1%
恋し+恋ふ	19	0	2	3	0	0	0	0	0 (1)	41	2%
をし+をしむ	0	0	1	2	1	2	2	1	0	25	1.3%
別る+別れ	0	0	1	0	0	0	0	0	1	6	0.3%
限り	4	0	4	4	2	0	3	1	0	31	1.6%
過ぐ	3	2	4	0	0	0	2	0	1 (1)	29	1.5%
初春	2	0	0	1	1	0	0	0	0	6	0.3%

和歌の「春」と結ぶ動詞や その他の表現	万葉集	定家	為家集	為家 (その他)	草庵集 (頼阿)	井蛙抄 (頼阿)	頼阿 (その他)	伊勢物語	源氏物語 (追加: 狭衣物語)	合計 (首)	合計 (%)
春	225	31	209	243	117	57	76	14	35 (+3)	1998	100%
青柳	3	0	3	3	2	0	4	0	0	33	1.7%
柳	6	0	5	12	1	2	0	0	1	38	1.9%
春霞	19	0	5	5	0	1	0	0	0	104	5.2%
霞	32	3	37	33	35	14	13	1	4	277	13.9%
春雨	23	0	10	19	9	2	5	0	1	112	5.6%
春風	2	2	15	22	18	6	7	0	0	129	6.5%
春ごとに	0	0	1	1	3	0	1	0	0	26	1.3%
春ながら	0	0	0	1	0	0	0	1	0	8	0.4%
春かける	0	0	0	0	1	1	1	0	0	6	0.3%
春の曙	0	4	5	3	3	7	1	0	1	38	1.9%
去る	44	0	0	0	0	0	0	0	0	45	2.3%
待つ	0	0	1	5	0	0	0	0	1	20	1%

【資料編 (第3章) - 「夏」】

琉歌における「夏」と結ぶ動詞、他の語	『琉歌全集』(首)	『琉歌大成』(首)	合計(首)	合計(%)
夏	46	14	60	100%
夕立(ナツィグリ)(降る:3、晴れる:2、袖濡らす:3、～のあれば:1、～のすぎて:1)	5	3	8	100%
若夏((～がなれば:5、～になても:1、～やなとり:1)→なる:7、心浮かされて:2、めぐ る:1)	9	0	9	100%
忘る(内訳:夏を:2、夏の暑さを:3)	3	2	5	8.3%
過ぐ	2	0	2	3.3%
立ちかへる	1	1	2	3.3%
夏もよそなしゆさ(一め)	1	1	2	3.3%
なる(夏なれば)	1	0	1	1.7%
(間接的な繋がり)流れ水/川たよて	3	1	4	6.7%
夏+動詞(合計)	8	4	12	20%
暑さ	9	3	12	20%
夏の日	4	4	8	13.3%
夏の夜	10	1	11	18.3%
すだすだと/すださ/すだむ/涼しさ(=合計)	5/4/3/2(=14)	1/5/0/0(=6)	6/9/3/ 2(=20)	33.3%
夏の衣	2	0	2	3.3%
夏山	1	1	2	3.3%
夏虫	1	0	1	1.7%
夏の若草	1	0	1	1.7%
夏の走川	1	0	1	1.7%
夏の池水	1	0	1	1.7%

琉歌における「夏」と結ぶ動詞、他の語						『琉歌全集』(首)	『琉歌大成』(首)	合計(首)	合計(%)	
夏や山川の流れ水たよて／夏や川たよて						2	1	3	5%	
夏水の心						1	0	1	1.7%	
夏のおもしろさ						1	0	1	1.7%	
「夏の～」というパターン、また「水」、「涼しい」、「暑さ」というイメージが目立つ。「夏」と動詞の組み合わせは少ない。										
和歌の「夏」と結ぶ動詞 以外の表現	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	千載集	新古今集	新勅撰集	続後撰集
夏	22	29	25	19	8	7	17	27	17	23
夏山	2	0	2	2	1	1	0	0	0	2
夏の夜	3 (琉歌との 類似歌あり)	8	3	5	3	2	4	2	4	6
夏虫	3	4 (琉歌との 類似歌あり)	0	1	0	0	0	0	2	0
夏の日	0	1	0	1	0	0	0	1	0	1
夏(の)衣	2	3	4	1	2	1	2	7	4	2
夏(の)草	2	1	2	1	1	0	0	6	2	2
夏(の)野	1	0	1	0	0	0	0	2	0	1
夏引の	1	1	0	0	1	1	0	1	1	0
夏刈りの	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0
常夏	1	6	4	3	0	0	1	2	0	1
夏深し(ーく／ーみ)	0	0	0	1	0	0	2	0	0	2
涼し (夏と間接的な繋がり)	1	0	0	3	0	1	1	4	4	0
なし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

和歌の「夏」と結ぶ動詞	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	千載集	新古今集	新勅撰集	続後撰集
夏	22	29	25	19	8	7	17	27	17	23
なる	1	1	2	1	0	0	0	0	0	0
行きかふ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
はてゆく	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
来	0	0	2	0	0	0	0	2	0	1
行く	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
立つ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
知る	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
過ぐ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
過ぐす	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
向かふ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
通ふ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
暮れる	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
暮らす	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
夏まけて	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
往ぬ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こゆ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
夏ばらへする	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
忘る	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
行き来	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
夏かけて	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
とまる	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

和歌の「夏」と結ぶ動詞	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	千載集	新古今集	新勅撰集	続後撰集
残る	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
経	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

和歌の「夏」と結ぶ動詞 以外の表現	万葉集	定家	為家集	為家 (その他)	草庵集 (頼阿)	井蛙抄 (頼阿)	頼阿 (その他)	伊勢物語	源氏物語 (追加：狭衣物語)	合計 (首)	合計 (%)
夏	49	8	62	52	24	8	21	2	9 (追加：+0)	429	100%
夏山	1	0	2	2	2	0	2	0	0	19	4.4%
夏の夜	1	2	5	4	4	1	2	0	0	59	13.8%
夏虫	1	0	1	1	0	0	0	0	0	13	3%
夏の日	0	0	2	1	0	1	0	1	1	10	2.3%
夏(の)衣	0	1	10	4	0	0	1	0	3	47	11%
夏(の)草	14	1	11	4	7	2	2	0	0	58	13.5%
夏(の)野	7	0	2	3	1	1	0	0	0	31	7.2%
夏引の	0	0	1	0	1	0	0	0	0	8	1.9%
夏刈りの	0	0	3	1	1	1	1	0	0	10	2.3%
常夏	3	0	2	1	1	0	1	0	4	30	7%
夏深し(ーく／ーみ)	0	0	3	4	1	1	0	0	0	14	3.3%
涼し (夏と間接的な繋がり)	0	1	3	10	1	1	1	0	0	31	7.2%
なし	0	0	1	1	2	0	0	0	0	4	0.9%
全ての動詞(合計)										67	15.6%

和歌の「夏」と結ぶ動詞	万葉集	定家	為家集	為家 (その他)	草庵集 (頓阿)	井蛙抄 (頓阿)	頓阿 (その他)	伊勢物語	源氏物語 (追加：狭衣物語)	合計 (首)	合計 (%)
夏	49	8	62	52	24	8	21	2	9 (追加：+0)	429	100%
なる	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1.2%
行きかふ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0.5%
はてゆく	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2%
来	4	2	4 (「夏くれ ば」も)	5	0	0	0	0	0	20	4.7%
行く	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0.7%
立つ	0 (詞書のみには 「立夏」あり)	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2%
知る	0	0	1	4	0	0	0	0	0	6	1.4%
過ぐ	0	0	0	4	0	0	0	0	0	5	1.2%
過ぐす	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0.5%
向かふ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.5%
通ふ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2%
暮れる	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0.5%
暮らす	0	0	1	0	0	0	0	0	1 (「泣きくらす」)	2	0.5%
夏まけて	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2%
往ぬ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.2%
こゆ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.2%
夏ばらへする	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2%
忘る	0	0	3	3	0	0	0	0	0	6	1.4%

和歌の「夏」と結ぶ動詞	万葉集	定家	為家集	為家 (その他)	草庵集 (頓阿)	井蛙抄 (頓阿)	頓阿 (その他)	伊勢物語	源氏物語 (追加:狭衣物語)	合計 (首)	合計 (%)
行き来	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.2%
夏かけて	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.2%
とまる	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2%
残る	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2%
経	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.2%

【資料編 (第3章) - 「秋」】

琉歌における「秋」と結ぶ動詞、それ以外の表現	『琉歌全集』(首)	『琉歌大成』(首)	合計 (首)	合計 (%)
秋風 (立つ: 2、吹く: 1、押し払ふ: 1、～に散る: 1、～に消ゆ: 1)	3	3	6	4.7%
秋山 (紅に染めて: 1)	1	0	1	0.8%
秋 (合計) (「秋山」、「秋風」を含む)	73	56	129	100%
なる (秋になたさ: 3、秋になてをすが: 2、秋やなたが: 1)	6	0	6	4.7%
過ぐ	6	0	6	4.7%
暮れる	3	2	5	3.9%
知ゆる	3	1	4	3.1%
忘る (秋の寂しさ: 1、秋の名残: 1、秋の月: 1、秋の悲しさ: 1)	3	1	4	3.1%
来る	3	1	4	3.1%
行く (過ぎて行く: 1、暮れて行く: 3)	3	1	4	3.1%
言ふ (秋とてやり 言ゆすが)	2	0	2	1.6%
あり (秋やあらね)	1	0	1	0.8%
込めて (千代の秋込めて)	0	1	1	0.8%
まさる (君が万世の 秋やよくまさて)	0	1	1	0.8%
去る (過ぎ去りし秋の)	1	0	1	0.8%
明ける (明けてまた明ける 秋の紅の)	1	0	1	0.8%
秋はつ (掛詞)	1	0	1	0.8%
動詞 (合計)	33	8	41	31.8%
紅葉 (間接的な結び)	14	4	18	14%
すださ/すだむ	2	8	10	7.8%
寒し	1	0	1	0.8%

琉歌における「秋」と呼応する表現	『琉歌全集』(首)	『琉歌大成』(首)	合計(首)	合計(%)
秋	73	56	129	100%
秋の夜 (その中:「秋の夜の(お)月」)	7 (4)	15 (5)	22 (9)	17%
秋の今宵	9	6	15	11.6%
秋ごとに (その中:～に見れば)	5 (2)	4 (2)	9 (4)	7%(3.1%)
うれしごとときく (聞く/菊) の <u>(琉歌の掛詞)</u>	4	6	10	31.8%
秋の夕間暮に ^{ユマングキ} ころもかりがねの <u>(琉歌の掛詞)</u>	1	0	1	0.8%
秋の十五夜	2	8	10	31.8%
秋の月 (その中、「仲風」:3首(3首とも悲しいイメージ))	1	4	5	3.9%
秋の 情け通はちゆて	1	0	1	0.8%
浮世名に立ちゆる/名に立ちゆる	0	1/2	3	2.3%
秋の野 (～にのがす 鶯のほける)	1	0	1	0.8%
秋の山川に	1	0	1	0.8%
秋の霜	1	0	1	0.8%
秋の百草	1	0	1	0.8%
秋の空	0	1	1	0.8%
秋の白露	0	1	1	0.8%
(秋のかたみ)	2	1	3	2.3%
(名残)	2	1	2	1.6%
暑さ	4	0	4	3.1%
註:「秋」の琉歌にも「うれしや」と「きよらさ」という表現も数多く見られる。				

和歌の「秋」と結ぶ動 詞やその他の表現	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	千載集	新古今集	新勅撰集	続後撰集
秋	141	172	101	115	38	37	104	289	152	200
なる (秋なれば)	2 (1)	3 (1)	2	3	0	0	1	5 (1)	2	1
過ぐ	0	2	0	2	0	0	1	5	3	2
暮れる	0	0	1	1	0	0	5	4	4	1
知る	2	4	2	9	2	0	2	4	5	3
忘る	0	0	0	0	0	0	1	2	0	2
来る (内訳：秋来れば)	15 (2)	9 (4)	5 (1)	6	4	1	11 (4)	15 (2)	6	9 (1)
行く (内訳：行き交ふ)	2 (1)	3	1	2	1	1	1	5	6	4
立つ	1	2	3	0	1	1	0	1	1	2
言ふ (秋と言へば)	1	0	0	0	0	0	1 (1)	2 (1)	2 (2)	2
あり	3	0	2	1	0	0	2	1	2	2
込める	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
まさる	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
去る	0	0	0	0	0	0	0	4(秋されば)	0	2 (1)
明ける	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
秋はつ (掛詞)	1	4	3	0	0	0	1	3	0	1
待つ	1	3	1	2	0	0	0	3	3	1
会ふ	4	2	3	1	0	1	1	3	2	1
うつろふ	1	1	0	0	0	0	0	1	1	1
往ぬ	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1
経 (秋をへて)	2 (1)	0	1	0	0	0	1 (1)	2 (2)	2 (2)	0

和歌の「秋」と結ぶ動 詞やその他の表現	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	千載集	新古今集	新勅撰集	続後撰集
秋	141	172	101	115	38	37	104	289	152	200
浮ける	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
とまる／とどむ	1	0	0	1	1	0	0	0	2	0
思ふ	0	3	0	2	0	1	0	4	2	3
秋づく	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
色づく／いろどる／色めく	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1
見る／見ゆ	0	1	0	2	0	0	0	2	2	2
別る	0	0	0	1	0	0	1	2	0	2
たのむ	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0
する（秋しなければ）	0	2 (2)	0	0	1 (1)	1 (1)	0	0	0	0
数ふ	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1
問ふ	0	3	0	0	0	0	0	3	0	0
告ぐ	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
しぐる	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0
添ふ	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
かける（秋かけて）	0	0	0	0	0	0	0	3 (2)	1 (1)	1 (1)
殆どの動詞＝合計										
秋の夜（その中：～の 月）	11 (2)	19 (5)	9 (5)	18 (6)	8 (6)	10 (8)	12 (7)	29 (19)	16 (8)	32 (19)
秋の月	1	2	5	6	1	1	5	5	5	9
秋風	21	28	14	10	6	6	16	81	29	30

和歌の「秋」と結ぶ動 詞やその他の表現	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	千載集	新古今集	新勅撰集	続後撰集	
秋 (の) 野	14	14	7	8	1	2	5	3	1	4	
秋 (の) 田	4	4	1	2	0	0	1	4	1	5	
秋 (の) 草	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	
秋萩	10	11	10	6	0	1	0	5	4	8	
秋 (の) 山	1	5	5	3	1	1	1	4	0	3	
秋霧	7	8	7	3	3	0	1	3	3	2	
秋の露	2	2	0	0	0	0	1	6	0	2	
秋の霜	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
秋の夕暮れ／夕べ	0／1	1／0	0	7 (悲4)	1	1	3／1 (悲2)	14 (悲6)	3 (悲2)	9/1 (悲1)	
紅葉 (間接的な繋がり)	18	23	10	7	2	2	5	11	20	16	
寒し／涼し	3／2	3／1	2／1	2／4	0／2	0／0	1／1	13／6	3／3	7／4	
悲し／をし／さびし／わびし	8・2・0・4	4・2・0・10	2・2・0・0	5・6・0・0	0・1・0・0	0・1・0・0	8・1・2・0	17・4・6・0	6・6・0・0	5・4・0・0	
和歌の「秋」と結ぶ動 詞やその他の表現	万葉集	定家	為家集	為家 (その他)	草庵集 (頼阿)	井蛙抄 (頼阿)	頼阿 (その他)	伊勢物語	源氏物語 (追加：狭衣物語)	合計 (首)	合計 (%)
秋	285	68	326	301	148	64	82	14	50 (+13)	2700	100%
なる (秋なれば)	0	0	6 (1)	5 (1)	0	1 (1)	0	0	1	32 (6)	1.2%
過ぐ	2	1	2	1	0	1	0	0	0	22	8.1%
暮れる	0	0	6	8	3	0	0	0	0	33	1.2%
知る	0	1	6	4	1	1	2	0	1 (+1)	50	18.5%
忘る	0	1	2	2	0	0	0	0	0	10	3.7%

和歌の「秋」と結ぶ動 詞やその他の表現	万葉集	定家	為家集	為家 (その他)	草庵集 (頓阿)	井蛙抄 (頓阿)	頓阿 (その他)	伊勢物語	源氏物語 (追加：狭衣物語)	合計 (首)	合計 (%)
秋	285	68	326	301	148	64	82	14	50 (+13)	2700	100%
来る (内訳：秋来れば)	3	4	14	24 (3)	9 (1)	3	8 (1)	1	2	149 (19)	1.9% (0.7%)
行く (内訳：行き交ふ)	1	0	7	7	2	1	2	0	2 (1)	47 (2)	1.7%
立つ	6	1	3	7	0	0	0	0	0	29	5.5%
言ふ (秋と言へば)	3 (1)	0	0	1	0	0	0	0	0	12 (5)	0.4%
あり	4	4	0	0	0	0	0	1	0 (+1)	23	0.9%
込める	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.04%
まさる	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0.07%
去る	21	0	0	1	0	0	0	0	0	28	1%
明ける	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.04%
秋はつ (掛詞)	0	0	1	3	0	0	0	0	4	21	0.8%
待つ	5	0	5	4	3	0	1	0	1	32	1.2%
会ふ	1	1	4	4	0	0	0	0	0	28	1%
うつろふ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0.2%
往ぬ	0	2	1	1	0	2	0	0	0	9	0.3%
経 (秋をへて)	0	2 (2)	1 (1)	2 (1)	3 (1)	1 (1)	0	0	2 (1)	19 (13)	0.7% (0.5%)
浮ける／浮く	0	0	0	0	2	0	0	0	0	4	0.1%
とまる／とどむ	0	0	4	7	0	0	1	0	1	18	0.7%
思ふ	0	0	6	1	1	0	0	0	2	25	0.9%

和歌の「秋」と結ぶ動詞やその他の表現	万葉集	定家	為家集	為家 (その他)	草庵集 (頓阿)	井蛙抄 (頓阿)	頓阿 (その他)	伊勢物語	源氏物語 (追加：狭衣物語)	合計 (首)	合計 (%)
秋	285	68	326	301	148	64	82	14	50 (+13)	2700	100%
秋づく	9	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0.3%
色づく／いろどる／色めく	0	0	5	0	0	1	0	0	0	9	0.3%
見る／見ゆ	0	0	6	0	0	3	0	0	0 (+1)	19	0.7%
別る	0	2	0	0	0	0	0	0	2	10	0.4%
たのむ	0	0	2	0	0	0	0	0	0	6	0.2%
する (秋しなければ)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4 (4)	0.1%
数ふ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	5	0.2%
問ふ	0	0	2	0	0	0	0	0	0	8	0.3%
告ぐ	0	0	1	0	0	0	1	0	0	4	0.1%
しぐる	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0.1%
添ふ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	0.1%
かける (秋かけて)	0	0	2 (2)	1 (1)	0	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (かかる)	12 (10)	0.4%
殆どの動詞＝合計										694	25.7%
秋の夜 (その中：～の月)	11 (1)	1 (1)	41 (29)	21 (16)	12 (3)	1 (1)	5 (0)	5 (0)	5 (3)	266 (139 = 52%)	9.9%
秋の月	3	1	15	15	1	2	1	0	1 (+1)	80	3%
秋風	60	20	63	49	34	22	23	2	4 (+1)	519	19.2%

和歌の「秋」と結ぶ動 詞やその他の表現	万葉集	定家	為家集	為家 (その他)	草庵集 (頓阿)	井蛙抄 (頓阿)	頓阿 (その他)	伊勢物語	源氏物語 (追加：狭衣物語)	合計 (首)	合計 (%)
秋	285	68	326	301	148	64	82	14	50 (+13)	2700	100%
秋の野	15	2	5	9	2	2	0	1	2 (+1)	98	3.6%
秋の田	18	2	3	1	2	1	1	0	0	50	1.9%
秋の草	2	2	1	1	0	0	1	0	0	11	0.4%
秋萩	84	0	7	14	10	3	3	0	0	176	6.5%
秋(の)山	19	0	7	4	1	0	0	0	2	57	2.1%
秋霧	0	0	8	7	7	0	2	0	3	64	2.4%
秋の露	3	2	8	17	4	0	0	0	0	47	1.7%
秋の霜	0	0	1	0	3	0	0	0	0	5	0.2%
秋の夕暮れ／夕べ	0／1	6 (悲3)	10 (悲1)	5	4／1 (悲1)	6／1 (悲3)	2 (悲1)	0	0 (+1) ／2	73／8	2.7%
紅葉 (間接的な繋がり)	26	5	22	16	2	4	2	2	2	195	7.2%
寒し／涼し	19／2	1／1	13／5	10／8	12／5	3／1	5／9	0／0	0／0	97 ／ 55	3.6% ／2%
悲し／をし／さびし／わびし	1・7	5・1・6・0	12・6	4・4・4・0	0・0・1・0	1・2・1・0	0・0・0・0	0・0・0・0	1・0・2・0	67・49・ 22・14= 計152	5.6%

【資料編 (第3章) - 「冬」】

琉歌における「冬」と結ぶ動詞及びそれ以外の表現	『琉歌全集』(首)	『琉歌大成』(首)	合計(首)	合計(%)
冬	38	10	48	100%
うつり行く	1	1	2	4.2%
なる (冬になため/冬もよそになゆさ)	2	0	2	4.2%
着く (着きやさ)	1	0	1	2.1%
言ふ (冬んで言ゆすが)	1	0	1	2.1%
来る (冬や来ちやる)	1	0	1	2.1%
行く (冬も行きすれて)	0	1	1	2.1%
過ぐ (冬も行きすれて)	0	1	1	2.1%
重ね着よしゆたる	0	1	1	2.1%
忘れぐれしや	0	1	1	2.1%
全ての動詞	6	5	11	22.9%
冬枯れ (その他: 冬に枯木/枯れはてる/枯らす)	3 (+3)	0	6	12.5%
冬の夜 (「冬の夜の月」が一切見られない)	7	3	10	20.1%
初冬の～	3	0	3	6.3%
冬の夜半	2	0	2	4.2%
冬のお月	2	0	2	4.2%
時雨	1	1	2	4.2%
冬のさびしさ/冬やよく苦しや	1	1	2	4.2%
夏しげち (すぎて) 冬や (オモロと同様)	2	0	2	4.2%
冬の山嵐	2	0	2	4.2%
白雪/冬のはじめ/冬の景色/冬の草葉/冬ごもり	1 ずつ	0	1 ずつ	2.1%

和歌の「冬」と結ぶ動詞	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	千載集	新古今集	新勅撰集	続後撰集
冬	14	12	19	9	7	5	16	20	22	17
冬ごもる／冬ごもりする	1	0	0	1	1	0	1	1	0	0
見る／見ゆ	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1
来（来れば）	0	2 (2)	3 (2)	0	0	1 (1)	5 (1)	3 (0)	1	5 (1)
なる	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0
去る	0	0	1 (されば)	0	0	0	0	0	0	0
立つ	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0
知る	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0
過ぐ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
告ぐ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
数ふ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
かはる	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
暮れる	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

和歌の「冬」と結ぶ動詞以外の表現	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	千載集	新古今集	新勅撰集	続後撰集
冬	14	12	19	9	7	5	16	20	22	17
冬ごもり	3	0	0	1	1	0	1	1	1	0
冬枯れ	1	0	0	0	0	0	1	2	0	0
こぼる／氷	2	2	6	1	2	0	4	4	4	0
冬草	2	0	0	0	0	0	0	2	2	0
冬のはじめ	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
冬川	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
冬の池	1	3	1	0	0	0	0	1	0	0
冬の夜（～の月）	1 (0)	1 (0)	7 (1)	3 (1)	2 (0)	0	0	4 (2)	6 (0)	3 (2)
冬の月	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
冬野	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0
冬ながら	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0
時雨（冬との直接的ではない いつながりも含む）	3	1	1	0	0	0	1	2	1	3
雪（冬との直接的ではない つながりも含む）	4	2	4	1	3	1	2	2	10	4
霜（冬との直接的ではない つながりも含む）	1	1	2	0	0	0	2	3	1	1

和歌の「冬」と結ぶ動詞	万葉集	定家	為家集	為家 (その他)	草庵集 (頼阿)	井蛙抄 (頼阿)	頼阿 (その他)	伊勢物語	源氏物語 (追加: 狭衣物語)	合計 (首)	合計 (%)
冬	29	5	70	69	29	11	14	1	2 (+1)	372	100%
冬ごもる／冬ごもりする	0	0	3	2	1	1	1	0	0	13	3.5%
見る／見ゆ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0.8%
来 (来れば)	0	1	11 (2)	19 (4)	1	0	3 (2)	0	0	55 (15)	14.8% (4%)
なる	2	0	0	1	0	1	0	0	0	9	2.4%
去る	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.3%
立つ	0	0	1	1	0	0	0	0	0	5	1.3%
知る	0	0	2	0	0	0	0	0	0	5	1.3%
過ぐ	3	0	1	0	0	0	0	0	0	5	1.3%
告ぐ	1	0	0	0	2	0	0	0	0	4	1.1%
数ふ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.3%
かはる	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0.5%
暮れる	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0.5%
冬まけて	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.5%
行く	1	1	0	1	0	0	0	0	0	3	0.8%
至る	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.3%
言ふ	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0.5%
待つ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.3%
忘る	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0.5%
冬かけて	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.3%

和歌の「冬」と結ぶ動詞以外の表現	万葉集	定家	為家集	為家 (その他)	草庵集 (頼阿)	井蛙抄 (頼阿)	頼阿 (その他)	伊勢物語	源氏物語 (追加: 狭衣物語)	合計 (首)	合計 (%)
冬	29	5	70	69	29	11	14	1	2 (+1)	372	100%
冬ごもり	9	0	3	2	1	1	1	0	0	25	6.7%
冬枯れ	0	1	3	5	5	1	4	0	0	23	6.2%
こほる/氷	0	0	9	10	13	1	1	0	0	59	15.9%
冬草	0	0	5	1	0	0	0	0	0	12	3.2%
冬のはじめ	0	0	0	2	0	0	0	0	0	4	1.1%
冬川	0	0	0	1	1	0	1	0	0	4	1.1%
冬の池	0	0	1	1	5	0	0	0	0	13	3.5%
冬の夜 (～の月)	1 (0)	0	11 (6)	6 (3)	2 (0)	3 (0)	1 (1)	0	2 (0) (狭衣: 1)	54 (16)	14.5%
冬の月	0	0	2	1	1	0	0	0	0	5	1.3%
冬野	1	0	2	1	2	2	0	0	0	11	3%
冬ながら	0	0	2	0	0	0	0	0	0	5	1.3%
時雨 (冬との直接的ではない つながりも含む)	1	0	6	8	2	0	2	0	0	31	8.3%
雪 (冬との直接的ではない つながりも含む)	10	0	13	11	4	3	2	0	0	76	20.4%
霜 (冬との直接的ではない つながりも含む)	1	2	7	8	4	1	5	0	0	39	10.5%
冬の曙	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0.5%
冬の朝明け	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0.5%

【資料編（第5章） [オモロ]】

①□ 祝い（賛美）の歌 → 計12首

①-㊿ 大和へ友好的な傾向を表す歌 → 6首

（巻8-457、巻11-582、620、巻14-988、巻15-1082、巻21-1436）

月てだのやにてでかがちよわれが節（巻8-457）： 一 阿嘉のお祝付き

や 饒波のお祝付きや 此の拍子 揚げれ 又 下の世の主の 按司の又

の按司の 又 大和 船頭 筑紫 船頭

〔大意〕：阿嘉のお祝付き、饒波のお祝付きは、お祈りをします。下の世の主が、按司の中の按司が、実に立派なことよ。大和、筑紫へも船頭たちを遣わしていることだ。このおもろ拍子を打ち揚げよ。

あおりやへが節（巻11-582）： 一 具志川の真玉内は げらへて 良

く げらへて 勝利ゆわる精高子 又 金福の真玉内は げらへて 又 唐

の船 せに 金 持ち寄せるぐすく 良く げらへて 又 大和船 せに

金 持ち寄せるぐすく

〔大意〕：具志川の真玉内、金福の真玉内を造営して、唐の船、大和の船が、酒や財宝を持ち寄せるぐすくを見事に造り上げて、勝れ給う、霊力豊かなお方であることよ。

あおりやへが節（巻11-620）： 一 聞る精の君ぎや 潮の花の 舞やい

ど 見物 又 鳴響む精の君ぎや 又 大和 船頭 又 精高子が

前に 又 げらへ子が前に

〔大意〕：名高く鳴り轟く精の君神女が、お祈りをします。大和へも船頭を遣わして交易をし、精高子、げらへ子の前に財宝をもたらしたい。波の花のしぶきの舞ぞ、見事である。

うおさけが節（巻 14-988）： 一 あさてや ^{たいら}平良の ^{まつり}祭 はふとりか ^み見

せらば ^み見ちへ おわれ 又 ^{みかい}三日は さにきやの ^{おが}拝め **大和**の ^こ子

等に ^み見せたな やたる

〔大意〕：あさっては平良の神祭りだ。はふとりが見せたら、見ていらっしい。三日は、三箇の神拝みだ。大和の人たちに見せたいものだ。

あかのおゑつきねはのおゑつき月てだのやにてでかがちよわれが節（巻 15-1082）： 一 ^{きこ}聞ゑ ^{うらおそ}浦襲いに ^{とよ}げらゑ ^よ鳴響み良し ^{まだまもん}真玉真物 ^な成さい

^{きよも}子思いと ^{しな}撓て 又 ^{とよ}鳴響む ^{うらおそい}浦襲に 又 **大和** ^{やまとすぎ}杉の ^{いた}板 ^{かね}金の ^{なわ}縄 ^か掛けて

〔大意〕：名高く鳴り轟く浦襲で、立派な鳴響み良しを造って、真玉真物と父なるお方とが調和して栄え給うことよ。大和杉の板に見事な縄を掛けて、船を造ったのだ。

（巻 21-1436）： 一 ^{きこ}聞ゑ ^せ精の ^{きみ}君が ^{さい}潮の ^{はな}花の ^ま舞や ^{いど}いど ^{みもん}見物

^{とよ}鳴響む ^せ精の ^{きみ}君が

又 **大和** ^{やまと}ゑむ ^{せど}船頭 又 ^{せだか}精高子 ^こが ^{まへ}前に 又 ^こげらへ子 ^{まへ}が ^{まへ}前に

〔大意〕：名高く鳴り轟く精の君神女が、お祈りをします。波の花のしぶきの舞ぞ見事である。大和へも船頭を遣わして交易をし、精高子、げらへ子神女の前に財宝をもたらしたいものだ。

①□ **㊦** 大和へ競争心を表す歌 → 6首

(巻 7-377、巻 11-606、巻 14-1018、巻 16-1144、巻 17-1185、巻 21-1426)

きこへ大ぎみぎやしよりもりはぢめが節 (巻 7-377) : 一 けとの沖繩が

ももうら 百浦まちらすわ **やまと** 大和 きやう 京 かまくら 鎌倉 ふくによ 報国 あちおそ 寄せ按司 襲い あちおそ 按司 襲いや

おが 拝めばど とももと 十百年 ちよわる 又 ともよ 鳴響む沖繩が おきなわ 又 しも 下の世の ぬし 主の

〔大意〕：鳴り轟く沖繩神女が、お祈りをします。百浦まちらす神女は、大和の京、鎌倉に心を繋ぎ、果報な国をたくさん寄せることのできる国王様に尽くしている。国王様は拝めばぞ、千年も末長く栄えてましますことだ。国王様は、下の世の主が敬愛する立派な方だ。

こいしのがさしふとのぼらが節 (巻 11-606) : 一 かさすちやはら だ

りじゆ ともよ 鳴響め み 見れば みづ 水 まわ 廻て 又 まもん 真物ちやはら 又 なごの

はま 浜に 又 なごのひちやに 又 **やまと** 大和ぎやめ だりじよ ともよ 鳴響め

〔大意〕：かさす若按司、立派な若按司は、げにこそ鳴り轟け。穏やかなごの浜に、なごの直地に、げにこそ鳴り轟け。大和までも、げにこそ鳴り轟け。若按司を見ると、水走るような美しい顔である。

(巻 14-1018) : 一 てどこん 手登根の やこ 大屋子 たう 唐の みち 道 あ 開けわちへ てどこん 手登根す

にほんうち 日本内に ともよ 鳴響め 又 てどこん 手登根の さとぬし 里主

〔大意〕：手登根の大屋子が、手登根の里主が、中国と交易する道を開け給いて、手登根様こそ、日本中に鳴り轟き給うのだ。

あかのこがよくもまたもが節 (巻 16-1144) : 一 かつれん 勝連わ なお 何にぎや たと 譬ゑる

る **やまと** 大和の かまくら 鎌倉に たと 譬ゑる 又 きむたか 肝高わ なお 何にぎや

〔大意〕：勝連は、肝高は、あまりに勝れていて何にか譬えようか。それこそ、

大和の鎌倉に譬えるのだ。

きみがなし節（巻 17-1185）： 一 源河成り思ひや せち玉ぐすく

大和の鬼る かに ある 又意地気成り思いや

〔大意〕：源河成り思い様は、勝れて活気のある成り思い様は、霊力豊かな美しいぐすくを造って栄えている。大和の勝れた人のようにぞ、勝れているのだ。

うちいちへはこゑしのがさしふとのばらが節（巻 21-1426）： 一 かさす

ちやは だりじよ 鳴響め 見れば 水 廻て 又 真物ちやは

だりじよ 鳴響め 又 ながの浜に だりじよ 鳴響め 又 ながのひ

ちやに だりじよ 鳴響め 又 大和ぎやめ だりじよ 鳴響め

〔大意〕：かさす若按司、立派な若按司は、げにこそ鳴り轟いていることだ。穏やかなながの浜、ながの直地に、げにこそ鳴り轟いていることだ。大和までも、げにこそ鳴り轟いていることだ。若按司を見ると、水走るような美しい顔である。

②反感の歌 → 5首

（巻 3-93、96、97、巻 14-1027、巻 20-1364）

しより大きみが節（巻 3-93）： 一 聞得大君ぎや 鳴響む精高子が 按

司襲いしよ よ知れ 又 島討ち吉日 取りよわちへ 世添い吉日 取り

よわちへ 又 精軍せち 降ろちへ 又 百歳せち 降ろちへ 又

げらへ大ころ達 按司襲い 又 肝が内や 真強く あれ 肝 強く

真だに あれ 又 君々しよ 守れ 主主しよ 守れ 又 大和島厳子

まへ ぼ じ 前坊主のくはら 又 あよ うち 肝が内は 迷わちへ きも うち 肝が内は 迷わちへ 又
 こ む て 手 寄い 倒ちへ たう あたす 寄い 倒ちへ 又 おきなます 沖膾 しめて へ 端
 なます 膾 しめて 又 やまとしま 大和島ぎやめむ やしるくに 山城国ぎやめむ 又 いと わた 糸 渡ち
 へ か 掛けわれ な わた 渡ちへ か 掛けわれ (又) 首里 杜 かなて まだまもり 真玉杜
 かなて 又 いっこ 徹子 いの 祈られて くはら ほこ 誇られて 又 きこゑ ぎみ 聞得大君ぎや
 てるかには し 知られれ

〔大意〕：名高く靈力豊かな聞得大君が、お祈りをします。国王様こそ国を治め給え。島討ちの吉日、国を治めるための吉日を選び取り給いて、戦に勝つことのできる靈力、長寿できる靈力を降ろして。撫でいつくしむ立派な男たちは、お心内は、げにこそ強くあれ。君々、主々神女こそ大ころたち、真ころたちを守れ。大和の薩摩の兵士たちの心内を迷わせて、両手両足を寄り倒して、沖膾、辺端膾にさせて、大和、山城までも、糸や繩を渡して支配し給え。首里杜、真玉杜はまさって、兵士たちは感謝し、祝福されて。聞得大君が太陽神にお祈りをします。国王様こそ国を治め給え。

かぐら節 (巻 3-96) : 一 きこゑ ぎみ 聞得大君ぎや [や]まと たよ 大和 頼り なちへ いっこ 徹子
 なげ 嘆かすな 又 とよ せだか こ 鳴響む精高子が やしる 山城 しちや 衆生に なちへ 又 あか 吾が掻い
 な 撫で 按司 襲い あち おそ せくさ た 精軍 立てわやり 又 あまぶ たた きよ 吾が守る 貴み子 せひやく た 精百 立て
 わやり 又 あまみやから おきなわ 沖繩 たけ 嶽てては おも 思はな 又 しねりやか
 ら みしま 御島 もり 杜てては おも 思はな 又 よ あ もり 寄り上げ 杜 居やり あよなめさ
 げ 実にあて 又 こがねもり 金杜 居やり ことなめさ は 撥ねて 又 はから
 ひ た 引き立てて あわててよ しちやる 又 まさけな 真境名よ お あ 押し上げて つか

ててよ しちやる 又 ^{あか}赤らせぢ ^お降るちへ ^{まへぼじや}前坊主よ ^{まよ}迷わちへ 又
 ひぢゑるせぢ ^お降るちへ ^{おが}おが衆生よ ^ゆゆこちへ 又 ^{かす}風の根も ^と取り直
 ちへ ^{くめ}久米の島 ^お押し合わちへ 又 ^{すさ}荒の根も ^{なお}直ちへ ^{かね}金の島 ^ひ引き
^あ合わちへ 又 ^{くめ}久米の君南風^あに ^{おこと}御言 ^や遣りよわやり 又 ^{かね}金の島 ^の
 ろのろ ぜるまは ^{いの}祈て 又 ^{てる}てるかはが ^お押し合^あわし ^{てる}てるしのが
^も持ち成^なし

〔大意〕：名高く靈力豊かな聞得大君がお祈りをして、大和を縁者にして、山城を臣下に行っている。兵士たちを嘆かすな。撫でいつくしみ守り給う国王様が、軍勢を出陣させ給いて、いざ迎え戦わん。遙かに遠いあまみや・しねりや時代からの沖繩なのだ。嶽、杜に守られている聖なる地だと思おうよ。寄り上げ杜、金杜にいて、心を並べ揃えて、神に感応して、兵士たちを励まし引き立て押し上げて、敵と戦おう、敵を突こうとしているのだ。立派で力ある靈力を乞い降ろして、大和兵、下賤な奴らを迷わせ欺いて、荒風も穏やかにして、久米島に船を向けて、久米島の君南風神女に御言を遣わし給いて、久米島の神女たちは火の神に祈って、太陽神が祈りを受け入れ、もてなして下さることのすばらしさよ。

(巻3-97): 一 ^ち地天^{とよ}鳴響^{ぬし}む大主 ^しにるやせぢ ^し知らたる ^{せぢ}や ^や遣
 り ^{やまとしま}大和^{ひち}島 ^{ひち}治め (又) ^{だしまとよ}大島^{わかぬし}鳴響^む若主 ^{かな}やせぢ ^し知らたる
 又 ^{しよりもり}首里^杜 ^ちよわる ^{ゑぞ}英祖^{すへあ}にや^ち末^{おそ}按司^襲 ^{まただもり}又 真玉^杜 ^ちよわる
 てだが^{すへあ}末^ち按司^{おそ}襲 ^又 ^{せこさ}精軍 ^た立て^ら数 ^{かす}撃ち^や遣り^{やり} ^{とよ}鳴響^め 又
^{せひやこ}精百 ^た立て^ら数 ^{しまよ}島踊り ^{まさ}勝^よわれ 又 ^げらへ^た大^{ころ}達 又 ^{きりさべ}塵^鏝
 も ^(つ)付ける^な ^{かうさび}粉^鏝も ^つ付ける^な 又 ^はは^ら ^お押し^た立て ^{はやめよくち}早^濬口^に

とめれ 又 真^{まさ}境^け名^なよ ぬき^や上げて あうやかたも さけ 又 気^け有^やる
 世^よ寄^よす富^{とみ} 押し^お浮^うけ^{かず}数^{みまぶ} 見^み守^まら 又 精^せ有^やる^{おきめづ}沖^く珍^うら^{かず} 削^くり^う浮^かけ^{みまぶ}数^{みまぶ} 見^み守^ま
 ら 又 大^{やまと}和^{まへ}前^ぼ坊^{じや}主^のの あよな^{いっ}め^この^い巖^い子^こ 又 山^{やしろ}城^{まへ}前^ぼ坊^{じや}主^のの ことな
 めのおが衆^{つぎや}生^や 又 精^せ軍^{くさ}て^たて^ば 干^ひ瀬^せと 合^あわ^ちへ^へ つい^の退^いけ
 又 急^いそ^こて^てて^たて^ば に^るや^そ底^こ つい^の退^いけ 又 肝^{きも}が^う内^ちに^おも^もわ^ば
 肝^{きも}垂^たり^よ しめ^れ 又 肝^{あよ}が^う内^ちに^おも^もわ^ば 大^{だい}地^ちに^おと^ちへ^へ 捨^すて^れ
 又 天^{あま}が^く下^か 国^{くに}数^{かず} 大^{ぬし}主^しす よ^し知^らめ

[大意]：天地、国じゅうに鳴り轟く大主、若主は、ニルヤ・カナヤの靈力を
 持って知られている。その靈力を遣わして大和島を平定せよ。首里杜、真玉杜
 にまします英祖の末裔、太陽神の末裔である国王様が、多くの軍勢を出陣させ
 るごとに撃ちに撃って鳴り轟き、島踊りをして勝れ給え。将兵たちは心して刀
 の錆を付けるな。兵士を出発させ、軍勢差し上せて、船の通路口に停めよ。那
 覇港を塞げ。靈力豊かな世寄す富、沖珍らを浮かべるたびに見守ろう。大和兵
 ども、無礼なる兵士どもをこらしめよ。軍勢、軍船とって立てば、岩礁にぶ
 つけ、海の底に退けてやっつけよ。侵入せんと心中に思ったら、敵の氣力を失
 わせ、大地に落として捨てよ。天下、国じゅうを国王様こそ支配し給え。

(卷 14-1027)： 一 勢^{せり}理^{かく}客^のの^のろ^のの あけ^{あま}し^おの^おろ^ろの^のの 雨^{あま}くれ 降^おろ

ち^ちへ 鎧^{よろい} 濡^ぬら^ちへ 又 運^{うむ}天^{てん} 着^つけて 小^こ港^{みなと} 着^つけて 又 嘉^か津^つ
 宇^{おう}嶽^{たけ} 下^さがる 雨^{あま}くれ 降^おろ^ちへ^へ 鎧^{よろい} 濡^ぬら^ちへ 又 大^{やまと}和^のの 軍^{いくさ}

山^{やしろ}城^のの 軍^{いくさ}

[大意]：勢理客ののろが、あけしの神女がお祈りをして、雨乞いをして雨を
 降らせて、鎧を濡らして困らせて、運天に、小港に着けて、嘉津宇嶽に下がる
 雨雲で雨を降らせて、鎧を濡らして困らせて、大和の、山城の軍勢を退けるの
 だ。

きせのしが節 (巻 20-1364) : 一 兼城かねぐすくのろの 守まぶりよわる弟勝おとまさり や

ぐめさ 大和軍やまといくさ 寄せよせらや 又 国くにかねののろの

〔大意〕：兼城のろ神女が、国かねののろ神女が守り給う勝れた弟者よ、恐れ多いことだ。大和軍が寄せたならば、弟者が退けてくれることであろう。

③ 「上て」の歌 → 3首

(巻 10-538、巻 11-637、巻 21-1497)

ねいしまいしが節 (巻 10-538) : 一 伊敷下いしけした 世果報ようがほう 寄せ着よつける 泊とまり

又 愛かねし金殿かねどのよ 又 石いしへつは こので 又 金かなへつは こので 又

伊敷いしけ 寄より直なおちへ 又 なたら 寄より直なおちへ 又 楠くすぬきは こので 又

大和船やまとふね こので 又 大和旅やまとたび 上のぼて 又 山城旅やしろたび 上のぼて 又 珈波羅かほら

買かいに 上のぼて 又 手ても持ち 買かいに 上のぼて 又 思おもい子ぐわの 為ためす 又

わり金かねが 為ためす

〔大意〕：伊敷の下の方の浜は、世果報を寄せ着ける泊である。勝れた金殿は立派な方である。石槌、金槌を作って、伊敷、なたら（傾斜地）を削り直して、楠船、大和船を作って、大和旅、山城旅に上って、勾玉、手持ち玉を買いに上って、思い子、わり金様のためにこそ上るのだ。

みるやにが節 (巻 11-637) : 一 しのくりやは 世な馴がみれ神やれば や

れ このゑ 又 しのくりやが 大和旅やまとたび 上のぼて やれ このゑ 又

神かみにしやが 山城旅やしろたび 上のぼて やれ このゑ 又 大和旅やまとたび 何なほ 買かい

が 上のぼて 又 山城旅やしろたび 何なほ 買かいが 上のぼて 又 青あおしや上玉てうたま 買かいが

又 ふくしや^{てう}上つしや ^か買いが

〔大意〕：しのくりや神女は、世馴れ神であるから、しのくりや、神にしや神女が、大和旅、山城旅に上って、大和旅、山城旅は、何を買いに上ったのか、青色の勾玉、上等の勾玉を買いに行ったのだ。

みるやにやが節（巻 21-1497）： 一 ^よ ^な ^{がみ} 世馴れ神やれば

やれ このゑ 又 ^{やまとたび} ^{のぼ} 大和旅 上て やれ このへ 又

^{かみ} 神にしやが ^{やしるたび} ^{のぼ} 山城旅 上て やれ このゑ 又 ^{やまとたび} ^{なお} ^か 大和旅 何 買

ぎや ^{のぼ} 上てが やれ このゑ 又 ^{やしるたび} ^{なお} ^か 山城旅 何 買いが ^{のぼ} 上てが

やれ このゑ 又 ^{あお} ^{てうたま} 青しや上玉 ^か 買いが ^{のぼ} 上て やれ このゑ 又

ふくしや^{てう}上つしや 1 ^{かみ} [神やれば 又 ^に ^や みるや仁屋 ^い ^{ちへ} ^き ^{かみ} 意地気神やれば

又 ^に ^や みるや仁屋 ^{ちやくにかみ} 大国神やれば 又 ^い ^き 行ちゑ 切りやり ^{かね} ^{わか} ^き 金若子 差

しちよわちへ 又 ^い ^き 行ちへ 切りやり ^{かね} 金] 2 [^み ^{かな} ^{わか} ^{きよ} 御愛し若い子 又 ^{しま} 島

^{おそ} 襲いに ^{ちよ} わる ^み ^{かな} ^{わか} ^{きよ} 御愛し若い子 又 ^あ ^ち ^{おそ} 按司襲いが ^{おも} ^{ぐわ} 思い子 ^み ^{かな} 御愛し

^{わか} ^{きよ} 若い子]

〔大意〕：しのくりや神女は、世馴れ神であるから、やれ、このゑ。しのくりや神女が、神にしや神女が、大和旅、山城旅に上って、やれ、このゑ。大和旅、山城旅は、何を買いに上ったのか、やれ、このゑ。青色の曲玉、上等の曲玉を買いに行ったのだ、やれ、このゑ。〔〕内は混入。〔1〕1488の五行目に続く。〔2〕1472の四行目の次に続く。

④ 祈りの歌 → 1首

(巻 13-783)

しよりゑとの節（巻 13-783）： 一 ^く ^め 久米のこいしのが ^も ^{もうら} 百浦こいしのが

こ
此れど だにの 京^{きや}の真^ま金^{かね} 又 具^ぐ志^{しかわ}川の泊^{とまり} 果^か報^{ほう}寄^よる 又 **大^{やま}和^と真^ま**

五^ら郎^{せど}船^し頭^は 知^しられては 走^はりやたな

〔大意〕：久米島の、百浦のこいしの神女が手に入れた、これぞまことの立派な鉄であるよ。具志川の港に、幸運が寄る港に、大和の真五郎船頭様は神に守られて船を走らせよ。

【資料編（第5章） [琉歌]】

A 沖縄を賛美する歌 → 4首

（『琉歌全集』の2636番歌、『琉歌大成』の24・2178・4466番歌）

（『琉歌全集』・2636）： **日の本**よまでも（フィヌムトゥユ マディン）しほらし句立ちゆら（シュラシニエイ タチュラ）筆に咲く花の（フディニ サク ハナヌ）色香染めて（イルカ スミティ）（読人しらず）

解説：沖縄の文学芸能の花（=筆に咲く花）は、日本までも素晴らしい色香が伝わって、評判されることであろう。

（『琉歌大成』・24）： あがとなのめらぬ（アガト ナヌミラヌ）唐**大和**までも（カラ ヤマトウ マディン）島影ようつす（シマカジユ ウツイス）月の鏡（ツイチヌ カガミ）

解説：あんなに遠く離れた唐大和までも見えるかと思うくらい、島影を映している月の鏡よ。

（『琉歌大成』・2178）： 自由なゆんやらば（ジユ ナユン ヤラバ）**大和**から西洋（ヤマトウカラ シイヨ）舞ひめぐて浮名（マイ ミグティ ウチナ）立ててみぼしや（タティティ ミブシャ）

解説：自分の思うようにできるのであれば、オトと大和。西洋と舞いめぐって、浮き名を立てたい。

（『琉歌大成』・4466）： **大和**あんぐわたが（ヤマトウ アングワタヤ）色香よりまさて（イルカユイ マサティ）島のめやらべの（シマヌ ミヤラビヌ）しなりきよらさ（シナリ ジュラサ）

解説：日本のねえさん達の色香よりも、島の女の子の方がぴったり合ってきれいだよ。

B 大和を賛美する歌 → 4首

（『琉歌全集』の1651・1709・2756番歌、『琉歌大成』の4467番歌）

（『琉歌全集』・1651）： かれよしよ歌て（カリユシユ ウタティ）わが会釈しゆもの（ワガ キシヤク シユムヌ）早く着ちいもうれ（ハヤク チチイモリ）**大和**錦（ヤマトウ ニシチ）（作者：護得久朝置）

解説：めでたい歌を歌って、私が神様にお祈りしていますから、大和錦を着て早くお帰り下さい。（大和錦ということばにはいろいろの意味を含ませているようである。日本の政府に対する請願や陳情の成功も立派な錦であるし、そのほか日本文化や風習なども身につけることができれば、立派な錦と見ることができる。）

（『琉歌全集』・1709）：名に立ちゆる**大和**（ナニタチュル ヤマトウ）**お上りや下り**（ウヌブリヤ クダリ）おかれよしめしやいる（ウカリユシ ミシエル）お願しやべら（ウニゲ シャビラ）（作者：小祿按司朝恒）

解説：評判の高い大和にいらっしゃるときは、お上りもお下りもめでたく無事にお努めをおすましなさるようお願い致しましょう。

（『琉歌全集』・2756）：官話**大和口**（クアンワ ヤマトウグチ）沖縄物語（ウチナ ムヌガタイ）

一人話し話し（チュイ ハナシ バナシ）ぴりんぱらん（ピリン パラン）（作者：仲浜政模）

解説：中国語（北京語）、日本語、沖縄語を集まっている連中がぺらぺらしゃべっている。

（『琉歌大成』・4467）：**大和**から朝鮮（ヤマトウカラ チュシン）めぐて来やるかめや（ミグティ チャル カミヤ）物言ひざましざま（ムヌイザマ シザマ）人にかはて（フィトウニ カワティ）

解説：日本から朝鮮とめぐって来たカメは、物の言い方も仕草も、他の人とは変わっているよ。

C 大和に対する反感の歌 → 1 首

（『琉歌全集』の 1524 番歌）

（『琉歌全集』・1524）：沖縄秋山や（ウチナ アチャマヤ）紅に染めて（クリナイニ スミティ）**大和**吉村の（ヤマトウ ユシムラヌ）お茶の遊び（ウチャヌ アスイビ）

解説：沖縄は秋の山が紅葉して真っ赤になっているように、血に染まって苦しんでいるが、大和人の吉村という人はお茶の遊びをして楽しんでいる。

D 個人の感情、若しくは航海に関する歌（大和に対する感情は語わない） → 10首

（『琉歌全集』の 552・876・1183・1200・1637・1675・2104 番歌、『琉歌大成』の 1454・1630・2595 番歌）

（『琉歌全集』・552）： 那覇の親泊（ナファヌ ウェエドゥマイ）おしたてるはしら（ウシタティル ハシラ）大和山川に（ヤマトウ ヤマカワニ）ひけよはしら（フィキユ ハシラ）（作者：糸数里之子）

解説：那覇の大港から船を出すために、勢よく帆柱を押し立てた。これから大和の山川港に無事に船を引いて行ってくれよ、たのもしい帆柱だ。

（『琉歌全集』・876）： 今帰仁の城（ナチジンヌ グスイク）にやへ高さあれば（ニヤフェ タカサ アリバ）里前まある大和（サトゥメ メル ヤマトウ）見ゆらやすが（ミユラ ヤスイガ）

解説：今帰仁城がもっと高かったら、背の君のいらっしゃる大和も見えるであろうに、見えるのは海ばかり惜しいことだ。

（『琉歌全集』・1183）： いけば伊計離（イキバ イチハナリ）もどて浜平安座（ムドゥティ ハマ ヒヤンザ）平安座前の浜に（ヒヤンザ メヌ ハマニ）山原が着きをん（ヤンバラガ チチョン）山原やあらぬ（ヤンバラヤ アラヌ）大和もどり（ヤマトウ ムドゥイ）（読人しらず）

解説：行けば伊計離島、戻れば浜や平安座の島々、平安座島の前には山原船が着ておる。いやあれは山原船ではなくて、大和へ行って来た船だよ。

（『琉歌全集』・1200）： 寝てたらぬ浮名（ニティ タラヌ ウチナ）さびし夜の長さ（サビシ ユヌ ナガサ）幾度も大和（イクタビン ヤマトウ）しのぶ枕（シヌブ マクラ）（作者：二階堂彦太郎）

解説：旅先の女と一緒に寝ても、浮名を立てられるばかりで満足はできない。長い夜の寂しさ、心の中では幾度も大和に残して来た妻の手枕のことがしのばれる。（作者は薩摩から来た在番奉行であって、郷に入っては郷に従って琉歌をよくしたものと見える）。

（『琉歌全集』・1637）： 願ことすまち（ウニゲグトゥ スイマチ）旗ひかちいもうれ（ハタ フィカチ イモリ）大和口いらば（ヤマトウグチ イラバ）お迎しやべら（ウンケ シャビラ）（作者：護得久朝置）

解説：日本政府に請願のことを済まされたら、船に美しい旗をなびかせていら

っしやい。大和口（日本から来る船の入口）にお船が入ったら、お迎えしまし
よう。

（『琉歌全集』・1675）： 先見れば大和（サチ ミリバ ヤマトウ）後見れ
ば沖縄（アトゥ ミリバ ウチナ）これほどの御風（クリ フドゥヌ ミカジ）
こんどはじめ（クンドウ ハジミ）（読人しらず）

解説：先を見れば大和、後を見れば沖縄、これほどの素晴らしい順風は今年が
初めてだ。（船が非常に速くて、今まで後方に沖縄が見えていたかと思うと、
間もなく前方に大和が見えるようになったというわけで、それが即ち素晴らしい
順風のおかげだ。）

（『琉歌全集』・2104）： 花の色きよらさ（ハナヌ イルジュラサ）もいこ
花こ花（ムイクバナ クバナ）里前色きよらさ（サトウメ イルジュラサ）大
和戻り（ヤマトウ ムドゥイ）（読人しらず）

解説：花の美しいのは茉莉の小さい花で、男の方のきれいなのは、大和の旅か
ら帰られた方だ。

（『琉歌大成』・1454）： かれよしだう（カリユシド）かれよしだう（カリ
ユシド）糸はへて大和（イトウ ハイティ ヤマトウ）行きやり来やり（うん
ジャイ チチャイ）

解説：大和への往復が糸を引くように真っ直ぐ早いもの、幸運の守りだ。

（『琉歌大成』・1630）： くぢるがなくぢて（クジルガナ クジティ）かけ
歌よしちも（カキウタユ シチン）大和まゐる里や（ヤマトウ メル サトウ
ヤ）真肝だいもの（マジム デムヌ）

解説：皮肉を言えるだけ言い、歌で譬えても、大和へいらっしやった旦那は本
気なのだから。

（『琉歌大成』・2595）： 玉黄金里や（タマクガニ サトウヤ）大和かへい
まうち（ヤマトウカイ イモチ）霰降る夜半や（アラリ フル ユワヤ）夢や
見だね（イミヤ ンダニ）

解説：大事な方は日本へいらっしやったが、霰の降る夜半には私の夢をご覧に
なりませんか。